秋田県文化財調査報告書第422集

鴨巣館跡・鴨巣Ⅰ遺跡・鴨巣Ⅱ遺跡

－一般国道７号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅨ－

２００７・８

秋 田 県 教 育 委 員 会

秋田県文化財調査報告書第422集
鴨巣館跡・鴨巣Ⅰ遺跡・鴨巣Ⅱ遺跡
２００７・８　秋田県教育委員会

シンボルマークは、北秋田市浦田白坂（しろざか）遺跡出土の「岩偶」です。
縄文時代晩期初頭、1992年８月発見、高さ７㎝、凝灰岩。

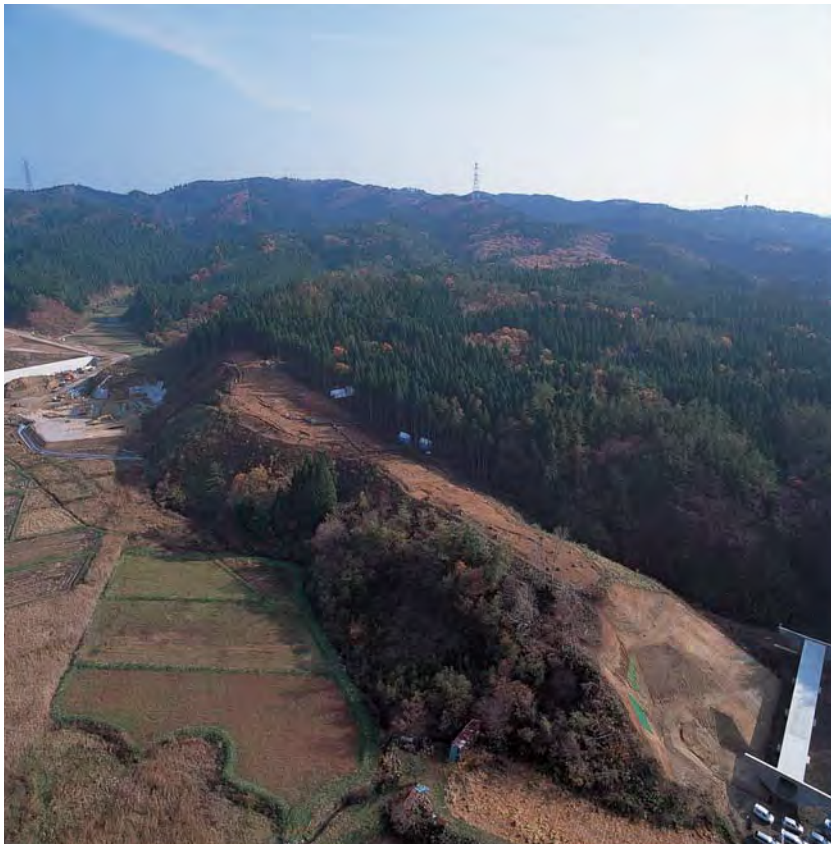
鴨巣館跡・鴨巣Ⅰ遺跡・鴨巣Ⅱ遺跡

－一般国道７号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅨ－

２００７・８

秋 田 県 教 育 委 員 会

遺跡上空写真（東から）



遺跡上空写真（北西から）

遺跡上空写真（北から）

ＳＫＩ2067・2068完掘状態（東から）

ＳＳ200完掘状態（東から）

ＳＢ800・1330完掘状態（西から）

ＳＢ800完掘状態（南から）

ＳＫＩ2064・2065完掘状態（北西から）

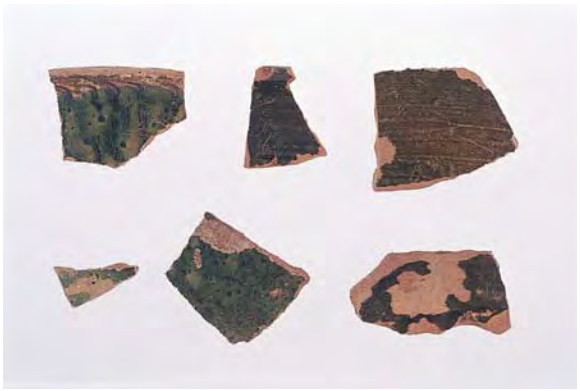
ＳＩ129完掘状態（北から）

ＳＩ50遺物出土状態（南西から）

ＳＩ50遺物出土状態（西から）

ＳＩ50出土遺物（土器・木製品）

ＳＳ200羽口出土状態



緑釉陶器

墨書土器

巡方（表）

巡方（裏）

錫杖状鉄製品

序

本県には、これまでに発見された約4,900か所の遺跡をはじめとして、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これらの埋蔵文化財は、地域の歴史や伝統を理解し、未来を展望した彩り豊かな文化を創造していくうえで、欠くことのできないものであります。

一方、一般国道７号琴丘能代道路をはじめとする高速交通体系の整備は、地域が活発に交流・連携する秋田の創造をめざす開発事業の根幹をなすものであります。本教育委員会では、これらの地域開発との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでおります。

本報告書は、一般国道７号琴丘能代道路建設事業に先立って、平成15年度と16年度に能代市田床内地区において実施した鴨巣館跡、鴨巣Ⅰ遺跡、鴨巣Ⅱ遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。

鴨巣館跡の調査では、空堀を伴う平安時代の集落の一部が発見されました。また、鴨巣Ⅰ遺跡、鴨巣Ⅱ遺跡の調査では、平安時代の大規模な集落跡が発見され、そこで鉄生産や土器生産が行われていたことが明らかになりました。

本書が、ふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助となることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本報告書の刊行にあたり、協力をいただきました国土交通省東北地方整備局能代河川国道事務所、能代市教育委員会など関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成19年８月

秋田県教育委員会

教育長　根　岸　　均

例　　言

1　本書は、琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財調査報告書の19冊目である。

2　本書は、平成15、16年度（2003、2004年度）に発掘調査した、秋田県能代市田床内字鴨巣に所在する鴨巣館跡、鴨巣Ⅰ遺跡、鴨巣Ⅱ遺跡の調査成果を収めたものである。鴨巣Ⅰ遺跡と隣接する鴨巣Ⅱ遺跡は一連の遺跡であることが判明したため、まとめて報告を行うことにする。

3　本遺跡の調査成果については、既にその一部が公表されているが、本報告書を正式なものとする。

4　本書に使用した図は、国土交通省東北地方整備局能代河川国道事務所提供の工事路線計画図1,000分の１『能代地区地形図７』および建設省国土地理院発行の50,000分の１地形図『能代』、『森岳』である。

5　遺跡基本層序と遺構土層図中の土色表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版　標準土色帖』2002年版に拠った。

6　本書に使用したグリッド配置図等は、以下の会社に委託したものを加工して使用した。
鴨巣館跡・鴨巣Ⅰ遺跡（平成15年度）：株式会社東亜測量設計
鴨巣Ⅰ遺跡・鴨巣Ⅱ遺跡（平成16年度）：有限会社穴山測量設計
平坦面範囲図：株式会社シン技術コンサル

7　本書に使用した空中写真は、株式会社シン技術コンサルに委託したものである。

8　出土した鉄製品・木製品の一部は、以下の会社に保存処理を委託した。
鉄製品：株式会社京都科学、株式会社文化財ユニオン
木製品：株式会社京都科学

9　鴨巣Ⅰ遺跡・鴨巣Ⅱ遺跡第３章の自然科学分析は下記の機関に依頼した。
放射性炭素年代測定、樹種同定分析、テフラ分析・同定、骨同定：パリノ・サーヴェイ株式会社

10　本報告書を作成するにあたり、以下の方々からご指導・ご助言を賜った。記して感謝申し上げます。（五十音順）
穴澤義功、小保内裕之、工藤雅樹、工藤清泰、栗山知士、齋藤淳、嶋田仁、永瀬福男
能登谷宣康、播磨芳紀、山崎和夫

11　本書の草稿執筆は、佐藤信、村上義直、菊地亮、片岡稔彦、堀井帝仁が行い、村上が加筆・編集を行った。分担は以下のとおりである。
鴨巣館跡、鴨巣Ⅰ遺跡（2003年度調査分）・・・・・・・佐藤信・村上義直・菊地亮・堀井帝仁
鴨巣Ⅰ遺跡（2004年度調査分）・鴨巣Ⅱ遺跡・・・・・・・・・・・村上義直・菊地亮・片岡稔彦

凡　　例

1　遺構番号は、その種類ごとに略記号を付し、検出順に連番とした。これらの中には精査と整理作業の過程で欠番としたものもある。遺構の種類に用いた略記号は下記の通りである。

ＳＩ：竪穴住居跡　　ＳＫＩ：竪穴状遺構　　ＳＢ：掘立柱建物跡　　ＳＫ：土　坑
ＳＷ：炭焼き遺構　　ＳＮ　：焼土遺構　　ＳＳ：製鉄炉・鍛冶炉　　ＳＤ：溝　跡
ＳＡ：柵　列　　ＳＫＰ：柱穴様ピット　　ＳＸ：性格不明遺構

2　土層番号に用いた数字は、ローマ数字を遺跡基本層位に算用数字を遺構土層に使用した。

3　遺構図中のＰは、遺構に伴うピットを示し、遺構に伴う土坑状の掘り込みはＳＫ01、ＳＫ02という具合に０からはじまる番号にした。また、図中のＲＰは土器、Ｓは石または石製品を示す。

4　本文中にある、遺物の出土量についての単位量は以下のとおりである。
コンテナ：18リットル入りコンテナ、中ポリ袋：120㎜×85㎜、小ポリ袋：240㎜×170㎜

5　遺物の縮尺は、土器を１／３、石器および鉄関連遺物を１／２とした。

6　土師器・須恵器の拓本は、断面の左に器外面、右に器内面を示した。

7　遺構・遺物の図で使用したパターンは、以下のとおりである。

遺構

焼土・カマド火床　　還元化部分　　竪穴住居床面の硬化部分

炭化物集中部分　　カマド範囲

鉄関連遺物

被熱部分　　砂鉄焼結部分　　潰れ部分

滓化部分

土師器

内面黒色処理　　煤状炭化物付着部分

8　鉄関連の遺物観察表には磁着度とメタル度の計測値を記載している。

磁着度の計測には、６㎜を１単位とする同心円を描いた評価台紙の中心に、高さ35㎝から糸に吊り下げた標準磁石（フェライト磁石）を用いた。磁着度の数値は、遺物を評価台紙の外側の同心円から順次中心に近づけ、磁石が動き始めた位置の同心円の距離単位を読み取ったものである。

メタル度の計測には、埋蔵文化財用特殊金属探知器ＭＲ－50Ｂ（基準値設定者穴澤義功）を用いた。表示は、金属残留度の高い方から「特Ｌ」・「Ｌ」・「Ｍ」・「Ｈ」とし、鉄を含んでいるものの既に酸化したものについては、「錆化」とした。

目　　次

巻頭図版
　序
例言・凡例
目　　次

はじめに
　第１節　調査に至る経過……1
　第２節　調査要項……2

遺跡の環境……5
　第１節　遺跡の位置と立地……5
　第２節　歴史的環境……7

鴨巣館跡
第１章　発掘調査の概要……13
　第１節　遺跡の概要……13
　第２節　調査の方法……14
　第３節　調査の経過……15
　第４節　整理作業の方法と経過……15
第２章　調査の記録……16
　第１節　基本層序……16
　第２節　検出遺構と遺物……16
第３章　まとめ……20
図版

鴨巣Ⅰ遺跡・鴨巣Ⅱ遺跡
第１章　発掘調査の概要……25
　第１節　遺跡の概観……25
　第２節　調査の方法……25
　第３節　調査の経過……29
　第４節　整理作業の方法と経過……31
第２章　調査の記録……32
　第１節　基本層序……32
　第２節　旧石器時代、縄文時代の検出遺構と遺物……34
　第３節　平安時代、中世、近世の遺構と遺物……39
第３章　自然科学的分析 ……325
第４章　まとめ ……335
図版
抄録

挿図目次

第１図　琴丘能代道路と関連遺跡
第２図　遺跡位置図
第３図　地形区分図
第４図　周辺の遺跡図
第５図　鴨巣館跡調査範囲図
第６図　鴨巣館跡グリッド配置図
第７図　遺構配置図
第８図　基本土層図
第９図　検出遺構・出土遺物
第10図　ＳＤ01
第11図　鴨巣Ⅰ・Ⅱ遺跡調査範囲図
第12図　鴨巣Ⅰ・Ⅱ遺跡グリッド配置図
第13図　基本土層図
第14図　旧石器時代の遺物
第15図　縄文時代の遺構・遺物
第16図　縄文時代の出土遺物
第17図　遺構配置図
第18図　竪穴住居跡配置図
第19図　ＳＩ31
第20図　ＳＩ31カマド
第21図　ＳＩ32
第22図　ＳＩ32カマドＡ
第23図　ＳＩ32カマドＢ
第24図　ＳＩ39
第25図　ＳＩ50焼土・炭化材分布図
第26図　ＳＩ50
第27図　ＳＩ50カマド
第28図　ＳＩ50カマド
第29図　ＳＩ51
第30図　ＳＩ51カマド
第31図　ＳＩ99・107
第32図　ＳＩ99・107カマド
第33図　ＳＩ100、ＳＫ02
第34図　ＳＩ122
第35図　ＳＩ122カマド
第36図　ＳＩ126カマド
第37図　ＳＩ127・131・145・146、
　　ＳＫ147・2072、ＳＫＩ128・130
第38図　ＳＩ127・145カマド
第39図　ＳＩ131、ＳＫＩ130
第40図　ＳＩ129
第41図　ＳＩ129遺物分布図
第42図　ＳＩ129カマド
第43図　ＳＩ129カマド
第44図　ＳＩ132
第45図　ＳＩ132カマド
第46図　ＳＩ133・134
第47図　ＳＩ133カマド
第48図　ＳＤ221、ＳＩ139、ＳＫ227
第49図　ＳＩ151
第50図　ＳＩ151カマド
第51図　ＳＩ153・1723・1724
第52図　ＳＩ153・1723・1724土層断面
第53図　ＳＩ1723
第54図　ＳＩ153
第55図　ＳＩ1724
第56図　ＳＩ410・420
第57図　ＳＩ410カマド
第58図　ＳＩ420カマド
第59図　ＳＩ500・777周辺の遺構
第60図　ＳＩ500・777・1781・1782
第61図　ＳＩ500・777・1781・1782
第62図　ＳＩ500・777・1781・1782土層断面
第63図　ＳＩ777内の掘り込みａ～ｇ土層断面
第64図　ＳＩ500
第65図　ＳＩ500カマド
第66図　ＳＩ777
第67図　ＳＩ777カマド
第68図　ＳＩ1781・1782
第69図　ＳＩ653
第70図　ＳＩ653カマド
第71図　ＳＩ699、ＳＫ774・775・1847
第72図　ＳＩ764・765・1400
第73図　ＳＩ764カマド
第74図　ＳＩ1400カマド・ＳＩ764・765内土坑
第75図　ＳＫＩ888、ＳＮ644
第76図　ＳＮ643・644
第77図　ＳＩ1000・1456、ＳＫ2073
第78図　ＳＩ1000・1456カマド
第79図　ＳＩ1649・1650
第80図　ＳＩ1755
第81図　竪穴状遺構・掘立柱遺物跡配置図

第82図　ＳＫＩ180
第83図　ＳＫＩ350
第84図　ＳＫＩ273・790
第85図　ＳＫＩ555
第86図　ＳＫ701、ＳＫＩ610
第87図　ＳＫＩ1098
第88図　ＳＫＩ1350
第89図　ＳＫＩ2064・2065
第90図　ＳＫＩ2066
第91図　ＳＫＩ2067・2068
第92図　ＳＫＩ2069
第93図　ＳＫＩ2069
第94図　ＳＢ666、ＳＮ889
第95図　ＳＢ800
第96図　ＳＢ850
第97図　ＳＢ1330
第98図　ＳＢ1840
第99図　ＳＡ93、ＳＢ2074
第100図　土抗配置図
第101図　ＳＫ１・５・６・７・11・45・98
第102図　ＳＫ136・137・140・148・161・162
第103図　ＳＫ176・178・186・190・195・2005
第104図　ＳＫ197・201・205・206・932
第105図　ＳＫ209
第106図　ＳＤ361・362、ＳＫ218・226・231・255・448、ＳＮ219
第107図　ＳＫ268・270・271・795・904、ＳＮ208
第108図　ＳＫ272・288・299・300・307・308・341・355
第109図　ＳＫ408・412・413・416・417
第110図　ＳＤ449、ＳＫ419・444・445・450、ＳＷ220
第111図　ＳＫ491・492・496・498・499・510・1846
第112図　ＳＫ493・494・495・497・695・696・697・774・1847
第113図　ＳＫ501・502・509・513・514・515・516・518・519
第114図　ＳＤ895、ＳＫ767・768・786・792・897
第115図　ＳＫ840・1257
第116図　ＳＫ904・921、ＳＮ208
第117図　ＳＫ933・934・970・1021・1023・1025・1201・1209・1283
第118図　ＳＤ1233、ＳＫ1071・1120・1121・1212
第119図　ＳＫ1231・1240・1251・1256・1258・1310
第120図　ＳＫ1340・1344・1348・1349・1355・1441・1794、ＳＫＰ1347
第121図　ＳＫ1619・1620・1654・1656・1659・1661
第122図　ＳＤ1410、ＳＫ1701・1702・1703
第123図　ＳＫ1759・1766・1767・1773・1777・1818・1819
第124図　ＳＫ1841・2071
第125図　製鉄炉・鍛冶炉遺構配置図
第126図　ＳＳ200
第127図　ＳＳ210・451・452・609・763・900
第128図　ＳＳ1446・1583・1657・1700・1722
第129図　焼土遺構配置図
第130図　ＳＮ22・23・24・42・66・67
第131図　ＳＮ105・177・189・198・199・251・827
第132図　ＳＮ860・883・884・889・922・923・987
第133図　ＳＤ1410、ＳＮ1582・1626・1726・1727・1728
第134図　ＳＮ1817・2049
第135図　ＳＮ141・761
第136図　ＳＫ1248、ＳＮ600
第137図　ＳＷ12・74
第138図　ＳＷ220、ＳＸ342・1460
第139図　ＳＸ590
第140図　溝跡遺構配置図
第141図　調査区東側溝跡詳細図区画
第142図　ＳＤ152・1050
第143図　ＳＤ152・211・508・1050・1216・1218・1285
第144図　ＳＤ211・1050
第145図　ＳＤ507・508・1832
第146図　ＳＤ152・211・652・1410
第147図　ＳＤ652・870・1180・1300
第148図　ＳＤ154・400・880・1100
第149図　ＳＤ155

第150図　ＳＤ135・212・1216・1490
第151図　ＳＤ194
第152図　ＳＤ143・224・407・585・771・780、ＳＫ893
第153図　ＳＤ823・1101・1217・1232・1757
第154図　ＳＤ1250
第155図　ＳＤ1760・1769・1787・2025・2070
第156図　遺構内出土遺物（１）
第157図　遺構内出土遺物（２）
第158図　遺構内出土遺物（３）
第159図　遺構内出土遺物（４）
第160図　遺構内出土遺物（５）
第161図　遺構内出土遺物（６）
第162図　遺構内出土遺物（７）
第163図　遺構内出土遺物（８）
第164図　遺構内出土遺物（９）
第165図　遺構内出土遺物（10）
第166図　遺構内出土遺物（11）
第167図　遺構内出土遺物（12）
第168図　遺構内出土遺物（13）
第169図　遺構内出土遺物（14）
第170図　遺構内出土遺物（15）
第171図　遺構内出土遺物（16）
第172図　遺構内出土遺物（17）
第173図　遺構内出土遺物（18）
第174図　遺構内出土遺物（19）
第175図　遺構内出土遺物（20）
第176図　遺構内出土遺物（21）
第177図　遺構内出土遺物（22）
第178図　遺構内出土遺物（23）
第179図　遺構内出土遺物（24）
第180図　遺構内出土遺物（25）
第181図　遺構内出土遺物（26）
第182図　遺構内出土遺物（27）
第183図　遺構内出土遺物（28）
第184図　遺構内出土遺物（29）
第185図　遺構内出土遺物（30）
第186図　遺構内出土遺物（31）
第187図　遺構内出土遺物（32）
第188図　遺構内出土遺物（33）
第189図　遺構内出土遺物（34）
第190図　遺構内出土遺物（35）
第191図　遺構内出土遺物（36）・遺構外出土遺物（１）
第192図　遺構外出土遺物（２）
第193図　遺構外出土遺物（３）
第194図　遺構外出土遺物（４）
第195図　遺構外出土遺物（５）
第196図　遺構外出土遺物（６）
第197図　遺構外出土遺物（７）
第198図　遺構外出土遺物（８）
第199図　遺構外出土遺物（９）
第200図　鉄関連構成図（１）
第201図　鉄関連構成図（２）
第202図　鉄関連構成図（３）
第203図　鉄関連構成図（４）
第204図　鉄関連構成図（５）
第205図　鉄関連構成図（６）
第206図　鉄関連遺物（１）
第207図　鉄関連遺物（２）
第208図　鉄関連遺物（３）
第209図　鉄関連遺物（４）
第210図　鉄関連遺物（５）
第211図　鉄関連遺物（６）
第212図　鉄関連遺物（７）
第213図　鉄関連遺物（８）
第214図　鉄関連遺物（９）
第215図　鉄関連遺物（10）
第216図　鉄関連遺物（11）
第217図　鉄関連遺物（12）
第218図　鉄関連遺物（13）
第219図　鉄関連遺物（14）
第220図　鉄関連遺物（15）
第221図　鉄関連遺物（16）
第222図　鉄関連遺物（17）
第223図　鉄関連遺物（18）
第224図　鉄関連遺物（19）
第225図　鉄関連遺物（20）
第226図　鉄関連遺物（21）
第227図　棚田状平坦面の広がり
第228図　竪穴住居・板塀変遷図（１）
第229図　竪穴住居・板塀変遷図（２）
第230図　鴨巣Ⅰ・Ⅱ遺跡周辺の関連遺跡

表 目 次

第１表　周辺の遺跡一覧…… 9
第２表　鴨巣館跡検出柱穴様ピット観察表…18
第３表　鴨巣館跡出土遺物観察表……18
第４表　旧石器時代石器一覧……34
第５表　縄文時代石器一覧……36
第６表　竪穴住居の立地・平面形軸方向……39
第７表　竪穴状遺構一覧（１）……135
第８表　竪穴状遺構一覧（２）……137
第９表　竪穴状遺構一覧（３）……141
第10表　竪穴状遺構一覧（４）……144
第11表　掘立柱建物跡（１）……154
第12表　掘立柱建物跡（２）……155
第13表　土坑一覧（１）……167
第14表　土坑一覧（２）……168
第15表　土坑一覧（３）……169
第16表　土坑一覧（４）……170
第17表　土坑一覧（５）……171
第18表　土坑一覧（６）……172
第19表　土坑一覧（７）……173
第20表　土坑一覧（８）……174
第21表　土坑一覧（９）……175
第22表　製鉄炉・鍛冶炉（１）……201
第23表　製鉄炉・鍛冶炉（２）……202
第24表　焼土遺構一覧（１）……208
第25表　焼土遺構一覧（２）……209
第26表　炭焼遺構・性格不明遺構
　　・柵列一覧（１）……217
第27表　溝状遺構（１）……220
第28表　溝状遺構（２）……221
第29表　溝状遺構（３）……222
第30表　遺物観察表（１）……285
第31表　遺物観察表（２）……286
第32表　遺物観察表（３）……287
第33表　遺物観察表（４）……288
第34表　遺物観察表（５）……289
第35表　遺物観察表（６）……290
第36表　遺物観察表（７）……291
第37表　遺物観察表（８）……292
第38表　製鉄関連一覧（１）……320
第39表　製鉄関連一覧（２）……321
第40表　製鉄関連一覧（３）……322
第41表　製鉄関連一覧（４）……323
第42表　製鉄関連一覧（５）……324

図 版 目 次

巻頭図版

1　遺跡上空写真（東から）
2　遺跡上空写真（北西から）
遺跡上空写真（北から）
3　ＳＫＩ2067・2068完掘状態（東から）
ＳＳ200完掘状態（東から）
4　ＳＢ800・1330完掘状態（西から）
ＳＢ800完掘状態（南から）
ＳＫＩ2064・2065完掘状態(北西から）
ＳＩ129完掘状態（北から）
ＳＩ50遺物出土状態（南西から）
4　ＳＩ50遺物出土状態（西から）
ＳＩ50出土遺物（土器・木製品）
ＳＳ200羽口出土状態
5　緑釉陶器
墨書土器
巡方（表）
巡方（裏）
錫杖状鉄製品

鴨巣館跡

図版１　鴨巣館跡近景（北東から）
鴨巣館跡完掘状態（南東）
図版２　ＳＤ01完掘状態（北から）
ＳＫ03完掘状態
ＳＫ03土層断面
鴨巣館跡出土遺物

鴨巣Ⅰ遺跡・鴨巣Ⅱ遺跡

図版１　鴨巣Ⅰ遺跡・Ⅱ遺跡近景（北西から）
鴨巣Ⅱ遺跡(東側調査区)（北西から）
東側調査区棚田状平坦面（北西から）
図版２　調査終了状況（東から）
調査終了状況（西から）
図版３　ＳＩ50遺物出土状態（南西から）
ＳＩ50遺物出土状態（南西から）
図版４　ＳＩ100・50完掘状態（西から）
ＳＩ39・32・31・51完掘状態(東から）
図版５　ＳＩ99・100完掘状態（西から）
ＳＩ31完掘状態（西から）
ＳＩ32完掘状態（南から）
ＳＩ51完掘状態（北から）
ＳＩ122完掘状態（北から）
図版６　ＳＩ129完掘状態（北から）
ＳＩ129土層断面（南から）
ＳＩ129土層断面（西から）
ＳＩ129遺物出土状態（北から）
ＳＩ129遺物出土状態（東から）
図版７　ＳＩ129階段状の掘り込み（西から）
ＳＩ129カマドと煙孔（西から）
ＳＩ129カマド（北から）
ＳＩ129カマド～煙孔断面（西から）
ＳＩ151完掘状態、ＳＫ1841遺物出土状態（西から）
図版８　Ｃ面竪穴住居跡完掘状態（北から）
ＳＩ127、ＳＫ147完掘状態（北から）
図版９　ＳＩ145完掘状態（西から）
ＳＩ130・131完掘状態（西から）
図版10　ＳＩ653完掘状態（北から）
ＳＩ699完掘状態（西から）
図版11　調査区東側完掘状態（西から）
ＳＩ764・1400完掘状態（西から）
図版12　ＳＫＩ888遺物出土状態（西から）
ＳＩ653カマド（北から）
ＳＩ653土層断面（西から）
ＳＩ764カマド（北西から）
ＳＩ764カマド煙道断面（南から）
図版13　ＳＩ764覆土火山灰（南から）
ＳＳ900完掘状態（西から）
ＳＮ643確認状態（西から）
ＳＮ644確認状態（西から）
ＳＩ500完掘状態（北から）
図版14　ＳＩ700・1781・1782完掘状態(西から）
ＳＢ1840完掘状態（北東から）
図版15　ＳＩ500カマド（北から）
ＳＩ777カマド（北から）
ＳＩ1781カマド（北から）
ＳＩ777ロクロ軸受けピット(東から）
ＳＩ1649・1650完掘状態（西から）
図版16　ＳＩ153・1723・1724完掘状態（北から）
ＳＩ1755完掘状態（南から）
図版17　ＳＩ1650カマド（南から）
ＳＩ1723遺物出土状態状態（南から）
ＳＩ153・1723土層断面（南から）
ＳＩ153・1723確認状態（北から）
ＳＩ153カマド（北から）
ＳＩ1755カマド（南から）
ＳＩ1755土層断面（東から）
ＳＩ1755土層断面（北から）
図版18　ＳＫＩ2066・2067完掘状態（東から）
ＳＩ1000・1456、ＳＫＩ2070完掘状態

（南から）
図版19　ＳＫＩ2064・2065完掘状態（西から）
ＳＫＩ2064・2065完掘状態（北から）
図版20　ＳＫＩ1098完掘状態（北から）
ＳＫＩ273遺物出土状態（北から）
図版21　ＳＫＩ128完掘状態（南から）
ＳＫＩ350遺物出土状態（東から）
ＳＫＩ555完掘状態（東から）
ＳＫＩ610土層断面（南から）
ＳＫＩ1098出土須恵器（南から）
図版22　ＳＢ800完掘状態（南から）
ＳＢ1330完掘状態（北から）
図版23　ＳＤ152・791完掘状態（東から）
ＳＤ791完掘状態（東から）
図版24　ＳＤ152内大型ピット（西から）
ＳＤ152内大型ピット（西から）
図版25　ＳＤ152・1285（北西から）
ＳＤ1050確認状態（西から）
図版26　ＳＤ152（東から）
ＳＤ152（西から）
ＳＤ211完掘状態（南東から）
ＳＤ211土層断面（西から）
ＳＤ152土層断面（西から）
ＳＤ152土層断面（西から）
ＳＤ152土層断面（北から）
ＳＤ152土層断面（西から）
図版27　ＳＤ152・791土層断面（南東から）
ＳＤ1285・1050土層断面（南から）
ＳＤ152・1285土層断面（北西から）
ＳＤ1216・1285土層断面（南から）
ＳＤ652周辺完掘状態（南から）
ＳＤ870周辺完掘状態（南東から）
ＳＤ652土層断面（南から）
ＳＤ791土層断面（西から）
図版28　ＳＤ870土層断面（南から）
ＳＤ1300土層断面（南から）
ＳＤ154土層断面（南から）
ＳＫＩ273・ＳＤ155遺物出土状態
（南から）
ＳＤ194確認状態（北から）
ＳＤ194完掘状態（南から）
ＳＤ823完掘状態（北から）
ＳＤ1250遺物出土状態（南から）
図版29　ＳＮ141完掘状態（西から）
ＳＮ600・ＳＫ1248完掘状態(南から)
ＳＮ600遺物出土状態（南から）
ＳＮ761完掘状態（西から）
図版30　ＳＳ200確認状態（東から）
ＳＳ200完掘状態（東から）
図版31　ＳＳ200炉内完掘状態（東から）
ＳＳ200土層断面（東から）
ＳＳ200土層断面（南から）
ＳＳ200出土フイゴ羽口（南から）
ＳＳ200完掘状態（東から）
図版32　ＳＳ451完掘状態（南から）
ＳＳ452完掘状態（南から）
ＳＳ900完掘状態（南西から）
ＳＳ900断面（南から）
ＳＳ763確認状態（南東から）
図版33　ＳＳ1583確認状態（西から）
ＳＳ1583断面（西から）
ＳＳ1700確認状態（南から）
ＳＳ1700土層断面（南西から）
ＳＳ1700完掘状態（西から）
ＳＳ609完掘状態（東から）
ＳＳ1446完掘状態（南西から）
ＳＳ1722完掘状態（西から）
図版34　ＳＫ群西から（西から）
ＳＫ群完掘状態（西から）
図版35　ＳＫ136土層断面（北から）
ＳＫ209遺物出土状態（西から）
ＳＫ558遺物出土状態（西から）
ＳＫ493完掘状態（西から）
ＳＫ群完掘状態（東から）
ＳＫ186完掘状態（北東から）
ＳＫ147土層断面（西から）
ＳＫ1702完掘状態（北から）
図版36　ＳＫ161・162確認状態（北から）
ＳＫ161・162完掘状態（西から）
ＳＫ840・1257完掘状態（南から）
ＳＫ1441完掘状態（北から）
基本土層Ｃ－Ｄ断面(Ａ面)（北から）
基本土層Ｅ－Ｆ（Ｅ付近）断面
（東から）
ＳＸ342遺物出土状態（北から）
ＳＫＴ363完掘状態（北から）
図版37　遺構内出土土器
図版38　遺構内出土土器
図版39　遺構内出土土器
図版40　遺構内出土土器
図版41　遺構内出土土器
図版42　遺構内出土土器
図版43　遺構内出土土器
図版44　遺構内出土土器
図版45　遺構内出土土器
図版46　遺構内出土土器
図版47　遺構内出土土器
図版48　遺構内出土土器・石器・石製品
図版49　遺構外出土旧石器・石器・縄文土器
図版50　鉄関連遺物
図版51　鉄関連遺物
図版52　鉄関連遺物
図版53　鉄関連遺物
図版54　鉄関連遺物
図版55　鉄関連遺物
図版56　鉄関連遺物

はじめに

1　調査に至る経過

一般国道７号琴丘能代道路建設事業は、一般国道７号の自動車専用道路として、山本郡三種町（旧琴丘町）から能代市二ツ井町（旧二ツ井町）に至る全長33.8㎞を整備する事業である。昭和58年に一般バイパスとして事業化されていたものが、平成元年度に高規格道路網の整備促進の一環として自動車専用道路に規格変更された。平成４年に八竜ＩＣから能代南ＩＣまでの4.1㎞が、平成13年に琴丘森岳ＩＣから八竜ＩＣまでの13.0㎞が暫定供用区間として開通している。さらに平成６年度に能代南ＩＣから能代東ＩＣの6.7㎞が、平成７年に能代東ＩＣから二ツ井ＩＣの10㎞の区間延伸が決定し、平成18年に能代南ＩＣから能代東ＩＣまでの6.7㎞が暫定供用区間として開通している。

これらの計画路線内には埋蔵文化財が包蔵されている可能性があることから、国土交通省から秋田県教育委員会に、埋蔵文化財包蔵地の確認と今後の対応について調査の依頼があった。これを受けて秋田県教育委員会は、平成13年より能代東ＩＣから二ツ井ＩＣ間の計画路線内の遺跡分布調査を行った。その結果、新発見の遺跡として、鴨巣館跡、鴨巣Ⅰ遺跡、鴨巣Ⅱ遺跡をはじめとする計７遺跡が確認され、今後はこれらの遺跡の確認調査が必要であること、さらに確認調査の結果によって取り扱いの協議が必要であることを回答した。この分布調査の結果をふまえ、秋田県埋蔵文化財センターは、平成15年に鴨巣館跡、鴨巣Ⅰ遺跡・鴨巣Ⅱ遺跡の確認調査を実施し、工事区内の調査面積を確定した。

鴨巣館跡の確認調査は5,300㎡を対象として、平成15年５月から６月にかけて実施された。その結果、空堀が検出され、さらに須恵器・土師器などが出土し、古代の遺物包含地および中世城館跡であることが推察された。なお、調査対象区西側の沢および東側の急斜面4,700㎡からは遺構が検出されず、発掘調査の対象範囲は600㎡となった。発掘調査は、確認調査後、直ちに実施することになった。

鴨巣Ⅰ遺跡の確認調査は5,650㎡を対象として、平成15年７月に実施された。その結果、竪穴住居跡、焼土遺構、石囲炉、鍛冶炉、溝跡、土坑、柱穴様ピットが検出され、さらに須恵器・土師器、鉄滓などが出土し、古代の鉄製産に関する工房跡を伴う集落跡であることが推察された。なお、調査対象区南側と北側の急斜面からは遺構が検出されず、また西側斜面は地滑りを起こし、その復旧工事が入ったため調査不可能となり、発掘調査の対象範囲は2,150㎡となった。発掘調査は、同年の９月から10月にかけてと平成16年の２カ年に渡って実施することになった。

鴨巣Ⅱ遺跡の確認調査は8,300㎡を対象として、平成15年７月から９月にかけて実施された。その結果、竪穴住居跡、溝跡、土坑、柱穴様ピットが検出され、さらに須恵器・土師器、鉄滓などが出土し、古代の集落跡であることが推察された。なお、調査対象区北側の急斜面からは遺構が検出されず、発掘調査の対象範囲は4,000㎡となった。発掘調査は、平成16年に実施することになった。

なお、鴨巣Ⅰ遺跡と鴨巣Ⅱ遺跡の確認調査の結果および隣接する両遺跡の立地条件等を考慮すると、両遺跡は同一の遺跡であると考えられた。このことから、平成16年の発掘調査は両遺跡を同時に行うことになった。

2　調査要項

鴨巣館跡

遺跡名称　　鴨巣館跡（かもすだてあと）
遺跡略号　　３ＫＤ
所在地　　秋田県能代市田床内字鴨巣70－40外
調査期間　　平成15年６月９日～６月30日
調査目的　　一般国道７号琴丘能代道路建設事業に係る事前発掘調査
調査面積　　600㎡
調査主体者　　秋田県教育委員会
調査担当者　　佐藤　信　（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　学芸主事）
　　菊地　亮　（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　調査・研究員）
　　堀井帝仁　（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　調査・研究員）
総務担当者　　藤原康悦　（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　副主幹）
　　時田慎一　（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　副主幹）
調査協力機関　国土交通省東北地方整備局能代河川国道事務所・能代市教育委員会

鴨巣Ⅰ遺跡

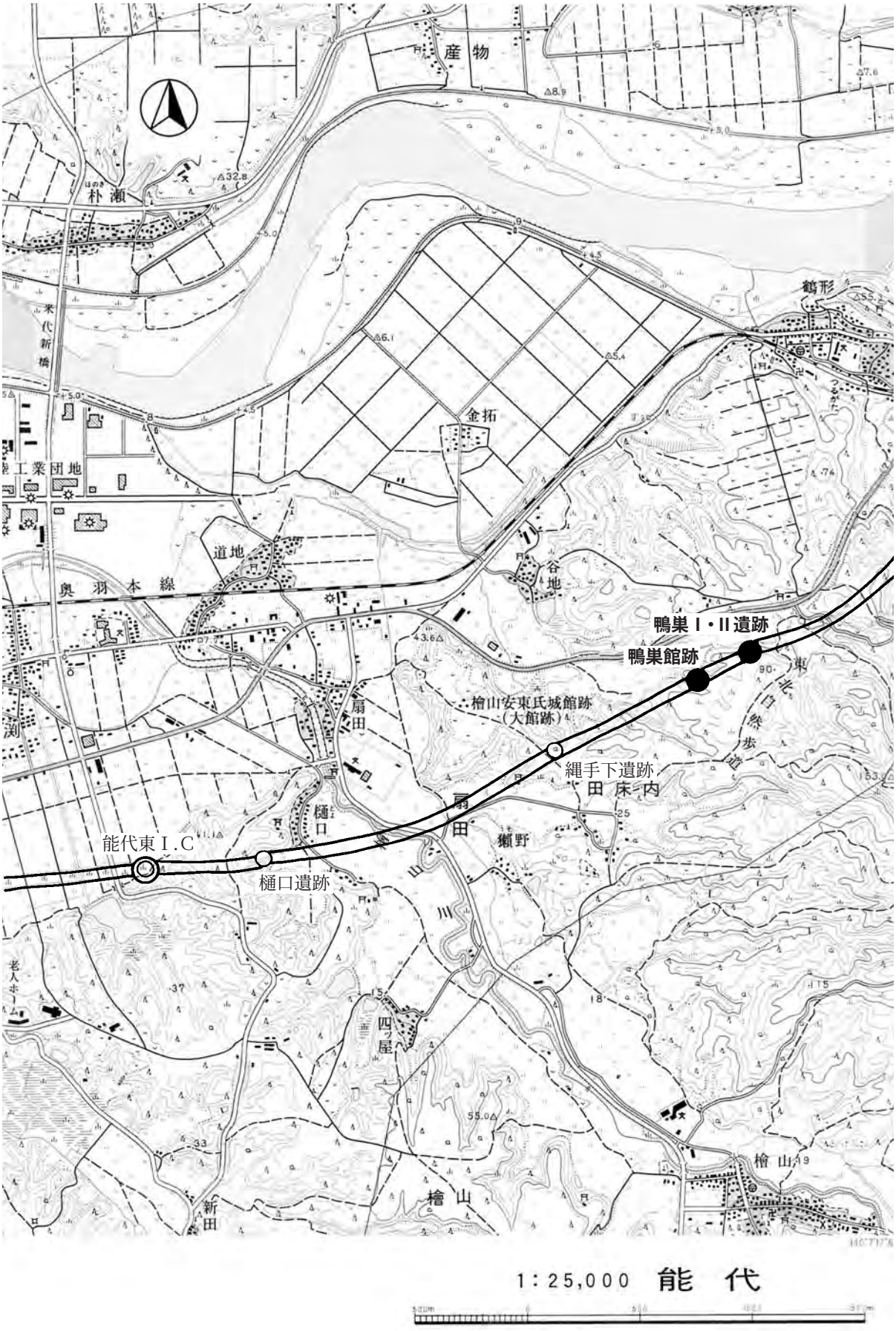
遺跡名称　　鴨巣Ⅰ遺跡（かもすいちいせき）
遺跡略号　　３ＫＳⅠ
所在地　　秋田県能代市田床内字鴨巣27－11外
調査期間　　平成15年９月１日～10月24日、平成16年５月17日～11月19日
調査目的　　一般国道７号琴丘能代道路建設事業に係る事前発掘調査
調査面積　　2,150㎡
調査主体者　　秋田県教育委員会
調査担当者

平成15年度
佐藤　信　（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　学芸主事）
菊地　亮　（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　調査・研究員）
堀井帝仁　（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　調査・研究員）

平成16年度
菊池　晋　（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　学芸主事）
村上義直　（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　文化財主事）
片岡稔彦　（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　調査・研究員）
菊地　亮　（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　調査・研究員）
堀井帝仁　（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　調査・研究員）

菅原ゆかり（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　調査・研究員）
総務担当者　藤原康悦　（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　副主幹）
時田慎一　（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　副主幹）
調査協力機関　国土交通省東北地方整備局能代河川国道事務所・能代市教育委員会

鴨巣Ⅱ遺跡
遺跡名称　鴨巣Ⅱ遺跡（かもすにいせき）
遺跡略号　３ＫＳⅡ
所在地　秋田県能代市田床内字鴨巣42－２外
調査期間　平成16年５月17日～11月19日
調査目的　一般国道７号琴丘能代道路建設事業に係る事前発掘調査
調査面積　4,000㎡
調査主体者　秋田県教育委員会
調査担当者　菊池　晋　（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　学芸主事）
村上義直　（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　文化財主事）
片岡稔彦　（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　調査・研究員）
菊地　亮　（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　調査・研究員）
堀井帝仁　（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　調査・研究員）
菅原ゆかり（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　調査・研究員）
総務担当者　藤原康悦　（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　副主幹）
時田慎一　（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　副主幹）
調査協力機関　国土交通省東北地方整備局能代河川国道事務所・能代市教育委員会



第１図　琴丘能代道路と関連遺跡

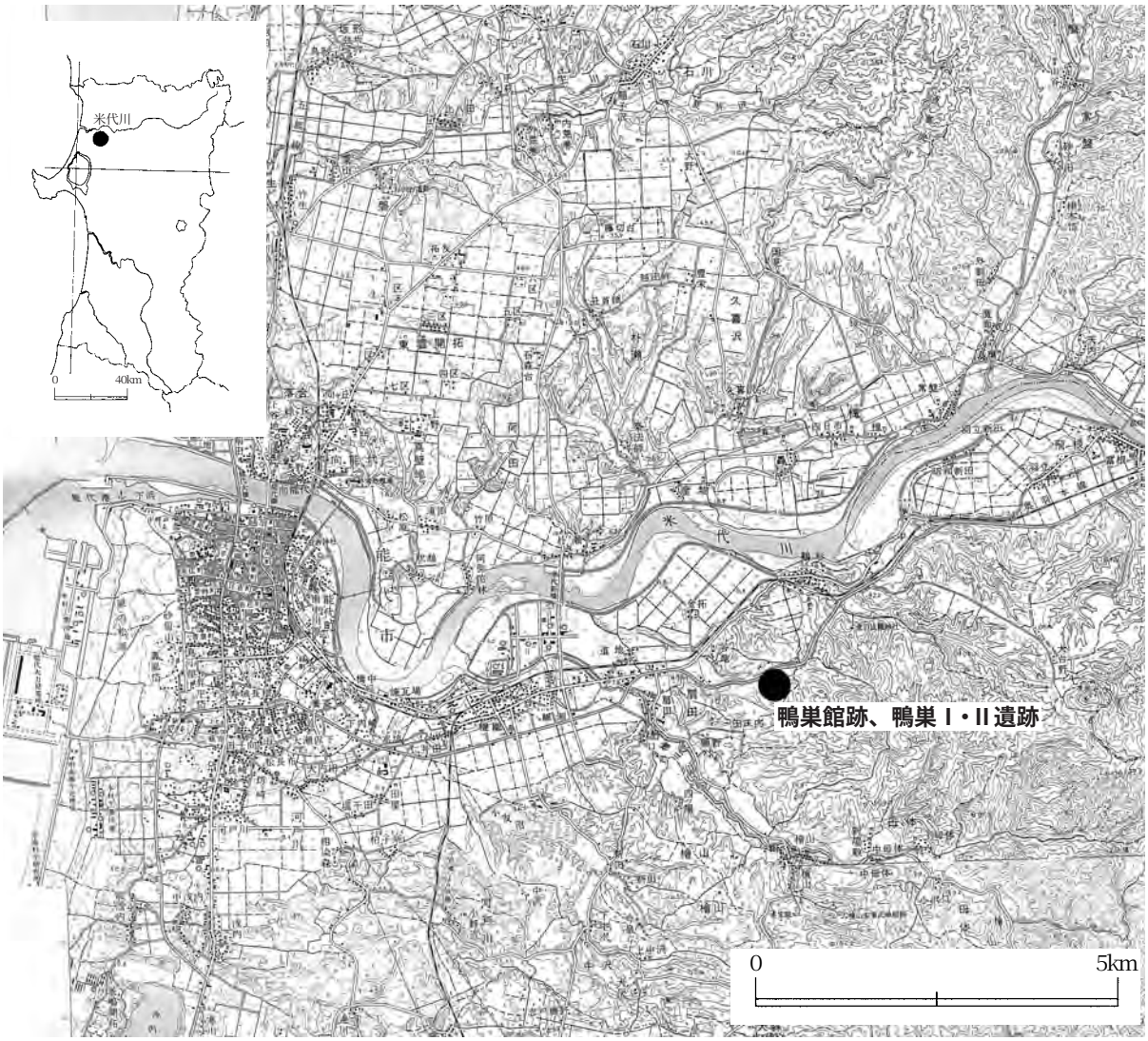
遺跡の環境

第１節　遺跡の位置と立地

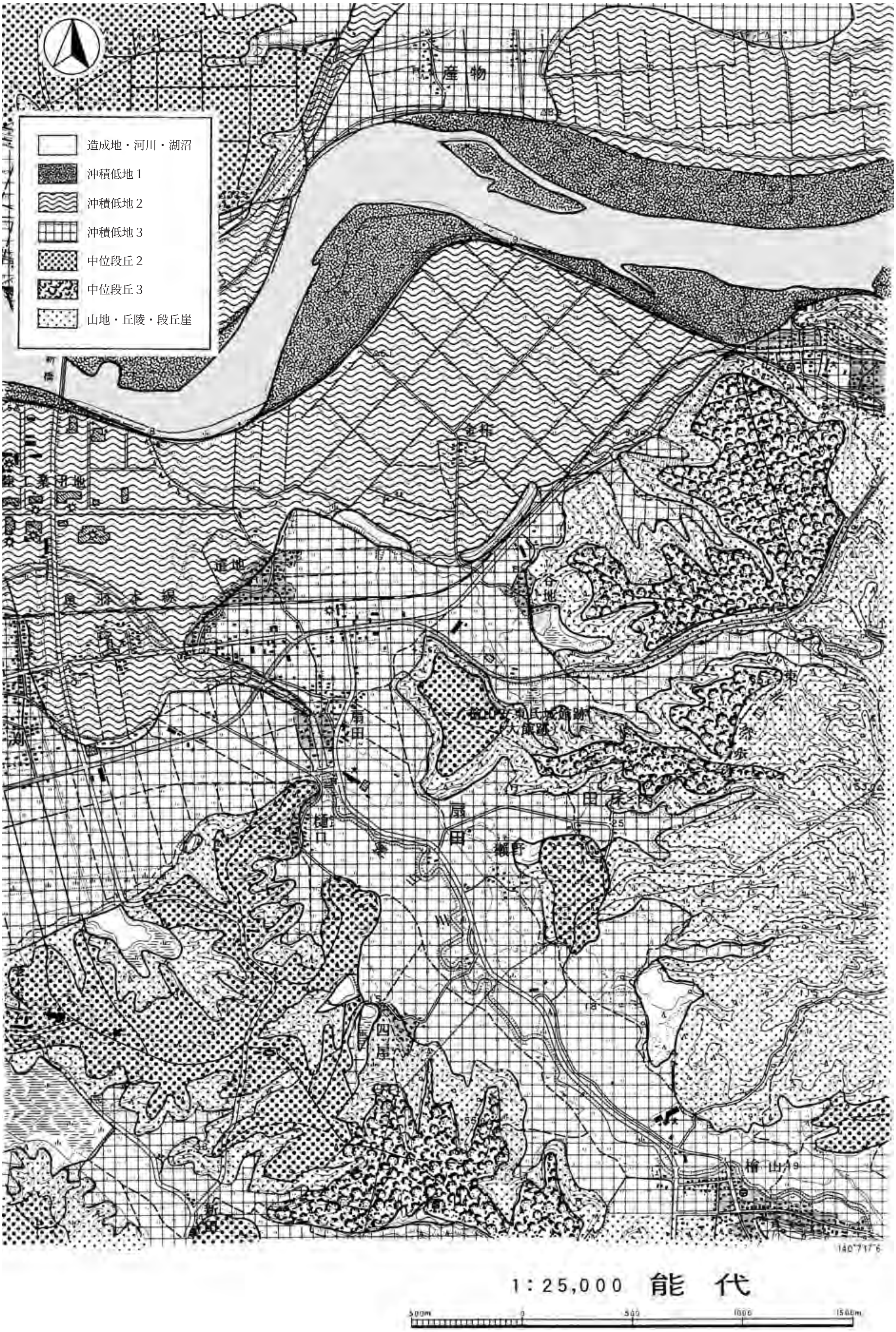
鴨巣館跡、鴨巣Ⅰ遺跡・鴨巣Ⅱ遺跡は、秋田県北部を西流する米代川河口付近に開けた能代市に所在する。市の中心部にある能代市役所からは南東に約7.5㎞、最寄りの駅であるＪＲ奥羽本線鶴形駅からは南西約1.5㎞に位置している。

県内最長河川である米代川の下流域には能代平野が広がり、その北側には1000m前後の山が連なる世界遺産の白神山地、南側には太平山地に連なる丘陵地や台地が広がっている。遺跡は太平山地へ連なる幟山丘陵地の北端部にあり、地形区分では中位段丘および山地・丘陵地・段丘崖に相当する。

遺跡の北約２㎞には米代川が西流し、遺跡の西側約２㎞には、米代川の支流である檜山川が北西に向かって流れている。



第２図　遺跡位置図



第３図　地形区分図

第２節　歴史的環境

鴨巣館跡・鴨巣Ⅰ遺跡・鴨巣Ⅱ遺跡の所在する米代川下流域には、中世の城館跡をはじめとして多くの遺跡が分布している。ここでは、これら３遺跡周辺の旧石器時代から近世までの遺跡について概観する。

旧石器時代の遺跡としては、約２万７千年前のものと推測される縄手下遺跡（２）がある。この遺跡からは、後期旧石器時代の石器製作跡が検出され、これに隣接して同時代の可能性のある２基の土坑が検出された。後期旧石器時代の土坑は、全国でも30例ほど確認されているにすぎない。

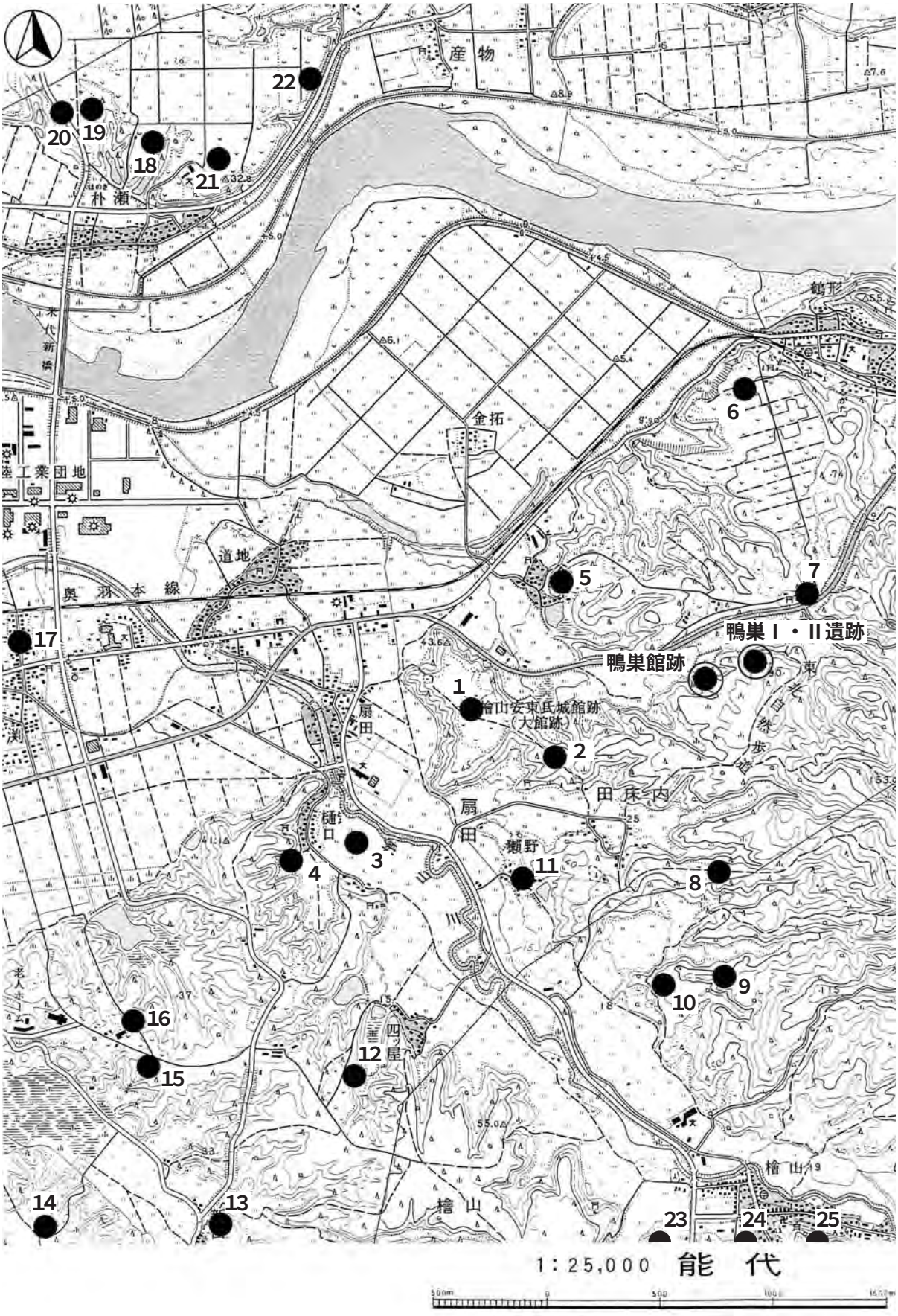
縄文時代の遺跡としては、昭和33年に秋田県立鷹巣農林高等学校郷土史研究部によって発掘調査が行われた、外堤遺跡がある。この遺跡からは、後期後葉の瘤付土器様式と晩期の亀ヶ岡土器様式が出土している。その他に上の山遺跡（６）、三岳遺跡（10）などから縄文土器が見つかっているが、発掘調査がなされていないため詳細は不明である。

古代の遺跡としては、律令国家の最北機関である「野代営」の擬定地の一つとされている大館跡（田床内）（１）がある。この遺跡からは、古代に属すと見られる遺構として竪穴住居跡33軒、竪穴状遺構16基、土坑４基、掘立柱建物跡４棟が検出され、大規模な集落跡であることが知られている。祭祀の場である樋口遺跡（４）からは、檜扇や櫛など身分の高い人物の持ち物や、斎串・墨書土器・底部に穿孔のある坏など官衙での祭祀に用いられる道具が出土している。さらに、祭祀に用いられた施設と考えられる水路跡が１条検出されている。

中世の遺跡としては茶臼館跡（23）・国清寺跡・大館跡（１）のほか昭和55年に「檜山安東氏城館跡」として国の史跡に指定された檜山城跡（25）があげられる。檜山城は、中世に県北一帯を支配した檜山安東氏の城館である。安東氏が檜山を中心に活動を始めるのは15世紀中頃、政季が入ってからであり、檜山城は政季の子忠季が1495年に築いたと考えられている。この城館は標高145ｍの山頂からのびる馬蹄形の稜線を利用し、縄張りされた壮大な山城で、曲輪・腰曲輪・堀切り・虎口・館神堂跡・井戸跡・古道などの遺構がよく保存されている。

近世の遺跡としては、秋田藩主佐竹氏の家臣であり檜山の所預として配置された多賀谷氏の居館であった多賀谷居館跡（24）がある。藩政期の構築物は残っていないが、人的削平地、切り通し、馬場跡、土塁跡などが目視できる。この他に秋田県文化財に指定されている鴨巣一里塚（10）がある。この塚は羽州街道沿いの集落である田床内と鶴形の中程にあり、街道を挟んで対峙するように今も２つの塚が残っている。県内では数少ない塚の原型を残す貴重な例である。

※外堤遺跡は鶴形の北東（1.5㎞）、国清寺は桧山の東（1.2㎞）に所在する。


産物
朴瀬
米代新橋
金拓
鶴形
陸工業団地
道地
奥羽本線
鴨巣Ⅰ・Ⅱ遺跡
鴨巣館跡
檜山安東氏城館跡
（大館跡）
扇田
田床内
樋口
瀬野
四ッ屋
檜山
1:25,000 能代

第４図　周辺の遺跡図

第１表　周辺の遺跡一覧

地図番号	遺 跡 名	所　在　地	種　別	遺　構・遺　物
1	大館	能代市田床内字大館	集落跡、館跡	掘立建物柱跡、竪穴住居跡、竪穴状遺構、空堀、柵列、石組遺構、土塁、土師器、須恵器、鉄製品
2	縄手下	能代市田床内字縄手下	集落跡	土坑、陥し穴状土坑、フラスコ状土坑、掘立柱建物跡、溝跡、炭窯、土坑、柱穴様ピット、旧石器、縄文土器、土師器、須恵器
3	岩ノ目	能代市字岩ノ目	遺物包含地	縄文土器、土師器
4	樋口	能代市字樋口	祭祀場	捨て場、井戸跡、溝跡、土坑、杭列、柱穴様ピット、土師器、須恵器、木製品、石製品、土製品
5	谷地館	能代市字田中谷地	館跡	段築
6	上の山	能代市字上の山台	遺物包含地	縄文土器
7	鴨巣一里塚	能代市字上の山台能代市字谷地上	一里塚	
8	二夕又	能代市田床内字二夕又	集落跡	竪穴状遺構、土坑、溝跡
9	三岳館	能代市桧山字上館	館跡	段築、堀切
10	三岳	能代市桧山字上館	遺物包含地	縄文土器、石器
11	獺野	能代市扇田字獺野	遺物包含地	中世陶器
12	四ツ屋台	能代市扇田字四ツ屋台	遺物包含地	縄文土器、土師器、須恵器
13	中瀬戸沢	能代市桧山字中瀬戸沢	遺物包含地	土師器、須恵器
14	小友Ⅲ	能代市中沢字小友	集落跡	竪穴住居跡、フラスコ状土坑、縄文土器、土師器、須恵器、緑釉陶器、珠洲系陶器、青磁、紡錘車
15	新田沢	能代市桧山字新田沢	遺物包含地	縄文土器、石器
16	苗代沢	能代市鰄渕字苗代沢	遺物包含地	縄文土器、土師器、須恵器、中世陶器、石器
17	鰄渕	能代市鰄渕字鰄渕	遺物包含地	縄文土器、珠洲系陶器、鉄滓
18	中台	能代市朴瀬字社地祭中台	集落跡	竪穴住居跡、製鉄炉、縄文土器、土師器、須恵器
19	八森坂Ⅱ	能代市朴瀬字八森坂	遺物包含地	土坑、縄文土器、土師器、須恵器、石器
20	八森坂Ⅰ	能代市朴瀬字八森坂	遺物包含地	
21	二林台	能代市朴瀬字二林台、字林台	遺物包含地	縄文土器、土師器
22	林台	能代市朴瀬字林台	遺物包含地	縄文土器、石器
23	茶臼館跡	能代市桧山字茶臼館	館跡	段築、堀切、須恵器、青磁、中世陶磁器
24	多賀谷居館	能代市桧山字霧山下	館跡	土塁、段築、井戸跡、土坑、須恵器、陶磁器、土製品、木製品、硯石、鉄釘、手鏡、銭貨、珠洲系陶器
25	檜山城跡	能代市桧山字古城	館跡	空堀、土塁、段築、唐津陶器、青磁、古瀬戸陶器

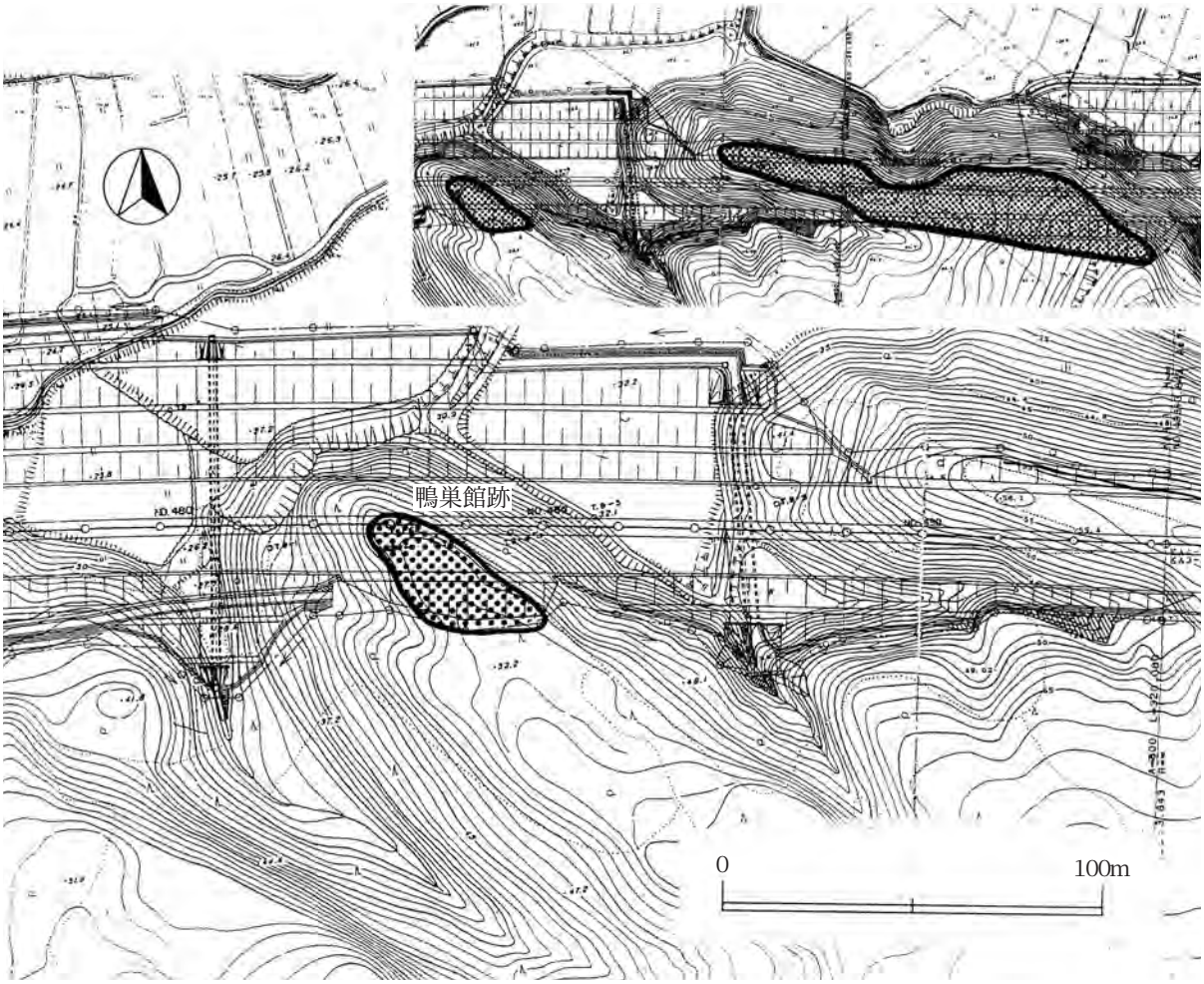
鴨巣館跡

第１章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

鴨巣館跡は、太平山地から連なる幟山丘陵地の先端部にある。遺跡の東200ｍには、丘陵の懐を同じくする鴨巣Ⅰ・Ⅱ遺跡がある。

調査区の標高は51ｍ～53ｍであり、北側は急斜面となって下の沖積地へと続く。沖積地との比高は25ｍほどある。調査区は、南側の台地からやや突き出した台地先端部の狭い平坦面とその周辺の斜面となる。調査前の現状は杉や松などの林であった。



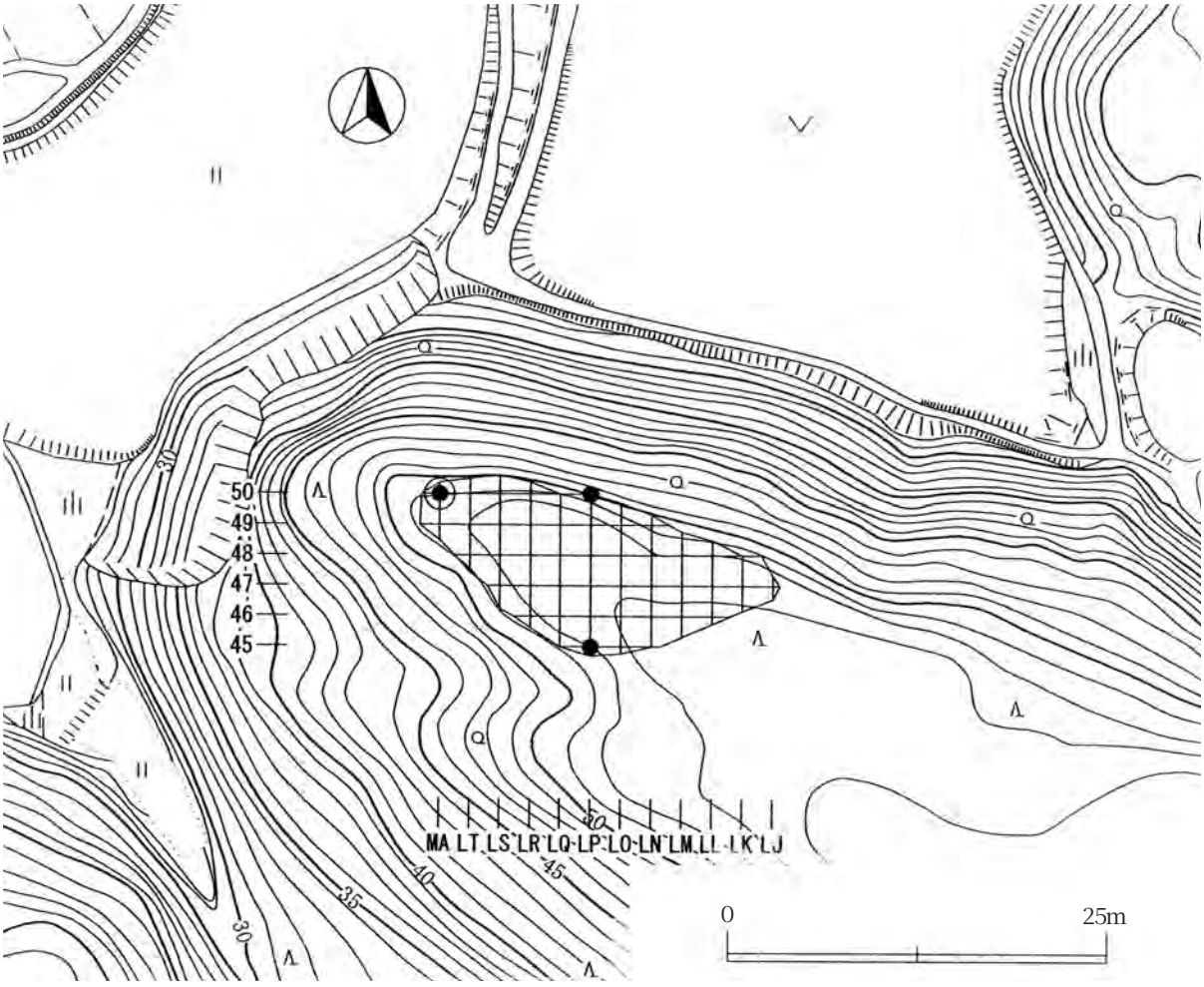
第５図　鴨巣館跡調査範囲図

第２節　調査の方法

調査の方法は、グリッド法を採用した。琴丘能代道路建設工事予定地内のセンター杭（STA．№483）を基点として真北方向をとり、４ｍ×４ｍの方眼杭を打設してグリッドを設定した。具体的には、基点にＭＡ50の呼称を付し、東に行くに従いＬＴ、ＬＳ、ＬＲ・・・というアルファベットを、北に行くに従い51、52、53・・・という二桁の算用数字を用い、これを組み合わせた記号で位置を示した。その際、４ｍ方眼の南東隅に位置する杭を当該グリッドの名称とした。

検出した遺構は発見順に略記号および番号を付して区別した。

調査は表土の掘り下げ、包含層の掘り下げ、遺構精査という手順で進めた。作業は全て手作業で行った。出土した遺物には遺跡名・出土位置・出土層位・出土年月日を記録し、取り上げを行った。また、遺物番号を付したものは出土レベルも記録した。検出遺構・遺物は、必要に応じて35㎜判モノクロネガフィルム、リヴァーサルフィルム、カラーネガフィルムで記録撮影した。



第６図　鴨巣館跡グリッド配置図

第３節　調査の経過

平成15年６月９日から６月30日まで実施した調査経過は以下のとおりである。

鴨巣館跡発掘調査

【第１週】６月９日～６月13日

作業員の人力による表土除去を行う。南東部より土坑が、南西部より柱穴様ピットが検出された。東亜測量によるグリッド打設が行われた。

【第２週】６月16日～６月20日

作業員の人力による表土除去を行う。空堀の精査を実施する。

【第３週】６月23日～６月27日

作業員の人力による表土除去を行う。遺構の精査を終了した。

【第４週】６月30日

鴨巣館跡の発掘調査を終了した。

第４節　整理作業の方法と経過

調査では、18リットル入り遺物整理用コンテナ換算で３箱の、土師器を中心とする遺物が出土した。

整理作業は、秋田県埋蔵文化財センター中央調査課で行なった。遺物は洗浄・注記をしたのち、集計、分類、接合作業、実測図作成などを行ない、遺構図面については佐藤の指示のもと調査・研究員２名が第２原図を作成し、それをトレースしたものを原稿とした。

第２章　調査の記録

第１節　基本層序

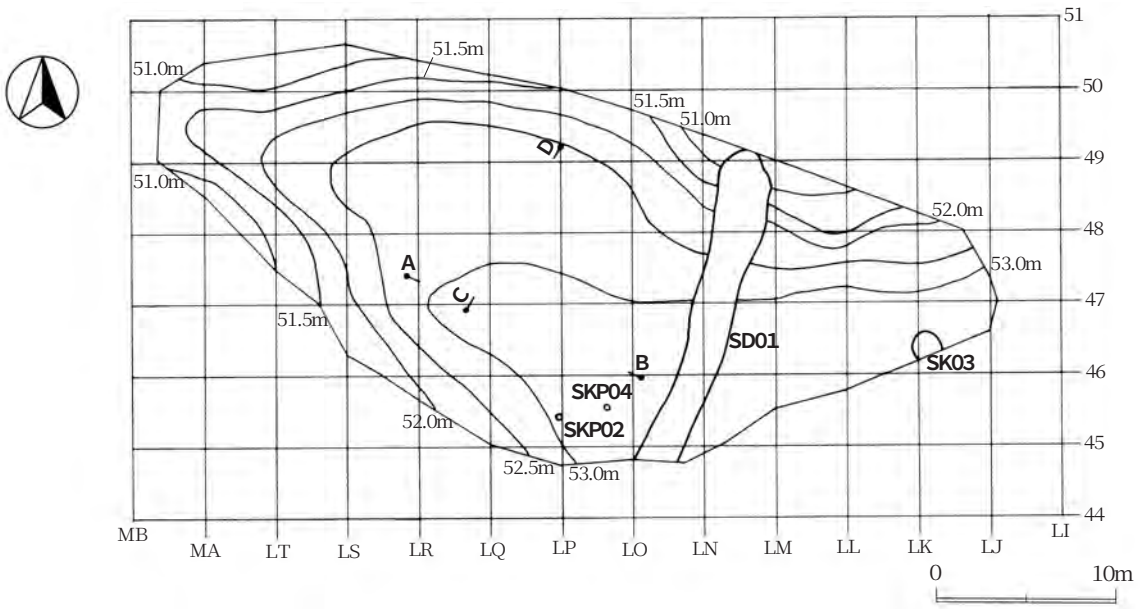
鴨巣館跡の基本層序は、第７図に示した地点で観察した。基本層序は次のとおりである。
第Ⅰ層：　表土　層厚５～10㎝
第Ⅱ層：　10ＹＲ２／２　黒褐色シルト　層厚10～20㎝
第Ⅲ層：　7.5ＹＲ５／８明褐色　シルト地山
以上のうち、遺構確認面は概ね第Ⅲ層であった。

第２節　検出遺構と遺物

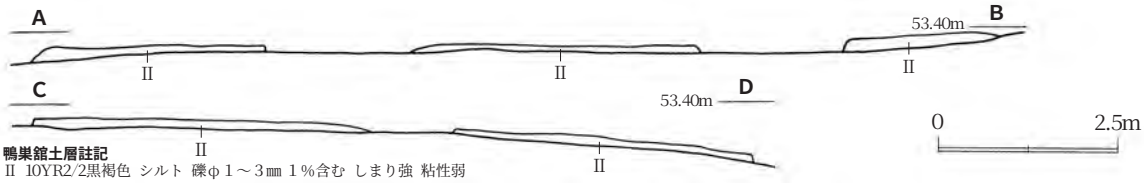
発掘調査の結果、検出された遺構は、空堀１条、土坑１基、柱穴様ピット２基の計４遺構であり、いずれも調査区南側で検出された。出土した遺物は整理用コンテナで0.5箱分で、全て土師器である。

（１）土坑
ＳＫ03　（第９図、図版４）
《位置》ＬＪ46に位置する。
《確認状況》第Ⅲ層で、調査区外に延びる黒褐色の不整円形のプランとして確認した。
《重複》なし。
《規模・形態》長軸（北東－南西）方向1.63m、短軸（北東－南西）方向1.33mの不整円形である。約1/3は調査区外に入る。
《埋土》２層に分層したが、全体に地山由来の微量の礫が混入している。
《壁》確認面から0.26mの高さで、やや急に立ち上がるが、西側壁は緩やかである。
《底面》中央に向かって緩く傾斜している。床面は堅く締まっている。
《出土遺物》なし。
《時期》出土遺物がないため不明である。

（２）空堀
ＳＤ01　（第10図、図版２、３）
《位置》ＬＭ44～47、ＬＮ43～45に位置する。
《確認状況》第Ⅲ層で、溝状の黒褐色土のプランとして確認した。
《重複》なし。
《規模・形態》北東から南西方向に、長さ18.04m、幅2.02～3.04m、深さ0.46～0.90mである。南端はさらに調査区外に延びる。

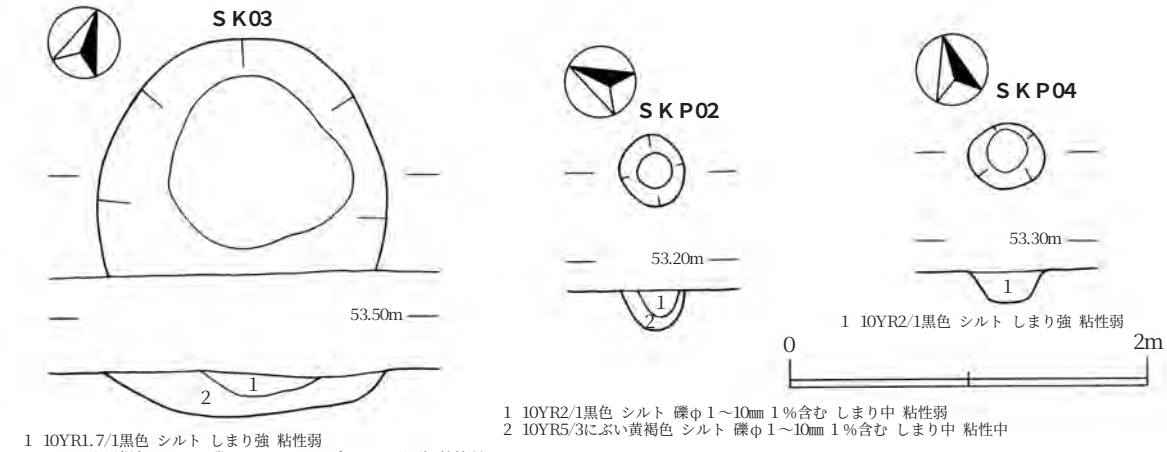


第７図　遺構配置図



鴨巣舘土層註記
II　10YR2/2黒褐色　シルト　礫φ１～３㎜ １%含む　しまり強　粘性弱

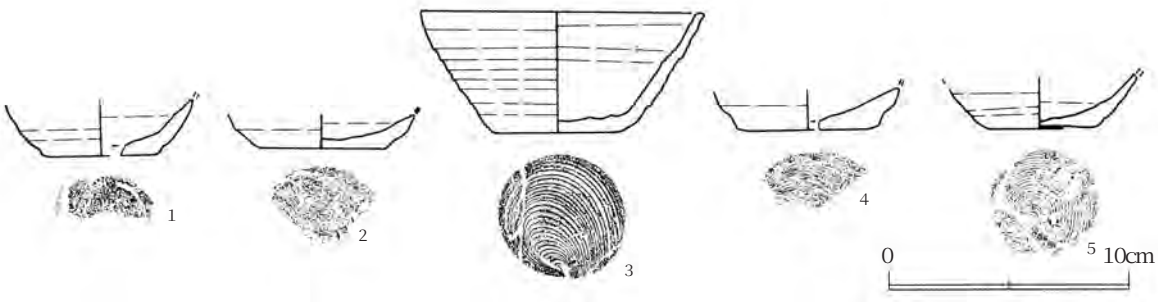
第８図　基本土層図



1　10YR1.7/1黒色　シルト　しまり強　粘性弱
2　10YR2/2黒褐色　シルト　礫φ１～５㎜ ２%含む　しまり強　粘性弱

1　10YR2/1黒色　シルト　しまり強　粘性弱

1　10YR2/1黒色　シルト　礫φ１～10㎜ １%含む　しまり中　粘性弱
2　10YR5/3にぶい黄褐色　シルト　礫φ１～10㎜ １%含む　しまり中　粘性中



第９図　検出遺構・出土遺物

《埋土》４層に分層したが、全体に地山由来の礫が混入している。
《断面形》Ｕ字形であるが、中間部では緩やかなＶ字形である。
《出土遺物》底面から土師器坏片が出土しているが摩滅が著しい。
《時期》土師器の特徴から、時期は平安時代であると考えられる。

（３）柱穴様ピット

第２表　柱穴様ピット観察表

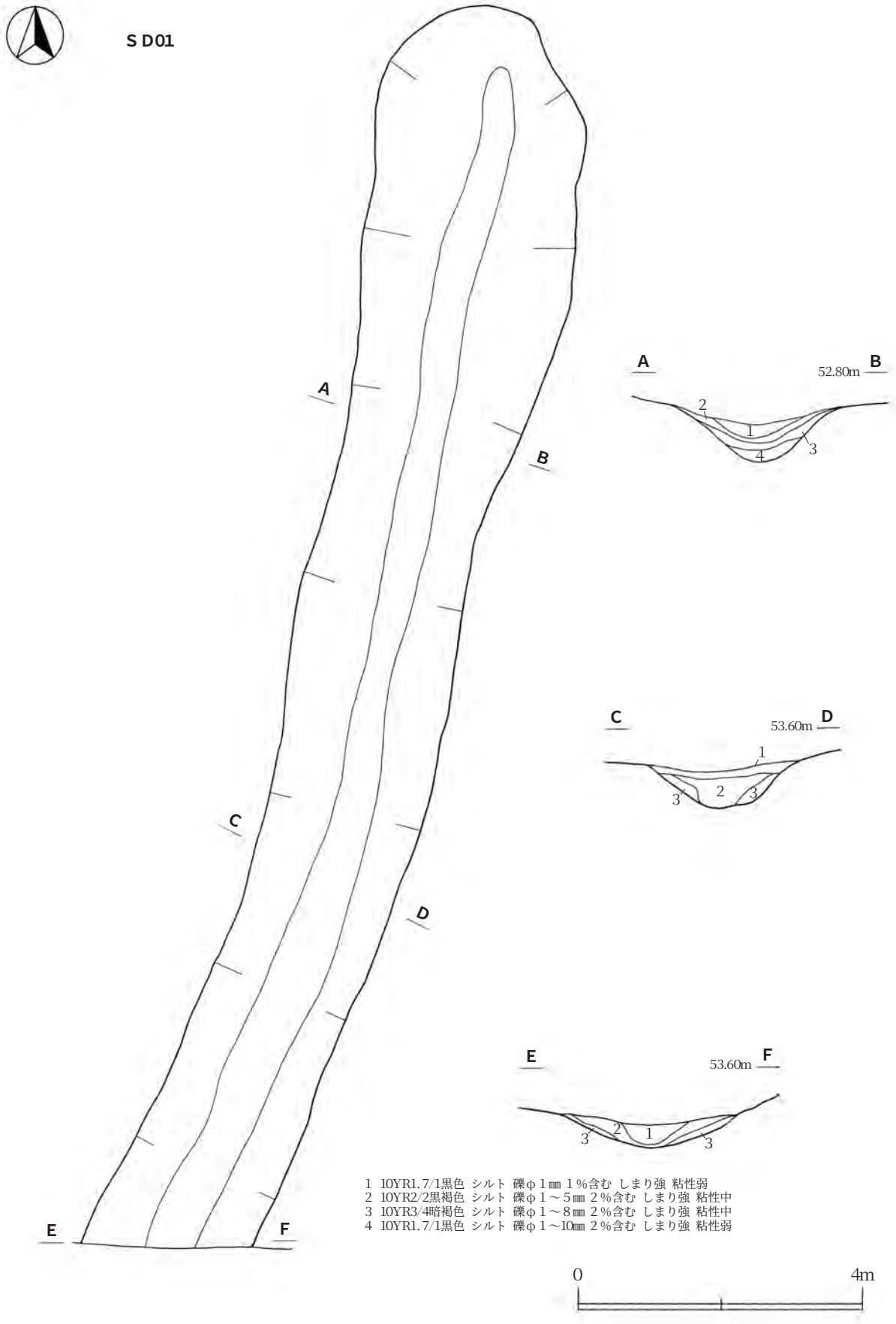
№	グリッド	確認層	径又は辺長(cm)	平面形状	深さ(cm)	底面標高(m)	備 考
02	ＬＰ45	Ⅲ	43×37	楕円形	23	52.81	時期不明
覆土	１層：10ＹＲ２／１黒色シルト　　２層：10ＹＲ２／３黒褐色シルト						
№	グリッド	確認層	径又は辺長(cm)	平面形状	深さ(cm)	底面標高(m)	備 考
04	ＬＯ45	Ⅲ	44×37	楕円形	18	52.95	時期不明
覆土	単層：10ＹＲ２／１黒色シルト						

（４）遺物

当遺跡から出土した遺物は、コンテナ３箱で、ほとんどが土師器（坏）の小片である。その中で比較的状態の良いものを掲載した。

第３表　鴨巣館跡出土遺物観察表

番号	種別	器形	出土位置	特　　徴	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	挿図番号
1	土師器	坏	ＳＤ01 ３層	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ 胎土に砂礫多く含む	－	(2.0)	(4.0)	9
2	土師器	坏	ＳＤ01 ２層	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	－	(1.4)	(5.6)	9
3	土師器	坏	確認調査	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ 内面に小さな円形の剥落痕多数あり。	11.9	5.4	5.1	9
4	土師器	坏	ＬＬ46Ｉ層	外面：ロクロナデ→回転糸切り	－	(1.7)	(5.4)	9
5	土師器	坏	確認調査	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ 焼成良好	－	(2.3)	4.4	9


SD01
A
B
C
D
E
F
A
52.80m
B
C
53.60m
D
E
53.60m
F
1 10YR1.7/1黒色 シルト 礫φ１㎜ １％含む しまり強 粘性弱
2 10YR2/2黒褐色 シルト 礫φ１～５㎜ ２％含む しまり強 粘性中
3 10YR3/4暗褐色 シルト 礫φ１～８㎜ ２％含む しまり強 粘性中
4 10YR1.7/1黒色 シルト 礫φ１～10㎜ ２％含む しまり強 粘性弱
0
4m

第10図　SD01

第３章　まとめ

当調査区は舌状台地にあり、ほぼ平坦になっている。その調査区の南側では、ほぼ東西に延びる長さ18m、幅２～３ｍ、深さ0.55ｍの空堀を検出した。他の遺跡の例から、北西部と南東部を分ける区画施設として機能していたものと考えられる。空堀の底面から出土した土師器は、摩滅が激しく特徴が不明瞭ながらも概ね10世紀代の遺物と推測される。

舌状台地を空堀で区画する例は、古代の防御性集落やチャシなどに多くみられる。時代、地域とも異なるチャシは別として、古代防御性集落の例では、空堀の周辺に居住区域を設けている場合が多い。県内においては鹿角市太田谷地遺跡、大館市横沢遺跡、北秋田市脇神館跡に代表されるが、当遺跡ではこれら遺跡に比べ、空堀の周辺から住居が１件も検出されなかったこと、堀が比較的浅いこと、遺物が極めて少ないことなどの違いがみられる。このことから、

ａ鴨巣館跡がこれらの遺跡とは性格や時期が若干異なる

ｂ今回の調査区が遺跡の中心部ではなく、さらに台地の奥側に堀や集落の中心部がある

の２つの可能性が考えられる。なお、当調査区の平坦面は南東側調査区外（台地の奥側）にさらに広がりを見せることから、ｂの可能性は決して低くはないと考えられる。そのため、調査の合間を見て周辺の踏査を行ってみたが、雑木や放置された伐採木により地面の凹凸を確認することができず、ｂの可能性を検証することが果たせなかった。今後、近接する鴨巣Ⅰ・Ⅱ遺跡と併せて、周辺地形の精査が望まれる遺跡である。

参考文献

秋田県教育委員会　『西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－太田谷地館跡－』　秋田県文化財調査報告書第172集　1988(昭和63)年

秋田県教育委員会　『西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ－太田谷地館跡第２次調査－』　秋田県文化財調査報告書第183集　1989(平成元)年

秋田県教育委員会　『味噌内地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－袖ノ沢遺跡・横沢遺跡－』　秋田県文化財調査報告書第169集　1989(平成元)年

秋田県教育委員会　『脇神館跡－県道木戸石鷹巣線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』　秋田県文化財調査報告書第284集　1999(平成11)年

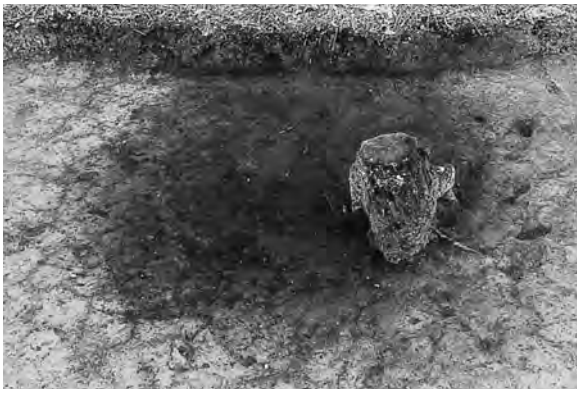
高橋　学　「秋田県における古代防御性集落」　『北日本古代防御性集落をめぐって』　蝦夷研究会青森大会シンポジウム実行委員会　2005(平成17)年

鴨巣館跡近景（北東から）

鴨巣館跡完掘状態（南東）

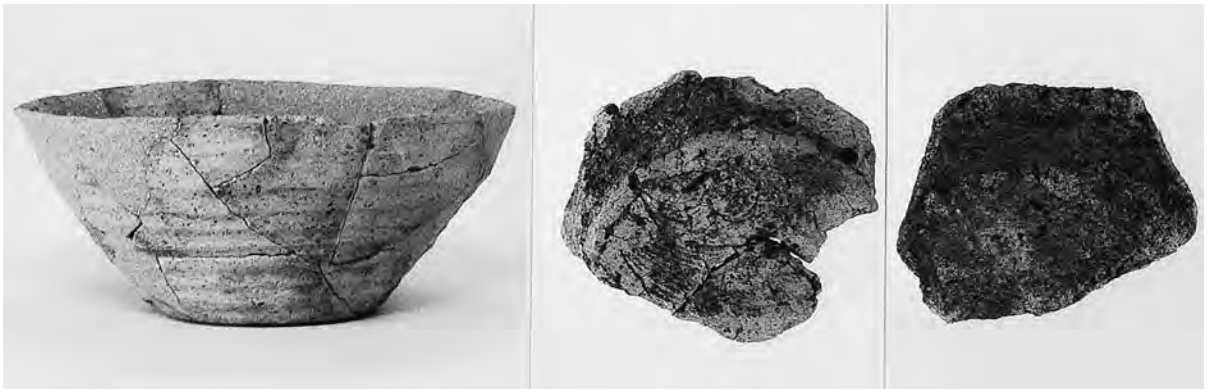
図版2

S D01完掘状態（北から）



S K03確認状態

S K03土層断面



鴨巣館跡出土遺物

鴨巣Ⅰ遺跡・鴨巣Ⅱ遺跡

第１章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

鴨巣Ⅰ遺跡・鴨巣Ⅱ遺跡は、太平山地に連なる幟山丘陵地の先端部に位置する。遺跡の西200ｍには、丘陵の懐を同じくする鴨巣館跡がある。遺跡の東側には羽州街道が縦走し、遺跡南方向から遺跡内へと延びる私道は、羽州街道から分離した道である。この分岐点から遺跡までの距離は、200ｍほどである。

調査区の標高は55ｍ～70ｍで、北側は急斜面で下の沖積地へと続く。北側の沖積地との比高は25～35ｍほどある。

調査区は東西に長く、西側が鴨巣Ⅰ遺跡、東側が鴨巣Ⅱ遺跡となる。鴨巣Ⅰ遺跡側は丘陵地が開析を受けた結果、丘陵地から分離し、西に向けて半島状に突き出すような地形になっており、先端部は地滑りによって崩落した状態になっている。鴨巣Ⅱ遺跡側は、東に行くほど標高が高くなる緩斜面で占められ、東端部が調査区内の最高地点となる。この緩斜面には平安時代の集落の造営によって形成された段状の平坦面が幾つかみられる（第17図）。両遺跡の調査前の状況は林であった。

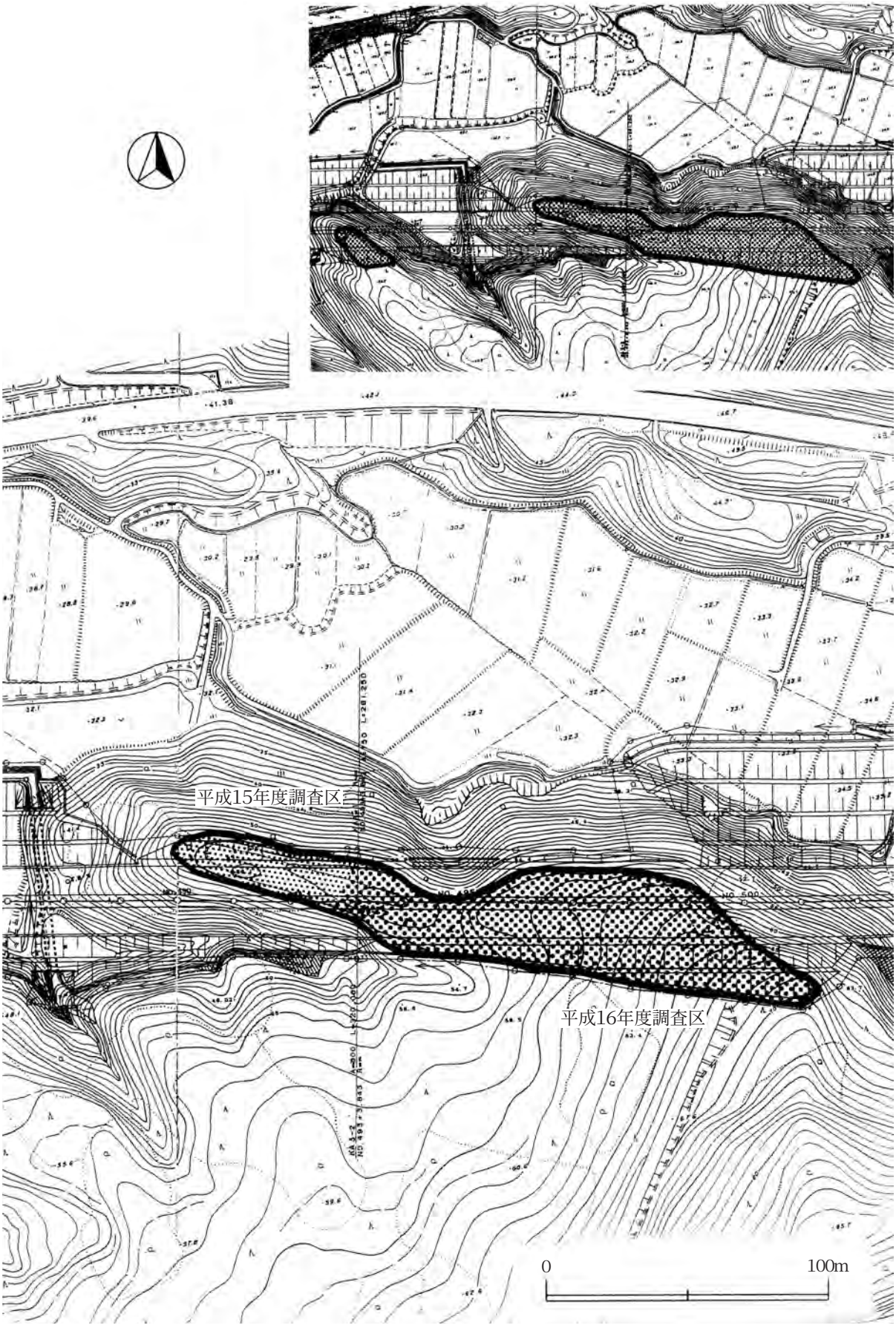
当初、緩やかな沢状の地形を境に鴨巣Ⅰ遺跡とⅡ遺跡を別個の遺跡として扱っていたが、調査の結果一連の遺跡であることがわかった。そのため、本報告では、鴨巣Ⅰ遺跡側を調査区西側、鴨巣Ⅱ遺跡側を調査区東側と呼ぶことにする。なお、調査区中央部と呼ぶ場合は、調査区の西端から東端までのおおよその中間地点を指すことになる。

第２節　調査の方法

調査の方法は、グリッド法を採用した。琴丘能代道路建設工事のセンター杭（STA．№496）を基点として真北方向をとり、４ｍ×４ｍの方眼杭を打設してグリッドを設定した。具体的には、基点にMA50の呼称を付し、西に行くに従いＭＢ、ＭＣ、ＭＤ・・・・・というアルファベットを、北に行くに従い51、52、53・・・・・・という二桁の算用数字を用い、これを組み合わせた記号で位置を示した。その際、４ｍ方眼の南東隅に位置する杭を当該グリッドの名称とした。

検出した遺構は発見順に略記号および番号を付して区別した。

調査は表土の除去、包含層の掘り下げ、遺構精査という手順で進めた。表土は重機で除去し、遺物が多く含まれている包含層や遺構確認面までの掘り下げは手作業で行った。出土した遺物は、遺跡名・出土位置・出土層位・出土年月日を記録した上で取り上げを行った。また、遺物番号を付したものは出土レベルも記録した。検出遺構・遺物は、必要に応じて35㎜判モノクロネガフィルム、リヴァーサルフィルム、デジタルデータで記録撮影した。



第11図　鴨巣Ⅰ・Ⅱ遺跡調査範囲図

第12図　鴨巣Ⅰ・Ⅱ遺跡グリッド配置図

第３節　調査の経過

平成15年度　鴨巣Ⅰ遺跡発掘調査

【第１週】９月１日～９月５日

西側より土坑５基、東側より土坑３基を検出した。西側先端部が地滑りを起こしたため、調査範囲から除外した。

【第２週】９月８日～９月12日

東亜測量によるグリッド打設が行われた。東側より、竪穴住居跡２軒と炭焼遺構１基を確認した。竪穴住居跡の１軒は焼失家屋である。

【第３週】９月16日～９月19日

東側より、新たに竪穴住居跡が１軒検出された。

【第４週】９月24日～９月26日

西側より、竪穴住居跡が１軒検出された。

【第５週】９月29日～10月３日

先週検出された竪穴住居跡は、焼失家屋であることが判明した。東側で炭焼遺構と切り合う竪穴住居跡が検出された。

【第６週】10月６日～10月10日

南東側より、炭焼遺構を検出した。

【第７週】10月14日～10月17日

西側より、竪穴住居跡を２軒検出した。

【第８週】10月20日～10月24日

遺跡全体の空中撮影を実施した。西側より、竪穴住居跡を検出した。調査を終了し、現場を撤収した。

※11月12日

鴨巣Ⅰ遺跡の西側を東北建設協会と文化財保護室立ち会いのもと原因者へ引き渡す。

平成16年度　鴨巣Ⅰ遺跡・鴨巣Ⅱ遺跡

【第１週】５月17日～５月21日

環境整備、粗掘り、竪穴住居跡などの遺構精査を行う。

【第２週】５月24日～５月28日

環境整備、粗掘り、遺構精査などを行う。

【第３週】５月31日～６月４日

粗掘り、遺構確認作業、遺構精査などを行う。

【第４週】６月７日～９月11日

粗掘り、遺構確認作業、遺構精査などを行う。新たに鍛冶炉を検出した。

【第５週】６月14日～６月18日

粗掘り、遺構確認作業、遺構精査などを行う。調査区中央部や西側で竪穴住居跡がまとまって検出

された。

【第６週】６月22日～６月25日

遺構精査を行う。棚田状の各平坦面に多数の竪穴住居が重複していること、溝などによって集落が区画されていることなどが明らかになってくる。

【第７週】６月28日～７月２日

粗掘り、遺構確認作業、遺構精査などを行う。調査区中央部の溝跡で土師器まとまって出土。

【第８週】７月５日～７月９日

粗掘り、遺構確認作業、遺構精査などを行う。調査区西側で検出した製鉄炉の精査を開始する。保存状態の良い竪穴住居跡を検出する。

【第９週】７月12日～７月16日

粗掘り、遺構確認作業、遺構精査などを行う。台地の縁にそって溝跡がのびていること、調査区西側の南向き斜面に平坦面が造成されていることなどを確認した。遺構数が予想以上に多いため、調査計画の組み替えを行う。

【第10週】７月20日～７月23日

粗掘り、遺構確認作業、遺構精査などを行う。斜面に造成された平坦面を精査したところコ字型に巡る溝を検出した。

【第11週】７月26日～７月30日

粗掘り、遺構確認作業、遺構精査などを行う。

【第12週】８月９日～８月13日

粗掘り、遺構確認作業、遺構精査などを行う。台地の縁を巡る溝跡の底面付近から炭化材を検出した。

【第13週】８月16日～８月20日

粗掘り、遺構確認作業、遺構精査などを行う。

【第14週】８月23日～８月26日

粗掘り、遺構確認作業、遺構精査などを行う。

【第15週】８月30日～９月３日

粗掘り、遺構確認作業、遺構精査を行う。台地の縁を巡る溝跡に伴う柱穴（方形の掘り込み）を数基確認した。

【第16週】９月６日～９月９日

粗掘り、遺構確認作業、遺構精査を行う。台地の縁を巡る溝跡に重複して掘立柱建物跡を検出した。

【第17週】９月13日～９月17日

粗掘り、遺構確認作業、遺構精査を行う。台地の縁を巡る溝跡が一部二重になることが判明した。竪穴状遺構から完形に近い須恵器の壺が出土した。

【第18週】９月21日～８月23日

粗掘り、遺構確認作業、遺構精査を行う。21日、東北歴史博物館館長工藤雅樹氏が調査指導のため来跡。23日、遺跡見学会を行う（来跡者数200人）。

【第19週】９月27日～10月１日

粗掘り、遺構確認作業、遺構精査を行う。製鉄炉の調査を終了した。

【第20週】10月４日～10月８日（金）

中国甘粛省交流員、毛瑞林氏調査参加。

【第21週】10月12日～10月15日

粗掘り、遺構確認作業、遺構精査を行う。調査区中央部から錫杖状鉄製品が出土した。

【第22週】10月18日～10月22日

粗掘り、遺構確認作業、遺構精査を行う。21日、文化庁記念物課坂井主任調査官が来跡した。

【第23週】10月25日～10月29日

粗掘り、遺構確認作業、遺構精査を行う。台地の縁を巡る溝跡と平行する新たな掘立柱建物跡を検出した。

【第24週】11月１日～11月５日

遺構確認作業、遺構精査を行う。

【第25週】11月８日～11月12日

遺構精査を行う。10日、空中写真撮影を行う。

【第26週】11月15日～11月19日

遺構精査、遺跡周辺の地形測量を行い、調査を終了した。19日、文化財保護室立ち会いのもと原因者へ遺跡の引き渡しを行う。

第４節　整理作業の方法と経過

調査では、18リットル入りコンテナ換算で173箱の平安時代を中心とする遺物が出土した。

整理作業は、秋田県埋蔵文化財センター中央調査課で行なった。遺物は洗浄・注記をしたのち、集計、分類、接合作業、実測図作成などを行ない、遺構図面については菊池・佐藤・村上の指示のもと主に調査・研究員３名が第２原図を作成し、それをトレースしたものを原稿とした。

第２章　調査の記録

第１節　基本層序

基本層位は、鴨巣Ⅰ遺跡（調査区西側）、Ⅱ遺跡（調査区東側）を通して概ね８層に分けられる。

Ⅰ層：10ＹＲ２／１～10ＹＲ２／２黒色～黒褐色シルト。細根多く含む。調査区全体に分布。重機で除去。層厚５～15㎝。

Ⅱ層：10ＹＲ２／１～２／２黒色～黒褐色シルト。調査区全体に分布。ほとんど重機で除去。層厚10～20㎝。

Ⅲ層：10ＹＲ３／３～４　暗褐色　シルト。炭化物少量（１～２％）含む。しまり強い。平安時代の遺物包含層。遺物量多い。層厚10～30㎝。

Ⅳ層：10ＹＲ４／４～６　褐色　シルト。しまりやや強い。集落が営まれた当初の旧表土。平安時代の遺物包含層。遺物包含量少ない。層厚10～30㎝。

Ⅴ層：10ＹＲ２／１～２／２黒色～黒褐色　シルト。平安時代の集落が営まれる前までの層。埋没沢にのみ堆積。直上にⅣ、Ⅵ、Ⅶ層由来の排土が堆積している部分が多い。

Ⅵ層：漸移層　沢以外の部分のⅣ層とⅥ層の間層。層厚５～10㎝。

Ⅶ層：明褐色～褐色　シルト。粘質土。しまり強い。地山。場所により色調が異なる。鴨巣Ⅰ遺跡側では層厚10～20㎝。

Ⅷ層：7.5ＹＲ４／６褐色シルト。鴨巣Ⅰ遺跡側で確認した。砂礫を多く含む。層厚約50㎝。

鴨巣Ⅱ遺跡（調査区東側）

鴨巣Ⅱ遺跡側の層位は、大きく７層に分けることができる。このうちⅢ、Ⅳ層が平安時代の遺物包含層となる。Ⅲ層は平安時代の文化層である。Ⅳ層より暗い色調で、炭化物を少量含む。Ⅳ層（Ⅳ層の２次堆積層）が母材の中心になっている可能性がある。遺物量は多い。Ⅳ層は集落が営まれた当初の表土と考えられる。遺物量は少ない。Ⅴ層は調査区中央部を北東から南西方向に走る埋没沢にのみ見られる黒色系の土層で、直上にはⅣ、Ⅵ、Ⅶ層由来の排土が堆積している。このため沢以外の部分では、平安時代の集落廃絶後まで黒色土の堆積が無かったことになる。このような例は近隣の遺跡でも確認されているため、当地では腐植土の発達が進まない何らかの気象的要因(註１)があったと考えられる。

鴨巣Ⅰ遺跡（調査区西側）

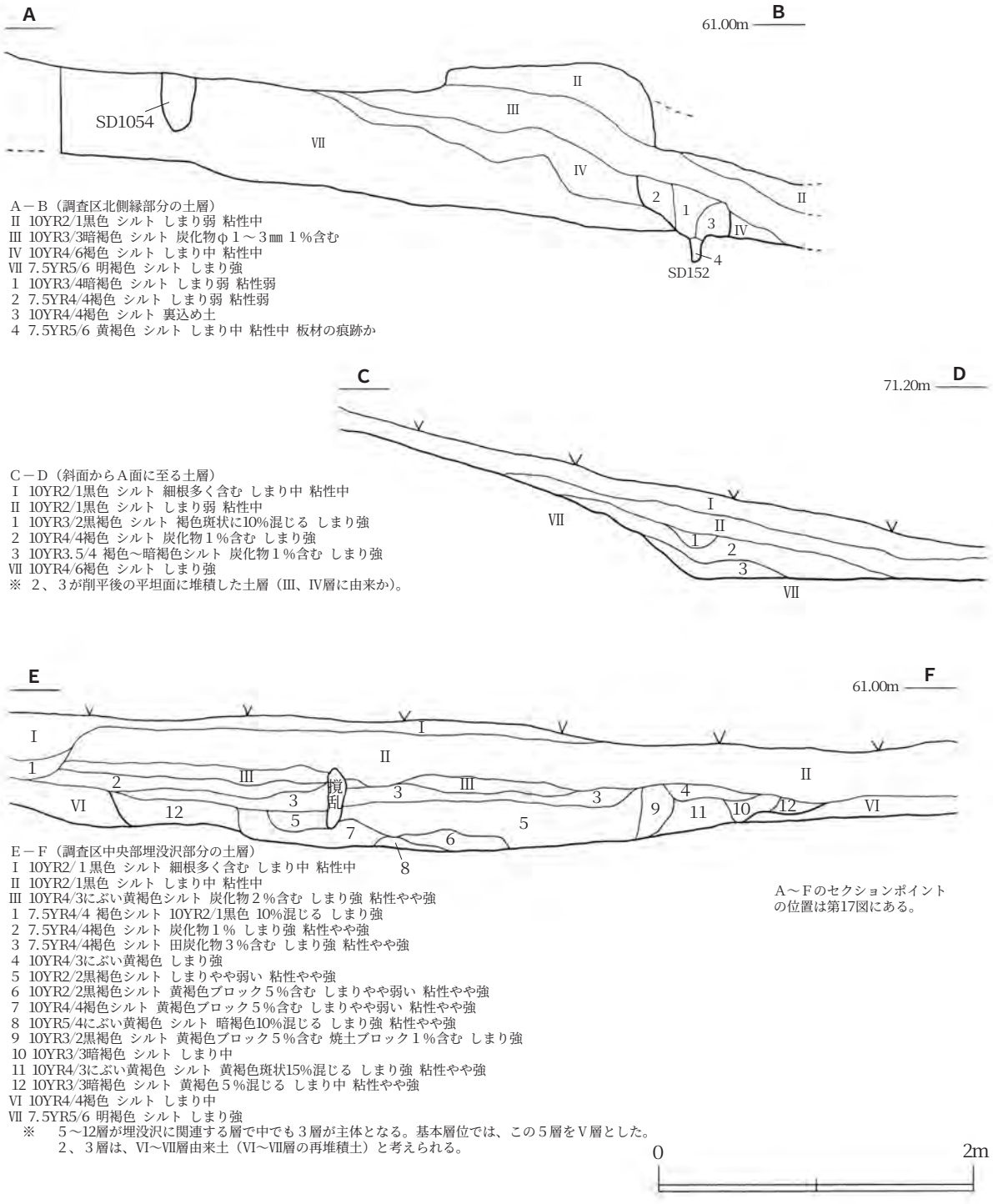
鴨巣Ⅰ遺跡側の層位は、鴨巣Ⅱ遺跡のⅢ～Ⅴ層を欠いた形になる。このため遺構確認面は主にⅥ・Ⅶ層になる。特徴としては、地山に砂礫が多く含まれることがあげられる。

遺構は主にⅢ・Ⅳ・Ⅵ・Ⅶ層で確認した。Ⅳ層で確認したものについては、Ⅲ層を掘り込み面としていたものも多く含まれている可能性がある。

鴨巣Ⅰ・Ⅱ遺跡では遺構覆土として黒色土が堆積する例が少なく、暗褐色か褐色の覆土をもつ遺構が多いため遺構の検出が困難を極めた。これは鴨巣Ⅰ遺跡側で顕著であった。

註１

能代市史によれば、５～６世紀から11世紀前葉頃までは能代砂丘の２回目の飛砂期にあたり、その後14世紀頃までは飛砂休止期になるという。この見解は当遺跡の土層堆積（Ⅱ層）を考える上で非常に興味深い。



Ａ－Ｂ（調査区北側縁部分の土層）
Ⅱ 10YR2/1黒色 シルト しまり弱 粘性中
Ⅲ 10YR3/3暗褐色 シルト 炭化物φ１～３㎜ １％含む
Ⅳ 10YR4/6褐色 シルト しまり中 粘性中
Ⅶ 7.5YR5/6 明褐色 シルト しまり強
１ 10YR3/4暗褐色 シルト しまり弱 粘性弱
２ 7.5YR4/4褐色 シルト しまり弱 粘性弱
３ 10YR4/4褐色 シルト 裏込め土
４ 7.5YR5/6 黄褐色 シルト しまり中 粘性中 板材の痕跡か

Ｃ－Ｄ（斜面からＡ面に至る土層）
Ⅰ 10YR2/1黒色 シルト 細根多く含む しまり中 粘性中
Ⅱ 10YR2/1黒色 シルト しまり弱 粘性中
１ 10YR3/2黒褐色 シルト 褐色斑状に10%混じる しまり強
２ 10YR4/4褐色 シルト 炭化物１%含む しまり強
３ 10YR3.5/4 褐色～暗褐色シルト 炭化物１%含む しまり強
Ⅶ 10YR4/6褐色 シルト しまり強
※ ２、３が削平後の平坦面に堆積した土層（Ⅲ、Ⅳ層に由来か）。

Ｅ－Ｆ（調査区中央部埋没沢部分の土層）
Ⅰ 10YR2/１黒色 シルト 細根多く含む しまり中 粘性中
Ⅱ 10YR2/1黒色 シルト しまり中 粘性中
Ⅲ 10YR4/3にぶい黄褐色シルト 炭化物２%含む しまり強 粘性やや強
１ 7.5YR4/4 褐色シルト 10YR2/1黒色 10%混じる しまり強
２ 7.5YR4/4褐色 シルト 炭化物１% しまり強 粘性やや強
３ 7.5YR4/4褐色 シルト 田炭化物３%含む しまり強 粘性やや強
４ 10YR4/3にぶい黄褐色 しまり強
５ 10YR2/2黒褐色シルト しまりやや弱い 粘性やや強
６ 10YR2/2黒褐色シルト 黄褐色ブロック５%含む しまりやや弱い 粘性やや強
７ 10YR4/4褐色シルト 黄褐色ブロック５%含む しまりやや弱い 粘性やや強
８ 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト 暗褐色10%混じる しまり強 粘性やや強
９ 10YR3/2黒褐色 シルト 黄褐色ブロック５%含む 焼土ブロック１%含む しまり強
10 10YR3/3暗褐色 シルト しまり中
11 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 黄褐色斑状15%混じる しまり強 粘性やや強
12 10YR3/3暗褐色 シルト 黄褐色５%混じる しまり中 粘性やや強
Ⅵ 10YR4/4褐色 シルト しまり中
Ⅶ 7.5YR5/6 明褐色 シルト しまり強
※ ５～12層が埋没沢に関連する層で中でも３層が主体となる。基本層位では、この５層をⅤ層とした。
２、３層は、Ⅵ～Ⅶ層由来土（Ⅵ～Ⅶ層の再堆積土）と考えられる。

Ａ～Ｆのセクションポイントの位置は第17図にある。

第13図　基本土層図

第２節　旧石器時代・縄文時代の検出遺構と遺物

１　旧石器時代

遺構は検出されなかったが、遺物は石器３点が出土した。いずれも単体で出土しており、１はⅦ層上面から出土した。１、２は埋没谷から、３は台地の縁付近から出土していた。

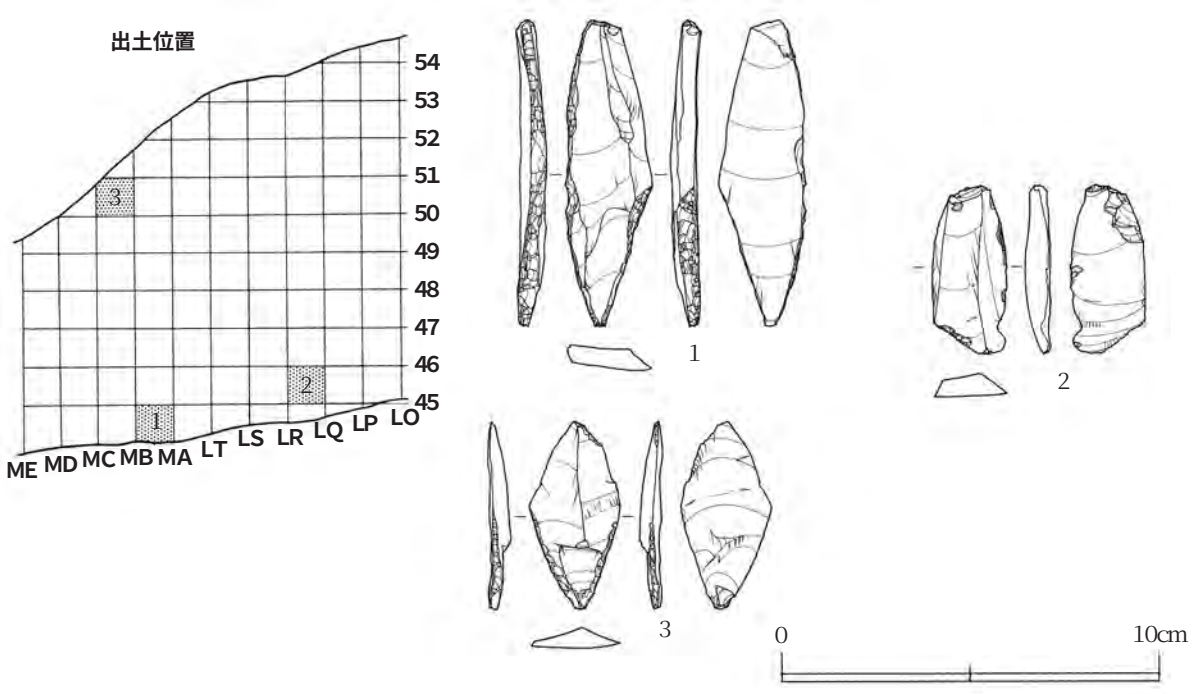
ナイフ型石器（第14図１、２、図版49）

１、２とも縦長剥片を利用したナイフ形石器である。１はⅦ層（地山）直上から出土した。基部両側縁と左側縁に刃潰し加工が施されている。

２はⅡ層から出土した。尖刃で、基部両側縁に刃潰し加工が施されている。右側縁先端部には微細な剥離痕がみられる。

剥片（第14図３、図版49）

３は調査区北側の台地の縁辺部で出土した、２つの稜をもつ石刃である。側縁には微細な剥離痕がみられる。出土層位は不明である。



第14図　旧石器時代の遺物

第４表　旧石器時代石器一覧

挿図番号	図版番号	出土位置	器　種	層位	長さ	幅	厚さ	重量	石質
第14図１	13	ＭＡ44	ナイフ型石器	Ⅶ層直上	8.1㎝	2.3㎝	0.8㎝	12.4ｇ	珪質頁岩
第14図２	13	ＬＱ45	ナイフ型石器	Ⅱ層	4.9㎝	2.4㎝	0.6㎝	4.6ｇ	珪質頁岩
第14図３	13	ＭＢ50	剥片	不明	4.5㎝	2.0㎝	0.7㎝	6.0ｇ	珪質頁岩

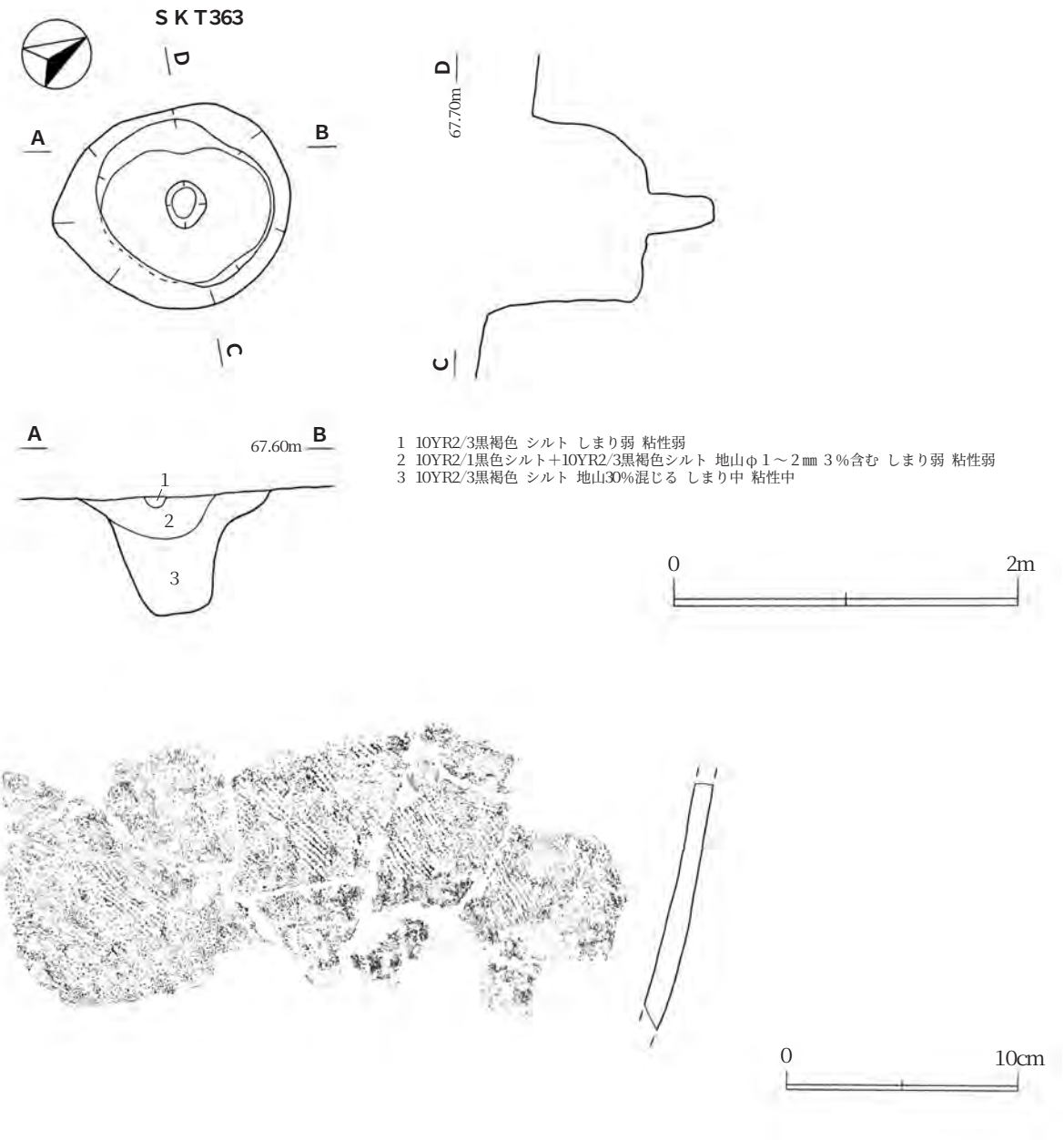
２　縄文時代

確認された遺構は陥し穴１基のみであった。遺物は土器、石器などが18リットル入りコンテナで１箱出土しているが、平安時代の遺構の覆土や遺構外からの出土で、縄文時代の遺構からは１点も出土しなかった。当遺跡は、縄文時代に主に狩猟場として利用されていた可能性が高い。

（１）　検出遺構

ＳＫＴ363（第15図）

ＫＳ49グリッドで検出した。確認面はⅦ層である。遺構は緩斜面に構築され、大きさは直径約1.2ｍで円形に近い。確認面から底面までの深さは0.82ｍ、底面に直径0.24ｍ、深さ0.38ｍのピットが掘り込まれている。覆土は自然堆積である。縄文時代の陥し穴と考えられる。



第15図　縄文時代の遺構・遺物

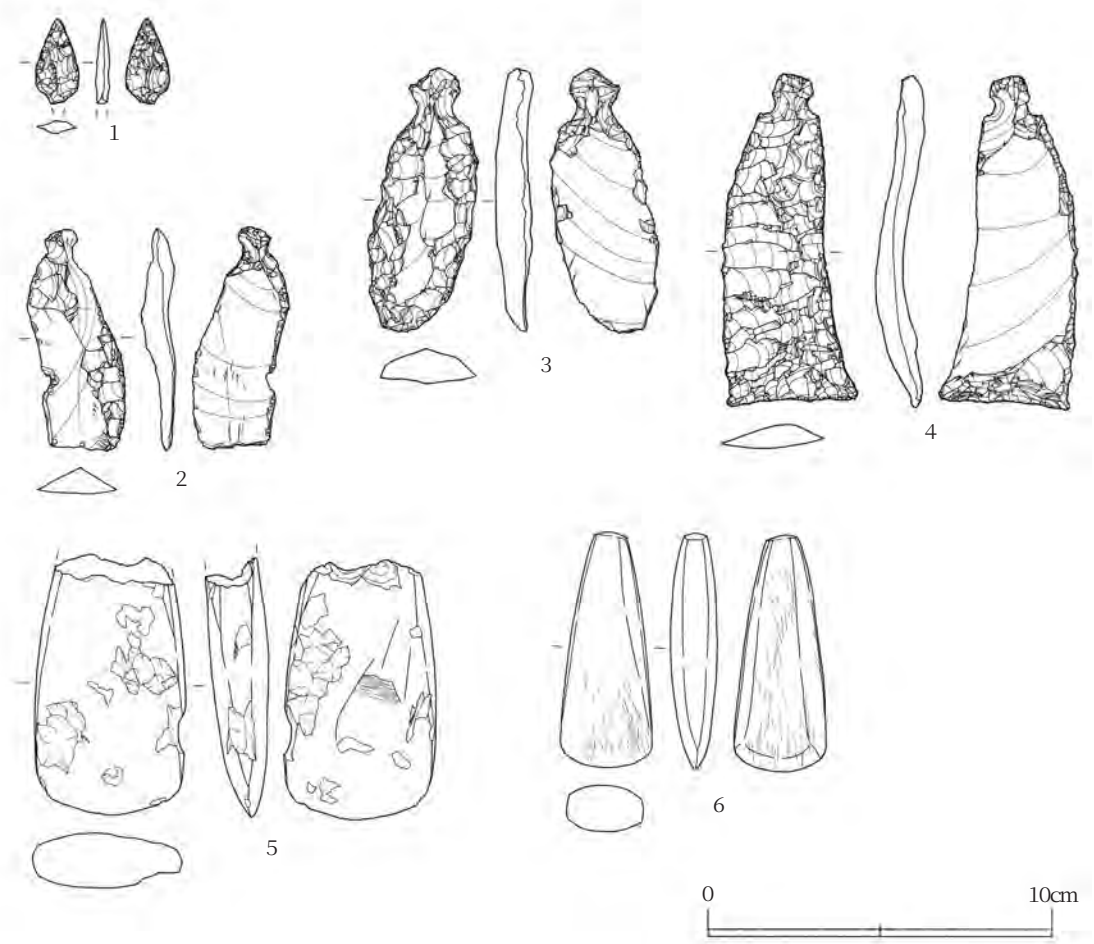
（２）　出土遺物

土器（第15図１、図版49）

ＬＲ原体の縦位回転による文様が施された縄文土器の胴部である。内面には、磨き調整が施されている。やや施文が粗く、節も小さいが、縄文時代中期後葉の土器とみられる。

石器（第16図１～６、図版49）

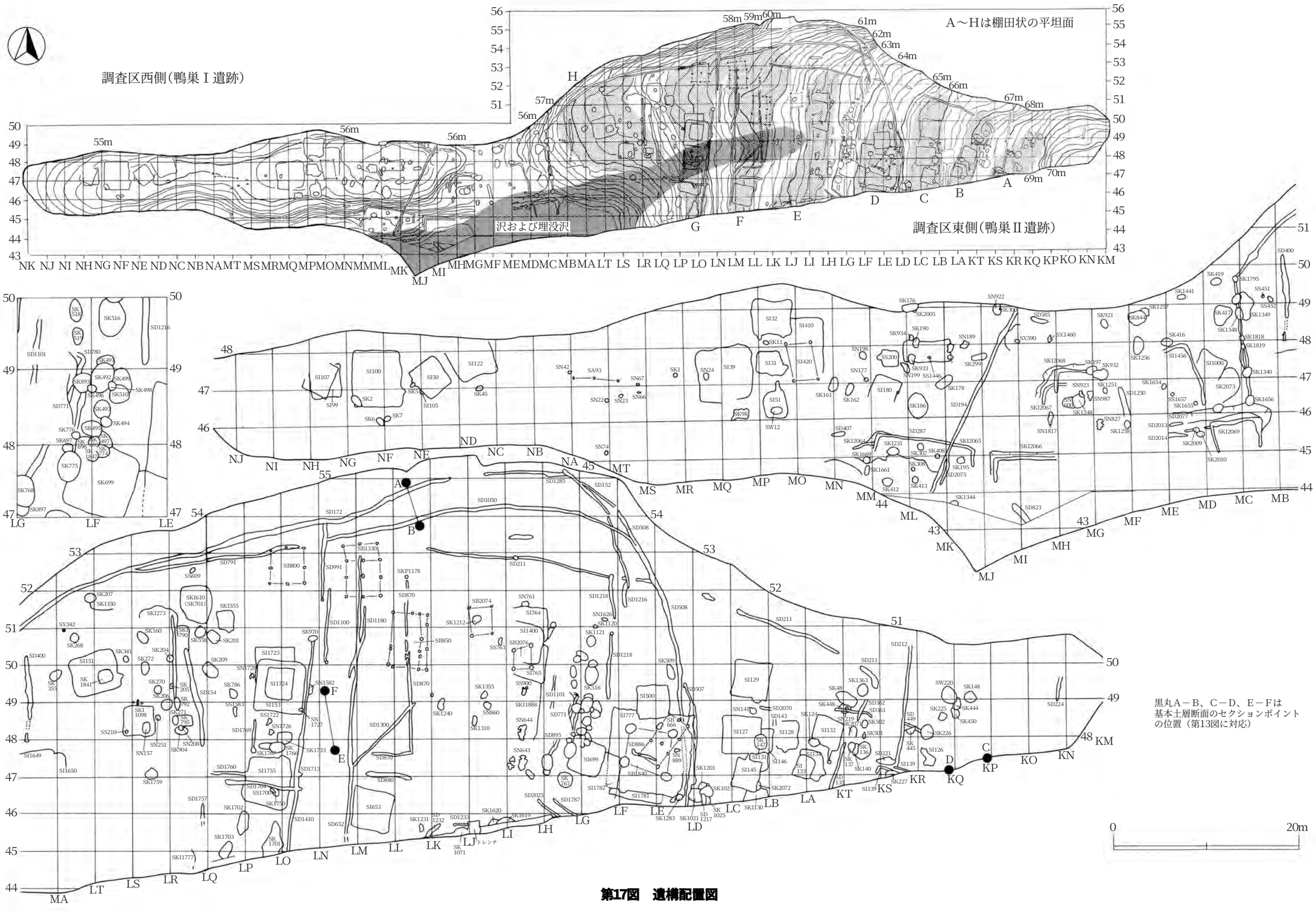
１は、両面調整が施された凸基有茎鏃である。２～４は石匙である。全て縦長剥片を素材としている。２は粗雑なつくりで刃部の調整は右側縁が中心である。３・４は入念な細部調整が施されている。刃部の角度は、３が急で４が緩やかである。５、６は磨製石斧である。５は基部を欠いているが、その他にも全体に渡って損傷を受けている。６は小型で厚手の磨製石斧で両面に擦痕がみられる。



第16図　縄文時代の出土遺物

第５表　縄文時代石器一覧

挿図番号	図版番号	出土位置	器　種	層位	長さ	幅	厚さ	重量	石　質
第16図１	49	ＬM53	石鏃	不明	2.5㎝	1.2㎝	0.4㎝	0.6ｇ	珪質頁岩
第16図２	49	ＬＪ48	石匙	Ⅳ	6.5㎝	2.8㎝	1.0㎝	10.3ｇ	珪質頁岩
第16図３	49	確認調査	石匙	不明	7.7㎝	3.2㎝	1.1㎝	24.4ｇ	珪質頁岩
第16図４	49	確認調査	石匙	不明	9.7㎝	4.0㎝	1.4㎝	25.7ｇ	珪質頁岩
第16図５	49	ＬＳ49	石斧	Ⅱ	6.9㎝	2.7㎝	1.4㎝	37.5ｇ	変質砂質凝灰岩？
第16図６	49	ＬＴ52	石斧	不明	（7.6㎝）	（4.4㎝）	（1.9㎝）	（96.6ｇ）	不明


調査区西側（鴨巣Ⅰ遺跡）
A～Hは棚田状の平坦面
調査区東側（鴨巣Ⅱ遺跡）
沢および埋没沢
55m
56m
57m
58m
59m
60m
61m
62m
63m
64m
65m
66m
67m
68m
69m
70m
A
B
C
D
E
F
G
H
黒丸A－B、C－D、E－Fは
基本土層断面のセクションポイント
の位置（第13図に対応）
0
20m

第17図　遺構配置図

第３節　平安時代、中世、近世の遺構と遺物

検出された中近世の遺構・遺物は僅かで、ここで取り上げるのは平安時代の遺構・遺物がほとんどである。特に断りのない限り、遺構遺物の所属時期は平安時代である。

平安時代の遺構には、竪穴住居跡、竪穴状遺構、掘立柱建物跡、土坑、焼土遺構、製鉄炉、炭焼き遺構、溝状遺構、柵列、性格不明遺構、柱穴様ピットなどがある。

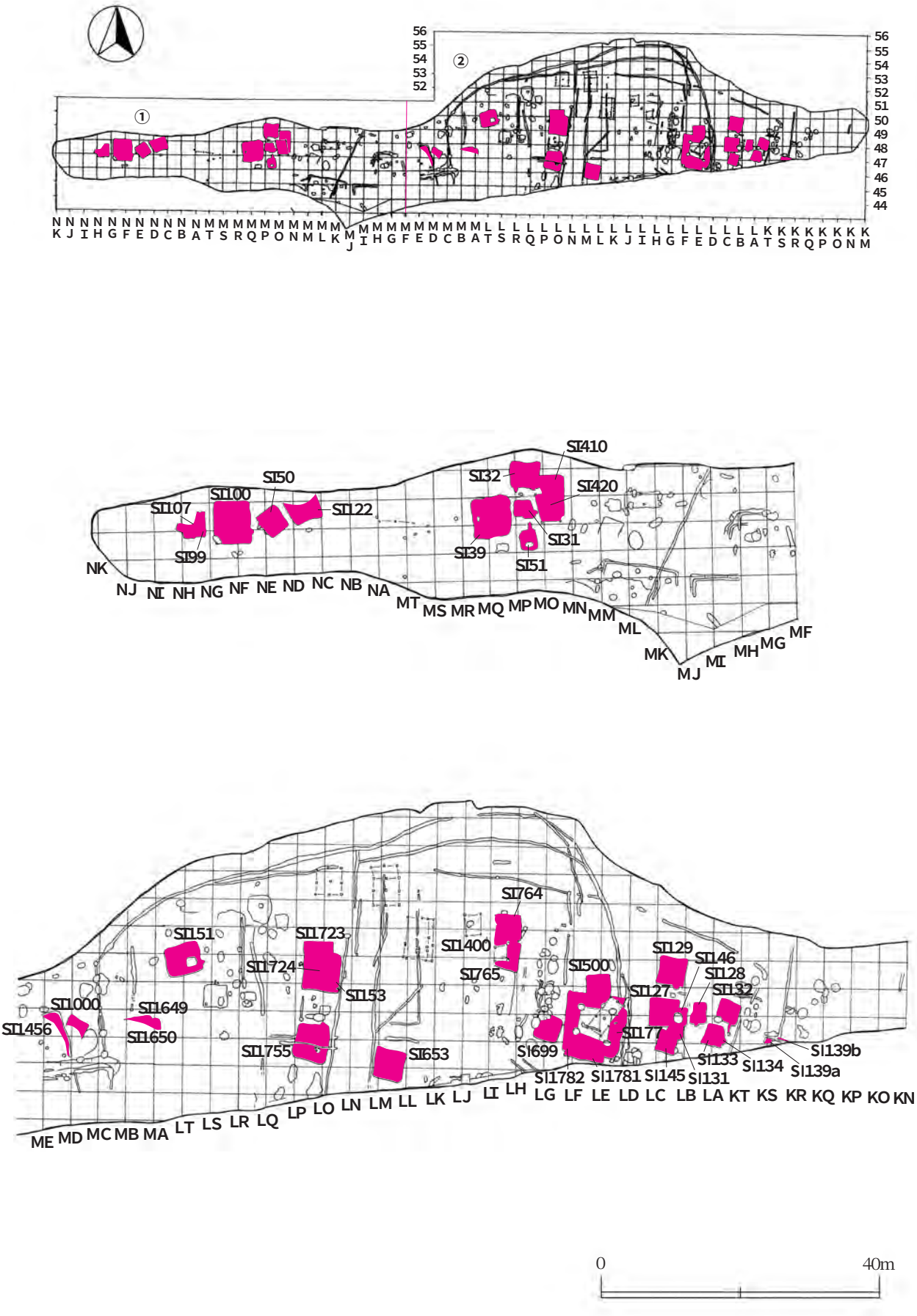
１　竪穴住居跡

竪穴状の掘り込みをもち、カマドとみられる施設が備わった遺構を竪穴住居跡とした。重複による破壊や調査区外に広がることによって全容が明らかにならなかったものに対しては、柱穴や床面のしまり具合等から竪穴住居跡と認定したものもある。

第６表　竪穴住居の立地・平面形・軸方向

	遺構名	番号	地　　勢	平面形	カマドが付設される壁	カマドを基準とした住居の軸方向	軸方向
1	ＳＩ	31	調査区西側平坦面	隅丸方形	東壁	Ｎ－90°－Ｅ	北－南
2	ＳＩ	32	調査区西側平坦面	方形	南壁	Ｎ－178°－Ｅ	北－南
3	ＳＩ	39	調査区西側平坦面	隅丸方形	東壁か南壁	Ｎ－89°－Ｅ	北－南
4	ＳＩ	50	調査区西側平坦面	隅丸方形	西(南西)壁	Ｎ－129°－Ｗ	北東－南西
5	ＳＩ	51	調査区西側平坦面	隅丸方形	北壁	Ｎ－２°－Ｅ	北－南
6	ＳＩ	99	調査区西側平坦面	隅丸方形	東壁	Ｎ－85°－Ｅ	北－南
7	ＳＩ	100	調査区西側平坦面	方形	東壁	Ｎ－86°－Ｅ	北－南
8	ＳＩ	107	調査区西側平坦面	方形	東(南西)壁	Ｎ－110°－Ｗ	北東－南西
9	ＳＩ	122	調査区西側平坦面	方形	西壁	Ｎ－115°－Ｗ	北西－南東
10	ＳＩ	126	Ａ面	不明	(北西壁)	不明	北東－南西
11	ＳＩ	127	Ｃ面	方形	南壁	Ｎ－173.５°－Ｗ	北－南
12	ＳＩ	129	Ｃ面	方形	南壁	Ｎ－167°－Ｗ	北北東－南南西
13	ＳＩ	131	Ｂ面の縁からＣ面に至る斜面	方形～隅丸方形	不明	不明	北－南
14	ＳＩ	132	Ｂ面	方形	南(南西)壁	Ｎ－162.５°－Ｗ	北東－南西
15	ＳＩ	133	Ｂ面の西縁付近	方形～隅丸方形	東(南東)壁	Ｎ－106.５°－Ｅ	北東－南西
16	ＳＩ	134	Ｂ面	方形～隅丸方形	東(南東)壁	Ｎ－100°－Ｅ	北東－南西
17	ＳＩ	139	Ａ面	方形か隅丸方形	不明	不明	北北東－南南西
18	ＳＩ	145	Ｃ面	方形	北壁	Ｎ－14°－Ｅ	北北東－南南西
19	ＳＩ	146	Ｃ面	方形	不明	不明	北北東－南南西
20	ＳＩ	151	Ｈ面	方形	東	Ｎ－79°－Ｅ	東北東－西南西
21	ＳＩ	153	Ｇ面	隅丸方形	南壁	Ｎ－171°－Ｗ	北北東－南南西
22	ＳＩ	410	調査区西側平坦面	(長)方形	東壁	Ｎ－92°－Ｅ	北－南
23	ＳＩ	420	調査区西側平坦面	(長)方形	南壁	Ｎ－172.５°－Ｅ	北－南
24	ＳＩ	500	Ｄ面	方形	南壁	Ｎ－174.５°－Ｅ	北－南
25	ＳＩ	653	Ｆ面	方形	南壁	Ｎ－165°－Ｗ	北北東－南南西
26	ＳＩ	699	Ｄ面からＥ面にかけて	方形	西壁	Ｎ－70.５°－Ｗ(西壁を東壁と同じ角度にした場合)	北東－南西
27	ＳＩ	764	Ｅ面	方形	(新)南壁 (古)東	(古)Ｎ－87°－Ｅ、(新)Ｎ－173.５－Ｅ (Ｐ12－Ｐ５ラインを壁とした場合)。	北－南
28	ＳＩ	765	Ｅ面	方形	不明	不明	北北東－南南西
29	ＳＩ	777	Ｄ面	方形	南壁	Ｎ－175°－Ｗ	北－南
30	ＳＩ	1000	調査区中央部斜面	(長)方形	北西壁？	不明	北東－南西
31	ＳＩ	1400	Ｅ面	方形	南壁	不明	北北東－南南西
32	ＳＩ	1456	調査区中央部斜面	(長)方形	東壁？	(Ｎ－70°－Ｅ)	北東－南西
33	ＳＩ	1649	Ｈ面	方形	不明	不明	東北東－西南西
34	ＳＩ	1650	Ｈ面	隅丸方形	不明	不明	北－南
35	ＳＩ	1723	Ｇ面	方形	南壁	Ｎ－171°－Ｗ	北北東－南南西
36	ＳＩ	1724	Ｇ面	方形	南壁	Ｎ－175°－Ｗ	北－南
37	ＳＩ	1755	Ｇ面	方形	北壁	Ｎ－８°－Ｅ	北北東－南南西
38	ＳＩ	1781	Ｄ面	方形	西	Ｎ－83°－Ｗ	北－南
39	ＳＩ	1782	Ｄ面	方形	不明	不明	北－南

※「カマドを基準にした住居の軸方向」は、カマドが付設された壁のラインに対する垂線と座標北が交差する角度を読み取った。



第18図　竪穴住居跡配置図

ＳＩ31（第19・20図、図版４・５）

位　　置：ＭＯ47グリッドを主体とし、ＭＰ47グリッドにおよぶ範囲に位置する。

規　　模：東壁長2.85m、西壁長2.88m、南壁長2.67m、北壁長2.55mである。検出面から床面までの深さは、0.2～0.3mである。

確認状況：Ⅶ層で周囲と異なる土の広がりを確認した。その後の精査により、竪穴住居跡であることが判明した。

重複遺構：ＳＫＰ17・19・79・80と重複する。本住居跡がこれらより旧い。

覆　　土：１層は地山に酷似する褐色土、２層は炭化物や有機物を由来とする黒色層、３層は焼土塊を多く含む層である。２、３層から当住居は消失家屋と判断される。１層は、礫を多く含むため、埋め戻された可能性がある。

　壁　　：ほぼ垂直に立ち上がる。

床　　面：東側と西側で段差があり、東側が10㎝ほど低い。どちらも平坦で堅くしまっている。

壁　　溝：なし。

柱　　穴：南東を除く各壁隅と南壁中央部で検出した。径は29～37㎝、床面からの深さは５～20㎝である。

カ マ ド：硬化した火床面の位置から、東壁の中央部やや南寄りに付設されていたと推測される。構築材等は確認できなかった。火床面周辺からは、土師器や礫が出土した。

出土遺物：コンテナで１／３ほどの土師器が出土した。甕が多く、坏はほとんどみられない。土師器甕破片のなかには叩き目のあるものがみられる。

備　　考：床面上から検出した暗赤褐色土や、一面に広がる厚さ４～10㎝の炭層から、焼失家屋と判断した。

ＳＩ32（第21・22・23図、図版４・５）

位　　置：ＭＯ48を主体とし、ＭＯ49、ＭＰ48・49グリッドに及ぶ範囲に位置する。

規　　模：東壁4.31m、西壁残存値3.40m（推定値4.5m）、南壁4.80m、北壁残存値2.40m（推定値5.2m）の隅丸方形である。検出面から床面までの深さは０～0.40mである。本住居跡の北側は急斜面であるため、住居の北西部は崩れて存在しない。

確認状況：Ⅶ層で周囲と異なる土の広がりを確認した。その後の精査により、竪穴住居跡であることが判明した。

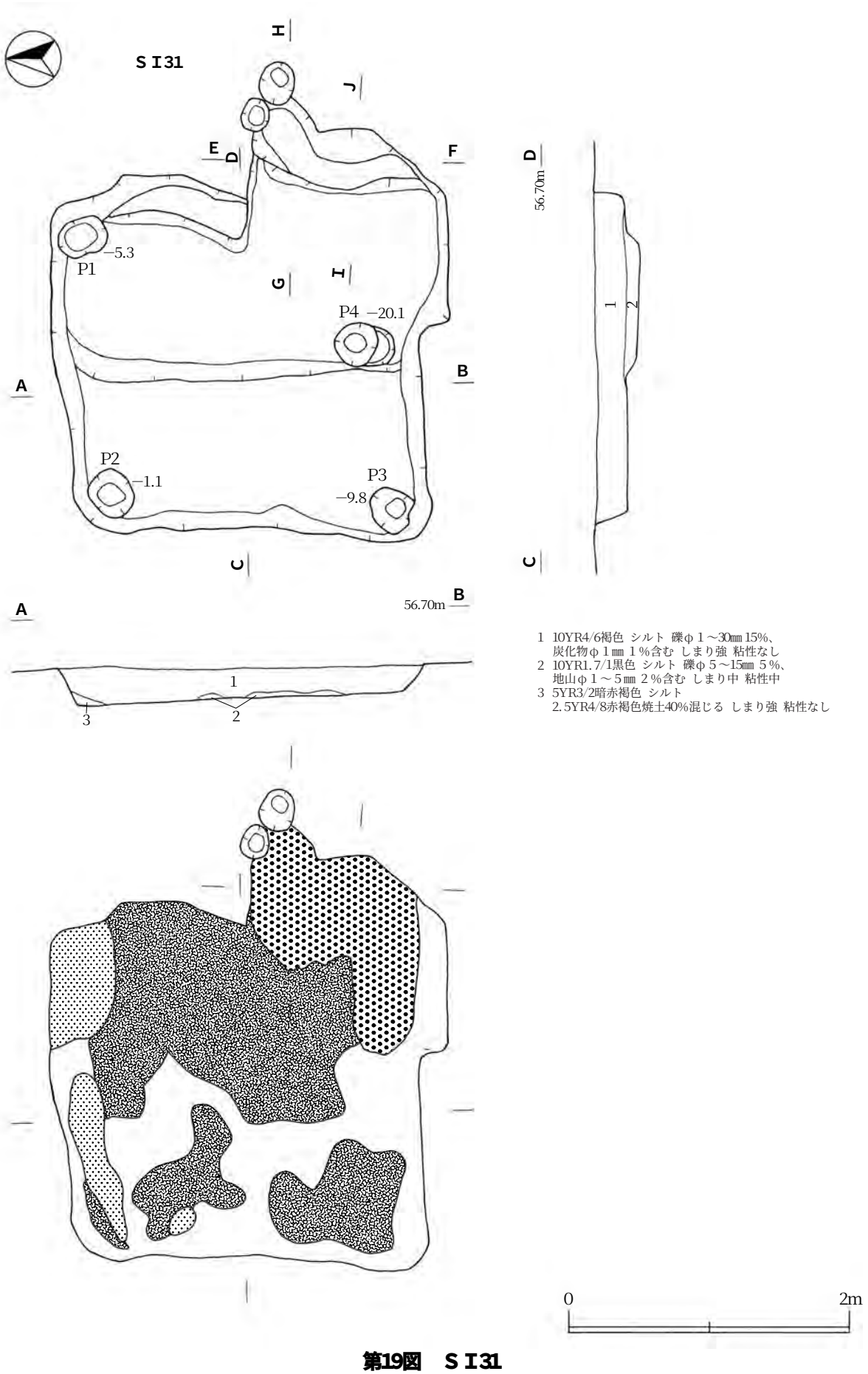
重　　複：ＳＫＰ33・34・35と重複する。本住居跡がこれらより旧い。

覆　　土：主体をとなるのは２層で床面から確認面付近まで堆積している。混入物等が多く、壁際には三角堆積状の土層も確認できないことから、比較的短い時間で埋没したと考えられる。よって埋め戻しが行われた可能性が高いと考えられる。１層はやや濁ったような色調で、住居中央部の窪みに周囲の土が流れ込んだものと考えられる。

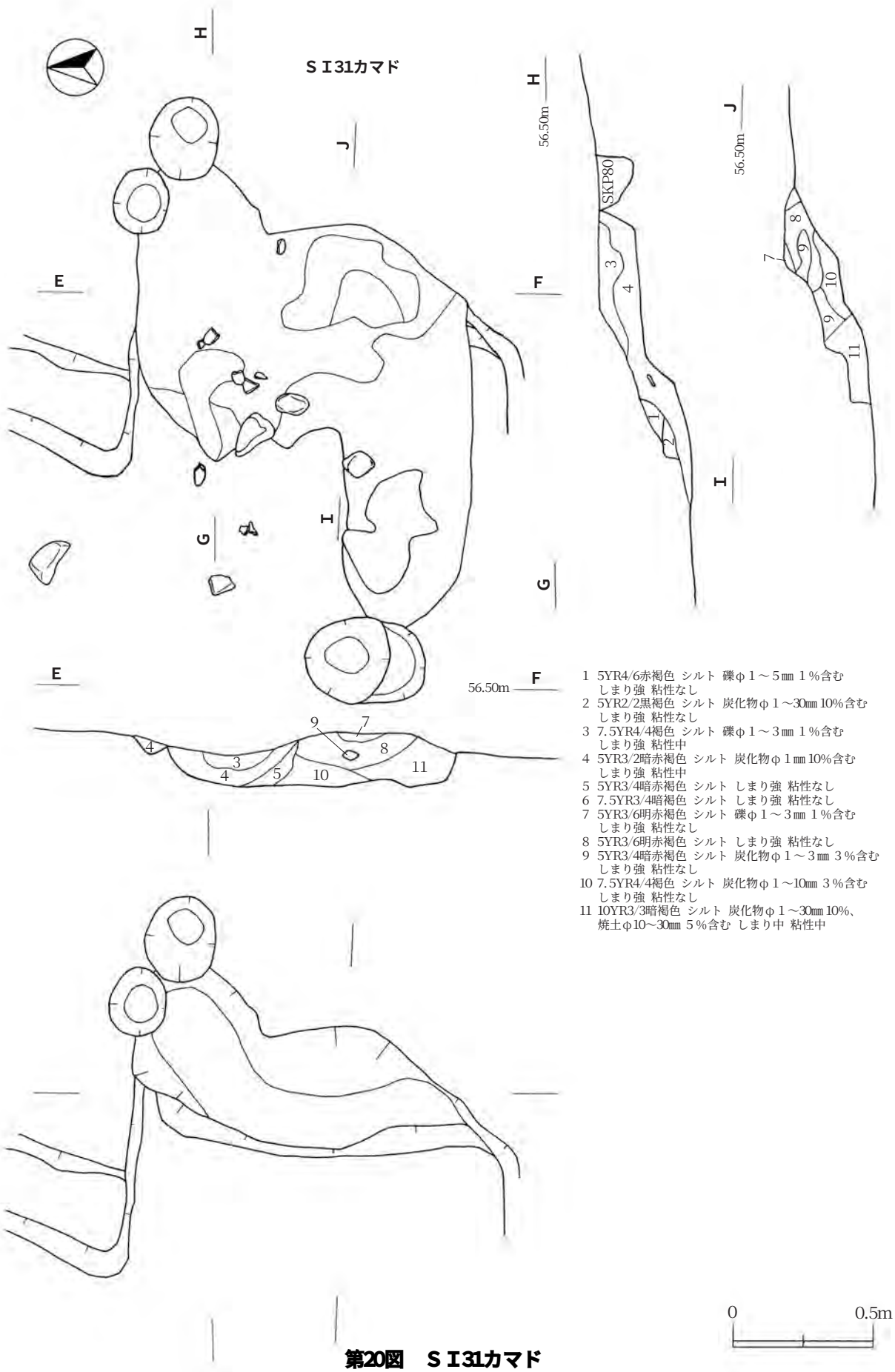
　壁　　：ほぼ垂直に立ち上がる。

床　　面：北側がやや低いが、ほぼ平坦で硬くしまっている。

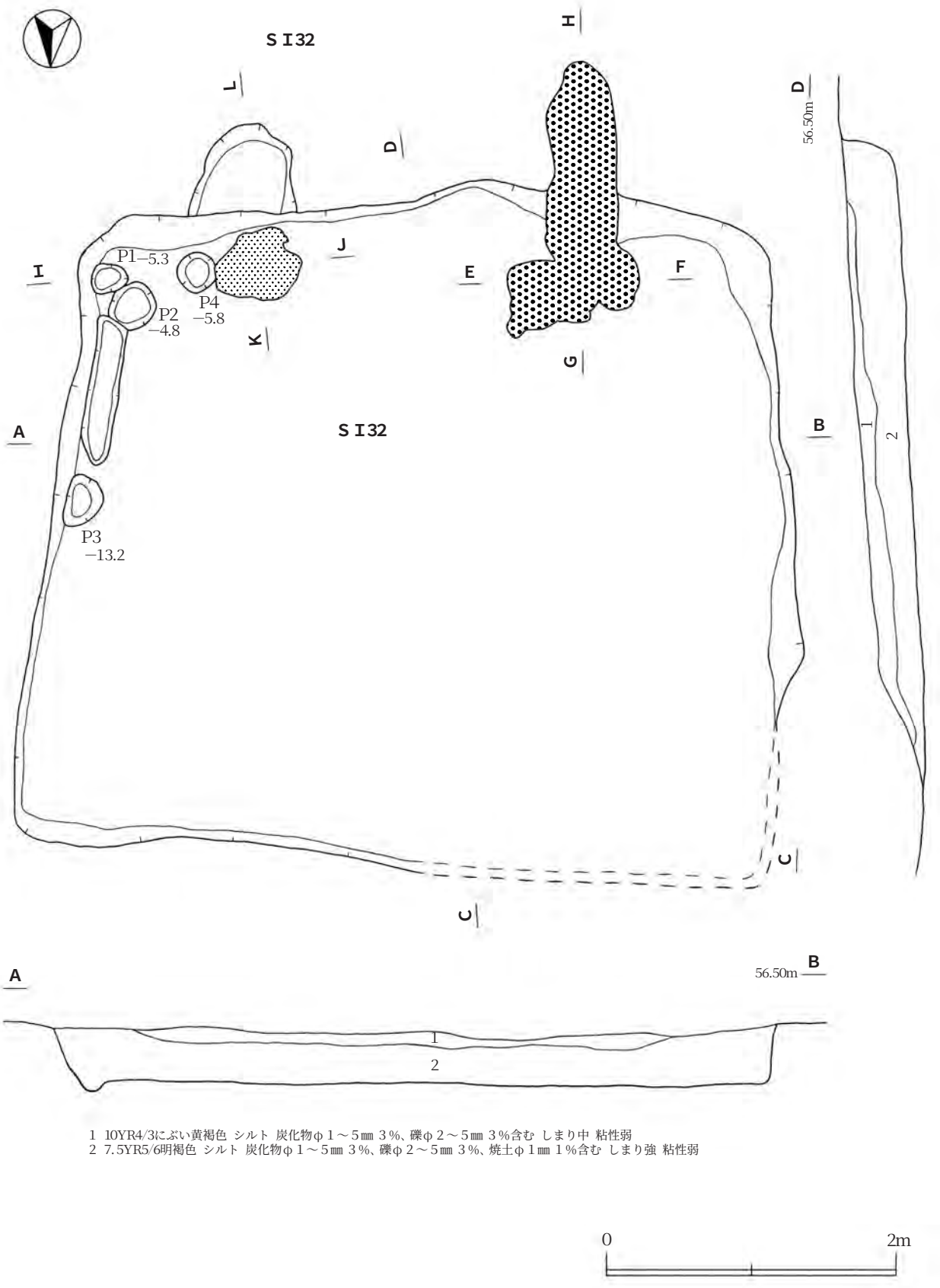
壁　　溝：長さ1.00m、幅0.10～0.21m、深さ0.03～0.11mの規模で東壁の南側にのみ存在する。


SI31
H
J
E
D
F
G
I
P1
−5.3
P4
−20.1
A
B
P2
−1.1
P3
−9.8
C
D
56.70m
1
2
C
A
56.70m
B
1
3
2
1 10YR4/6褐色 シルト 礫φ1～30㎜ 15%、
炭化物φ1㎜ 1%含む しまり強 粘性なし
2 10YR1.7/1黒色 シルト 礫φ5～15㎜ 5%、
地山φ1～5㎜ 2%含む しまり中 粘性中
3 5YR3/2暗赤褐色 シルト
2.5YR4/8赤褐色焼土40%混じる しまり強 粘性なし
0
2m

第19図　SI31

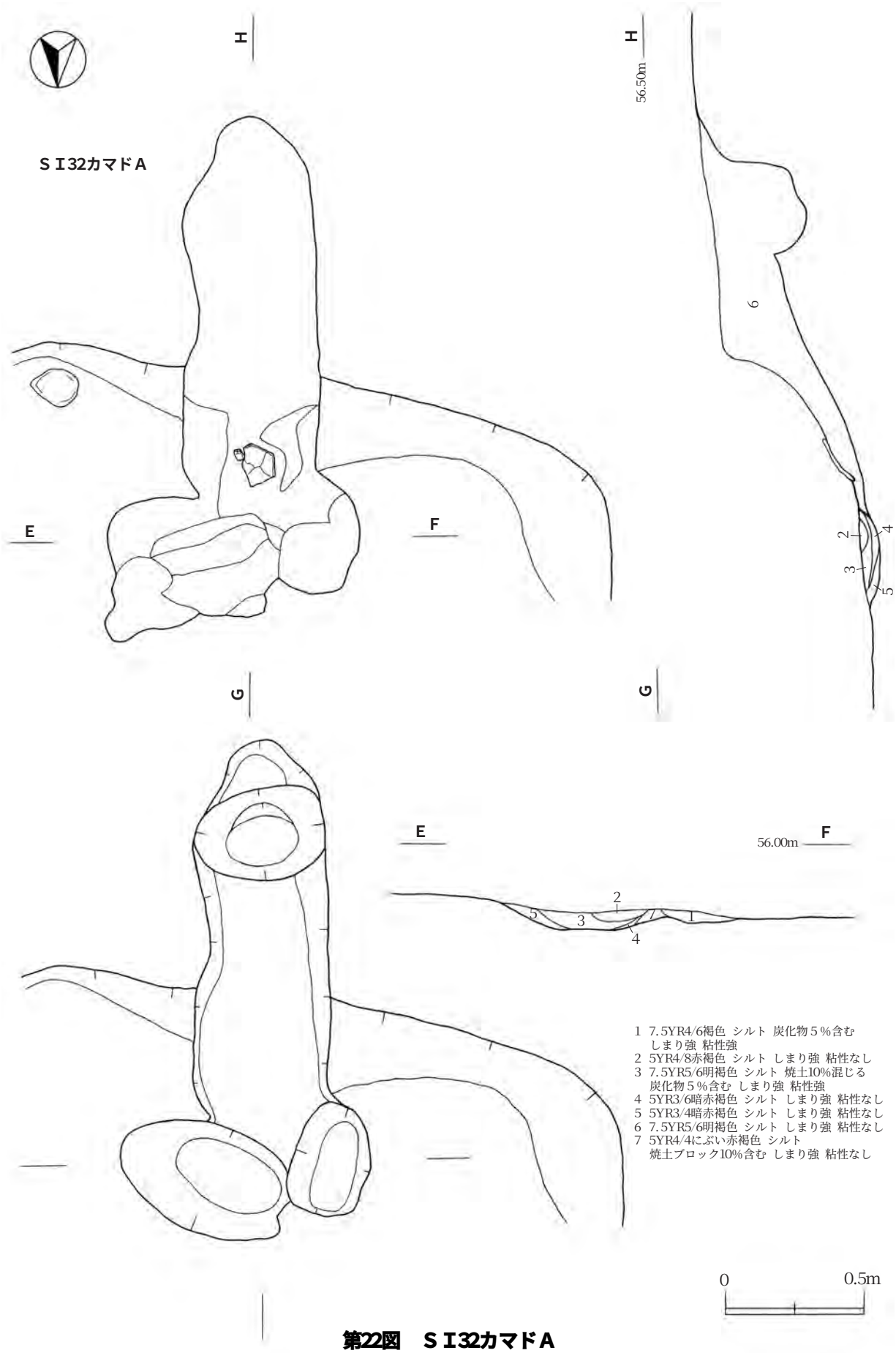


第20図　ＳＩ31カマド

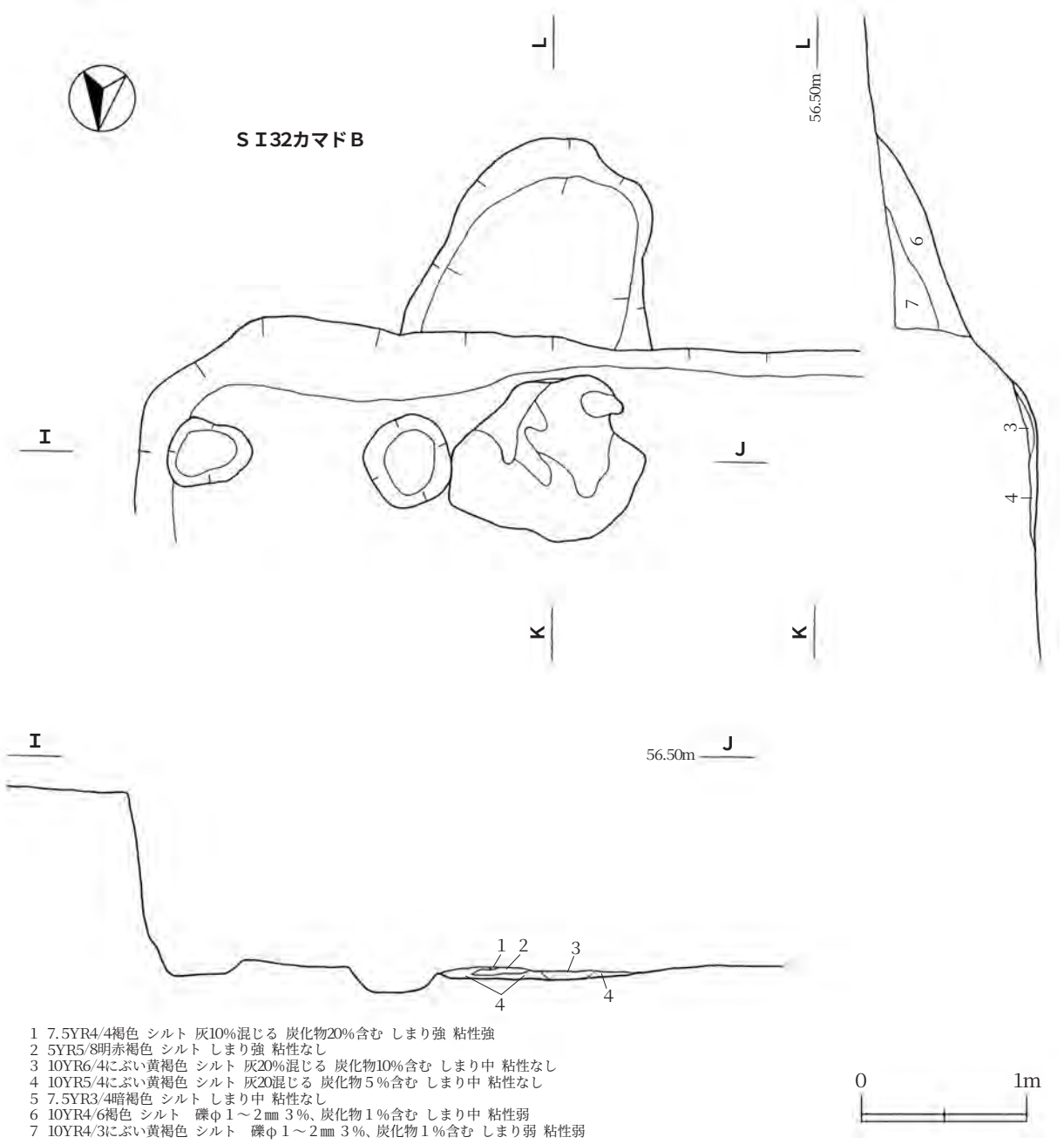


1 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 炭化物φ1～5㎜ 3%、礫φ2～5㎜ 3%含む しまり中 粘性弱
2 7.5YR5/6明褐色 シルト 炭化物φ1～5㎜ 3%、礫φ2～5㎜ 3%、焼土φ1㎜ 1%含む しまり強 粘性弱

第21図　SI32



第22図　ＳＩ32カマドＡ



第23図　ＳＩ32カマドＢ

柱　　穴：南東隅に３基、東壁中央部に１基の柱穴を検出した。径は16～36㎝、床面からの深さは５～13㎝である。

カ マ ド：火床面と煙道の位置関係から、南壁の東側と西側の２か所に付設されていたと推測される。どちらも構築材等は確認できず、火床面と煙道のみが残存している。煙道は共に緩やかに立ち上がる。西側の煙出し下からは、長軸0.46m、短軸0.39m、深さ0.11のピット状の掘り込みを確認した。２つのカマドの新旧関係は不明である。

出土遺物：土師器がコンテナで１／２ほど出土した（第156図１）。

ＳＩ39（第24図、図版４）

位　　置：ＭＰ～ＭＱ47グリッドを主体とし、ＭＰ～ＭＱ46グリッドに及ぶ範囲に位置する。

規　　模：東壁5.57ｍ、西壁5.63ｍ、南壁5.57ｍ、北壁5.91ｍ。検出面から床面までの深さは0.32ｍである。

確認状況：Ⅶ層で周囲と異なる土の広がりを確認した。その後の精査により、竪穴住居跡であることが判明した。

重複遺構：ＳＮ24、ＳＫＰ14・64・65・82・83と重複する。本住居跡がこれらより旧い。

覆　　土：住居内土坑以外は地山と酷似する褐色土１層で占められるため、一気に埋め戻しが行われた可能性が高い。

壁　　：ほぼ垂直に立ち上がる。

床　　面：ほぼ平坦で硬くしまっている。

壁　　溝：住居西半分で検出した。幅0.14～0.43ｍ、深さ0.09～0.32ｍである。

柱　　穴：16基検出したが、主柱穴とみられる柱穴の配置は不明瞭である。

カ マ ド：南東隅で検出された。残存状態は不良で、火床面のみを確認することができた。周辺から被熱した袖石と白色粘土塊が出土した。

備　　考：住居中央部から長軸（東－西）方向2.08ｍ、短軸（南－北）方向1.08ｍ、深さ0.58ｍの土坑ＳＫ07が検出された。この底面付近から多くの炭とともに、須恵器片や鉄滓が出土した。この他に住居内から６基の土坑を検出した。これら土坑と住居との関係等については不明である。

出土遺物：コンテナ１箱と１／３ほどの土師器を中心とする遺物が出土した（第156図２～４、第206図１・２）。土師器は甕がほとんどである。

ＳＩ50（第25・26・27・28図、巻頭図版４、図版３・４）

位　　置：ＮＤ47グリッドを主体とし、ＮＤ46、ＮＥ47グリッドに及ぶ範囲に位置する。

規　　模：北東壁長3.77ｍ、北西壁長3.55ｍ、南東壁長3.37ｍ、南西壁長3.91ｍ。確認面から床面までの深さは、0.13～0.27ｍである。

確認状態：Ⅶ層で周囲と異なる土の広がりを確認した。その後の精査により、竪穴住居跡であることが判明した。

重複遺構：ＳＮ105と重複し本遺構が新しい。

覆　　土：１層は周囲の地山土（当時の地表土でもある）に酷似するため、竪穴廃絶後に周囲から流れ込んだ自然堆積層の可能性がある。４層、６層は焼土が主体となる層で、土葺の屋根が火災の際に崩落し焼土化したものか、消火のため投入した土が焼土化したものかのいずれかの可能性が考えられる。ＳＫ01には暗褐色土を基本に炭化物と焼土が混入する。

壁　　：ほぼ垂直に立ち上がる。

床　　面：ほぼ平坦で堅くしまっている。

壁　　溝：一部途切れる部分があるものの南壁を除く３壁で確認した。床面からの深さは0.06～0.09ｍである。

柱　　穴：各壁隅部及び北西壁中央、北東壁中央やや北寄り、カマド北西側など８基検出した。

カ マ ド：南西壁の中央よりやや南側に付設され、崩壊した状態で確認した。壁際に浅い掘り込みが見られるが、これは煙道と思われ、やや急に立ち上がっている。袖部は袖石を芯材として、粘土等を貼り付けており、左袖は内側から熱を受けた状態が確認できた。右袖は芯材の石のみ確認できた。火床面付近で柱状の石が出土しているが、カマドの中軸線上にあるため、支脚として使用された可能性が考えられる。

出土遺物：土師器杯12点、土師器壺２点、土師器甕１点、須恵器壺２点（接合済み）、木製椀（炭化）、砥石の他、土師器がコンテナ１箱程度、その他炭化材などが出土した（第156図５～10、157図～159図、図版37・38）。

南東壁際中央付近の床面には1.0m×0.3mの板材が敷かれ、その上からほぼ完形の土師器13個体と木製椀が出土した。木製椀は損傷が激しく調査時には１個体と見られていたが、業務委託した保存処理の結果、２個体の復元に成功した。委託先からは、復元できなかった残片の部位や量から、さらに１個体（計３個体）の椀があった可能性が高いとの報告を受けている。このため、３個体の椀を積み重ねて置いていたと推測される。

カマド付近からは多くの土師器片が出土し、南東隅部付近からは完形の土師器壺が伏せた状態で出土した。須恵器に関しては出土位置の記録が無いが、比較的高い位置での出土が多かった。

炭化材の多くは北側から出土した。板目が北東－南西のものは、床板であった可能性が考えられる。また、壁溝に壁板が刺さった状態のまま炭化したものも見つかっているが。

備　　考：西壁には張り出し部分があり、壁溝はそこで途切れた状態にある。出入り口の可能性がある。カマド北東に、長軸（北西－南東0.67m）、短軸（北東－南西0.60m）、床面からの深さ0.13mの土坑を１基検出した。

須恵器片は、その多くが覆土から出土しているが、焼け飛びがみられることから、床面出土土器とは同時期のものとみられる。

ＳＩ51（第29・30図、図版４・５）

位　　置：MO47グリッドに位置する。

規　　模：北壁長2.25m、南壁長2.60m、東壁長2.94m、西壁長2.81m、確認面から床面までの深さは0.72mである。

確認状態：Ⅶ層で周囲と異なる土の広がりを確認した。その後の精査により、竪穴住居跡であることが判明した。

重複遺構：なし。

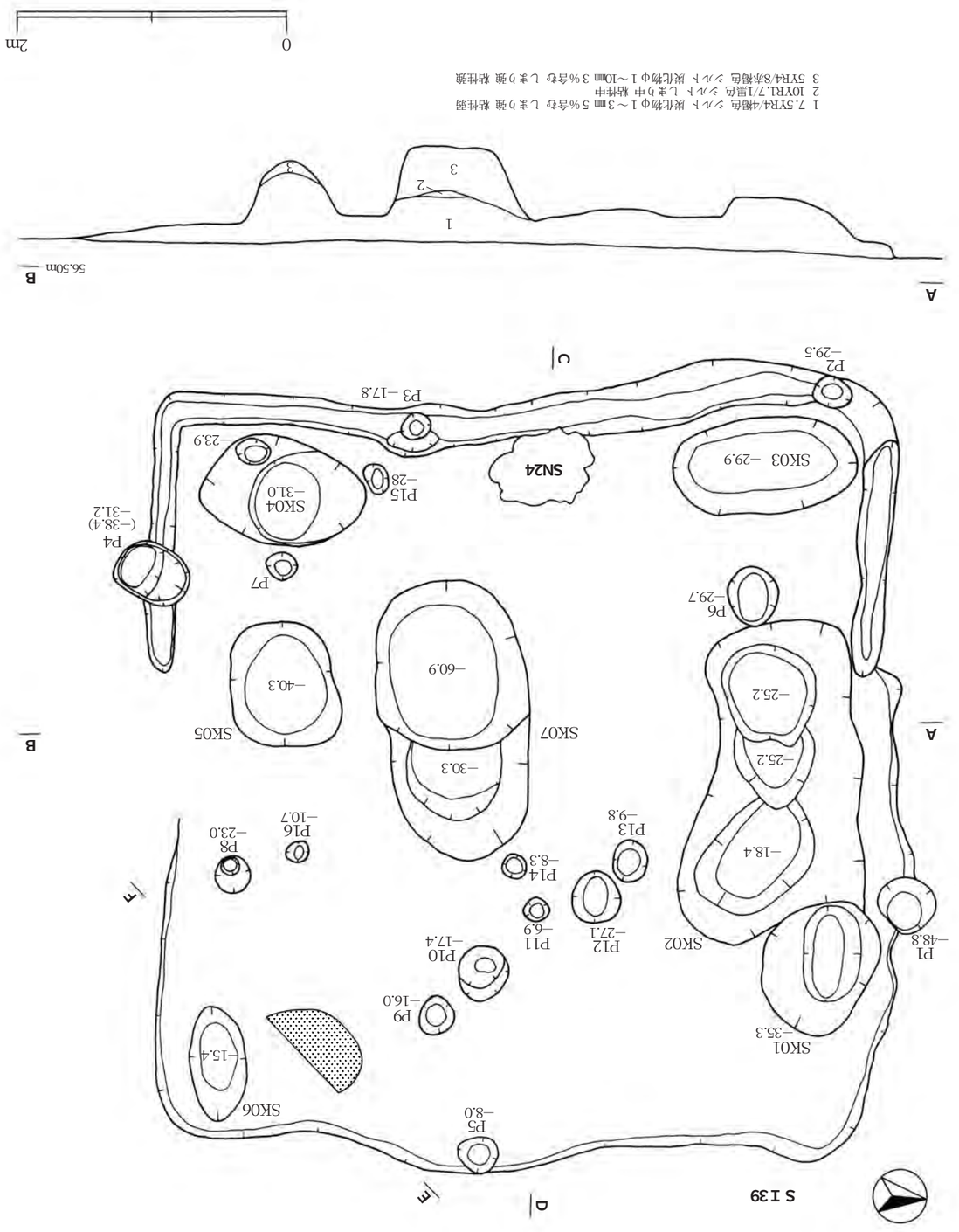
覆　　土：主体を占める２、３層は地山に酷似した土である。３層は焼土ブロックや炭化物を多く含むため、当時の生活面付近の土を用いて一気に埋め戻しを行った可能性がある。

壁　　：ほぼ垂直に立ち上がる。

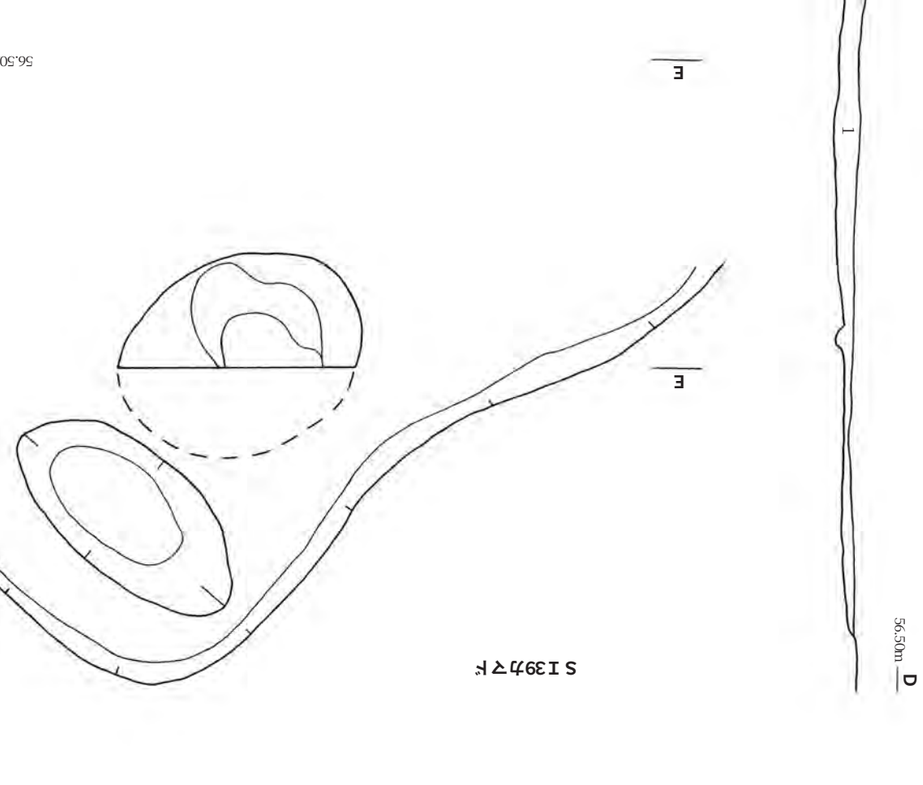
床　　面：ほぼ平坦である。

壁　　溝：床面からの深さは0.14mで、東壁の一部で検出した。その他の部分については不明である。

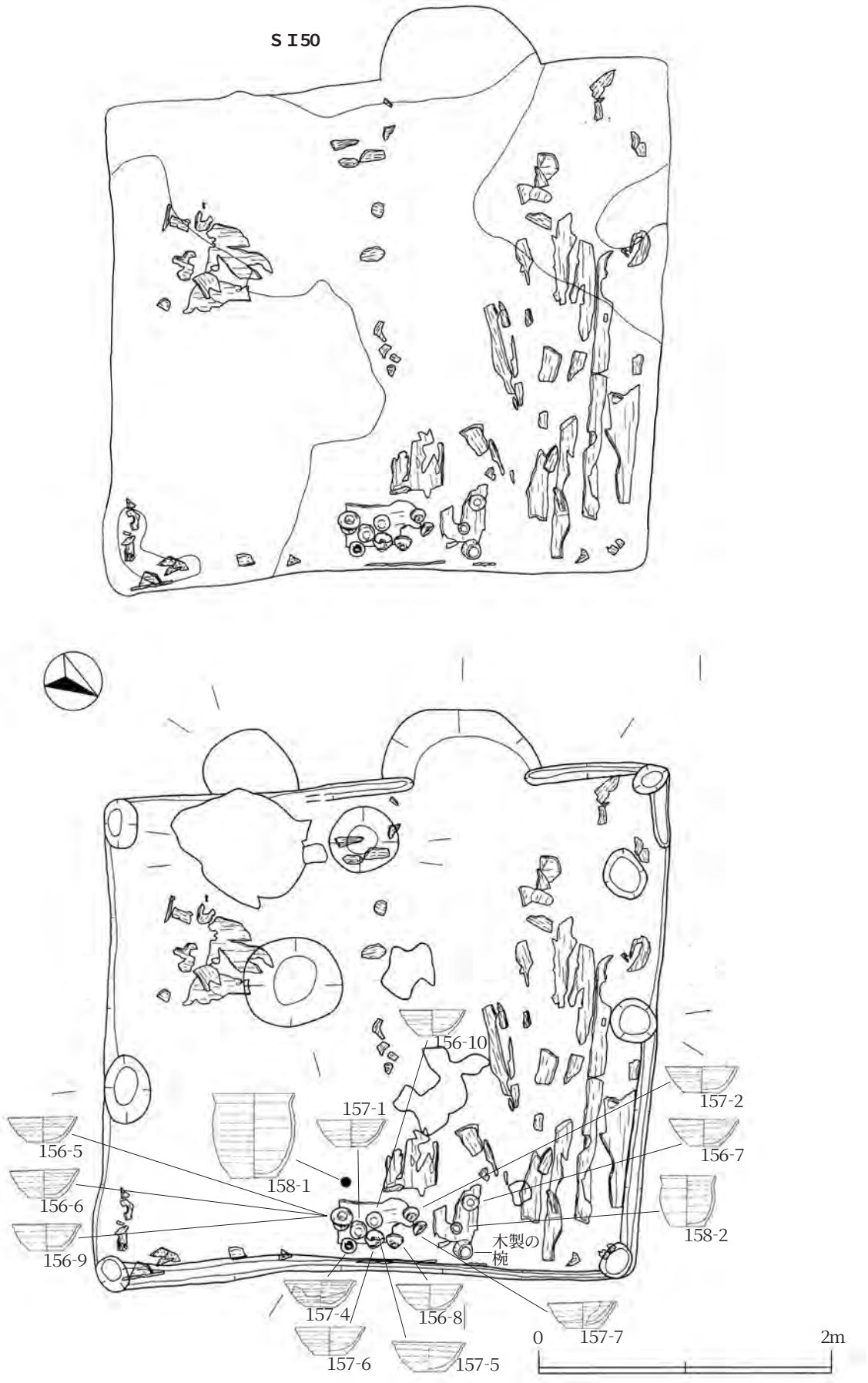
第24図　ＳＩ39



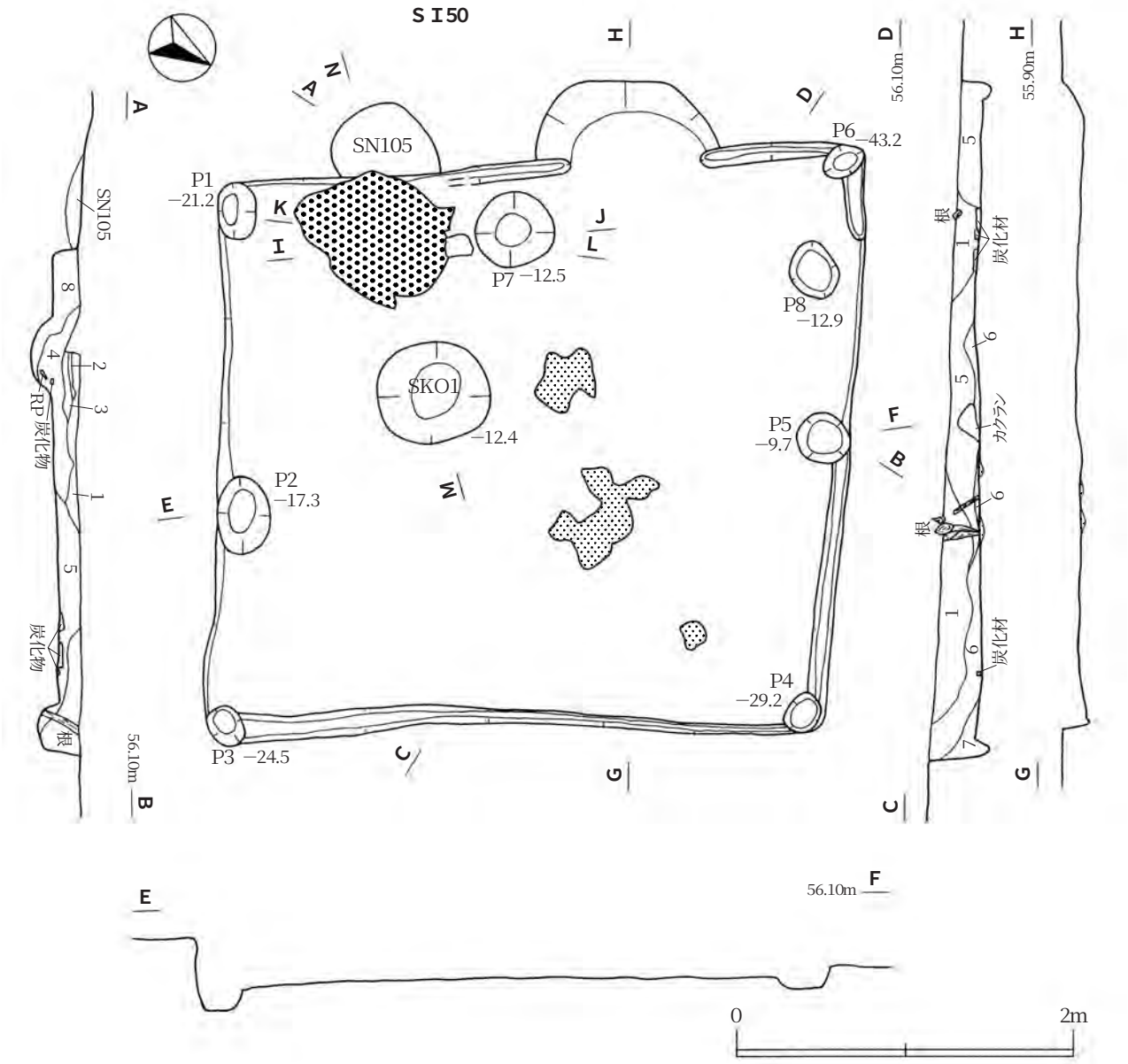
1 7.5YR4/4褐色 シルト 炭化物φ1～3㎜ 5%含む しまり強 粘性弱
2 10YR1.7/1黒色 シルト しまり中 粘性中
3 5YR4/8赤褐色 シルト 炭化物φ1～10㎜ 3%含む しまり強 粘性強



1 5YR5/8明赤褐色 シルト しまり強 粘性なし
2 2.5YR4/8赤褐色 シルト しまり強 粘性なし
3 2.5YR3/6暗赤褐色 シルト しまり強 粘性なし
4 5YR5/8明赤褐色 シルト しまり強 粘性弱



第25図　ＳＩ50焼土・炭化材分布図



1 7.5YR5/6褐色 シルト 焼土１%混じる 炭化物１%含む しまり強 粘性弱（ソフトローム状）
2 7.5YR4/6褐色 シルト しまり強 粘性弱（地山土）
3 7.5YR4/4褐色 シルト 焼土１%混じる しまり強 粘性中
4 7.5YR3/4暗褐色 シルト 5YR4/8赤褐色焼土ブロック50%含む しまり強 粘性弱
5 7.5YR3/4暗褐色 シルト 炭化物１%、焼土ブロック１%含む しまり強 粘性弱
6 5YR4/4にぶい赤褐色 シルト しまり強 粘性弱
7 7.5YR3/4暗褐色 シルト 焼土１%混じる しまり中 粘性中
8 7.5YR5/6明褐色 シルト しまり中 粘性中

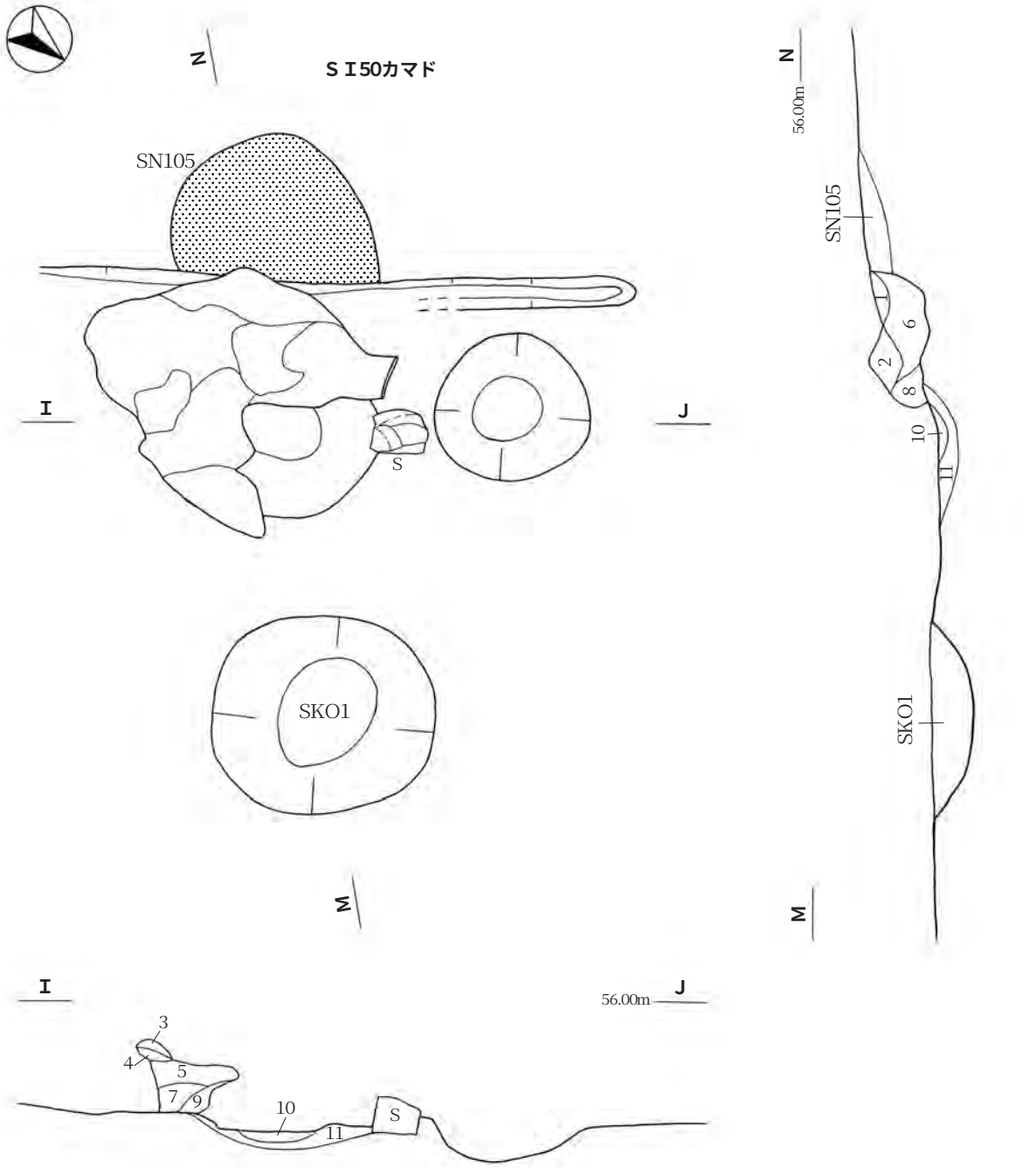
SI50−SK1
1 10YR3/3暗褐色 シルト 焼土５%混じる 炭化物３%含む しまり強 粘性中

第26図　SI50

柱　　穴：柱穴状のピットが３基検出されたが、規則的な配置はみられない。

カ マ ド：北壁の東寄りに付設されている。煙道は、やや急に立ち上がっている。全長1.64m（煙道部1.30m、燃焼部0.34m）の大きさで、壁に直交している。火床面は、２つの掘り込みの覆土に形成されている。また火床面と掘り込みの間には、炭化物を大量に含む層があるため、カマドの構築や改築等にあたって何らかの作業が行われていたと考えられる。

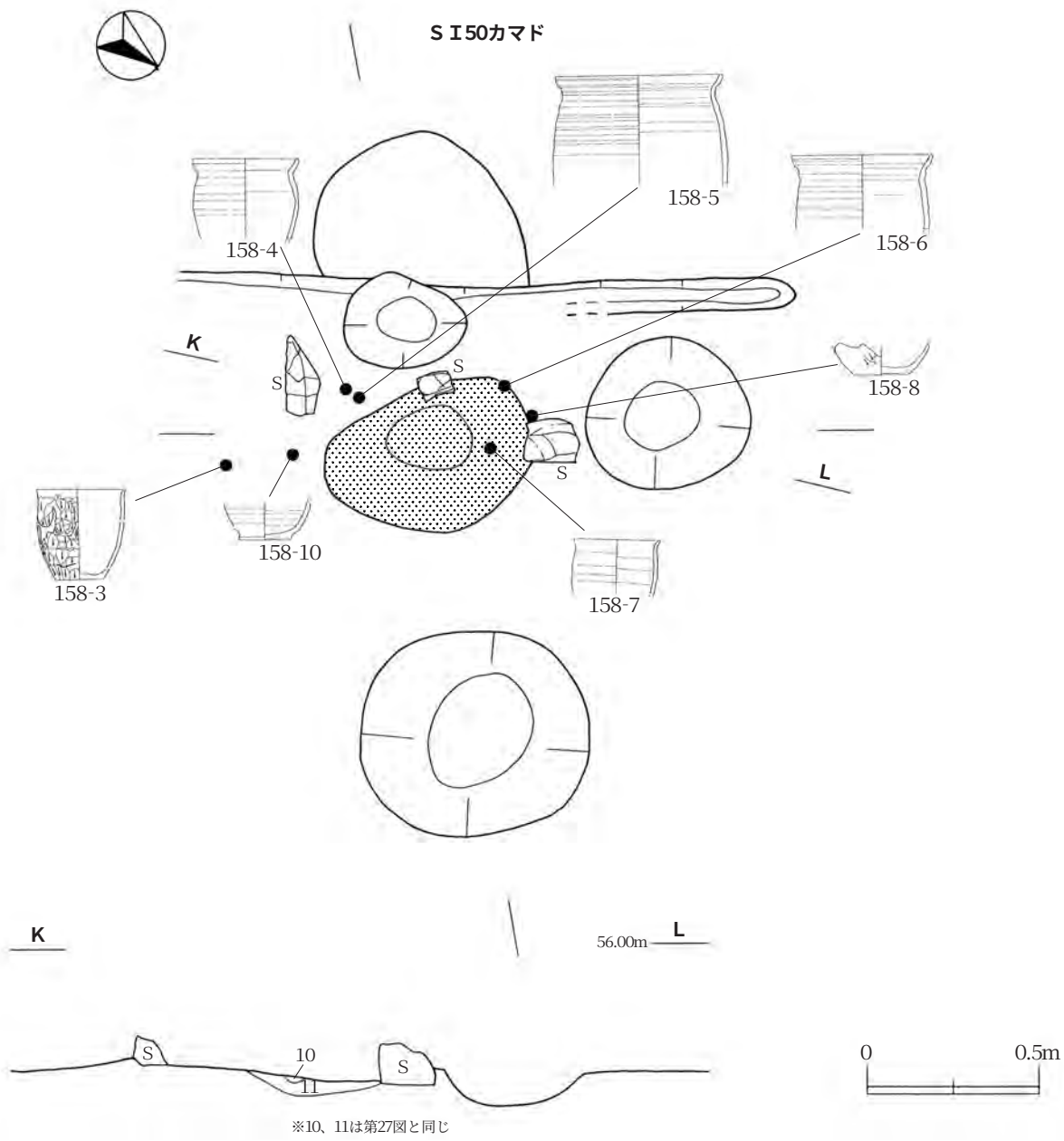
関連施設：ＳＫ01覆土は、竪穴覆土３層と同じ堆積土であるため、ＳＫ01は当住居に伴うものと考え



1 7.5YR5/6明褐色 シルト 炭化物20%含む しまり中 粘性弱
2 10YR2/2黒褐色 シルト 5YR3/4明赤褐色30%混じる しまり強 粘性弱
3 10YR3/1黒褐色 シルト しまり強 粘性なし
4 5YR5/8明赤褐色 シルト しまり強 粘性なし
5 10YR3/4暗褐色 シルト しまり強 粘性弱
6 7.5YR5/6明褐色 シルト しまり中 粘性中
7 5YR3/6暗赤褐色 シルト しまり強 粘性なし
8 5YR4/8赤褐色 シルト しまり強 粘性なし
9 2.5YR5/8明褐色 シルト しまり強 粘性なし
10 2.5YR5/8明赤褐色 シルト しまり強 粘性なし
11 5YR4/6赤褐色 シルト しまり強 粘性弱

0　0.5m

第27図　ＳＩ50カマド



第28図　ＳＩ50カマド

られる。

出土遺物：土師器を中心とした遺物が、コンテナ１箱ほど出土した（第160図１）。

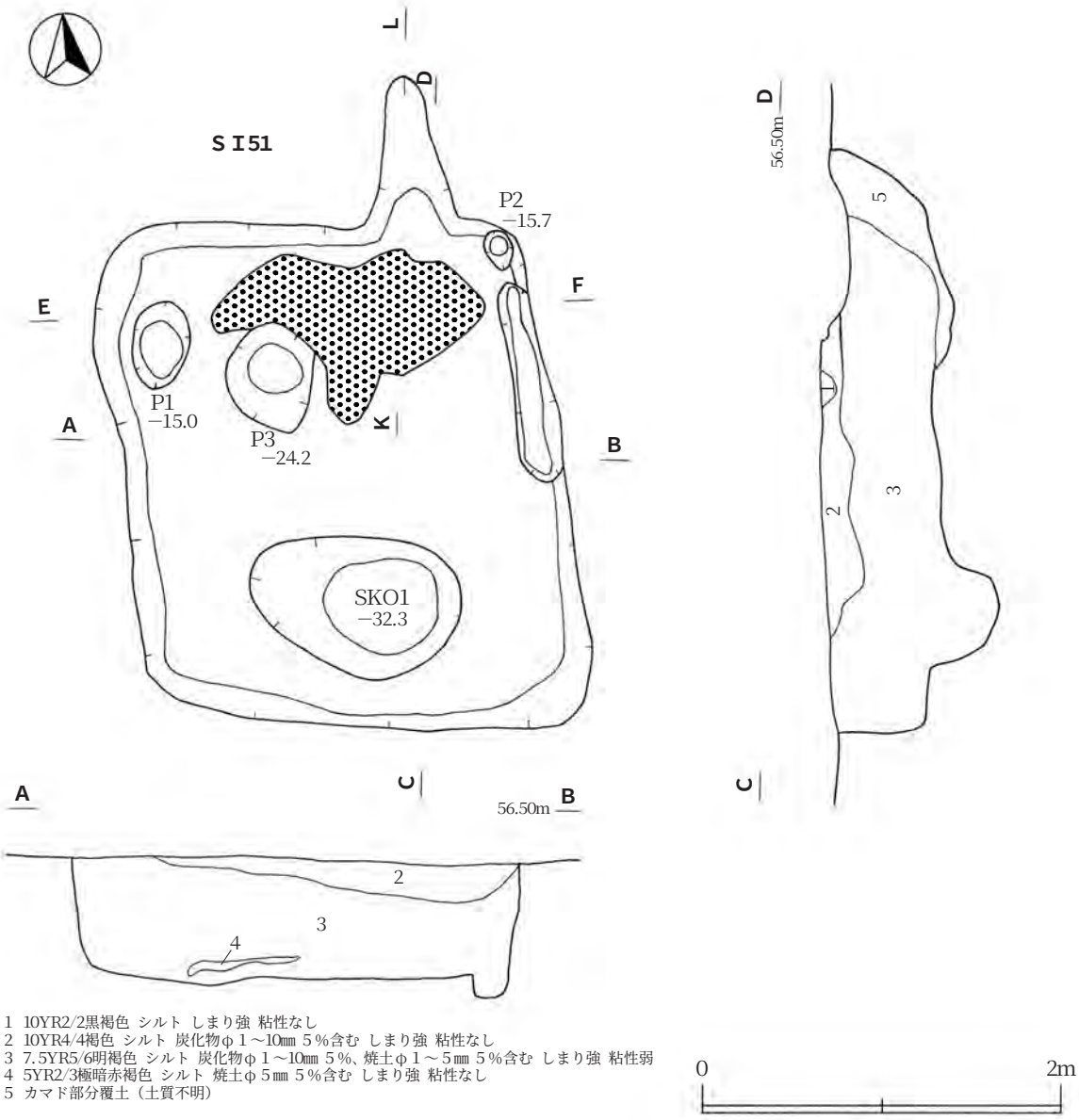
そ の 他：中央南側に長軸1.20m、短軸0.80m、深さ0.38mの土坑を検出した。

ＳＩ99（第31・32図、図版５）

位　　置：ＮＧ47・46グリッドに位置する。

規　　模：北壁長（0.65m）、南壁長3.28m、東壁長3.55m、西壁長（2.63m）、確認面から床面までの深さは、0.02～0.19mである。

確認状態：Ⅶ層で周囲と異なる土の広がりを確認した。その後の精査により、竪穴住居跡であること



第29図　ＳＩ51

が判明した。

重複遺構：ＳＩ107と重複し、本遺構が新しい。

覆　　土：覆土全体が地山と酷似する褐色シルト１層で占められる。壁の立ち上がり付近に三角堆積状の土層もみられないことから比較的短期間で埋没したとみられる。この状況から、一気に埋め戻しが行われた可能性が高いと考えられる。カマド部分は天井部が火床面上に落下したものと思われる堆積状態を示す。煙道天井部は、カマド崩落後に崩落したとみられる。

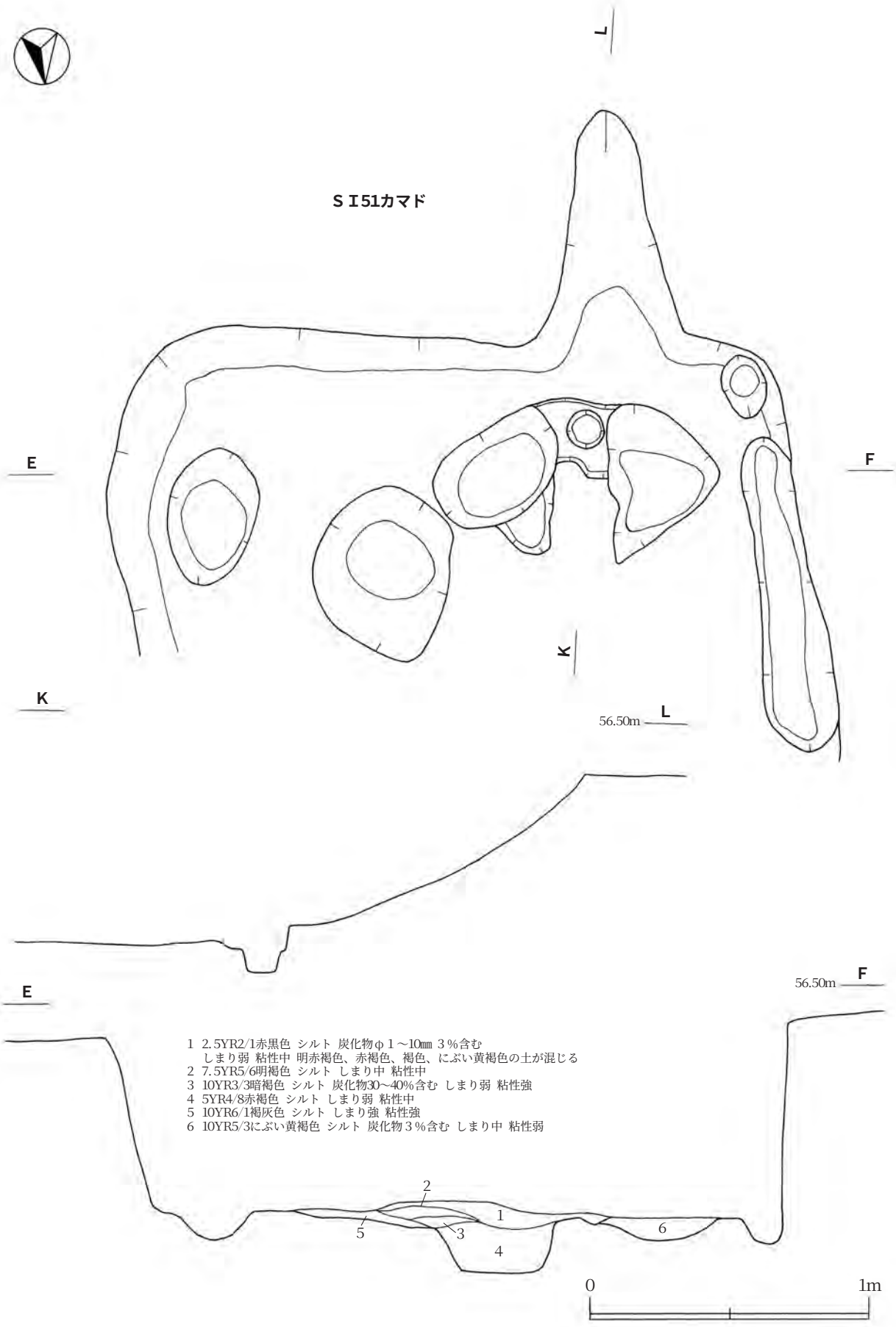
壁　　：東壁はほぼ垂直に立ち上がり、南壁は急に立ち上がる。北壁と西壁は残存状態が悪い。

床　　面：硬くしまっている。

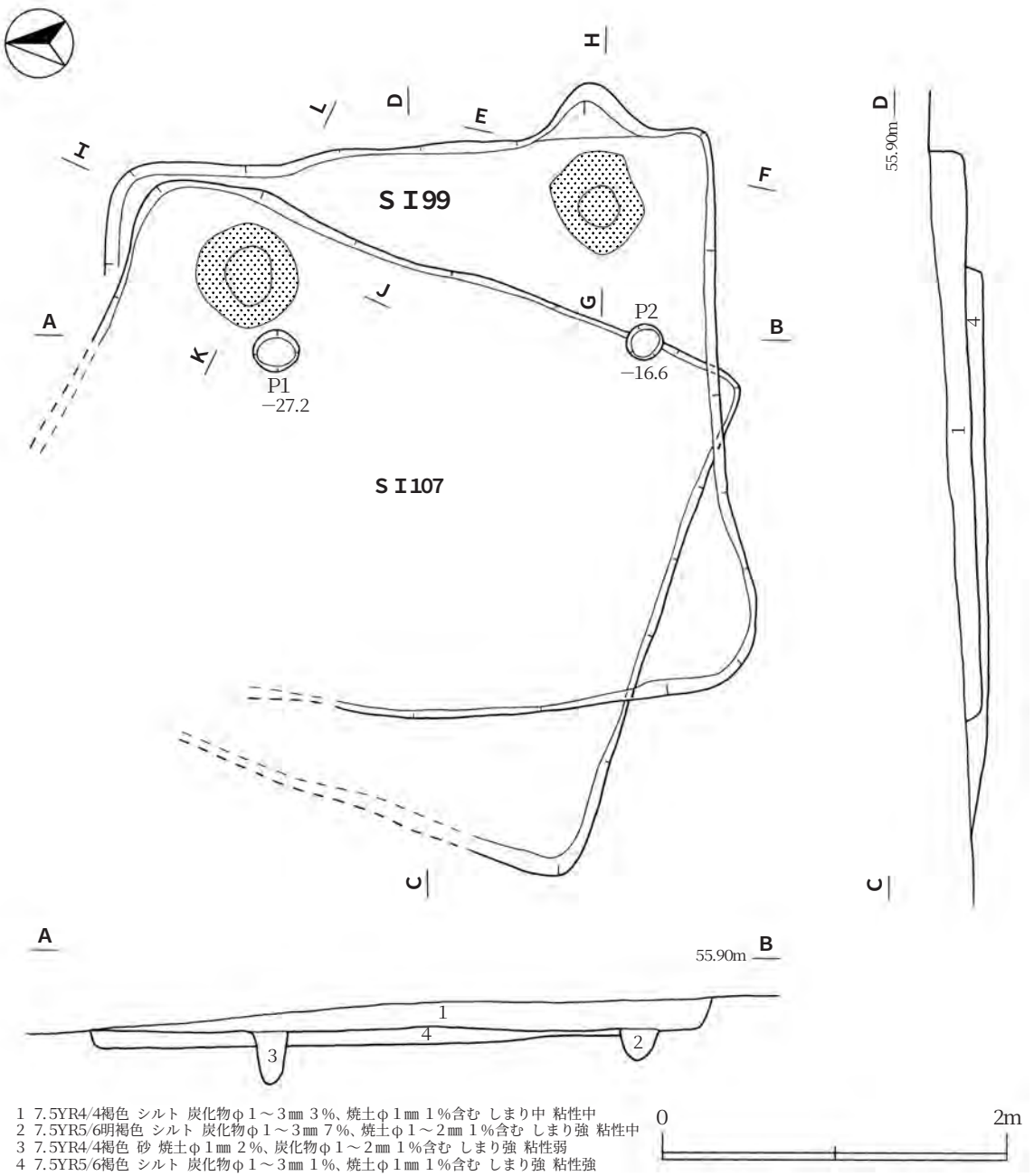
壁　　溝：なし。

柱　　穴：２基検出されたが、２基とも壁際ではなく中央寄りの位置にある。

カ マ ド：東壁の南寄りに付設されている。全長1.01ｍ（煙道部0.42ｍ、燃焼部0.59ｍ）で、壁に対



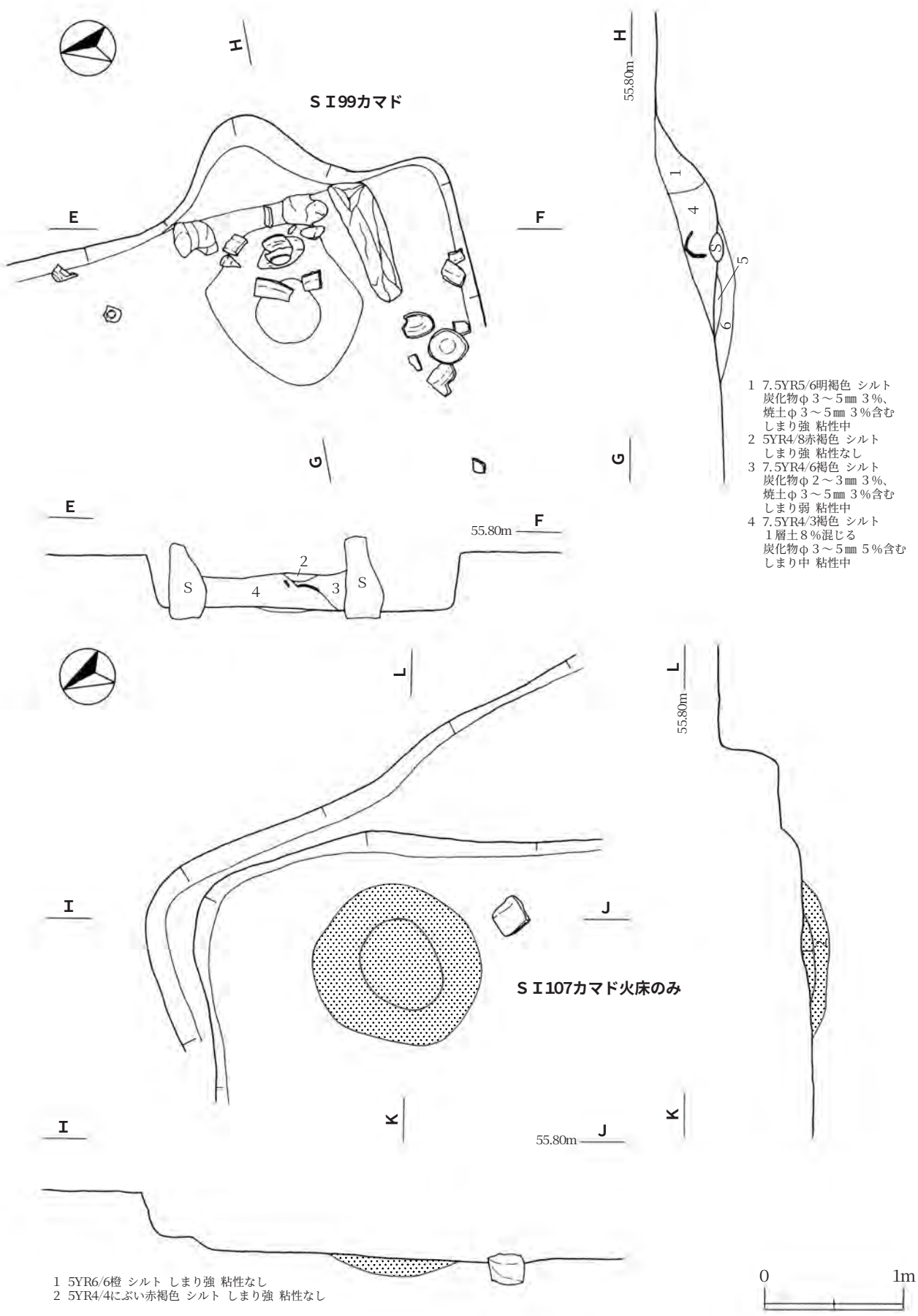
第30図　SI51カマド



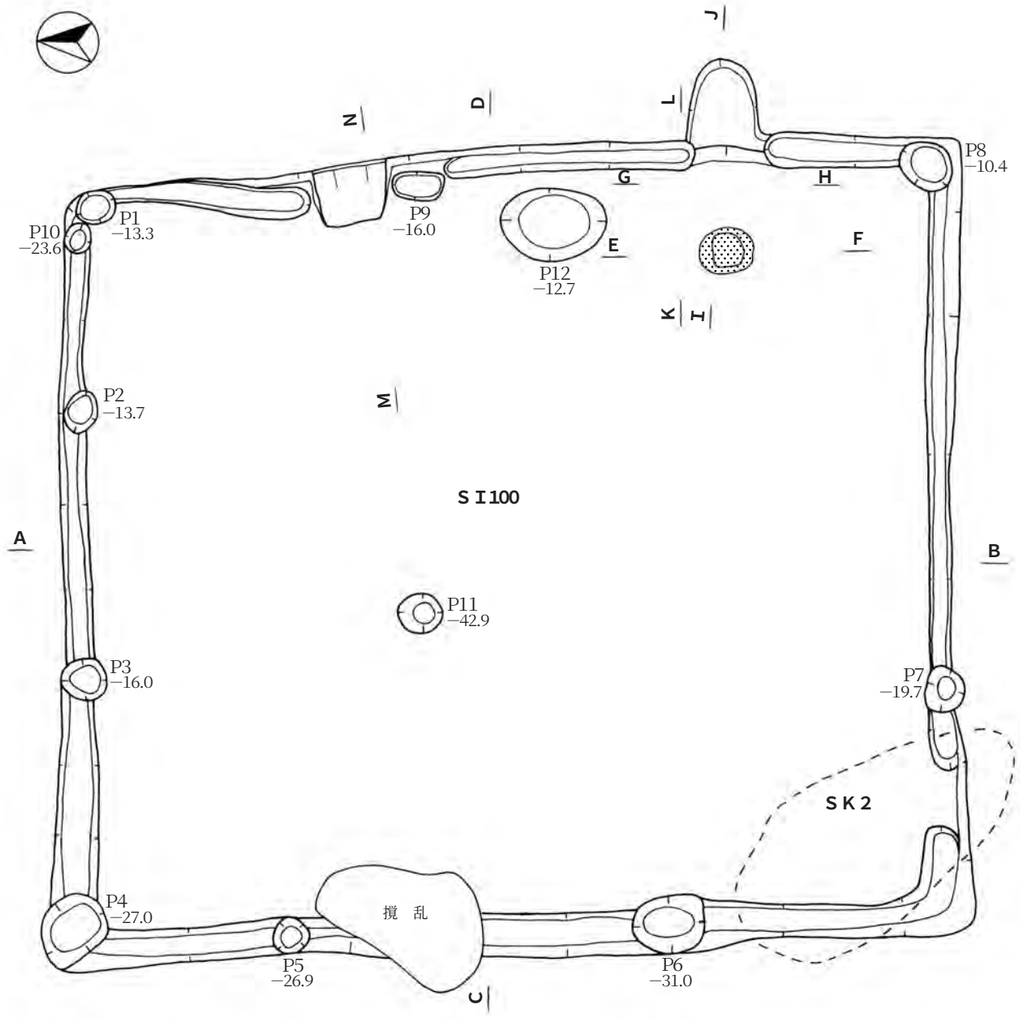
第31図　ＳＩ99・107

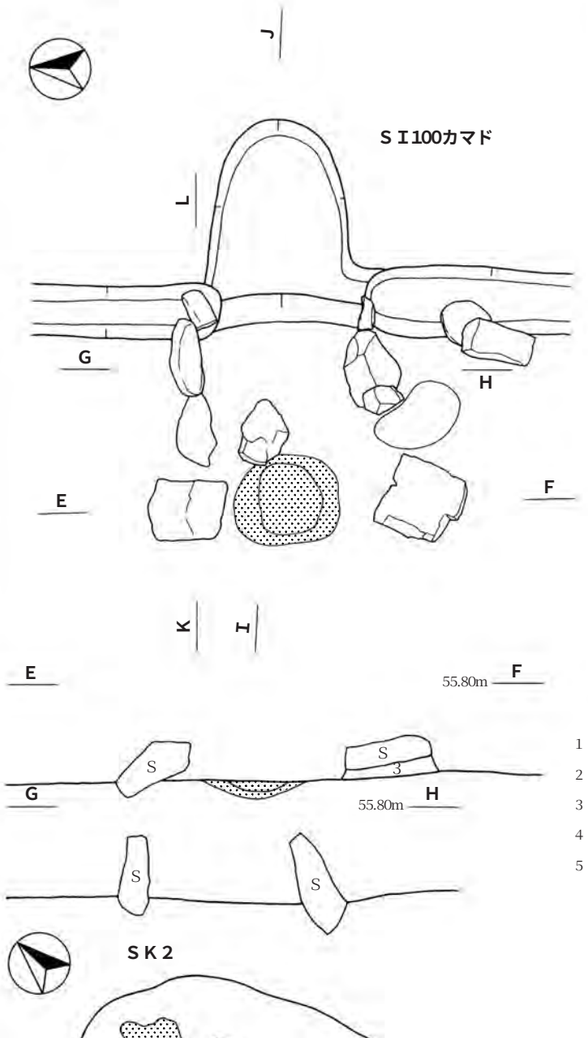
しほぼ直交する。煙道は緩やかに立ち上がっている。構築材は芯材のみ確認した。面取りした石を火床面の両側に配置している。火床面と煙道間に被熱した石を確認したが、中軸線上に位置することから、支脚もしくはその補助に使用したのではないかと考えられる。カマド周辺からは、土師器や礫などの遺物が出土している。

出土遺物：ほぼ完形の土師器坏が４点、坏底部が２点、その他土師器片がコンテナ１箱程度出土した（第160図２～９、図版38）。床面から出土した遺物も比較的多い。

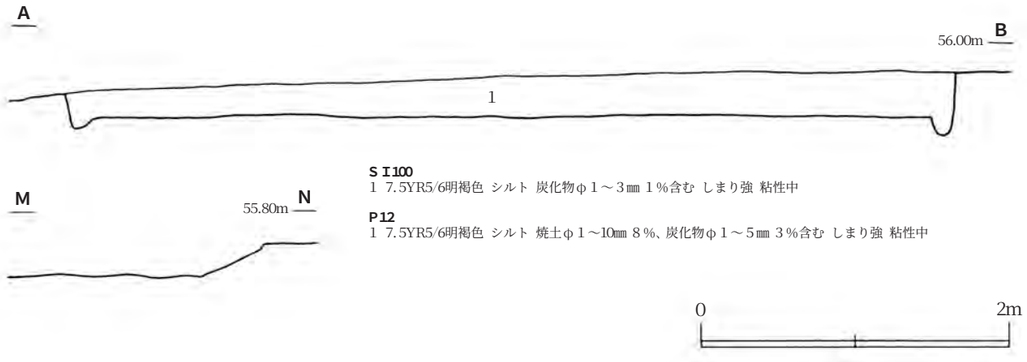


第32図　SI99・107カマド



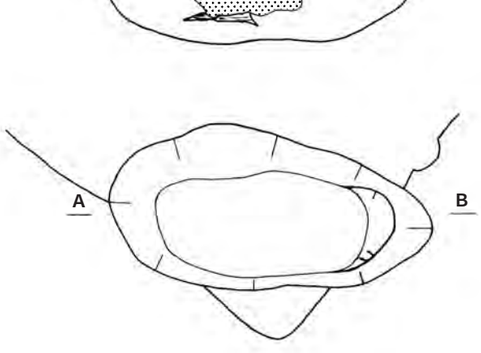


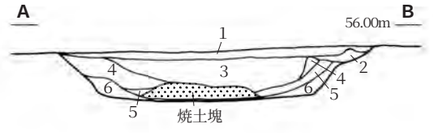
1　10YR3/3暗褐色　シルト　炭化物φ１～10㎜ ３％含む
　しまり強　粘性弱
2　7.5YR4/3褐色　シルト　炭化物φ１～20㎜ 10％含む
　しまり強　粘性中
3　7.5YR4/3褐色　シルト　炭化物φ１～３㎜ １％、
　焼土φ１～２㎜ １％含む　しまり強　粘性中
4　7.5YR4/4褐色　シルト　炭化物φ１～２㎜ １％、
　焼土φ１㎜ １％含む　しまり強　粘性弱
5　7.5YR4/4褐色　シルト　しまり強　粘性中



SI100
1　7.5YR5/6明褐色　シルト　炭化物φ１～３㎜ １％含む　しまり強　粘性中

P12
1　7.5YR5/6明褐色　シルト　焼土φ１～10㎜ ８％、炭化物φ１～５㎜ ３％含む　しまり強　粘性中





1　10YR2/3黒褐色　シルト　焼土φ１～５㎜ １％含む
　しまり中　粘性弱
2　10YR3/3暗褐色　シルト　炭化物φ１㎜ １％、
　焼土φ１㎜ １％含む　しまり中　粘性弱
3　10YR4/6褐色　シルト　焼土２％混じる
　炭化物１％含む　しまり中　粘性中
4　10YR3/4暗褐色　シルト　焼土φ１～５㎜ ５％含む
　しまり中　粘性中
5　2.5YR5/8明赤褐色　シルト　10YR3/4暗褐色30％混じる
　しまり強　粘性弱　焼土ブロック層
6　10YR1.7/1黒色シルト＋10YR3/4暗褐色シルト
　しまり中　粘性弱　炭層？

第33図　ＳＩ100、ＳＫ２

ＳＩ107（第31・32図、図版５）

位　　置：ＮＧ47グリッドを主体とし、ＮＧ46、ＮＨ47グリッドに及ぶ範囲に位置する。

規　　模：北壁長（1.2m）、南壁長3.17m、東壁長3.65m、西壁長0.67m。確認面から床面までの深さは、0.30mである。

確認状態：ＳＩ99精査中に確認した。

重複遺構：ＳＩ99と重複し、本遺構が古い。

覆　　土：覆土全体が地山と酷似する褐色シルト１層で占められる。壁の立ち上がり付近に三角堆積状の土層もみられないことから比較的短期間で埋没したとみられる。この状況から、一気に埋め戻しが行われた可能性が高いと考えられる。

壁　　：東壁はほぼ垂直に立ち上がり、南壁は急に立ち上がる。北壁と西壁は残存状態が悪い。

床　　面：硬くしまっている。

壁　　溝：なし。

柱　　穴：検出されなかった。

カ マ ド：東壁の北端近くで確認した。火床面と、芯材と思われる礫のみ確認した。当遺構廃絶時かＳＩ99構築時に壊された可能性がある。

出土遺物：遺物は出土しなかった。

ＳＩ100（第33図、図版４）

位　　置：ＮＦ47グリッドを主体とし、ＮＦ46グリッド、ＮＥ46・47グリッドに及ぶ範囲に位置する。

規　　模：北壁長5.16m、南壁長5.25m、東壁長5.87m、西壁長6.05m。確認面から床面までの深さは、0.33mである。

確認状態：Ⅶ層で周囲と異なる土の広がりを確認した。その後の精査により、竪穴住居跡であることが判明した。

重複遺構：ＳＫ２と重複し、本遺構が古い。

覆　　土：覆土全体が地山と酷似する明褐色シルト１層で占められる。壁の立ち上がり付近に三角堆積状の土層もみられないことから、比較的短期間で埋没したとみられる。この状態から、一気に埋め戻しが行われた可能性が高いと考えられる。

壁　　：ほぼ垂直に立ち上がる。

床　　面：ほぼ平坦である。

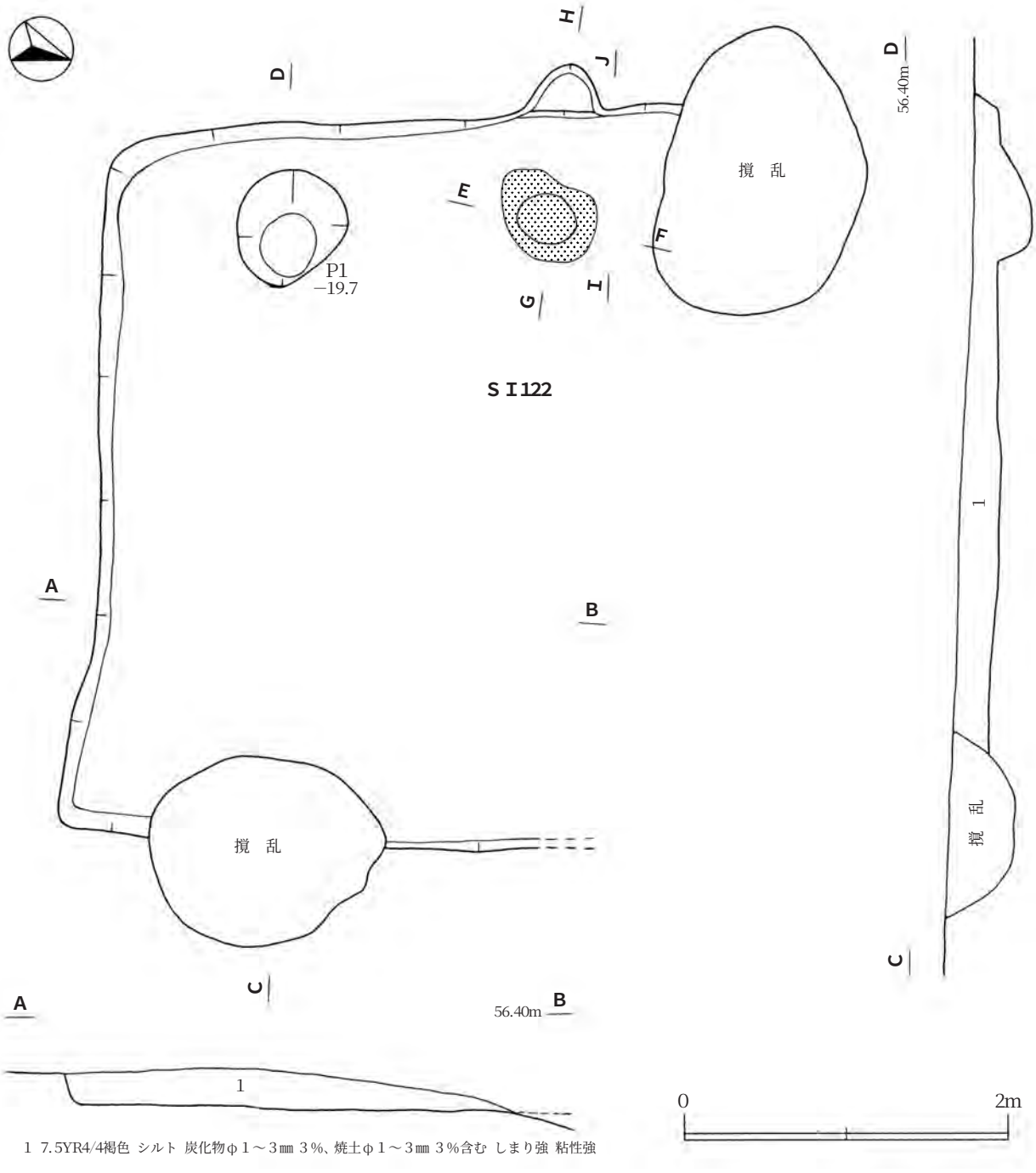
壁　　溝：東壁との南壁の一部を除き一巡する。

柱　　穴：壁溝と重複する形で10基検出された。基本的に床面の各隅に配置されているが、南西隅では確認できなかった。

カ マ ド：東壁に付設される。カマドの芯材と火床面が検出された。芯材は礫でカマドの両袖に並ぶような形で検出された。

そ の 他：東壁の北寄りでスロープ状の小さな張り出しを検出した。

出土遺物：土師器がコンテナで１／３箱出土した（第160図10・11、図版39）。



第34図　ＳＩ122

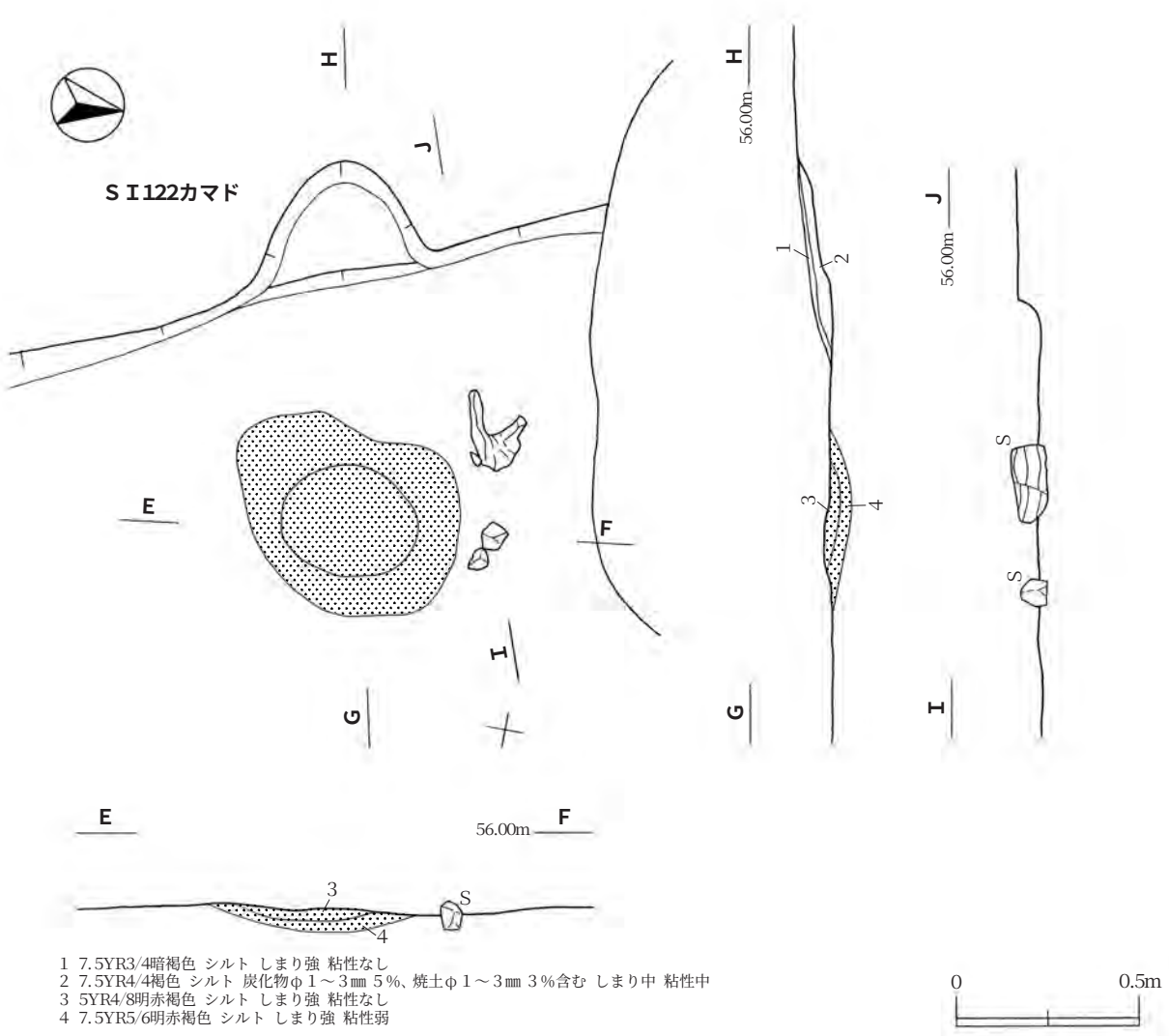
ＳＩ122（第34・35図、図版５）

位　　置：ＮＣ47グリッドを主体とし、ＮＣ48、ＮＤ47・48グリッドに及ぶ範囲に位置する。

規　　模：南壁長4.35m、東壁長（3.0m）、西壁長（3.57m）。北壁は台地の縁の浸食で消失しているため長さ不明である。確認面から床面までの深さは、0.25mである。

確認状態：Ⅶ層で周囲と異なる土の広がりを確認した。その後の精査により、竪穴住居跡であることが判明した。

重複遺構：なし。



第35図　ＳＩ122カマド

覆　　土：地山と酷似する褐色土１層で占められる。壁際の三角堆積状の土層がみられないことや、焼土ブロック、炭化物等の混入物を含むことから、当時の生活面付近の土や遺構構築に伴う廃土などで、一気に埋め戻しが行われた可能性がある。

壁　　：ほぼ垂直に立ち上がる。

床　　面：ほぼ平坦である。

壁　　溝：なし。

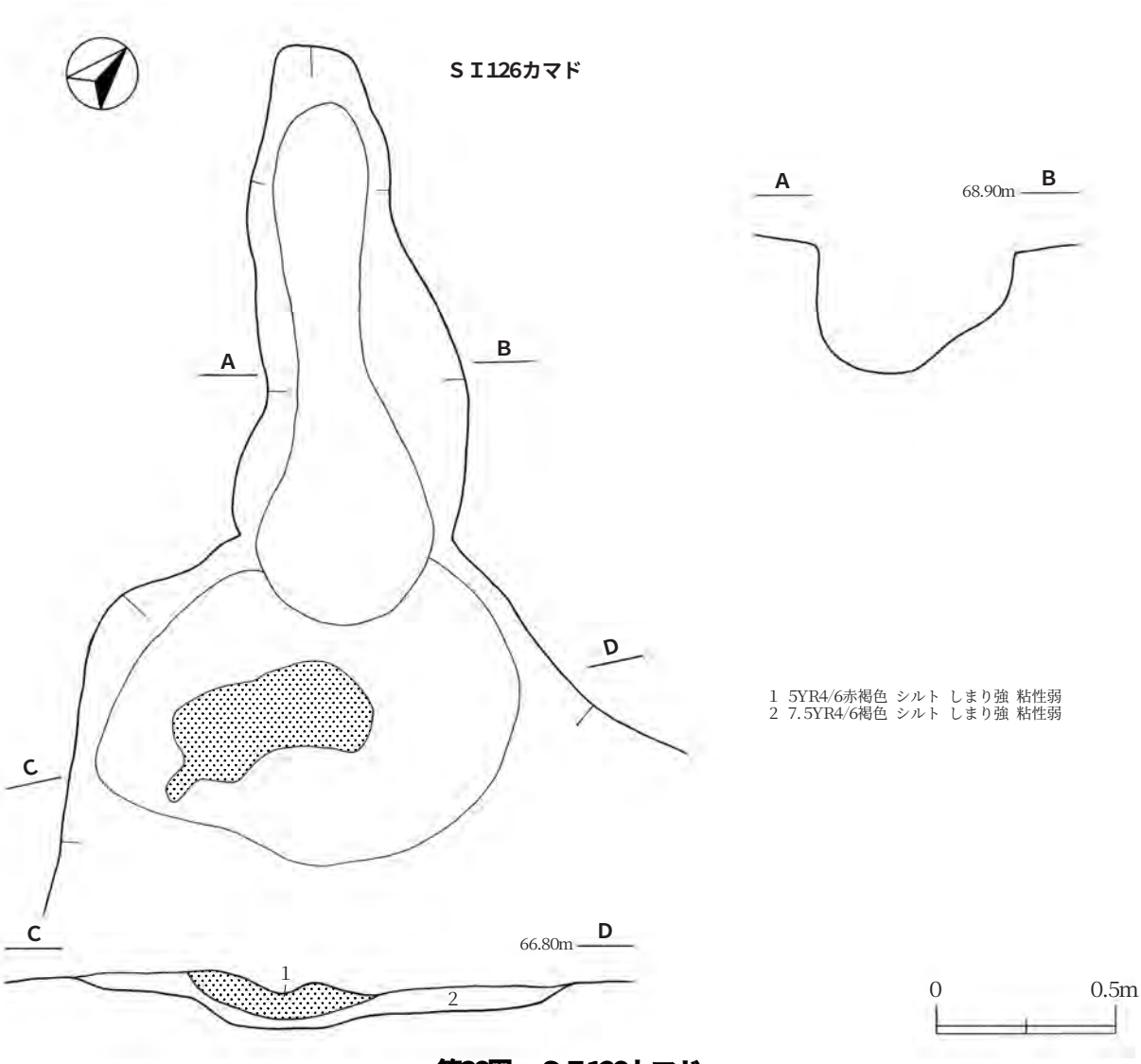
柱　　穴：１基のみ検出した。

カ マ ド：火床面と芯材と思われる礫のみ残存していた。火床面近くの西壁には小さな張り出しがみられ、火床面との位置関係からカマドの煙道部分と考えられる。

出土遺物：土師器が、中ポリ袋で一袋出土した（第161図１～３、図版39）。

ＳＩ126（第36図）

位　　置：ＫＱ47グリッドに位置する。



第36図　ＳＩ126カマド

規　　模：長軸（2.5）m、短軸（1.5）m

確認状態：Ⅵ層面でカマド火床面と思われる範囲とそこから北西に延びる溝状の掘り込みを確認し、竪穴住居として精査を進めた。

重複遺構：なし。

備　　考：竪穴住居に伴う掘り込み、床面、柱穴などは確認でず、カマド部分しか検出できなかった。カマドにしては規模が大きすぎる点から他の遺構の可能性も考えられる。

出土遺物：土師器を中心とする遺物がコンテナで１／４箱ほど出土した。全体的に摩滅気味で状態は不良である。

ＳＩ127（第37・38図、図版８）

位　　置：ＬＢ47・48グリッドを主体に、ＬＣ47・48グリッドに及ぶ範囲に位置する。

規　　模：北壁長4.30m、南壁長4.10m、東壁長3.90m、西壁長4.05m。確認面から床面までの深さは、0.08～0.28mである。

確認状態：Ⅶ層上面で周囲と異なる土の広がり（不定形）を確認した。その後の精査により、本遺構を含む複数遺構の重複であることが判明した。

重複遺構：ＳＩ131、ＳＩ145、ＳＩ146、ＳＫ147と重複する。このうち、本遺構より古いものがＳＩ131、ＳＩ145、ＳＩ146で新しいものがＳＫ147になる。ＳＩ145との新旧については、それを示す土層記録をとることができなかったが、本遺構の貼り床（ＳＩ147の煙道残存部を埋めるために施されたと推測される）の下からＳＩ147の煙道（煙孔）を検出したため、ＳＩ145の方が古いとみなした。

覆　　土：３層からなり、それぞれ地山、焼土、炭化物などの人為的な要素を含む層であるが、６層は、遺構の掘削土等の人為的撹乱土が斜面上部から流れ込んだ可能性も考えられる。

壁　　：床面からほぼ垂直に立ち上がる。

床　　面：ほぼ平らで全体的に堅くしまるが、住居中央からややカマド寄りの部分には細かなコブ状の凹凸が見られ、特にしまりが強い。

壁　　溝：幅14～16㎝、床面からの深さ８～10㎝で壁際をほぼ一巡している。

柱　　穴：住居床面の４隅とその間に主柱穴（Ｐ１～７）が壁溝と重複するように掘り込まれている。このほかＰ５に隣接するＰ８や近接するＰ９、壁に平行する位置にあるＰ10、Ｐ11も住居構造に関連する柱穴と考えられる。

カ マ ド：住居南壁の西よりに構築されている。保存状態は不良で、両袖の基底部が残存するのみである。右袖付近からは小礫が数個出土している。左袖の直下は、ピット状の掘り込みになっているが性格は不明である。火床面は長軸0.57m、短軸0.48mの範囲に広がり、中央部が被熱の度合いが強い。

関連施設：Ｐ12～16は住居内に掘り込まれた何らかの施設と考えられる。このうちＰ16覆土には焼土塊が含まれていた。

出土遺物：土師器を中心にコンテナで２／３ほど（須恵器は１点のみ）出土した（第161図４～９、第206図３）。このうち、カマド付近からは土師器片が３点出土した。

ＳＩ131（第37・39図、図版９）

位　　置：ＬＢ47グリッドに位置する。

規　　模：北壁長（1.08）m、南壁長2.95m、東壁長2.5m、西壁長（0.36）m。確認面から床面までの深さは、0.18mである。

確認状態：調査区南側境界部分のⅦ層上面で、周囲と異なる土の広がり（不定形）を確認した。その後の精査により、本遺構を含む複数遺構の重複であることが判明した。

重複遺構：ＳＩ127・145・146と重複し、本遺構が新しい。

覆　　土：炭化物、焼土、地山などの人為的要素を含む単層で、一気に埋め戻しが行われたと考えられる。

壁　　：やや急に立ち上がる。

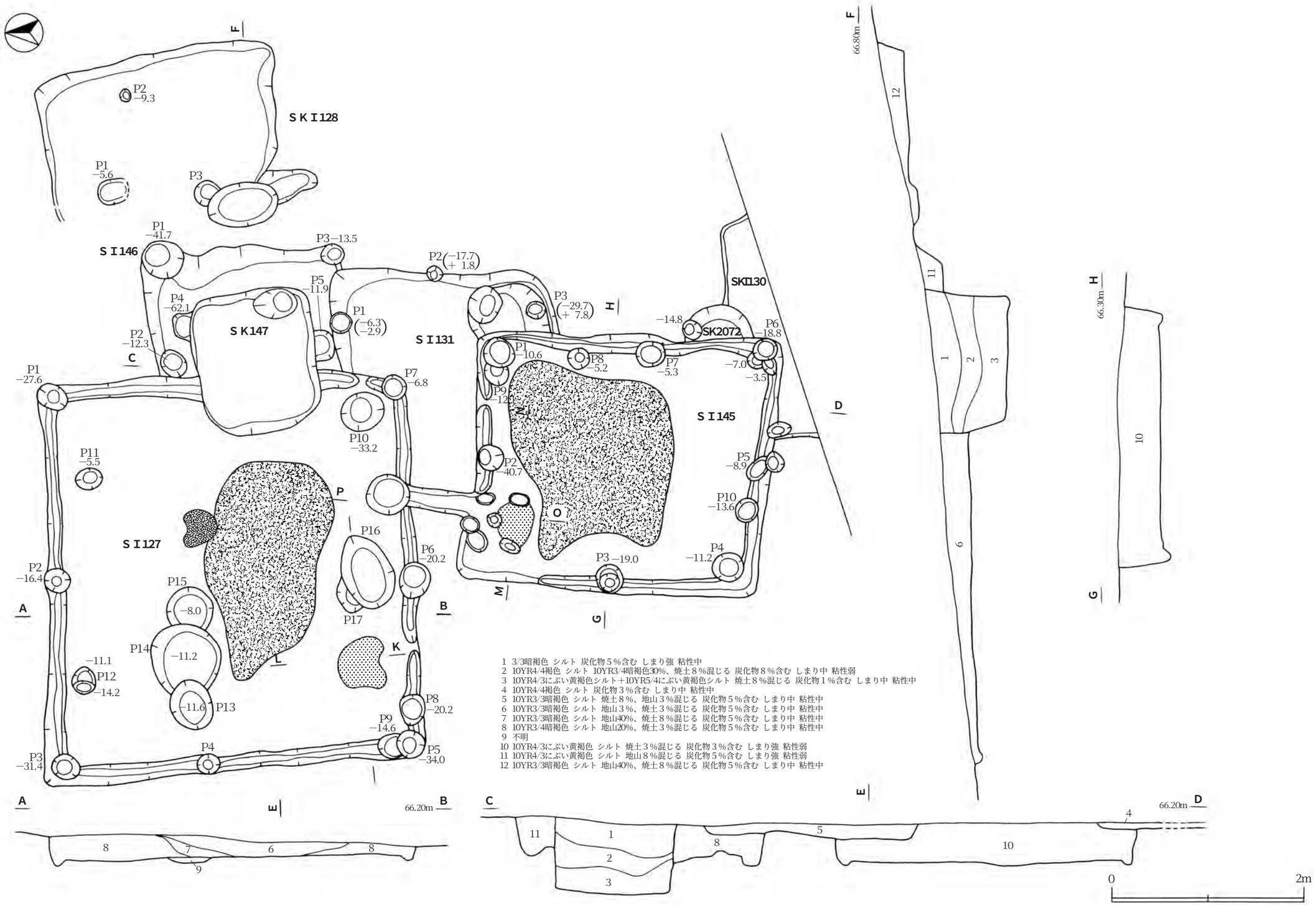
床　　面：ほぼ平らである。

壁　　溝：なし。

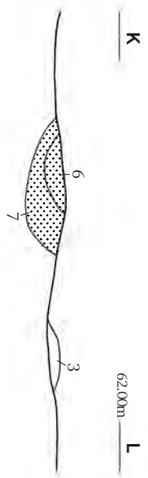
柱　　穴：壁際に３か所で掘り込まれている。
カ マ ド：なし。
出土遺物：土師器を中心とする遺物が出土した（第164図１、第206図６）。出土遺物は少なく、Ｈ１袋ほどである。
備　　考：南側に土坑状の掘り込みがあるが、貼り床をして使用しているため、当遺構より古い。

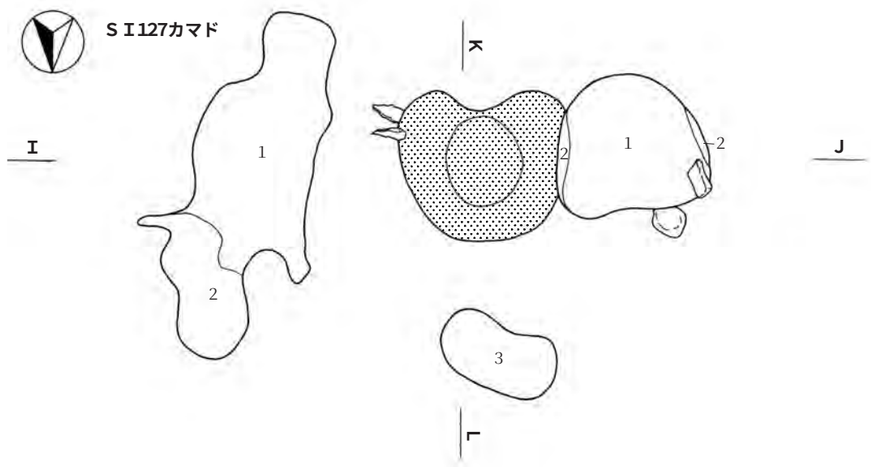
ＳＩ145（第37・38図、図版９）
位　　置：ＬＢ46・47グリッドに位置する。
規　　模：北壁長2.70m、南壁長2.83m、東壁長3.25m、西壁長3.18m。確認面から床面までの深さは、0.4～0.43mである。
確認状態：Ⅶ層上面で、周囲と異なる土の広がり（不定形）を確認した。その後の精査により、本遺構を含む複数遺構の重複であることが判明した。
重複遺構：ＳＩ127、ＳＩ130、ＳＩ131、ＳＫ2072と重複し、本遺構の方が古い。ＳＩ127との新旧関係の根拠については、ＳＩ127の項で既述したとおりである。
覆　　土：焼土、炭化物などの人為的要素を含む単層で、一気に埋め戻しが行われたと考えられる。
壁　　：ほぼ垂直に立ち上がる。
床　　面：ほぼ平らで全体的に硬くしまるが、中央部に細かなコブ状の凹凸が見られ、特にしまりの強い部分になっている。
壁　　溝：幅12～16㎝、床面からの深さ６～10㎝で、カマド周辺を除き壁際をほぼ一巡している。
柱　　穴：住居床面の４隅とその間に主柱穴（Ｐ１～８）が掘り込まれ、このうちＰ３を除く全ての柱穴が壁溝と重複する。これ以外にもＰ１、Ｐ６、Ｐ７にそれぞれ隣接するＰ９、Ｐ16、Ｐ13・14や壁際にあるＰ12・15・17などが住居の構造に関連する柱穴と考えられる。
カ マ ド：住居北壁の西寄りから崩壊した状態で検出され、袖は残っていなかった。火床面は長軸50㎝、短軸40㎝の範囲でがり、中央部が被熱の度合いが強い。煙道は長さ1.4m、幅0.25m、煙孔は底面付近のみ残存し、径0.43mの大きさがある。それぞれの壁は被熱によって赤く硬化している。
出土遺物：土師器を中心とする遺物がコンテナで１／３ほど（須恵器は１点のみ）出土した。このうち、７点がカマド精査時に検出された。

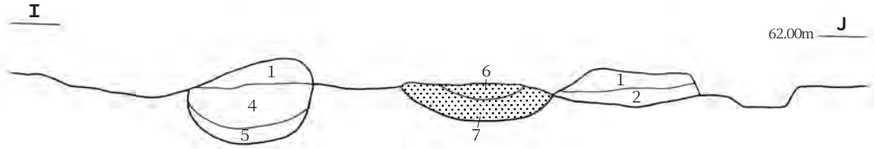
ＳＩ146（第37図）
位　　置：ＬＣ48グリッドに位置する。
規　　模：北壁長（1.45m）、南壁長（0.28m）、東壁長2.22m、西壁は存在せず。確認面から床面までの深さは、0.28mである。
確認状態：Ⅶ層上面で、周囲と異なる土の広がり（不定形）を確認した。その後の精査により、本遺構を含む複数遺構の重複であることが判明した。
重複遺構：ＳＩ127・131、ＳＫ147と重複し、当遺構が古い。
覆　　土：炭化物、地山など人為的要素を含む単層で、一気に埋め戻しが行われたと考えられる。



第37図　ＳＩ127・131・145・146、ＳＫ147・2072、ＳＫＩ128・130



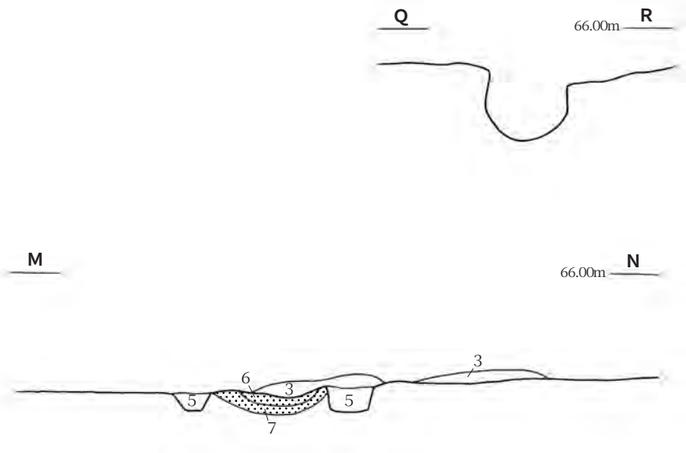




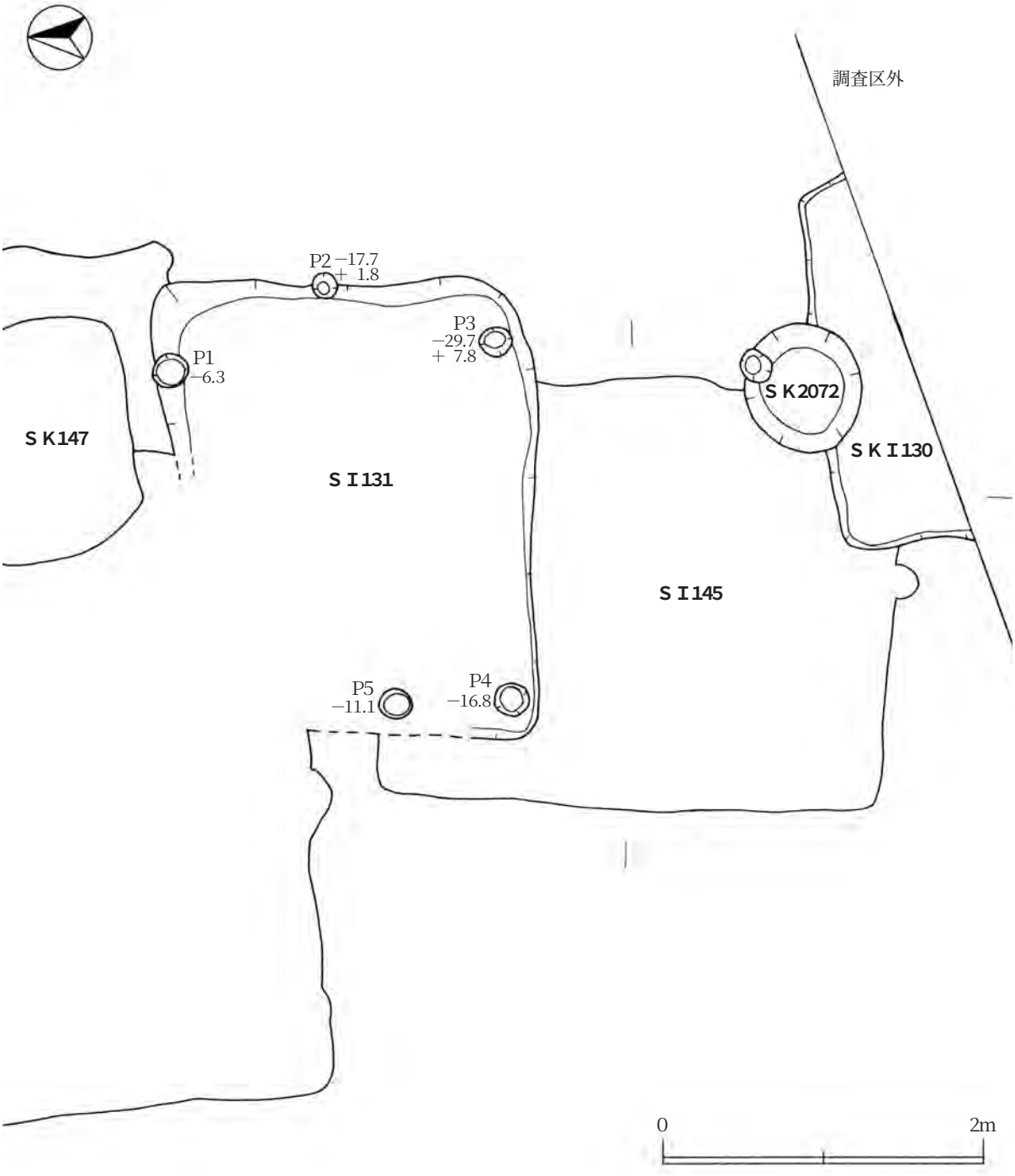
1　10YR4/4褐色シルト＋10YR5/4にぶい黄褐色シルト　焼土３％混じる　炭化物１％含む　しまり強　粘性弱
2　7.5YR4/3褐色　シルト　焼土８％混じる　炭化物１％含む　しまり中　粘性中
3　5YR4/6赤褐色　シルト　焼土20％混じる　炭化物φ10㎜ 10％含む　しまり中　粘性中
4　10YR4/4褐色　シルト　10YR5/6黄褐色30％混じる　焼土φ５～15㎜ ８％含む　しまり中　粘性中
5　7.5YR3/4暗褐色　シルト　焼土φ５～15㎜ 20％、炭化物10％含む　しまり中　粘性中
6　2.5YR4/8赤褐色　しまり強　粘性中
7　5YR4/6赤褐色　しまり強　粘性中

1　5YR4/6赤褐色　シルト　しまり強　粘性弱
2　10YR4/4褐色　シルト　焼土φ３～10㎜、炭化物１％含む　しまり強　粘性弱
3　10YR4/4褐色シルト＋10YR5/4にぶい黄褐色シルト　焼土φ５～10㎜ 15%、炭化物５％含む　しまり強　粘性弱
4　不明
5　不明

ＳＩ145カマド火床
6　2.5YR4/8赤褐色　シルト　しまり強　粘性なし
7　5YR4/6赤褐色　シルト　しまり強　粘性弱



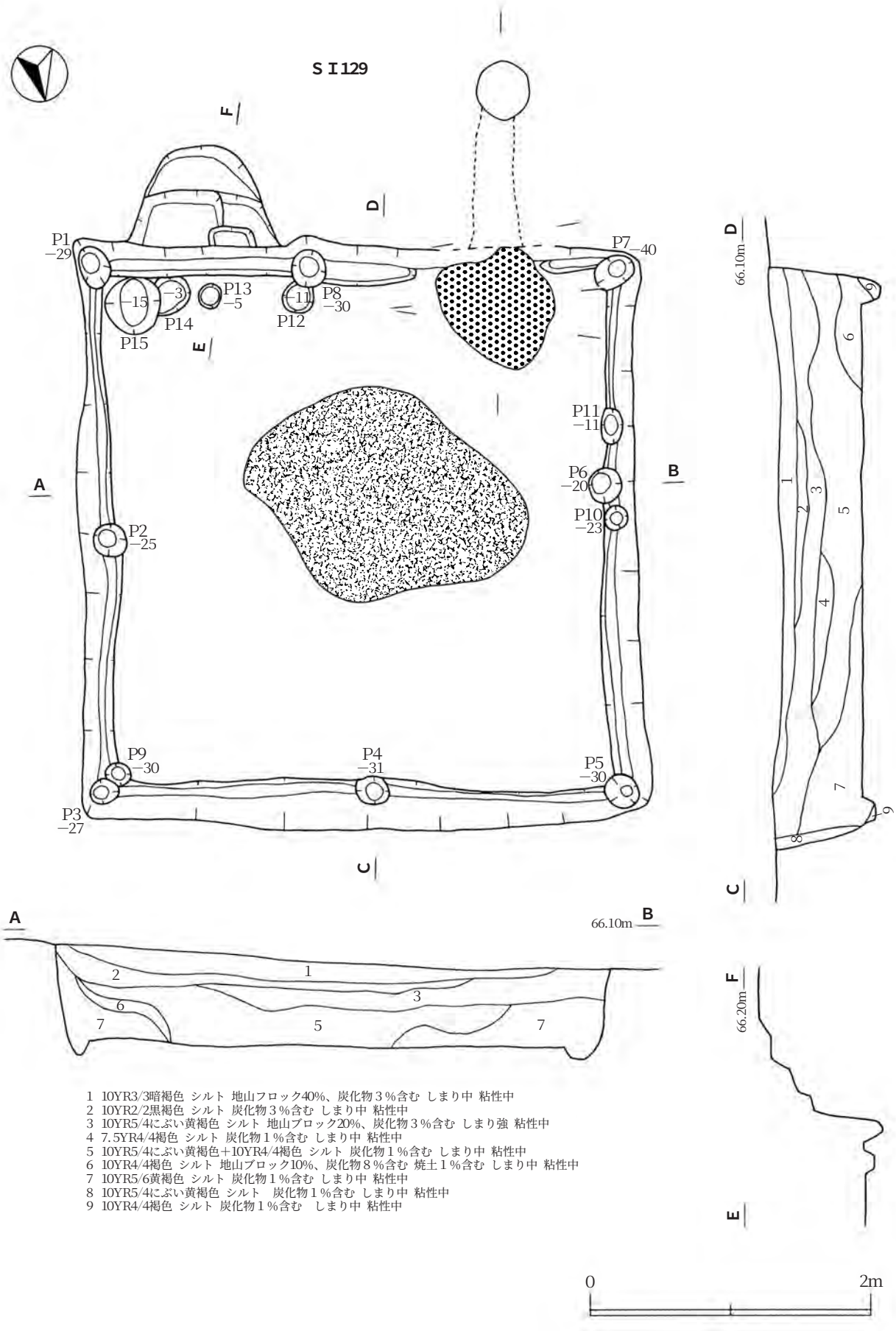
第38図　ＳＩ127・145カマド



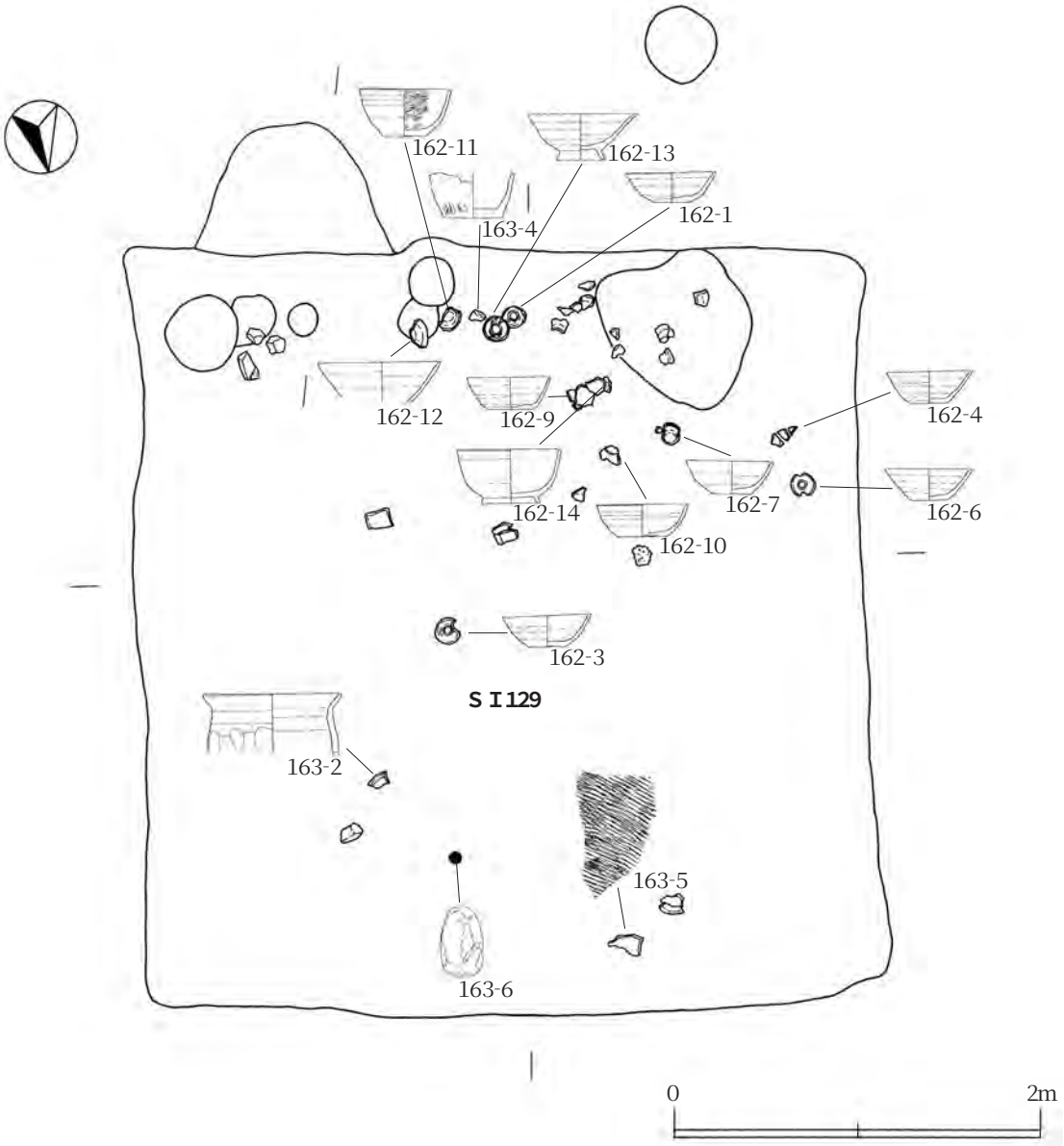
第39図　ＳＩ131、ＳＫＩ130

壁　　：やや急に立ち上がる。
床　　面：ほぼ平らである。
壁　　溝：なし。
柱　　穴：隅と壁際に３か所、壁から少し離れたところに２か所掘り込まれている。
カ マ ド：なし。
出土遺物：土師器を中心とする遺物がコンテナで１／４ほど（須恵器１点のみ）出土した。

ＳＩ129（第40・41・42・43図、図版６・７）
位　　置：ＬＢ49グリッドを主体とし、ＬＢ48・50、ＬＣ49グリッドに及ぶ範囲に位置する。
規　　模：北壁長4.13m、南壁長4.10m、東壁長4.23m、西壁長4.18m。確認面から床面までの深さは、0.46～0.60mである。
確認状態：Ⅵ～Ⅶ層上面で、周囲と異なる土の広がり（方形）を確認した。その後の精査により、竪穴住居跡であることが判明した。
重複遺構：なし。
覆　　土：７層以下の層は自然堆積層の可能性があるが、３層上面は地形的に標高の低い西側が高くなっているため、自然堆積と考えるには不自然な状態にある。したがって自然堆積による埋没過程中に一時的に、遺構構築に伴う廃土の廃棄が行われた可能性がある。
壁　　：床面からほぼ垂直に立ち上がる。
床　　面：ほぼ平らで全体的に硬くしまるが、住居中央部には細かなコブ状の凹凸が見られ、特にしまりの強い部分になっている。
壁　　溝：幅10～15㎝、床面からの深さ10㎝前後で、カマド部分を除いた壁際をほぼ一巡している。
柱　　穴：住居床面の４隅とその間に主柱穴（Ｐ１～８）が壁溝と重複するように掘り込まれている。このほかＰ３に隣接するＰ９やＰ６に近接するＰ10・11、壁に平行する位置にあるＰ12、Ｐ13も住居構造に関連する柱穴と考えられる。
カ マ ド：住居南壁の西よりから、崩壊した状態で確認された。袖は大きな軟質の礫を芯材としている。火床面は長軸0.47m、短軸0.38mの範囲に広がり、中央部が被熱の度合いが強い。火床面の南側では、伏せた状態の土師器が出土した。この土師器は、土を固めた小山の上に底面をほぼ水平にした状態で検出されたことから、支脚として使用されていたと考えられる。煙道はほぼ完全な状態で残存しており、煙道の壁は被熱によって硬くしまりかつ赤褐色化し、煤が付着している。断面形は長方形に近い。煙出しの平面形は径40㎝ほどの円形で煙道に向かって真っ直ぐ下に掘り込まれている。
関連施設：Ｐ14・15は住居内に掘り込まれた何らかの施設と考えられる。このうちＰ15覆土には焼土塊が含まれていた。
出土遺物：土師器を中心とする遺物がコンテナで３箱ほど（須恵器２点のみ）出土した。床面からは、完形の土師器が多数出土した（第162図、163図、図版39）。住居廃絶時の状態を示すものと考えられる。坏の中には、胎土に多量の砂を含むため表面がざらつくものがある。
備　　考：当遺跡で最も保存状態の良い住居の一つである。


SI129
P1 −29
P2 −25
P3 −27
P4 −31
P5 −30
P6 −20
P7 −40
P8 −30
P9 −30
P10 −23
P11 −11
P12
P13 −5
P14
P15
−15
−3
−11
A
B
C
D
E
F
66.10m
66.20m
1 10YR3/3暗褐色 シルト 地山フロック40%、炭化物３%含む しまり中 粘性中
2 10YR2/2黒褐色 シルト 炭化物３%含む しまり中 粘性中
3 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト 地山ブロック20%、炭化物３%含む しまり強 粘性中
4 7.5YR4/4褐色 シルト 炭化物１%含む しまり中 粘性中
5 10YR5/4にぶい黄褐色＋10YR4/4褐色 シルト 炭化物１%含む しまり中 粘性中
6 10YR4/4褐色 シルト 地山ブロック10%、炭化物８%含む 焼土１%含む しまり中 粘性中
7 10YR5/6黄褐色 シルト 炭化物１%含む しまり中 粘性中
8 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト　炭化物１%含む しまり中 粘性中
9 10YR4/4褐色 シルト 炭化物１%含む　しまり中 粘性中
0
2m

第40図　ＳＩ129



第41図　ＳＩ129遺物分布図

ＳＩ132（第44・45図）

位　　置：ＫＴ47・48グリッドに位置する。

規　　模：北壁長3.15m、南壁長3.17m、東壁長3.25m、西壁長3.2m。確認面から床面までの深さは、0.38mである。

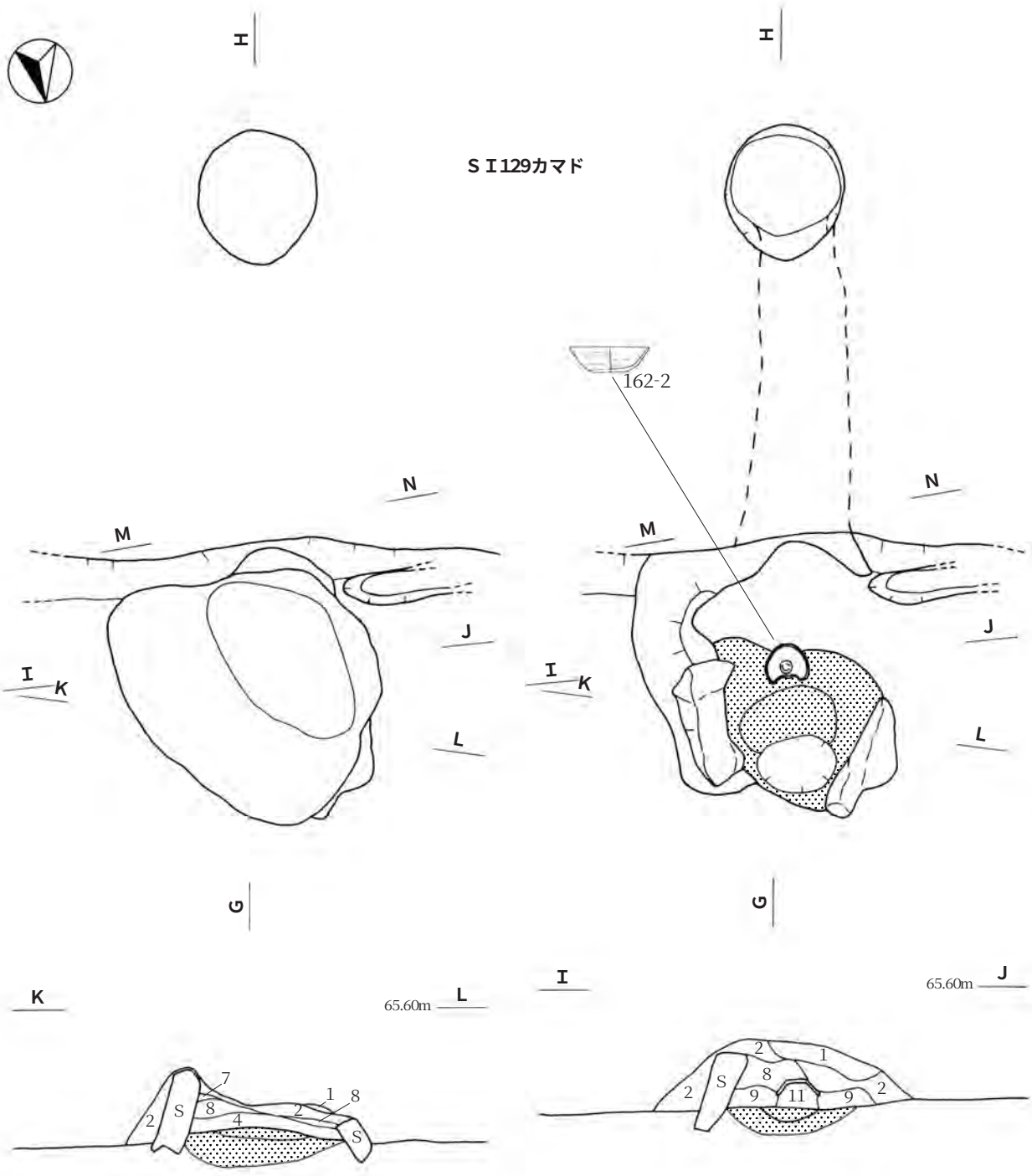
確認状態：Ⅶ層上面で、周囲と異なる土の広がり（方形）を確認した。その後の精査で竪穴住居跡であることが判明した。

重複遺構：ＳＫ124と重複し、本遺構の方が新しい。

覆　　土：地山土などが混入する人為的要素を含む層であるが、遺構構築に伴う廃土が周辺から流れ込んだ可能性が高い。

壁　　：ほぼ垂直に立ち上がる。

床　　面：ほぼ平らで、住居中央部のカマド寄りに硬くしまった部分がある。

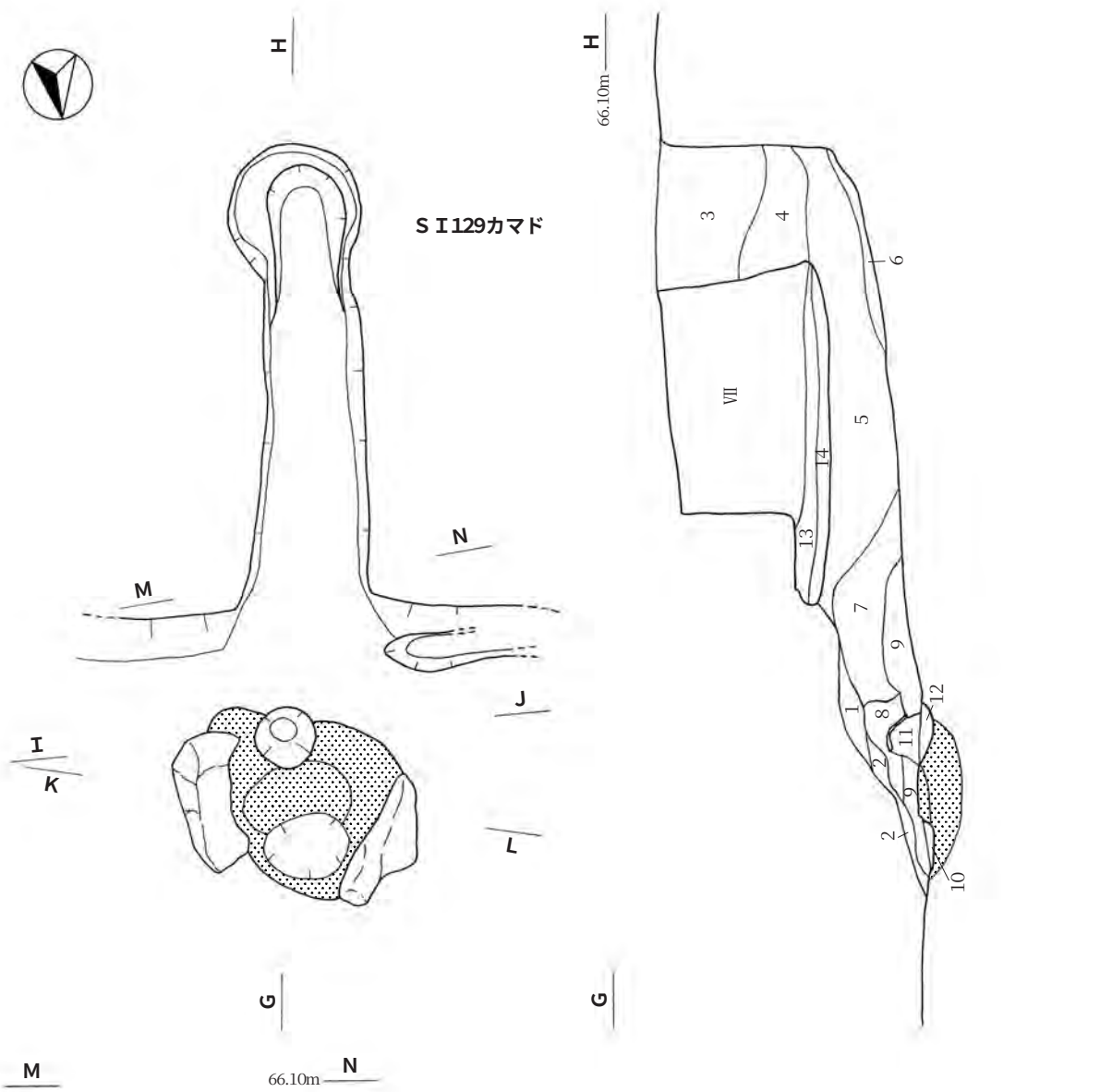


1 7.5YR4/4褐色 シルト 焼土５%混じる 炭化物１%含む しまり弱 粘性中
2 10YR6/6明黄褐色 シルト しまり強 粘性中
3 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 焼土10%混じる 炭化物10%含む しまり中 粘性中
4 10YR3/4暗褐色 シルト 煙道内壁崩落土10%混じる 地山ブロックφ10～30㎜ 20%、炭化物８%含む しまり中 粘性中
5 10YR3/1黒褐色 シルト 炭化物１%含む しまり中 粘性中
6 7.5YR4/3褐色シルト+7.5YR5/6黄褐色シルト 炭化物１%含む しまり中 粘性中
7 7.5YR4/4褐色 シルト 焼土５%混じる 炭化物３%含む しまり弱 粘性中
8 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 焼土φ５～30㎜ 40%、炭化物10%含む しまり中 粘性中
9 10YR3/3暗褐色 シルト 焼土５%、地山１%混じる 炭化物３%含む しまり中 粘性中
10 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 焼土10%混じる 炭化物10%含む しまり中 粘性中
11 5YR3/3明赤褐色 シルト 焼土15%混じる 炭化物φ３㎜ 以下２%含む しまり強 粘性中 伏せた土師器（坏）下の土
12 7.5YR4/3褐色 シルト 炭化物１%含む しまり中 粘性中
13 5YR4/6赤褐色 シルト しまり中 粘性中
14 7.5YR4/4褐色 シルト しまり強 粘性中

※３、５、６、10、12、13、14は第43図に掲載

0　0.5m

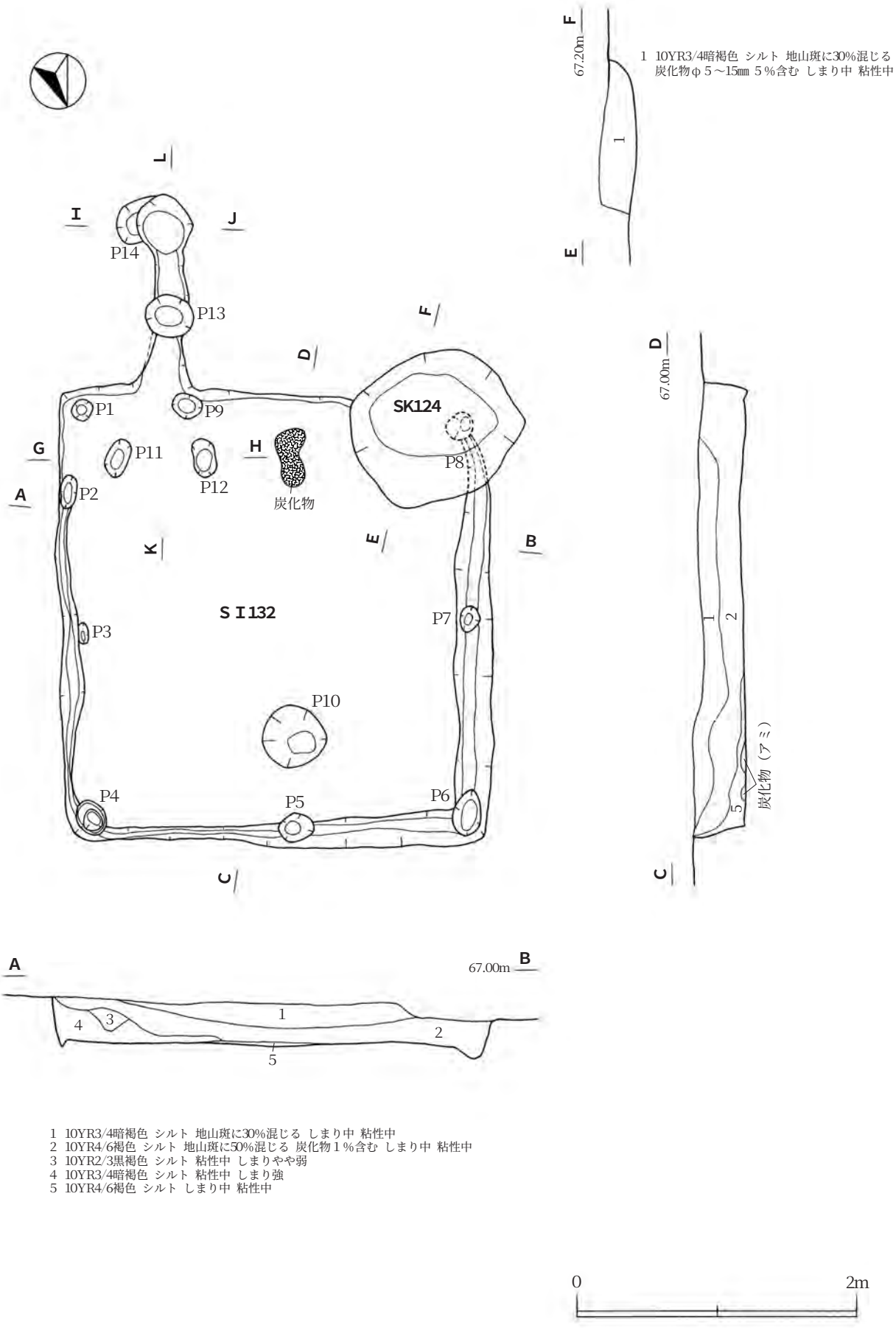
第42図　ＳＩ129カマド



1 7.5YR4/4褐色 シルト 焼土５%混じる 炭化物１%含む しまり弱 粘性中
2 10YR6/6明黄褐色 シルト しまり強 粘性中
3 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 焼土10%混じる 炭化物10%含む しまり中 粘性中
4 10YR3/4暗褐色 シルト 煙道内壁崩落土10%混じる 地山ブロックφ10～30㎜ 20%、炭化物８%含む しまり中 粘性中
5 10YR3/1黒褐色 シルト 炭化物１%含む しまり中 粘性中
6 7.5YR4/3褐色シルト＋7.5YR5/6黄褐色シルト 炭化物１%含む しまり中 粘性中
7 7.5YR4/4褐色 シルト 焼土５%混じる 炭化物３%含む しまり弱 粘性中
8 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 焼土φ５～30㎜ 40%、炭化物10%含む しまり中 粘性中
9 10YR3/3暗褐色 シルト 焼土５%、地山１%混じる 炭化物３%含む しまり中 粘性中
10 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 焼土10%混じる 炭化物10%含む しまり中 粘性中
11 5YR3/3明赤褐色 シルト 焼土15%混じる 炭化物φ３㎜以下２%含む しまり強 粘性中 伏せた土師器（坏）下の土
12 7.5YR4/3褐色 シルト 炭化物１%含む しまり中 粘性中
13 5YR4/6赤褐色 シルト しまり中 粘性中
14 7.5YR4/4褐色 シルト しまり強 粘性中

0 0.5m

第43図　ＳＩ129カマド

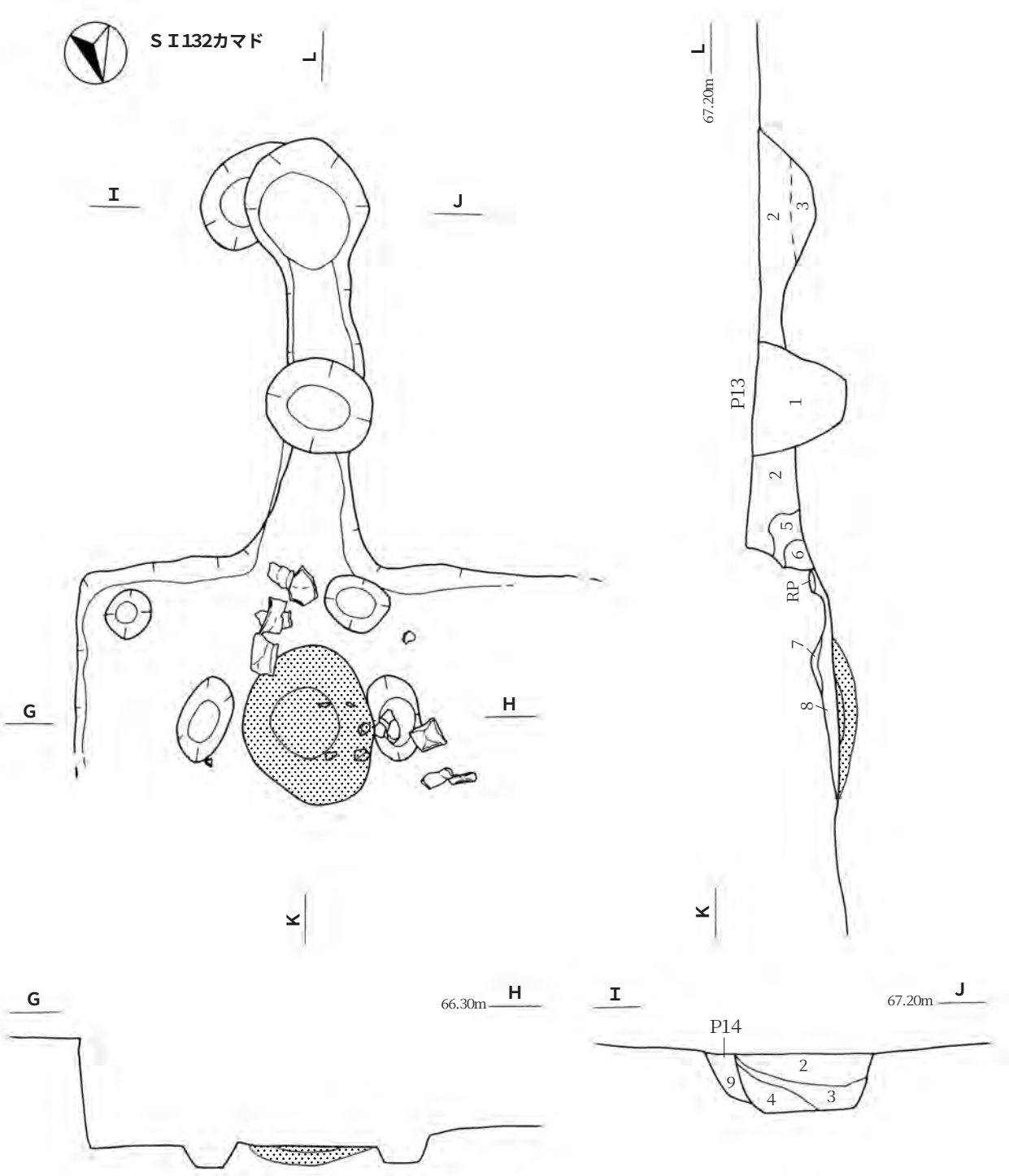


1 10YR3/4暗褐色 シルト 地山斑に30%混じる
炭化物φ５～15㎜ ５%含む しまり中 粘性中

1 10YR3/4暗褐色 シルト 地山斑に30%混じる しまり中 粘性中
2 10YR4/6褐色 シルト 地山斑に50%混じる 炭化物１%含む しまり中 粘性中
3 10YR2/3黒褐色 シルト 粘性中 しまりやや弱
4 10YR3/4暗褐色 シルト 粘性中 しまり強
5 10YR4/6褐色 シルト しまり中 粘性中

0　2m

第44図　ＳＩ132



1 10YR3/4暗褐色 シルト 地山φ５～20㎜ 30%、炭化物φ５～15㎜ 30%含む しまり中 粘性中
2 10YR3/3暗褐色 シルト しまり中 粘性中
3 10YR3/4暗褐色 シルト 地山50%、焼土１%混じる 炭化物１%含む しまり中 粘性中
4 10YR3/3暗褐色 シルト 地山１%、焼土１%混じる 炭化物１%含む しまり中 粘性中
5 10YR3/4暗褐色 シルト 焼土φ10～30㎜ 30%、地山φ10～20㎜ 10%、炭化物１%含む しまり中 粘性中
6 10YR3/4暗褐色 シルト 地山１%、焼土１%混じる 炭化物１%含む しまり中 粘性弱
7 7.5YR3/4暗褐色 シルト しまり中 粘性中
8 7.5YR4/6褐色 シルト 地山１%、焼土１%混じる 炭化物１%含む しまり中 粘性中
9 10YR3/4暗褐色 シルト 地山φ10～30㎜ 30%含む しまり中 粘性中

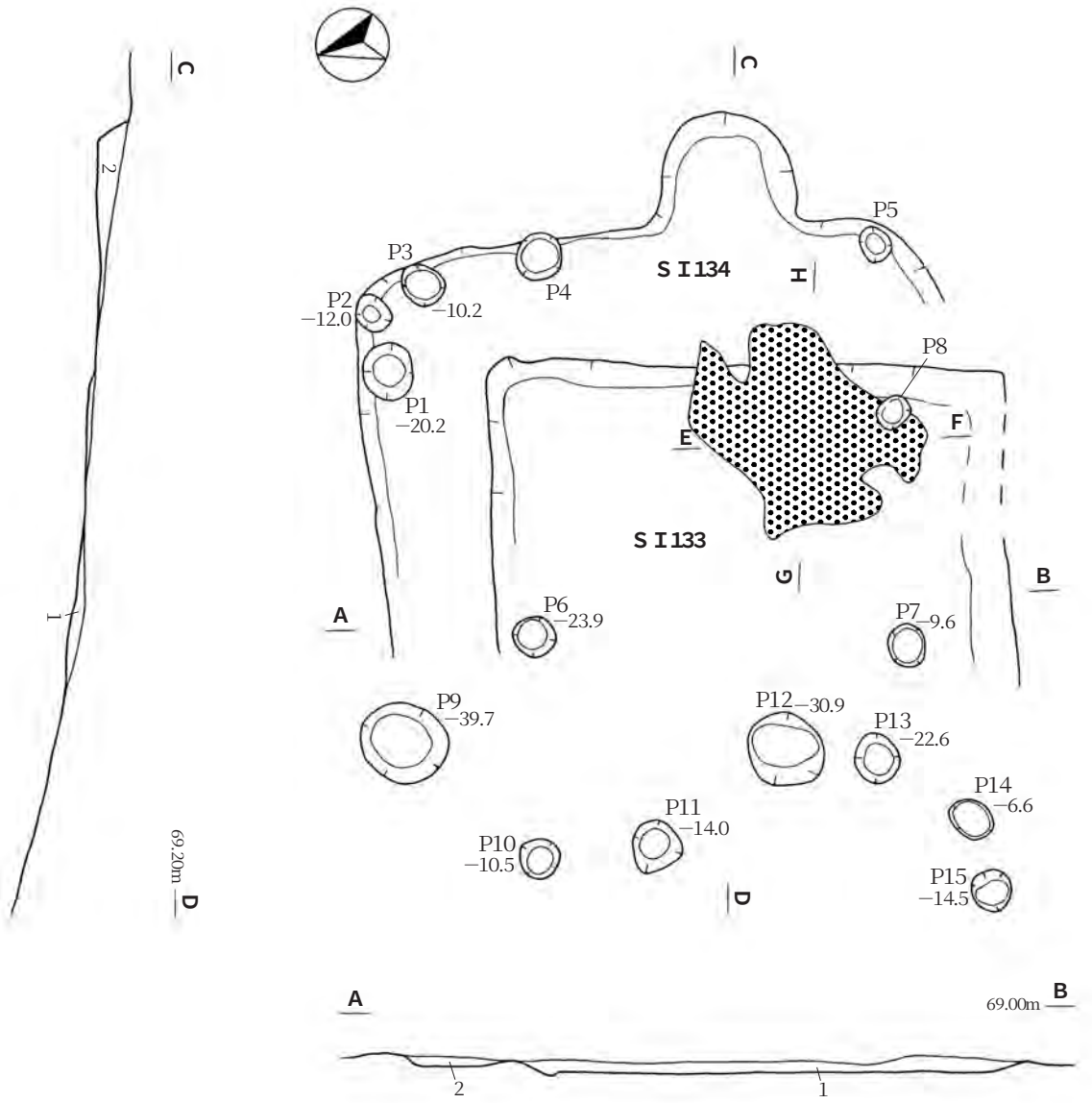
0 0.5m

第45図　ＳＩ132カマド

壁　　溝：幅10～30㎝、床面からの深さ４～10㎝でカマドが付設される南壁を除いた３壁に巡る。
柱　　穴：住居床面の４隅とその中間などに主柱穴（Ｐ１～８）が掘り込まれている。Ｐ９・11・12はカマド芯材の設置等に関連した掘り込みの可能性がある。
カ マ ド：南壁の東寄りに付設されている。崩壊した状態で確認され、火床面と煙道が残るのみである。火床面は長軸0.52m、短軸0.42mの範囲に広がり、中央部が被熱の度合いが強い。火床面の両脇からはピットが検出された。芯材の抜き取り痕の可能性も考えられる。煙道は長さ1.36m、幅0.2～0.45m、煙出しの径は0.4mほどである。
関連施設：カマド西側の床面に長さ0.4m、幅0.25mの範囲にわたって炭化物の集中がみられる。
出土遺物：コンテナで２／３ほどの土師器を中心とする遺物が出土した(第164図２､第206図７・８、図版39)。
備　　考：大型調査機材設置場所の移動に関連して、北半と南半２回にわけて調査を実施した。

ＳＩ133（第46・47図）
位　　置：ＫＴ・ＬＡ47グリッドを主体に、ＫＴ・ＬＡ46グリッドに及ぶ範囲に位置する。
規　　模：北壁長（1.64m)、南壁長（1.72m)、東壁長2.89m、西壁は確認できなかった。東壁の長さから、一辺３ｍ弱の竪穴住居跡であったと推測される。確認面から床面までの深さは0.25mである。
確認状態：Ⅶ層上面で、周囲と異なる土の広がりを確認した。その後の精査で、竪穴住居跡であることが判明した。
重複遺構：ＳＩ134と重複し、当遺構が新しい。
覆　　土：炭化物、焼土などを含む単層で、一気に埋め戻しが行われたと考えられる。
　壁　　：確認面から床面までの深さが極浅いため、立ち上がりの角度は不明瞭である。
床　　面：やや、西側に傾斜するが面自体はほぼ平らである。
壁　　溝：なし。
柱　　穴：Ｐ６、７が主柱穴と考えられるが、それ以外は不明である。
カ マ ド：東壁に付設されている。崩壊した状態で確認された。崩壊したカマド構築土を取り除いたところ、径45㎝ほどの火床面が現れた。構築土には石も含まれている。
出土遺物：土師器がＨ２袋ほど出土した（第164図３・４)。カマド周辺から土師器が出土している。

ＳＩ134（第46・47図）
位　　置：ＫＴ47グリッドを主体に、ＬＡ47、ＫＴ46グリッドに及ぶ範囲に位置する。
規　　模：北壁長（2.16m)、南壁長（0.5m)、東壁長3.27m、西壁は確認できなかった。東壁の長さから、一辺３ｍ強の竪穴住居だったと推測される。確認面から床面までの深さは0.18mである。
確認状態：ＳＩ133精査中に本遺構の存在が判明した。
重複遺構：ＳＩ133と重複し、本遺構が古い。
覆　　土：炭化物、焼土などを含む単層で、一気に埋め戻しが行われたと考えられる。



第46図　ＳＩ133・134

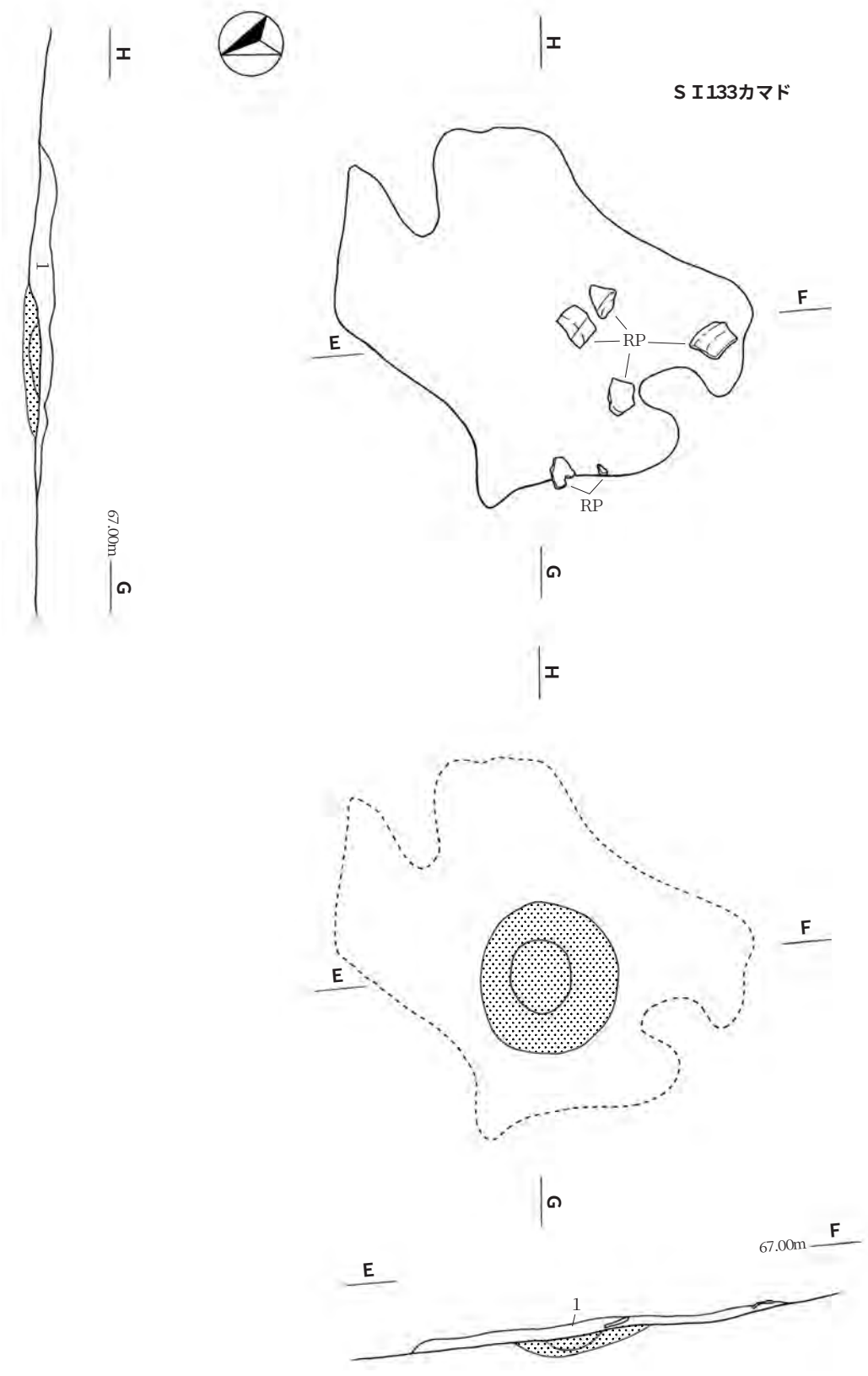
壁　　：やや急に立ち上がる。

床　　面：ＳＩ133によって中央から西側が壊されている。

壁　　溝：なし。

柱　　穴：Ｐ１～５までが主柱穴及び上屋構造に関連する柱穴と考えられる。ＳＩ133のＰ８は本遺構に伴う柱穴である可能性も考えられる。また、一回り大きいＰ６は、ＳＩ133Ｐ９と共に別遺構を構成する柱穴の可能性も考えられる。

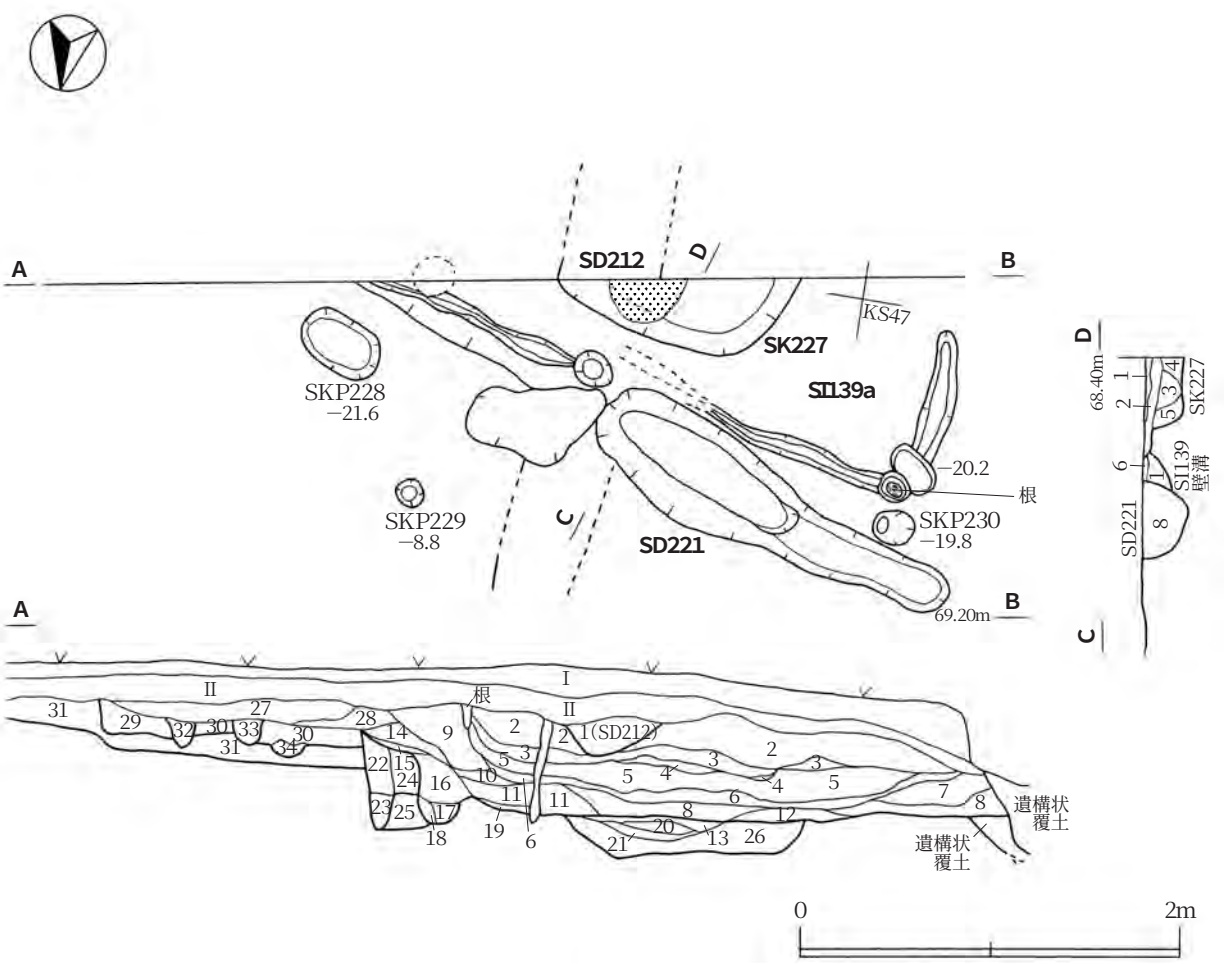
カ マ ド：煙道とみられる突出部の位置から、東壁に構築されていたとみられるが、構築材や火床面等は確認できなかった。煙道は、長さ0.64m、幅0.76mの大きさである。



1　7.5YR4/4褐色シルト＋7.5YR5/6明褐色シルト　焼土３％混じる　炭化物１％含む　しまり強　粘性弱

0　1m

第47図　ＳＩ133カマド



A－B
1 10YR3/2黒褐色 シルト しまり中 粘性中
2 10YR3/3暗褐色 シルト 10YR4/4 褐色15%斑に混じる 炭化物φ１㎜以下１%含む しまり中 粘性中
3 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト 10YR3/3暗褐色20%混じる しまり中 粘性中
4 10YR3/3暗褐色 シルト 10YR3/2黒褐色、10YR5/4にぶい黄褐色斑に２%混じる 焼土ブロックφ１㎜以下～２㎜ ５%含む 炭化物φ１㎜以下２%含む しまり中 粘性中
5 10YR3/3暗褐色 シルト 10YR5/4にぶい黄褐色斑に１%混じる 焼土ブロック・炭化物φ１㎜以下各１%未満含む しまり中 粘性中
6 10YR3/3暗褐色 シルト 焼土ブロック・炭化物φ１㎜以下～２㎜ 各20%含む しまり中 粘性中
7 10YR3/4褐色 シルト しまり中 粘性中
8 10YR4/4褐色 シルト しまり中 粘性中
9 10YR3/3暗褐色 シルト 10YR5/4にぶい黄褐色斑に１%未満混じる しまり中 粘性中
10 10YR3/3暗褐色 シルト しまり中 粘性中
11 10YR4/4褐色 シルト 10YR5/4にぶい黄褐色斑に１%未満混じる しまり中 粘性中
12 10YR4/4褐色 シルト しまり中 粘性中
13 10YR4/2灰黄褐色 シルト 焼土ブロックφ１～２㎜ ５%含む しまり中 粘性中
14 10YR3/3暗褐色 シルト 10YR3/2黒褐色斑に10%混じる 炭化物φ１㎜以下１%未満含むしまり中 粘性中
15 10YR3/3暗褐色 シルト 10YR3/2黒褐色斑に20%混じる しまり中 粘性中
16 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト しまり中 粘性中
17 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 10YR5/4にぶい黄褐色ブロックφ５～10㎜ ５%含む しまり中 粘性中
18 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 10YR5/4にぶい黄褐色ブロックφ５～10㎜ 20%含む しまり中 粘性中
19 10YR3/3暗褐色 シルト 焼土20%混じる しまり中 粘性中
20 5YR4/6赤褐色 シルト しまり中 粘性弱
21 7.5YR3/3暗褐色 シルト しまり中 粘性弱
22 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト しまり中 粘性中
23 10YR5/3にぶい黄褐色 シルト 10YR4/4褐色30%混じる しまり中 粘性中
24 10YR4/4褐色 シルト しまり中 粘性中
25 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト しまり中 粘性中
26 10YR3/3暗褐色 シルト 10YR5/4にぶい黄褐色ブロックφ５～10㎜ 30%含む しまり中 粘性中
27 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト しまり中 粘性中
28 10YR3/3暗褐色 シルト しまり中 粘性中
29 10YR3/3暗褐色 シルト 10YR5/4にぶい黄褐色斑に５%含む しまり中 粘性中
30 10YR3/3暗褐色 シルト 10YR5/4にぶい黄褐色斑に３%含む しまり中 粘性中
31 10YR4/4褐色 シルト しまり中 粘性中
32 10YR3/3暗褐色 シルト 10YR5/4にぶい黄褐色２%含む 炭化物φ１㎜以下１%未満含む しまり中 粘性中
33 10YR3/3暗褐色 シルト 10YR5/4にぶい黄褐色斑に10%混じる しまり中 粘性中
34 10YR3/3暗褐色 シルト 炭化物φ１㎜以下～５㎜ 30%含む しまり中 粘性中

C－D
1 A－Bの８層
2 A－Bの13層
3 10YR3/3暗褐色 シルト しまり中 粘性中
4 A－Bの26層
5 10YR4/6褐色シルト 10YR3/3暗褐色30%混じる しまり中 粘性中
6 10YR4/4褐色シルト しまり中 粘性中
7 10YR3/3暗褐色 シルト 10YR4/6褐色シルト10%混じる しまり中 粘性中
8 10YR3/3暗褐色 シルト しまり中 粘性中

第48図　ＳＤ221、ＳＩ139、ＳＫ227

出土遺物：土師器がH1.5袋ほど出土した。

ＳＩ139（第48図）

位　　置：ＫＲ～ＫＳ46・47グリッドに位置する。

規　　模：長軸（西北西－東南東）（2.9m）、短軸（北北東－南南西）（1.3m）。確認面から床面までの深さ0.4mほどである。

確認状況：調査区境界付近のⅥ～Ⅶ層面で周囲と異なる土の広がりを確認した。その後の精査により、竪穴住居の一部であることが判明した。

重複遺構：ＳＫ227、ＳＤ221と重複し、当遺構はＳＫ227より新しく、ＳＤ221より古い。

覆　　土：他の住居跡に比べ堆積層が多い。各層は人為的な要素を含むが、竪穴周辺の人為的撹乱土等が住居中央部に向かって流れ込んだ可能性がある。

備　　考：大半が調査区外にあることや、確認面からの掘り込みが浅いことなどから、構造については不明な点が多い。壁溝も不明瞭でとぎれる部分もあるが、北壁側には２つの壁溝があることから、ａ、ｂの２時期があったと考えられる。推測されるプランは方形か隅丸方形である。境界付近から調査区外にかけての床面に焼土が広がるが、カマドの火床面と考えられる。なおこの火床面はＳＫ227の覆土に形成されている。

遺　　物：（第164図９）。出土遺物は少なく中ポリ袋一袋程度である。

ＳＩ151（第49・50図、図版７）

位　　置：ＬＳ～ＬＴ49・50グリッドに及ぶ範囲に位置する。

規　　模：北壁長4.63m、南壁長4.70m、東壁長4.40m、西壁長4.35m。確認面から床面までの深さは、0.1m未満で極浅い。

確認状態：Ⅶ層上面で、周囲と異なる土の広がり（方形）を確認した。その後の精査により、竪穴住居跡であることが判明した。

重複遺構：ＳＫ1841と重複する。当遺構が古い。

覆　　土：地山と酷似する褐色土でしまりが強い。

壁　　：床面からほぼ素直に立ち上がる。

床　　面：ほぼ平らで全体的に堅くしまる。

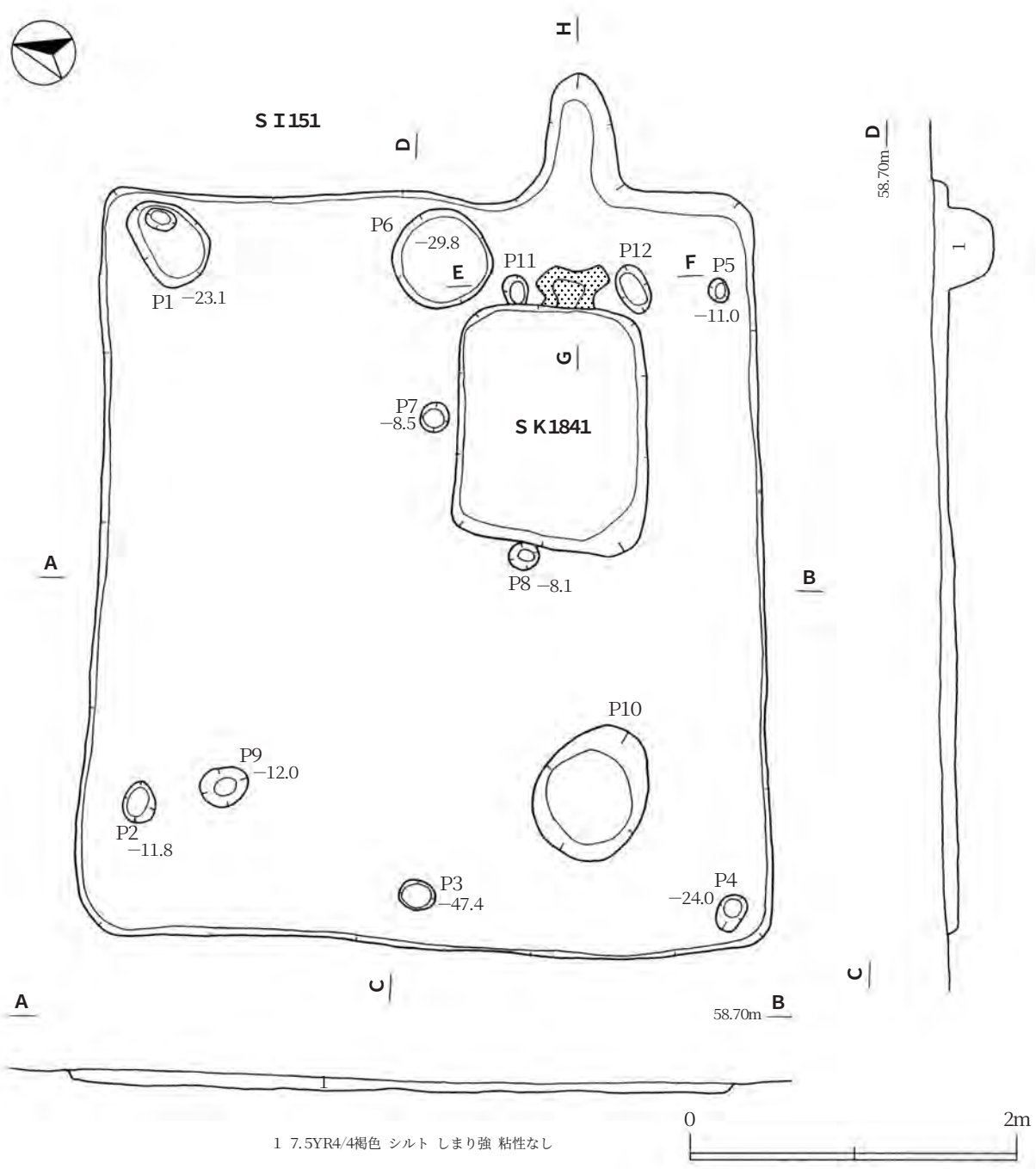
壁　　溝：なし。

柱　　穴：床面の４隅付近と中間にあるＰ１～５が主柱穴と考えられる。

カ マ ド：住居東壁の南よりから、崩壊した状態で確認された。火床面の南側は、ＳＫ1841が掘り込まれたことによって消失している。火床面の両脇（北、南）にはピットがあり、カマド芯材の抜き取り痕と考えられる。煙道は床面とほぼ同じレベルで掘り込まれ、東壁からは0.76mほど張り出している。カマド周辺からは少量の土師器が出土した。

出土遺物：土師器、鉄滓などが出土した（第165図１、第207図９・10、図版50）。遺物の出土量は少ない。カマドから土師器の小片が数点出土している。

備　　考：覆土が地山と酷似するため、壁の特定は非常に困難であった。



第49図　ＳＩ151

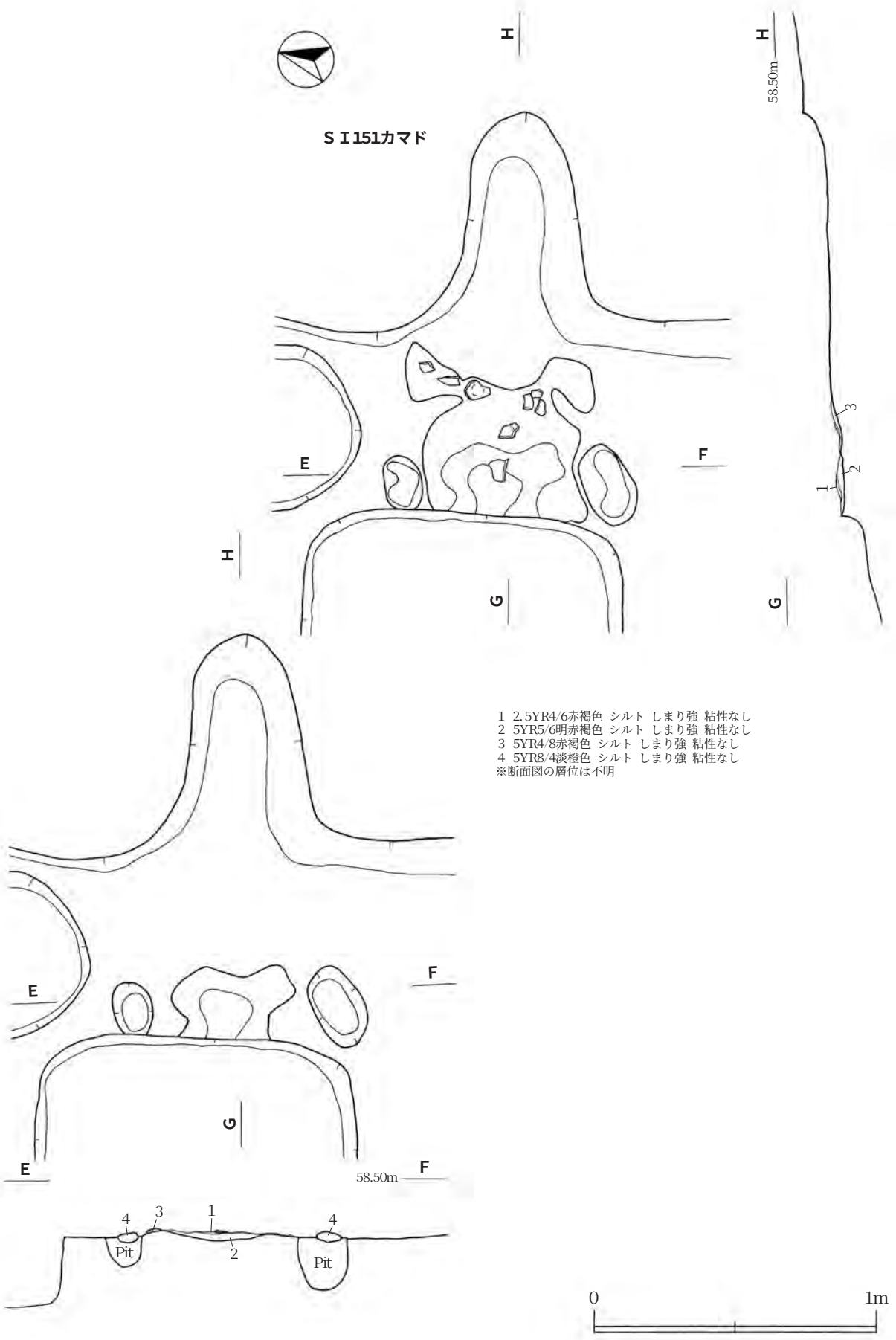
ＳＩ153（第51・52・54図、図版16・17）

位　　置：L049グリッドを主体とし、L048・50、LN48・49グリッドに及ぶ範囲に位置する。

規　　模：北壁長5.12m、南壁長5.13m、東壁長5.60m、西壁長5.70m。確認面から床面までの深さは0.4m前後である。

確認状態：確認調査で検出した礫集中地点の精査により、竪穴住居跡であることが判明した。

重複遺構：ＳＩ1723・1724と重複する。新旧関係は、1724より新しく1723より古い。

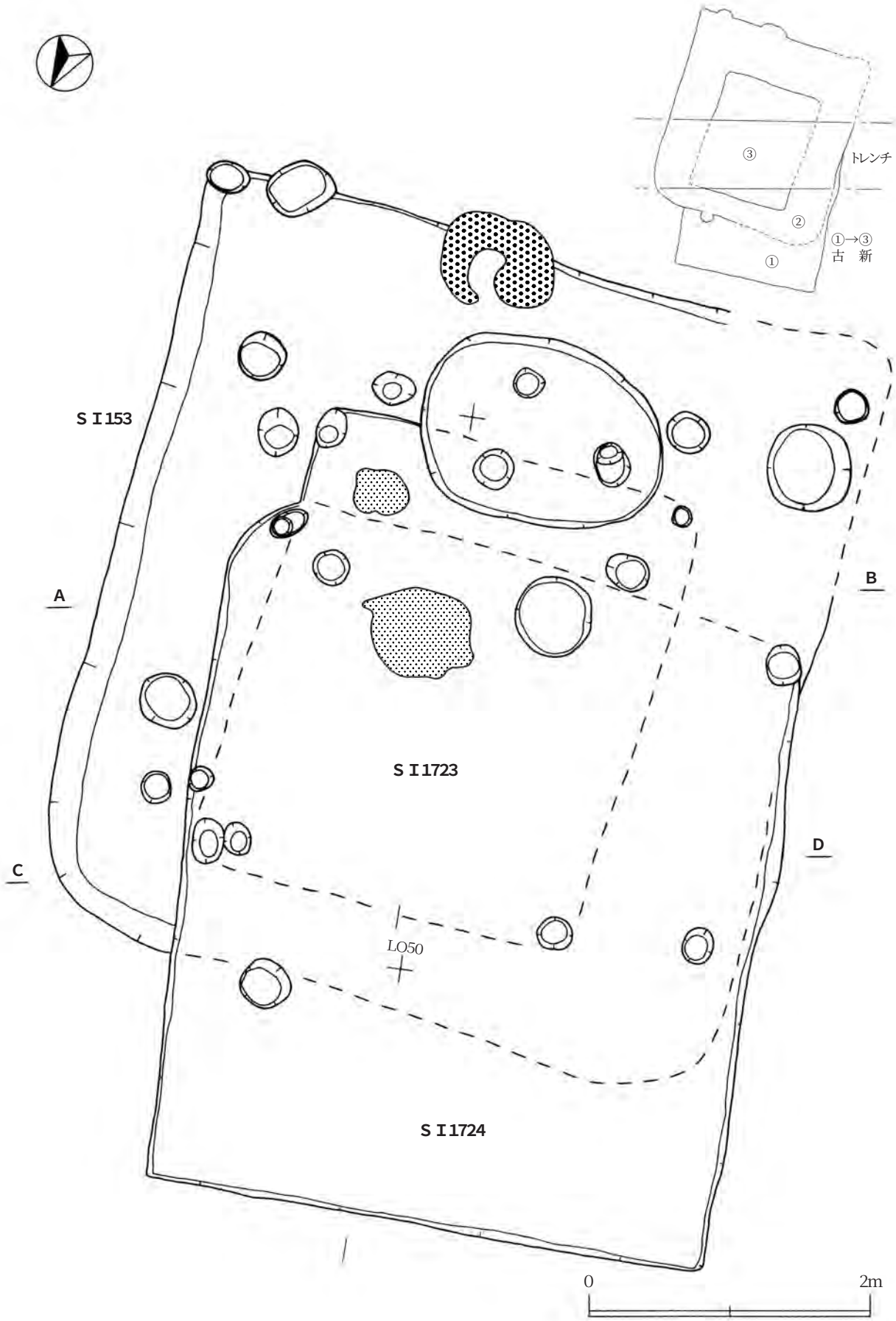


第50図　ＳＩ151カマド

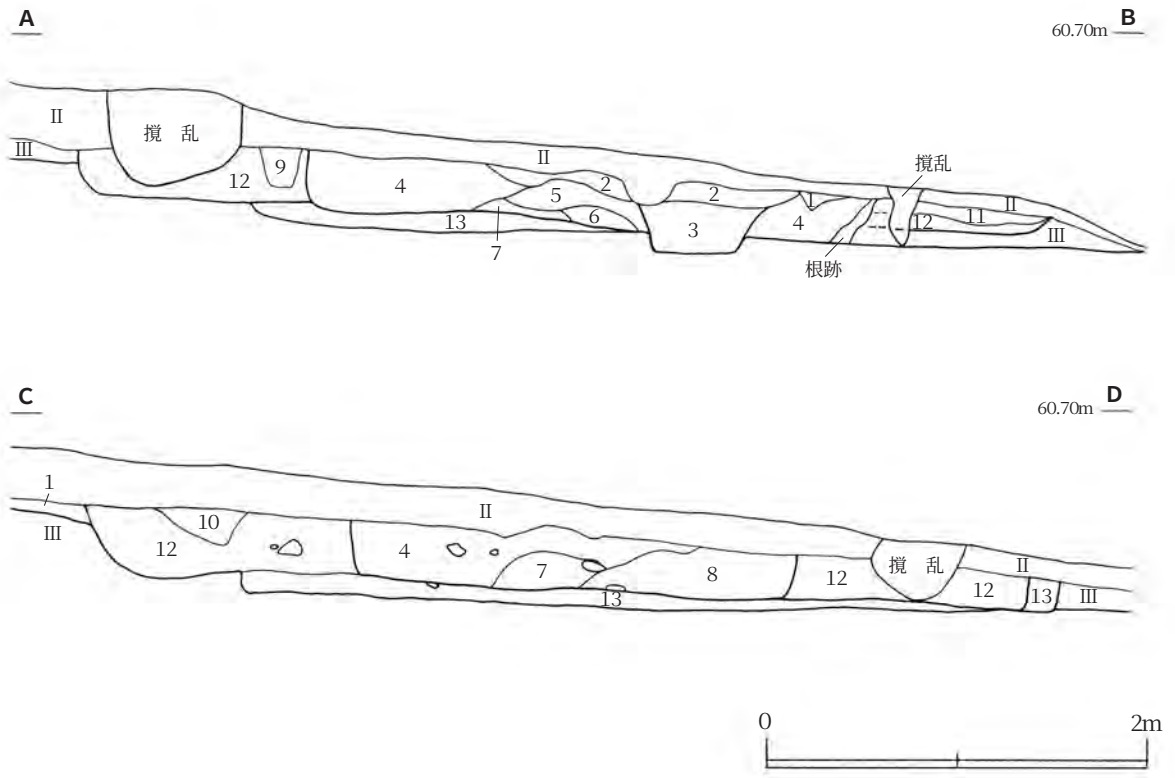
覆　　土：覆土をＳＩ1724に掘り込まれているため住居中央部分の層位は不明である。住居内壁際には広く暗褐色土が堆積している。
　壁　　：床面から壁際にかけては丸みをおびるが、中ほどからほぼ垂直に立ち上がる。
床　　面：ほぼ平らである。
壁　　溝：なし。
柱　　穴：底面から14基のピットを検出した。主柱穴はＰ１～４、Ｐ７とみられるが、則的な配置ではない。
カ マ ド：住居南壁のやや東よりから、カマド構造材が崩壊した状態で確認された。
関連施設：カマドの北側の床面に土坑状の掘り込みがある。
出土遺物：土師器を中心とする遺物（須恵器５点）がコンテナで１箱出土した（第165図、第207図11、図版40）。
備　　考：重複する３軒の住居の中では、最も規模が大きい。

ＳＩ1723（第51・52・53図、図版16・17）
位　　置：Ｌ049グリッド、ＬＮ49グリッドに及ぶ範囲に位置する。
規　　模：北壁長2.85m、南壁長2.77m、東壁長3.43m、西壁長3.33m。確認面から床面までの深さは、0.3m前後である。
確認状態：確認調査で検出した礫集中地点の精査により、竪穴住居跡であることが判明した。
重複遺構：ＳＩ153・1724と重複する。新旧関係は、1724、153より新しい。
覆　　土：他の竪穴住居跡の覆土より、濃い色調の覆土である。自然堆積と考えられる。
　壁　　：ほぼ垂直に立ち上がる。
床　　面：ほぼ平らである。
壁　　溝：なし。
柱　　穴：底面から７基のピットを検出した。主柱穴は床面の４隅に配置されるＰ１～４とみられる。
　　Ｐ７は、本遺構覆土から掘り込まれているため本遺構より新しい。
カ マ ド：住居南壁の東よりから、カマドによって形成されたとみられる火床面を検出した。その他構造材などは確認できなかった。
出土遺物：（第171図６～15、図版41）。覆土から、多量の礫が出土した。本遺構が廃絶され窪地のような状況となった時に礫等を廃棄したものと考えられる。土器類は土師器を中心に、コンテナ２／３ほど出土した。
備　　考：重複する３軒の住居の中では、最も新しく、規模が小さい。

ＳＩ1724（第51・52・54図、図版16・17）
位　　置：Ｌ049・50グリッドを主体とし、ＬＮ49・50グリッドに及ぶ範囲に位置する。
規　　模：北壁長4.05m、南壁長5.13m、東壁長4.77m、西壁長4.62m。確認面から床面までの深さは0.1m前後である。



第51図　ＳＩ153・1723・1724



Ⅱ 10YR2/2黒褐色 シルト しまり中 粘性中
Ⅲ 10YR3/3暗褐色 シルト 炭化物φ１㎜ ３％含む しまり強 粘性中
1 10YR3/3暗褐色 シルト しまり中 粘性弱
2 10YR4/4褐色 シルト 炭化物φ１～３㎜ １％含む しまり弱 粘性中
3 10YR3/2黒褐色 シルト 炭化物φ１～10㎜ ５％、焼土φ１～10㎜ ５％含む しまり弱 粘性中
4 10YR3/3暗褐色 シルト しまり中 粘性中
5 10YR3/2黒褐色（３よりやや薄い色調）シルト 炭化物φ１～10㎜ ５％、焼土φ１～10㎜ ５％含む しまり弱 粘性弱
6 10YR4/6褐色 シルト しまり強 粘性強
7 10YR3/4暗褐色 シルト しまり弱 粘性中
8 10YR3/3暗褐色 シルト しまり中 粘性弱
9 10YR3/2黒褐色 シルト しまり中 粘性中
10 10YR3/2黒褐色 シルト しまり中 粘性中
11 10YR3/2黒褐色 シルト しまり中 粘性中
12 7.5YR3/3暗褐色 シルト 炭化物φ１～３㎜ １％、焼土φ１～３㎜ １％含む しまり中 粘性弱
13 SI1724覆土 註記なし

第52図　ＳＩ153・1723・1724土層断面

確認状態：確認調査で検出した礫集中地点の精査により、竪穴住居跡であることが判明した。

重複遺構：ＳＩ153・1723と重複する。新旧関係は、当遺構が一番古い。

覆　　土：床面直上の１層のみ確認した。

壁　　：ほぼ垂直に立ち上がる。

床　　面：ほぼ平らである。

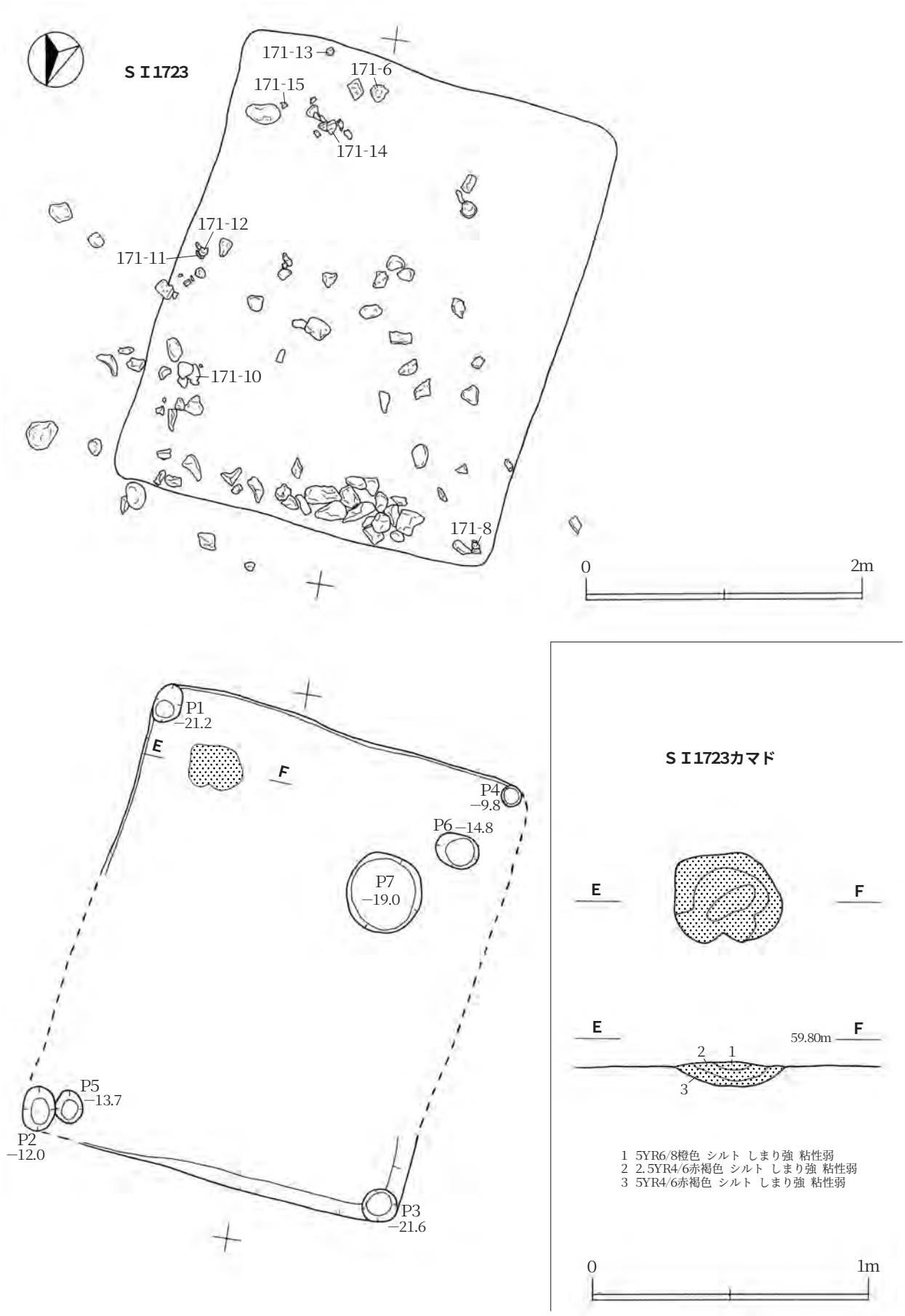
壁　　溝：なし。

柱　　穴：底面から４基のピットを検出した。主柱穴はＰ１～３とみられるが、床面北側の柱穴を確認することができなかった。

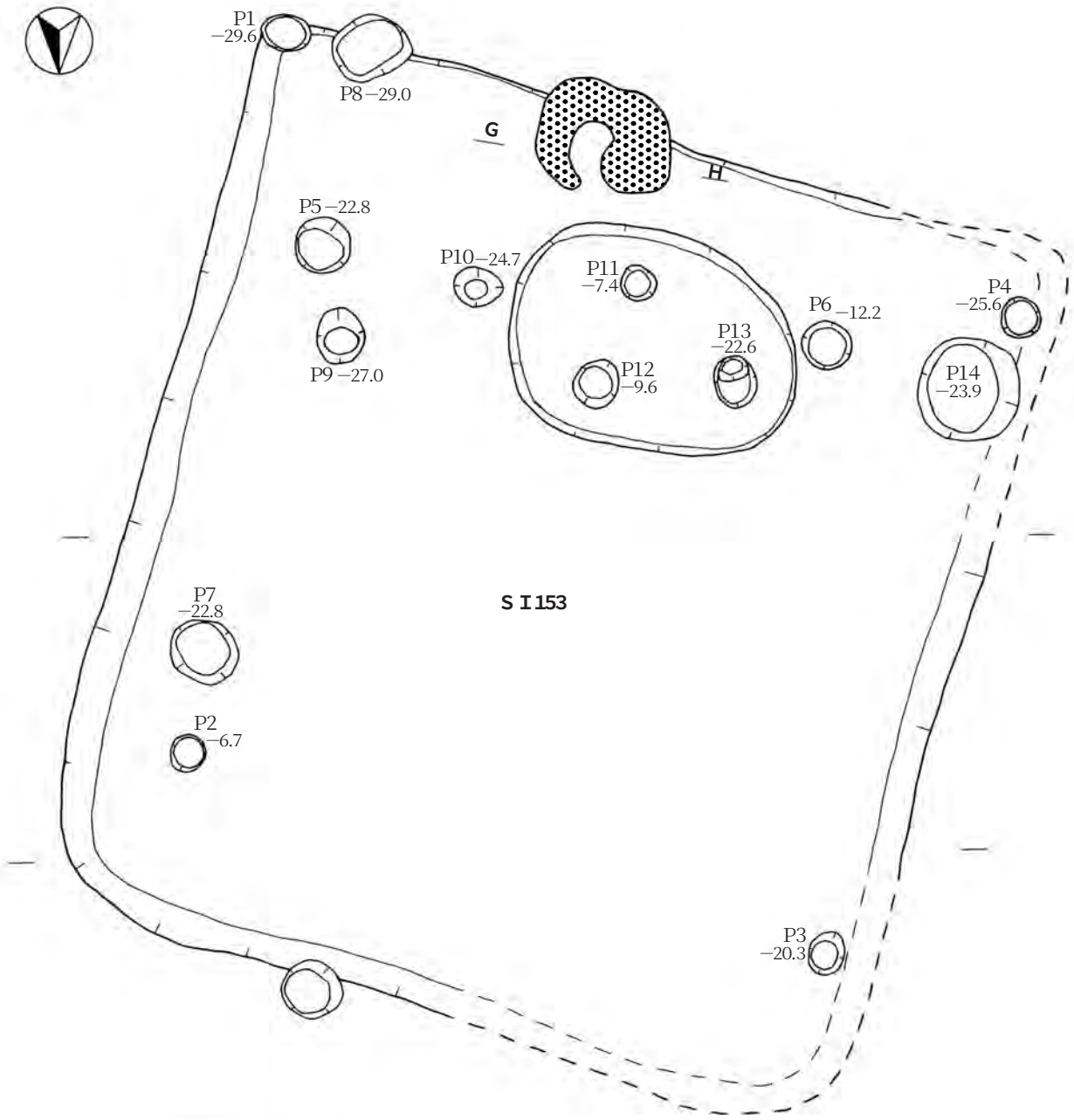
カ マ ド：住居南壁の東よりから、カマドによって形成されたとみられる火床面を検出した。その他構造材などは確認できなかった。

出土遺物：土師器が中ポリ袋一袋ほど（須恵器２点のみ）と鉄滓（第210図39）出土した。

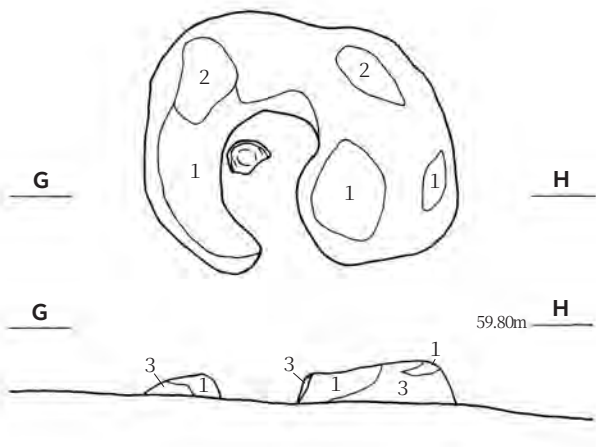
ＳＩ410（第56・57図）


ＳＩ1723
171-13
171-6
171-15
171-14
171-12
171-11
171-10
171-8
0
2m
P1
−21.2
E
F
P4
−9.8
P6 −14.8
P7
−19.0
P5
−13.7
P2
−12.0
P3
−21.6
ＳＩ1723カマド
E
F
E
F
59.80m
2
1
3
1 5YR6/8橙色 シルト しまり強 粘性弱
2 2.5YR4/6赤褐色 シルト しまり強 粘性弱
3 5YR4/6赤褐色 シルト しまり強 粘性弱
0
1m

第53図　ＳＩ1723

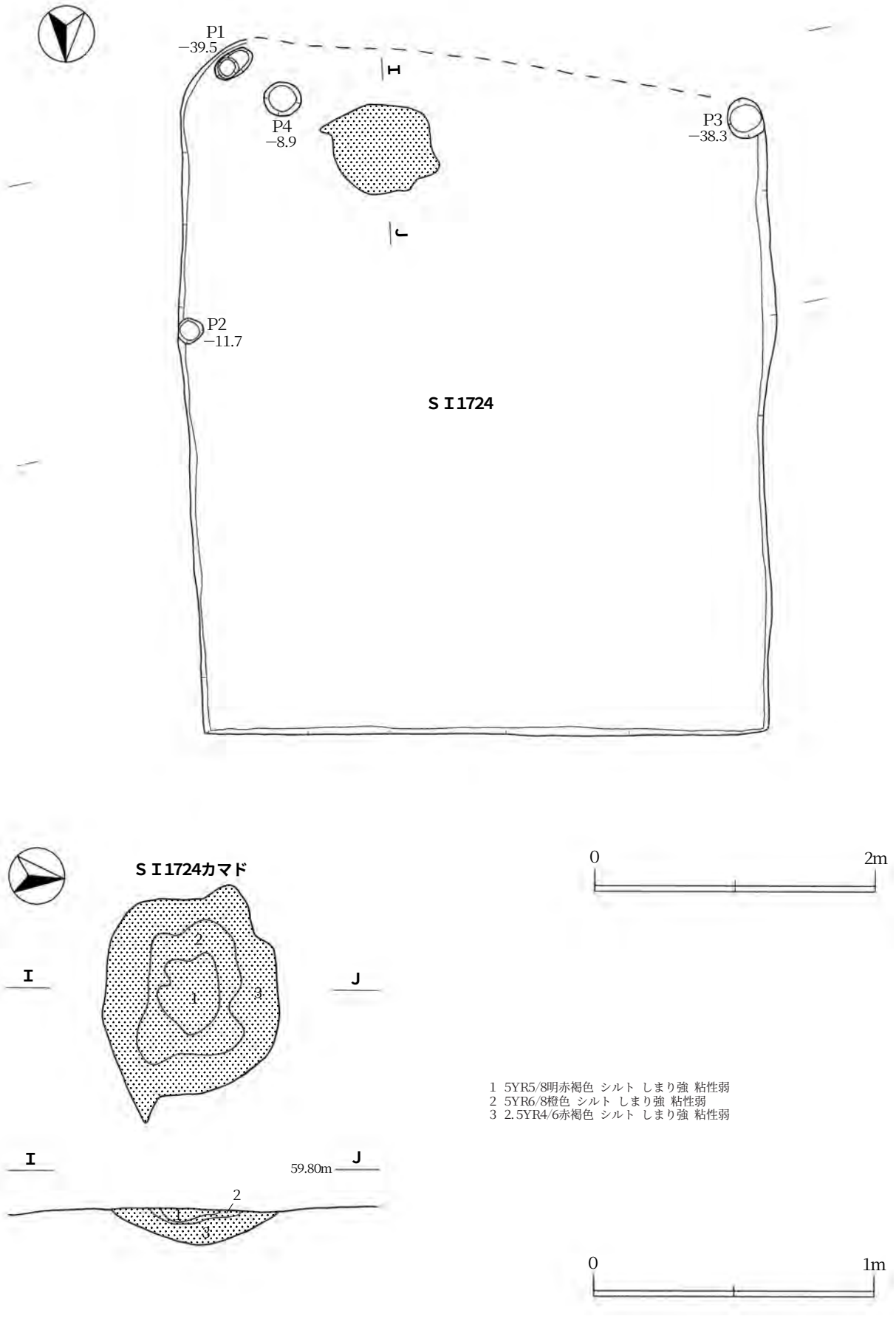


SI153カマド



1 2.5YR4/6赤褐色 シルト しまり中 粘性なし
2 7.5YR2/3極暗褐色 シルト しまり中 粘性なし
3 7.5YR2/3極暗褐色 シルト しまり中 粘性なし

第54図　SI153

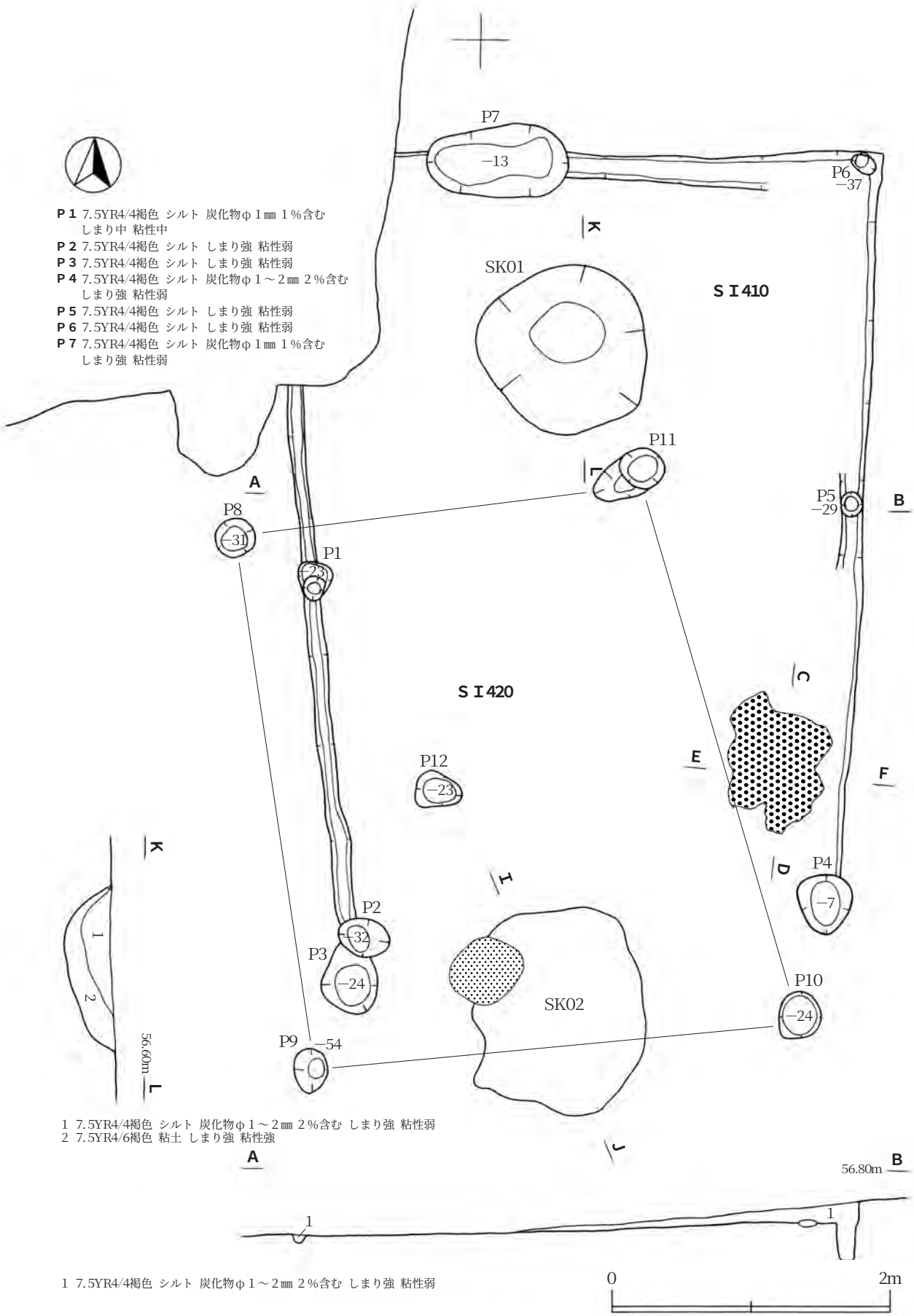

P1
−39.5
P4
−8.9
P3
−38.3
P2
−11.7
H
L
SI1724
SI1724カマド
I
J
1
2
3
0
2m
1 5YR5/8明赤褐色 シルト しまり強 粘性弱
2 5YR6/8橙色 シルト しまり強 粘性弱
3 2.5YR4/6赤褐色 シルト しまり強 粘性弱
59.80m
0
1m

第55図　SI1724

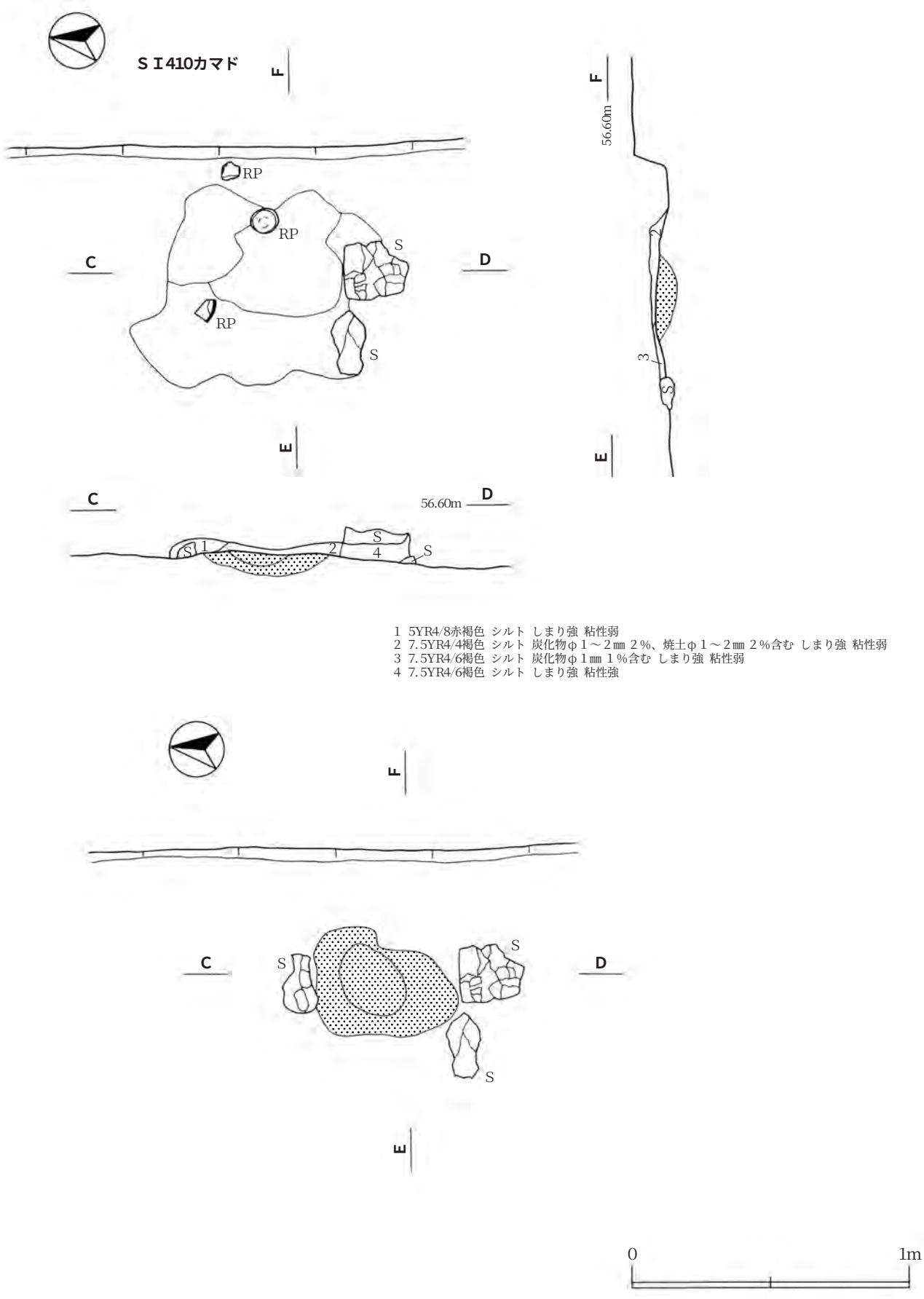
位　　置：MN47・48、MO47・48グリッド。
規　　模：北壁長（3.55m以上）、南壁長（3.6m）、東壁長5.7m、西壁長（4.2m以上）。確認面から床面までの深さは、0.2mである。
確認状態：Ⅶ層上面で、カマドに関連するとみられる焼土とそれに近接する周囲とは異なる土の広がり（不定形）を確認した。その後の精査により、２つの結果竪穴住居跡とそれに伴うカマドであることが判明した。
重複遺構：ＳＩ32、ＳＩ420と重複し、ＳＩ420より新しくＳＩ32より古い。
覆　　土：地山と酷似する褐色土の単層で、一気に埋め戻しが行われたと考えられる。
壁　　：ほぼ垂直に立ち上がる。
床　　面：ほぼ平らで全体的に硬くしまり、西に向かってやや傾斜（下傾）している。
壁　　溝：幅15㎝、床面からの深さ５㎝ほどであるが、確認できない部分もある。
柱　　穴：住居床面の４隅とその間に主柱穴（Ｐ１～６）が掘り込まれ、このうちＰ１・２・５・６が壁溝の中にある。
カ マ ド：住居東壁の南寄りから崩壊した状態で検出され、袖の芯材とみられる礫が残存していた。火床面は長軸56㎝、短軸40㎝の範囲で広がり、中央部が被熱の度合いが強い。煙道及び煙出しは確認できなかった。
関連施設：床面北よりに土坑が掘り込まれている。
出土遺物：土師器を中心とする遺物がコンテナで２／５ほど出土した。カマド確認面付近からは、土師器が数点検出された（第166図１・２、第208図21、図版40・50）。
備　　考：覆土と周囲の地山の判別が非常に困難であった。

ＳＩ420（第56・58図）

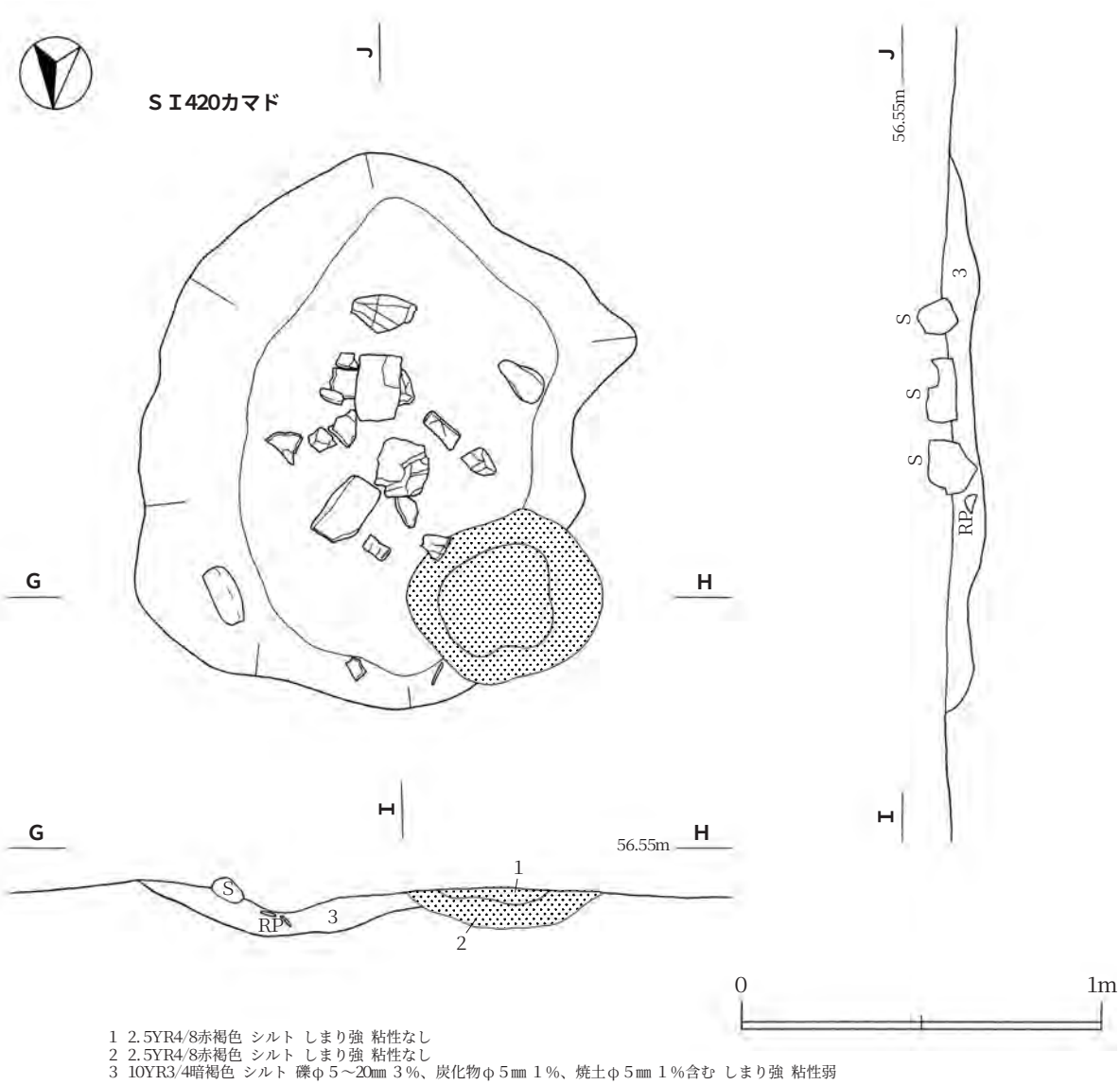
位　　置：MN47・48、MO47・48グリッド。
規　　模：北壁長（3.3m）、南壁長（3.87m）、東壁長（4.47m）、西壁長（4.21m）。床面から確認面までの深さは不明である。
確認状態：Ⅶ層上面、でカマドに関連するとみられる焼土とそれに近接する周囲とは異なる土の広がり（不定形）を確認した。その後の精査により、２つの竪穴住居跡とそれに伴うカマドであると判断した。
重複遺構：ＳＩ410と重複し、本遺構が古い。
覆　　土：残存せず。
壁　　：残存せず。
床　　面：ＳＩ410の構築により破壊された可能性がある。
壁　　溝：確認できなかった。
柱　　穴：Ｐ８～11が主柱穴とみられる。
カ マ ド：火床面の位置からカマドは住居南壁側に構築されていたと考えられる。カマドは崩壊した状態で検出され、火床面から南東側にかけて暗褐色シルトを覆土とする土坑状の掘り込みがあり、火床面は一部この掘り込み覆土にも広がっている。掘り込み覆土上にはカマドの



第56図　ＳＩ410・420



第57図　ＳＩ410カマド



第58図　ＳＩ420カマド

芯材とみられる礫が散在していた。火床面は長軸57㎝、短軸49㎝の広がりをもち、中央部が被熱の度合いが強い。煙道は確認できなかった。

火床面と掘り込みの関係は火床面が新しく、掘り込みは当初のカマドを廃棄する際の行為によって生じたものである可能性がある。

出土遺物：土師器を中心とする遺物がコンテナで１／２ほど出土した。カマド近くの掘り込みから土師器が数点検出された（第166図３・４）。

ＳＩ500（第59・60・61・62・64・65図、図版13・14・15）

位　　置：ＬＥ49グリッドを中心とし、ＬＥ48・49、ＬＤ48・49グリッドに及ぶ範囲に位置する。

規　　模：北壁長3.28m、南壁長3.33m、東壁長3.37m、西壁長3.51m。確認面から床面までの深さは、0.25mである。

確認状態：Ⅶ層上面で、周囲と異なる土の広がり（方形）を確認した。その後の精査により、竪穴住

居跡であることが判明した。

重複遺構：ＳＩ777と重複し、本遺構の方が新しい。

覆　　土：ほとんどが混合土を主体とする１層で占められ、一気に埋め戻しが行われたと考えられる。

壁　　：ほぼ垂直に立ち上がる。

床　　面：ほぼ平らで全体的に硬くしまるが、カマド周辺から西壁にかけて細かなコブ状の凹凸が見られ、特にしまりが強い。

壁　　溝：幅12～23㎝、床面からの深さ10～18㎝で壁際を一巡している。

柱　　穴：住居床面の４隅とその間に主柱穴（Ｐ１～８）が壁溝と重複するように掘り込まれている。これ以外にも壁溝と重複するＰ９・10や壁溝に隣接するP11などは住居の構造に関連する柱穴と考えられる。

カ マ ド：住居南壁の西寄りに付設されている。崩壊した状態で検出され、崩壊した構築土の上面から、土師器と礫？が出土した。構築土の下には両袖の芯材が残っており、芯材には直方体に近い形状の軟質の礫が用いられている。火床面は、長軸0.43m、短軸0.41ｍの範囲に広がり、中央部が被熱の度合いが高い。火床面の南側に接して楕円形の礫が出土しているが、被熱していることや、平らな面が認められること、近くのカマド底面に窪みが見られることなどから、窪みに礫を置き支脚として使用していた可能性が高いと考えられる。火床面よりも北側の床面からは、炭化材が出土した。煙道は不明瞭で、カマドの軸線の断面観察では、カマド底面のラインが住居の壁近くで急に外に向かって立ち上がっていく状態が確認できることから、煙道は極めて短かいものであったと推測される。

関連施設：住居南東隅付近の床面には焼土があり、Ｐ12によって切られている。

出土遺物：（第167図５・６、図版40）。土師器を中心とする遺物がコンテナで１／２ほど出土した。

ＳＩ777（第59・60・61・62・66・67図、図版14・15）

位　　置：ＬＥ47グリッドを主体とし、ＬＤ46～48グリッド、ＬＥ46・48グリッド、ＬＦ46～48グリッドに及ぶ範囲に位置する。

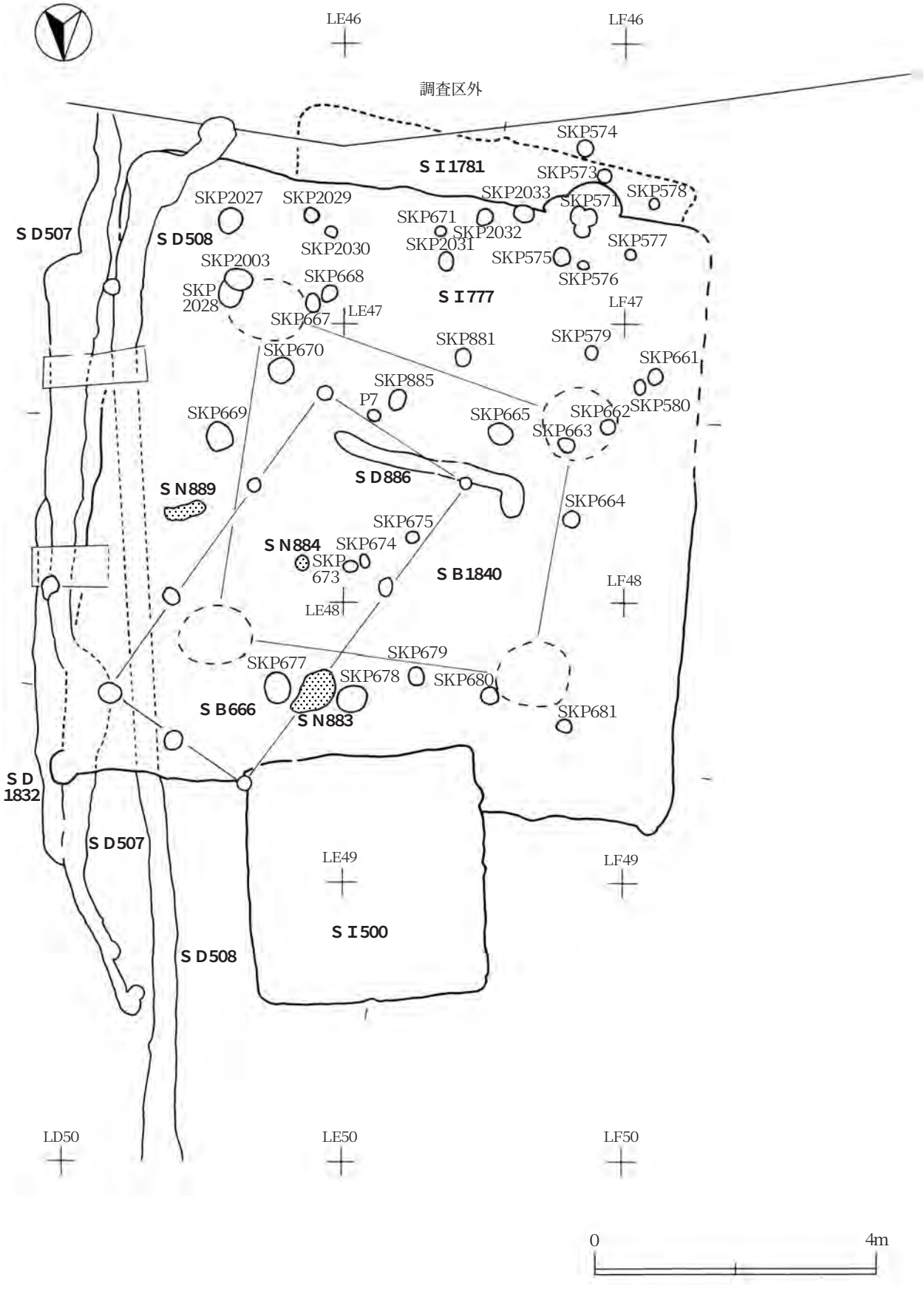
規　　模：北壁長8.8m、南壁長（7.8m）、東壁長9.06m、西壁長（7.0m）。確認面から床面までの深さは、0.90～0.20mである。

確認状態：Ⅵ～Ⅶ層上面で、周囲と異なる土の広がり（不定形）を確認した。その後の精査により、竪穴住居跡であることが判明した。

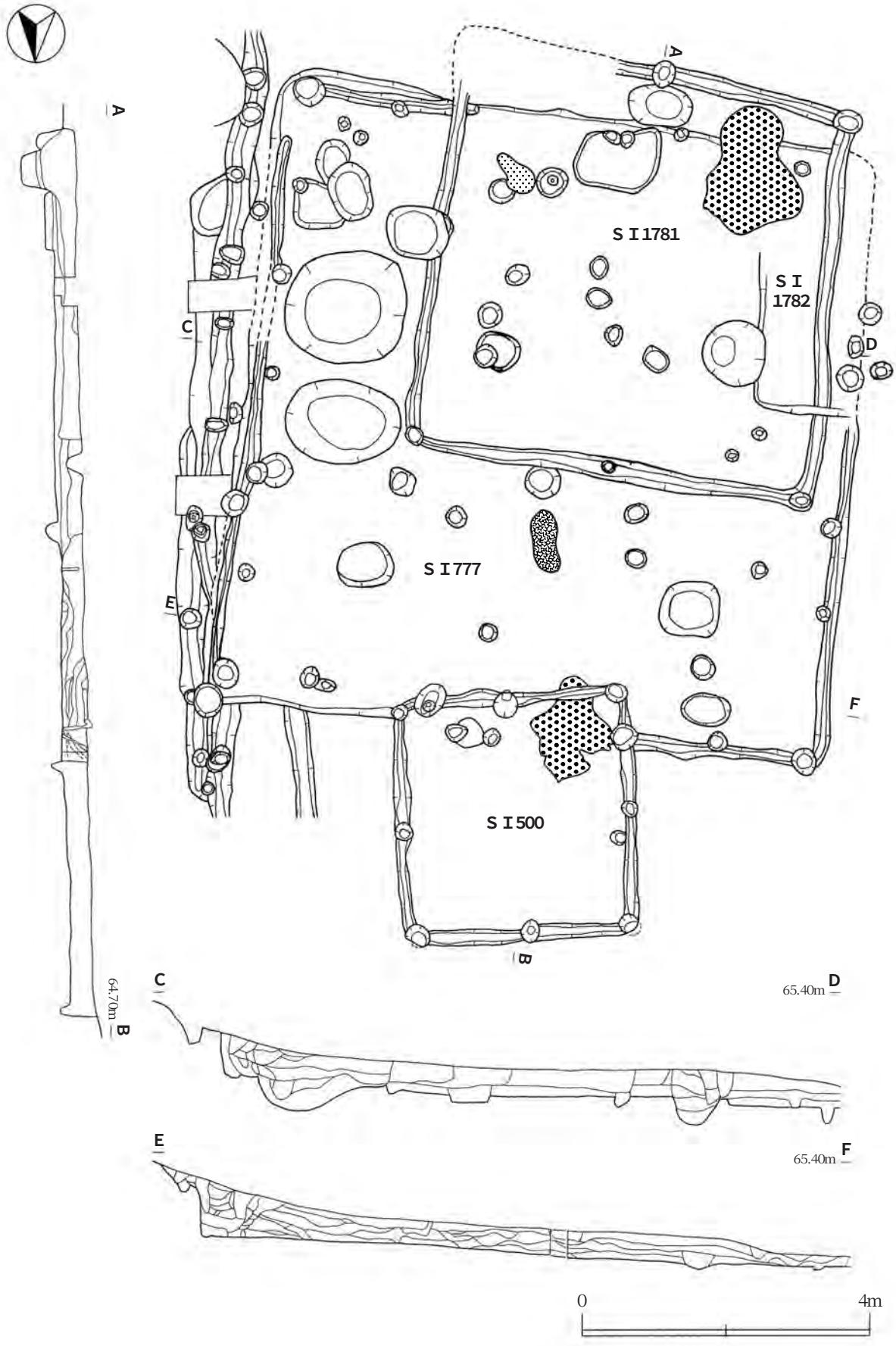
重複遺構：ＳＩ500・1781、ＳＩ1782、ＳＢ1841、ＳＫ1839（掘り込みＣ部分）、ＳＤ507・508・886・1832・1833と重複する。このうち当遺構より古いのが、ＳＩ1781、ＳＫＩ1782で、それ以外は当遺構より新しい。

覆　　土：大小様々な遺構の重複により複雑な様相を示しているが、ほとんどが人為的要素を含む層である。埋め戻しや、標高の高い側からの人為的撹乱土の流れ込みなどにより遺構が埋没したと考えられる。

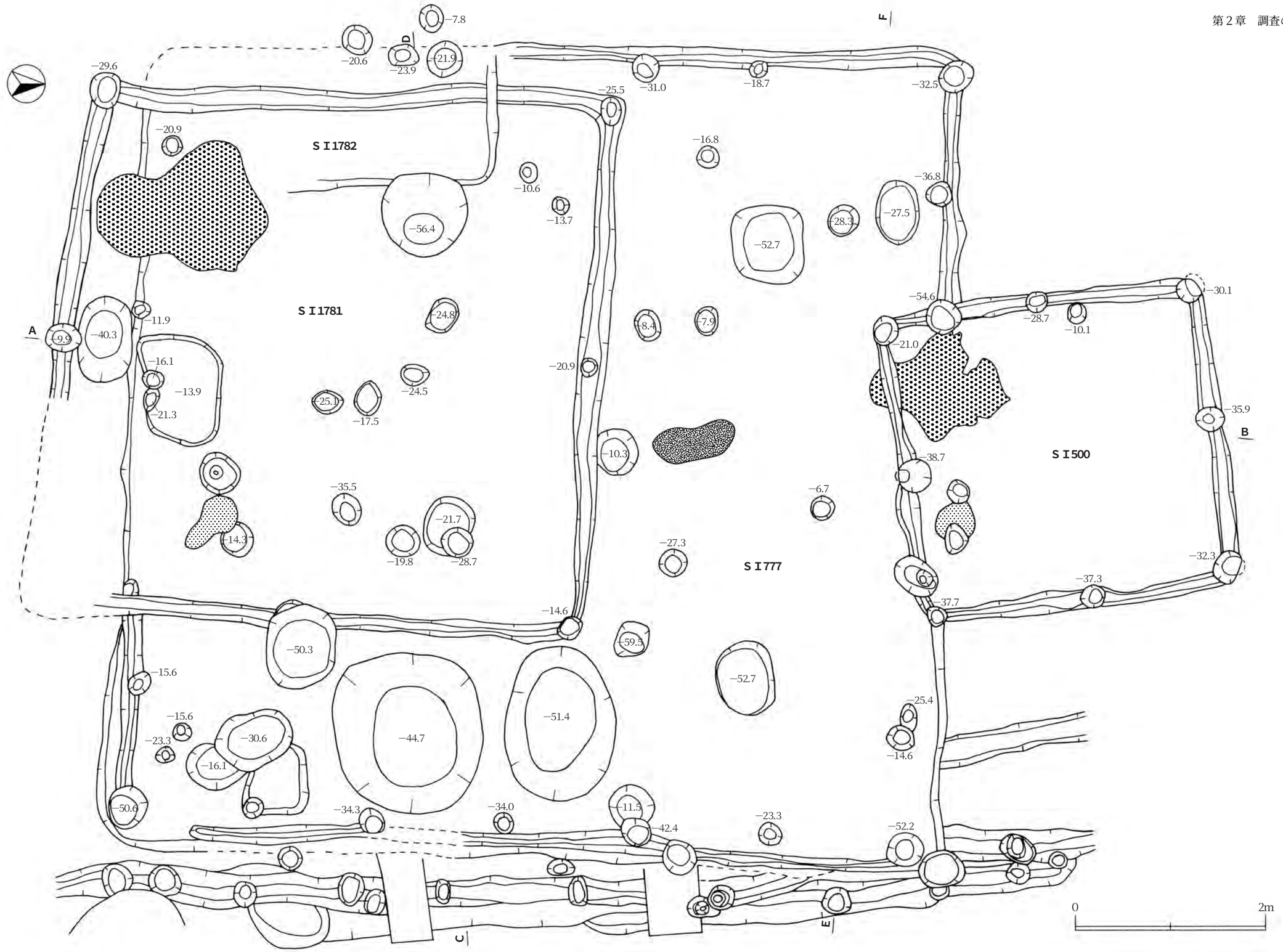
壁　　：壁はほぼ垂直に立ち上がる。



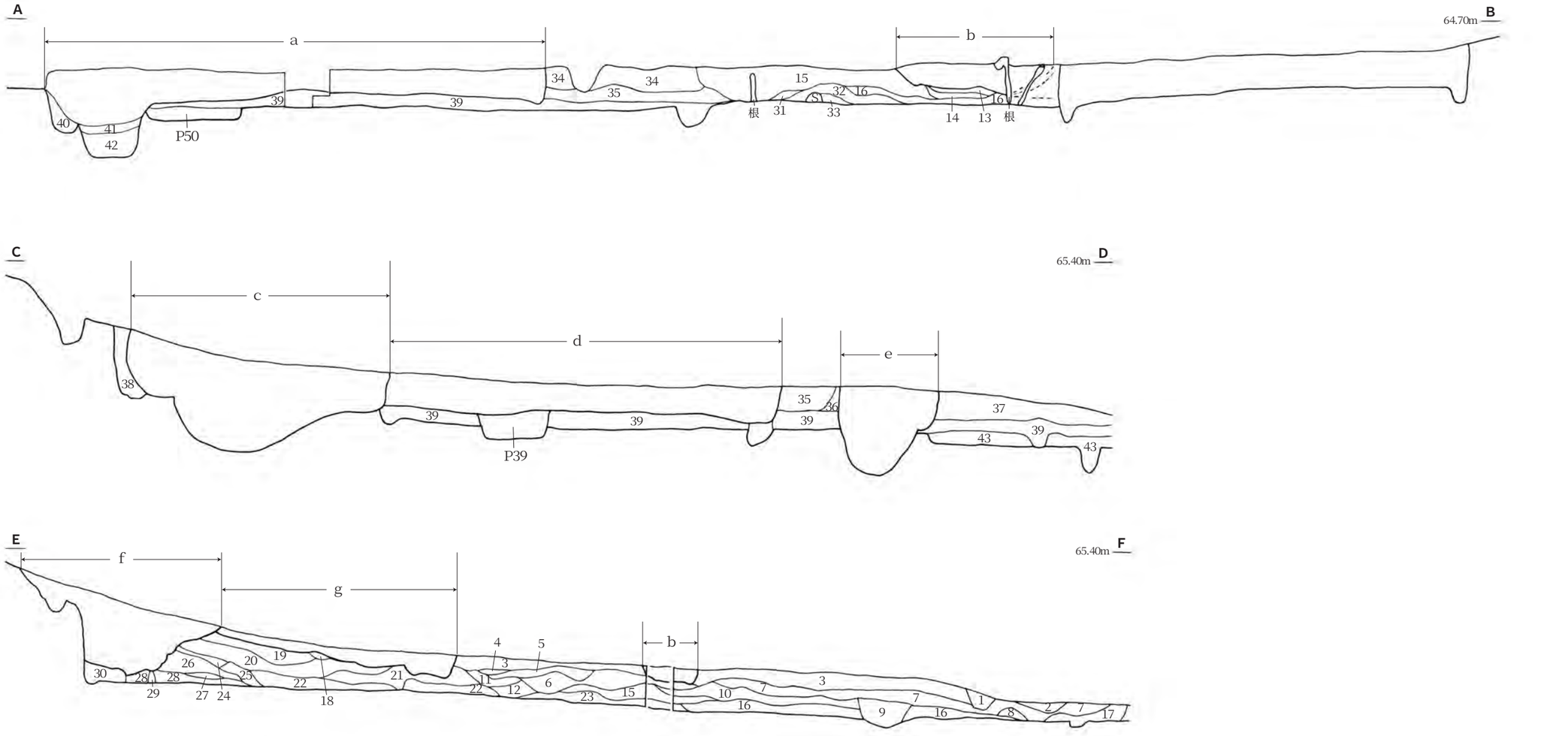
第59図　ＳＩ500・777周辺の遺構



第60図　SI500・777・1781・1782



第61図　SI500・777・1781・1782

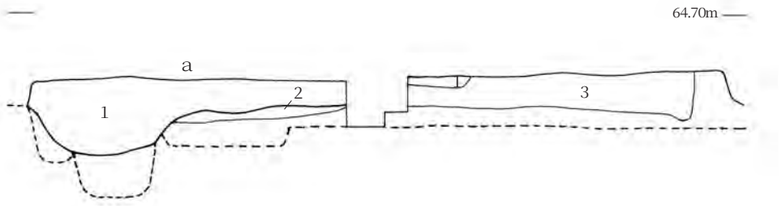


1 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 地山10%混じる しまり中 粘性中
2 10YR4/4褐色 シルト 炭化物１%含む しまり中 粘性中
3 10YR4/4褐色 シルト 10YR5/4にぶい黄褐色ブロック30%、焼土３%混じる 炭化物１%含む しまり強 粘性中
4 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 焼土８%混じる 炭化物８%含む しまり中 粘性中
5 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト 10YR4/3にぶい黄褐色10%混じる 炭化物１%含む しまり中 粘性中
6 10YR3/4暗褐色 シルト 地山20%、焼土３%混じる 炭化物５%含む しまり中 粘性中
7 10YR3/4暗褐色 シルト 10YR5/4にぶい黄褐色20%、焼土３%混じる 炭化物３%含む しまり中 粘性中
8 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト 炭化物１%含む しまり中 粘性中
9 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 炭化物１%含む しまり弱 粘性中
10 10YR3/4暗褐色 シルト 炭化物１%含む しまり中 粘性中
11 10YR3/4暗褐色 シルト 10YR5/4にぶい黄褐色５%、焼土10%、炭８%混じる しまり中 粘性中
12 10YR4/4褐色 シルト 炭化物１%含む しまり弱 粘性中
13 10YR5/6黄褐色 シルト 10YR4/4褐色20%混じる 炭化物１%含む しまり強 粘性中
14 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 炭化物３%含む しまり中 粘性中
15 10YR4/4褐色 シルト 10YR5/6黄褐色15%、焼土１%混じる 炭化物５%含む しまり強 粘性中
16 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト 焼土５%混じる 炭化物１%含む しまり中 粘性中
17 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト 10YR4/3にぶい黄褐色20%混じる 炭化物１%含む しまり中 粘性中
18 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 7.5YR4/4褐色ブロックφ10～20㎜20%、炭化物φ１～５㎜ ２%含む しまり強 粘性中
19 10YR3/4暗褐色 シルト 10YR5/4にぶい黄褐色ブロック状15%混じる 炭化物φ１～２㎜ １%含む しまり強 粘性中
20 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 10YR5/4にぶい黄褐色ブロック状５%混じる 炭化物φ１～２㎜ １%含む しまりやや強 粘性中
21 10YR4/4褐色 シルト 地山ブロックφ５～10㎜ ８%、炭化物３%含む しまり中 粘性中
22 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト しまり弱 粘性中
23 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 10YR5/4にぶい黄褐色ブロック状30%、焼土１%混じる 炭化物１%含む しまり弱 粘性中
24 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト しまり強 粘性中
25 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト しまり弱 粘性中
26 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト 炭化物φ２～５㎜ １%、焼土φ１～２㎜ １%含む しまり強 粘性中
27 10YR3/3暗褐色 シルト しまりやや強 粘性中
28 7.5YR4/4褐色 シルト 10YR5/4にぶい黄褐色ブロック含む しまり弱 粘性中
29 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト しまり中 粘性中
30 10YR3/3暗褐色 シルト しまり強 粘性中
31 10YR4/4褐色 シルト 10YR3/2黒褐色30%混じる 炭化物10%、焼土10%含む しまり中 粘性中
32 10YR3/2黒褐色 シルト しまり弱 粘性中
33 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト しまり中 粘性中
34 10YR3/4暗褐色 シルト 10YR5/6黄褐色15%、焼土１%混じる 炭化物１%含む しまり中 粘性中
35 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 10YR5/6黄褐色５%、焼土３%混じる 炭化物１%含む しまり中 粘性中
36 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 10YR5/6黄褐色10%混じる 炭化物３%含む しまり中 粘性中
37 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 10YR5/6黄褐色ブロックφ５～10㎜ ５%、炭化物３%含む しまり中 粘性中
38 10YR6/6明黄褐色 シルト 炭化物１%含む しまり強 粘性中
39 黄褐色シルトSI777貼り床（SI1781覆土）しまり中 粘性中
40 10YR3/2黒褐色 シルト 炭化物３%含む しまり中 粘性中
41 7.5YR4/4褐色 シルト 焼土40%混じる 炭化物８%含む しまり弱 粘性中
42 7.5YR3/2黒褐色 シルト 焼土φ１～２㎜10%、炭化物８%含む しまり弱 粘性中
43 SI1782覆土 シルト しまり中 粘性中

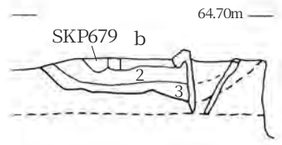
0　2m

第62図　ＳＩ500・777・1781・1782土層断面

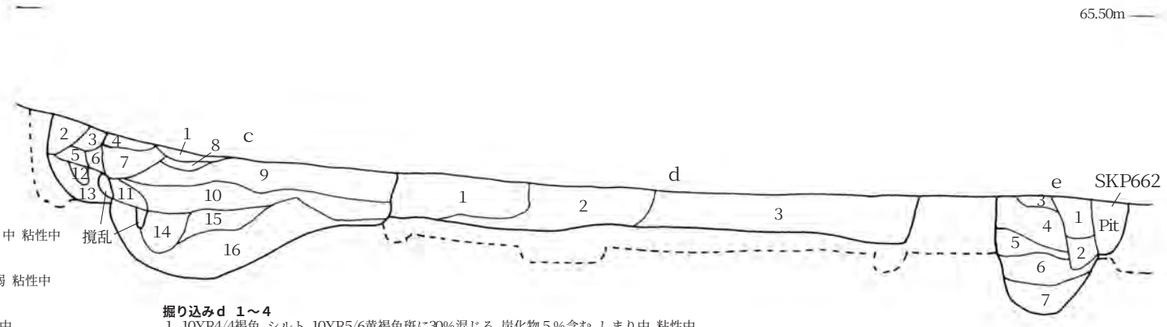
ＳＩ777関連
（直接関係部分１～43層 これ以外に覆土を掘り込んでいる遺構を、掘り込みａ～ｇとして表し、各々１番から註記をおこなっている）



掘り込みａ　１～３
1　10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 焼土１%混じる 炭化物１%含む しまり中 粘性中
2　10YR5/6黄褐色 シルト 炭化物１%含む しまり強 粘性中
3　10YR3/3暗褐色 シルト 10YR5/4にぶい黄褐色20%、焼土５%混じる 炭化物３%含む しまり中 粘性中



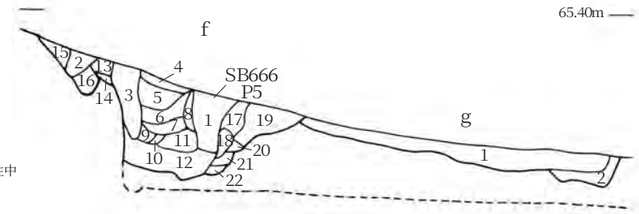
掘り込みｂ　１～３
1　10YR5/6黄褐色 シルト 焼土20%混じる 炭化物１%含む しまり強 粘性中
2　10YR5/6黄褐色 シルト 焼土５%混じる 炭化物３%含む しまり強 粘性中
3　10YR4/4褐色 シルト 10YR5/6黄褐色シルト10%、焼土５%混じる 炭化物５%含む しまり強 粘性中



掘り込みｃ　１～16
1　10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 焼土５%、地山３%混じる 炭化物５%含む しまり中 粘性中
2　10YR5/4にぶい黄褐色 シルト 10YR4/4褐色20%、焼土５%混じる 炭化物５%含む しまり中 粘性中
3　10YR5/4にぶい黄褐色 シルト 10YR4/4褐色10%、地山10%、焼土１%混じる 炭化物５%含む しまり中 粘性中
4　10YR6/6明黄褐色 シルト 10YR4/4褐色20%混じる 炭化物３%含む しまり中 粘性中
5　10YR4/4褐色 シルト 地山ブロック10%、炭化物５%含む しまり強 粘性中
6　10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 10YR4/4褐色20%混じる 地山ブロック８%、炭化物１%含む しまり弱 粘性中
7　10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 地山ブロック５%、炭化物１%含む しまり弱 粘性中
8　10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 炭化物３%、地山ブロック１%含む しまり中 粘性中
9　10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 10YR6/6明褐色40%、焼土１%混じる 炭化物５%含む しまり中 粘性中
10　10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 10YR5/4にぶい黄褐色30%、焼土５%混じる 炭化物３%含む しまり中 粘性中
11　10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 炭化物１%含む しまり中 粘性中
12　10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 炭化物３%含む しまり中 粘性中
13　10YR4/4褐色 シルト　焼土１%混じる 炭化物３%含む しまり中 粘性中
14　10YR4/4褐色 シルト 10YR5/4にぶい黄褐色20%、焼土５%混じる 炭化物８%、地山ブロック１%含む しまり中 粘性中
15　10YR4/4褐色 シルト 10YR5/6黄褐色10%、焼土８%混じる 炭化物５%、地山ブロック３%含む しまり中 粘性中
16　10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 10YR5/6黄褐色５%、焼土５%混じる 炭化物５%含む しまり中 粘性中

掘り込みｄ　１～４
1　10YR4/4褐色 シルト 10YR5/6黄褐色斑に30%混じる 炭化物５%含む しまり中 粘性中
2　10YR4/4褐色 シルト 10YR5/6黄褐色斑に25%混じる 炭化物５%含む しまり中 粘性中
3　10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 炭化物８%、地山ブロック５%含む しまり中 粘性中

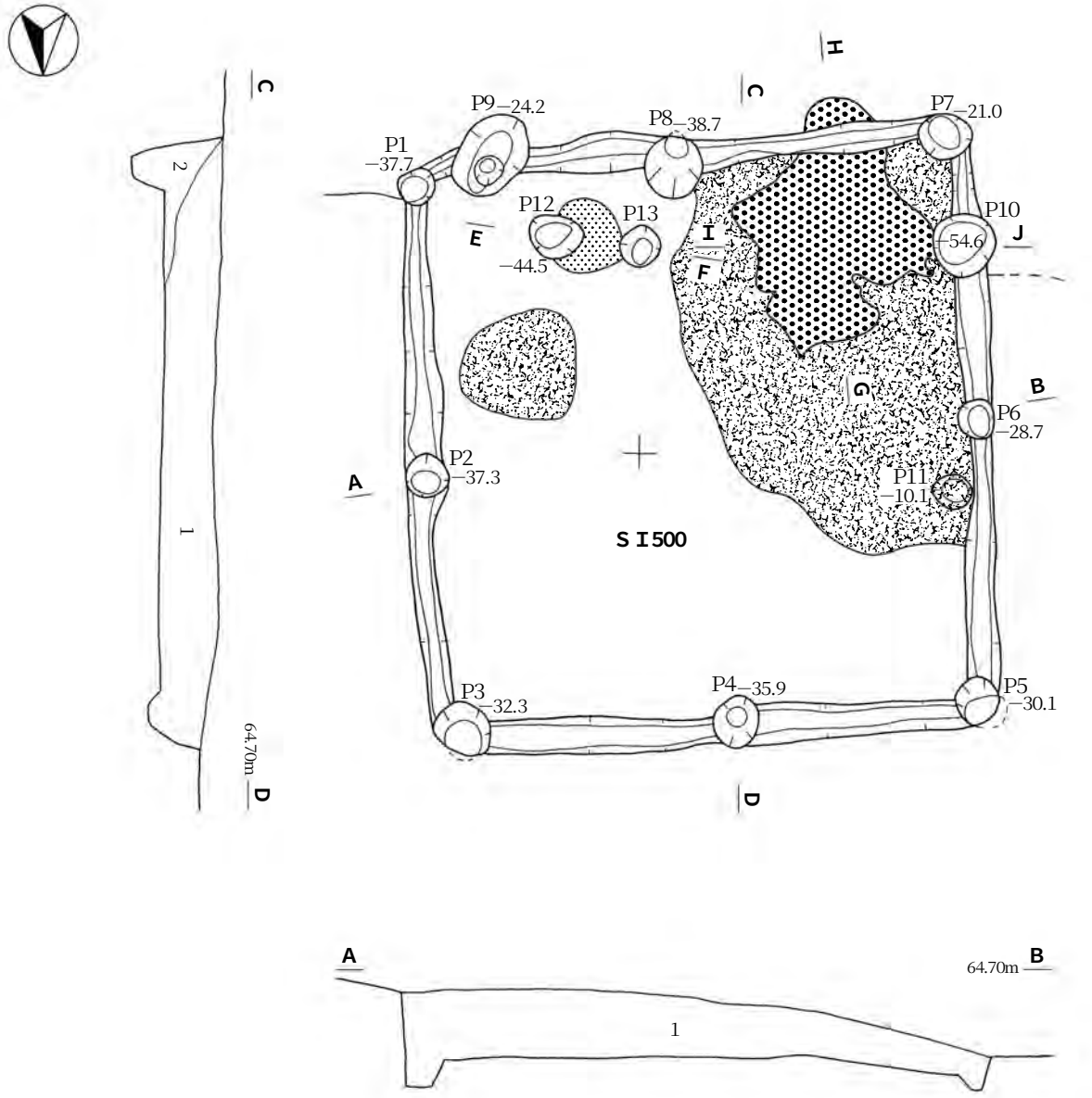
掘り込みｅ　１～７
1　10YR3/3暗褐色 シルト 10YR5/6黄褐色８%、焼土８%混じる 炭化物５%含む しまり中 粘性中
2　10YR3/3暗褐色 シルト 10YR5/6黄褐色20%、焼土１%混じる 炭化物５%含む しまり中 粘性中
3　10YR3/3暗褐色 シルト 焼土５%混じる 炭化物５%含む しまり中 粘性中
4　10YR4/4褐色 シルト 焼土１%混じる 10YR5/6黄褐色ブロックφ10～20㎜ 30%、炭化物３%含む しまり強 粘性中
5　10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 10YR5/6黄褐色ブロックφ10㎜ 40%、炭化物１%含む しまり弱 粘性中
6　10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 10YR5/6黄褐色ブロックφ10～20㎜ 10%、炭化物１%含む しまり弱 粘性中
7　10YR5/6黄褐色 シルト 炭化物１%含む しまり中 粘性中



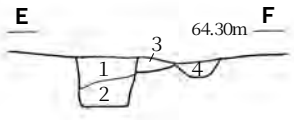
掘り込みｆ　１～22
1　10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 暗褐色20%、焼土１%混じる しまり強 粘性中
2　10YR3/2黒褐色 シルト にぶい黄褐色ブロック状１%混じる しまりやや強 粘性中
3　10YR3/3暗褐色 シルト にぶい黄褐色ブロック状２%混じる しまり強 粘性中
4　10YR3/3暗褐色 シルト 炭化物φ１～５㎜ ２%含む しまりやや強 粘性中
5　10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 炭化物１%含む しまり中 粘性中
6　10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 10YR5/4にぶい黄褐色ブロック状20%混じる 炭化物１%含む しまり強 粘性中
7　10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 10YR5/4にぶい黄褐色ブロックφ５～10㎜ 15%、炭化物１%含む しまり強 粘性中
8　10YR3/3暗褐色 シルト 炭化物φ１～２㎜ １%含む しまり弱 粘性中
9　10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 10YR5/4にぶい黄褐色ブロックφ５～10㎜ 10%含む しまりやや強 粘性中
10　10YR5/4にぶい黄褐色 シルト ブロック しまり強 粘性中
11　10YR3/3暗褐色 シルト にぶい黄褐色ブロック状15%混じる 炭化物φ１～２㎜ ２%、焼土φ１～２㎜ １%含む しまりやや強 粘性中
12　10YR5/4にぶい黄褐色 シルト しまり強 粘性中
13　10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 炭化物１%含む しまり中 粘性中
14　10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 10YR5/4にぶい黄褐色ブロック状20%混じる 炭化物１%含む しまり強 粘性中
15　10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 炭化物１%含む しまり中 粘性中
16　10YR3/3暗褐色 シルト しまり弱 粘性中
17　10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 10YR5/4にぶい黄褐色ブロックφ５～20㎜ 10%、炭化物φ１～２㎜ １%、焼土φ１～２㎜ １%含む しまり強 粘性中
18　10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 10YR5/4にぶい黄褐色ブロック状10%混じる 炭化物φ１～２㎜ ２%含む しまり強 粘性中
19　10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 10YR5/4にぶい黄褐色ブロックφ５～20㎜ ５%、炭化物φ１～２㎜ １%含む しまり強 粘性中
20　10YR3/3暗褐色 シルト 10YR5/4にぶい黄褐色ブロック状10%混じる しまり強 粘性中
21　10YR3/3暗褐色 シルト 10YR5/4にぶい黄褐色ブロック状20%混じる しまりやや強 粘性中
22　7.5YR5/4にぶい黄褐色 シルト しまり弱 粘性中

掘り込みｇ　１～２
1　10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 10YR5/4にぶい黄褐色10%、10YR3/2灰黄褐色10%混じる 炭化物１%含む しまり中 粘性中
2　10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 地山ブロック５%、炭化物１%含む しまり中 粘性中

第63図　ＳＩ777内の掘り込みａ～ｇ土層断面

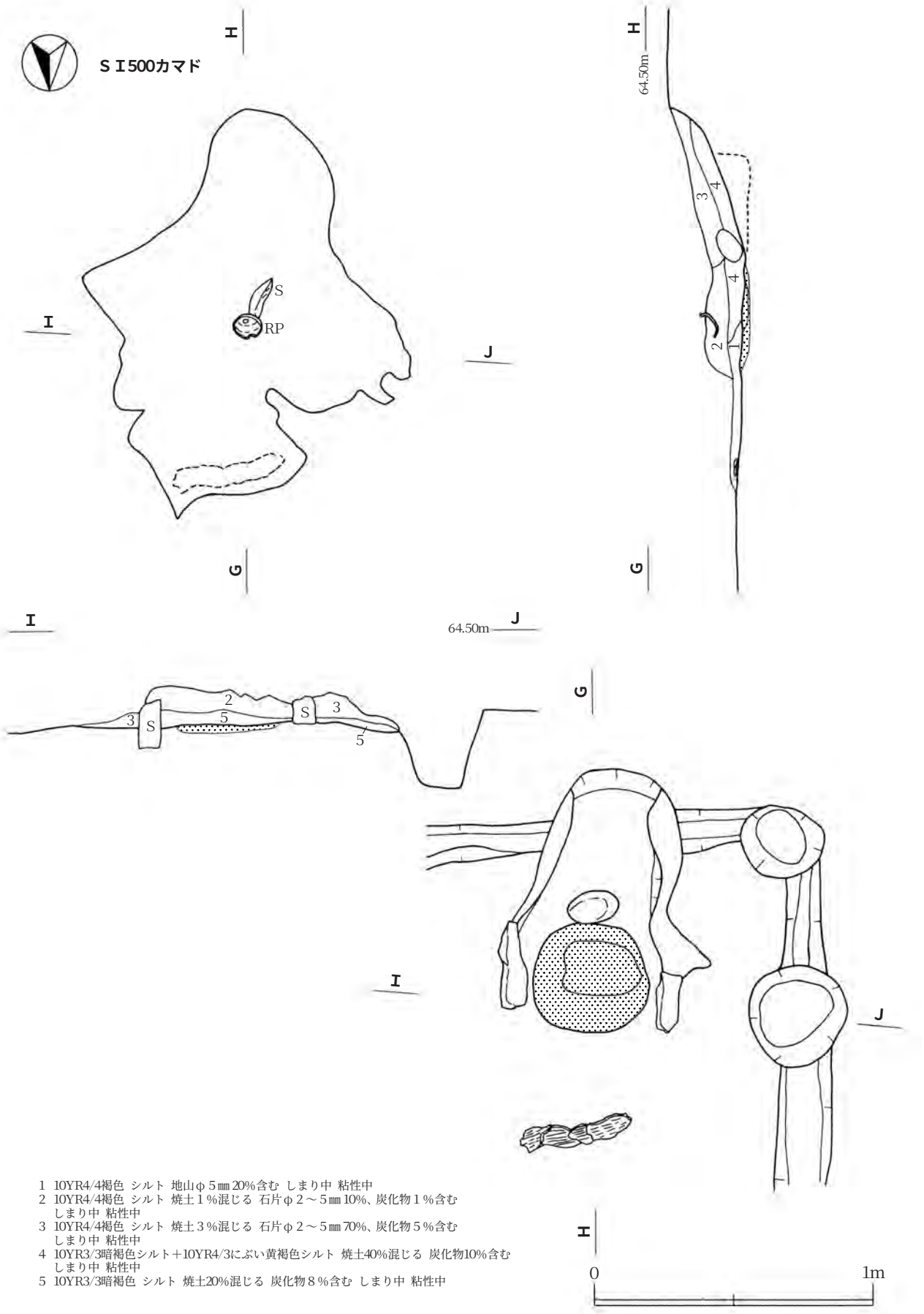


1　10YR4/3にぶい黄褐色シルト＋10YR5/4にぶい黄褐色シルト　焼土５％混じる　炭化物３％含む　しまり強　粘性弱
2　10YR4/4褐色シルト＋10YR5/4にぶい黄褐色シルト　焼土20%混じる　炭化物３％含む　しまり中　粘性中



1　10YR4/4褐色　シルト　地山20%、焼土10%混じる　炭化物５％含む　しまり中　粘性強
2　10YR4/3にぶい黄褐色　シルト　焼土８％混じる　炭化物３％含む　しまり中　粘性強
3　5YR4/4にぶい赤褐色　シルト　しまり強　粘性弱
4　10YR4/4褐色　シルト　焼土５％混じる　炭化物５％含む　しまり中　粘性中

第64図　ＳＩ500

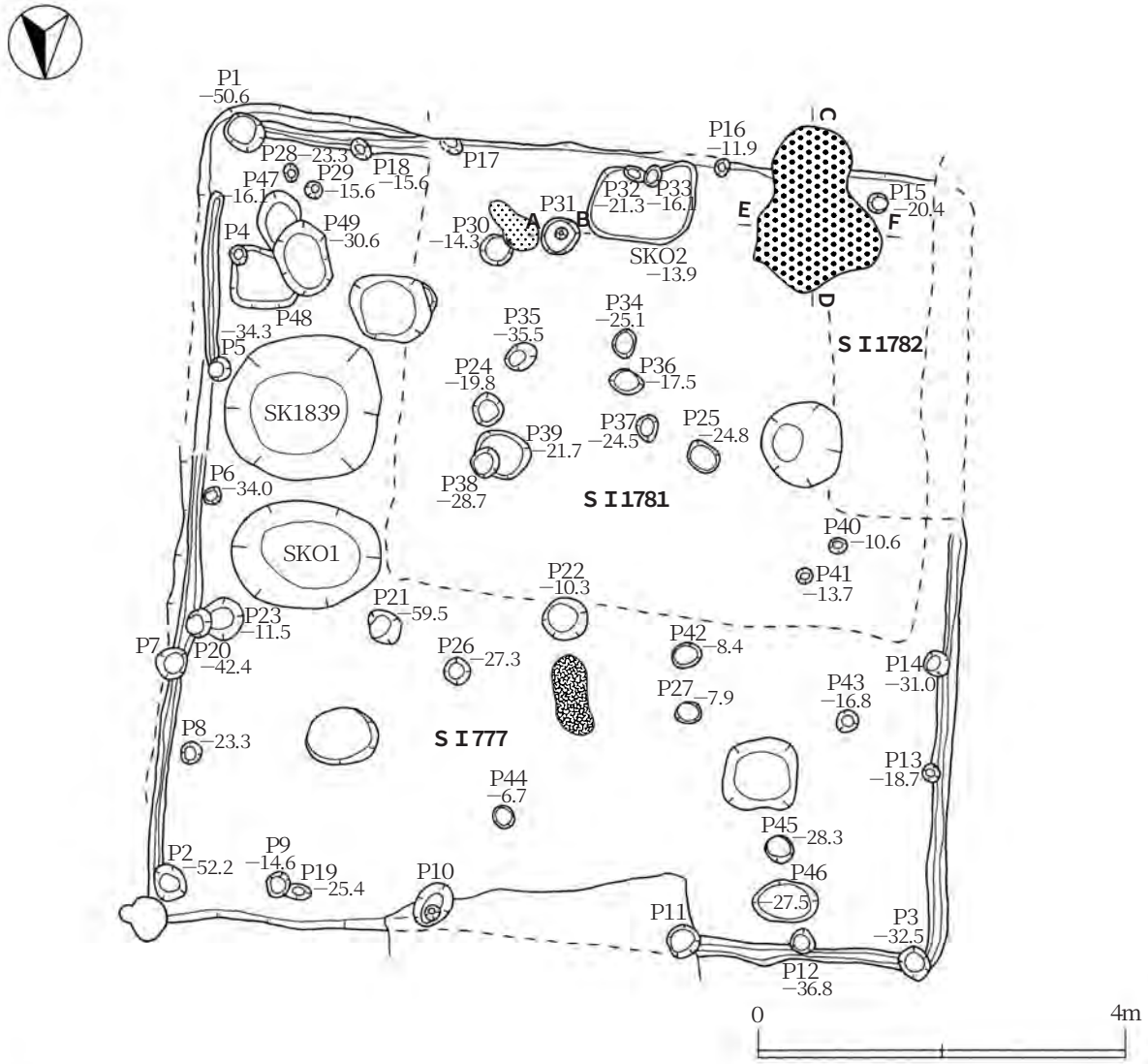


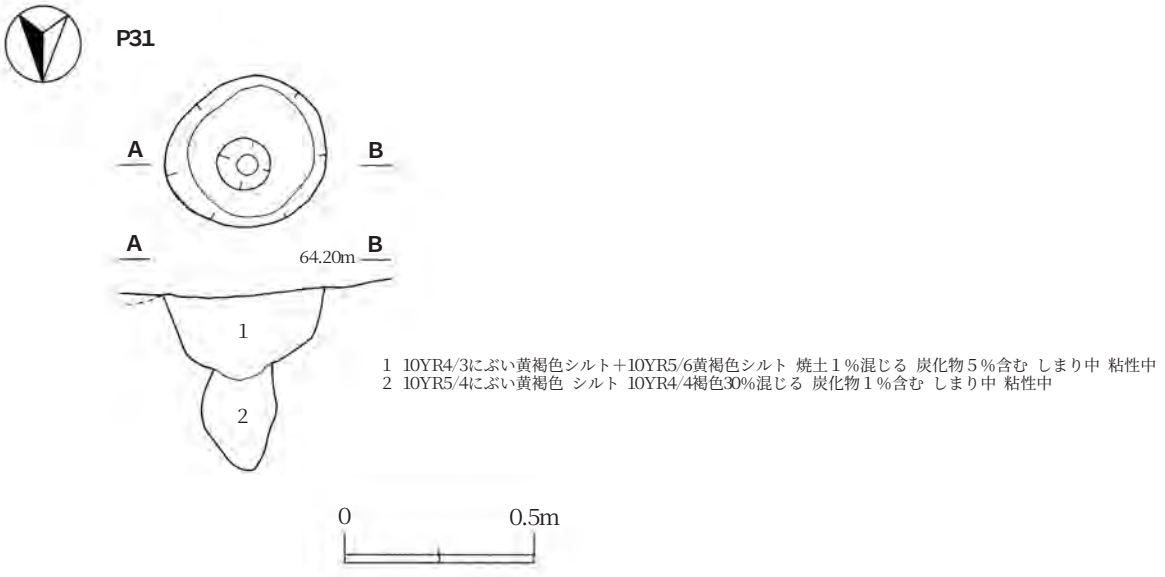
1 10YR4/4褐色 シルト 地山φ５㎜20%含む しまり中 粘性中
2 10YR4/4褐色 シルト 焼土１%混じる 石片φ２～５㎜10%、炭化物１%含む しまり中 粘性中
3 10YR4/4褐色 シルト 焼土３%混じる 石片φ２～５㎜70%、炭化物５%含む しまり中 粘性中
4 10YR3/3暗褐色シルト＋10YR4/3にぶい黄褐色シルト 焼土40%混じる 炭化物10%含む しまり中 粘性中
5 10YR3/3暗褐色 シルト 焼土20%混じる 炭化物８%含む しまり中 粘性中

第65図　ＳＩ500カマド

床　　面：ほぼ平らで全体的に硬くしまる。
壁　　溝：幅10～18㎝、床面からの深さ15～20㎝で壁際を巡っているが、確認できない部分もある。
柱　　穴：主柱穴として壁溝と重複するＰ１～３があるが、その他Ｐ４～18などの壁柱穴も主要な柱として機能していたと考えられる。
カ マ ド：南壁の西よりに付設されている。崩壊した状態で検出された。カマドの構築されている部分は他の床面よりやや下がっている。崩壊したカマド構造材の下には、袖石や火床面が残存し、袖石は火床面両側で２個ずつ確認された。火床面は、東西80㎝、南北58㎝の範囲に広がっている。火床面には起伏がみられることから、一部削られている可能性がある。煙道は、直径などは推測できないものの、火床面から緩やかに立ち上がっている状態が確認できた。
関連施設：ロクロ軸受けピットと思われるピット（Ｐ31）と、隣接する焼土を検出した。ロクロ軸受けピットと思われるピットは、径25㎝ほどの円形の掘り込みの底面の中心に径９㎝ほどの掘り込みを設けているものである。底面の小さな掘り込みは、断面形をみるとオーバーハングしているのがわかる。その他、遺構中央北寄りの床面に炭化物の広がりがある。また、東壁寄りの床面にはＳＫ01が、南壁寄りの床面にはＳＫ02が掘り込まれている。
出土遺物：覆土やカマド周辺から、土師器を中心とする遺物がコンテナで３箱ほど（うち須恵器がコンテナ１／３）出土した（第168図、第169図１～４、第209図22・25～28、図版40・41・55）。
備　　考：一辺約９ｍの本遺跡最大の竪穴住居跡である。覆土内には既述の重複遺構の他に、掘り込みａ、ｄ、ｇ（弟63図）のような竪穴状の遺構が掘り込まれていたと考えられるが、その平面形をとらえることはできなかった。

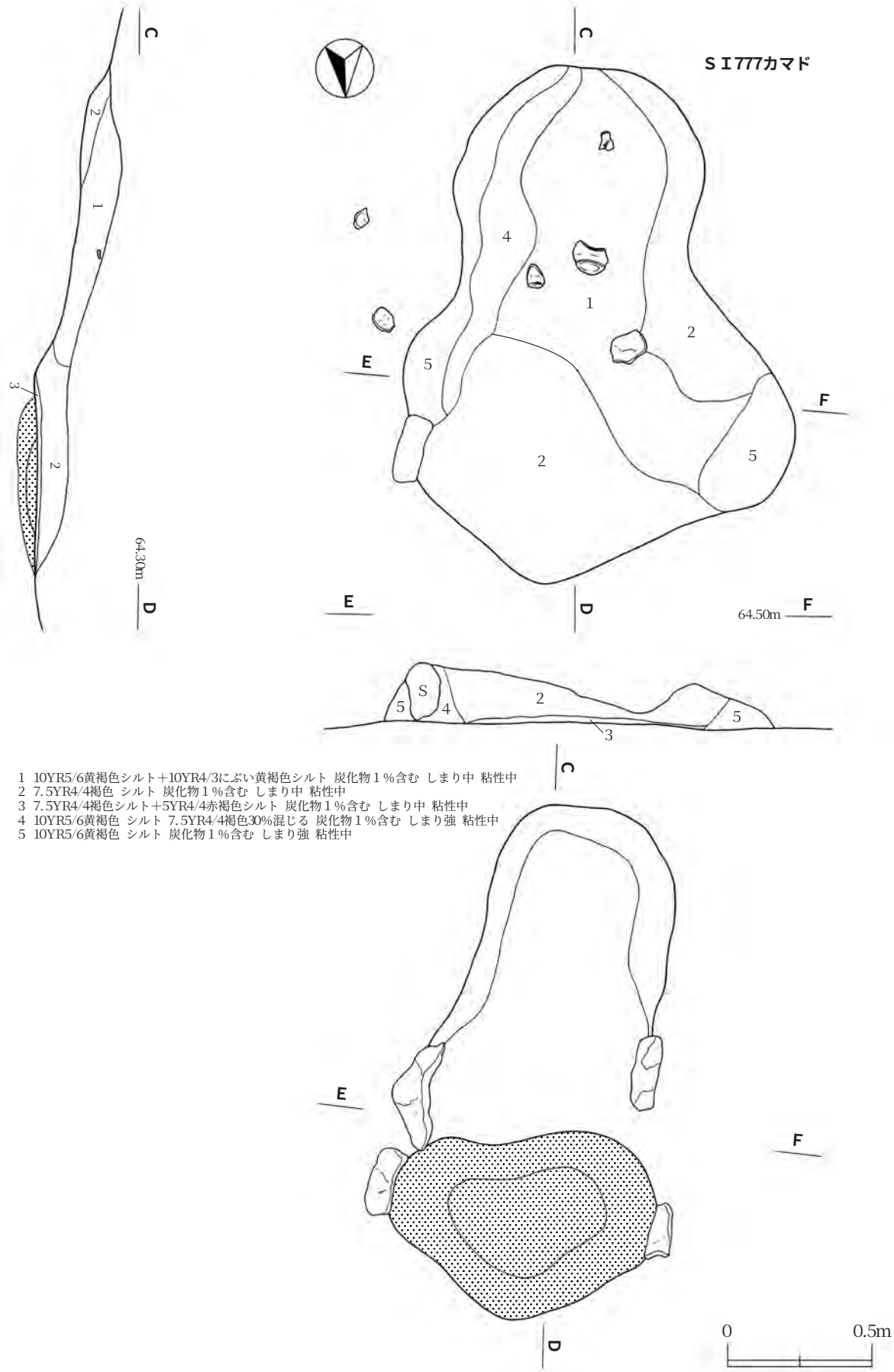
ＳＩ1781（第60・62・68図、図版14・15）
位　　置：ＬＥ47グリッドを主体とし、ＬＤ・ＬＥ46グリッドに及ぶ範囲に位置する。
規　　模：北壁長5.86m、南壁長（3.46m）、東壁長（5.20m）、西壁長5.66m。確認面（ＳＩ777床面）からの深さは0.2m前後である。
確認状況：ＳＩ777精査時に設けたサブトレンチにより、ＳＩ777の下に本遺構が存在することを確認した。
重複遺構：ＳＩ777・1782と重複する。ＳＩ1782より新しく、ＳＩ777より古い。
覆　　土：第62図39層が本遺構の覆土で、そのままＳＩ777の貼り床となっている。
　壁　　：ほとんど残存せず。
床　　面：ほぼ平坦で硬くしまる。
壁　　溝：幅0.25m前後、深さ0.1m前後で壁際を一巡する。
柱　　穴：Ｐ１～５が主柱穴と考えられる。
カ マ ド：火床面の形状から、西壁に付設されていたと考えられる。また、向きは約90°異なるがＳＩ777と同じような場所にカマド本体が設けられていたと推測される。火床面南側からはカマドの袖石として使用されたとみられる石が集中して出土した。火床面の中央部にはピ





1 10YR4/3にぶい黄褐色シルト＋10YR5/6黄褐色シルト 焼土１％混じる 炭化物５％含む しまり中 粘性中
2 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト 10YR4/4褐色30%混じる 炭化物１％含む しまり中 粘性中

第66図　ＳＩ777



1　10YR5/6黄褐色シルト＋10YR4/3にぶい黄褐色シルト　炭化物１％含む　しまり中　粘性中
2　7.5YR4/4褐色　シルト　炭化物１％含む　しまり中　粘性中
3　7.5YR4/4褐色シルト＋5YR4/4赤褐色シルト　炭化物１％含む　しまり中　粘性中
4　10YR5/6黄褐色　シルト　7.5YR4/4褐色30%混じる　炭化物１％含む　しまり強　粘性中
5　10YR5/6黄褐色　シルト　炭化物１％含む　しまり強　粘性中

0　0.5m

第67図　ＳＩ777カマド

ットが掘り込まれている。このピットは、ＳＩ777構築に伴う貼り床によって覆われているため、本住居廃絶時に掘り込まれた可能性がある。

そ の 他：覆土の状態から、廃絶後間もなくＳＩ777が構築されたと考えられる。

出土遺物：土師器を中心とする遺物がコンテナで１／２ほど出土した。

ＳＩ1782（第60・61・62・68図、図版14）

位　　置：ＬＦ47グリッドに位置する。

規　　模：北壁長（1.4m）、東壁長（2.2m）、西・南壁は確認できなかった。確認面（ＳＩ1781床面）からの深さは0.15m前後である。西側は、ＳＩ699によって消失したと考えられる。

確認状況：ＳＩ777精査時に設けたサブトレンチにより、ＳＩ777の下に本遺構が存在することを確認した。その後の精査でＳＩ1781床面下に本遺構があることが判明した。

重複遺構：ＳＩ1781・777・666と重複し、本遺構が一番古い。

覆　　土：第62図43層である。土色の詳細は不明であるが、ＳＩ777の貼り床と同様な色調で、しまりはそれほど強くない。

　壁　　：床面から急角度で立ち上がる。

床　　面：ほぼ平坦で硬くしまる。

壁　　溝：なし。

そ の 他：一部しか確認できなかったため、全体の規模や形状は不明な点が多い。竪穴状遺構と判断されるべき遺構かもしれないが、後続するＳＩ1782・777の存在や床面・壁の状態から竪穴住居跡と判断した。

出土遺物：（第172図５～７、図版42）。土師器を中心とする遺物がコンテナで１／５ほど出土した。

ＳＩ653（第69・70図、図版10・12）

位　　置：ＬＬ46グリッドを主体とし、ＬＬ45、ＬＭ45・46グリッドを中心とする範囲に位置する。

規　　模：南東壁長4.51m、北東壁長4.67m、南東壁長4.41m、北西壁長4.55m、確認面から床面までの深さは、0.52mである。

確認状況：Ⅶ層で周囲と異なる方形の土の広がりを確認した。その後の精査により、竪穴住居であることが判明した。

重複遺構：なし。

覆　　土：覆土には人為的要素がみられるが、人為的撹乱土等が斜面上方から流れ込んだものと考えられる。

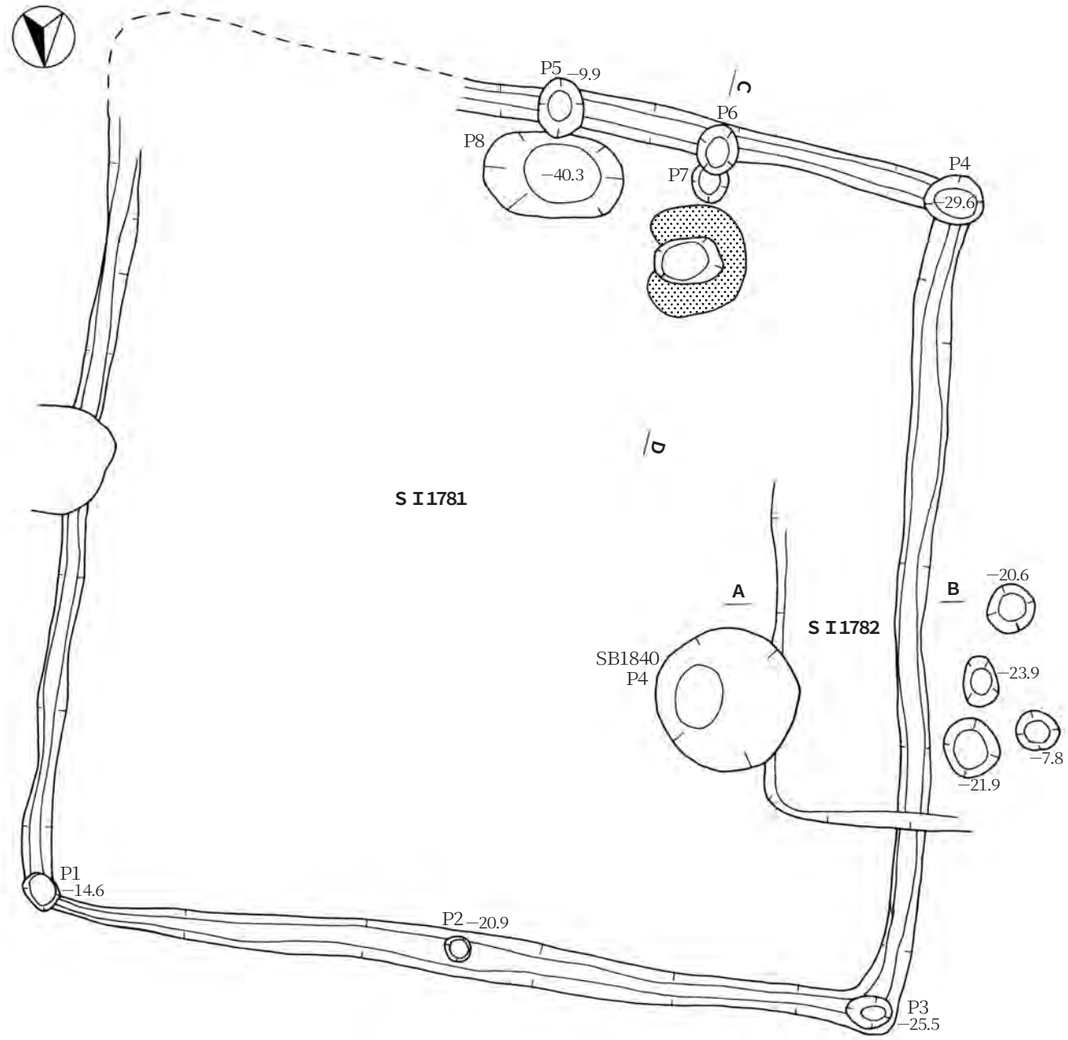
　壁　　：床面からほぼ垂直に立ち上がる。

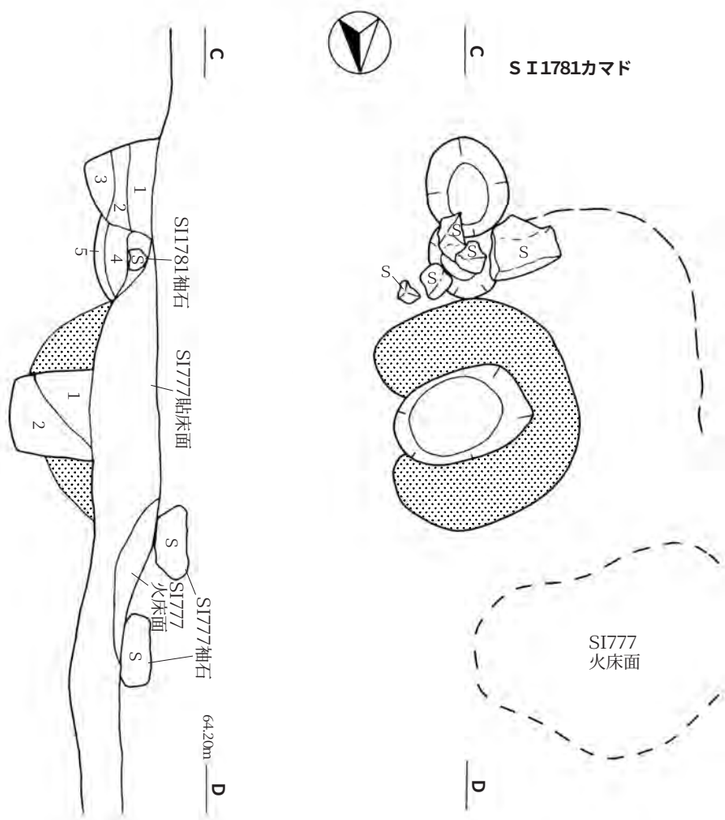
床　　面：ほぼ平坦で硬くしまる。

壁　　溝：カマド部分を除く四方の壁際に巡る。床面からの深さは10㎝前後である。

柱　　穴：床面の四隅に壁溝と重複して掘り込まれている。

カ マ ド：南東壁に付設されている。保存状態は比較的良く、煙道、煙出しはほぼそのままの状態で検出された。また、燃焼部付近も崩壊の度合いが大きくない。燃焼部の外見は、地山状の





SＩ1781カマド
1　7.5YR4/4褐色　シルト　炭化物30%含む　しまり中　粘性中
2　7.5YR5/4にぶい黄褐色　シルト　炭化物１%含む　しまり中　粘性中
3　10YR5/6黄褐色　シルト　炭化物10%含む　しまり強　粘性中
4　7.5YR3/2黒褐色　シルト　焼土10%混じる　炭化物２%含む　しまり強　粘性中
5　7.5YR5/4にぶい黄褐色　シルト　炭化物１%含む　しまり中　粘性中

0　0.5m

第68図　ＳＩ1781・1782

褐色土を用いてドーム状にしたもののように見える。火床面は直径約55㎝ほどの円形の広がりをもち、上に炭化材が散在していた。住居廃絶時の状態を示すものと考えられる。煙出し部分は調査区境界に接しているが、煙出しから西側に向かって焼土が形成されているのが確認できた。カマドの炎が煙孔付近にまで及ぶことがあったと考えられる。煙道の断面形はほぼ円形である。

そ の 他：南壁の中央部に接してＳＫ01が掘り込まれている。また、住居中央部やや西よりには、焼土が形成されている。

出土遺物：土師器を中心とする遺物がコンテナで２／３ほど出土した（第166図７～12、第208図18・19、図版40）。

ＳＩ699（第71図、図版10）

位　　置：ＬＦ・ＬＧ47グリッドに位置する。

規　　模：北壁長（2.14m）、南壁長3.3m、東壁長3.64m、西壁長（0.9m）。確認面から床面までの深さは、0.50mである。

確認状態：Ⅶ層上面で周囲と異なる土の広がり（方形）を確認した。その後の精査により、竪穴住居であることが判明した。

重複遺構：ＳＫ774、ＳＫ775、ＳＫ1847と重複する。ＳＫ774・775より新しく、ＳＫ1847より古い。

覆　　土：人為的要素が含まれるが、遺構掘削土などの人為的撹乱土が斜面上方から流れ込んだものと考えられる。

壁　　：やや急な傾斜地に位置することや土坑との重複のため住居西側の残存状態は不良である。その他の壁はほぼ垂直に立ち上がる。

床　　面：ほぼ平らで全体的に硬くしまるが、中央部には細かなコブ状の凹凸が見られ、特にしまりが強い。

壁　　溝：幅10～14㎝、床面からの深さ４～８㎝で、床面残存部では北壁、南壁の一部を除き壁際を巡っている。

柱　　穴：主柱穴として壁溝と重複するＰ１～３があるが、それ以外の主柱穴は確認できなかった。壁に近接するＰ６～７などは住居の構造に関連した柱穴の可能性がある。

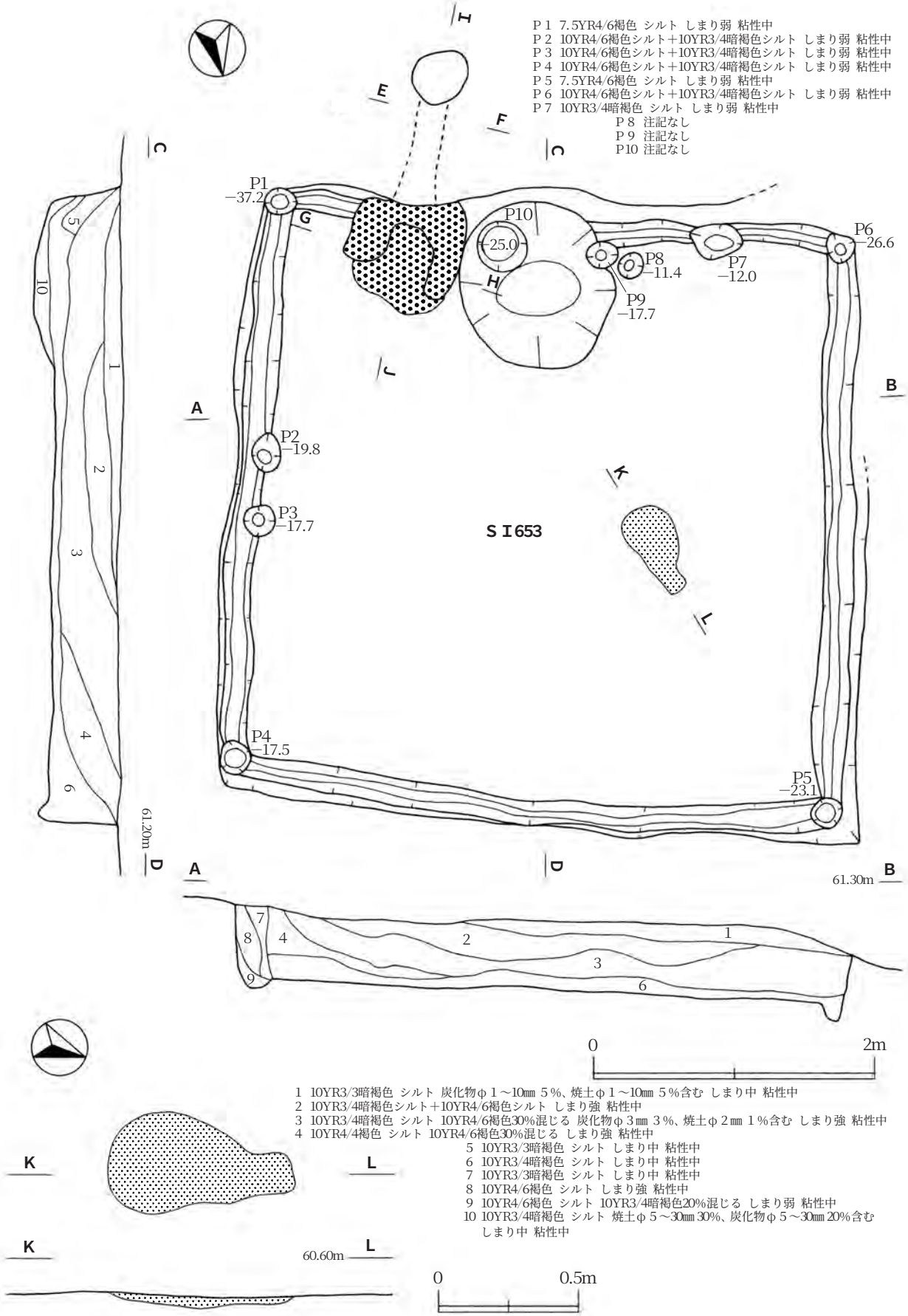
カ マ ド：西壁の北寄りに構築されている。カマドの構築土はほとんど失われた状態であるが、火床面と両袖の芯材の位置からカマドの存在と軸線の方向が推測できる。火床面は、長軸0.34m、短軸0.33mの範囲に広がり、中央部が被熱の度合いが高い。袖の芯材には軟質の礫が用いられ、住居の床面に埋め込まれた状態になっている。

出土遺物：土師器を中心とする遺物がコンテナで２／３ほど（須恵器１点のみ）出土した（第167図１～６、第208図20・21、図版40・50）。

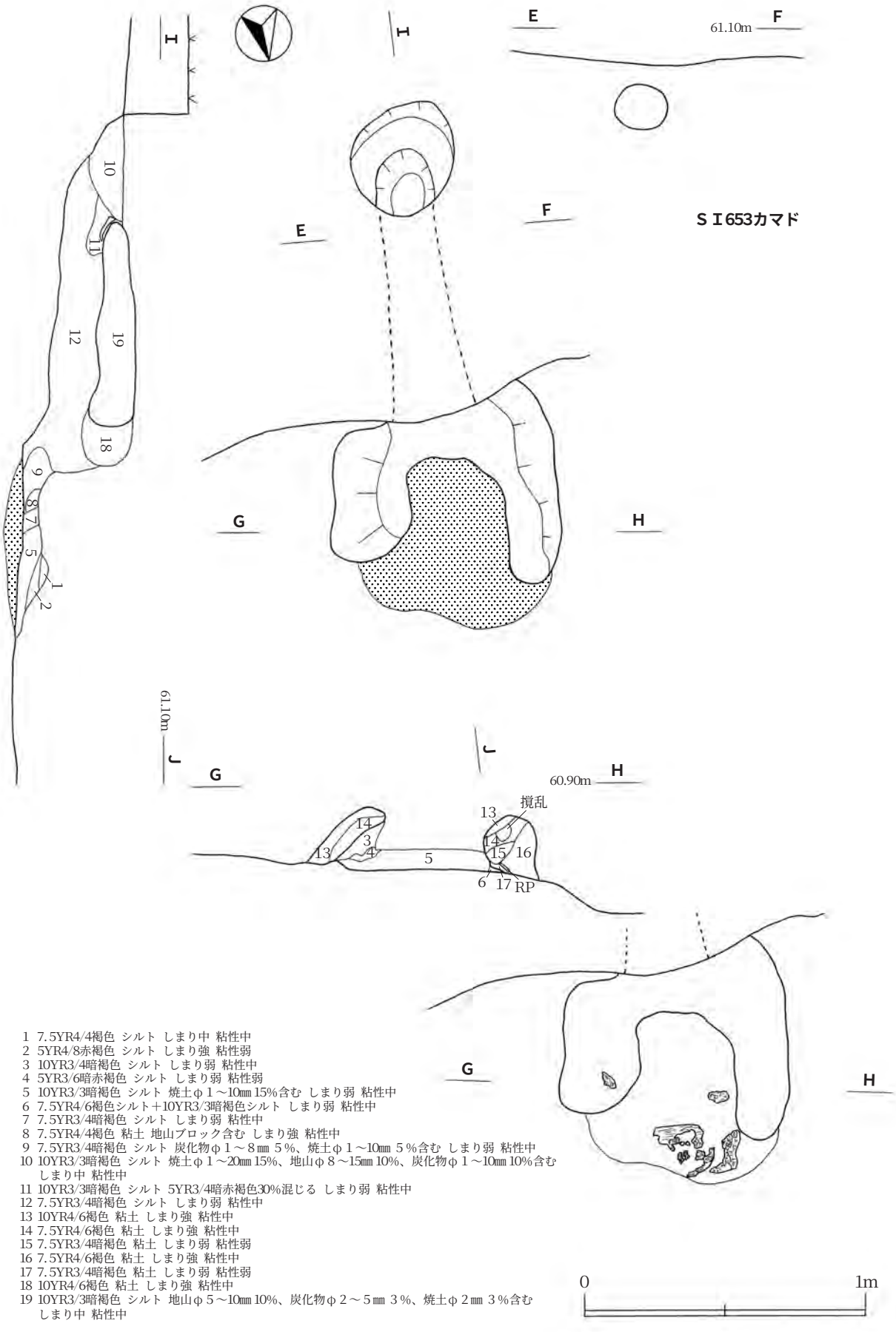
ＳＩ764（第72・73図、図版11・12・13）

位　　置：ＬＨ50・51グリッドを主体とし、ＬＧ50グリッドに及ぶ範囲に位置する。

規　　模：北壁長4.1m（北東隅－Ｐ３）、南壁長4.0m（Ｐ７－Ｐ５）、東壁長3.68m（北東隅－Ｐ７

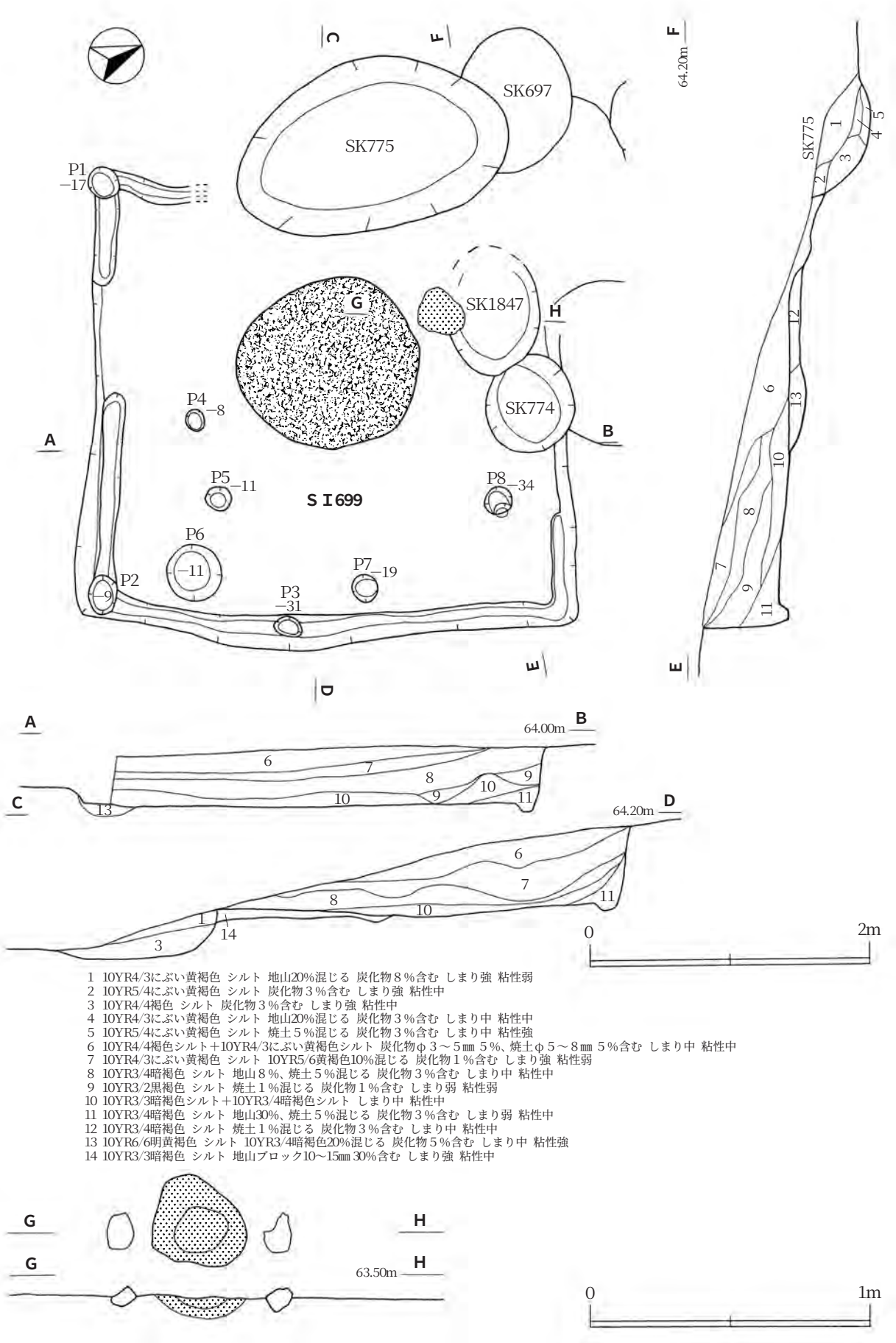

P1 7.5YR4/6褐色 シルト しまり弱 粘性中
P2 10YR4/6褐色シルト＋10YR3/4暗褐色シルト しまり弱 粘性中
P3 10YR4/6褐色シルト＋10YR3/4暗褐色シルト しまり弱 粘性中
P4 10YR4/6褐色シルト＋10YR3/4暗褐色シルト しまり弱 粘性中
P5 7.5YR4/6褐色 シルト しまり弱 粘性中
P6 10YR4/6褐色シルト＋10YR3/4暗褐色シルト しまり弱 粘性中
P7 10YR3/4暗褐色 シルト しまり弱 粘性中
P8 注記なし
P9 注記なし
P10 注記なし
P1 −37.2
P2 −19.8
P3 −17.7
P4 −17.5
P5 −23.1
P6 −26.6
P7 −12.0
P8 −11.4
P9 −17.7
P10 −25.0
SI653
61.20m
61.30m
0 2m
1 10YR3/3暗褐色 シルト 炭化物φ1～10㎜ 5%、焼土φ1～10㎜ 5%含む しまり中 粘性中
2 10YR3/4暗褐色シルト＋10YR4/6褐色シルト しまり強 粘性中
3 10YR3/4暗褐色 シルト 10YR4/6褐色30%混じる 炭化物φ3㎜ 3%、焼土φ2㎜ 1%含む しまり強 粘性中
4 10YR4/4褐色 シルト 10YR4/6褐色30%混じる しまり強 粘性中
5 10YR3/3暗褐色 シルト しまり中 粘性中
6 10YR3/4暗褐色 シルト しまり中 粘性中
7 10YR3/3暗褐色 シルト しまり中 粘性中
8 10YR4/6褐色 シルト しまり強 粘性中
9 10YR4/6褐色 シルト 10YR3/4暗褐色20%混じる しまり弱 粘性中
10 10YR3/4暗褐色 シルト 焼土φ5～30㎜ 30%、炭化物φ5～30㎜ 20%含む しまり中 粘性中
60.60m
0 0.5m

第69図　SI653



1 7.5YR4/4褐色 シルト しまり中 粘性中
2 5YR4/8赤褐色 シルト しまり強 粘性弱
3 10YR3/4暗褐色 シルト しまり弱 粘性中
4 5YR3/6暗赤褐色 シルト しまり弱 粘性弱
5 10YR3/3暗褐色 シルト 焼土φ１～10㎜ 15%含む しまり弱 粘性中
6 7.5YR4/6褐色シルト＋10YR3/3暗褐色シルト しまり弱 粘性中
7 7.5YR3/4暗褐色 シルト しまり弱 粘性中
8 7.5YR4/4褐色 粘土 地山ブロック含む しまり強 粘性中
9 7.5YR3/4暗褐色 シルト 炭化物φ１～８㎜ ５%、焼土φ１～10㎜ ５%含む しまり弱 粘性中
10 10YR3/3暗褐色 シルト 焼土φ１～20㎜ 15%、地山φ８～15㎜ 10%、炭化物φ１～10㎜ 10%含む しまり中 粘性中
11 10YR3/3暗褐色 シルト 5YR3/4暗赤褐色30%混じる しまり弱 粘性中
12 7.5YR3/4暗褐色 シルト しまり弱 粘性中
13 10YR4/6褐色 粘土 しまり強 粘性中
14 7.5YR4/6褐色 粘土 しまり強 粘性中
15 7.5YR3/4暗褐色 粘土 しまり弱 粘性弱
16 7.5YR4/6褐色 粘土 しまり強 粘性中
17 7.5YR3/4暗褐色 粘土 しまり弱 粘性弱
18 10YR4/6褐色 粘土 しまり強 粘性中
19 10YR3/3暗褐色 シルト 地山φ５～10㎜ 10%、炭化物φ２～５㎜ ３%、焼土φ２㎜ ３%含む しまり中 粘性中

第70図　ＳＩ653カマド



1 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 地山20%混じる 炭化物８%含む しまり強 粘性弱
2 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト 炭化物３%含む しまり強 粘性中
3 10YR4/4褐色 シルト 炭化物３%含む しまり強 粘性中
4 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 地山20%混じる 炭化物３%含む しまり中 粘性中
5 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト 焼土５%混じる 炭化物３%含む しまり中 粘性強
6 10YR4/4褐色シルト＋10YR4/3にぶい黄褐色シルト 炭化物φ３～５㎜ ５%、焼土φ５～８㎜ ５%含む しまり中 粘性中
7 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 10YR5/6黄褐色10%混じる 炭化物１%含む しまり強 粘性弱
8 10YR3/4暗褐色 シルト 地山８%、焼土５%混じる 炭化物３%含む しまり中 粘性中
9 10YR3/2黒褐色 シルト 焼土１%混じる 炭化物１%含む しまり弱 粘性弱
10 10YR3/3暗褐色シルト＋10YR3/4暗褐色シルト しまり中 粘性中
11 10YR3/4暗褐色 シルト 地山30%、焼土５%混じる 炭化物３%含む しまり弱 粘性中
12 10YR3/4暗褐色 シルト 焼土１%混じる 炭化物３%含む しまり中 粘性中
13 10YR6/6明黄褐色 シルト 10YR3/4暗褐色20%混じる 炭化物５%含む しまり中 粘性強
14 10YR3/3暗褐色 シルト 地山ブロック10～15㎜ 30%含む しまり強 粘性中

第71図　ＳＩ699、ＳＫ774・775・1847

まで)、西壁長3.72m（Ｐ３－Ｐ５)。確認面から床面までの深さは、0.32mである。

確認状態：Ⅶ層上面で、周囲と異なる土の広がり（不定形）を確認した。その後の精査により、本遺構を含む複数遺構の重複であることが判明した。

重複遺構：ＳＩ765・1400と重複し、本遺構が古い。ＳＢ2076と重複するが新旧は不明である。

覆　　土：住居中央部に堆積する17層は、火山灰が２次堆積したもので、同定では、白頭山苫小牧火山灰（ＢＴ－Ｍ）であるとの結果が出されている。その下の18層は、遺構周辺の人為的撹乱土が流れ込んだものと考えられる。

壁　　：東壁のみ残存し、急角度で立ち上がる。

床　　面：ほぼ平らで、中央部が特に硬くしまっている。床面の高さはＳＩ765・1400とほとんど同じである。

壁　　溝：東壁の一部にみられる。

柱　　穴：Ｐ１からP12までが主柱穴と考えられる。Ｐ９・10・11・12は柱の建て替えに伴い新たに掘り込まれた柱穴の可能性がある。

カ マ ド：本遺構からのびる煙道が２つあることから、改築が行われたと推測される。煙道は東壁と南壁にあり、カマド構築土の分布と煙道の位置関係から南のカマドが新しい（最終的な）と推測される。ただし、火床面は東のカマドの時から継続して使用された可能性がある。南側のカマドは崩壊した状態で確認された。崩壊したカマド構築材は、長軸1.8m、短軸0.9mの範囲に広がり、その下には径0.6mほどの火床面が形成されている。火床面は中央部から北よりにかけて被熱の度合いが高い。火床面の北側・西側にはピットが掘り込まれている。煙道は底面付近のみ残存している状態で、長さ1.15m、幅0.26～0.38mの大きさである。煙道の南端部の底面は被熱により赤褐色化し、ピット状の形をしていることから煙出しの底面付近と推測される。煙出しは長軸0.45m前後、短軸0.3m前後の大きさがある。この煙出しは、ＳＫ02に切られている。

東のカマドは、カマドの改築のため煙道の一部と煙出しか残存していない。煙道は、長さ1.1m、幅22～33㎝で煙孔は長軸0.33m、短軸0.28mの大きさである。煙道、煙出しとも保存状態が良く、崩落せずに残っている。煙道の天井部の壁は被熱により赤褐色化している。

関連施設：東壁に三角形状の張り出しがみられる。この張り出し部の壁に煙道の断面が確認できるが、張り出し部の覆土に煙道が掘り込まれた痕跡がないことから、張り出し部は東のカマドが使われなくなった後に掘り込まれたものと推測される。また、張り出し部の覆土は当住居の覆土と連続している（同じ）ため、住居と同時期に使用されたものと推測される。

出土遺物：（第167図７～９)。土師器を中心とする遺物がコンテナで１／２ほど出土した。

ＳＩ765（第72図、図版11）

位　　置：ＬH49・50グリッドを主体とし、ＬG50グリッドに及ぶ範囲に位置する。

規　　模：北壁長4.1m（北東隅－P19)、南壁長3.68m（南東隅－P24)、東壁長4.19m、西壁長3.8m（P23－P24)。確認面から床面までの深さは、0.28mである。

確認状態：Ⅶ層上面で、周囲と異なる土の広がり（不定形）を確認した。その後の精査により、本遺構を含む複数遺構の重複であることが判明した。

重複遺構：ＳＩ764・1400と重複し、ＳＩ764より新しくＳＩ1400より古い。ＳＢ2076と重複するが新旧は不明である。

覆　　土：ＳＩ1400の構築に伴い、東側と南側の覆土しか残存しない状態である。一気に埋め戻しが行われたような痕跡はなく、周辺から人為的撹乱土などが流れ込んだ可能性が高い。

壁　　：ほぼ垂直に立ち上がる。

床　　面：ほぼ平らである。北側の床面下にはＳＩ764の煙道があるが、この部分にのみ貼り床が施されていた。

壁　　溝：幅18～23㎝、床面からの深さ６～10㎝で北・東・南の壁際に巡っているが、西壁はトレンチ掘削により損失したとみられるため、本来は壁際を一巡していた可能性が高い。

柱　　穴：Ｐ23～26が主柱穴と考えられ、東壁の両隅には柱穴がない。

カ マ ド：東・南の２壁にはみられないことから、北か西壁にあったものがＳＩ1400の構築に伴い壊された可能性がある。

関連施設：床面の北東部でＳＫ02が掘り込まれている。

出土遺物：（第167図10・11、第209図23・24）。土師器を中心とする遺物がコンテナで１／２ほど出土した。中には緑釉陶器片が１点含まれる。

備　　考：住居の西からは、ＳＳ763が検出されている。

ＳＩ1400（第72・74図、図版11）

位　　置：ＬＨ50グリッドを主体とし、ＬＨ51グリッドに及ぶ範囲に位置する。

規　　模：北壁長3.41ｍ（北東隅－Ｐ19）、南壁長（1.51ｍ）、東壁長4.1ｍ、西壁長不明。西壁はトレンチ掘削により損失したとみられる。確認面から床面までの深さは、0.2ｍ前後である。

確認状態：Ⅶ層上面で、周囲と異なる土の広がり（不定形）を確認した。その後の精査により、本遺構を含む複数遺構の重複であることが判明した。

重複遺構：ＳＩ764・765と重複し、本遺構が一番新しい。ＳＢ2076と重複するが新旧は不明である。

覆　　土：14層の上面が床面と思われる。覆土の主体となる４層は、埋め戻しによるものと考えられる。９・14（同一層の可能性あり）層は建て替えに伴って形成された掘り方を埋めた層と考えられる。また、18・19層は、貼り床に伴う層と考えられる。

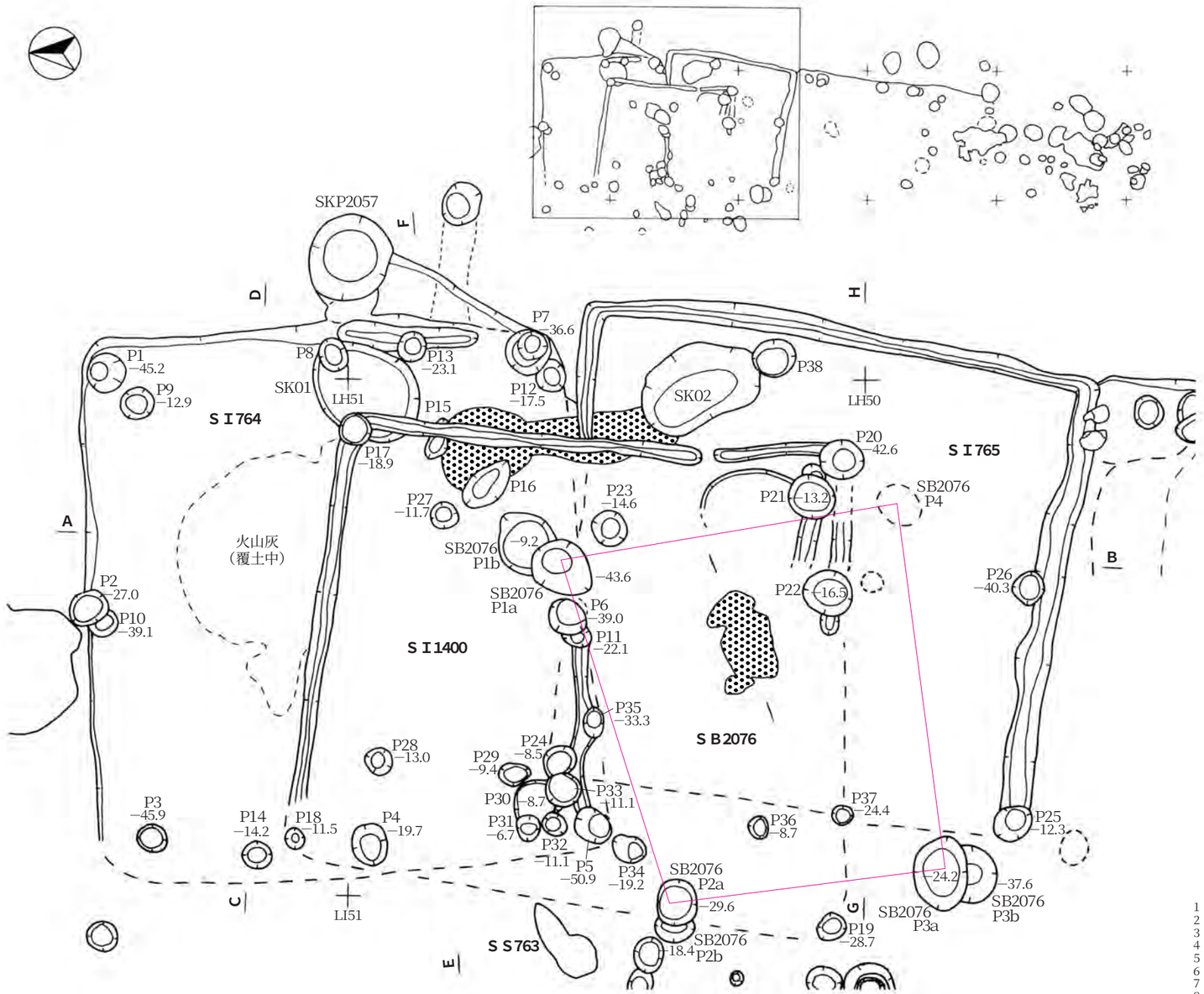
壁　　：ほぼ垂直に立ち上がる。

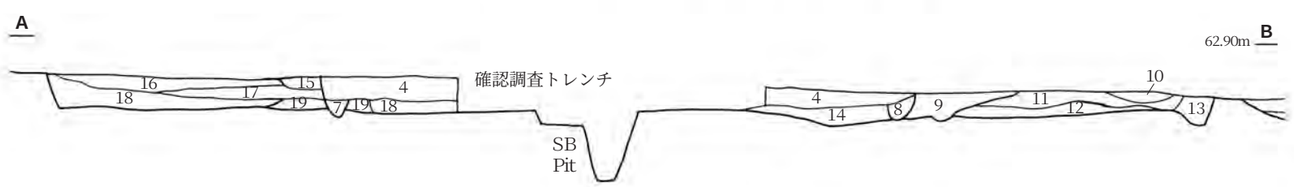
床　　面：ほぼ平坦である。

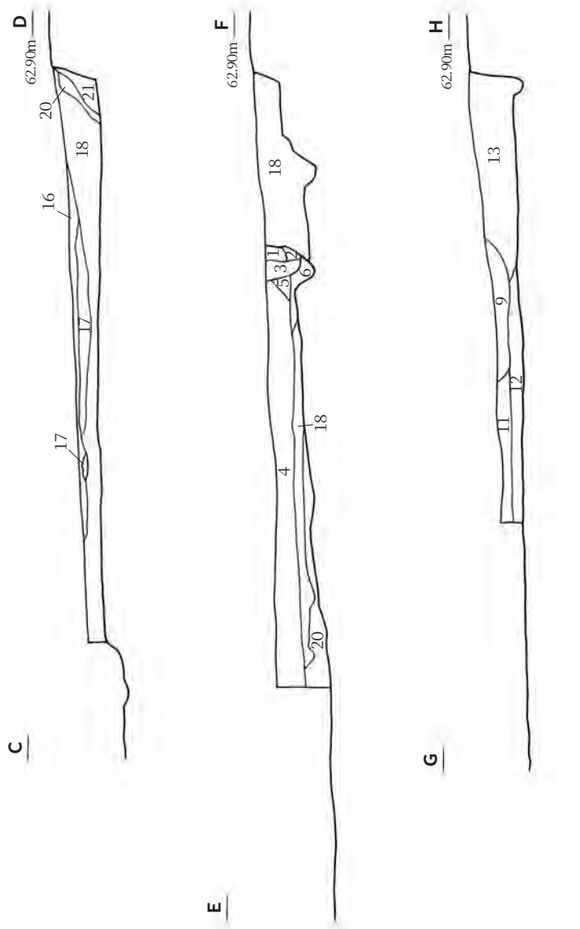
壁　　溝：幅９～15㎝、床面からの深さ10㎝ほどである。ＳＩ765同様に北・東・南の壁際に巡っているが、西壁はトレンチ掘削により損失したとみられるため、本来は壁際を一巡していた可能性が高い。南側には２列の壁溝がみられるため、作り替えが行われた可能性が考えられる。

柱　　穴：Ｐ17～21が主柱穴と考えられる。

カ マ ド：カマド構造材や火床面が床面南寄りにあることから、南壁に付設していたと考えられる。



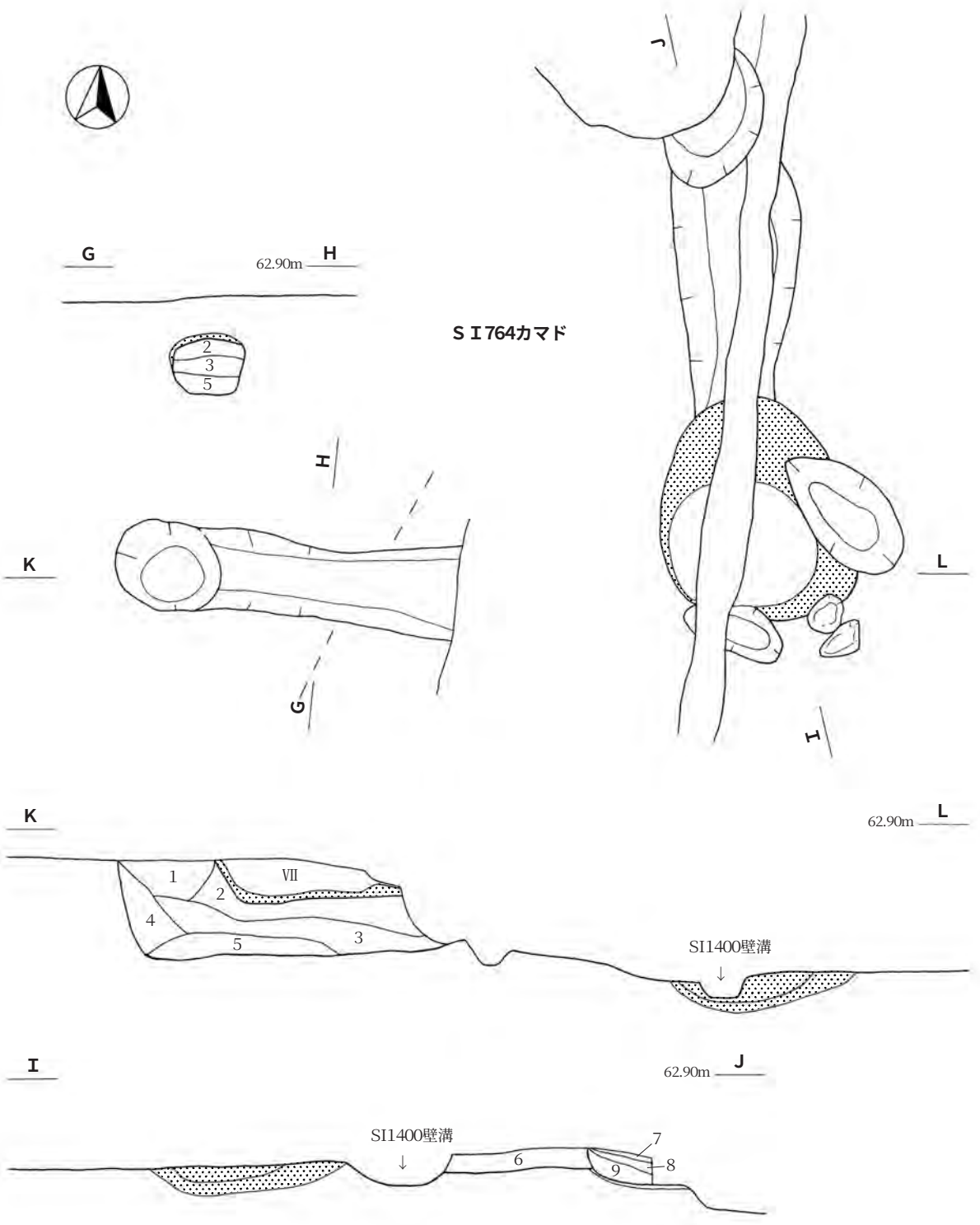




1 10YR3/4にぶい黄褐色 シルト 10YR4/3にぶい黄褐色10%、焼土５%混じる 炭化物３%含む しまり中 粘性中
2 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト 10YR5/6黄褐色20%、焼土８%混じる 炭化物３%含む しまり中 粘性中
3 10YR3/3暗褐色 シルト 炭化物１%含む しまり強 粘性中
4 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 10YR5/6黄褐色５%、焼土５%混じる 炭化物３%含む しまり中 粘性中
5 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 10YR5/6黄褐色20%、焼土８%混じる 炭化物３%含む しまり中 粘性中
6 10YR4/4褐色 シルト 焼土20%、10YR5/6黄褐色５%混じる 炭化物５%含む しまり中 粘性中
7 10YR4/4褐色 シルト 焼土８%混じる 火山灰ブロック30%、炭化物１%含む しまり中 粘性中
8 10YR4/4褐色 シルト 10YR5/6黄褐色10%、焼土３%混じる 炭化物３%含む しまり中 粘性中
9 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 焼土５%混じる 煙道壁状のブロック10%、炭化物１%含む しまり中 粘性中
10 10YR4/4褐色 シルト 10YR5/6黄褐色３%混じる しまり強 粘性中
11 10YR4/4褐色 シルト 10YR5/6黄褐色２%混じる しまり強 粘性中
12 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト 10YR5/6黄褐色10%混じる 炭化物１%含む しまり中 粘性中
13 10YR4/4褐色 シルト 10YR5/6黄褐色２%混じる しまり強 粘性中
14 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 10YR5/6黄褐色20%、焼土３%混じる 炭化物５%含む しまり中 粘性中
15 10YR4/4褐色 シルト 10YR5/6黄褐色５%、焼土５%混じる 炭化物１%含む しまり中 粘性中
16 10YR4/4褐色 シルト 10YR5/6黄褐色10%、焼土５%混じる 炭化物３%含む しまり中 粘性中
17 2.5GY6/1オリーブ灰 砂質　火山灰
18 10YR4/4褐色 シルト 焼土３%混じる 炭化物５%含む しまり中 粘性中
19 10YR4/4褐色 シルト 10YR5/6黄褐色20%混じる 炭化物１%含む しまり中 粘性中
20 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト 10YR4/4褐色混じる 炭化物１%含む しまり中 粘性中
21 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト 10YR4/4褐色８%、焼土１%混じる 炭化物１%含む しまり強 粘性弱

0　4m

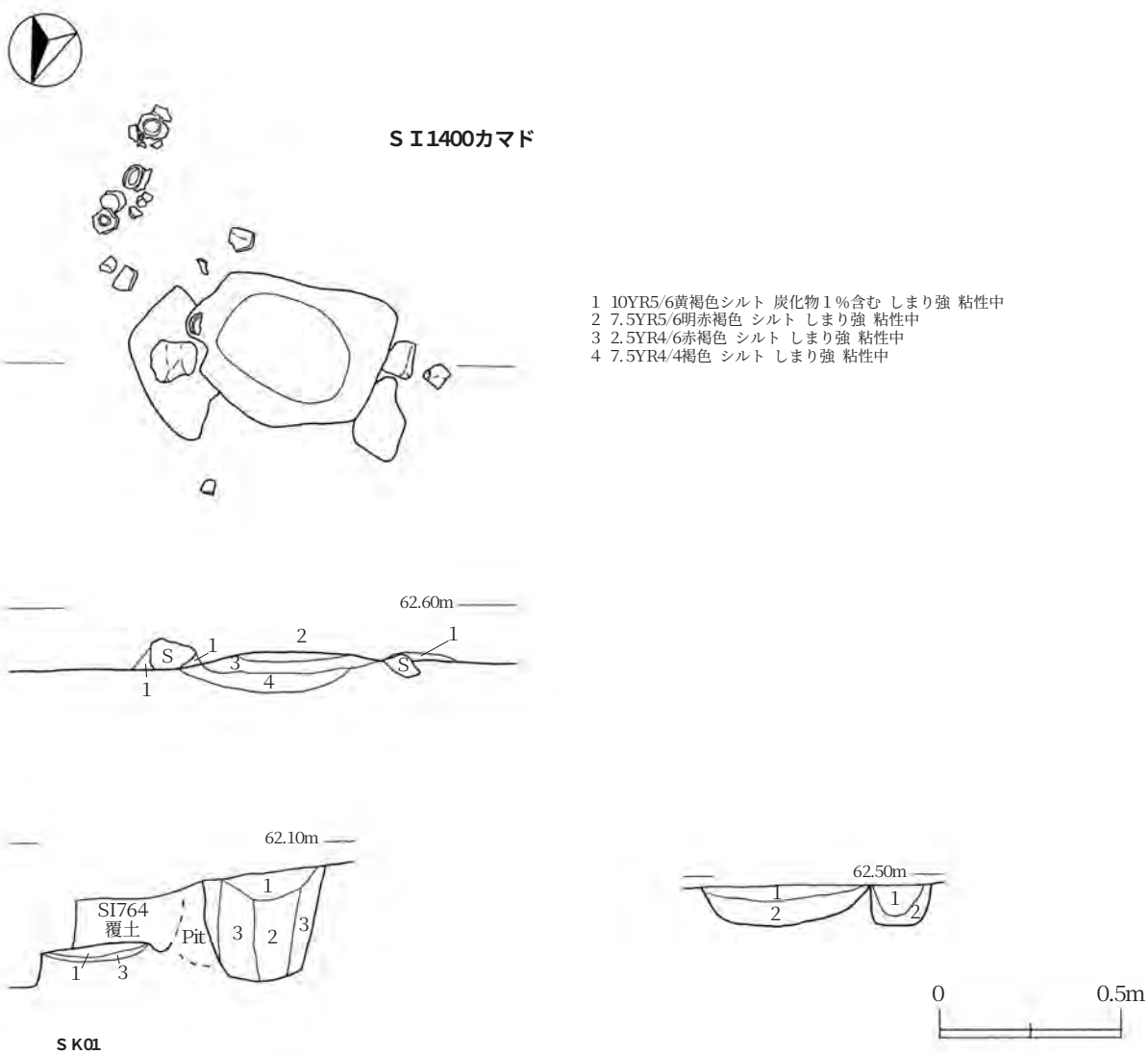
第72図　ＳＩ764・765・1400



1　10YR5/4にぶい黄褐色　シルト　煙道崩落土８%、焼土１%混じる　炭化物３%含む　しまり中　粘性中
2　7.5YR4/4褐色　シルト　焼土３%混じる　炭化物５%含む　しまり中　粘性中
3　7.5YR4/4褐色　シルト　焼土φ20～30㎜ 20%、炭化物８%、地山ブロック３%含む　しまり中　粘性中
4　10YR5/3暗褐色　シルト　焼土８%混じる　地山ブロック８%、炭化物５%含む　しまり中　粘性中
5　10YR3/2黒褐色　シルト　煙道崩落土50%、焼土８%混じる　炭化物５%含む　しまり弱　粘性弱
6　10YR4/4褐色　シルト　煙道崩落土50%混じる　地山ブロックφ５～10㎜ 20%含む　しまり中　粘性中
7　7.5YR4/4褐色　シルト　炭化物１%含む　しまり中　粘性中
8　7.5YR4/3褐色　シルト　煙道崩落土φ５～20㎜ 50%含む　しまり中　粘性中
9　7.5YR4/3褐色　シルト　10YR2/2黒褐色10%混じる　炭化物５%含む　しまり中　粘性中

0　0.5m

第73図　ＳＩ764カマド



第74図　ＳＩ1400カマド・ＳＩ764・765内土坑

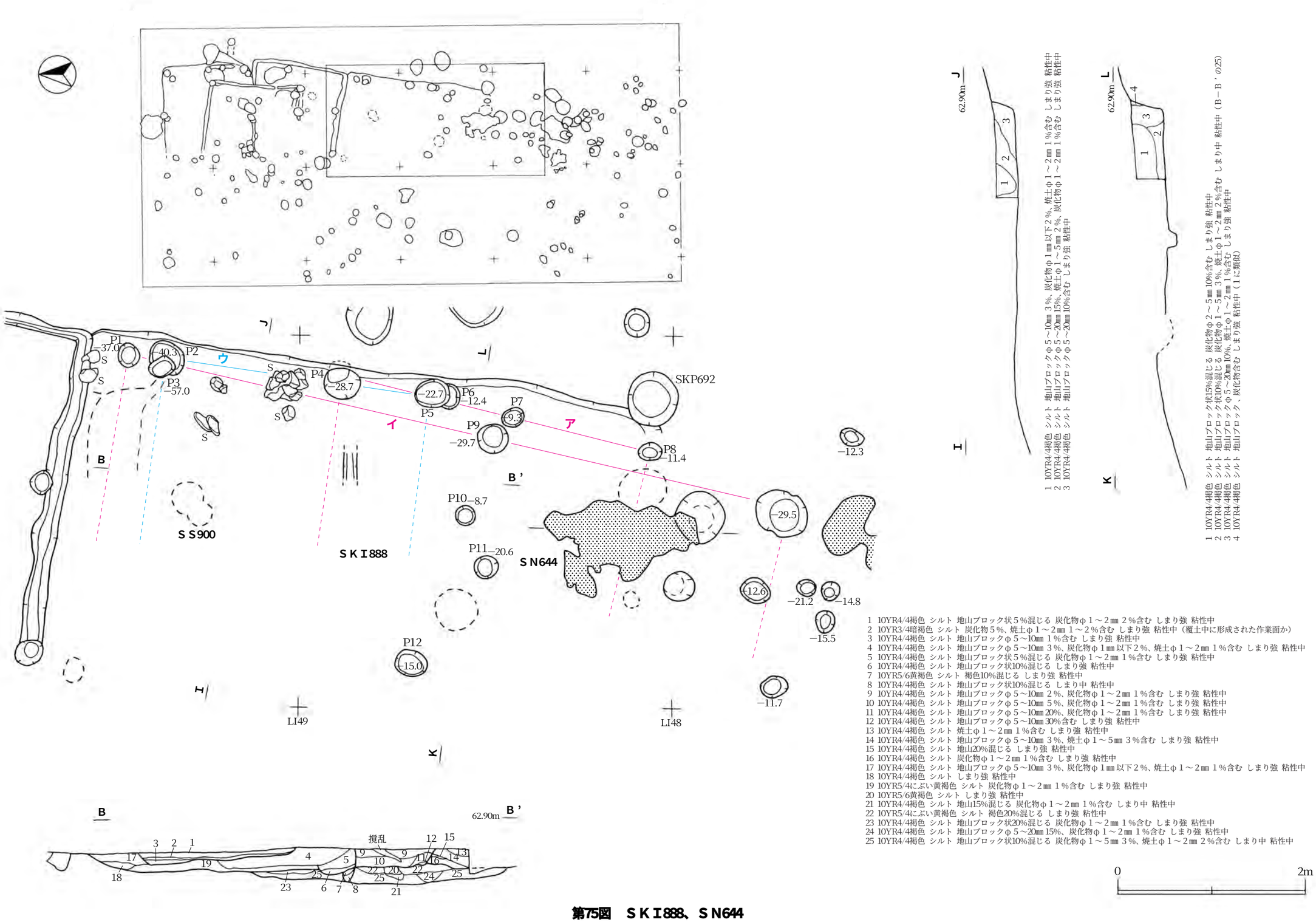
火床面は、長軸51㎝、短軸38㎝の広がりをもつ。

出土遺物：土師器を中心とする遺物がコンテナで１／４ほど出土した。カマドの南東側から土師器などの遺物が比較的多く出土した。

ＳＩ1000（第77・78図、図版18）

位　　置：ＭＣ・ＭＤ47

規　　模：北東壁長：3.45m、北西壁長：（1.58m）、南東壁長：（1.10m）、南西壁長不明、確認面から床面までの深さは、0.75mである。住居の南西側は、ＳＩ1456、ＳＫ2073の掘り込みによって消失しているため、全体の規模は不明である。ただし、住居床面の硬化部分の広



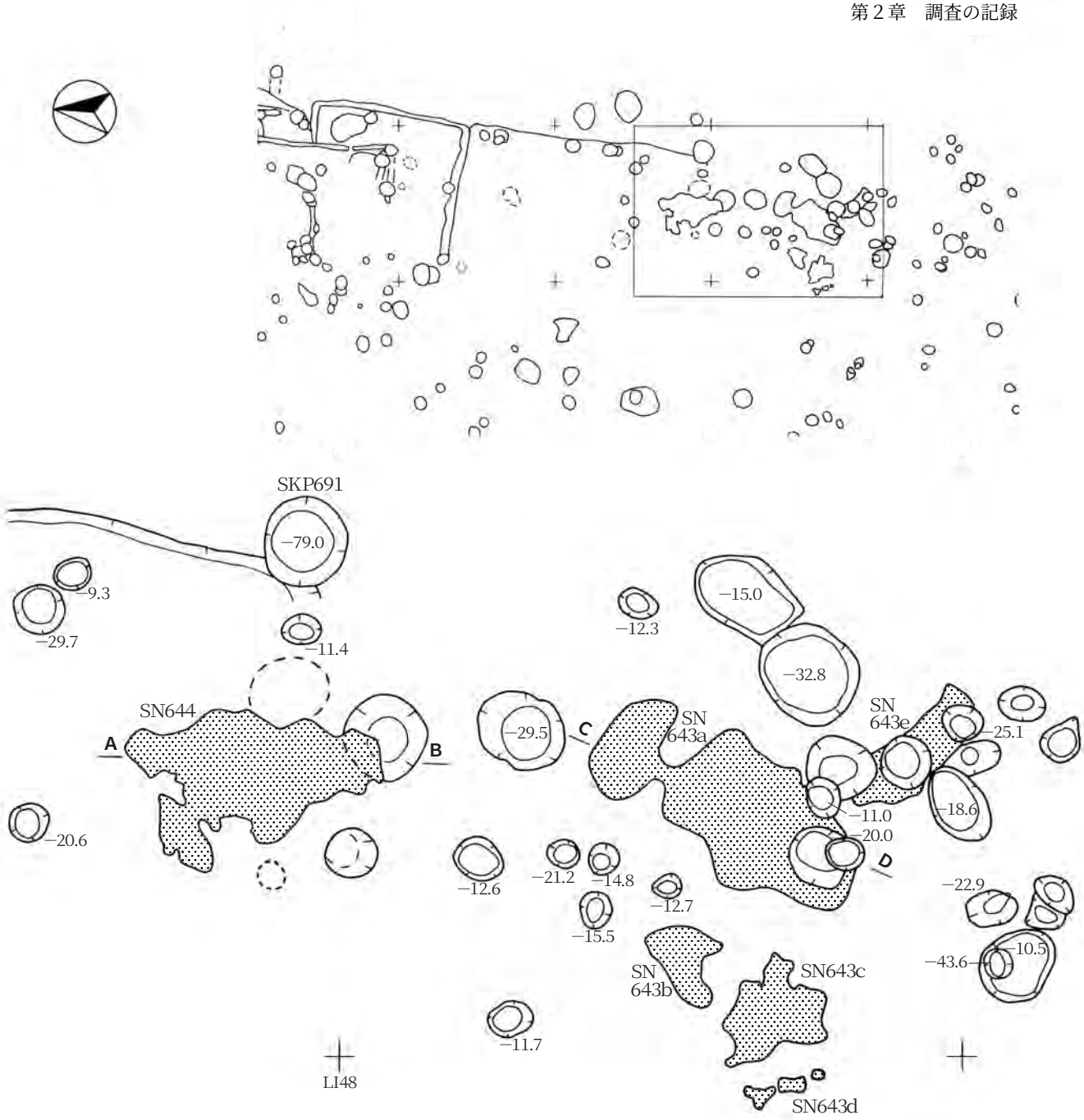
1 10YR4/4褐色 シルト 地山ブロックφ５～10mm ３%、炭化物φ１mm以下２%、焼土φ１～２mm １%含む しまり強 粘性中
2 10YR4/4褐色 シルト 地山ブロックφ５～20mm 15%、焼土φ１～５mm ２%、炭化物φ１～２mm １%含む しまり強 粘性中
3 10YR4/4褐色 シルト 地山ブロックφ５～20mm 10%含む しまり強 粘性中

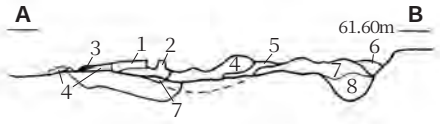
1 10YR4/4褐色 シルト 地山ブロック状15%混じる 炭化物φ２～５mm 10%含む しまり強 粘性中
2 10YR4/4褐色 シルト 地山ブロック状10%混じる 炭化物φ１～５mm ３%、焼土φ１～２mm ２%含む しまり中 粘性中（B－B'の25）
3 10YR4/4褐色 シルト 地山ブロックφ５～20mm 10%、焼土φ１～２mm １%含む しまり強 粘性中
4 10YR4/4褐色 シルト 地山ブロック、炭化物含む しまり強 粘性中（１に類似）

1 10YR4/4褐色 シルト 地山ブロック状５%混じる 炭化物φ１～２mm ２%含む しまり強 粘性中
2 10YR3/4暗褐色 シルト 炭化物５%、焼土φ１～２mm １～２%含む しまり強 粘性中（覆土中に形成された作業面か）
3 10YR4/4褐色 シルト 地山ブロックφ５～10mm １%含む しまり強 粘性中
4 10YR4/4褐色 シルト 地山ブロックφ５～10mm ３%、炭化物φ１mm以下２%、焼土φ１～２mm １%含む しまり強 粘性中
5 10YR4/4褐色 シルト 地山ブロック状５%混じる 炭化物φ１～２mm １%含む しまり強 粘性中
6 10YR4/4褐色 シルト 地山ブロック状10%混じる しまり強 粘性中
7 10YR5/6黄褐色 シルト 褐色10%混じる しまり強 粘性中
8 10YR4/4褐色 シルト 地山ブロック状10%混じる しまり中 粘性中
9 10YR4/4褐色 シルト 地山ブロックφ５～10mm ２%、炭化物φ１～２mm １%含む しまり強 粘性中
10 10YR4/4褐色 シルト 地山ブロックφ５～10mm ５%、炭化物φ１～２mm １%含む しまり強 粘性中
11 10YR4/4褐色 シルト 地山ブロックφ５～10mm 20%、炭化物φ１～２mm １%含む しまり強 粘性中
12 10YR4/4褐色 シルト 地山ブロックφ５～10mm 30%含む しまり強 粘性中
13 10YR4/4褐色 シルト 焼土φ１～２mm １%含む しまり強 粘性中
14 10YR4/4褐色 シルト 地山ブロックφ５～10mm ３%、焼土φ１～５mm ３%含む しまり強 粘性中
15 10YR4/4褐色 シルト 地山20%混じる しまり強 粘性中
16 10YR4/4褐色 シルト 炭化物φ１～２mm １%含む しまり強 粘性中
17 10YR4/4褐色 シルト 地山ブロックφ５～10mm ３%、炭化物φ１mm以下２%、焼土φ１～２mm １%含む しまり強 粘性中
18 10YR4/4褐色 シルト しまり強 粘性中
19 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト 炭化物φ１～２mm １%含む しまり強 粘性中
20 10YR5/6黄褐色 シルト しまり強 粘性中
21 10YR4/4褐色 シルト 地山15%混じる 炭化物φ１～２mm １%含む しまり中 粘性中
22 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト 褐色20%混じる しまり強 粘性中
23 10YR4/4褐色 シルト 地山ブロック状20%混じる 炭化物φ１～２mm １%含む しまり強 粘性中
24 10YR4/4褐色 シルト 地山ブロックφ５～20mm 15%、炭化物φ１～２mm １%含む しまり強 粘性中
25 10YR4/4褐色 シルト 地山ブロック状10%混じる 炭化物φ１～５mm ３%、焼土φ１～２mm ２%含む しまり中 粘性中

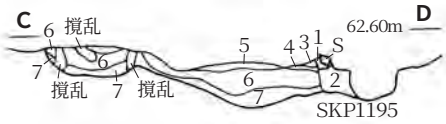
0　2m

第75図　ＳＫＩ888、ＳＮ644

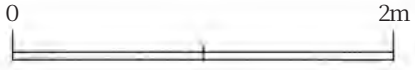




S N644
1　5YR4/6赤褐色　シルト　しまり中　粘性弱
2　10YR3/3暗褐色　シルト　しまり中　粘性中
3　5YR4/8赤褐色　シルト　しまり強　粘性弱
4　7.5YR4/4褐色　シルト　しまり中　粘性中
5　10YR3/3暗褐色　シルト　しまり中　粘性中
6　10YR3/3暗褐色　シルト　しまり中　粘性中
7　5YR4/8赤褐色　シルト　しまり強　粘性弱
8　10YR3/4暗褐色　シルト　しまり中　粘性中



S N643
1　7.5YR3/4暗褐色　シルト　しまり中　粘性中
2　5YR4/6赤褐色　シルト　焼土φ５～10㎜５%含む　しまり中　粘性中
3　5YR4/8赤褐色　シルト　しまり強　粘性弱　火床面
4　7.5YR4/6褐色　シルト　しまり強　粘性弱　火床面
5　5YR4/6赤褐色　シルト　しまり強　粘性弱　被熱部分
6　7.5YR4/6褐色　シルト　しまり強　粘性弱
7　5YR4/6赤褐色　シルト　しまり強　粘性弱　被熱部分



第76図　ＳＮ643・644

がりから、長軸は4.5m以上あったと推測される。したがって平面形は長方形に近い形だった可能性が高い。

確認状況：Ⅶ層上面で周囲と異なる不定形の土の広がりを確認した。その後の精査により、本遺構を含む複数遺構の重複であることが判明した。

重複遺構：ＳＩ1456、ＳＫ2073と重複し、本遺構はこれらよりも古い。

覆　　土：ほとんどが人為的要素のみられる層であるが、標高の高い方から土が流れ込んだとみられる土層堆積状態である。20層は覆土を一時的に掘り込んだ部分に堆積した土と考えられる。

壁　　：北西壁は急角度で立ち上がるが、北東壁、南東壁は床面からやや丸みを帯びて立ち上がる。

床　　面：ほぼ平坦である。中央部には、貼り床を施した部分や一際硬くしまった部分がある。硬くしまった部分は貼り床範囲を挟んで北東、南西の両側にあり、南西部部分はＳＩ145プラン内に及んでいる。

壁　　溝：なし。

柱　　穴：４基のピットが検出された。このうちＰ１～３が主柱穴と考えられる。

カ マ ド：床面に２か所の焼土があり、カマド火床面の可能性が考えられる。

出土遺物：土師器を中心とする遺物がコンテナで３／４ほど（須恵器４点のみ）出土した（第169図５～８、第210図35～37、図版41）。

備　　考：長方形という平面形の特徴や２か所の焼土の存在から、通常の竪穴住居とは異なる性格も考えられる。

ＳＩ1456（第77・78図、図版18）

位　　置：ＭＤ46・47、ＭＥ47、ＭＥ46

規　　模：北－南6.8m、東－西（4.03m）。確認面から床面までの深さは、0.25m前後である。

確認状態：Ⅶ層上面で周囲と異なる不定形の土の広がりを確認した。その後の精査により、当遺構を含む複数遺構の重複であることが判明した。

覆　　土：ＳＩ1000同様に覆土には人為的要素がみられが、標高の高い方から土が流れ込んだとみられる土層堆積状態である。

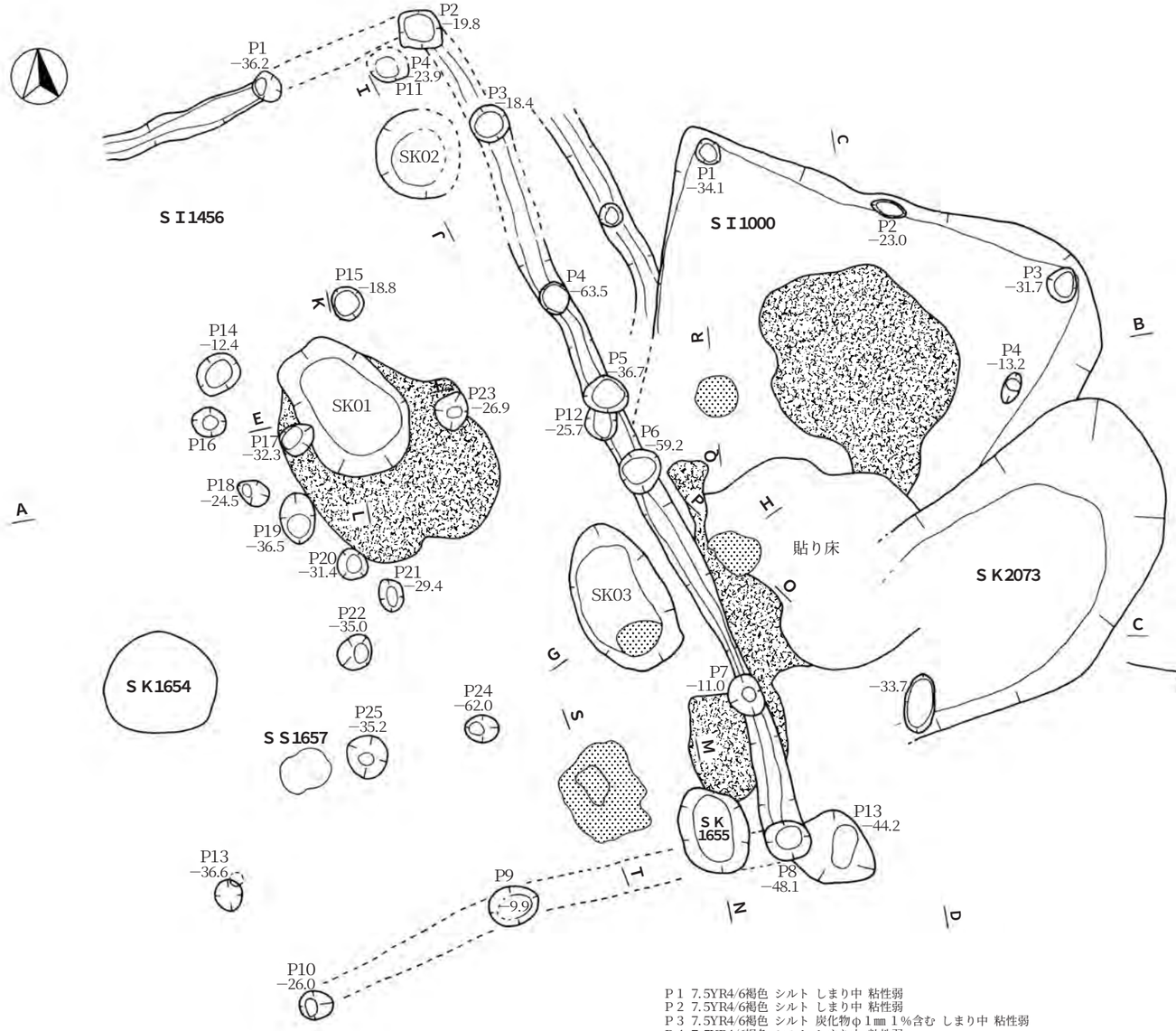
重複遺構：ＳＩ1000、ＳＫ1655、ＳＫ2073と重複し、本遺構はＳＫ1655、ＳＫ2073より古くＳＩ1000より新しい。Ａ－Ｂ断面から、ＳＩ1000が埋まりきらないうちに本遺構が掘り込まれたことがわかる。

床　　面：ほぼ平坦である。住居中央部、南東部壁際に硬くしまった部分がある。このうち南東部については、ＳＩ1000の床面硬化部分が当遺構に取り込まれてしまったものと考えられる。

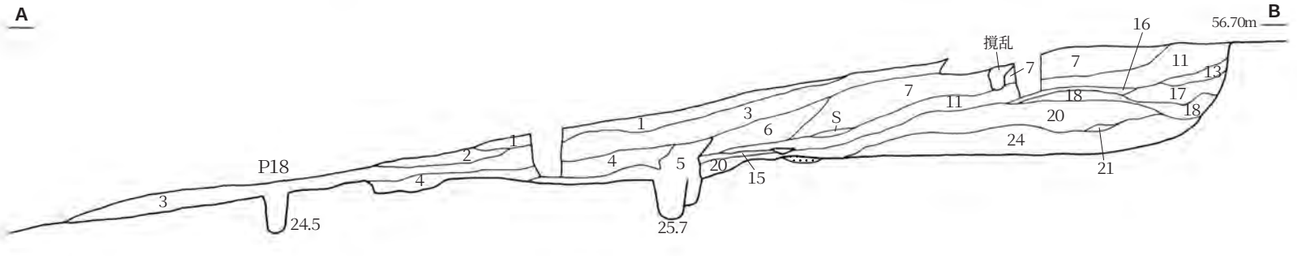
壁　　溝：幅0.11～0.29m、深さ0.16mで西側部分は北側、南側は確認できなかった。

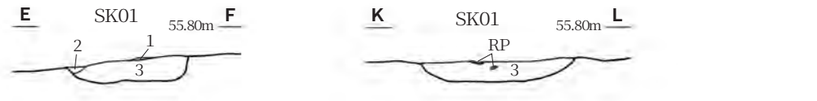
柱　　穴：Ｐ１～10が主柱穴と考えられる。

関連施設：カマド状の遺構、ＳＳ1657、ＳＫ1654・1655、ＳＫ01～04が検出されている。このうちカマド状の遺構、ＳＳ1657、ＳＫ01については当遺構に伴う可能性が高いといえる。ＳＫ01については、覆土の堆積状態から当遺構に伴うか、廃絶直後に掘り込まれたかのいずれか

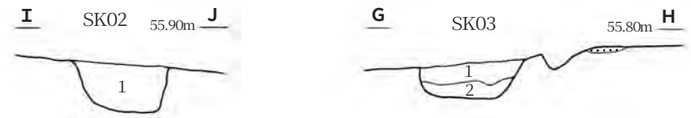


P１ 7.5YR4/6褐色 シルト しまり中 粘性弱
P２ 7.5YR4/6褐色 シルト しまり中 粘性弱
P３ 7.5YR4/6褐色 シルト 炭化物φ１㎜ １%含む しまり中 粘性弱
P４ 7.5YR4/6褐色 シルト しまり中 粘性弱



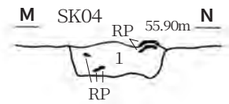


1 10YR3/3暗褐色 シルト 炭化物φ１㎜ １%、焼土φ１～３㎜ １%含む しまり強 粘性中
2 10YR2/3黒褐色 シルト 炭化物φ１㎜ １%含む しまり強 粘性弱
3 7.5YR4/4褐色 シルト 地山ブロックφ１～20㎜ ３%、焼土φ１～２㎜ １%含む しまり中 粘性弱

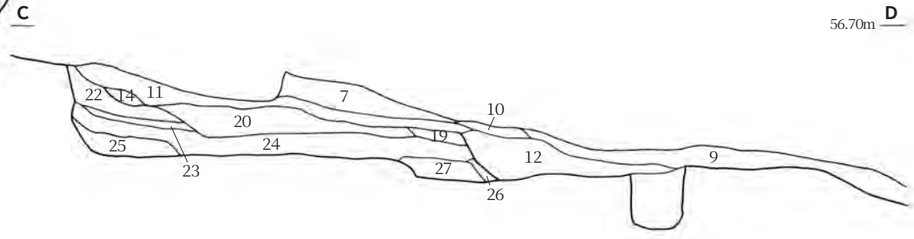


S K02
1 7.5YR4/4褐色 シルト 炭化物φ１～２㎜ １%含む しまり中 粘性弱

S K03
1 7.5YR4/6褐色 砂 しまり強 粘性なし
2 7.5YR2/3極暗褐色 シルト 地山ブロックφ１～40㎜ 10%、焼土φ１～20㎜ ３%、炭化物φ１～５㎜ １%含む しまり中 粘性弱



1 7.5YR4/6褐色 シルト 焼土φ１～２㎜ ２%、炭化物φ１～５㎜ １%含む しまり中 粘性弱

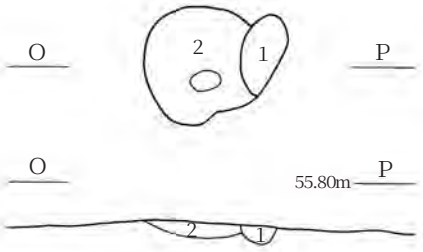


1 10YR3/4暗褐色 シルト 地山20%混じる 炭化物φ１㎜ １%、焼土φ１㎜ １%含む しまり強 粘性弱
2 10YR3/3暗褐色 シルト 地山10%混じる 炭化物φ１～３㎜ １%含む しまり強 粘性弱
3 10YR2/3黒褐色 シルト 地山ブロックφ１～５㎜ １%、炭化物φ１㎜ １%含む しまり強 粘性中
4 7.5YR4/4褐色 シルト 地山ブロックφ１～20㎜ ３%、焼土φ１～２㎜ １%含む しまり中 粘性弱
5 7.5YR4/6褐色 シルト 地山ブロックφ１～３㎜ ５%、炭化物φ１㎜ １%含む しまり強 粘性弱
6 7.5YR4/4褐色 シルト 地山ブロックφ１～５㎜ ２%、炭化物φ１㎜ １%含む しまり強 粘性弱
7 7.5YR4/4褐色 シルト 地山ブロックφ１～10㎜ １%、炭化物φ１～５㎜ １%、焼土φ１㎜ １%含む しまり強 粘性中
8 7.5YR4/4褐色 シルト 炭化物φ１㎜ １%含む しまり強 粘性弱
9 7.5YR4/3褐色 シルト 地山ブロックφ１～３㎜ ２%、炭化物φ１～３㎜ ２%、焼土φ１～２㎜ ２%含む しまり強 粘性弱
10 7.5YR3/4暗褐色 シルト 地山ブロックφ１～３㎜、焼土φ１㎜ １%含む しまり強 粘性弱
11 7.5YR4/4褐色 シルト 炭化物φ１～５㎜ ３%、焼土φ１㎜ １%含む しまり強 粘性弱
12 7.5YR4/4褐色 シルト 地山ブロックφ１～10㎜ ５%、炭化物φ１～５㎜ ２%、焼土φ１～３㎜ １%含む しまり強 粘性弱
13 7.5YR4/6褐色 粘土 しまり強 粘性強
14 7.5YR4/4褐色 シルト しまり中 粘性弱
15 7.5YR4/4褐色 シルト しまり強 粘性中
16 7.5YR4/6褐色 粘土 焼土φ１～３㎜ １%含む しまり強 粘性強
17 7.5YR4/6褐色 シルト 地山ブロックφ５～10㎜ ５%、炭化物φ１～10㎜ １%、焼土φ１～３㎜ １% しまり中 粘性弱
18 7.5YR4/4褐色 シルト 地山ブロックφ１～20㎜ ３%、炭化物φ１～３㎜ １%、焼土φ１㎜ １%含む しまり中 粘性弱
19 7.5YR4/4褐色 シルト 地山ブロックφ１㎜ １%、炭化物φ１㎜ １%含む しまり強 粘性弱
20 7.5YR4/4褐色 シルト 地山ブロックφ１～20㎜ 10%、炭化物φ１㎜ １%含む しまり強 粘性弱
21 10YR2/3黒褐色 シルト 炭化物φ１～３㎜ ２%、焼土φ１㎜ １%含む しまり弱 粘性弱
22 7.5YR4/6褐色 粘土 炭化物φ１㎜ １%含む しまり強 粘性弱
23 7.5YR4/4褐色 シルト 地山ブロックφ１～10㎜ ３%含む しまり強 粘性弱
24 7.5YR4/6褐色 粘土 地山ブロックφ１～10㎜ 20%含む しまり強 粘性弱
25 7.5YR4/4褐色 シルト 地山ブロックφ１～３㎜ ５%、炭化物φ１㎜ １%、焼土φ１㎜ １%含む しまり強 粘性弱
26 7.5YR4/6褐色 砂 しまり強 粘性弱
27 7.5YR4/4褐色 シルト 地山ブロックφ１～10㎜ ３%、炭化物φ１～10㎜ ２%含む しまり中 粘性弱

0　2m

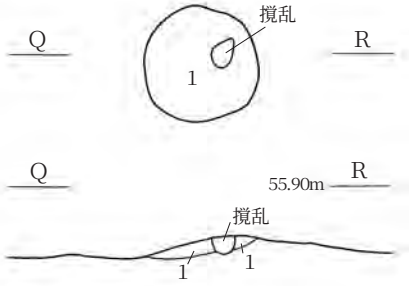
第77図　S I 1000・1456、S K 2073

ＳＩ1000カマド１



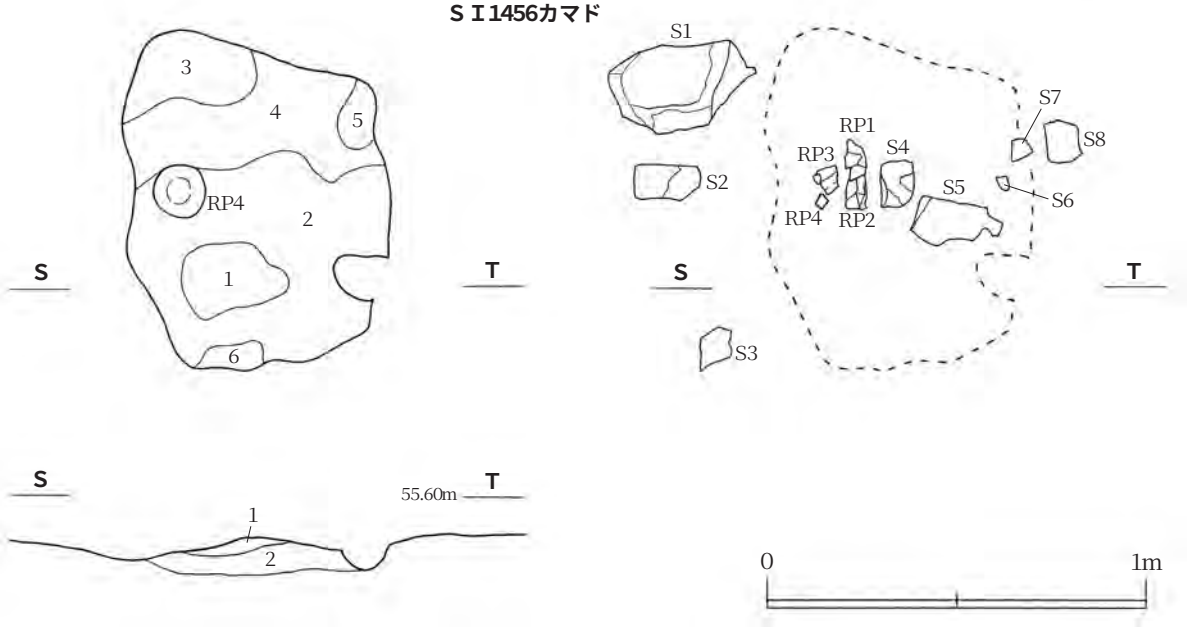
1　7.5YR4/3褐色　シルト　焼土φ１～５㎜　３%、炭化物φ１～５㎜　２%含む　しまり弱　粘性弱
2　5YR3/6暗赤褐色　砂　しまり強　粘性なし

ＳＩ1000カマド２



1　5YR4/6赤褐色　砂　しまり強　粘性なし

ＳＩ1456カマド



1　2.5YR5/8明赤褐色　砂　しまり強　粘性なし
2　2.5YR4/6赤褐色　砂　しまり強　粘性なし
3　5YR4/6赤褐色　砂　しまり強　粘性なし
4　10YR4/4褐色　砂　しまり強　粘性なし
5　5YR3/4暗褐色　砂　しまり強　粘性なし
6　7.5YR3/4暗褐色　砂　焼土φ１～５㎜　５%、炭化物φ１～３㎜　１%含む　しまり強　粘性なし

第78図　ＳＩ1000・1456カマド

であると判断できる。カマド状の遺構は、南壁近くの床面に形成された火床面であるが、この面から少し浮いたところで被熱した軟質の礫が数点出土している。これらの礫はカマドの芯材であった可能性がある。ＳＫ02～04については当遺構には伴わない可能性も考えられる。ＳＫ03は底面近くの覆土に焼土塊を多く含む土坑である。ＳＫ04は覆土から土師器が多く出土している。

遺　　物：土師器を中心とする遺物がコンテナで２箱ほど（須恵器１点のみ）出土した（第170図１～14、第210図37・38、図版41）。

備　　考：カマド状の施設をもつものの、遺構の平面形や大きさは、ＳＫⅠ2064～2068に類似する。また、ＳＳ1657の存在から、竪穴住居以外の性格を持つ可能性が高い。

ＳＩ1649（第79図、図版15）

位　　置：ＭＡ47

規　　模：北壁長（3.9m）、東壁長（0.56m）、その他は不明。確認面から床面までの深さは、0.2m前後である。

確認状況：Ⅶ層で周囲と異なる土の広がりを確認し、調査の結果、竪穴住居跡と判断した。

重複遺構：ＳⅠ1650と重複し、本遺構が古い。

覆　　土：ＳⅠ1650によって遺構のほとんどが消失しているため、壁際の覆土しか残存していない。人為的要素のみられる層であるが、標高の高い方から流れ込んでいるように見える。

壁　　：床面から急角度で立ち上がる。

床　　面：ほぼ平坦である。

壁　　溝：壁際の一部に溝状の掘り込みがみられるが判然としない。

柱　　穴：Ｐ１とＰ２が本遺構に伴うものと考えられるが、その他は不明である。

カ マ ド：なし（ＳⅠ1650の構築により消滅した可能性がある）。

出土遺物：なし。

ＳＩ1650（第79図、図版15・17）

位　　置：ＬＴ・ＭＡ47

規　　模：北壁長（1.75m）、東壁長（1.93m）、その他は不明。確認面から床面までの深さは、0.45mである。

確認状況：Ⅶ層で周囲と異なる土の広がりを確認し、調査の結果、竪穴住居跡と判断した。

重複遺構：ＳⅠ1649と重複し、本遺構が新しい。

覆　　土：人為的要素のみられる層であるが、標高の高い方から流れ込んでいるように見える。

壁　　：床面からやや急角度で立ち上がる。

床　　面：ほぼ平坦で、貼り床が施されている。

壁　　溝：なし。

柱　　穴：Ｐ４～８が本遺構に伴う柱穴と考えられる。

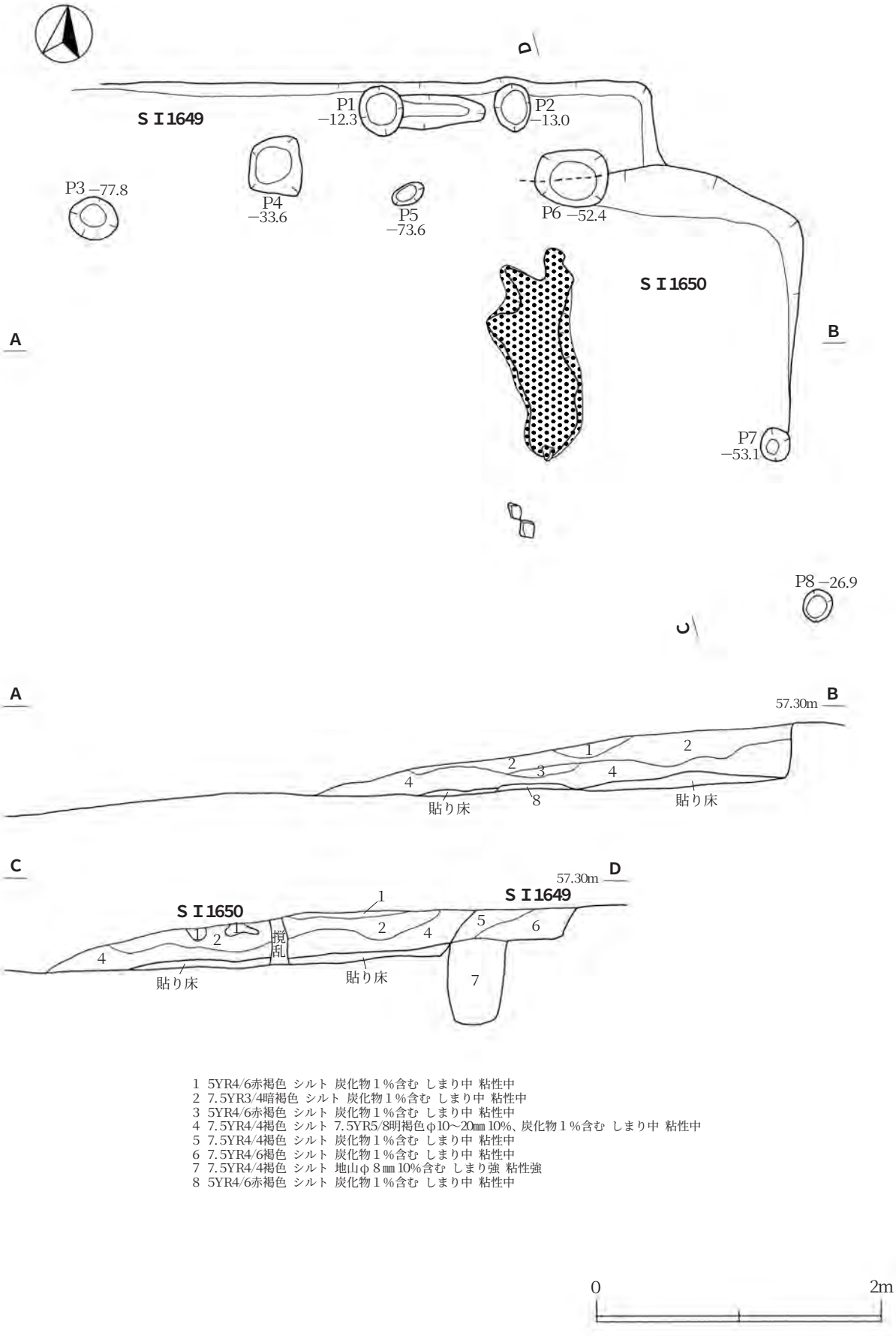
カ マ ド：北壁近くでカマド構造材の土塊を検出した。

遺　　物：（第171図１～５、図版41）。土師器を中心とする遺物がコンテナで２／３ほど（須恵器１点のみ）出土した。

ＳＩ1755（第80図、図版16・17）

位　　置：ＬＯ46グリッドを主体とし、ＬＯ47、ＬＮ46・47、ＬＰ46グリッドに及ぶ範囲に位置する。

規　　模：北壁長4.27m、南壁長4.52（4.62m）、東壁長3.93（5.33m）、西壁長3.9（4.91m）。確認



1　5YR4/6赤褐色　シルト　炭化物１％含む　しまり中　粘性中
2　7.5YR3/4暗褐色　シルト　炭化物１％含む　しまり中　粘性中
3　5YR4/6赤褐色　シルト　炭化物１％含む　しまり中　粘性中
4　7.5YR4/4褐色　シルト　7.5YR5/8明褐色φ10～20㎜ 10%、炭化物１％含む　しまり中　粘性中
5　7.5YR4/4褐色　シルト　炭化物１％含む　しまり中　粘性中
6　7.5YR4/6褐色　シルト　炭化物１％含む　しまり中　粘性中
7　7.5YR4/4褐色　シルト　地山φ８㎜ 10%含む　しまり強　粘性強
8　5YR4/6赤褐色　シルト　炭化物１％含む　しまり中　粘性中

第79図　ＳＩ1649・1650

面から床面までの深さは、0.55mである。

確認状況：Ⅶ層で周囲と異なる土の広がりを確認し、調査の結果、竪穴住居跡と判断した。

重複遺構：ＳＫ1756、ＳＤ1704、ＳＳ1700と重複する。本遺構が最も古い。

覆　　土：住居内の東西では壁際から流入土が何層か確認できるが、南北方向ではみられず主体となる１層のみである。ここのことから、住居廃絶後しばらくしてから南北いずれかの方向から本遺構へ土が一気に捨てられ、本遺構が埋められたと考えられる。

壁　　：急角度で立ち上がる。

床　　面：住居南側に一段高いテラス状の面がある。

壁　　溝：東壁で確認した。

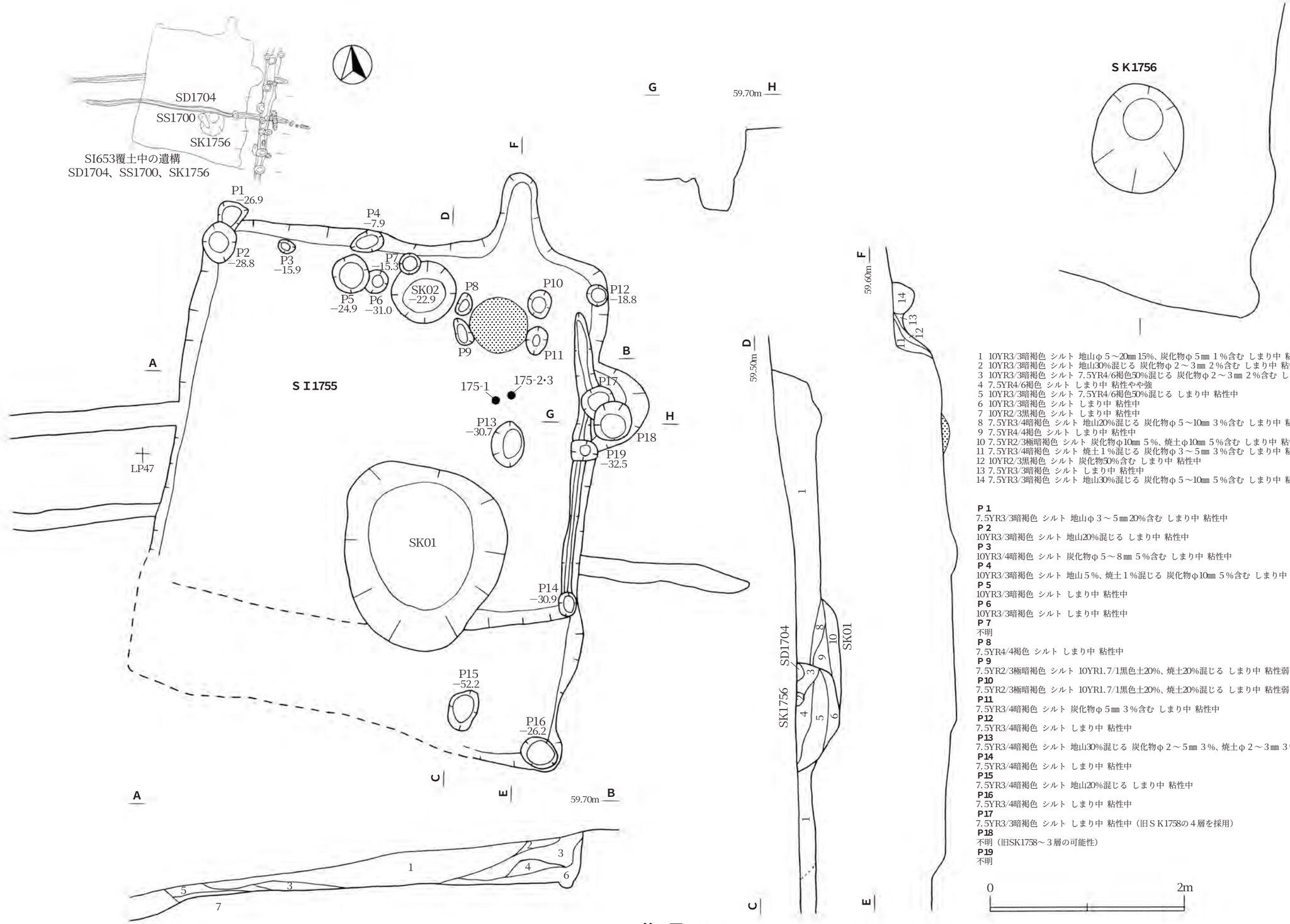
柱　　穴：19基のピットを確認したが、住居の西側、南側では確認できなかった。

カ マ ド：北壁に付設されている。崩壊した状態にあり、少量の構造材、火床面、煙道などが残存している。火床面の両側からは、芯材の抜き取り痕とみられるピットが検出された。

関連施設：北壁際と住居中央部から土坑状の掘り込みが検出された。東壁の北寄りに突出した部分がある。出土遺物：（第172図１～４、図版42)。土師器を中心とする遺物がコンテナで２／３ほど出土した。

遺　　物：土師器を中心とする遺物がコンテナで２／３ほど（須恵器１点のみ出土）出土した。

備　　考：住居南側に一段高いテラス状の面がある。この面の直下（一段低い面）と南端部分にはそれぞれ柱穴がある。この配置が、南側への増築を示すものか否かを確認することはできなかった。


SD1704
SS1700
SK1756
SI653覆土中の遺構
SD1704、SS1700、SK1756
P1 −26.9
P2 −28.8
P3 −15.9
P4 −7.9
P5 −24.9
P6 −31.0
P7 −15.3
SK02 −22.9
P8
P9
P10
P11
P12 −18.8
P13 −30.7
P14 −30.9
P15 −52.2
P16 −26.2
P17
P18
P19 −32.5
175-1
175-2・3
SK01
SI1755
LP47
A
B
C
D
E
F
G
H
59.70m
59.60m
59.50m
SK1756
1 10YR3/3暗褐色 シルト 地山φ５～20㎜ 15%、炭化物φ５㎜ １%含む しまり中 粘性中
2 10YR3/3暗褐色 シルト 地山30%混じる 炭化物φ２～３㎜ ２%含む しまり中 粘性中
3 10YR3/3暗褐色 シルト 7.5YR4/6褐色50%混じる 炭化物φ２～３㎜ ２%含む しまり中 粘性中
4 7.5YR4/6褐色 シルト しまり中 粘性やや強
5 10YR3/3暗褐色 シルト 7.5YR4/6褐色50%混じる しまり中 粘性中
6 10YR3/3暗褐色 シルト しまり中 粘性中
7 10YR2/3黒褐色 シルト しまり中 粘性中
8 7.5YR3/4暗褐色 シルト 地山20%混じる 炭化物φ５～10㎜ ３%含む しまり中 粘性中
9 7.5YR4/4褐色 シルト しまり中 粘性中
10 7.5YR2/3極暗褐色 シルト 炭化物φ10㎜ ５%、焼土φ10㎜ ５%含む しまり中 粘性弱
11 7.5YR3/4暗褐色 シルト 焼土１%混じる 炭化物φ３～５㎜ ３%含む しまり中 粘性中
12 10YR2/3黒褐色 シルト 炭化物50%含む しまり中 粘性中
13 7.5YR3/3暗褐色 シルト しまり中 粘性中
14 7.5YR3/3暗褐色 シルト 地山30%混じる 炭化物φ５～10㎜ ５%含む しまり中 粘性中
P1
7.5YR3/3暗褐色 シルト 地山φ３～５㎜ 20%含む しまり中 粘性中
P2
10YR3/3暗褐色 シルト 地山20%混じる しまり中 粘性中
P3
10YR3/4暗褐色 シルト 炭化物φ５～８㎜ ５%含む しまり中 粘性中
P4
10YR3/3暗褐色 シルト 地山５%、焼土１%混じる 炭化物φ10㎜ ５%含む しまり中 粘性中
P5
10YR3/3暗褐色 シルト しまり中 粘性中
P6
10YR3/3暗褐色 シルト しまり中 粘性中
P7
不明
P8
7.5YR4/4褐色 シルト しまり中 粘性中
P9
7.5YR2/3極暗褐色 シルト 10YR1.7/1黒色土20%、焼土20%混じる しまり中 粘性弱
P10
7.5YR2/3極暗褐色 シルト 10YR1.7/1黒色土20%、焼土20%混じる しまり中 粘性弱
P11
7.5YR3/4暗褐色 シルト 炭化物φ５㎜ ３%含む しまり中 粘性中
P12
7.5YR3/4暗褐色 シルト しまり中 粘性中
P13
7.5YR3/4暗褐色 シルト 地山30%混じる 炭化物φ２～５㎜ ３%、焼土φ２～３㎜ ３%含む しまり中 粘性中
P14
7.5YR3/4暗褐色 シルト しまり中 粘性中
P15
7.5YR3/4暗褐色 シルト 地山20%混じる しまり中 粘性中
P16
7.5YR3/4暗褐色 シルト しまり中 粘性中
P17
7.5YR3/3暗褐色 シルト しまり中 粘性中（旧ＳＫ1758の４層を採用）
P18
不明（旧SK1758～３層の可能性）
P19
不明
0
2m

第80図　ＳＩ1755

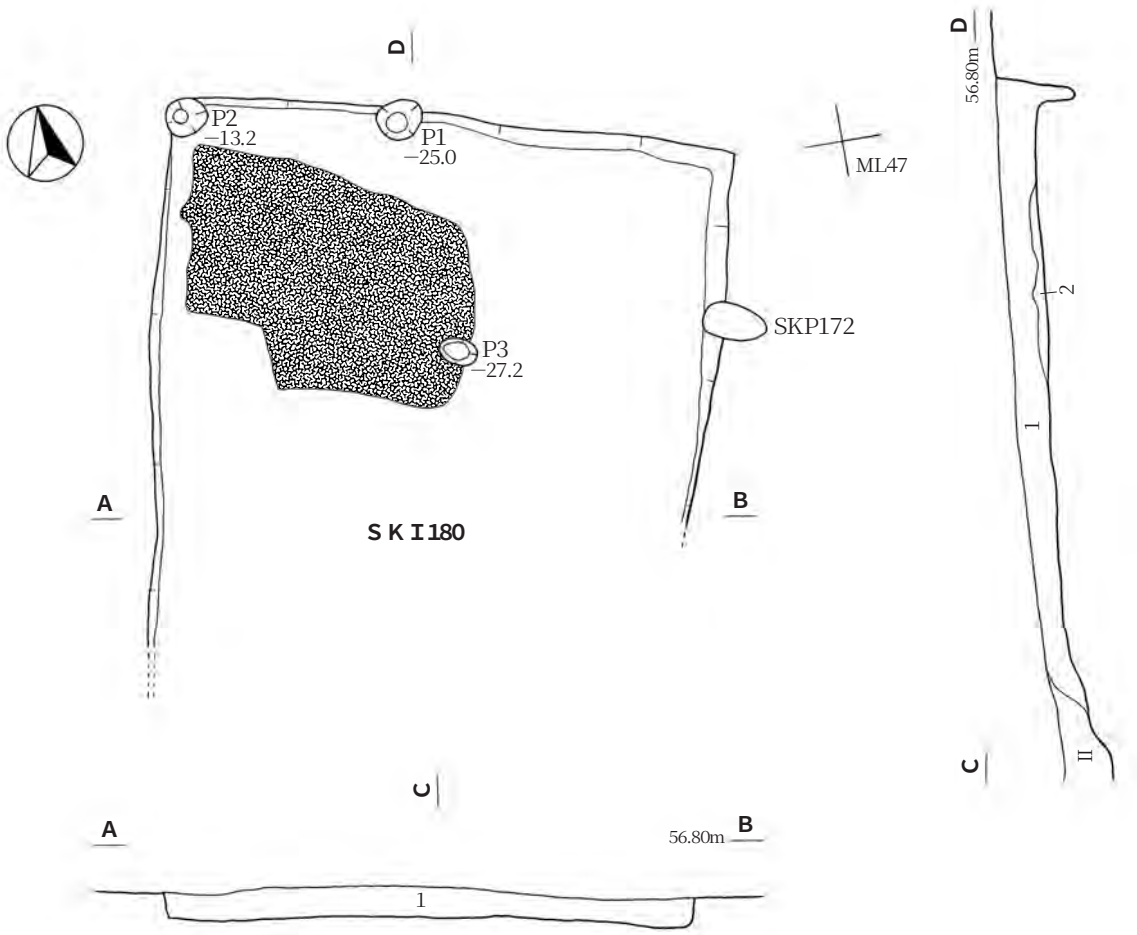
２　竪穴状遺構

竪穴状の掘り込みをもつが、規則的な柱穴の配置やカマド・焼土がみられないものを竪穴状遺構とした。ＳＫＩ2064、2065、2066、2067、2068、2069はここでいう竪穴状遺構とは少し形態が異なるが、便宜上ここに含めた。これらの遺構の特徴は、斜面を切り土して設けた平坦面に遺構を構築している点にある。そのため、斜面を削った時の掘り方はみられるが、竪穴住居のような壁はみられない。開口部をもつ建物と考えられる。

第７表　竪穴状遺構一覧（１）

	種類	番号	挿図番号	図版番号	グリッド	確認面(層)	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	重複
1	ＳＫＩ	128	第37図	21	ＬＢ48	Ⅶ	2.60m	(2.04m)	0.27m	なし
	Ｂ面とＣ面の間の斜面に位置する。明らかな柱穴や壁溝はないものの、南壁に煙道のような掘り込みがみられることから、竪穴住居跡の可能性がある。遺物（第172図８）：土師器ポリ袋中0.5袋、須恵器１点出土。									
2	ＳＫＩ	130	第37図	9	ＬＢ46	Ⅶ	2.38m	(0.87m)	0.07m	ＳＩ145→ＳＫＩ130
	Ｃ面に位置する。ほとんどが調査区外にあるとみられる。竪穴住居跡の可能性がある。遺物：土師器甕片１点出土。									
3	ＳＫＩ	180	第82図	－	ＭＬ48	Ⅶ	(3.03m)	(2.92m)	0.21m	なし
	調査区西側平坦面に位置する。床面に炭化物の広がりがある。規則的な柱穴の配置はみられないが、竪穴住居跡の可能性がある。遺物：土師器コンテナ１／３、須恵器壺が１点出土（第172図９・10、図版42)。									
4	ＳＫＩ	273	第84図	20	ＬＲ51	Ⅶ	(3.87m)	(2.90m)	0.28m	ＳＫＩ790→ＳＤ155→ＳＫＩ273
	Ｇ面とＨ面の間の斜面に位置する。全体のプランは不明であるが、壁際に柱穴が配置されることから竪穴住居跡の可能性がある。遺物（第173・174、図版42・43）：覆土から土師器コンテナ２箱、須恵器コンテナ１／２箱などが出土。									
5	ＳＫＩ	350	第83図	21	ＬＳ51	Ⅶ	(2.50m)	(1.32m)	0.15m	ＳＫ207と重複するが新旧は不明。
	Ｈ面に位置する。底面から完形の土師器（坏）が２個体（口縁を重ね合わせたものの上側を少しずらしたような状態で）出土した。遺物（第175図１・２、図版43）：土師器ポリ袋小１袋出土。									
6	ＳＫＩ	555	第85図	21	ＬＰ51	Ⅶ	2.62m	2.08m	0.41m	なし
	Ｇ面に位置する。南東側に張り出し部をもつ。しっかりした掘り込みであるが、柱穴、壁溝などは検出されなかった。遺物：土師器底部１点出土。									
7	ＳＫＩ	610	第86図	21	ＬＳ52	Ⅶ	4.35m	3.31m	0.25m	ＳＫＩ610→ＳＫ701
	Ｇ面とＨ面の間の斜面に位置する。底面に柱穴が４基みられるが規則的な配置ではない。ＳＫ01・02は当遺構に伴うと考えたが、ＳＫ２の方は古い可能性がある。遺物（第175図３・４、図版43）：土師器コンテナ１箱、須恵器２点出土。									
8	ＳＫＩ	790	第84図	－	ＬＱ50・51	Ⅶ	4.47m	(1.95m)	0.21m	ＳＫＩ790→ＳＤ155→ＳＫＩ273　ＳＤ154との新旧は不明。
	Ｇ面とＨ面の間の斜面に位置する。全体のプランは不明であるが、壁際に柱穴が配置されることから竪穴住居跡の可能性がある。遺物：土師器１点、須恵器ポリ袋中0.5袋（ＳＤ152出土遺物の接合したものあり）出土。									
9	ＳＫＩ	888	第75図	12	ＬＳ55	Ⅶ				ＳＫＩ888→ＳＳ900
	Ｅ面に位置する。東壁のラインにはほとんど変化がないものの、柱穴配置や覆土の状態から数回の建て替え（ア→イ→ウ、掘り込み６、５、４に対応する可能性あり）が行われたとみられる。底面はほぼ平らで、北東隅がやや高くベンチ状になっている。東壁近くの底面からは、礫が集中して出土した。遺構内の南側にはＳＮ644が形成されており、当遺構(イの時期)に伴う可能性がある。また、当遺構のプランから外れる可能性があるものの、ＳＮ644の南1.3mにはほぼ同じレベルでＳＮ643が形成されている。北側覆土には、竪穴廃絶後も度々覆土を掘り込んで何らかの活用をしていた痕跡がみられる（掘り込み１～３)。覆土２層は固くしまった炭化物層であるが、ほぼ同じレベルにＳＳ900が構築されていることから、土間状の一つの作業面と考えられる。遺物（第175図５～８、図版43）：土師器コンテナ３箱、須恵器ポリ袋中１袋出土。									
10	ＳＫＩ	1098	第87図	20・21	ＬＲ・ＬＳ48	Ⅶ	3.60m	2.94m	0.10m	ＳＫＩ1098→ＳＳ210、ＳＫＩ1098→ＳＮ157→ＳＫＰ1822
	北側の壁に隣接して小ピットがあり、そこから正立した状態で須恵器の壺が出土した。覆土にはＳＳ210やＳＮ157が形成されている。北にはＳＮ2049が隣接する。遺物（第175図９、図版43）：土師器ポリ袋中２袋、須恵器壺１個体出土。									
11	ＳＫＩ	1350	第88図	－	ＭＪ～ＭＬ47・48	Ⅶ	4.91m	2.50m	0.17m	ＳＫＩ1350→ＳＫ190・288・933・934、ＳＳ1446、ＳＫＰ1813
	平面形は長方形。多数の遺構と重複し、当遺構が一番古い（それぞれの遺構間の新旧は不明)。底面にピット（ＳＫＰ1805・1806・1807・1808・1809・1814）が掘り込まれているが規則的な配置ではない。周辺には焼土遺構が点在している。遺物：土師器コンテナ１／２箱出土。									

第81図　竪穴状遺構・掘立柱遺物跡配置図



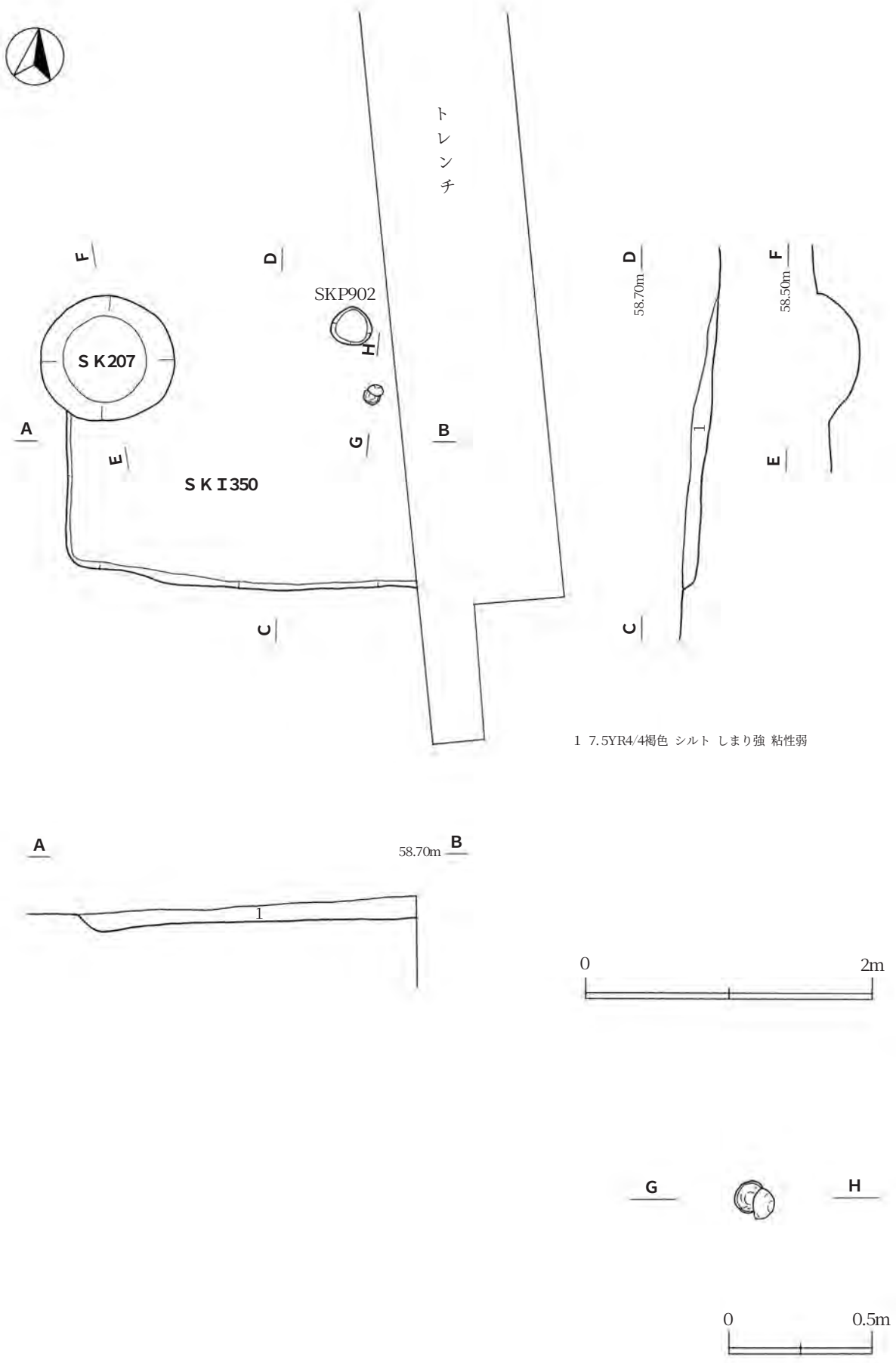
1　7.5YR4/6褐色　シルト　炭化物φ１～３㎜　２%、焼土φ１～３㎜　１%、礫φ１～10㎜　１%含む　しまり強　粘性なし
2　10YR2/3黒褐色　シルト　しまり中　粘性なし　炭化物と１層土の混合土
Ｐ１
7.5YR4/6褐色　シルト　礫φ１～10㎜　２%含む　しまり強　粘性なし
Ｐ２
7.5YR4/6褐色　シルト　炭化物φ１㎜　１%含む　しまり強　粘性強
Ｐ３
10YR2/3黒褐色　シルト　しまり中　粘性中

0　2m

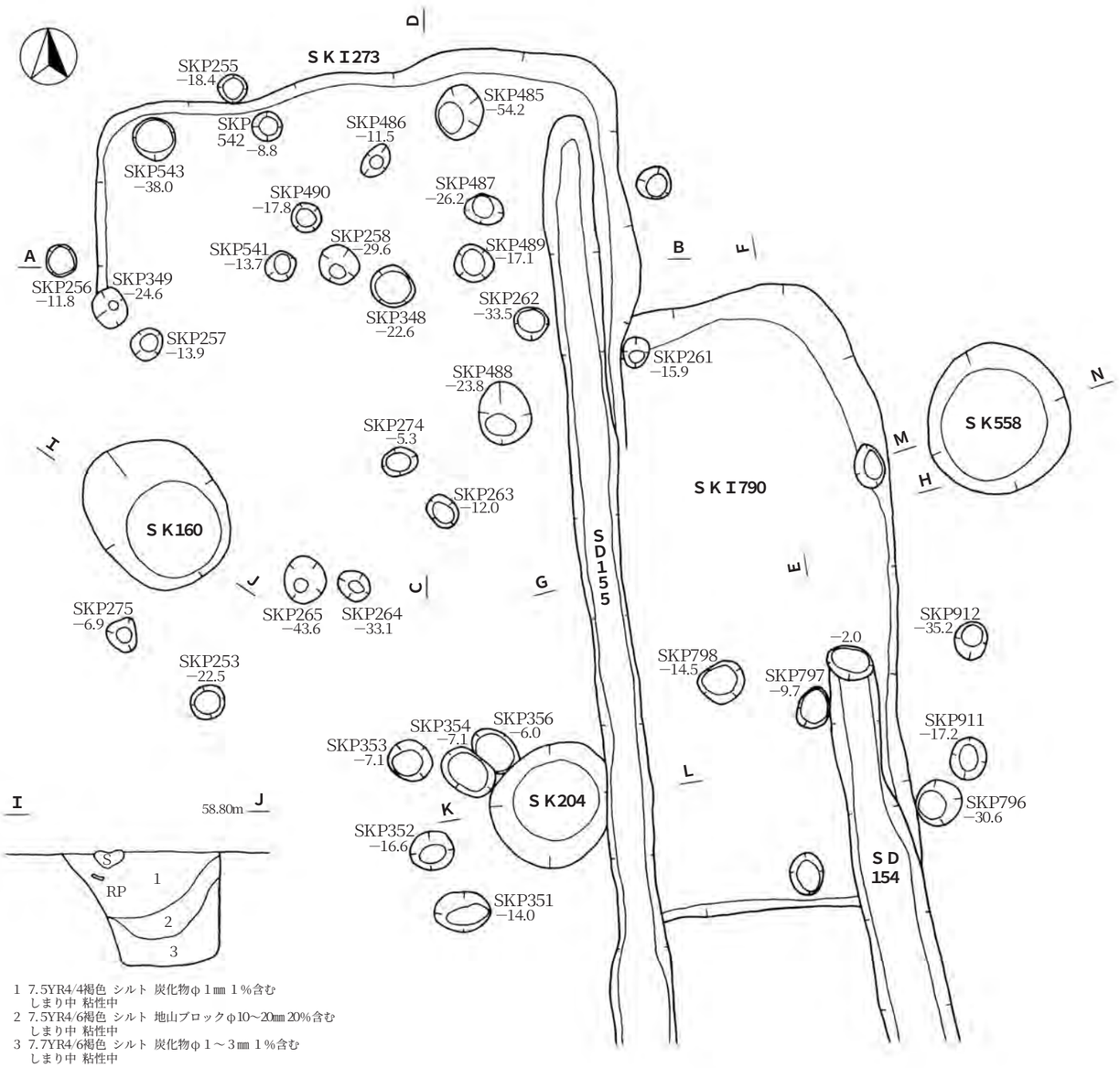
第82図　ＳＫＩ180

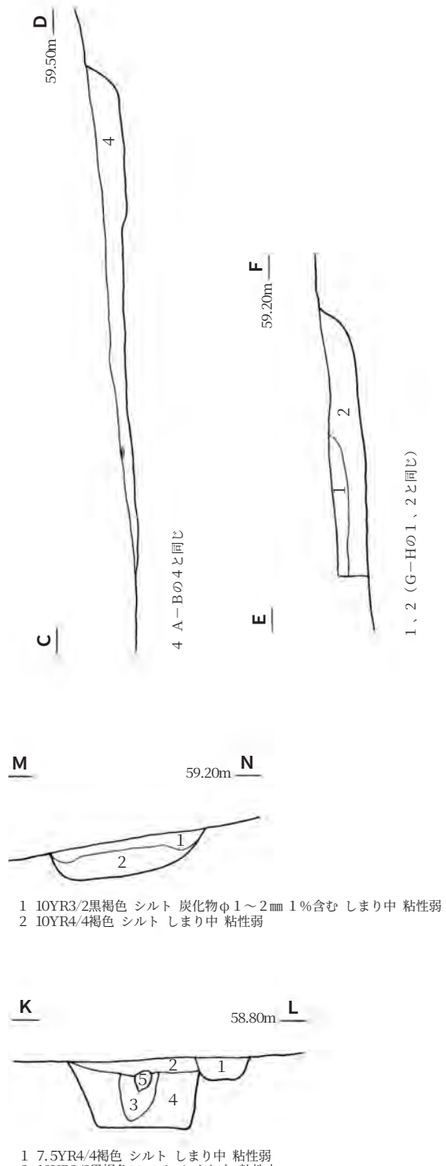
第８表　竪穴状遺構一覧（２）

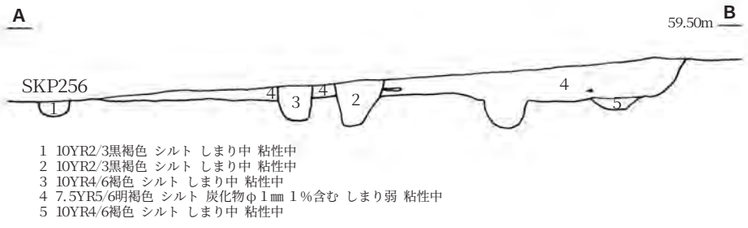
	遺構名	番号	挿図番号	図版番号	グリッド		重　　複	
	ＳＫＩ	2064	第89図	19	ＭＪ44・45、ＭＫ44・45、ＭＬ45、ＭＭ45		ＳＫＩ2065と重複（新旧不明）	
	地勢	南向きの斜面			確認面	Ⅶ層	規模	西北西－東南東10.51m、北北東－南南西（2.28）m
12	斜面中の平坦面を精査したところ、溝とそれに伴う柱穴を検出したため建物跡と判断した。覆土の主体はⅡ層である。床面はほぼ平坦である。壁溝は幅0.05～0.43m、深さ0.02～0.12mの大きさで、東側は極めて細く板材一枚が入る程度の溝になっている。柱穴は、Ｐ１～７が主柱穴と考えられる。関連施設として遺構内に南側が開口する「コ」字状の溝がある。この溝が単独の遺構なのか当遺構やＳＫＩ2065に伴うものなのかは不明である。この他にＳＫ195・307・408があり、ＳＫ307は当遺構より新しいが、他の２つとの新旧は不明である。全体の構造としては、南壁をもたない構造だったと考えられる。なお、遺構の南側部分は、盛り土によって造成されたことがトレンチ掘削による土層断面観察で明らかになった。遺物：後にＳＫＩ2065と重複することがわかったため、本遺構に確実に伴う遺物を明らかにすることはできなかった。							

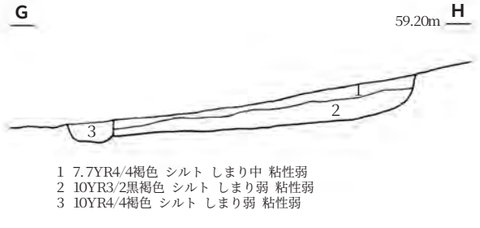

トレンチ
SK207
SKP902
SKI350
A
B
C
D
E
F
G
H
58.70m
58.50m
1
1 7.5YR4/4褐色 シルト しまり強 粘性弱
0
2m
0
0.5m

第83図　ＳＫＩ350

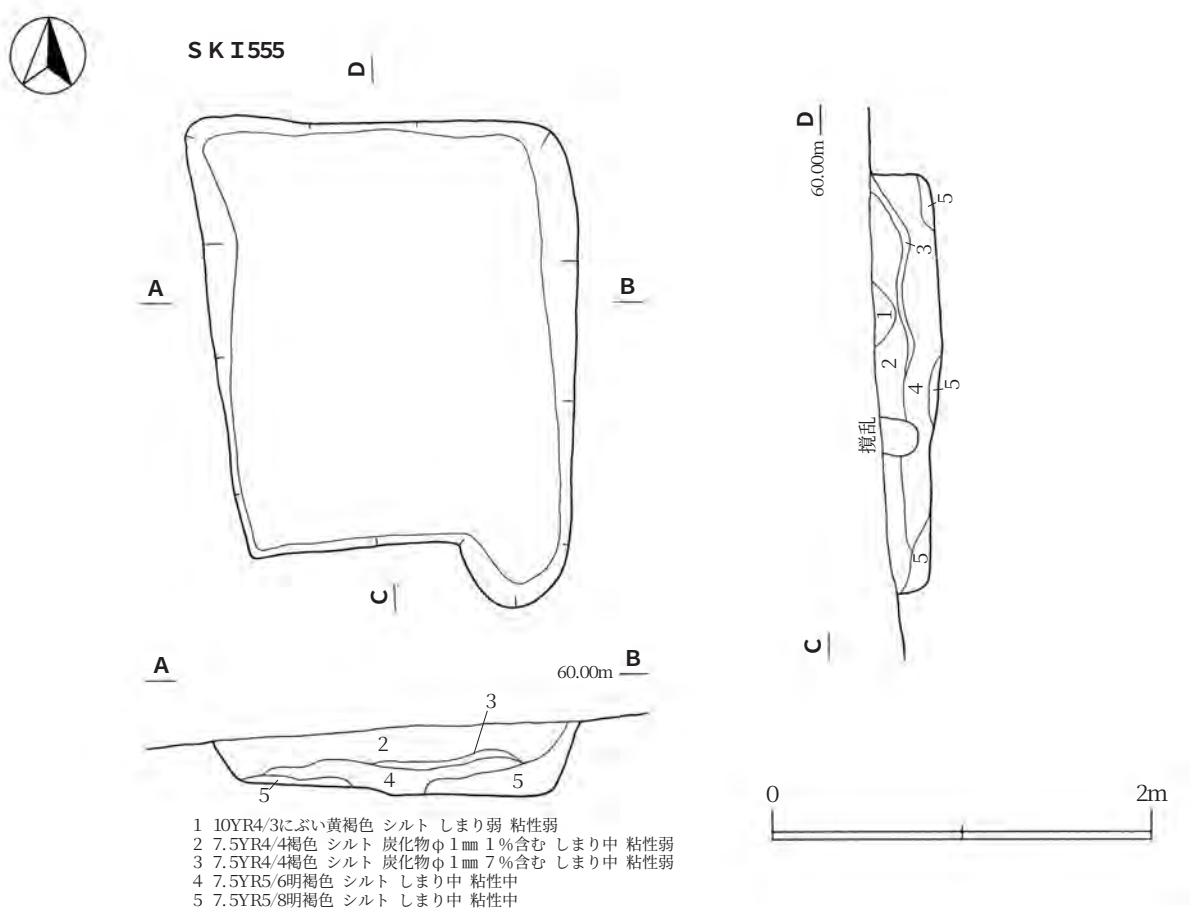








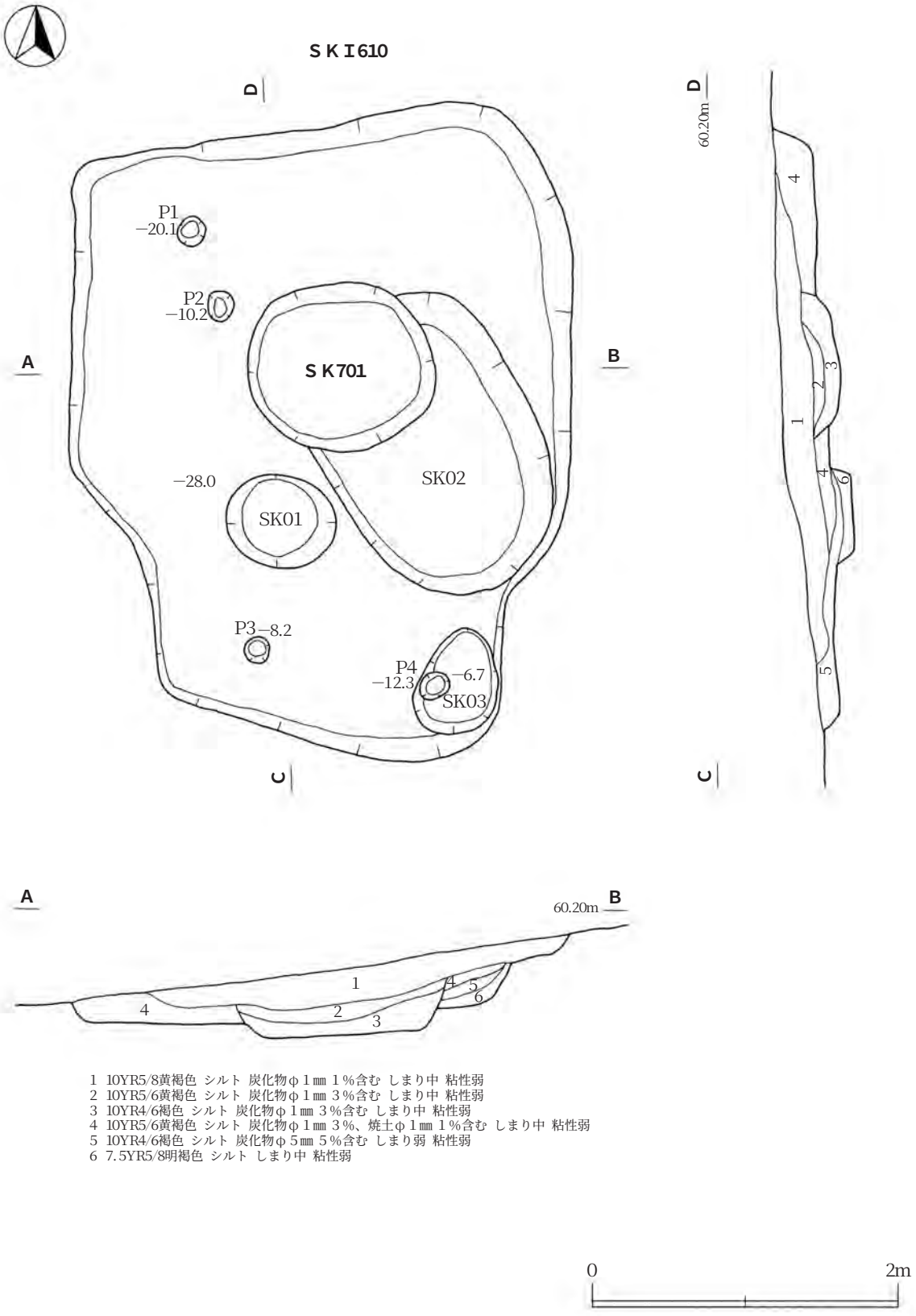
第84図　ＳＫＩ273・790



第85図　ＳＫＩ555

第９表　竪穴状遺構一覧（３）

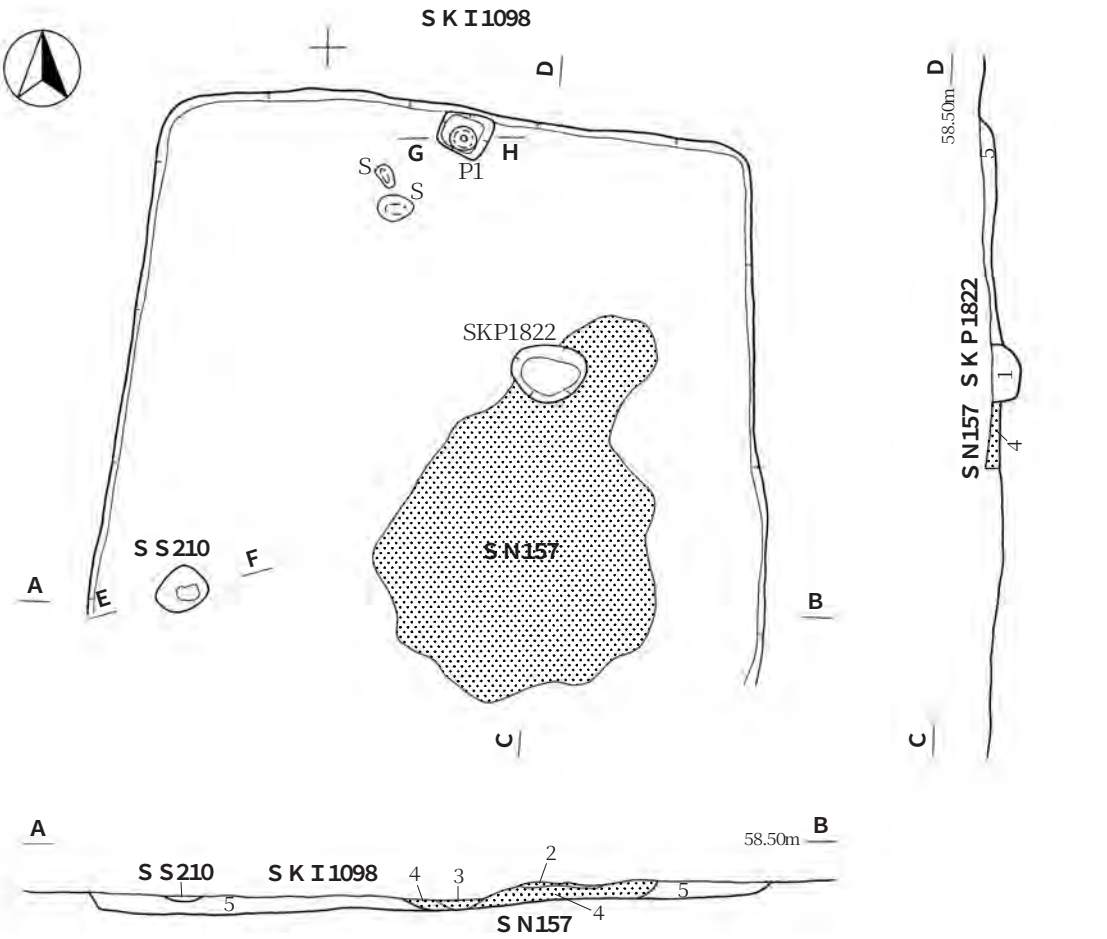
13	遺構名	番号	挿図番号	図版番号	グリッド		重　　複	
	ＳＫＩ	2065	第89図	19	ＭＪ44・45、ＭＫ44・45、ＭＬ44・45、ＭＭ44・45		ＳＫＩ2064と重複（新旧関係は不明）	
	地勢	南向きの斜面		確認面	Ⅶ層	規模	西北西－東南東11.56m、北北東－南南西2.66m	
	ＳＫＩ2064精査中に別の遺構とみられる柱穴群を確認し、これを建物跡と判断した。床面はほぼ平坦で、壁溝はない。柱穴は、Ｐ１～８が主柱穴と考えられる。この他、ＳＤ2075も当遺構の東壁として機能していた可能性があり、遺構東側部分は作り替えが行われた可能性がある。遺構内には、南側が開口する「コ」字状の溝があり、この溝が単独の遺構なのか当遺構やＳＫＩ2064に伴うものなのかは不明である。全体の構造としては南壁をもたない構造だったと考えられる。なお、遺構の南側部分は、盛り土によって造成されたことがトレンチ掘削による土層断面観察で明らかになった。遺物：後にＳＫＩ2064と重複することがわかったため、本遺構に確実に伴う遺物を明らかにすることはできなかった。							
14	遺構名	番号	挿図番号	図版番号	グリッド		重　　複	
	ＳＫＩ	2066	第90図	18	ＭＧ44～ＭＩ44		Ｐ１と当遺構の付属施設であるＳＮ01が重複し、ＳＮ01の方が古い。	
	地勢	南向きの斜面		確認面	Ⅶ層	規模	南北2.77m、東西（7.1）m	
	斜面に堆積したⅡ層除去後、Ⅶ層精査中に柱穴を伴うＬ字上の溝を確認した。覆土はⅡ層が中心となる。 床面はほぼ平坦である。壁溝は、幅0.2～0.32m、深さ0.07～0.16mで西側部分は確認できなかった。柱穴は、Ｐ１～３が主柱穴と考えられる。関連施設として遺構内北西部からＳＮ01が検出されているが、Ｐ２に極めて近い位置にあるため一次的なものであった可能性が考えられる。全体の構造は、後世の削平により東側の構造は不明であるが、南壁をもたない構造だったと考えられる。							



1 10YR5/8黄褐色 シルト 炭化物φ1㎜ 1%含む しまり中 粘性弱
2 10YR5/6黄褐色 シルト 炭化物φ1㎜ 3%含む しまり中 粘性弱
3 10YR4/6褐色 シルト 炭化物φ1㎜ 3%含む しまり中 粘性弱
4 10YR5/6黄褐色 シルト 炭化物φ1㎜ 3%、焼土φ1㎜ 1%含む しまり中 粘性弱
5 10YR4/6褐色 シルト 炭化物φ5㎜ 5%含む しまり弱 粘性弱
6 7.5YR5/8明褐色 シルト しまり中 粘性弱

0 2m

第86図 SK701、SKI610

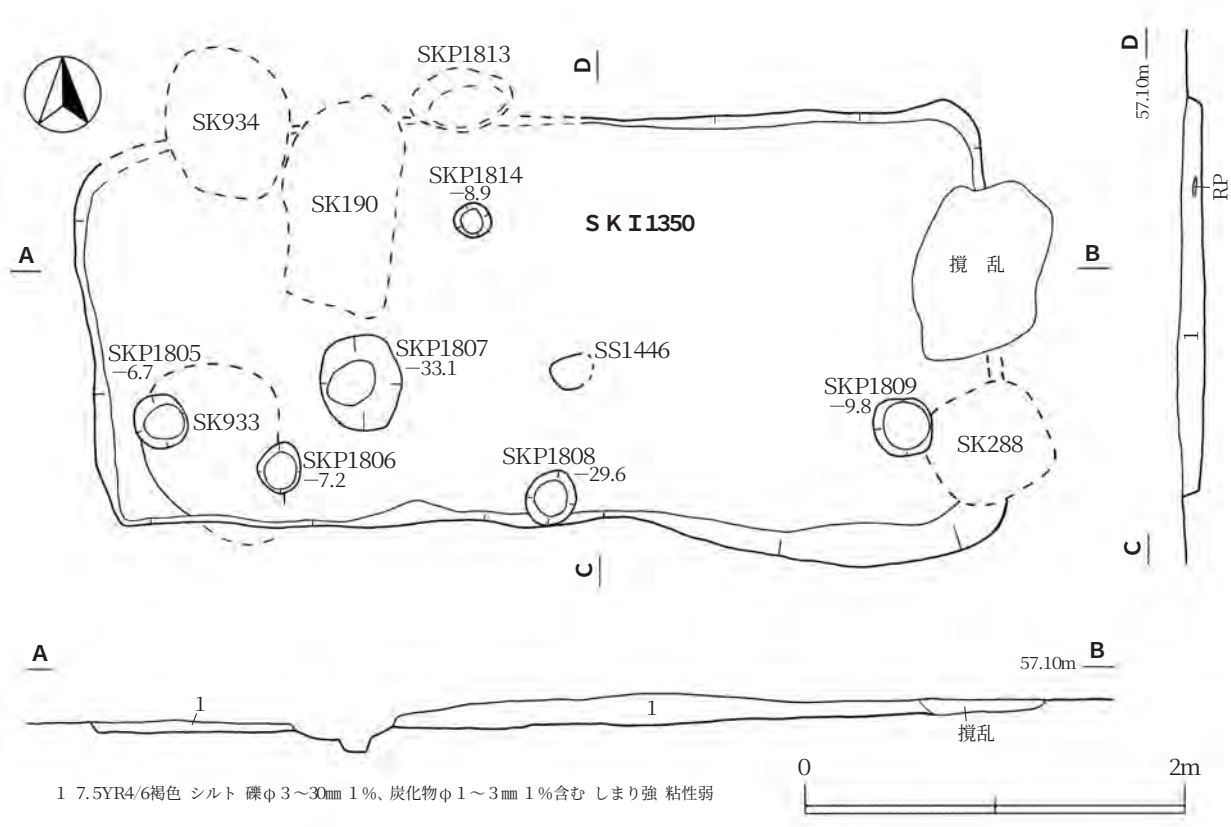


1　10YR3/3暗褐色　シルト　しまり強　粘性なし
2　5YR5/8明赤褐色　シルト　しまり強　粘性なし
3　2.5YR4/6赤褐色　シルト　しまり中　粘性なし
4　2.5YR4/8赤褐色　シルト　しまり中　粘性なし
5　10YR4/4褐色　シルト　炭化物φ１～３㎜ １%、焼土φ１～３㎜ １%含む　しまり強　粘性弱

1　還元化部分
2　被熱部分

1　10YR4/4褐色　シルト　しまり弱　粘性中

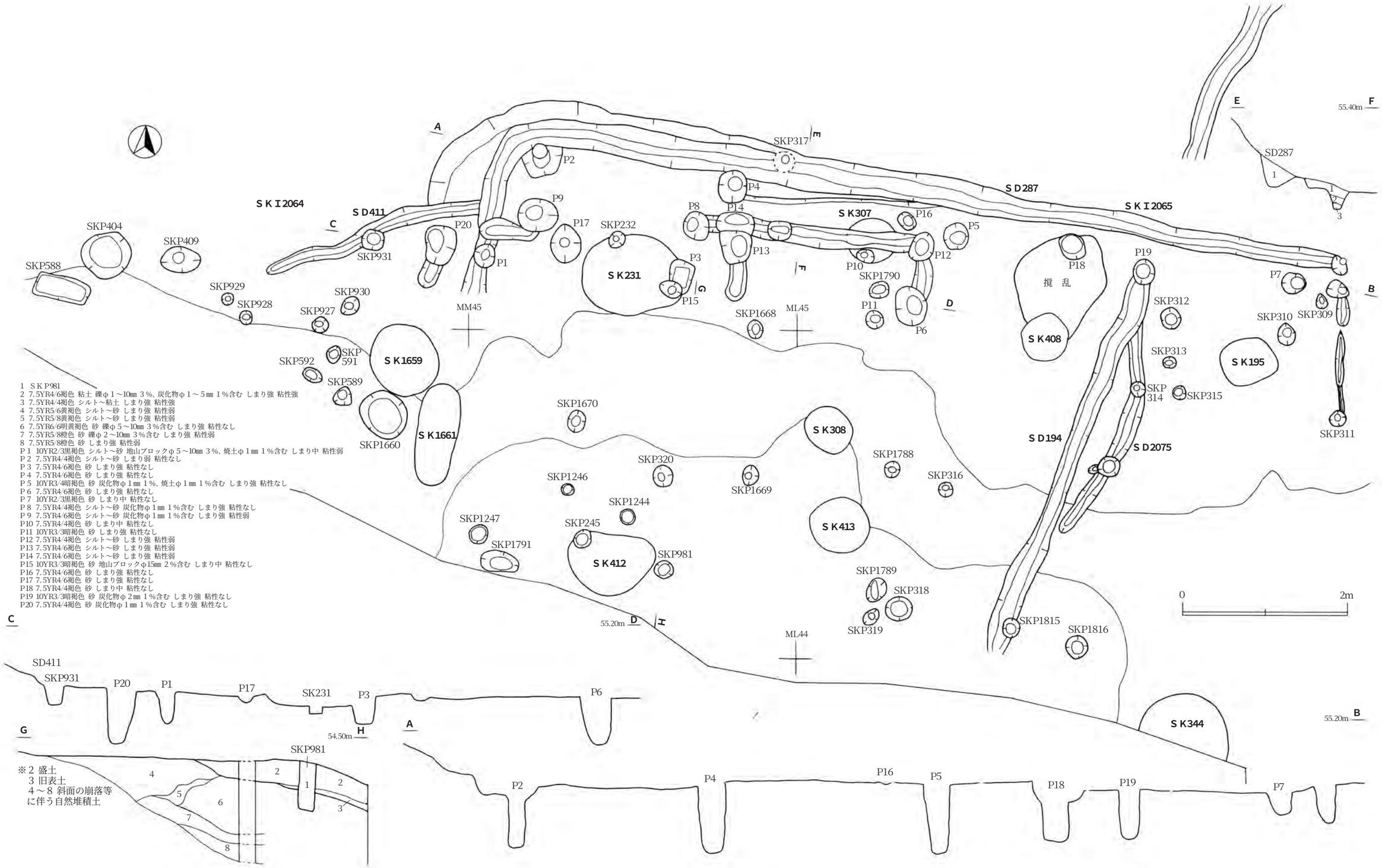
第87図　ＳＫＩ1098



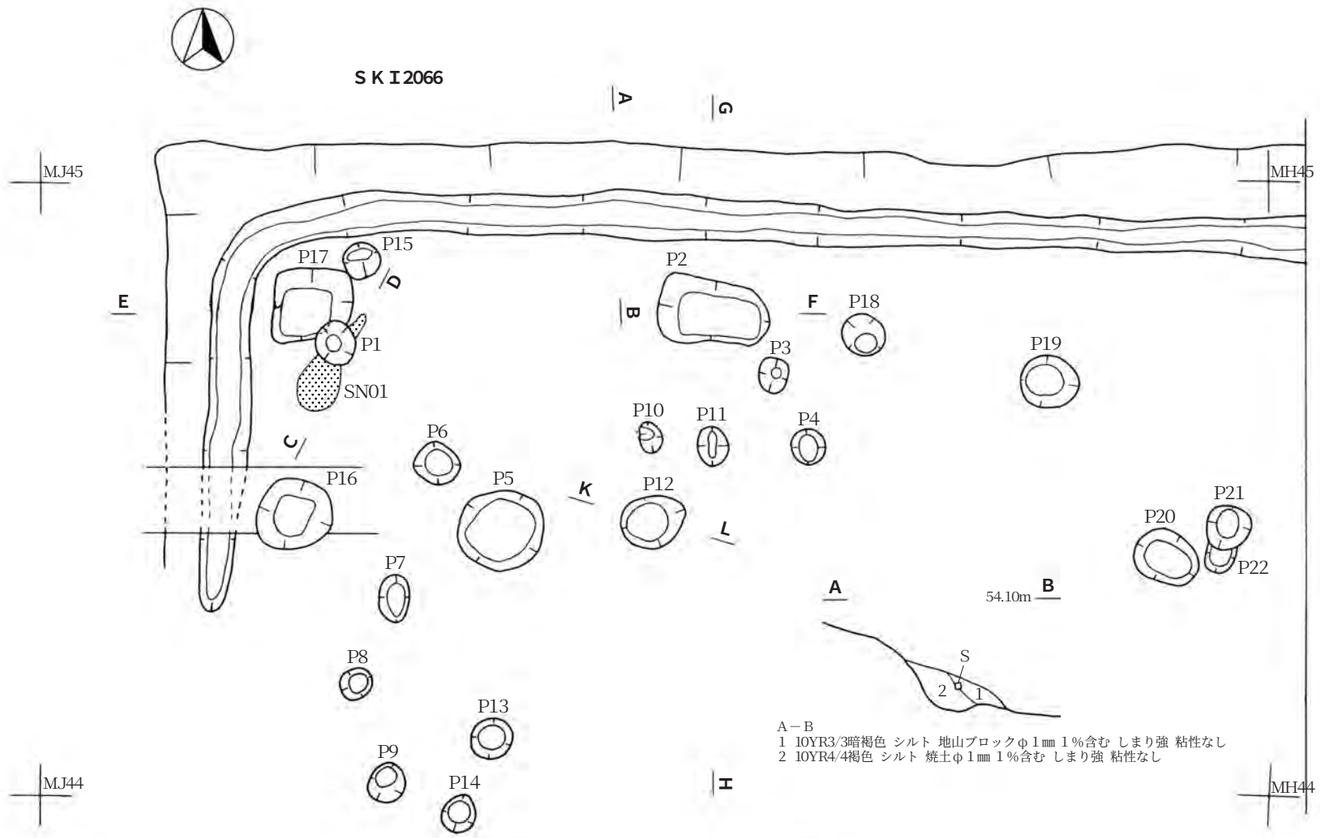
第88図　ＳＫⅠ1350

第10表　竪穴状遺構一覧（4）

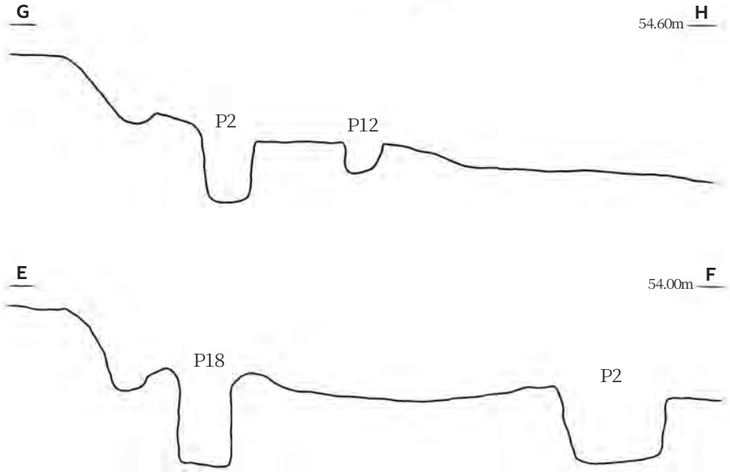
15	遺構名	番号	挿図番号	図版番号	グリッド		重複	
	ＳＫⅠ	2067	第91図	18	ＭＦ46・47、ＭＧ46・47、ＭＨ46・47、（ＭＦ46？～ＭＨ46？）		ＳＫⅠ2068と重複し、当遺構の方が新しい。ただし、覆土の堆積状態から時間差はほとんどないと考えられる。	
	地勢	南向きの斜面		確認面	Ⅶ層	規模	南北2.52m、東西6.86m	
	斜面中にある平坦面のⅦ層精査中に柱穴を伴うＬ字上の溝を確認した。覆土は、Ⅱ層が中心となる。床面は、ほぼ平坦である。壁溝は、幅0.1～0.25m、深さ0.1mで西側部分のみ残存している。柱穴は、Ｐ１～６が主柱穴と考えられる。この他、ＳＫＰ806、ＳＫＰ836はＰ３、Ｐ４に対応する柱として機能していた可能性がある。関連施設としては、遺構内と考えられる範囲内にＳＮ600・923・987、ＳＫ1248などがある。このうちＳＮ923はＳＮ600・ＳＫ1248より新しいため、ＳＮ923・987が当遺構に伴った可能性がある。全体の構造は、南側に壁をもたない構造だった考えられる。遺物：後にＳＫⅠ2066と重複することがわかったため、本遺構に確実に伴う遺物を明らかにすることはできなかった。			
16	遺構名	番号	挿図番号	図版番号	グリッド		重複	
	ＳＫⅠ	2068	第91図	18	ＭＦ46・47、ＭＧ46・47、ＭＨ46・47		ＳＫⅠ2067、ＳＫ197と重複し、当遺構の方が古い。覆土の堆積状態からＳＫⅠ2067との時間差についてはほとんどないと考えられる。	
	地勢	南向きの斜面		確認面	Ⅶ層	規模	南北4.82m、東西5.28m	
	斜面中にある平坦面を精査中に柱穴を伴うＬ字上の溝を確認した。覆土はⅡ層が（シルト）が中心となる。 床面は、ほぼ平坦である。壁溝は、幅0.16～0.32m、深さ0.2mで西側部分は確認できなかった。柱穴は、Ｐ１～８が主柱穴と考えられる。関連施設としては、遺構内と考えられる範囲内にＳＮ600・923・987、ＳＫ1248などがあるが、ＳＮ923・987はＳＫⅠ2067に伴う可能性が高い。ＳＸ600・1248はＳＮ923よりも古いがＳＫⅠ2067・2068がそれほど時間差のないものと捉えられるため、ＳＮ600、ＳＫ1248当遺構より古いと考えられる。このため、ＳＫⅠ2067構築時に当遺構に付属した内部施設が壊された可能性がある。 全体の構造は、南壁をもたない構造だったと考えられるが、東壁についても柱はあるものの壁が存在しなかった可能性がある。							
17	遺構名	番号	挿図番号	図版番号	グリッド		重複	
	ＳＫⅠ	2069	第92図	18	ＭＢ・ＭＣ45		ＳＤ152と重複していた可能性あり。	
	地勢	南向きの斜面		確認面	Ⅶ層	規模	東西5.31m、南北3.43m	
	沢の斜面中にある平坦面を調査したところ本遺構を検出した。底面には３ヵ所の焼土の広がりがみられる。遺構内東側の床面直上付近からは、大礫の集中地点が検出された。覆土からは近世と思われる陶器が出土している。遺物：土師器ポリ袋中２袋、礫コンテナ２箱出土。礫には被熱したものが含まれる。							

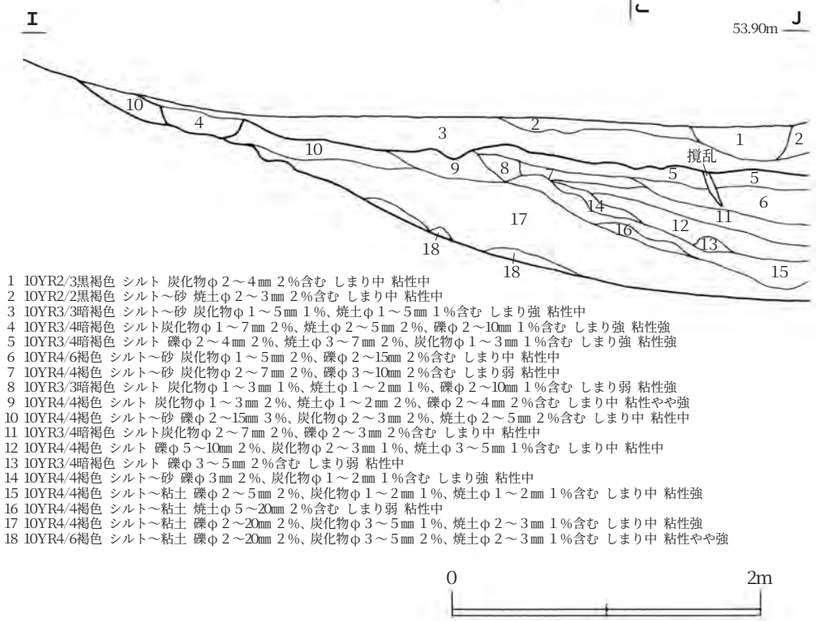


第89図　ＳＫＩ2064・2065

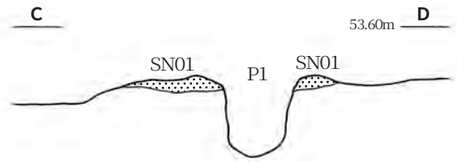


P１ 7.5YR4/6褐色 砂 しまり弱 粘性なし
P２ 7.5YR4/4褐色 シルト～砂 しまり中 粘性なし
P３ 10YR3/3暗褐色 シルト 礫φ３～10㎜ ２%、炭化物φ１㎜ １%、焼土φ１～５㎜ １%含む しまり強 粘性弱
P４ 10YR2/3黒褐色 シルト 地山ブロックφ１～５㎜ ２%含む しまり強 粘性弱
P５ 10YR2/3黒褐色 シルト～砂 地山ブロックφ１～３㎜ １%、炭化物φ３㎜ １%、焼土φ１～３㎜ １%含む しまり強 粘性なし
P６ 10YR3/4暗褐色 砂 地山ブロックφ５～10㎜ １%含む しまり弱 粘性なし
P７ 10YR2/2黒褐色 砂 しまり弱 粘性なし
P８ 10YR3/3暗褐色 シルト 地山ブロックφ１～３㎜ ２%含む しまり中 粘性弱
P９ 10YR3/3暗褐色 砂 地山ブロックφ１㎜ １%、炭化物φ１㎜ １%含む しまり中 粘性なし
P10 10YR3/3暗褐色 シルト～砂 地山ブロックφ１～５㎜ ３%含む しまり強 粘性なし
P11 10YR3/3暗褐色 シルト～砂 地山ブロックφ１～５㎜ ３%含む しまり強 粘性なし
P12 7.5YR4/4褐色 砂 地山ブロックφ５～10㎜ ３%含む しまり強 粘性なし
P13 10YR2/3黒褐色 砂 地山ブロックφ１～５㎜ １%含む しまり強 粘性なし
P14 10YR3/4暗褐色 シルト 炭化物φ１㎜ １%含む しまり強 粘性弱
P15 10YR3/4暗褐色 シルト 地山ブロックφ１～３㎜ １%含む しまり中 粘性弱
P16 7.5YR4/4褐色 砂 しまり弱 粘性なし
P17 7.5YR4/4褐色 シルト～砂 しまり中 粘性弱
P18 7.5YR4/6褐色 砂 しまり強 粘性なし
P19 10YR3/3暗褐色 シルト しまり中 粘性中
P20 10YR3/3暗褐色 シルト 炭化物φ１㎜ １%含む しまり中 粘性中
P21 10YR2/3黒褐色 シルト 炭化物φ１～３㎜ １%含む しまり中 粘性弱
P22 10YR2/3黒褐色 シルト しまり中 粘性中
P23 10YR3/3暗褐色 シルト 炭化物φ１㎜ １%含む しまり強 粘性弱
P24 10YR3/3暗褐色 シルト しまり中 粘性弱
P25 10YR2/3黒褐色 シルト しまり中 粘性中



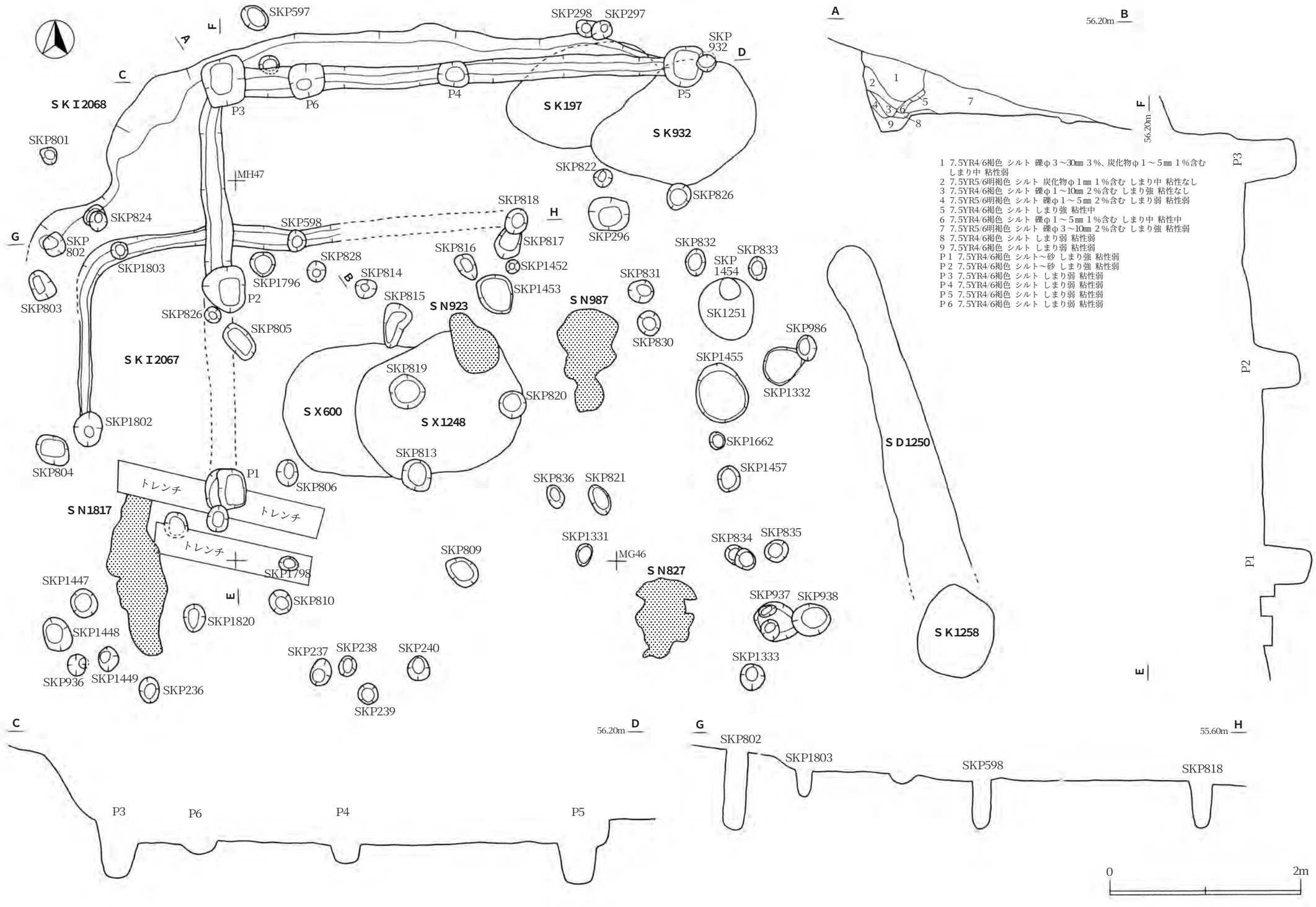


1 10YR2/3黒褐色 シルト 炭化物φ２～４㎜ ２%含む しまり中 粘性中
2 10YR2/2黒褐色 シルト～砂 焼土φ２～３㎜ ２%含む しまり中 粘性中
3 10YR3/3暗褐色 シルト～砂 炭化物φ１～５㎜ １%、焼土φ１～５㎜ １%含む しまり強 粘性中
4 10YR3/4暗褐色 シルト炭化物φ１～７㎜ ２%、焼土φ２～５㎜ ２%、礫φ２～10㎜ １%含む しまり強 粘性強
5 10YR3/4暗褐色 シルト 礫φ２～４㎜ ２%、焼土φ３～７㎜ ２%、炭化物φ１～３㎜ １%含む しまり強 粘性強
6 10YR4/6褐色 シルト～砂 炭化物φ１～５㎜ ２%、礫φ２～15㎜ ２%含む しまり中 粘性中
7 10YR4/4褐色 シルト～砂 炭化物φ２～７㎜ ２%、礫φ３～10㎜ ２%含む しまり弱 粘性中
8 10YR3/3暗褐色 シルト 炭化物φ１～３㎜ １%、焼土φ１～２㎜ １%、礫φ２～10㎜ １%含む しまり弱 粘性強
9 10YR4/4褐色 シルト 炭化物φ１～３㎜ ２%、焼土φ１～２㎜ ２%、礫φ２～４㎜ ２%含む しまり中 粘性やや強
10 10YR4/4褐色 シルト～砂 礫φ２～15㎜ ３%、炭化物φ２～３㎜ ２%、焼土φ２～５㎜ ２%含む しまり中 粘性中
11 10YR3/4暗褐色 シルト炭化物φ２～７㎜ ２%、礫φ２～３㎜ ２%含む しまり中 粘性中
12 10YR4/4褐色 シルト 礫φ５～10㎜ ２%、炭化物φ２～３㎜ １%、焼土φ３～５㎜ １%含む しまり中 粘性中
13 10YR3/4暗褐色 シルト 礫φ３～５㎜ ２%含む しまり弱 粘性中
14 10YR4/4褐色 シルト～砂 礫φ３㎜ ２%、炭化物φ１～２㎜ １%含む しまり強 粘性中
15 10YR4/4褐色 シルト～粘土 礫φ２～５㎜ ２%、炭化物φ１～２㎜ １%、焼土φ１～２㎜ １%含む しまり中 粘性強
16 10YR4/4褐色 シルト～粘土 焼土φ５～20㎜ ２%含む しまり弱 粘性中
17 10YR4/4褐色 シルト～粘土 礫φ２～20㎜ ２%、炭化物φ３～５㎜ １%、焼土φ２～３㎜ １%含む しまり中 粘性強
18 10YR4/6褐色 シルト～粘土 礫φ２～20㎜ ２%、炭化物φ３～５㎜ ２%、焼土φ２～３㎜ １%含む しまり中 粘性やや強

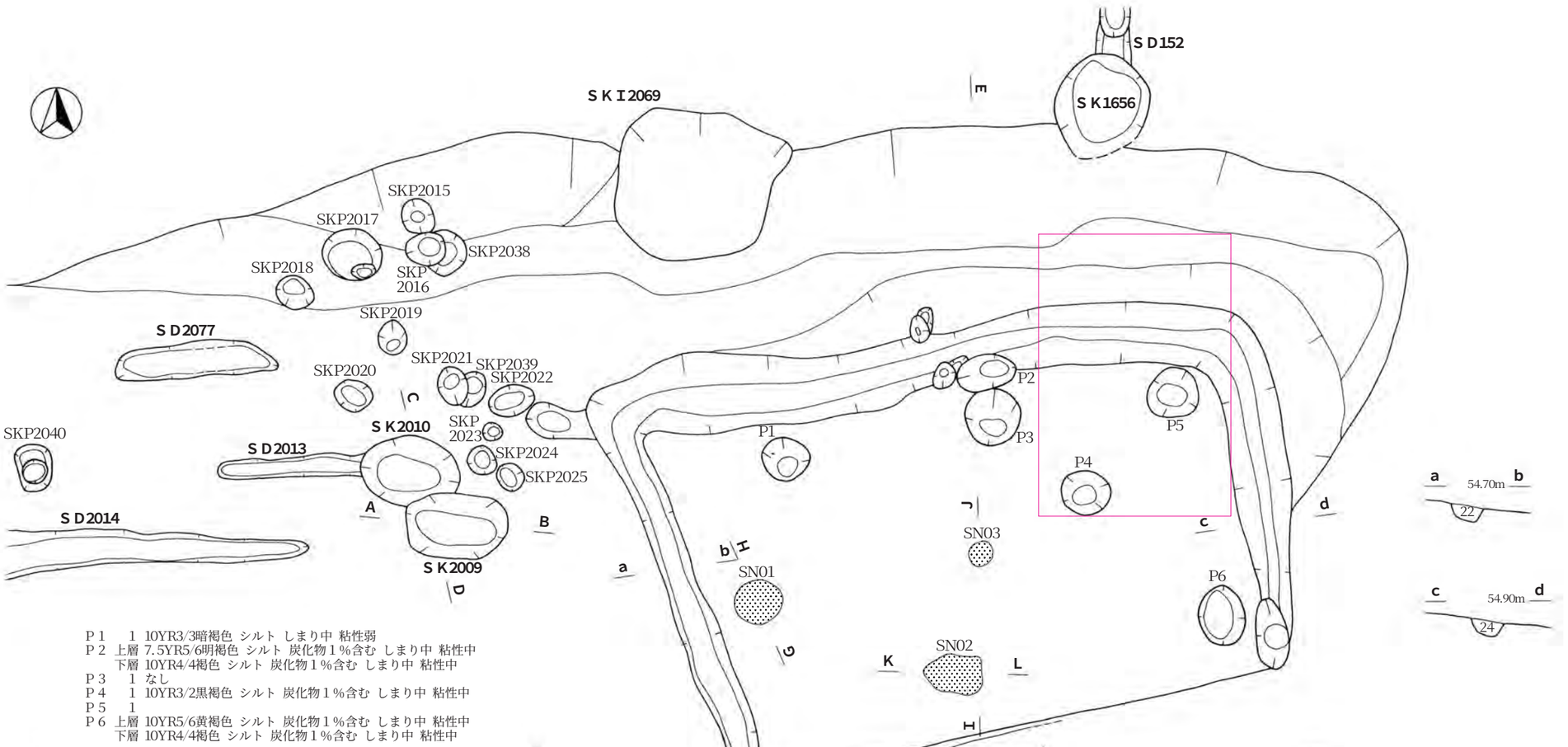


1 7.5YR4/6褐色 シルト 焼土φ１～３㎜ １%含む しまり強 粘性弱

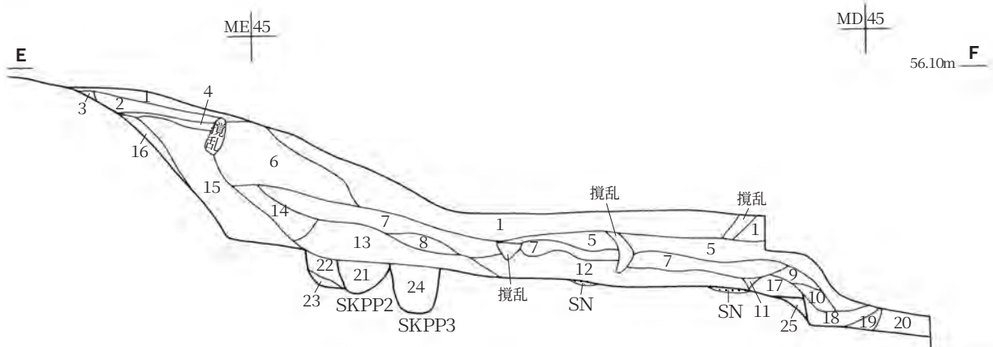
第90図　ＳＫＩ2066



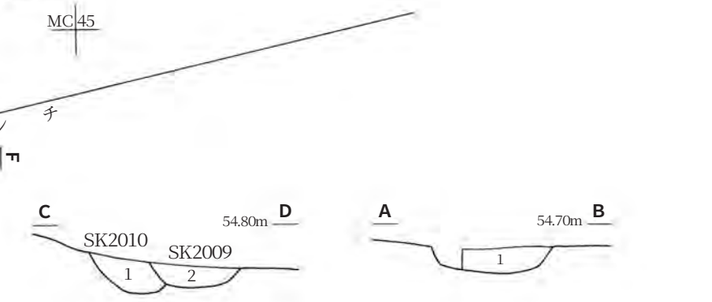
第91図　ＳＫＩ2067・2068



P１　　１　10YR3/3暗褐色　シルト　しまり中　粘性弱
P２　上層　7.5YR5/6明褐色　シルト　炭化物１%含む　しまり中　粘性中
　　下層　10YR4/4褐色　シルト　炭化物１%含む　しまり中　粘性中
P３　　１　なし
P４　　１　10YR3/2黒褐色　シルト　炭化物１%含む　しまり中　粘性中
P５　　１
P６　上層　10YR5/6黄褐色　シルト　炭化物１%含む　しまり中　粘性中
　　下層　10YR4/4褐色　シルト　炭化物１%含む　しまり中　粘性中



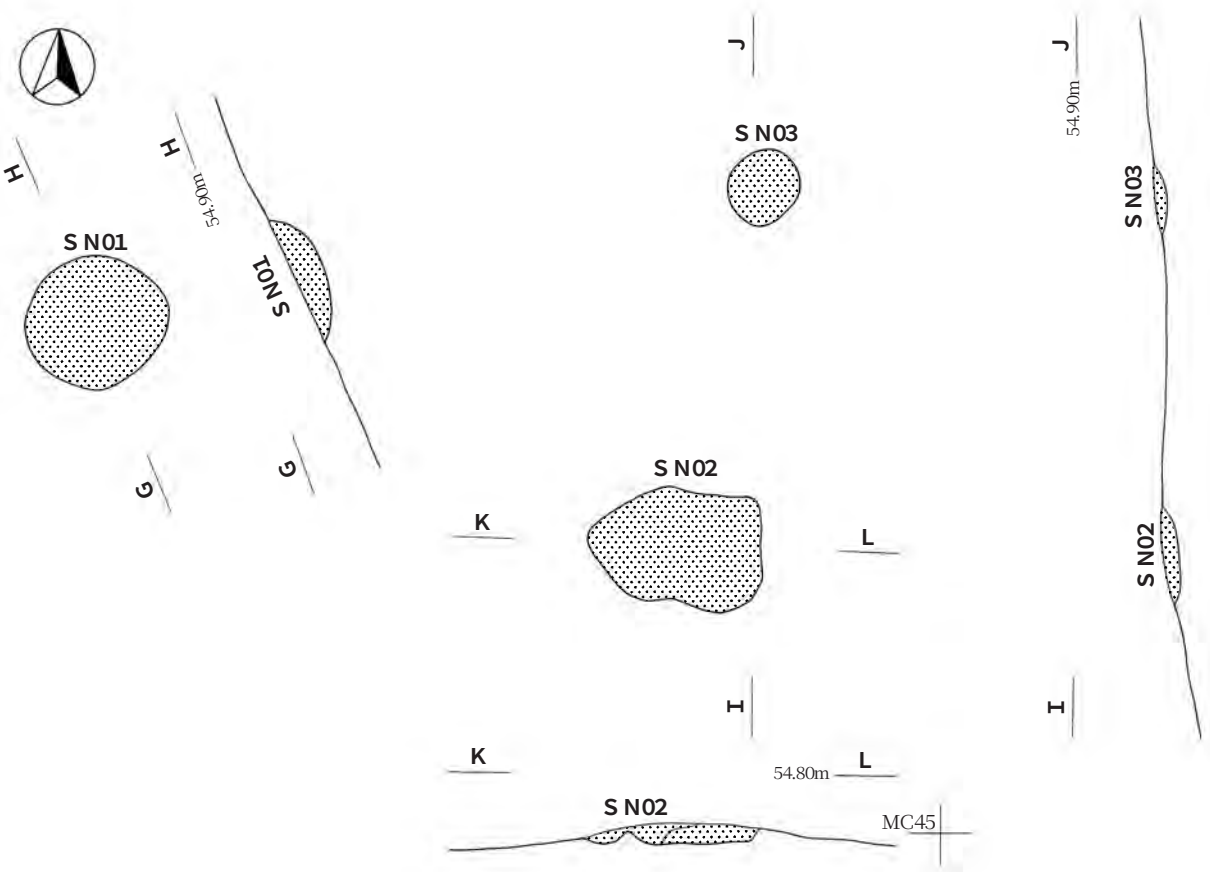
1　10YR3/3 シルト　地山φ１㎜ １%、焼土φ１㎜ １%含む　しまり強　粘性弱
2　10YR2/3 シルト　地山φ１㎜ １%含む　しまり強　粘性なし
3　10YR3/3 シルト　地山φ１～３㎜ ５%含む　しまり強　粘性なし
4　10YR2/3 シルト　しまり強　粘性なし
5　10YR2/3 シルト　地山φ１㎜ １%含む　しまり強　粘性なし
6　10YR2/3 シルト　地山φ１～３㎜ １%、焼土φ１㎜ １%含む　しまり強　粘性弱
7　10YR2/2 シルト　地山φ１㎜ １%含む　しまり強　粘性弱
8　10YR2/3 シルト　地山φ１～３㎜ １%含む　しまり強　粘性弱
9　10YR2/3 シルト　地山φ１㎜ １%、焼土φ１～５㎜ ２%含む　しまり強　粘性弱
10　10YR3/3 シルト　地山φ１～３㎜ １%、焼土φ１㎜ ３%、炭化物φ１㎜ １%含む　しまり強　粘性弱
11　10YR3/3 シルト　地山φ１㎜ １%含む　しまり強　粘性弱
12　10YR3/3 シルト　地山φ１～５㎜ ３%、焼土φ１～10㎜ １%含む　しまり強　粘性なし
13　10YR3/3 シルト　地山φ１～５㎜ ２%、炭化物φ１～３㎜ １%含む　しまり強　粘性なし
14　10YR3/3 シルト　地山φ１㎜ １%含む　しまり強　粘性弱
15　10YR2/3 シルト　地山φ１㎜ １%、炭化物φ１㎜ １%含む　しまり強　粘性弱
16　10YR3/3 シルト　地山φ１～３㎜ ５%含む　しまり強　粘性なし
17　10YR3/3 シルト　地山φ１～10㎜ 10%含む　しまり強　粘性なし
18　10YR3/3 シルト　地山φ１～５㎜ ３%含む　しまり弱　粘性弱
19　7.5YR4/4 シルト　炭化物φ１～５㎜ ２%含む　しまり強　粘性なし
20　7.5YR3/4 シルト　地山φ１㎜ １%、焼土φ１～３㎜ １%、炭化物φ１～５㎜ １%含む　しまり強　粘性弱
21　7.5YR3/4暗褐色　シルト　しまり強　粘性なし
22　10YR4/3にぶい黄褐色　シルト　炭化物１%含む　しまり強　粘性中
23　10YR4/4褐色　シルト　炭化物１%含む　しまり強　粘性中
24　10YR3/3暗褐色　シルト　地山５%混じる　炭化物１%含む　しまり中　粘性中
25　7.5YR3/4暗褐色　シルト　しまり強　粘性なし

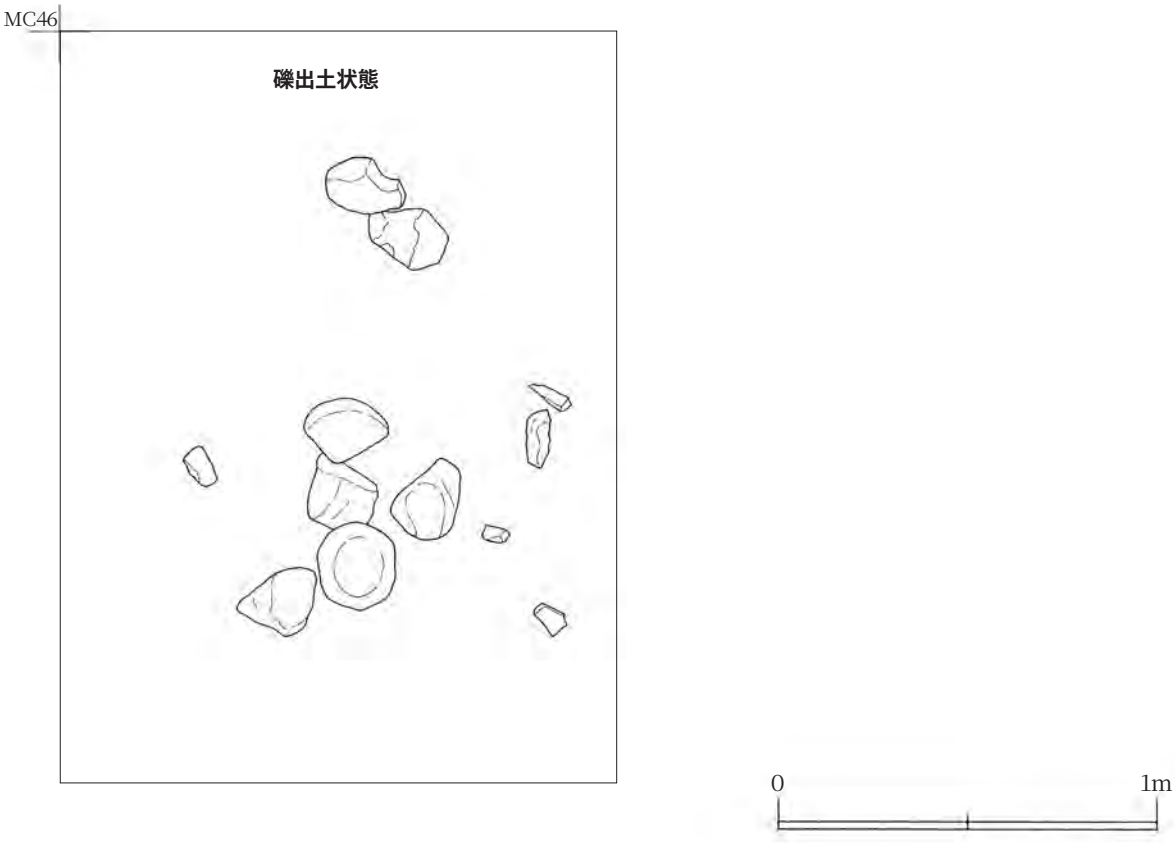


1　10YR3/2黒褐色　シルト　地山５%混じる　炭化物１%含む　しまり中　粘性中
2　10YR3/2黒褐色　シルト　炭化物１%含む　しまり中　粘性中

0　2m

第92図　ＳＫＩ2069





第93図　ＳＫＩ2069焼土、礫

3　掘立柱建物跡

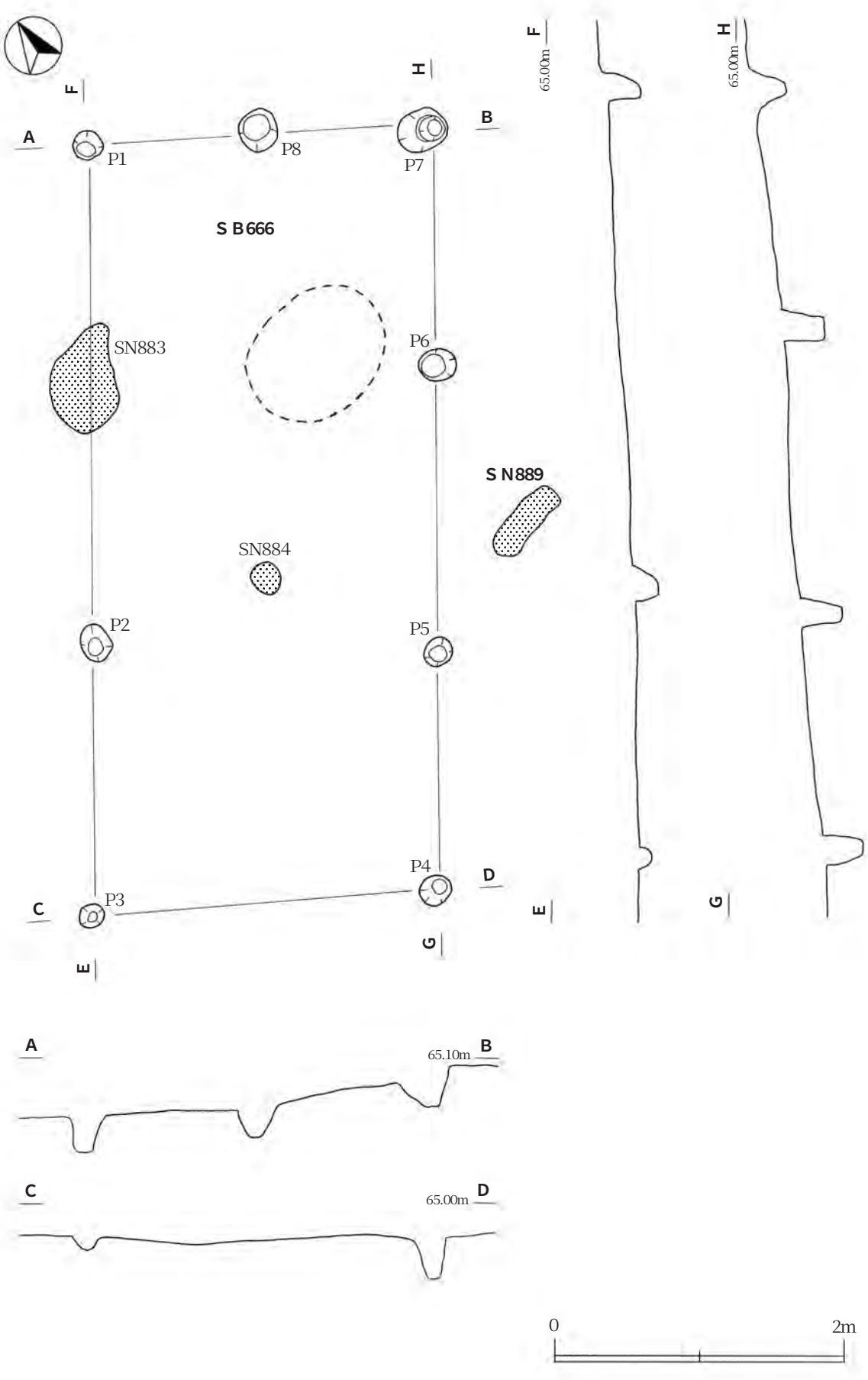
6棟を掘立柱建物跡と認定した。桁行き×梁行きが、3×2、2×2、1×1の3種類が見られる。

第11表　掘立柱建物跡（1）

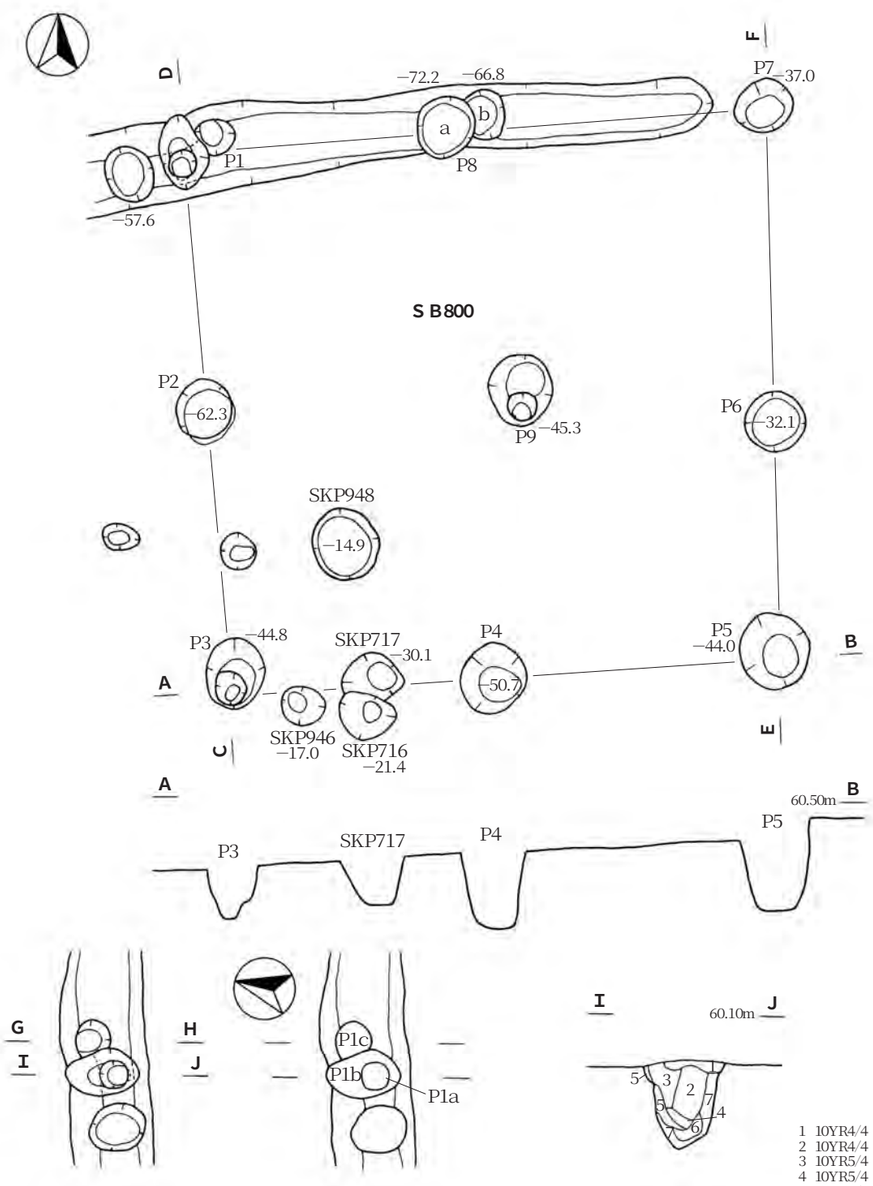
	種類	番号	挿図番号	図版番号	グリッド	確認面（層）	間数	規　模	重　複
1	ＳＢ	666	94	－	ＬＤ・ＬＥ 47～48	ＳＩ777覆土	3×2	北西辺：5.33m（Ｐ1－Ｐ3） 南東辺：5.27m（Ｐ7－Ｐ4） 北東辺：2.43m（Ｐ1－Ｐ7） 南西辺：2.42m（Ｐ3－Ｐ4）	ＳＩ777→ＳＢ666
	ＳＩ777覆土中に構築される。長方形のプランをもつ。当遺構周辺では、ほぼ同じレベルで3基の焼土遺構が検出されているが、これらとの関係については不明である。								
	遺構名	番号	挿図番号	図版番号	グリッド	確認面（層）	間数	規　模	重　複
2	ＳＢ	800	95	22	ＬＮ・ＬＯ 52～53	Ⅳ	2×2	西辺：3.45m（Ｐ1－Ｐ3） 東辺：3.60m（Ｐ7－Ｐ5） 北辺：3.80m（Ｐ1－Ｐ7） 南辺：3.55m（Ｐ3－Ｐ5）	ＳＤ791（一連の構造か）
	調査区東側の北端付近に位置する。正方形に近いプランをもつ。建物を構成する9本の柱のうち、2本が板塀跡と考えられるＳＤ791から検出された。土層断面では、ＳＤ791覆土を掘り込んでいるようにみえるが、同時存在した可能性がある。Ｐ1とＰ8にピットの重複がみられるため、作り変えが行われたと考えられる。Ｐ8ａ・ｂの関係は、東側にずれるｂの方が古い。このため、Ｐ1ａ～ｃの中では東側にずれるｃがＰ8ｂと、ｂがＰ8ｂと同じ時期のものと考えられる。なお、Ｐ1ａはＰ3の底面にみられる一段低い掘り込みに対応する可能性がある。以上のことから、部分的な改修が3回行われた可能性が考えられる。なお、当遺構の東側には軸方向を同じくするＳＢ1330が位置する。								
	遺構名	番号	挿図番号	図版番号	グリッド	確認面（層）	間数	規　模	重　複
3	ＳＢ	850	96	－	ＬＫ49～51 ＬＬ49・50	Ⅳ	3×2？	西辺：6.00m（Ｐ1－Ｐ3） 東辺：5.77m（Ｐ7－Ｐ5） 北辺：3.85m（Ｐ1－Ｐ7） 南辺：3.95m（Ｐ3－Ｐ5）	なし
	調査区東側中央部に位置する。長方形のプランをもつ。Ｐ7－Ｐ8－Ｐ9のラインは庇の可能性がある。								
	遺構名	番号	挿図番号	図版番号	グリッド	確認面（層）	間数	規　模	重　複
4	ＳＢ	1330	97	22	ＬＬ・ＬＭ 51～53	Ⅳ	3×2	北辺：3.73m（Ｐ1－Ｐ9） 南辺：3.66m（Ｐ4－Ｐ12） 西辺：5.50m（Ｐ1－Ｐ4） 東辺：5.79m（Ｐ9－Ｐ12）	なし
	調査区東側の北端付近に位置する。長方形に近いプランをもつ。Ｐ2－Ｐ4－Ｐ12－Ｐ10で囲まれる2間×2間は、ほぼ正方形のプランであるが、これより北側1間×1間は西側に軸がずれている。このことから、当初のプランは2間×2間で、後に1間分を北側に増築したものと考えられる。当遺構の北側にはＳＤ1050が東西方向に延びているが、北側1間部分のずれはＳＤ1050が延びる方向とほぼ平行になるため、ＳＤ1050を意識して造られた可能性がある。また、当遺構を構成する柱穴のうちＰ1・2・3・6・11には柱穴の底面に、柱当たりとみられる白色粘土化した範囲（第97図青色部分）がみられる。当遺構の西側には、軸方向を同じくするＳＢ800が位置する。								

第12表　掘立柱建物跡（２）

	遺構名	番号	挿図番号	図版番号	グリッド	確認面（層）	間数	規　　模	重　　複
5	ＳＢ	1840	98	14	ＬＤ・ＬＥ 47～48	ＳＩ777 覆土	１×１	東辺：4.73m（Ｐ１－Ｐ２） 西辺：3.76m（Ｐ４－Ｐ３） 南辺：4.57m（Ｐ１－Ｐ４） 北辺：4.57m（Ｐ２－Ｐ３）	ＳＩ777→ＳＢ1840
	ＳＩ777覆土中に構築される。プランは歪であるが、各柱穴の上面径は１m前後とかなり大きく、強度が求められる建物だったと考えられる。各柱穴の土層観察から、柱は最終的に掘り出されたと推測される。								
6	遺構名	番号	挿図番号	図版番号	グリッド	確認面（層）	間数	規　　模	重　　複
	ＳＢ	2074	99	－	ＬＩ50・51	Ⅶ	１×１	西辺：2.78m（Ｐ１－Ｐ２） 東辺：2.81m（Ｐ４－Ｐ３） 北辺：2.45m（Ｐ１－Ｐ４） 南辺：2.40m（Ｐ２－Ｐ３）	なし
	東側調査区中央部に位置する。図上復元した建物である。長方形のプランをもつが、やや歪気味である。プラン内にＳＫ1212があるが関係は不明である。								
6	遺構名	番号	挿図番号	図版番号	グリッド	確認面（層）	間数	規　　模	重　　複
	ＳＢ	2076	74	－	ＬＨ49・50	Ⅶ	１×１	北辺：2.8m（Ｐ１－Ｐ２） 西辺：2.1m（Ｐ２－Ｐ３） 南辺、東辺は不明。	ＳＩ764・765・1400
	東側調査区中央部に位置する。図上復元した建物である。Ｐ４は、写真記録のみであるため正確な位置を図上に示すことができなかった。長方形のプランをもつが、やや歪である。Ｐ１～３にはそれぞれ重複がみられることから立て替えられた可能性がある。								



第94図　ＳＢ666、ＳＮ889



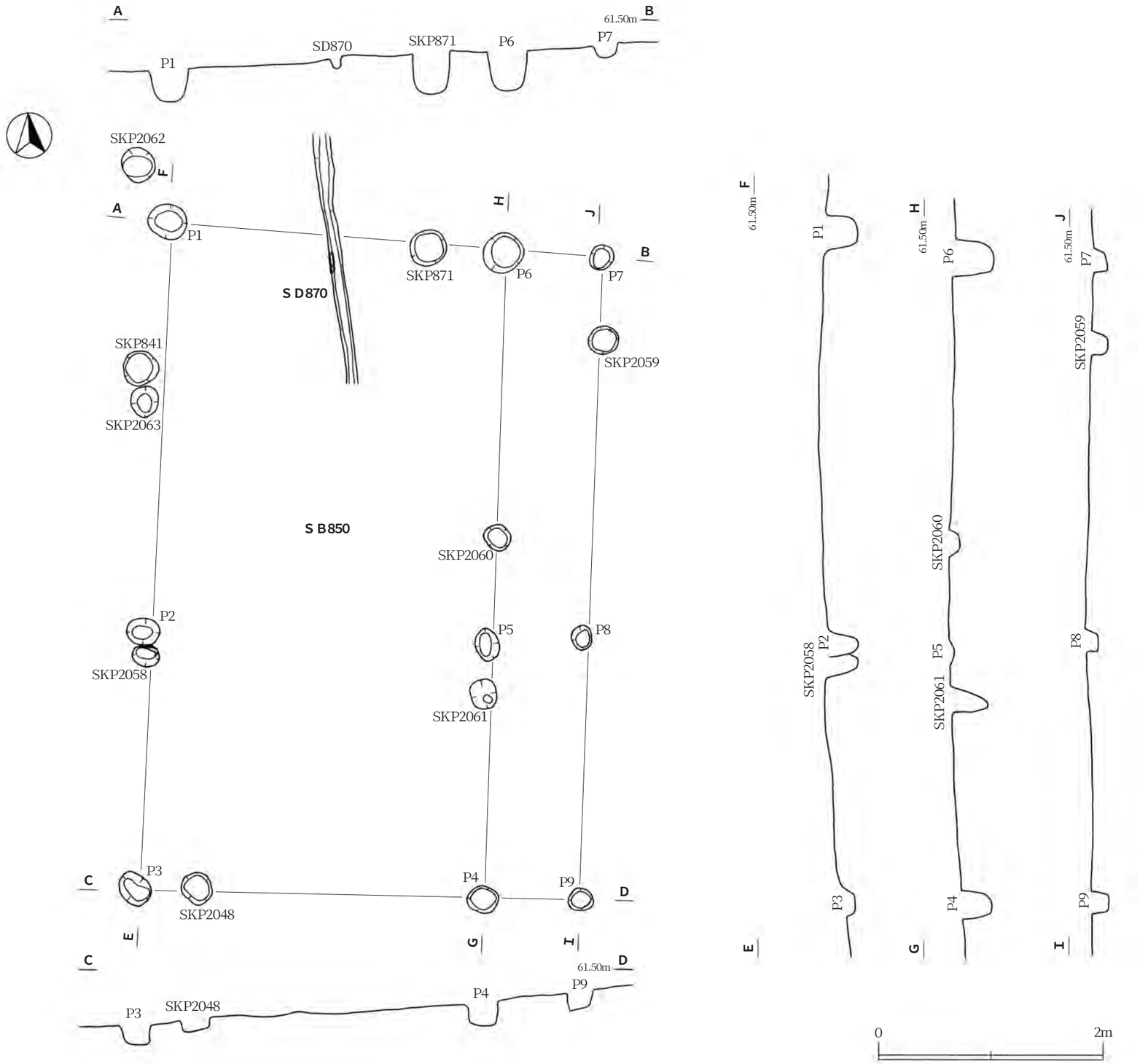
P３　10YR3/3暗褐色　しまり中　粘性中
P４　10YR3/3暗褐色　しまり中　粘性弱
P５　10YR4/3にぶい黄褐色　しまり弱　粘性中
P６　10YR4/4　褐色　しまり中　粘性中　炭化物３％含む
P７　10YR4/4　褐色　しまり中　粘性中

1　10YR4/4　褐色　シルト　しまり強い
2　10YR4/4　褐色　シルト　しまりやや強い
3　10YR5/4　にぶい黄褐色　シルト　炭化物１％含む　しまり強い
4　10YR5/4　にぶい黄褐色　シルト　しまり強い
5　10YR4/4　褐色　シルト　炭化物１％含む　しまりやや強い
6　10YR4/4　褐色　シルト　しまりやや弱め
7　10YR5/4　にぶい黄褐色　シルト（粘質）しまり強い
※　２～５はＳＢ800　Ｐ１ｂ覆土（２が柱痕か？）。６はＳＢ800　Ｐ１の覆土。（ＳＤ791柱痕の可能性もあり）

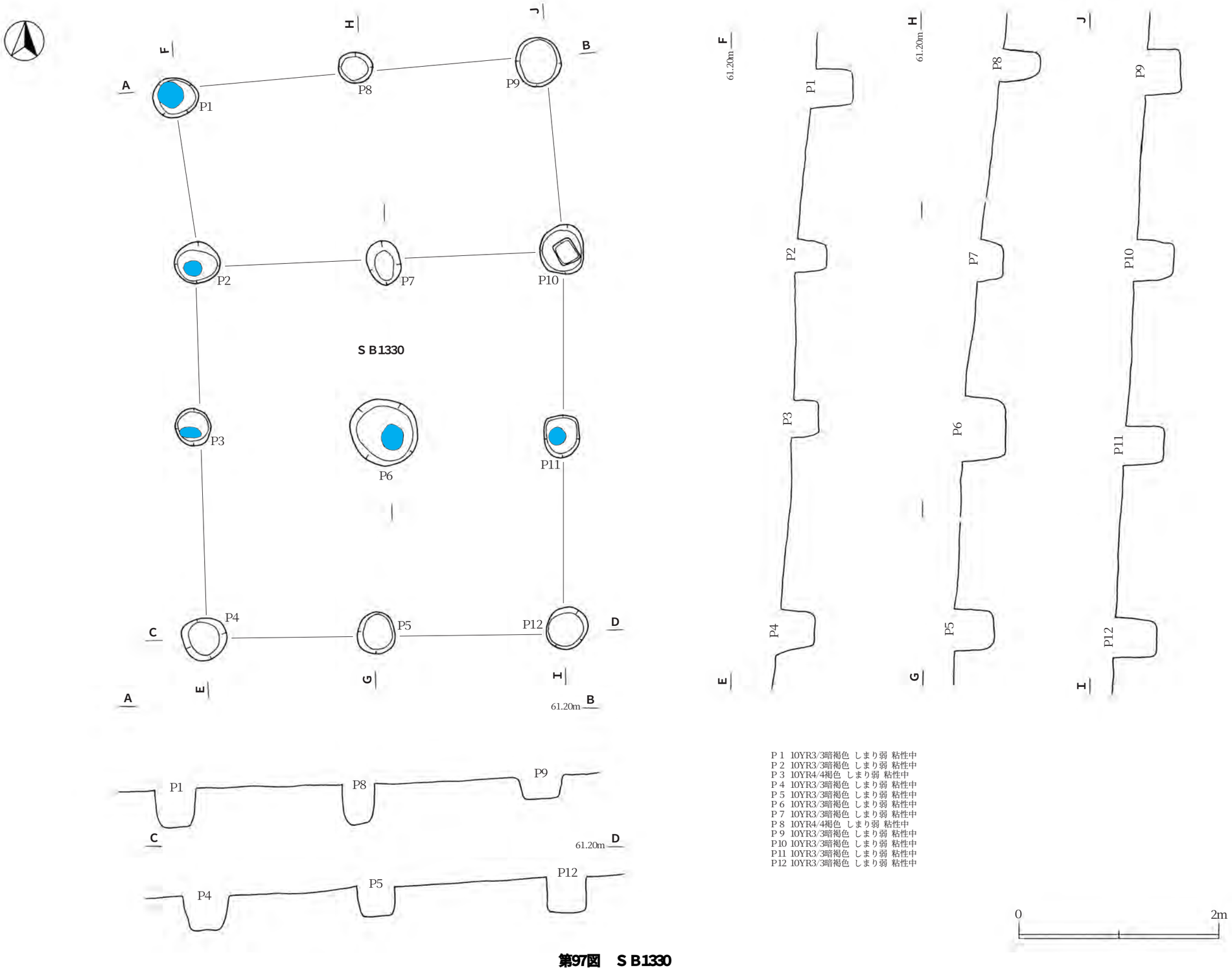
1　10YR4/4　褐色　シルト　しまり強い
2　10YR4/4　褐色　シルト　10YR6/4　にぶい黄褐色ブロック25%含む。しまり中
3　10YR3/4　暗褐色　シルト　さらさら　しまりなし（柱痕）
4　10YR4/4　褐色　シルト
5　10YR5/4　にぶい黄褐色　シルト　しまり強い
6　10YR4/4　褐色　シルト　炭化物１％含む　しまりやや強い
※　１～３　ＳＢ800　Ｐ１C覆土。４～６　ＳＤ791覆土。

0　2m

第95図　ＳＢ800


A
B
61.50m
P1
SD870
SKP871
P6
P7
SKP2062
F
H
J
SKP841
SKP2063
SKP2059
SKP2060
SKP2058
SKP2061
SKP2048
P2
P3
P4
P5
P8
P9
C
D
E
G
I
S D870
S B850
0
2m

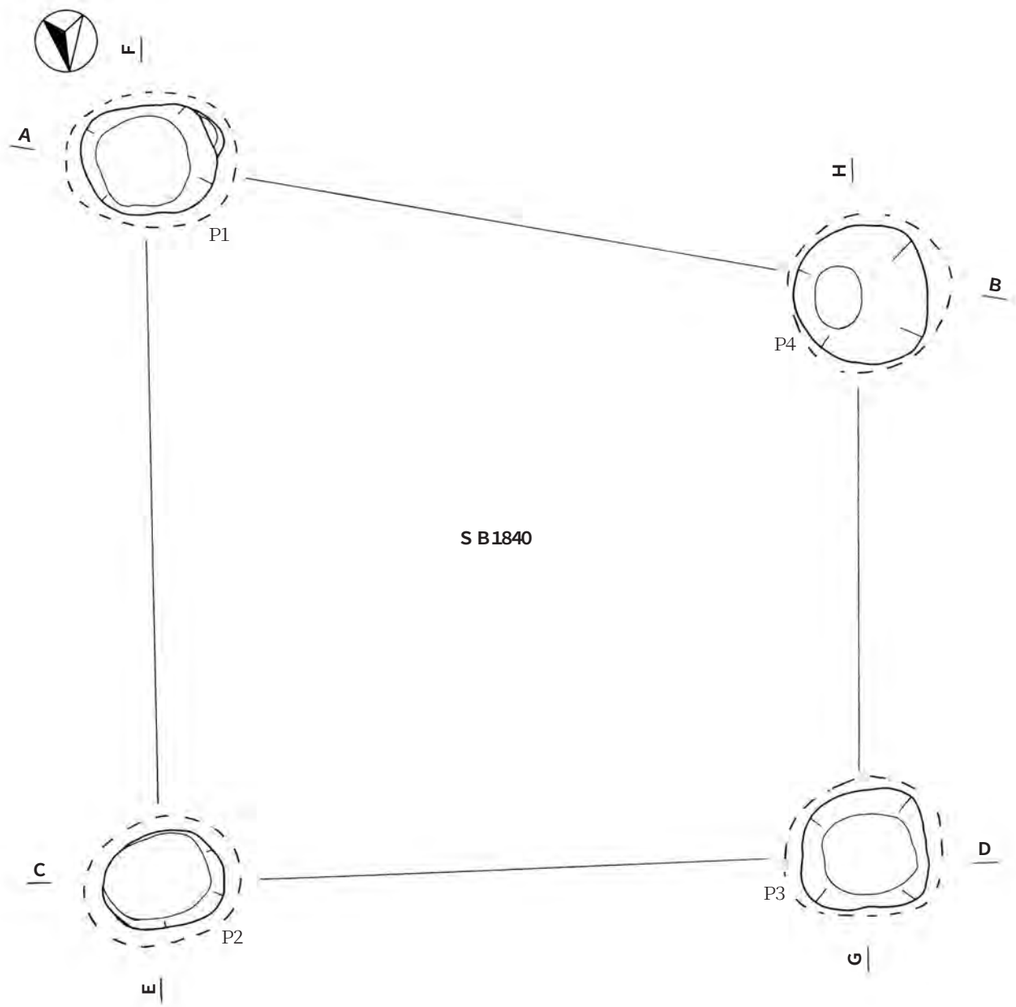
第96図　S B850

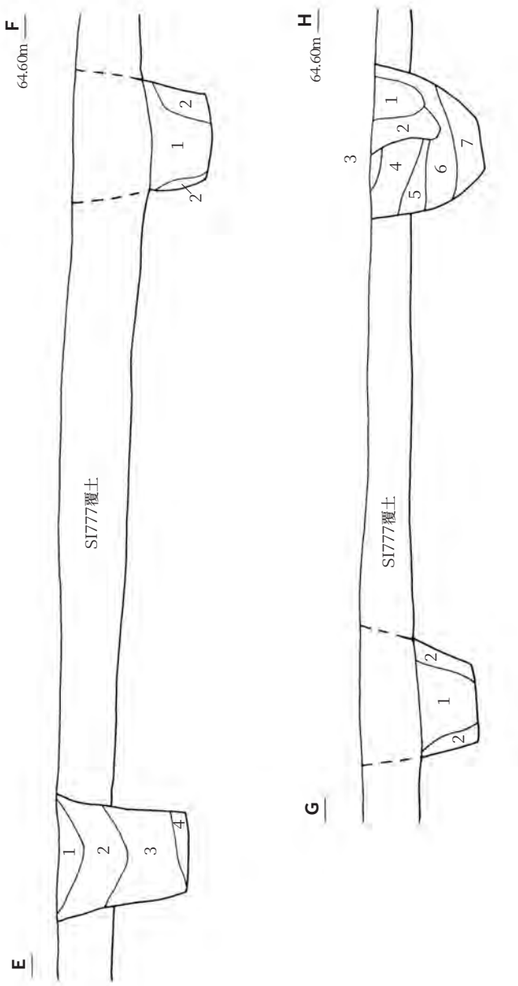


S B1330

P１　10YR3/3暗褐色　しまり弱　粘性中
P２　10YR3/3暗褐色　しまり弱　粘性中
P３　10YR4/4褐色　しまり弱　粘性中
P４　10YR3/3暗褐色　しまり弱　粘性中
P５　10YR3/3暗褐色　しまり弱　粘性中
P６　10YR3/3暗褐色　しまり弱　粘性中
P７　10YR3/3暗褐色　しまり弱　粘性中
P８　10YR4/4褐色　しまり弱　粘性中
P９　10YR3/3暗褐色　しまり弱　粘性中
P10　10YR3/3暗褐色　しまり弱　粘性中
P11　10YR3/3暗褐色　しまり弱　粘性中
P12　10YR3/3暗褐色　しまり弱　粘性中

第97図　S B1330





P１
1　10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト 炭化物５%、地山30%含む しまり強 粘性中
2　10YR4/4 褐色 シルト 炭化物１%、地山30%含む しまり強 粘性中
3　10YR4/4 褐色 シルト 10YR5/4にぶい黄褐色シルト30%、炭化物５%含む しまり弱 粘性中
4　10YR5/6 黄褐色 シルト 炭化物１% しまり中 粘性中

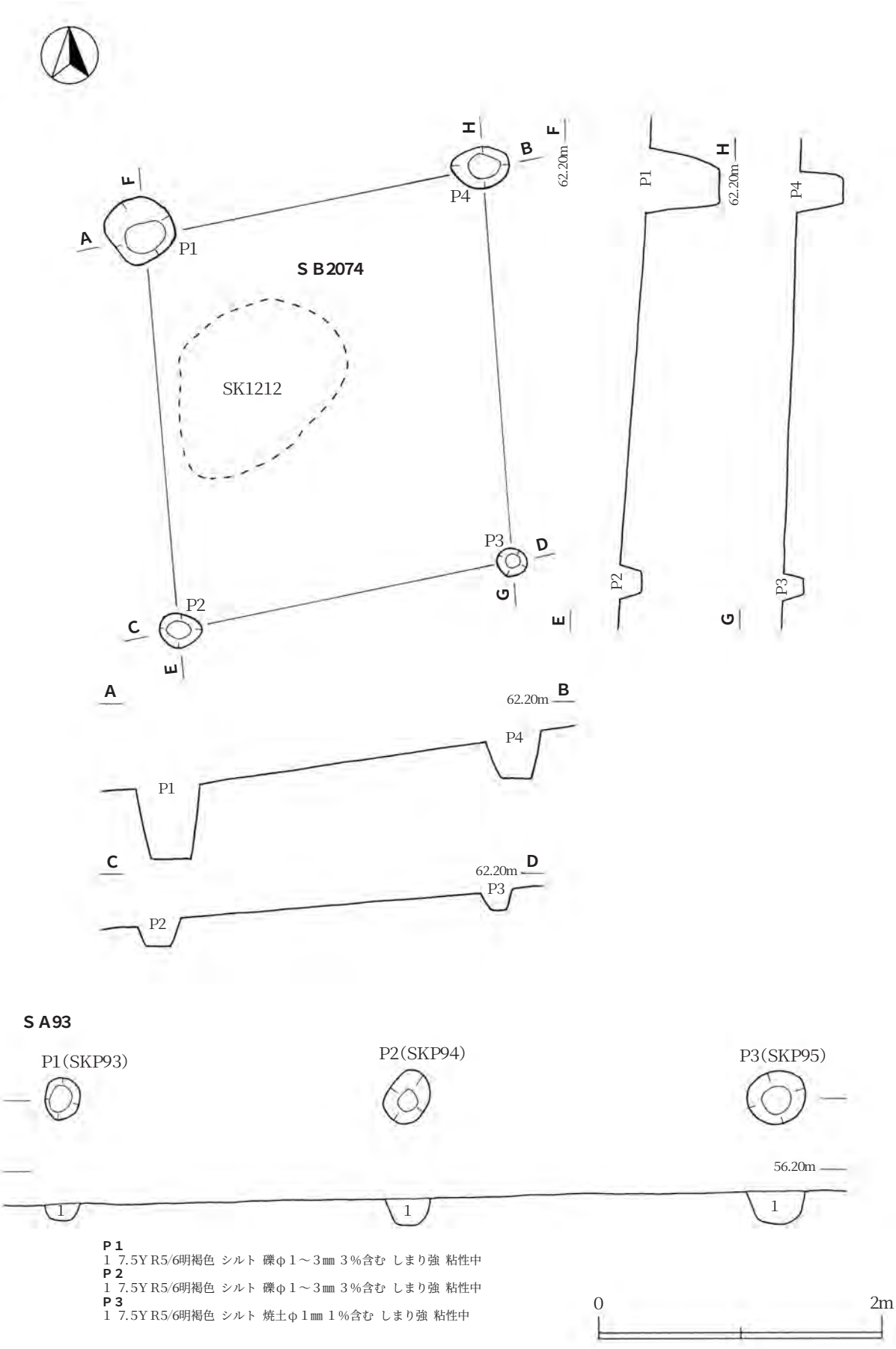
P２
1　10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト 炭化物５%、地山30%含む しまり強 粘性中
2　10YR4/4 褐色 シルト 炭化物１%、地山30%含む しまり強 粘性中
3　10YR5/6 黄褐色 シルト 炭化物１% しまり弱 粘性中
4　10YR5/4 にぶい黄褐色 シルト 炭化物１%含む しまり強 粘性中

P３
1　10YR4/4 褐色 シルト 10YR4/3にぶい黄褐色30%、炭化物３%含む しまり弱 粘性中
2　10YR5/6 黄褐色 シルト 炭化物１% しまり中 粘性中

P４
1　10YR2/2 黒褐色 シルト 炭化物１%含む しまり中 粘性中
2　10YR3/3 暗褐色 シルト 焼土８%、炭化物５%含む しまり中 粘性中
3　10YR3/3 暗褐色 シルト 焼土５%、炭化物５%含む しまり中 粘性中
4　10YR4/4 褐色 シルト 10YR5/6黄褐色40% 炭化物３%、焼土１%含む しまり中 粘性中
5　10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト 10YR5/6黄褐色40%、炭化物１%含む しまり中 粘性中
6　10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト 10YR5/6黄褐色10%、炭化物１%含む しまり中 粘性中
7　10YR5/6 黄褐色 シルト 炭化物１% しまり中 粘性中

0　2m

第98図　ＳＢ1840



第99図　ＳＡ93、ＳＢ2074

第100図　土坑配置図

４　土坑

基検出された。このうち特徴的なのは、調査区東側の平坦面間の斜面に集中する円形の土坑群であるが、遺物の出土状態に他の土坑と異なる特徴は見当たらず性格は不明である。その他では、長方形の平面形をもつＳＫ161・162が異質で火葬墓や土坑墓と考えられる。

第13表　土坑一覧（１）

遺構名	番号	挿図番号	図版番号	グリッド	確認面(層)	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	重複
ＳＫ	1	101	－	ＭＲ47	Ⅶ	1.35	1.13	0.21	なし
平面形は円形に近い。壁の立ち上がりは緩やか。遺物（第176図１）：土師器細片10数点、礫１点出土。									
ＳＫ	2	33	－	ＮＦ46	ＳＩ100覆土	2.12	1.06	0.37	ＳＩ100→ＳＫ02
ＳＩ100覆土中を掘り込んで構築。底面に炭化物層、その上に焼土層が形成。遺物（第176図２、第210図40・41）：土師器中心ポリ袋中0.5袋出土。									
ＳＫ	5	101	－	ＮＥ47	ＳＩ50覆土	0.85	0.50	0.12	ＳＩ50→ＳＫ５
ＳＩ50覆土を掘り込んで構築。平面形は小判形に近い。									
ＳＫ	6	101	－	ＮＦ46	Ⅶ	1.15	0.80	0.29	なし
平面形は方形に近い。土坑埋没過程中に火を使用した遺構。遺物：時期不明土器２点、礫１点出土。									
ＳＫ	7	101	－	ＮＥ・ＮＦ46	Ⅶ	0.49	0.43	0.06	なし
平面形は円形の小土坑。底面に焼土が堆積。遺物：土師器数点（内面黒色処理１点含む）出土。									
ＳＫ	11	101	－	ＭＯ48	Ⅶ	0.77	0.46	0.10	なし
平面形は楕円形に近い。遺物：土師器細片８点、小礫１点出土。									
ＳＫ	45	101	－	ＮＣ46・47	Ⅶ	0.58	0.53	0.13	なし
平面形は円形の小土坑。底面はやや丸みを帯びる。遺物：土師器（甕他）ポリ袋中１袋出土。									
ＳＫ	98	101	－	ＭＰ46	Ⅶ	1.55	1.25	0.22	なし
底面はほぼ平坦。遺物（第176図３・４）：土師器数点（内面黒色処理２点含む）出土。									
ＳＫ	124	44	－	ＫＴ47	Ⅶ、ＳＩ32覆土	1.29	1.20	0.27	ＳＩ132→ＳＫ124
平面形は円形に近い。遺物：土師器甕その他ポリ袋中0.5袋出土。									
ＳＫ	136	102	35	ＫＳ47	Ⅶ	2.11	(1.71)	0.45	なし
平面形は円形に近い。底面はほぼ平坦。壁は急角度で立ち上がる。遺物：土師器２点出土。									
ＳＫ	137	102	－	ＫＳ47	Ⅶ	1.25	(0.85)	0.13	ＳＫ137→ＳＫ140
平面形は小判形に近い。遺物：土師器ポリ袋小１袋出土。									
ＳＫ	140	102	－	ＫＳ47	Ⅶ	1.55	1.00	0.18	ＳＫ137→ＳＫ140
平面形は小判形に近い。遺物（第176図５・６）：土師器坏・甕、軟質礫３点、その他土師器ポリ袋中0.5袋出土。									
ＳＫ	147	39	35	ＬＢ47	ＳＩ146・147覆土	1.49	1.32	0.88	ＳＩ127・ＳＩ146→ＳＫ147
遺物（第210図42・43）：土師器坏・甕、礫１点、その他土師器中心ポリ袋中２袋出土。									
ＳＫ	148	102	－	ＫＰ49	Ⅶ	1.37	1.11	0.22	なし
平面形は円形に近い。土師器ポリ袋小１袋出土。									
ＳＫ	160	84	－	ＬＲ50	Ⅶ	1.13	0.93	0.82	なし
遺物（第176図７～12）：土師器坏・甕数個体分、礫２点、その他土師器コンテナ0.5箱出土。									
ＳＫ	161	102	36	ＭＮ46・47、ＭＭ46・47	Ⅵ	1.37	0.68	0.16	なし
隅丸方形の土坑で、遺構内から炭化材や幼児骨が出土。火葬墓か。自然科学分析実施。近接するＳＫ162と規模・形態、長軸方向が類似。遺物：土師器（坏・甕）ポリ袋小0.5袋出土。									

第14表　土坑一覧（2）

遺構名	番号	挿図番号	図版番号	グリッド	確認面(層)	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	重複
ＳＫ	162	102	36	MM46・47	Ⅵ	1.41	0.67	0.14	なし
隅丸方形の土坑で、ＳＫ161と規模・形態、長軸方向が類似。底面上に炭化物層が広がる。骨が検出されなかった点がＳＫ161と異なる。									
ＳＫ	176	103	－	MK48・49、ML48・49	Ⅵ	1.55	0.81	0.07	ＳＫ2005と重複（新旧不明）
平面形は楕円形に近い。底面はほぼ平坦。ＳＫ2005覆土と同じ土が堆積しているため、同時期かあまり時間差のないものと考えられる。遺物：土師器（坏・甕）その他土師器ポリ袋中1.5袋出土。									
ＳＫ	178	103	－	MK46・47、ML46・47	Ⅶ	1.52	1.04	0.07	なし
平面形は小判形に近い。底面はほぼ平坦。覆土にはⅠ層と似た土が堆積しているため、古代よりも新しい可能性がある。遺物（第210図44）：土師器坏・甕、その他土師器中心ポリ袋中１袋出土。									
ＳＫ	186	103	35	MK46	Ⅶ	2.72	2.30	0.16	ＳＫ186→ＳＫＰ
比較的大型の土坑。壁の立ち上がりは緩やか。遺物（第177図１、第210図45）：土師器坏・甕、その他土師器中心ポリ袋中１袋出土。									
ＳＫ	190	103	－	MK47・48	Ⅶ	1.12	0.61	0.14	ＳＫⅠ1350→ＳＫ190
平面形は小判形に近い。壁は急角度で立ち上がる。ＳＫ161・162に規模・形態、長軸方向が類似。底面上に炭化物層が広がる。遺物：土師器甕中心ポリ袋中１／３袋出土。									
ＳＫ	195	103	－	MJ44	Ⅶ	0.62	0.56	0.24	なし
ピット状の小土坑。底面に段差がみられる。									
ＳＫ	197	104	－	MF46・47、MG47	Ⅳ	2.62	1.33	0.33	ＳＫⅠ2067・2068→ＳＫ197・ＳＫ932
壁は緩い角度で立ち上がる。ＳＫ932と同じ覆土が堆積していることから、あまり時間差のないものと考えられる。遺物：覆土から耳皿１点出土。遺物（第177図２～９）：土師器（坏・耳皿・甕）、その他コンテナ0.5箱出土。									
ＳＫ	201	104	－	LP50	Ⅶ	1.66	1.30	0.36	なし
平面形は小判形に近い。遺物（第177図10）：土師器甕中心ポリ袋中１袋出土。									
ＳＫ	204	84	－	LR50	Ⅶ	(0.92)	(0.83)	0.49	ＳＫ204→ＳＤ155
遺物：土師器坏中心ポリ袋中１袋出土。									
ＳＫ	205	104	－	LR49	Ⅶ	0.73	0.61	0.39	なし
遺物：平面形は円形に近い。底面はほぼ平坦で壁は急角度で立ち上がる。									
ＳＫ	206	104	－	LR48	Ⅶ	1.24	1.24	0.19	なし
平面形は円形に近い。遺物（第177図11）：土師器坏中心ポリ袋中２／３袋出土。									
ＳＫ	207	83	－	LT51	Ⅶ	0.92	0.90	0.28	ＳＫⅠ350（新旧不明）
土師器細片ポリ袋中0.5袋（須恵器１点）出土。									
ＳＫ	209	105	35	LQ50	Ⅶ	3.95	2.59	0.30	なし
平面形は小判形に近い。遺物（第177図12・13、第178図１）：底面付近から、鉄床石１点その他礫多数出土。土師器甕中心ポリ袋中１袋、羽口？１点出土。									
ＳＫ	218	106	－	KT49	Ⅶ	2.18	1.19	0.31	なし
ＳＫ448と近接。平面形は小判形に近い。構築時には一部重複していた可能性あり。遺物：土師器坏中心コンテナ１／４箱出土。									
ＳＫ	225	106	－	KQ49	Ⅶ	1.75	0.88	0.30	ＳＫ225→ＳＫ2026
平面形は円形に近い。壁は急角度で立ち上がる。遺物（第212図56）：鉄滓が出土。									
ＳＫ	226	106	－	KQ48	Ⅶ	1.55	1.45	0.38	なし
底面中央部付近に浅いピット状の掘り込みあり。遺物（第178図２、第210図46）：土師器（坏・甕）中心、ポリ袋中２袋出土。									
ＳＫ	227	48	－	KS47	ＳⅠ139床面下	(1.22)	(0.52)	0.23	ＳＫ227→ＳⅠ139
ＳⅠ139火床面下検出の土坑。ＳⅠ139に伴う可能性あり。									

第15表　土坑一覧（３）

遺構名	番号	挿図番号	図版番号	グリッド	確認面(層)	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	重複
ＳＫ	231	106	－	ＭＬ45	Ⅶ	(1.26)	0.98	0.20	ＳＫ231→ＳＫＰ232、ＳＫＩ2064・2065、Ｐ９
平面形は円形に近い。壁は急角度で立ち上がる。									
ＳＫ	268	107	－	ＬＴ50	Ⅶ	0.98	0.84	0.50	なし
平面形は円形に近い。壁は急角度で立ち上がる。遺物（第178図３・４）									
ＳＫ	270	107	－	ＬＲ49	Ⅶ	1.00	0.91	0.13	なし
平面形は円形に近い。底面は丸みを帯びる。									
ＳＫ	271	107	－	ＬＱ48	Ⅶ	1.10	0.91	0.19	ＳＫ795→ＳＫ271
平面形は円形に近い。底面はほぼ平坦である。壁は急角度で立ち上がる。遺物：土師器ポリ袋小１袋（細片数点）。									
ＳＫ	272	108	－	ＬＲ49・50	Ⅶ	1.35	0.95	0.19	なし
平面はほぼ平坦。壁は急角度で立ち上がる。遺物：土師器坏・甕ポリ袋中１袋出土									
ＳＫ	288	108	－	ＭＪ47	Ⅶ	0.64	0.60	0.09	なし
平面形は円形に近い。平面はほぼ平坦。壁は急角度で立ち上がる。遺物：土師器２点出土。									
ＳＫ	299	108	－	ＭＩ・ＭＪ47	Ⅶ	1.71	0.76	0.38	なし
平面形は楕円形に近い。底面は丸みを帯びる。覆土は褐色で、Ⅶ層（地山）で埋め戻したと考えられる。遺物：土師器細片２点出土。									
ＳＫ	300	108	－	ＭＩ48・49	Ⅶ	0.97	0.88	(0.30)	ＳＫ300→ＳＫＰ1225
斜面に形成。壁は急角度で立ち上がる。遺物：土師器細片（ポリ袋小２袋）出土。									
ＳＫ	307	108	－	ＭＫ45	Ⅴ	0.61	0.55	0.12	なし
平面形は円形に近い。壁は急角度で立ち上がる。遺物（第179図１）：土師器微細３点出土。									
ＳＫ	308	108	－	ＭＫ44	造～Ⅶ	0.60	0.52	0.42	なし
平面形は円形。底面はほぼ平坦。壁は急角度で立ち上がる。ＳＫＩ2064・2065造成後に掘り込まれた土坑。遺物：土師器細片ポリ袋小１袋出土。									
ＳＫ	341	108	－	ＬＳ50	Ⅶ	0.60	0.42	0.21	なし
平面形は円形に近い。壁は急角度で立ち上がる。大礫が出土。遺物：土師器細片４点出土。									
ＳＫ	355	108	－	ＭＡ49	Ⅶ	1.38	0.88	0.33	なし
底面はほぼ平坦。壁はやや急角度で立ち上がる。遺物：土師器３点出土。									
ＳＫ	408	109	－	ＭＫ44・45	Ⅶ	0.59	0.58	0.21	なし
平面形は円形に近い。底面はほぼ平坦。壁はほぼ垂直に立ち上がる。遺物：土師器数点（ポリ袋小0.5袋）出土。									
ＳＫ	412	109	－	ＭＬ44	造	1.08	0.74	0.07	ＳＫＰ1245→ＳＫ412
ＳＫＩ2064・2065造成後に掘り込まれた土坑。遺物（第179図２・３）：土師器坏・甕中心、土製品？数点コンテナ１／４箱出土。									
ＳＫ	413	109	－	ＭＫ44	造	0.74	0.67	0.24	なし
ＳＫＴ2064・2065造成後に掘り込まれた土坑。柱穴の可能性あり。遺物：土師器数点（ポリ袋小１袋）出土。									
ＳＫ	416	109	－	ＭＤ47・48、ＭＥ47・48	Ⅶ	1.08	0.77	0.20	なし
遺物（第179図４）：土師器坏中心ポリ袋中0.5袋（須恵器１点）出土。									
ＳＫ	417	109	－	ＭＣ48	Ⅶ	2.03	1.87	0.14	ＳＫＰ1336・1337・1341※
比較的大型の土坑。壁は緩やかな角度で立ち上がる。遺物（第179図５～９、第210図47）：土師器坏・甕数個体分、須恵器１点、鉄製品、大礫４点（有使用痕１点）、計コンテナ１箱出土。									

第16表　土坑一覧（４）

遺構名	番号	挿図番号	図版番号	グリッド	確認面(層)	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	重複
ＳＫ	419	110	－	ＭＣ49	Ⅶ	1.05	0.71	1.01	なし
ＳＫ921・1257・1441と約４ｍの等間隔で台地の縁に沿うように位置。底面に段差があり、壁はオーバーハングする。ＳＤ152と関連する可能性あり。遺物（第179図10・11）：土師器坏中心、須恵器１点、被熱礫２点、フレイク１点、計コンテナ１／３出土。									
ＳＫ	444	110	－	ＫＰ48	Ⅶ	(1.40)	0.79	0.26	ＳＫ450→ＳＫ444→ＳＷ220
平面形は小判形に近い。壁は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦。遺物：土師器１点出土。									
ＳＫ	445	110	－	ＫＲ48	Ⅶ	(1.05)	(0.65)	(0.18)	ＳＤ449→ＳＫ445
平面形は円形に近いと推測。									
ＳＫ	448	106	－	ＫＳ48	Ⅶ	(1.27)	0.99		ＳＫ448→ＳＮ219→ＳＤ361
ＳＫ218と近接。構築時には重複していた可能性あり。平面形は円形に近い。底面はほぼ平坦で壁は急角度で立ち上がる。覆土にはＳＮ219が形成されている。また、覆土にはＳＤ361が掘り込まれている。									
ＳＫ	450	110	－	ＫＰ48	Ⅶ	(1.28)	0.93	0.09	ＳＫ450→ＳＫ444
底面はほぼ平坦である。壁は極緩やかに立ち上がる。									
ＳＫ	491	111	－	ＬＦ49	Ⅵ	(1.29)	(0.85)	(0.32)	ＳＫ491→ＳＫ492
東側調査区土坑群。底面はやや丸みを帯びる。壁は急角度で立ち上がる。遺物：土師器坏（黒色処理）その他土師器ポリ袋小１袋出土。									
ＳＫ	492	111	－	ＬＦ48	Ⅵ	(1.50)	(1.22)	(0.29)	ＳＫ1846→ＳＫ492、ＳＫ491→ＳＫ492→ＳＫ499、ＳＫ492→ＳＫ496
東側調査区土坑群。平面形は小判形に近い。底面はほぼ平坦。遺物（第179図12）：土師器坏中心その他土師器ポリ袋中２袋出土。									
ＳＫ	493	112	35	ＬＦ48	Ⅵ	1.04	0.93	0.24	ＳＫ494→ＳＫ493、ＳＫ514→ＳＫ493
東側調査区土坑群。平面形は小判形に近い。底面はほぼ平坦。遺物（第179図13、第211図48）：土師器（坏・甕）、その他土師器中心ポリ袋中0.5袋出土。									
ＳＫ	494	112	－	ＬＦ48	Ⅵ	0.80	(0.73)	0.20	ＳＫ494→ＳＫ493、ＳＫ494→ＳＫ495
東側調査区土坑群。平面形は小判形に近い。底面はほぼ平坦。遺物：土師器４点（ポリ袋小１袋）出土									
ＳＫ	495	112	－	ＬＦ48	Ⅵ	0.90	0.70	0.28	ＳＫ494→ＳＫ495、ＳＫ497→ＳＫ495、ＳＫ695→ＳＫ495
東側調査区土坑群。平面形は小判形に近い。底面はやや凹凸あり。遺物：土師器３点、土製品？１点出土。									
ＳＫ	496	111	－	ＬＦ48	Ⅵ	0.75	0.62	0.11	ＳＫ492→ＳＫ496、ＳＫ1846→ＳＫ496
東側調査区土坑群。平面形はほぼ円形。底面はほぼ平坦。底面はＳＫ492の覆土。									
ＳＫ	497	112	－	ＬＦ48	Ⅵ	(1.13)	(0.67)	0.30	ＳＫ497→ＳＫ495、ＳＫ497→ＳＫ696、ＳＫ497→ＳＩ699、ＳＫ695→ＳＫ497、ＳＫ774と重複(新旧不明)
東側調査区土坑群。平面形は小判形に近い。底面はほぼ平坦。遺物：土師器（坏・甕）ポリ袋中１袋出土。									
ＳＫ	498	111	－	ＬＦ48	Ⅵ	(0.72)	(0.51)		ＳＫ492→ＳＫ498、ＳＫ499→ＳＫ498、ＳＫ498→ＳＫ510
東側調査区土坑群。平面形は円形に近い。底面はＳＫ499の覆土。									
ＳＫ	499	111	－	ＬＦ48	Ⅵ	(1.39)	(0.72)	(0.28)	ＳＫ499→ＳＫ492、ＳＫ499→ＳＫ510
東側調査区土坑群。底面はやや丸みを帯びる。壁は緩やかに立ち上がる。平面はほぼ平坦。遺物：土師器坏（黒色処理）その他土師器ポリ袋小１袋出土。									
ＳＫ	501	113	－	ＫＳ48	Ⅶ	1.07	0.65	0.31	なし
底面にピット状の段差あり。									
ＳＫ	502	113	－	ＫＳ48	Ⅶ	0.79	0.57	0.11	なし
平面形は小判形に近い。壁は緩やかに立ち上がる。遺物（第179図14）：土師器坏ポリ袋中0.5袋出土。									

第17表　土坑一覧（５）

遺構名	番号	挿図番号	図版番号	グリッド	確認面(層)	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	重複
ＳＫ	509	113	－	ＬＤ49	Ⅶ	1.72	0.85	0.20	なし
平面形は楕円に近い。底面はほぼ平坦。壁は緩やかに立ち上がる。遺物：土師器１点出土。									
ＳＫ	510	111	－	ＬＦ48	Ⅵ	1.24	1.09	0.40	ＳＫ499→ＳＫ510
東側調査区土坑群。平面形は円形に近い。壁は急角度で立ち上がる。遺物：土師器坏・甕、顔料？数点ポリ袋中0.5袋出土。									
ＳＫ	513	113	－	ＬＦ50	Ⅵ	1.30	(0.93)	0.13	ＳＫ513→ＳＫ514
東側調査区土坑群。平面形は小判形に近い。底面はほぼ平坦。									
ＳＫ	514	113	－	ＬＦ50	Ⅵ	0.97	0.73	0.11	ＳＫ513→ＳＫ514
遺物：東側調査区土坑群。平面形は円形に近い。底面はほぼ平坦。遺物（第211図49）：土師器甕、鉄滓１点出土。									
ＳＫ	515	113	－	ＬＦ50	Ⅵ	1.18	1.07	0.57	ＳＫ516→ＳＫ515
遺物：東側調査区土坑群。平面形は円形に近い。底面はほぼ平坦。壁は急角度で立ち上がる。遺物：土師器坏中心ポリ袋中１袋出土。									
ＳＫ	516	113	－	ＬＦ50	Ⅵ	(2.00)	1.40	0.18	ＳＫ516→ＳＫ515
東側調査区土坑群。平面形は楕円形に近い。底面はほぼ平坦。									
ＳＫ	518	113	－	ＬＧ49	Ⅵ	1.19	0.78	0.23	なし
東側調査区土坑群。平面形は楕円形に近い。底面はやや丸みを帯びる。遺物：土師器ポリ袋小１袋出土。									
ＳＫ	519	113	－	ＬＧ49	Ⅵ	0.92	0.71	0.08	なし
東側調査区土坑群。平面形はＳＫ514に類似。底面はほぼ平坦である。遺物：土師器底部１点出土。									
ＳＫ	558	84	－	ＬＱ51	Ⅶ	1.09	1.04	0.28	
平面形は円形に近い。底面はほぼ平坦。土師器：コンテナ１／２箱出土。									
ＳＫ	695	112	－	ＬＧ48	Ⅵ	(0.87)	0.71	0.30	ＳＫ695→ＳＫ495、ＳＫ695→ＳＫ497、ＳＫ695→ＳＫ774、ＳＫ696→ＳＫ695
東側調査区土坑群。平面形は円形に近い。底面はほぼ平坦。									
ＳＫ	696	112	－	ＬＧ48	Ⅵ	(1.38)	(0.87)	(0.25)	ＳＫ697→ＳＫ696→ＳＫ695、その他ＳＩ699、ＳＫ1847と重複。
東側調査区土坑群。平面形は楕円形に近い。底面はほぼ平坦。遺物（第180図１）：土師器坏・甕ポリ袋中1.5袋出土									
ＳＫ	697	112	－	ＬＧ46・47	Ⅵ	(1.06)	0.85	0.25	ＳＫ697→ＳＫ696、ＳＫ697→ＳＫ775
東側調査区土坑群。平面形は円形に近い。底面はほぼ平坦。									
ＳＫ	701	86	－	ＬＱ51	ＳＫＩ610覆土	1.24	1.13	0.38	ＳＫＩ610→ＳＫ701
ＳＫＩ610埋没過程中に掘り込まれた土坑。平面形は円形に近い。底面はほぼ平坦。遺物（第180図２～５）：土師器坏・甕ポリ袋中1.5袋（須恵器１点含む）出土。									
ＳＫ	767	114	－	ＬＧ47	Ⅶ	1.45	1.37	0.45	なし
平面形は円形に近い。底面はほぼ平坦。遺物（第180図６～８）：土師器坏中心、大礫（鉄床石？）２点、礎状の礫２点、コンテナ１箱出土									
ＳＫ	768	112	－	ＬＧ47	Ⅶ	1.80	(1.07)	0.19	ＳＫ768→ＳＫＰ778、ＳＫ897→ＳＫ768、Ｓポリ袋小894→ＳＫ768、ＳＫＰ770→ＳＫ768、ＳＫＰ898→ＳＫ768、ＳＫＰ969→ＳＫ768、ＳＫＰ1284→ＳＫ768
平面形は小判形に近い。底面はほぼ平坦で溝状の掘り込みあり。壁は急角度で立ち上がる。遺物（第180図９～11）：土師器坏・甕、被熱軟質礫数点、コンテナ1.5箱。									
ＳＫ	774	112	－	ＬＦ46	Ⅶ	0.69	(0.66)	0.11	ＳＫ774→ＳＫ1847→ＳＩ699、ＳＫ497と重複（新旧不明）
ＳＩ699より古い土坑。平面形は円形に近い。									
ＳＫ	775	112	－	ＬＧ48	Ⅵ	2.00	1.23	0.42	ＳＩ699→ＳＫ775
東側調査区土坑群。平面形は楕円形に近い。底面はほぼ平坦。									

第18表　土坑一覧（6）

遺構名	番号	挿図番号	図版番号	グリッド	確認面(層)	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	重複
SK	786	114	－	LP49	Ⅶ	1.09	0.94	0.17	なし
平面形は円形に近い。底面はほぼ平坦。壁は急角度で立ち上がる。									
SK	792	114	－	LQ48	Ⅶ	1.25	0.87	0.11	なし
平面形は小判形に近い。底面は丸みを帯びる。									
SK	795	107	－	LQ48	Ⅶ	(1.90)	(1.29)	0.12	SK795→SK271　その他SK904と重複(新旧不明)
平面形は長方形。壁は急角度で立ち上がる。									
SK	840	115	36	ME・MF48	Ⅶ	2.09	1.55	1.14	SK1257→SK840
深さのある大型の土坑。平面形は隅丸方形に近い。壁は急角度で立ち上がる。遺物：土師器坏・甕ポリ袋中0.5袋（須恵器3点含む）出土。									
SK	893	152	－	LG49	Ⅵ	0.93	0.83	0.10	SD780・771と重複（新旧不明）、SK893→SK492
東側調査区土坑群。平面形は円形。底面は丸みを帯びる。									
SK	897	114	－	LG47	Ⅵ	(0.93)	(0.68)	0.35	SK897→SK768、SKP898→SK768
平面形は小判形と推測。底面はほぼ平坦。壁は急角度で立ち上がる。									
SK	904	116	－	LQ48	Ⅶ	1.65	1.10	0.43	SK904→SN208　その他SK795と重複(新旧不明)
覆土中に焼土（SN208）が形成される。土坑埋没過程中に火を使用したとみられる遺構。									
SK	921	116	－	MF48	Ⅶ	1.11	0.90	0.73	なし
SK419・1257・1441と約4mの等間隔で台地の縁に沿うように位置。SD152と関連する可能性あり。平面形は円形に近い。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がるが、確認面付近でやや開口する。遺物：土師器坏・甕ポリ袋中0.5袋出土。									
SK	932	104	－	MF47	Ⅶ	1.79	1.33	0.35	SKI2068→SK197・SK932
壁は急角度で立ち上がる。SK197と同じ覆土が堆積していることから、あまり時間差のないものと考えられる。									
SK	933	117	－	MC・MD47	Ⅶ	1.03	0.78	0.13	なし
底面はほぼ平坦。壁はやや急角度で立ち上がる。焼土や炭化物が点在するエリアで検出。それらの層(作業面)より下で検出。SS200操業以前の遺構か。遺物（第180図12・13）：礫数点、その他土師器坏・甕中心、計コンテナ0.5箱出土。									
SK	934	117	－	MK48	Ⅶ	0.85	0.67	0.14	なし
平面形は円形に近い。底面はやや丸みを帯びる。壁は急角度で立ち上がる。土坑底面に焼土が形成。									
SK	970	117	－	LN50	Ⅶ	1.11	0.75	0.19	なし
平面形は円形に近い。底面はほぼ平坦。									
SK	1021	117	－	LC46	Ⅶ	1.47	(1.09)	0.33	SK1201→SK1021、SK1021→SK1023、その他SD507と重複
平面形は円形に近い。壁は緩やかに立ち上がる。土師器坏中心ポリ袋小0.5袋出土。									
SK	1023	117	－	LC46	Ⅶ	1.06	0.91	0.57	SK102→SK1023、SK1210→SK1023、SK1025→SK1023、SKP1209→SK1023
平面形は円形に近い。底面はやや丸みを帯びる。壁は急角度で立ち上がる。遺物（第180図14）：土師器坏・甕ポリ袋中1袋出土。									
SK	1025	117	－	LC46	Ⅶ	－	－	(0.39)	SK1025→SK1021、SK1025→SK1023
平面形は円形に近いと推測。底面は丸みを帯びる。遺物（第180図15）：土師器2点出土。									
SK	1071	118	－	LJ45	Ⅶ	(1.10)	(0.58)	(0.43)	なし
北側にSD1233が隣接。平面形は楕円に近いと推測。底面は丸みを帯びる。									
SK	1120	118	－	LF50	Ⅶ	1.57	1.13	0.33	SKP1205と重複
傾斜地に構築。底面は傾くが、面としてはほぼ平坦。土師器細片4点出土。									

第19表　土坑一覧（７）

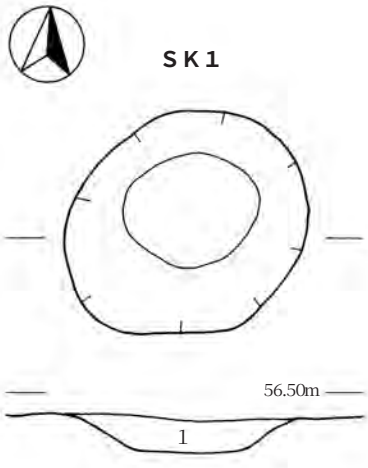
遺構名	番号	挿図番号	図版番号	グリッド	確認面(層)	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	重複
ＳＫ	1121	118	－	ＬＦ51	Ⅶ	0.99	0.53	0.14	ＳＫ1121→ＳＫＰ1206・1207
平面形は小判形。底面はほぼ平坦。									
ＳＫ	1201	117	－	ＬＣ46	Ⅶ	(0.69)	(0.55)	(0.19)	ＳＫ1201→ＳＫ1021、ＳＫ1201→ＳＫ1023、ＳＫ1201→ＳＫＰ1209
平面形は円形に近いと推測。底面はやや丸みを帯びる。壁は急角度で立ち上がる。									
ＳＫ	1212	118	－	ＬＩ51	Ⅶ	1.45	1.06	0.14	なし
底面に２つのピット。底面はほぼ平坦。壁は急角度で立ち上がる。									
ＳＫ	1231	119	－	ＬＧ47	Ⅶ	0.71	0.39	0.22	なし
平面形は小判形に近い。底面にピット状の掘り込みあり。									
ＳＫ	1240	119	－	ＬＪ48	Ⅶ	1.03	(0.52)	0.23	なし
底面はほぼ平坦。壁は垂直に近い角度で立ち上がる。									
ＳＫ	1248	136	－	ＭＧ46	Ⅶ	1.78	1.30	0.28	ＳＮ600→ＳＫ1248
平面形は円形～小判形。底面はほぼ平坦で、底面レベルは重複するＳＮ600と同じかやや深い程度。									
ＳＫ	1251	119	－	ＭＦ46	造～地	(0.42)	0.58	0.18	ＳＫ1251→ピット
平面形は円形に近い。底面はほぼ平坦。									
ＳＫ	1256	119	－	ＭＥ47・48	Ⅶ	1.64	0.61	(0.77)	なし
平面形は長方形。底面はほぼ平坦。壁は垂直に近い角度で立ち上がる。遺物：土師器微細片３点出土。									
ＳＫ	1257	115	36	ＭＥ48	Ⅶ	(0.43)	0.87	0.62	ＳＫ1257→ＳＫ840
ＳＫ419・921・1441と約４ｍの等間隔で台地の縁に沿うように位置。ＳＤ152と関連する可能性あり。遺物（第180図16）：土師器椀、その他土師器ポリ袋中１袋出土。									
ＳＫ	1258	119	－	ＭＦ45	Ⅶ	0.90	0.78	0.08	なし
ＳＫＩ2067・2068構築後に掘り込まれた土坑か。									
ＳＫ	1283	117	－	ＬＤ46	ＳＩ777覆	(0.90)	(0.77)	0.23	ＳＩ777→ＳＫ1283
Ｓポリ袋小508に伴う土坑か。土師器坏・甕ポリ袋小２袋出土									
ＳＫ	1310	119	－	ＬＩ48	Ⅶ	0.93	0.73	0.32	ＳＫ1310→ＳＫＰ1309
底面がややオーバーハングする。壁は垂直に近い角度で立ち上がる。									
ＳＫ	1340	120	－	ＭＢ47・ＭＣ47	Ⅶ	0.93	0.85	0.70	ＳＤ152付属ピット
底面からほぼ垂直に立ち上がるが確認面付近で開口する。底面はほぼ平坦。大きな柱穴の可能性あり。遺物：土師器(坏・甕)ポリ袋中0.5袋（須恵器１点含む）出土。									
ＳＫ	1344	120	－	ＭＪ43	Ⅶ	1.11	0.64	0.08	なし
平面形は円形に近いと推測。底面はほぼ平坦。壁は急角度で立ち上がる。									
ＳＫ	1348	120	－	ＭＢ・ＭＣ48	Ⅶ	1.13	0.91	0.44	ＳＫ1349→ＳＫ1348
平面形は円形に近い。底面はほぼ平坦。壁は一部オーバーハングするが、底面から急角度で立ち上がる。ＳＤ152付属ピットか。遺物：土師器椀半個体出土。									

第20表　土坑一覧（８）

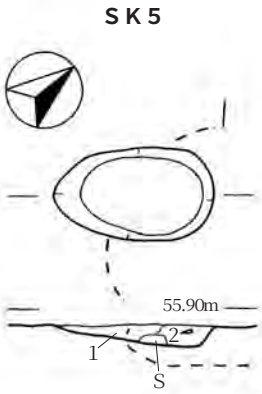
遺構名	番号	挿図番号	図版番号	グリッド	確認面(層)	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	重複
ＳＫ	1349	120	－	ＭＢ48・49、ＭＣ48・49	Ⅶ	2.57	(0.76)	0.44	ＳＫ1349→ＳＫ1348、その他ＳＫＰ1445と重複（新旧不明）
平面形は楕円形に近い。壁は急角度で立ち上がる。									
ＳＫ	1355	120	－	ＬＩ49	Ⅶ	0.69	0.51	0.25	なし
平面形は円形に近い。底面はほぼ平らである。壁は急角度で立ち上がる。									
ＳＫ	1441	120	36	ＭＤ49	Ⅵ	0.86	0.71	0.74	なし
ＳＫ921・1257・1441と約４ｍの等間隔で台地の縁に沿うように位置。平面形は隅丸方形に近い。底面はほぼ平坦。壁は垂直に近い角度で立ち上がる。大きな柱穴の可能性あり。遺物（第181図１）：土師器坏中心、大礫１点、その他ポリ袋中0.5袋出土。									
ＳＫ	1619	121	－	ＬＤ～ＬＩ45	Ⅶ	(1.23)	(0.42)	(0.26)	ＳＫ1620→ＳＫ1619
底面はほぼ平坦。壁は垂直に近い角度で立ち上がる。									
ＳＫ	1620	121	－	ＬＩ45	Ⅶ	(1.80)	(0.67)	(0.30)	ＳＫ1620→ＳＫ1619
平面形は円形に近いと推測。底面は凹凸が多い。壁は極緩やかに立ち上がる。									
ＳＫ	1654	121	－	ＭＥ46	Ⅶ	0.81	0.73	0.12	なし
平面形は円形に近い。底面は丸みを帯びる。壁は緩い角度で立ち上がる。遺物（第181図２）：土師器坏中心ポリ袋中１／３袋出土。									
ＳＫ	1655	77	－	ＭＤ46	Ⅶ	0.67	0.50	0.24	ＳＩ1456→ＳＫ1655
ＳＩ1456壁溝を切って構築。平面形は小判形に近い。遺物（第181図３）：土師器坏中心ポリ袋中１／３袋出土。									
ＳＫ	1656	121	－	ＭＢ46	Ⅶ	0.86	0.72	0.64	ＳＤ152→ＳＫ1656
ＳＤ152の付属ピットか。底面はほぼ平坦。壁は急角度で立ち上がる。遺物（第181図４）：土師器（甕・坏）、ポリ袋中1.5袋出土。									
ＳＫ	1659	121	－	ＭＭ44	Ⅶ	1.26	0.49	0.37	なし
平面形は円形に近い。壁は開口部を除き急角度で立ち上がる。底面に小ピットあり。ＳＫＩ2064・2065に伴う柱穴か。土師器坏・甕ポリ袋中１袋出土。									
ＳＫ	1661	121	－	ＭＭ44	造	1.27	0.50	0.42	なし
備考・平面形は小判形～長楕円形。壁は急角度で立ち上がる。遺物：土師器細片ポリ袋小１袋出土。									
ＳＫ	1701	122	－	ＬＯ45	Ⅶ	(2.43)	(1.90)	(0.15)	ＳＫＰ2046と重複（新旧不明）
底面に焼土あり。遺物（第181図５）：礫１点、その他土師器坏中心ポリ袋中２袋出土。									
ＳＫ	1702	122	35	ＬＰ45	Ⅶ	3.13	1.51	0.53	なし
底面は起伏に富む。壁の立ち上がりは場所によって異なる。遺物（第181図６）：土師器ポリ袋中１袋出土。									
ＳＫ	1703	122	－	ＬＰ45	Ⅶ	(1.66)	(1.10)	0.45	なし
東壁は急角度で立ち上がる。底面はほぼ平坦である。遺物：土師器坏・甕ポリ袋中１袋出土。									
ＳＫ	1756	80	－	ＬＲ47	Ⅶ	1.19	1.11	0.14	ＳＩ1755→ＳＫ1756→ＳＤ1704、ＳＫ1756→ＳＳ1700
ＳＩ1755覆土に構築される。平面形は円形に近い。									
ＳＫ	1759	123	－	ＬＲ47	Ⅶ	1.19	1.11	0.14	なし
平面形は小判形に近いと推測。底面はほぼ平坦。									
ＳＫ	1766	123	－	ＬＯ47	Ⅳ	1.58	0.96	0.31	ＳＫ1773→ＳＫ1766、ＳＫ1767→ＳＫ1766
平面形は長方形。底面はほぼ平坦。埋没沢のⅤ層を掘り込んで構築。遺物（第181図７）土師器坏甕ポリ袋中１袋出土。									
ＳＫ	1767	123	－	ＬＯ47	Ⅳ	(1.30)	(0.80)	－	ＳＫ1767→ＳＫ1766
平面形は楕円形に近い。埋没沢のⅤ層を掘り込んで構築。									

第21表　土坑一覧（９）

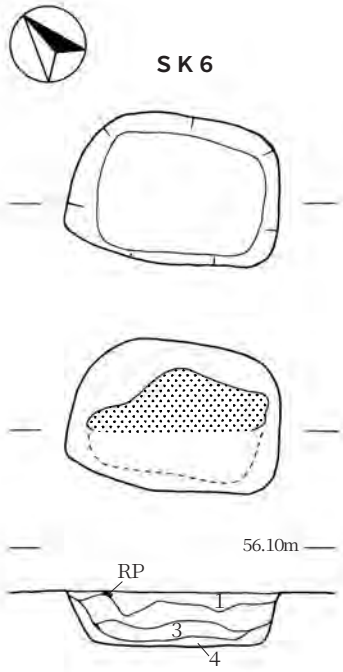
遺構名	番号	挿図番号	図版番号	グリッド	確認面(層)	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	重複
ＳＫ	1773	123	－	ＬＰ48・49	Ⅳ	1.70	(1.28)	0.15	ＳＫ1773→ＳＫ1766
平面形は隅丸方形。底面にやや起伏あり。埋没沢のＶ層を掘り込んで構築。									
ＳＫ	1777	123	－	ＬＱ45	Ⅶ	(1.71)	(1.46)	0.25	
撹乱等で大部分が消失した状態。平面形は円形に近いと推測。底面はほぼ平坦。壁は急角度で立ち上がる。									
ＳＫ	1794	120	－	ＭＣ49	Ⅴ～Ⅶ	(0.83)	0.91	(0.41)	ＳＫ1349と重複（新旧不明）
平面形は円形に近い。底面はほぼ平坦。壁は急角度で立ち上がる。ＳＤ152付属ピットか。									
ＳＫ	1795	146	－	ＭＣ49	Ⅴ～Ⅶ	0.84	0.62	0.49	なし
（１／40図面未掲載）平面形は円形に近い。底面はほぼ平坦。壁は急角度で立ち上がる。ＳＤ152付属ピットか。									
ＳＫ	1818	123	－	ＭＢ～ＭＣ 47・48	Ⅶ	0.78	0.69	0.45	なし
ＳＫ1819の北側に位置。平面形は円形に近い。底面はほぼ平坦。壁は急角度で立ち上がる。ＳＤ152付属ピットか。埋め戻しか。									
ＳＫ	1819	123	－	ＭＢ～ＭＣ 47・48	Ⅶ	0.58	0.55	0.49	なし
（１／40図面未掲載）ＳＫ1818の南側に位置。平面形は円形に近い。底面はほぼ平坦。壁は急角度で立ち上がる。ＳＤ152付属ピットか。									
ＳＫ	1839	66	－	ＬＤ46・47	ＳＩ777覆土	(1.90)	(1.90)	0.92	ＳＩ777→ＳＫ1839
ＳＩ777覆土に掘り込まれている（掘り込みＣ）。平面形は円形に近いと推測される。底面はほぼ平坦。									
ＳＫ	1841	124	－	ＬＳ49（ＳＩ151覆土）	ＳＩ151覆土	1.55	1.20	0.28	ＳＩ151→ＳＫ1841
平面形が方形の土坑。ＳＩ151カマド部分を掘り込んで構築。遺物（第181図10～12、第182図、183図、第212図51、図版50）：方形の切石や土師器などコンテナ0.5箱出土緑釉陶器片１点含む。									
ＳＫ	1847	71	－	ＬＧ47	Ⅶ	(0.62)	(5.00)	－	ＳＫ774→ＳＫ1847→ＳＩ699
ＳＩ699より古い土坑。平面形は楕円形に近いと推測。遺物：大礫１点、土師器坏・甕中心コンテナ0.5箱出土。									
ＳＫ	2005	103	－	ＭＫ46	Ⅶ	(0.62)	(0.66)	0.08	ＳＫ176と重複（新旧不明）
平面形は楕円形に近いと推測。底面はほぼ平坦。ＳＫ176覆土と同じ土が堆積しているため、同時期かあまり時間差のないものと考えられる。									
ＳＫ	2009	92	－	ＭＤ45	Ⅶ	0.85	0.52	0.18	ＳＫ2010→ＳＫ2009
平面形は楕円形に近い。底面はほぼ平坦。									
ＳＫ	2010	92	－	ＭＤ45	Ⅶ	0.80	(0.57)	0.25	ＳＫ2010→ＳＫ2009
平面形は楕円形に近い。									
ＳＫ	2071	124	－	ＫＳ48	Ⅶ	(1.29)	(0.99)	(0.11)	なし
平面形は小判形に近いと推測。									
ＳＫ	2072	39	－	ＬＢ46	Ⅶ	0.83	0.73	－	ＳＫ145→ＳＫ2072、ＳＫＩ130→ＳＫ2072
平面形は円形。									
ＳＫ	2073	77	－	ＭＣ46・47	Ⅶ	(2.60)	(1.61)	－	ＳＩ1000→ＳＫ2073
平面形は楕円形に近い。大型の土坑。									



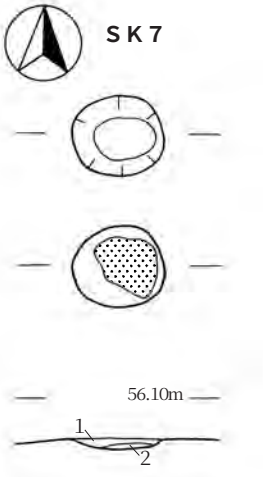
1 10YR3/2黒褐色 シルト 炭化物φ1㎜ 1%、
礫φ5～50㎜ 1%含む 土師器片混入
しまり中 粘性中



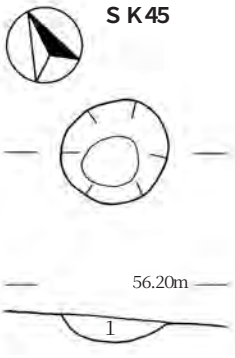
1 10YR2/3黒褐色 シルト 焼土φ1～5㎜ 2%、
炭化物φ1㎜ 1%含む しまり中 粘性弱
2 10YR3/4暗褐色 シルト 炭化物φ1㎜ 1%、
焼土φ1～3㎜ 1%含む しまり中 粘性弱



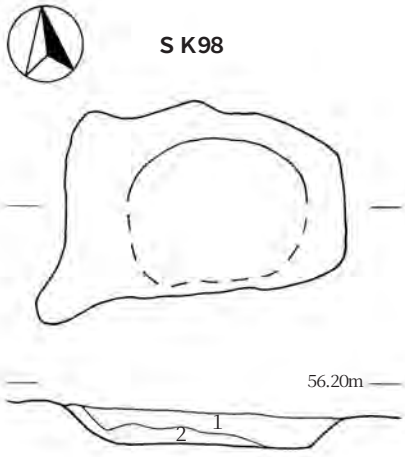
1 10YR3/3暗褐色 シルト 焼土φ1～5㎜ 1%含む
しまり中 粘性弱
2 10YR3/4暗褐色 シルト 焼土φ1～10㎜ 10%、
炭化物φ1～5㎜ 1%含む しまり中 粘性中
3 2.5YR5/8明赤褐色 シルト 10YR3/4暗褐色10%混じる
しまり中 粘性弱 焼土ブロック層
4 10YR3/4暗褐色 シルト 炭化物φ1～3㎜ 1%、
焼土φ1㎜ 1%含む しまり中 粘性弱



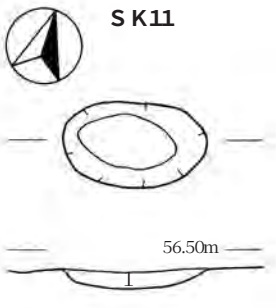
1 7.5YR3/3暗褐色 シルト 炭化物φ1㎜ 1%、
焼土φ1㎜ 1%含む しまり中 粘性弱
2 5YR4/6赤褐色 シルト しまり中 粘性中



1 10YR3/3暗褐色 シルト
炭化物φ1㎜ 1%含む
しまり強 粘性弱

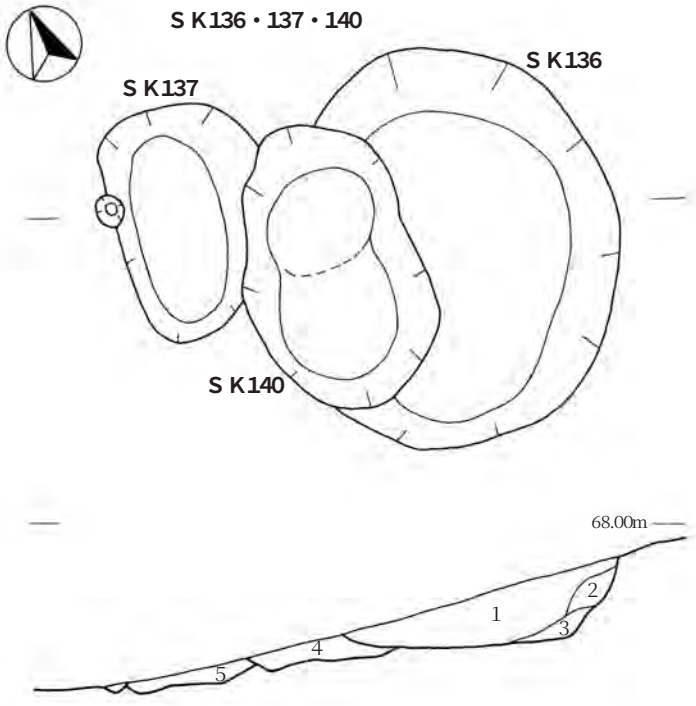


1 7.5YR4/4褐色 シルト 焼土3%含む
しまり強 粘性弱
2 7.5YR4/6褐色 シルト 炭化物10%含む
しまり強 粘性強

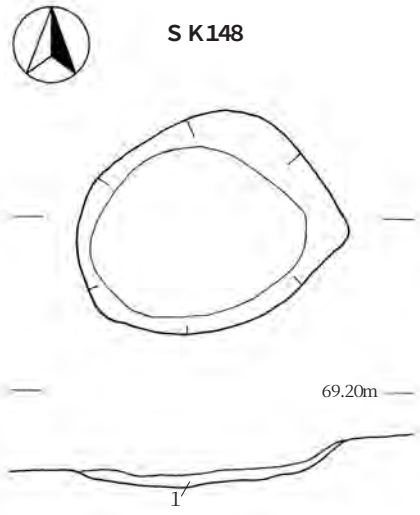


1 10YR3/3暗褐色 シルト 炭化物φ1㎜ 1%、
礫φ1～3㎜ 1%含む しまり強 粘性中

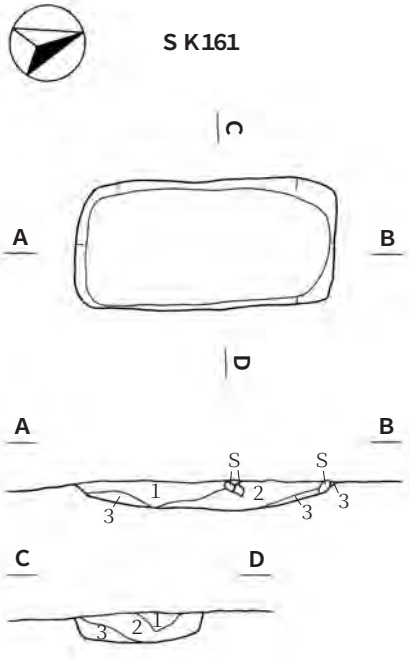
第101図　SK1・5・6・7・11・45・98



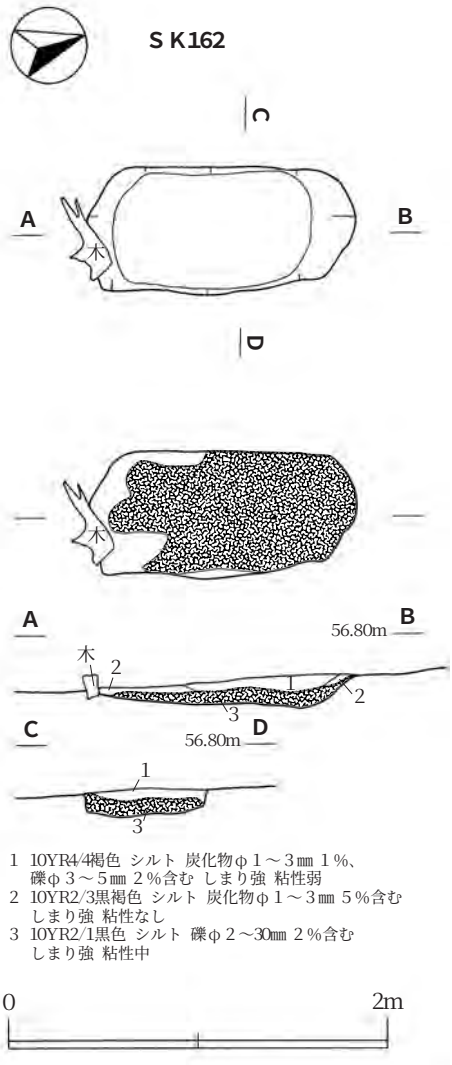
1　7.5YR6/6橙色　シルト　炭化物１%含む
　しまり中　粘性中
2　10YR4/4褐色　シルト　焼土１%混じる
　炭化物１%含む　しまり中　粘性中
3　10YR4/3にぶい黄褐色　シルト　10YR5/6黄褐色15%、
　焼土３%混じる　炭化物８%含む　しまり中　粘性中
4　10YR4/4褐色　シルト　炭化物３%含む
　しまり中　粘性中
5　10YR3/3暗褐色　シルト　炭化物１%含む
　しまり中　粘性中



1　10YR4/4褐色　シルト　しまり強　粘性強

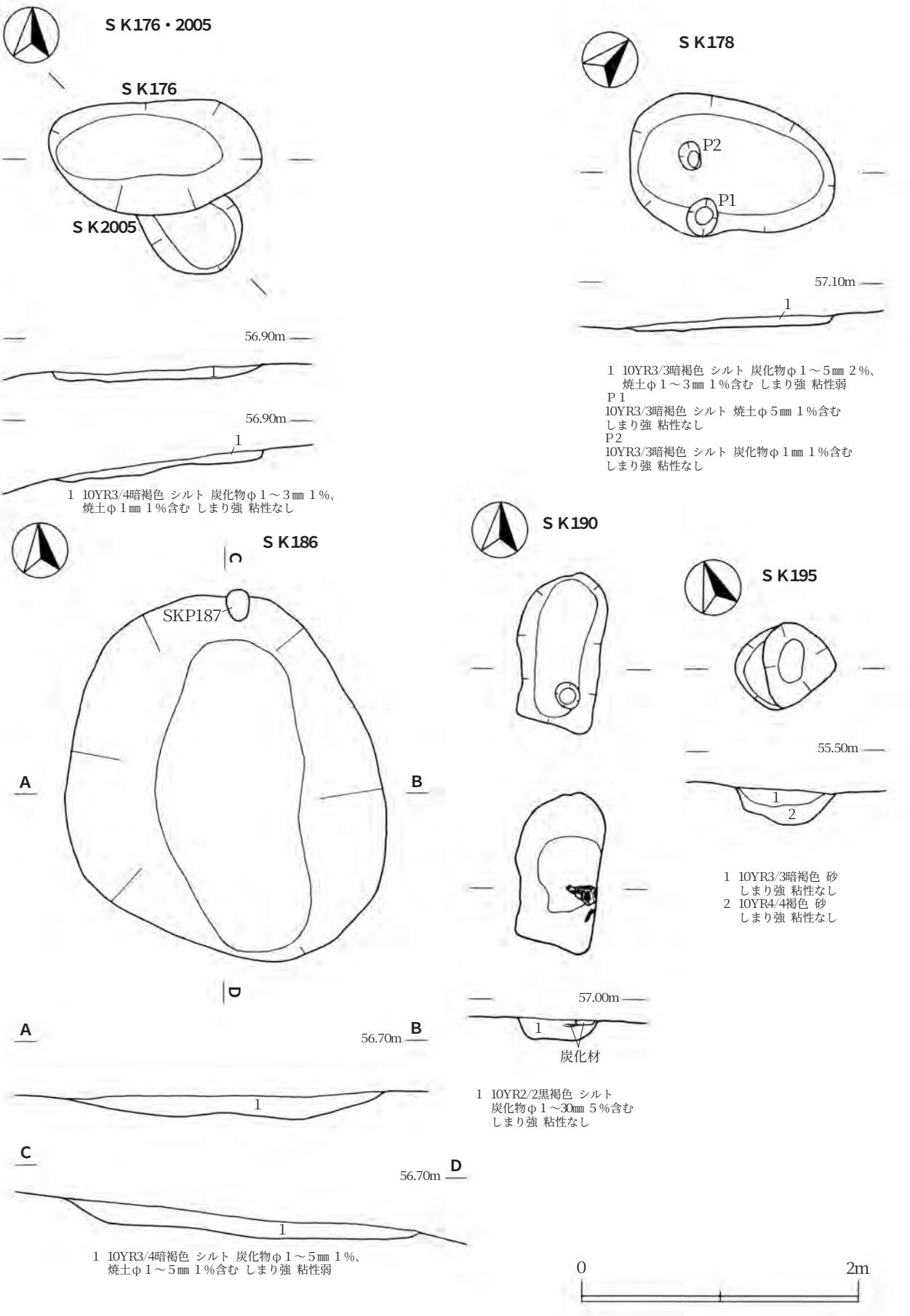


1　10YR3/3暗褐色　シルト　炭化物φ１㎜ １%、
　焼土φ３㎜ １%含む　しまり強　粘性なし
2　7.5YR4/3褐色　シルト　焼土φ１～５㎜15%、
　礫φ２～20㎜ ２%含む　しまり強　粘性弱
3　10YR2/1黒色　シルト　礫φ１～５㎜ ２%含む
　しまり強　粘性弱

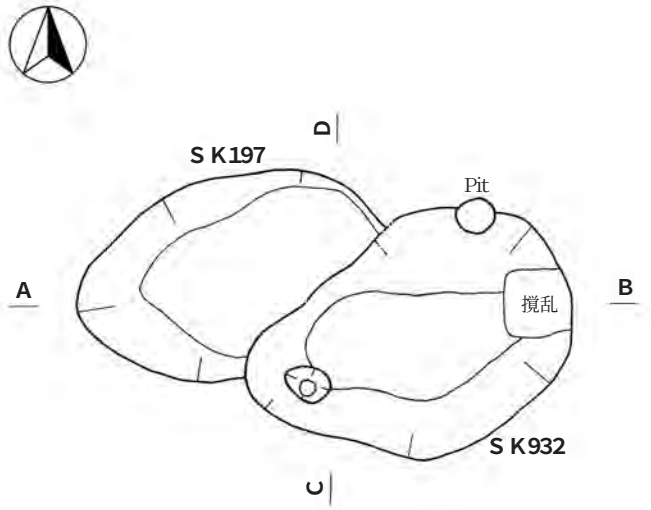


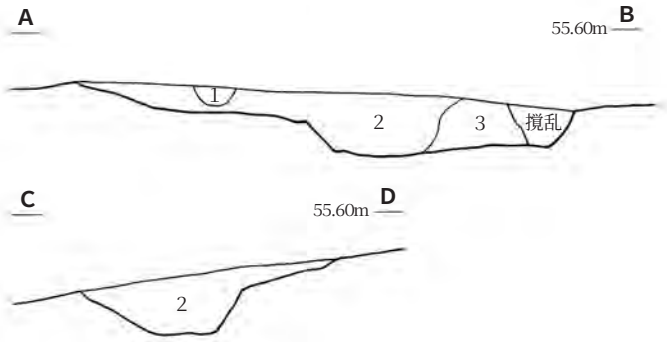
1　10YR4/4褐色　シルト　炭化物φ１～３㎜ １%、
　礫φ３～５㎜ ２%含む　しまり強　粘性弱
2　10YR2/3黒褐色　シルト　炭化物φ１～３㎜ ５%含む
　しまり強　粘性なし
3　10YR2/1黒色　シルト　礫φ２～30㎜ ２%含む
　しまり強　粘性中

第102図　S K136・137・140・148・161・162

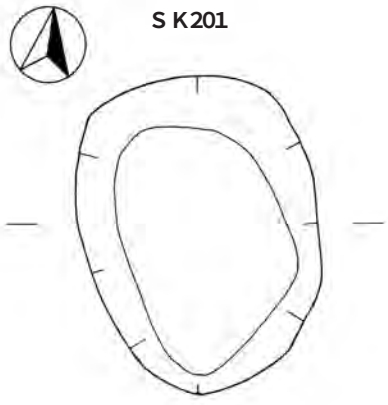


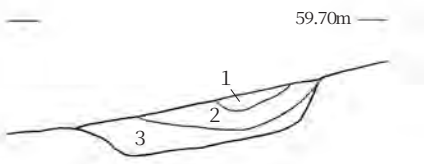
第103図　SK176・178・186・190・195・2005



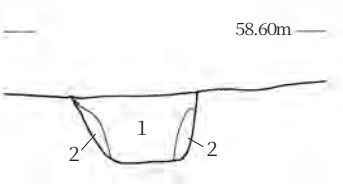


1　7.5YR4/4褐色　シルト　炭化物１㎜ １％含む
　しまり強 粘性弱
2　10YR3/4暗褐色　シルト　炭化物φ１～３㎜ １％、
　焼土φ１～５㎜ １％、礫φ３～20㎜ １％含む しまり強 粘性なし
3　10YR4/4褐色　シルト　地山20%混じる 炭化物φ１～３㎜ １％、
　焼土φ１～５㎜ １％含む しまり強 粘性弱

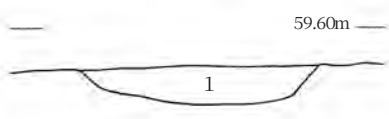




1　10YR3/4暗褐色　シルト　焼土φ５～10㎜ 10%含む
　しまり中 粘性中
2　10YR2/3黒褐色　シルト　焼土20%混じる
　しまり弱 粘性弱
3　10YR4/4褐色　シルト　しまり強 粘性中



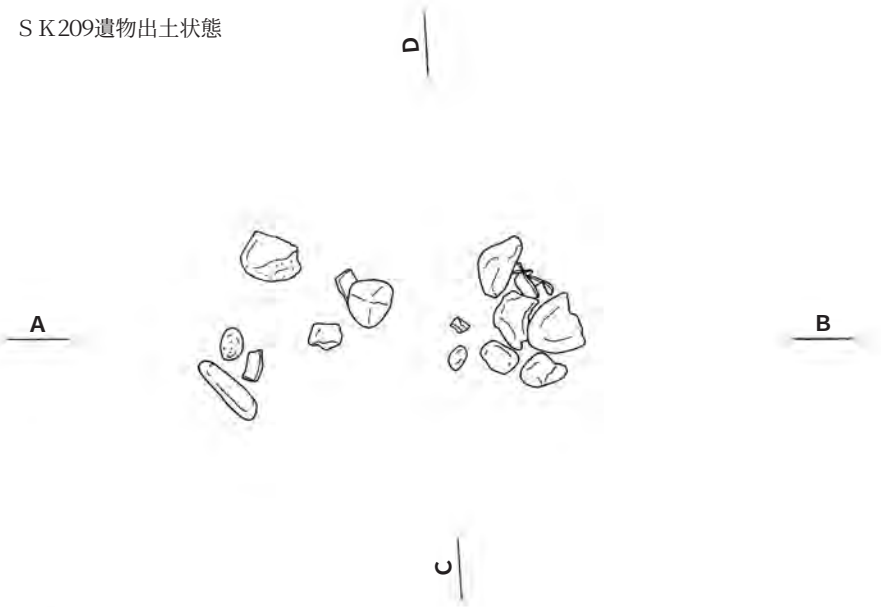
1　10YR3/3暗褐色　シルト　炭化物φ１～３㎜ 含む
　しまり中 粘性中
2　7.5YR4/6褐色　シルト　しまり中 粘性中

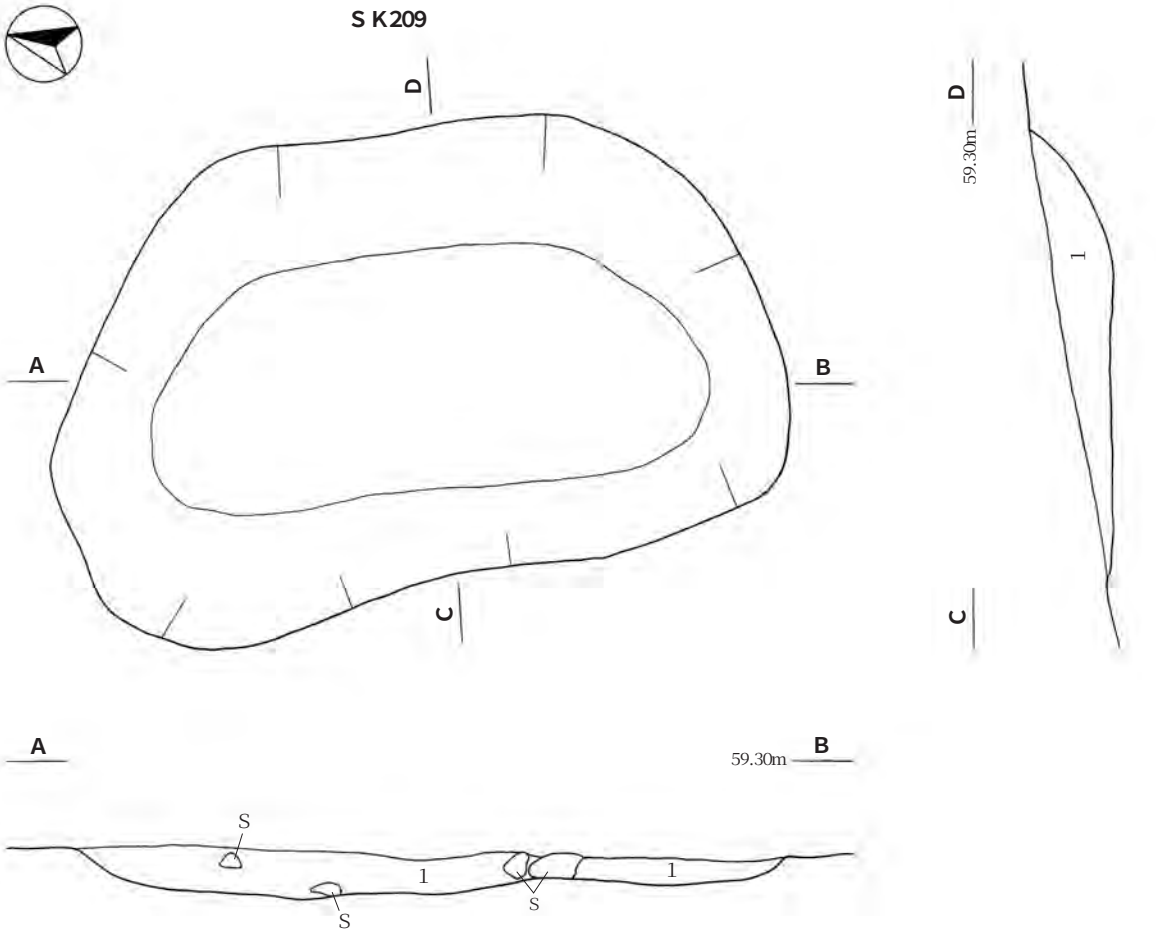


1　10YR3/3暗褐色　シルト　炭化物φ１～２㎜ １％含む
　しまり弱 粘性中

第104図　S K197・201・205・206・932

ＳＫ209遺物出土状態

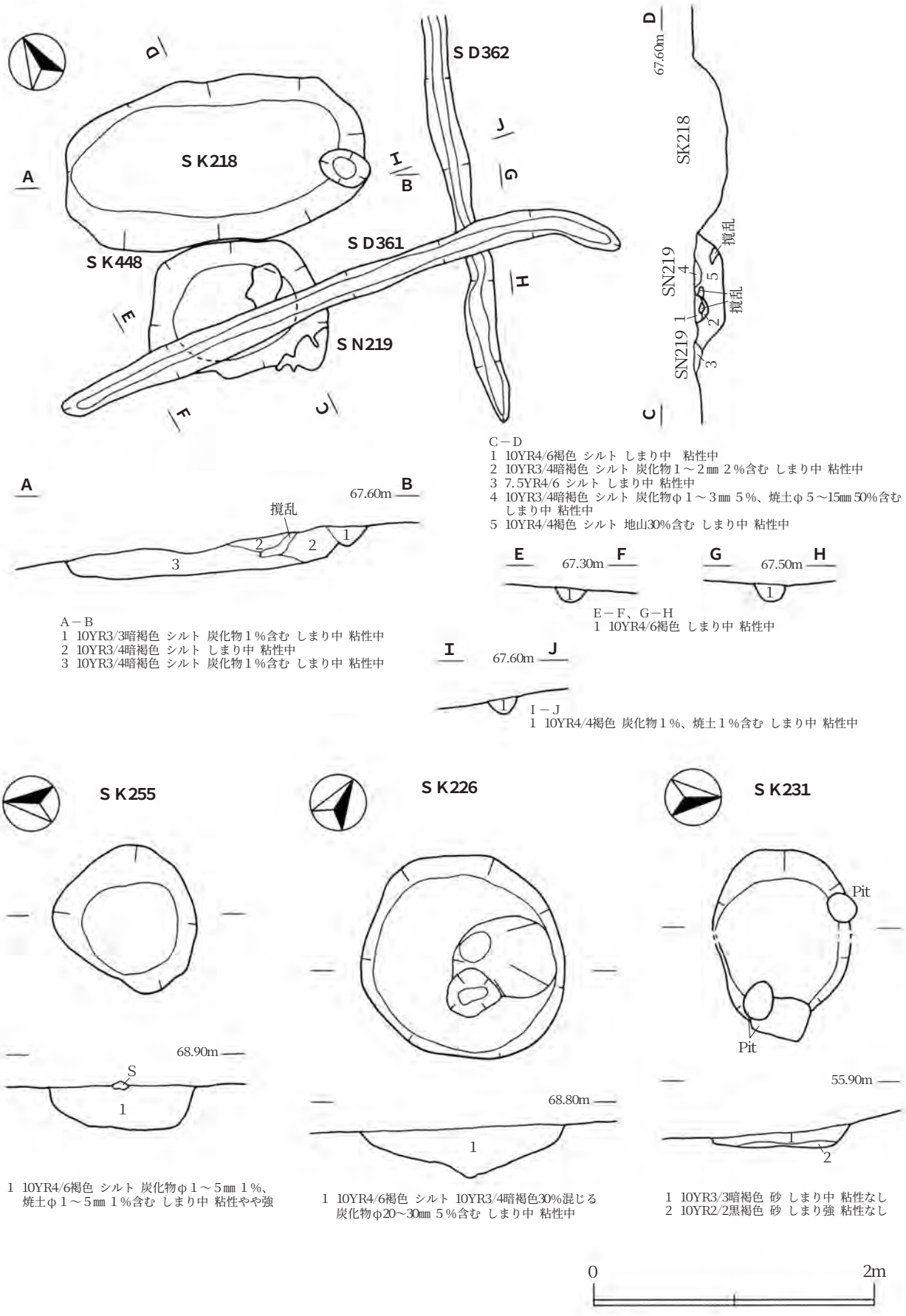




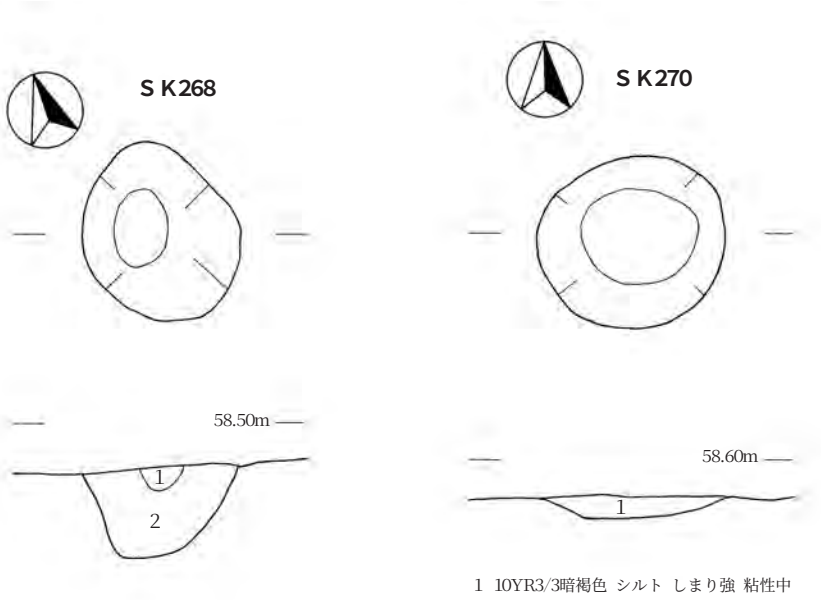
1　10YR4/3にぶい黄褐色　シルト　しまり中　粘性中

0　1m

第105図　ＳＫ209

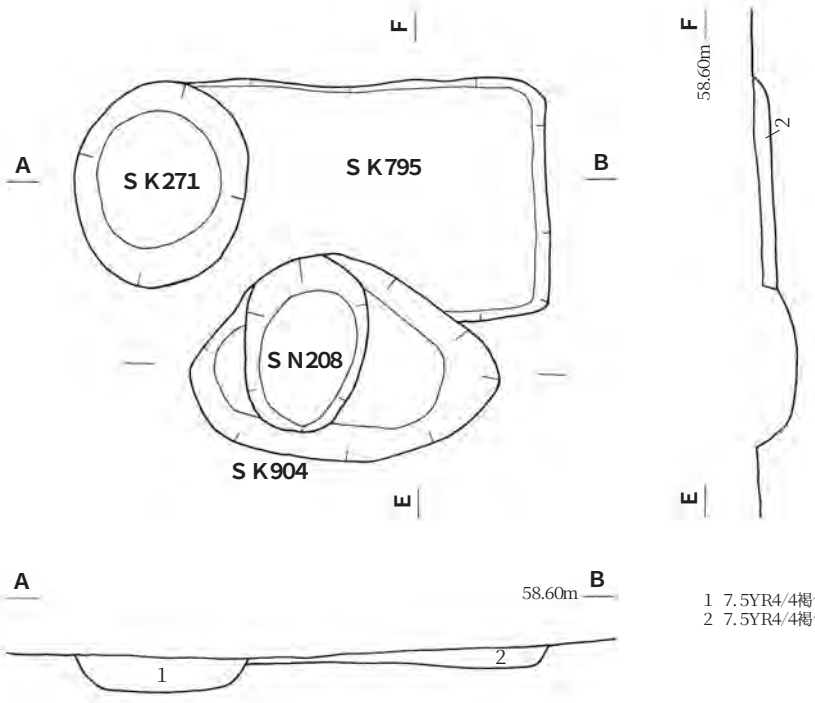


第106図　ＳＤ361・362、ＳＫ218・226・231・255・448、ＳＮ219



1 10YR3/3暗褐色 シルト 炭化物φ1㎜ 1%含む
しまり強 粘性なし
2 7.5YR4/6褐色 シルト しまり中 粘性中

1 10YR3/3暗褐色 シルト しまり強 粘性中

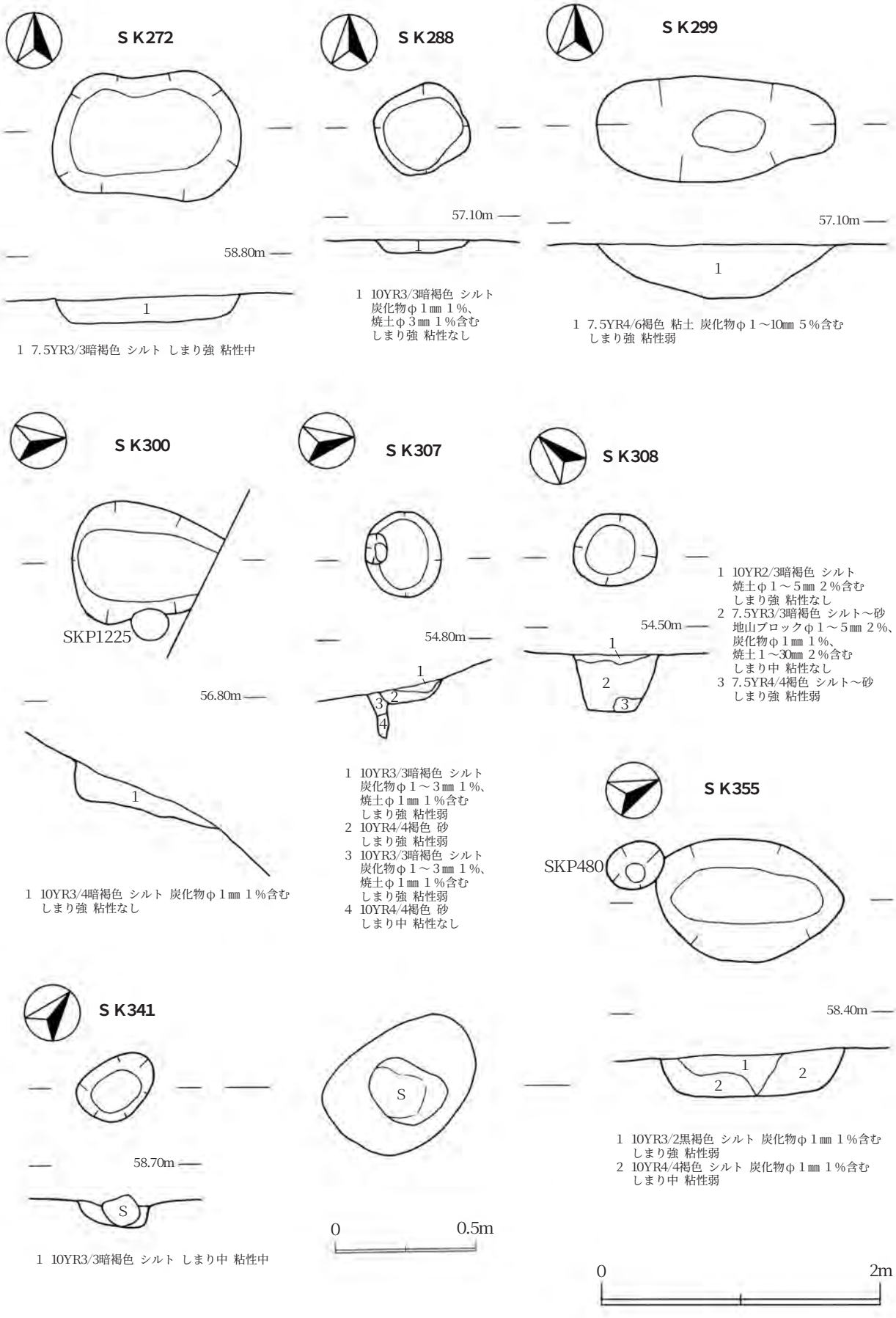


1 7.5YR4/4褐色 シルト しまり強 粘性弱
2 7.5YR4/4褐色 シルト しまり強 粘性弱
（SK271覆土と酷似）

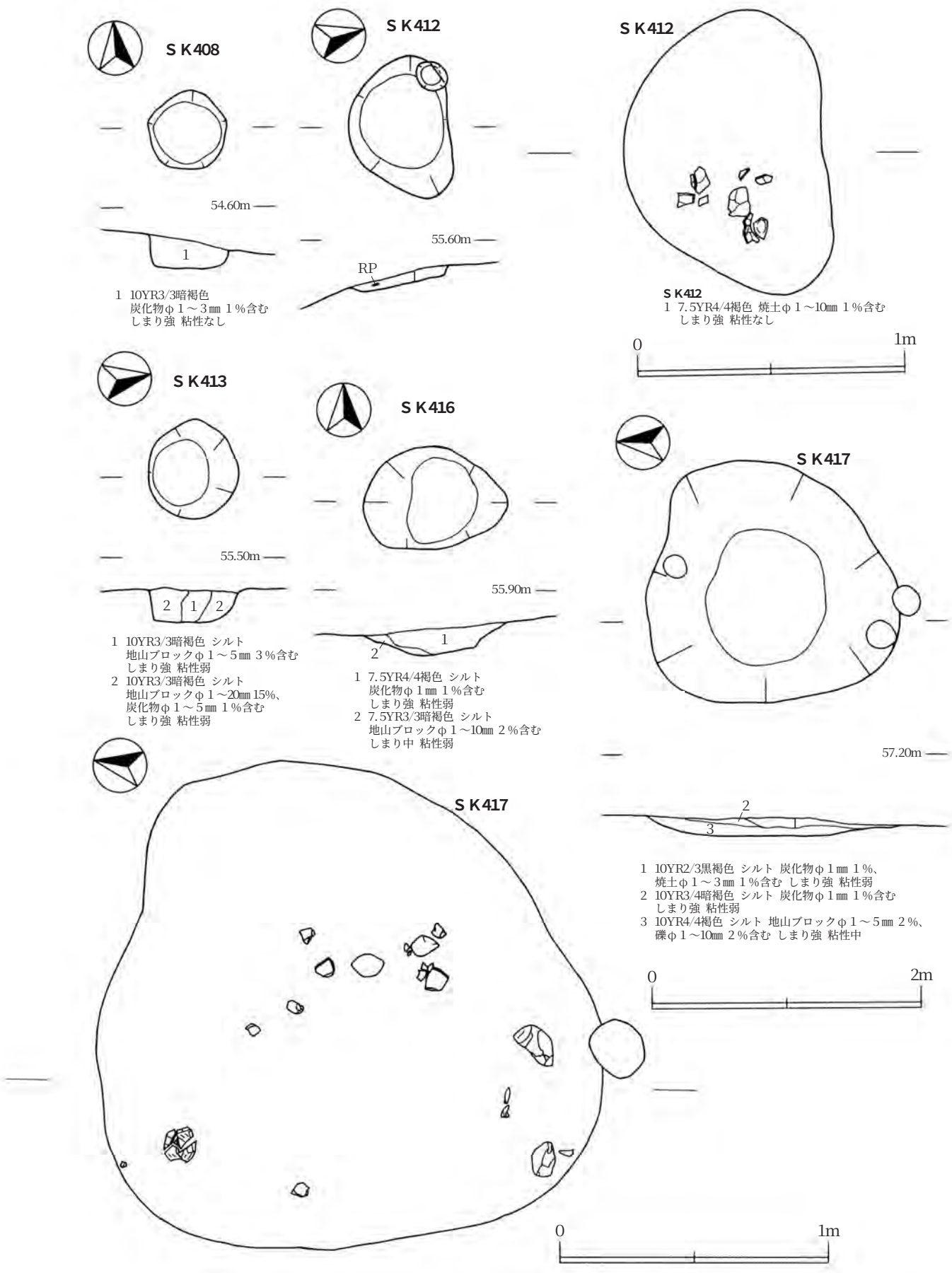
※SK904は第116図に詳細図あり

0 2m

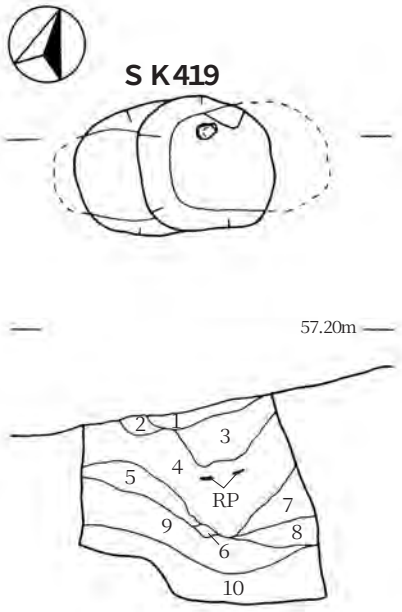
第107図　SK268・270・271・795・904、SN208



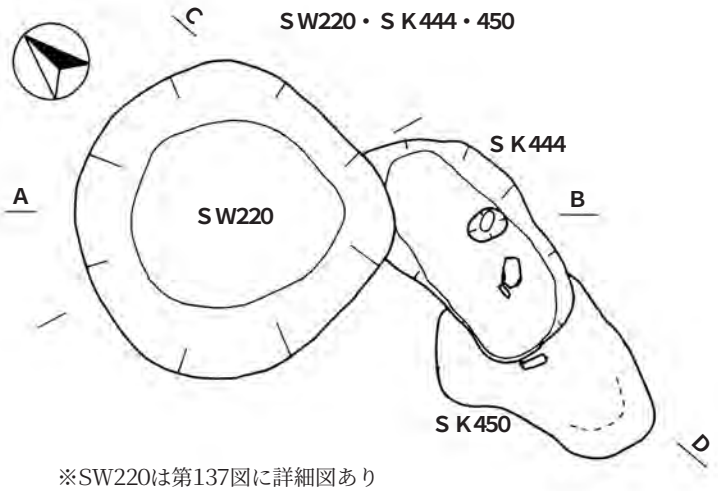
第108図　SK272・288・299・300・307・308・341・355



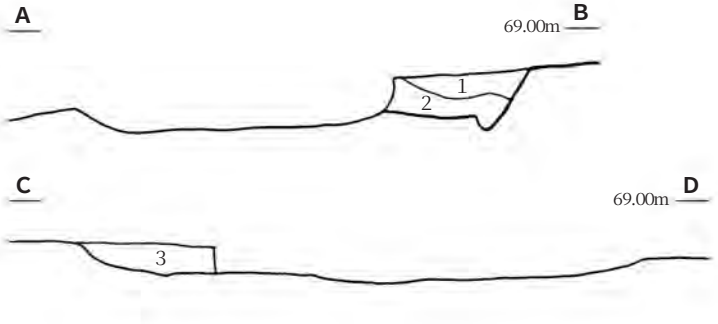
第109図　S K408・412・413・416・417



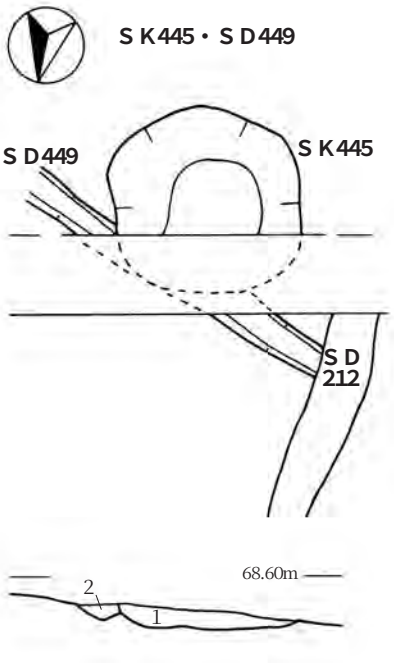
1　10YR3/3暗褐色　シルト　炭化物φ１～３㎜　１%含む
　しまり中　粘性弱
2　10YR2/3黒褐色　シルト　地山ブロックφ１～３㎜　１%、
　炭化物φ１㎜　１%含む　しまり中　粘性弱
3　7.5YR4/4褐色　シルト　焼土φ１～３㎜　２%、
　炭化物φ１～５㎜　１%含む　しまり強　粘性なし
4　10YR4/4褐色　シルト　地山φ１～３㎜　１%含む
　しまり弱　粘性なし
5　7.5YR4/4褐色　シルト　7.5YR4/6褐色20%混じる
　地山ブロックφ１～20㎜　１%、炭化物φ１㎜　１%、
　焼土φ１～10㎜　１%含む　しまり弱　粘性なし
6　10YR3/3暗褐色シルト＋10YR1.7/1シルト
　しまりなし　粘性弱
7　7.5YR3/4暗褐色　シルト　炭化物φ５㎜　１%含む
　しまりなし　粘性なし
8　10YR4/4褐色　シルト　炭化物φ１～３㎜　１%、
　焼土φ１～３㎜　１%含む　しまりなし　粘性弱
9　10YR4/4褐色　シルト　地山ブロックφ５～20㎜　２%、
　炭化物φ１～５㎜　１%含む　しまりなし　粘性弱
10　7.5YR4/4褐色　シルト　炭化物φ１～５㎜　１%、
　焼土φ１㎜　１%含む　しまりなし　粘性弱



※SW220は第137図に詳細図あり

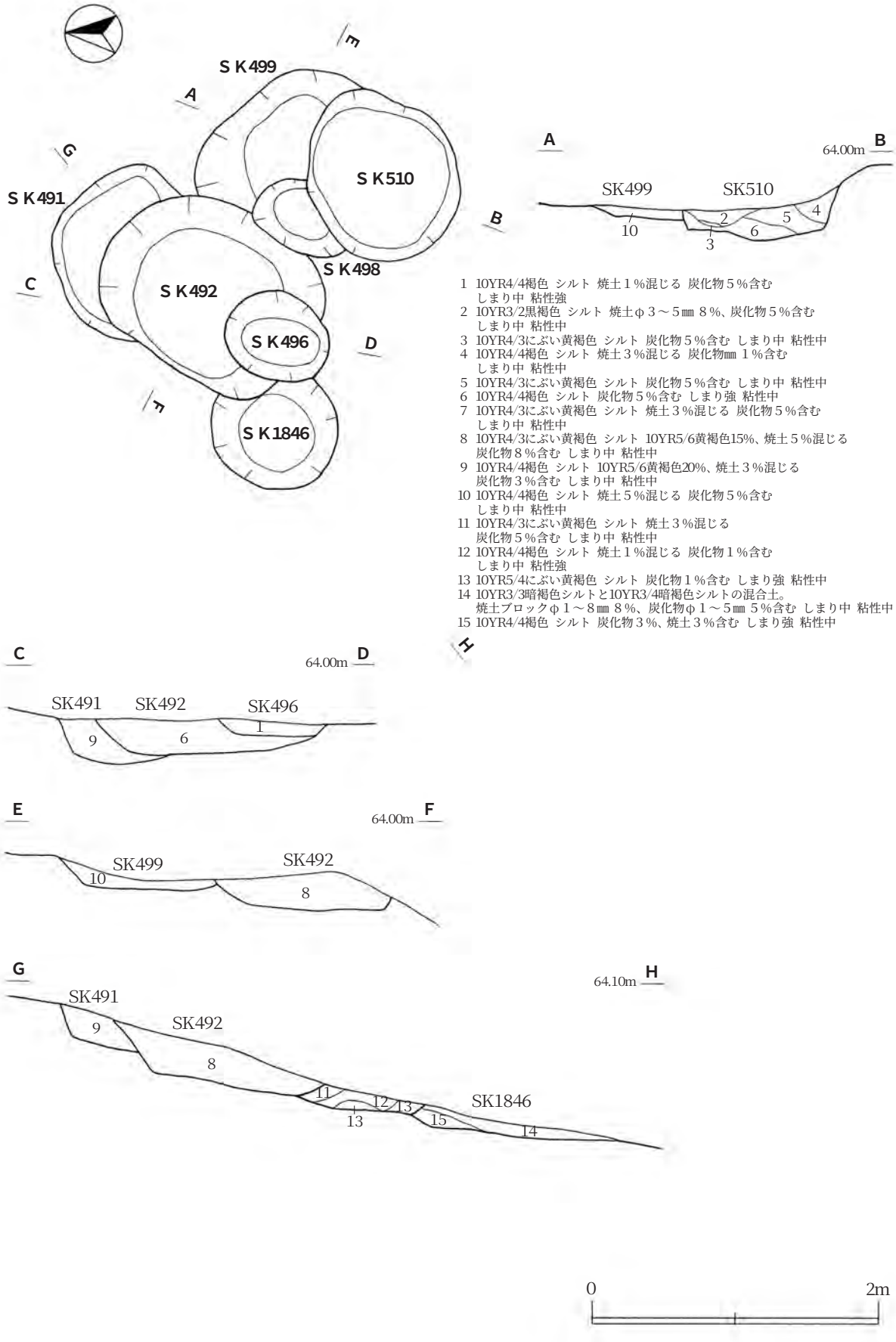


1　10YR4/4褐色　シルト　しまり強　粘性中
2　10YR4/4褐色　シルト　焼土１%混じる　炭化物φ１～20㎜15%含む　しまり強　粘性中
3　10YR4/6褐色　シルト　炭化物φ１～10㎜　５%含む　しまり強　粘性中



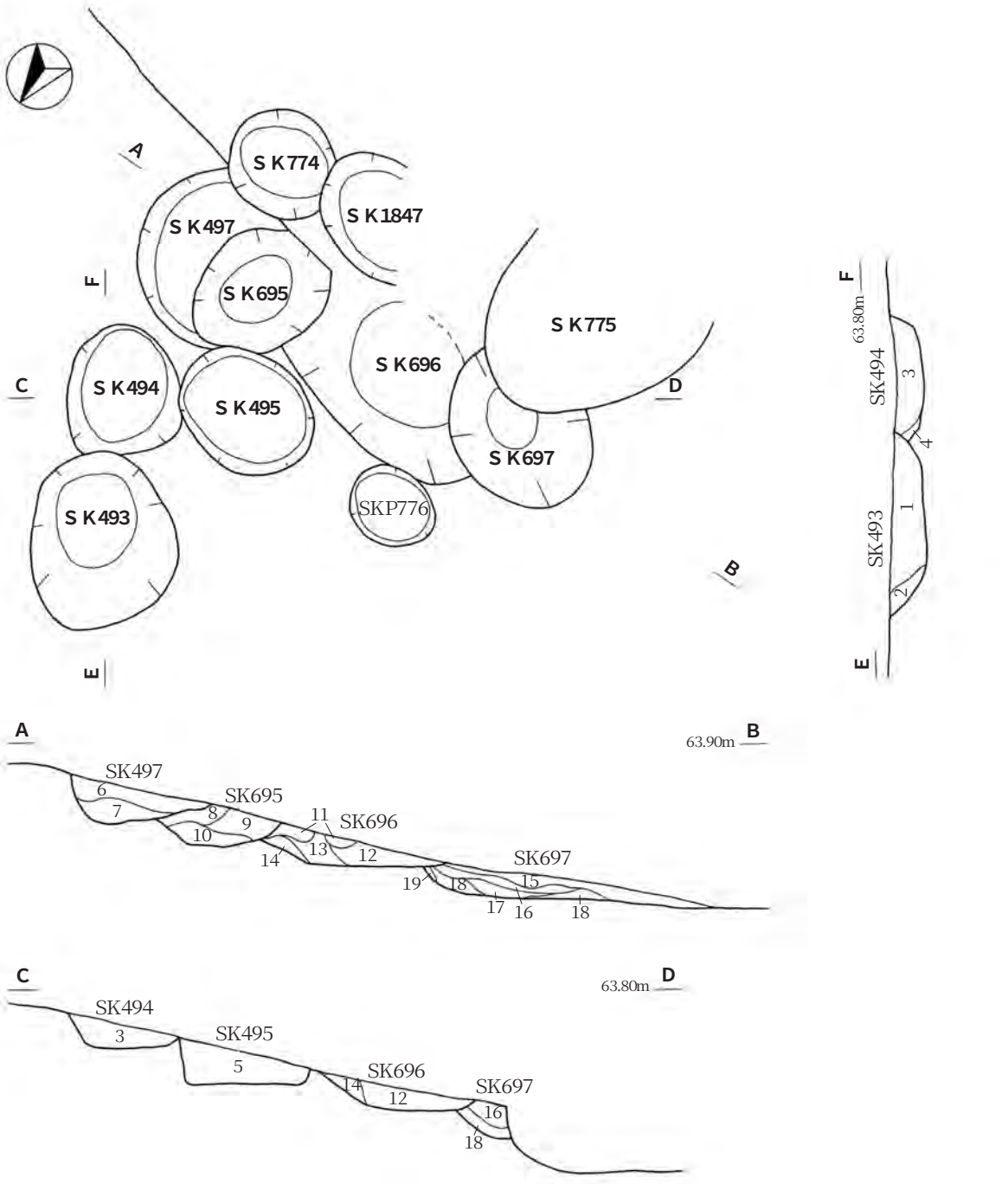
1　10YR3/4暗褐色　シルト　地山10%混じる
　炭化物１%含む　しまり中　粘性中
2　10YR3/4暗褐色　シルト　地山５%混じる
　炭化物１%含む　しまり中　粘性弱

第110図　ＳＤ449、ＳＫ419・444・445・450、ＳＷ220



1 10YR4/4褐色 シルト 焼土１％混じる 炭化物５％含む しまり中 粘性強
2 10YR3/2黒褐色 シルト 焼土φ３～５㎜ ８％、炭化物５％含む しまり中 粘性中
3 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 炭化物５％含む しまり中 粘性中
4 10YR4/4褐色 シルト 焼土３％混じる 炭化物㎜ １％含む しまり中 粘性中
5 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 炭化物５％含む しまり中 粘性中
6 10YR4/4褐色 シルト 炭化物５％含む しまり強 粘性中
7 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 焼土３％混じる 炭化物５％含む しまり中 粘性中
8 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 10YR5/6黄褐色15%、焼土５％混じる 炭化物８％含む しまり中 粘性中
9 10YR4/4褐色 シルト 10YR5/6黄褐色20%、焼土３％混じる 炭化物３％含む しまり中 粘性中
10 10YR4/4褐色 シルト 焼土５％混じる 炭化物５％含む しまり中 粘性中
11 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 焼土３％混じる 炭化物５％含む しまり中 粘性中
12 10YR4/4褐色 シルト 焼土１％混じる 炭化物１％含む しまり中 粘性強
13 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト 炭化物１％含む しまり強 粘性中
14 10YR3/3暗褐色シルトと10YR3/4暗褐色シルトの混合土。焼土ブロックφ１～８㎜ ８％、炭化物φ１～５㎜ ５％含む しまり中 粘性中
15 10YR4/4褐色 シルト 炭化物３％、焼土３％含む しまり強 粘性中

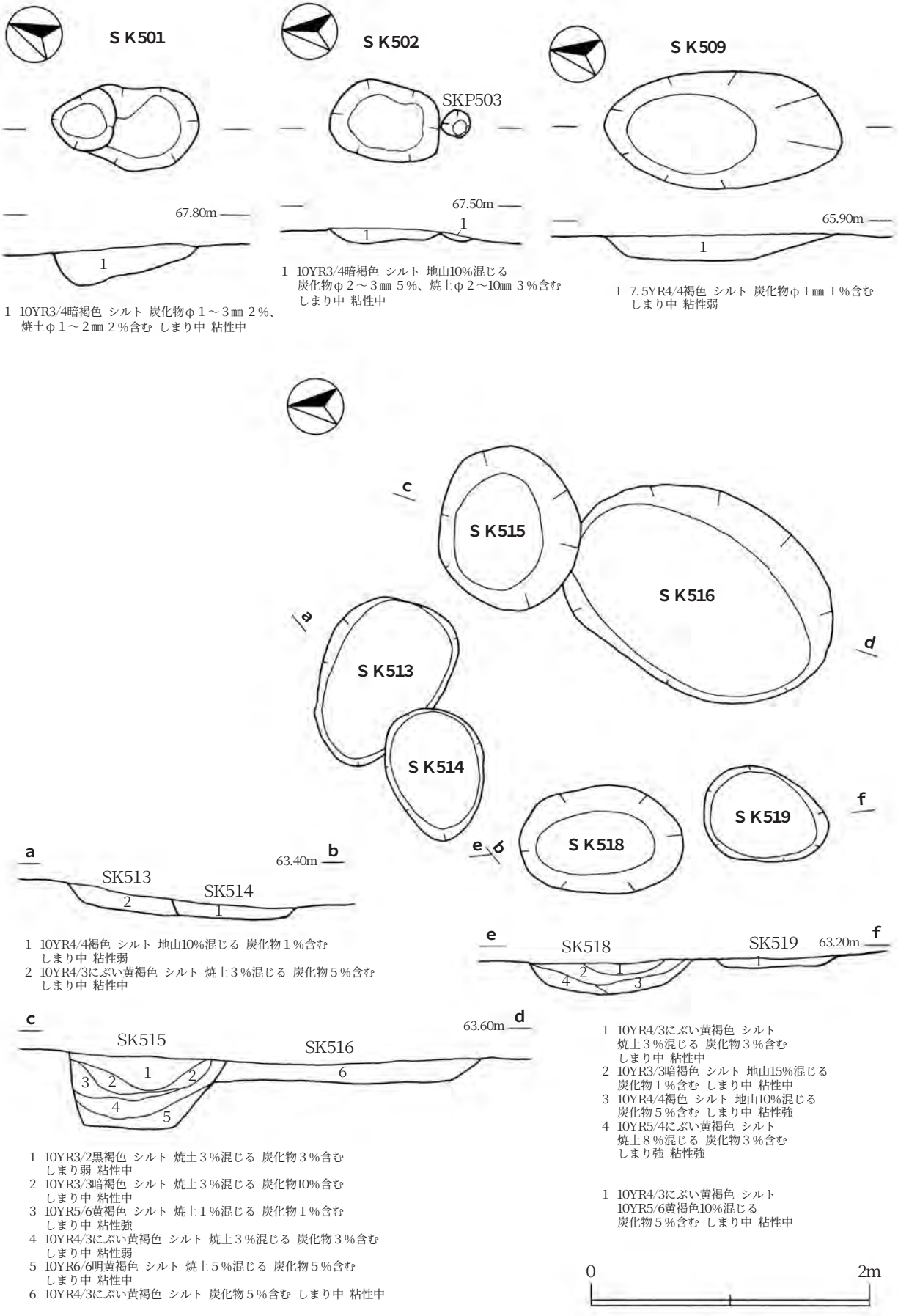
第111図　SK491・492・496・498・499・510・1846



1　10YR4/3にぶい黄褐色　シルト　焼土１%混じる　炭化物３%含む　しまり強　粘性弱
2　10YR4/3にぶい黄褐色　シルト　焼土１%混じる　炭化物５%含む　しまり中　粘性弱
3　10YR4/4褐色　シルト　焼土５%混じる　炭化物３%含む　しまり中　粘性弱
4　10YR5/6黄褐色　シルト　炭化物３%含む　しまり中　粘性中
5　10YR4/3にぶい黄褐色　シルト　炭化物５%含む　しまり中　粘性中
6　10YR4/3にぶい黄褐色　シルト　焼土３%混じる　炭化物５%含む　しまり中　粘性中
7　10YR4/4褐色　シルト　炭化物５%含む　しまり中　粘性中
8　10YR5/4にぶい黄褐色　シルト　炭化物１%含む　しまり強　粘性強
9　10YR3/4暗褐色　シルト　地山３%混じる　炭化物３%含む　しまり中　粘性中
10　10YR4/3にぶい黄褐色　シルト　地山１%混じる　炭化物１%含む　しまり中　粘性弱
11　10YR5/4にぶい黄褐色　シルト　焼土８%混じる　炭化物１%含む　しまり強　粘性強
12　10YR4/3にぶい黄褐色　シルト　地山30%混じる　炭化物８%含む　しまり中　粘性中
13　10YR3/2黒褐色　シルト　焼土１%混じる　炭化物１%含む　しまり弱　粘性弱
14　10YR4/3にぶい黄褐色　シルト　炭化物８%含む　しまり中　粘性中
15　10YR4/4褐色　シルト　炭化物３%含む　しまり中　粘性強
16　10YR4/3にぶい黄褐色　シルト　炭化物３%含む　しまり中　粘性中
17　10YR4/4褐色　シルト　炭化物３%含む　しまり中　粘性中
18　10YR4/3にぶい黄褐色　シルト　炭化物３%含む　しまり中　粘性中
19　10YR5/4にぶい黄褐色　シルト　焼土８%混じる　炭化物３%含む　しまり強　粘性中

0　2m

第112図　ＳＫ493・494・495・497・695・696・697・774・1847



1 10YR3/4暗褐色 シルト 炭化物φ1～3㎜ 2%、
焼土φ1～2㎜ 2%含む しまり中 粘性中

1 10YR3/4暗褐色 シルト 地山10%混じる
炭化物φ2～3㎜ 5%、焼土φ2～10㎜ 3%含む
しまり中 粘性中

1 7.5YR4/4褐色 シルト 炭化物φ1㎜ 1%含む
しまり中 粘性弱

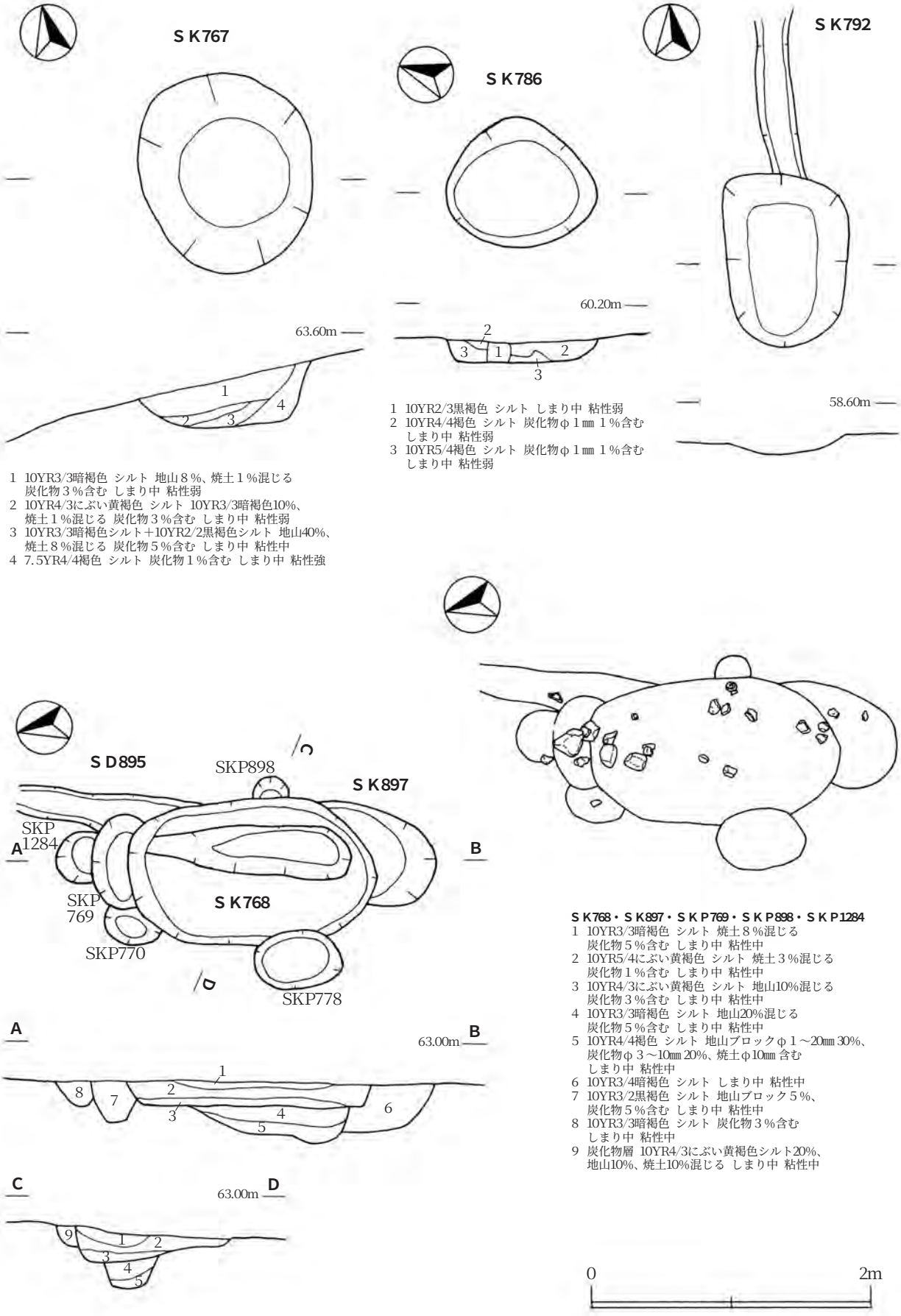
1 10YR4/4褐色 シルト 地山10%混じる 炭化物1%含む
しまり中 粘性弱
2 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 焼土3%混じる 炭化物5%含む
しまり中 粘性中

1 10YR3/2黒褐色 シルト 焼土3%混じる 炭化物3%含む
しまり弱 粘性中
2 10YR3/3暗褐色 シルト 焼土3%混じる 炭化物10%含む
しまり中 粘性中
3 10YR5/6黄褐色 シルト 焼土1%混じる 炭化物1%含む
しまり中 粘性強
4 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 焼土3%混じる 炭化物3%含む
しまり中 粘性弱
5 10YR6/6明黄褐色 シルト 焼土5%混じる 炭化物5%含む
しまり中 粘性中
6 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 炭化物5%含む しまり中 粘性中

1 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト
焼土3%混じる 炭化物3%含む
しまり中 粘性中
2 10YR3/3暗褐色 シルト 地山15%混じる
炭化物1%含む しまり中 粘性中
3 10YR4/4褐色 シルト 地山10%混じる
炭化物5%含む しまり中 粘性強
4 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト
焼土8%混じる 炭化物3%含む
しまり強 粘性強

1 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト
10YR5/6黄褐色10%混じる
炭化物5%含む しまり中 粘性中

第113図　S K501・502・509・513・514・515・516・518・519

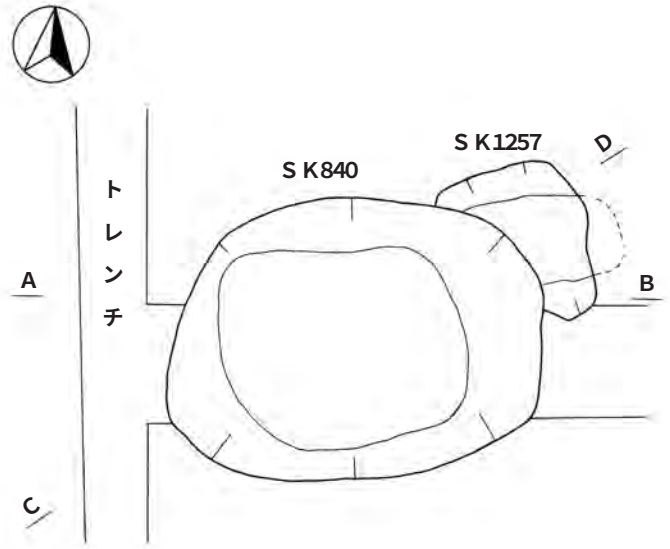


1　10YR3/3暗褐色　シルト　地山８％、焼土１％混じる
　炭化物３％含む　しまり中　粘性弱
2　10YR4/3にぶい黄褐色　シルト　10YR3/3暗褐色10%、
　焼土１％混じる　炭化物３％含む　しまり中　粘性弱
3　10YR3/3暗褐色シルト＋10YR2/2黒褐色シルト　地山40%、
　焼土８％混じる　炭化物５％含む　しまり中　粘性中
4　7.5YR4/4褐色　シルト　炭化物１％含む　しまり中　粘性強

1　10YR2/3黒褐色　シルト　しまり中　粘性弱
2　10YR4/4褐色　シルト　炭化物φ１㎜　１％含む
　しまり中　粘性弱
3　10YR5/4褐色　シルト　炭化物φ１㎜　１％含む
　しまり中　粘性弱

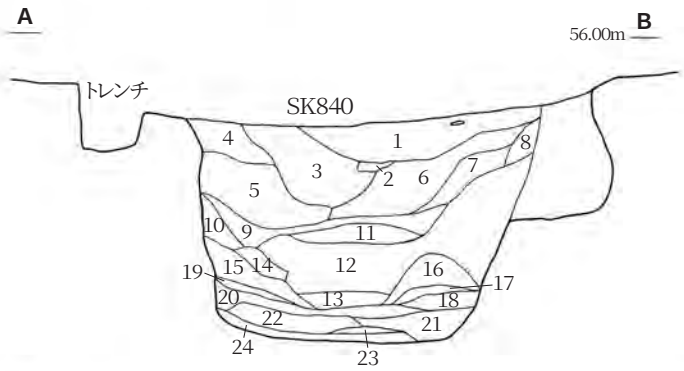
ＳＫ768・ＳＫ897・ＳＫＰ769・ＳＫＰ898・ＳＫＰ1284
1　10YR3/3暗褐色　シルト　焼土８％混じる
　炭化物５％含む　しまり中　粘性中
2　10YR5/4にぶい黄褐色　シルト　焼土３％混じる
　炭化物１％含む　しまり中　粘性中
3　10YR4/3にぶい黄褐色　シルト　地山10%混じる
　炭化物３％含む　しまり中　粘性中
4　10YR3/3暗褐色　シルト　地山20%混じる
　炭化物５％含む　しまり中　粘性中
5　10YR4/4褐色　シルト　地山ブロックφ１～20㎜30%、
　炭化物φ３～10㎜20%、焼土φ10㎜含む
　しまり中　粘性中
6　10YR3/4暗褐色　シルト　しまり中　粘性中
7　10YR3/2黒褐色　シルト　地山ブロック５%、
　炭化物５％含む　しまり中　粘性中
8　10YR3/3暗褐色　シルト　炭化物３％含む
　しまり中　粘性中
9　炭化物層　10YR4/3にぶい黄褐色シルト20%、
　地山10%、焼土10%混じる　しまり中　粘性中

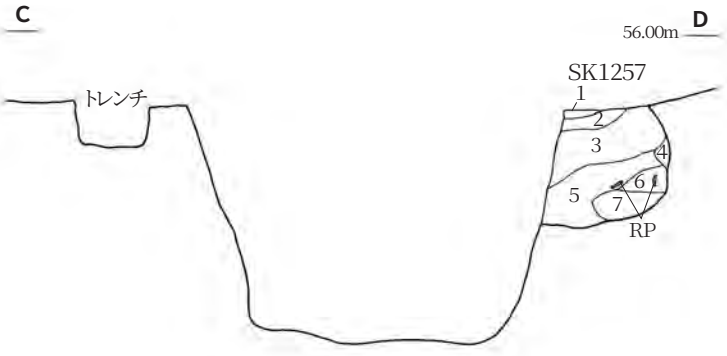
第114図　ＳＤ895、ＳＫ767・768・786・792・897



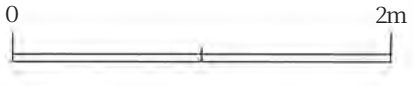
1 10YR2/3黒褐色 シルト 地山ブロックφ1㎜ 3%、
炭化物φ1㎜ 1%含む しまり強 粘性弱
2 10YR2/2黒褐色 シルト 地山ブロックφ1㎜ 1%含む
しまり弱 粘性弱
3 10YR3/3暗褐色 シルト 炭化物φ1㎜ 1%含む
しまり中 粘性弱
4 7.5YR4/4褐色 シルト しまり強 粘性なし
5 7.5YR4/4褐色シルト 地山ブロックφ1～3㎜ 1%含む
しまり弱 粘性弱
6 10YR3/3暗褐色 シルト 地山ブロックφ1～5㎜ 1%、
炭化物φ1㎜ 1%含む しまり中 粘性弱
7 10YR3/4暗褐色 シルト 地山ブロックφ1㎜ 1%、
炭化物φ1㎜ 1%、焼土φ1～3㎜ 1%含む
しまり中 粘性弱
8 7.5YR4/4褐色 シルト
地山ブロックφ1～3㎜ 1%含む
しまり強 粘性弱
9 10YR4/2灰黄褐色 シルト
地山ブロックφ1～5㎜ 1%含む
しまり弱 粘性弱
10 7.5YR4/4褐色 シルト しまり弱 粘性弱
11 10YR3/4暗褐色 シルト
地山ブロックφ1～3㎜ 1%含む
しまり弱 粘性弱
12 7.5YR4/6褐色 シルト
炭化物φ1～3㎜ 1%含む
しまり中 粘性なし
13 7.5YR4/6褐色 シルト～砂 しまり中 粘性弱
14 10YR5/8黄褐色 砂 しまり弱 粘性なし
15 10YR4/4褐色 シルト～砂 しまり弱 粘性なし
16 7.5YR4/3褐色 シルト しまり弱 粘性弱
17 10YR3/4暗褐色 シルト しまり弱 粘性弱
18 7.5YR4/6褐色 シルト 10YR5/8地山砂5%混じる
炭化物φ1～3㎜ 1%含む しまり強 粘性中
19 10YR4/4褐色 シルト～砂 しまり中 粘性弱
20 7.5YR4/6褐色 シルト 10YR5/8地山砂30%混じる
しまり弱 粘性弱

21 7.5YR4/4褐色 シルト～砂
地山ブロックφ1～3㎜ 1%含む しまり弱 粘性弱
22 7.5YR5/8明褐色 シルト 10YR5/8地山砂10%混じる
しまり強 粘性弱
23 7.5YR6/8橙色 砂 しまり強 粘性なし
24 10YR3/4暗褐色 シルト しまり強 粘性なし

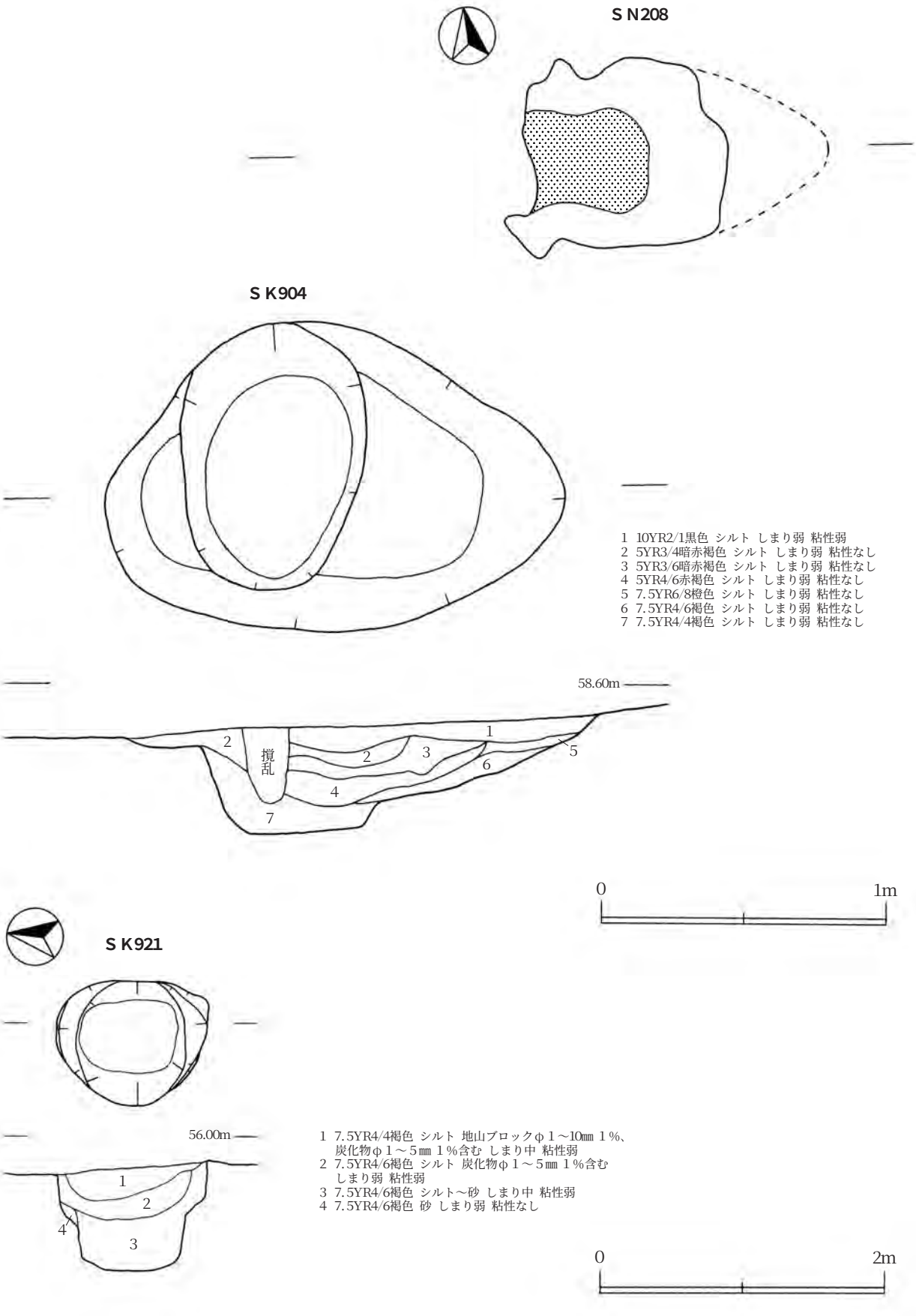




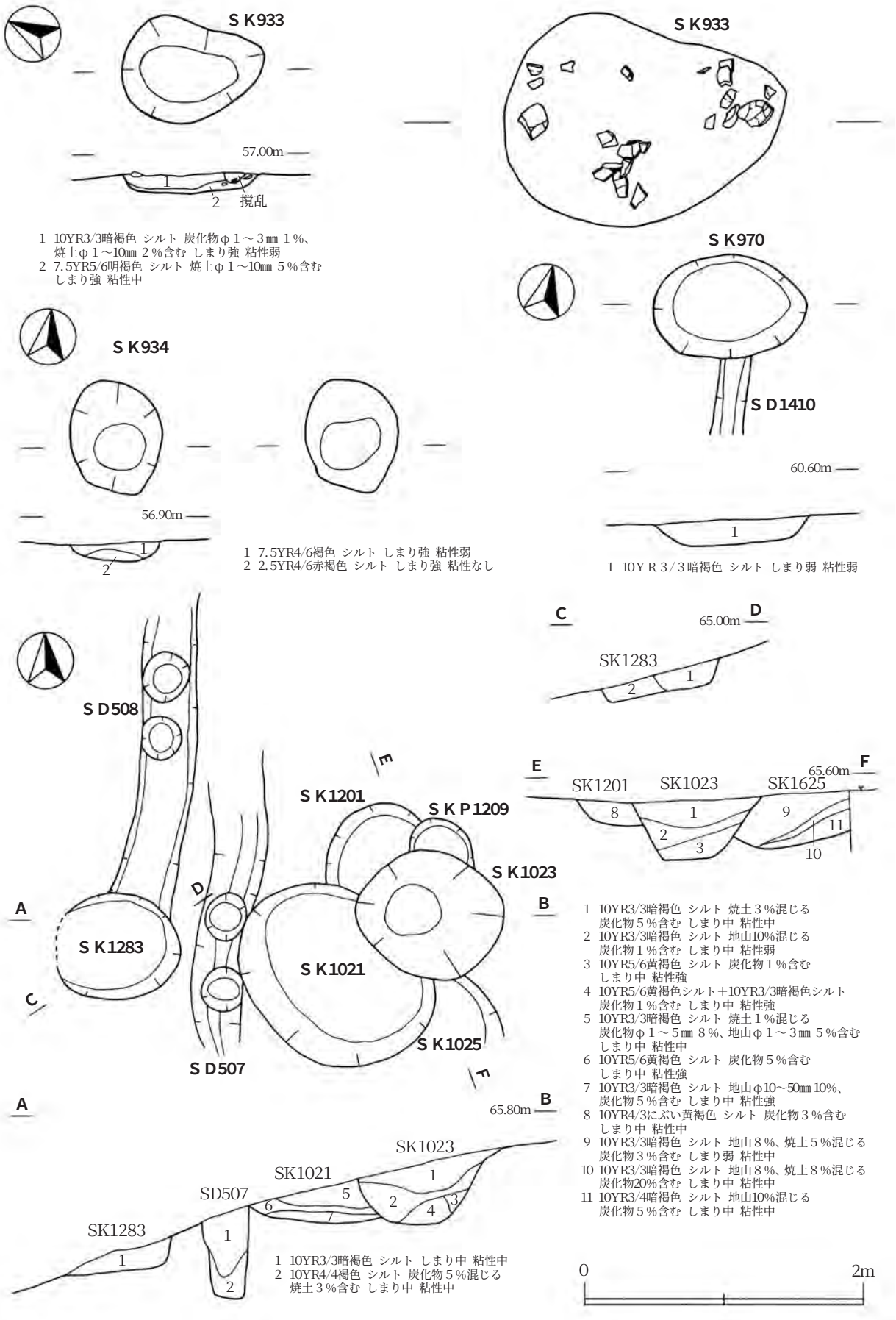
1 10YR3/4暗褐色 シルト 地山 φ1㎜ 1%、
炭化物φ1㎜ 1%含む しまり強 粘性なし
2 10YR4/4褐色 シルト 地山φ1㎜ 1%含む
しまり強 粘性弱
3 7.5YR4/4褐色 シルト
炭化物φ1～3㎜ 1%含む しまり中 粘性弱
4 7.5YR5/6 明褐色 シルト～粘土
しまり強 粘性強
5 7.5YR4/6褐色 シルト
炭化物φ1～5㎜ 1%含む しまり中 粘性なし
6 7.5YR4/6褐色 シルト しまり弱 粘性弱
7 7.5YR5/8明褐色 シルト
10YR5/8地山砂20%混じる しまり中 粘性なし



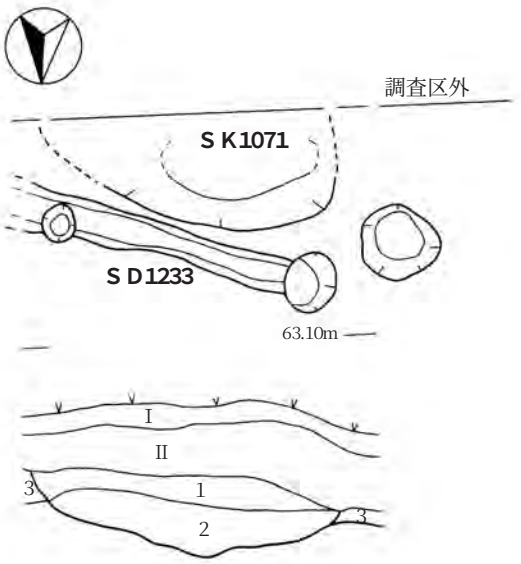
第115図　SK840・1257



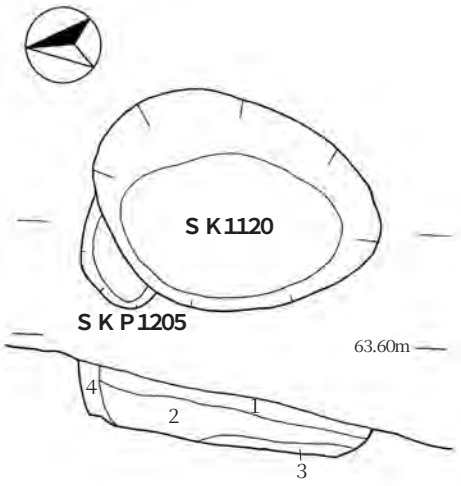
第116図　ＳＫ904・921、ＳＮ208



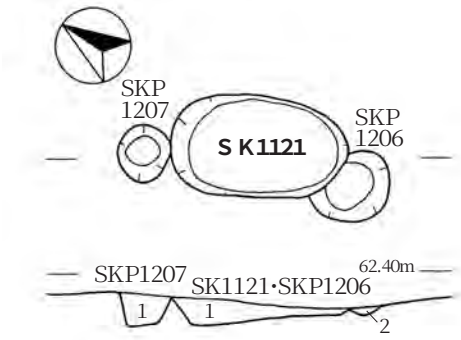
第117図　SK933・934・970・1021・1023・1025・1201・1209・1283



1　10YR3/3暗褐色　シルト
　しまりやや強　粘性中
2　10YR4/4褐色　シルト
　しまり中　粘性中
3　10YR3/3暗褐色　シルト
　黄褐色ブロックφ５～20㎜10%含む
　しまりやや強　粘性中
※１・２が覆土

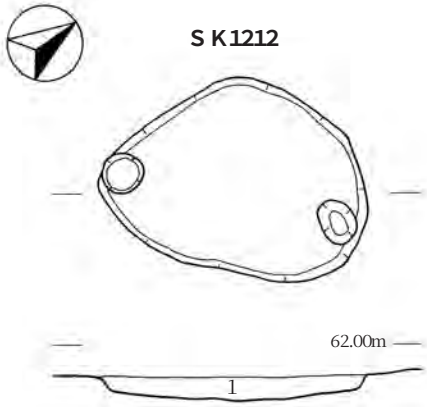


1　10YR2/3黒褐色　シルト　10YR3/2黒褐色40%混じる
　炭化物１%含む　しまり中　粘性中
2　10YR4/3にぶい黄褐色　シルト　焼土５%混じる
　炭化物３%含む　しまり中　粘性中
3　10YR3/3暗褐色　シルト　炭化物１%含む
　しまり中　粘性中
4　10YR4/3にぶい黄褐色　シルト　焼土１%混じる
　炭化物５%含む　しまり中　粘性中



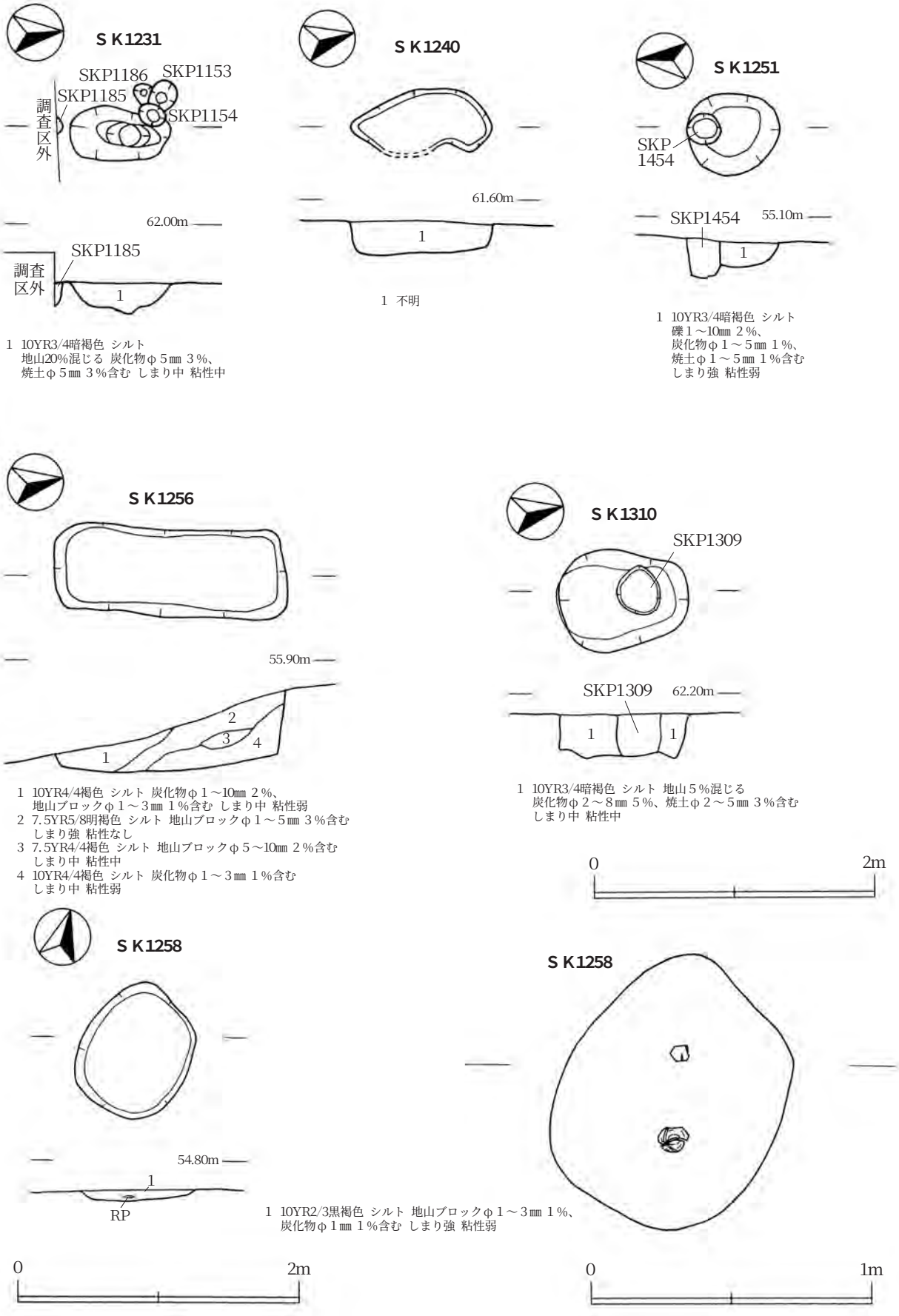
1　10YR4/3にぶい黄褐色　シルト　焼土１%混じる
　炭化物１%含む　しまり中　粘性中
2　10YR4/3にぶい黄褐色　シルト　焼土５%混じる
　炭化物５%含む　しまり中　粘性中

1　10YR4/3にぶい黄褐色　シルト　焼土１%混じる
　炭化物５%含む　しまり中　粘性中

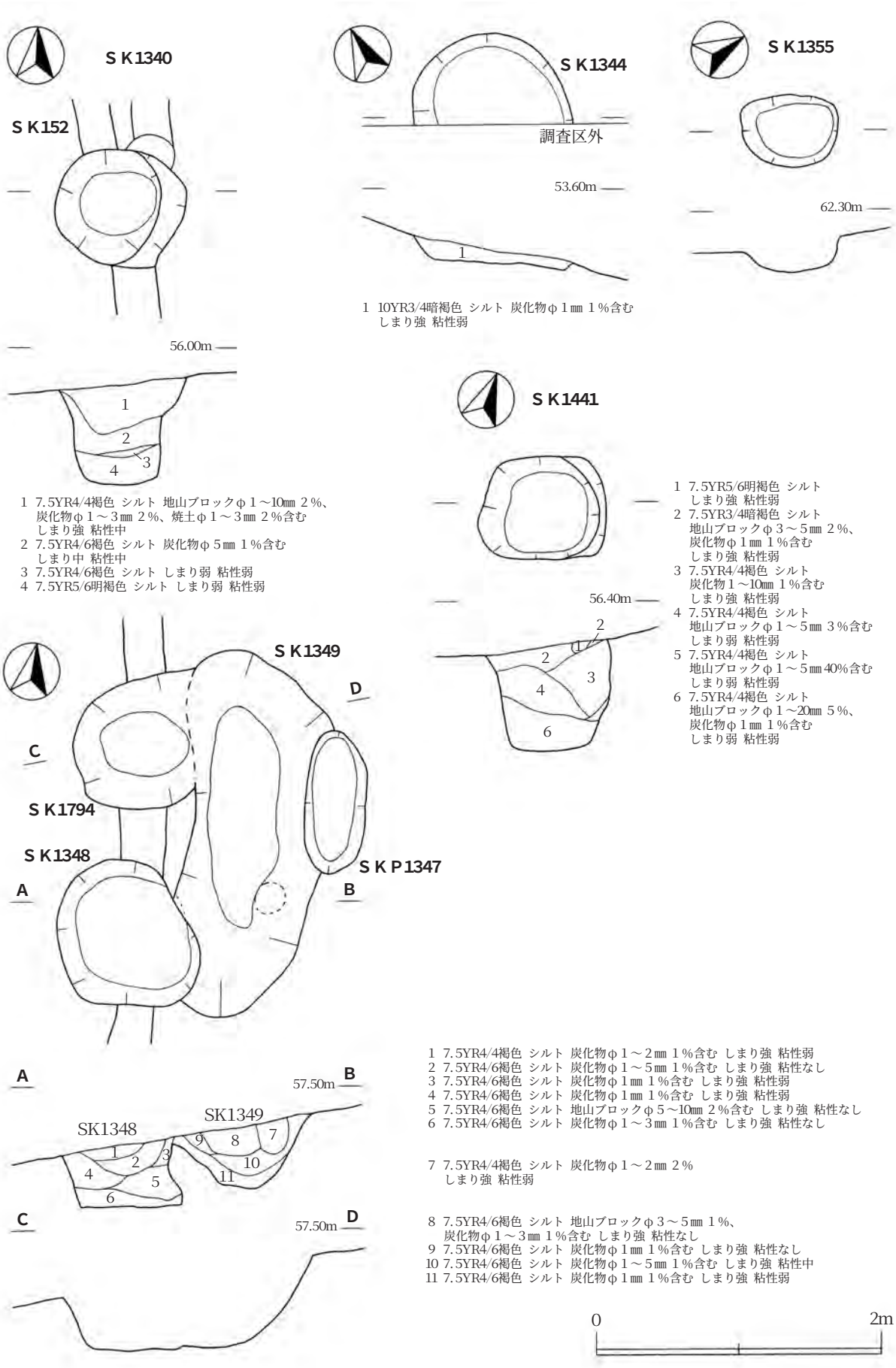


1　10YR4/4褐色　シルト　炭化物微量含む　しまりやや強　粘性中

第118図　ＳＤ1233、ＳＫ1071・1120・1121・1212



第119図　SK1231・1240・1251・1256・1258・1310



1　10YR3/4暗褐色　シルト　炭化物φ１㎜　１%含む
　しまり強　粘性弱

1　7.5YR4/4褐色　シルト　地山ブロックφ１～10㎜　２%、
　炭化物φ１～３㎜　２%、焼土φ１～３㎜　２%含む
　しまり強　粘性中
2　7.5YR4/6褐色　シルト　炭化物φ５㎜　１%含む
　しまり中　粘性中
3　7.5YR4/6褐色　シルト　しまり弱　粘性弱
4　7.5YR5/6明褐色　シルト　しまり弱　粘性弱

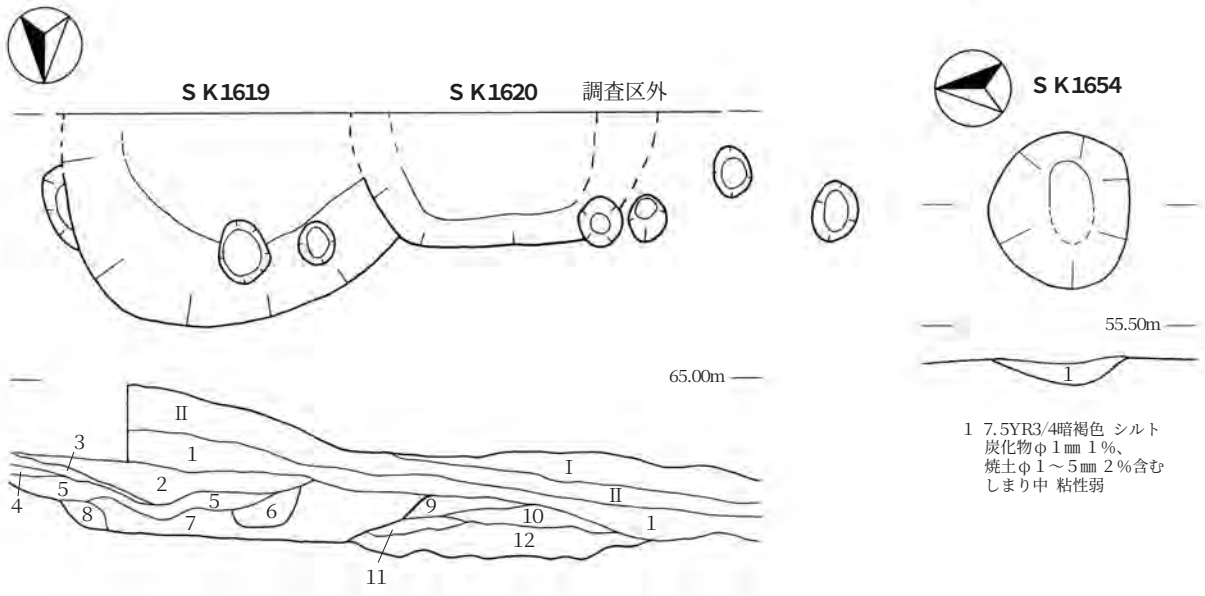
1　7.5YR5/6明褐色　シルト
　しまり強　粘性弱
2　7.5YR3/4暗褐色　シルト
　地山ブロックφ３～５㎜　２%、
　炭化物φ１㎜　１%含む
　しまり強　粘性弱
3　7.5YR4/4褐色　シルト
　炭化物１～10㎜　１%含む
　しまり強　粘性弱
4　7.5YR4/4褐色　シルト
　地山ブロックφ１～５㎜　３%含む
　しまり弱　粘性弱
5　7.5YR4/4褐色　シルト
　地山ブロックφ１～５㎜40%含む
　しまり弱　粘性弱
6　7.5YR4/4褐色　シルト
　地山ブロックφ１～20㎜　５%、
　炭化物φ１㎜　１%含む
　しまり弱　粘性弱

1　7.5YR4/4褐色　シルト　炭化物φ１～２㎜　１%含む　しまり強　粘性弱
2　7.5YR4/6褐色　シルト　炭化物φ１～５㎜　１%含む　しまり強　粘性なし
3　7.5YR4/6褐色　シルト　炭化物φ１㎜　１%含む　しまり強　粘性弱
4　7.5YR4/6褐色　シルト　炭化物φ１㎜　１%含む　しまり強　粘性弱
5　7.5YR4/6褐色　シルト　地山ブロックφ５～10㎜　２%含む　しまり強　粘性なし
6　7.5YR4/6褐色　シルト　炭化物φ１～３㎜　１%含む　しまり強　粘性なし

7　7.5YR4/4褐色　シルト　炭化物φ１～２㎜　２%
　しまり強　粘性弱

8　7.5YR4/6褐色　シルト　地山ブロックφ３～５㎜　１%、
　炭化物φ１～３㎜　１%含む　しまり強　粘性なし
9　7.5YR4/6褐色　シルト　炭化物φ１㎜　１%含む　しまり強　粘性なし
10　7.5YR4/6褐色　シルト　炭化物φ１～５㎜　１%含む　しまり強　粘性中
11　7.5YR4/6褐色　シルト　炭化物φ１㎜　１%含む　しまり強　粘性弱

第120図　SK1340・1344・1348・1349・1355・1441・1794、SKP1347



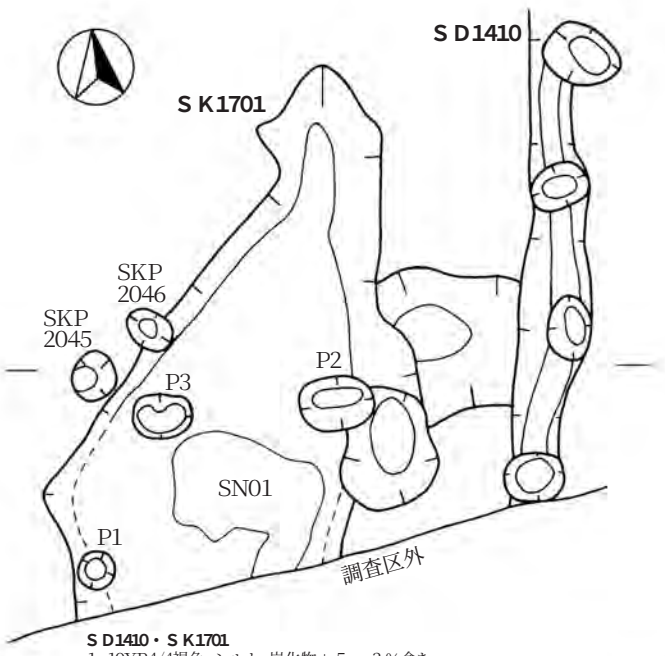
1 10YR3/3暗褐色 シルト 褐色５%混じる
しまりやや強 粘性中
2 7.5YR4/3褐色 シルト 黄褐色ブロックφ５㎜以下２%含む
しまり強 粘性中
3 7.5YR4/4褐色 シルト 焼土φ１～２㎜20%含む
しまり強 粘性中
4 7.5YR4/3褐色 シルト 黄褐色ブロックφ５～10㎜ ５%、
炭化物φ１～２㎜ ３%含む しまり強 粘性中
5 7.5YR4/4褐色 シルト 炭化物φ１～２㎜ ２%含む
しまりやや強 粘性中
6 7.5YR4/4褐色 シルト 黄褐色ブロックφ５～10㎜15%含む
しまりやや強 粘性中
7 7.5YR4/4褐色 シルト 黄褐色ブロックφ10～50㎜ ５%含む
しまりやや強 粘性中
8 10YR4/4褐色 シルト（粘土質）
しまりやや強 粘性中
9 7.5YR5/4にぶい褐色 シルト（地山状）
しまり強 粘性中
10 10YR4/4褐色 シルト 黄褐色ブロック状20%混じる
しまり強 粘性中
11 10YR4/4褐色 シルト 暗褐色１%混じる
しまり強 粘性中
12 10YR4/4褐色 シルト 黄褐色ブロックφ５～10㎜ ５%含む
しまり強 粘性中
※６はＳＫ1200覆土中に掘り込まれたピット

1 7.5YR3/4暗褐色 シルト
炭化物φ１㎜ １%、
焼土φ１～５㎜ ２%含む
しまり中 粘性弱

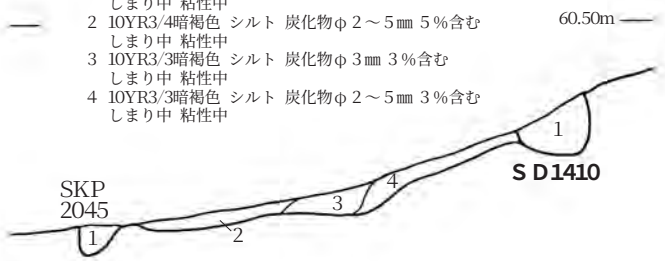
1 10YR3/4暗褐色 シルト
地山ブロックφ10～20㎜ ２%含む
しまり中 粘性弱
2 7.5YR4/4褐色 砂 しまり強 粘性なし
3 10YR4/4褐色 砂 地山ブロックφ５～10㎜ １%、
炭化物φ１㎜ １%、焼土φ５㎜ １%含む
しまり中 粘性弱

1 10YR3/3暗褐色 シルト
地山ブロックφ１～５㎜ １%含む
しまり中 粘性なし
2 7.5YR4/6褐色 砂 しまり弱 粘性なし
3 10YR4/3にぶい黄褐色 砂
しまり強 粘性弱

第121図　ＳＫ1619・1620・1654・1656・1659・1661

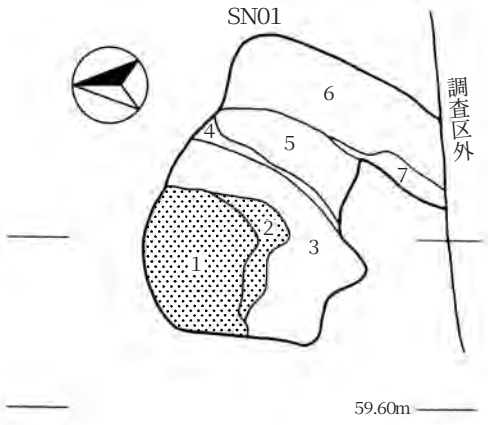


SD1410・SK1701
1　10YR4/4褐色　シルト　炭化物φ５㎜ ３%含む
　しまり中　粘性中
2　10YR3/4暗褐色　シルト　炭化物φ２～５㎜ ５%含む
　しまり中　粘性中
3　10YR3/3暗褐色　シルト　炭化物φ３㎜ ３%含む
　しまり中　粘性中
4　10YR3/3暗褐色　シルト　炭化物φ２～５㎜ ３%含む
　しまり中　粘性中

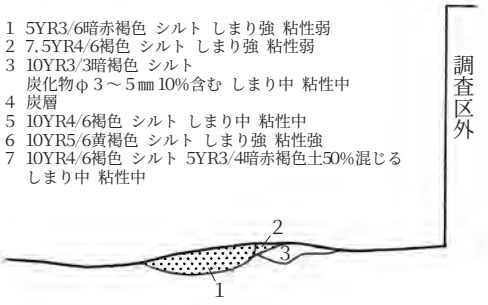


SK1701P1
1　10YR4/4褐色　シルト　炭化物φ２～５㎜ ５%、
　焼土φ５㎜ ３%含む　しまり中　粘性中

SK1701P2
1　10YR4/4褐色　シルト　しまり中　粘性中

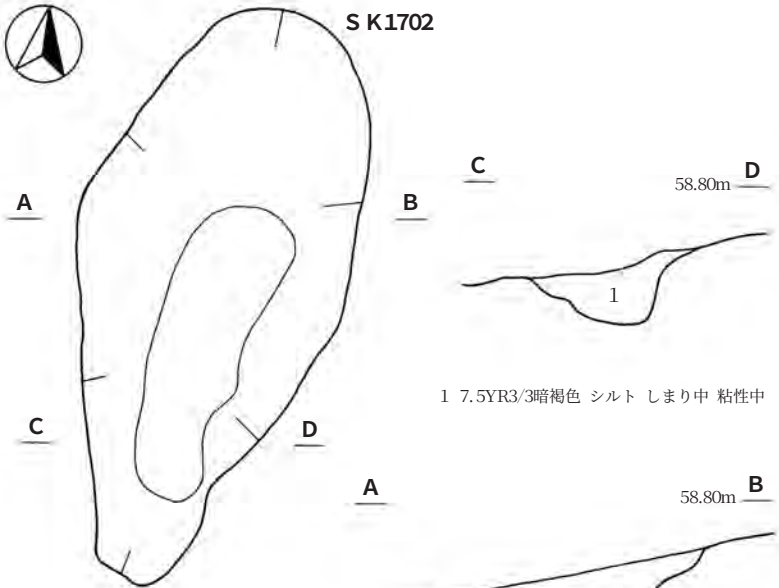


1　5YR3/6暗赤褐色　シルト　しまり強　粘性弱
2　7.5YR4/6褐色　シルト　しまり強　粘性弱
3　10YR3/3暗褐色　シルト
　炭化物φ３～５㎜ 10%含む　しまり中　粘性中
4　炭層
5　10YR4/6褐色　シルト　しまり中　粘性中
6　10YR5/6黄褐色　シルト　しまり強　粘性強
7　10YR4/6褐色　シルト　5YR3/4暗赤褐色土50%混じる
　しまり中　粘性中

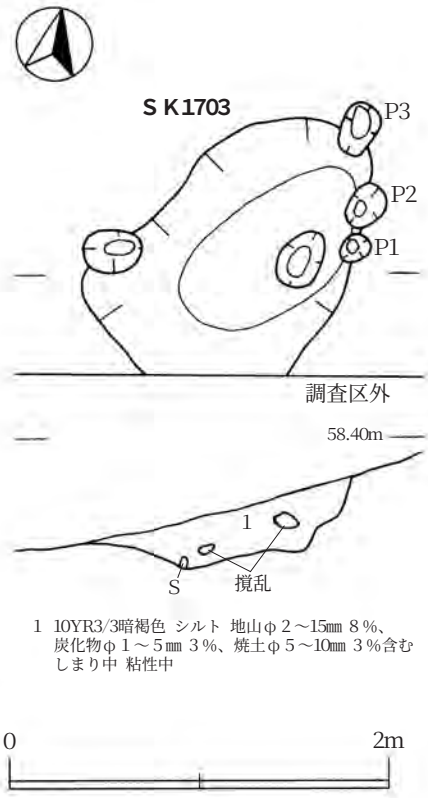


SKP2045
1　10YR2/2黒褐色　シルト　地山φ２～10㎜ ８%、
　炭化物φ２～５㎜ ５%含む　しまり中　粘性中

SKP2046
1　10YR2/2黒褐色　シルト　地山φ２～10㎜ ８%、
　炭化物φ２～５㎜ ５%含む　しまり中　粘性中

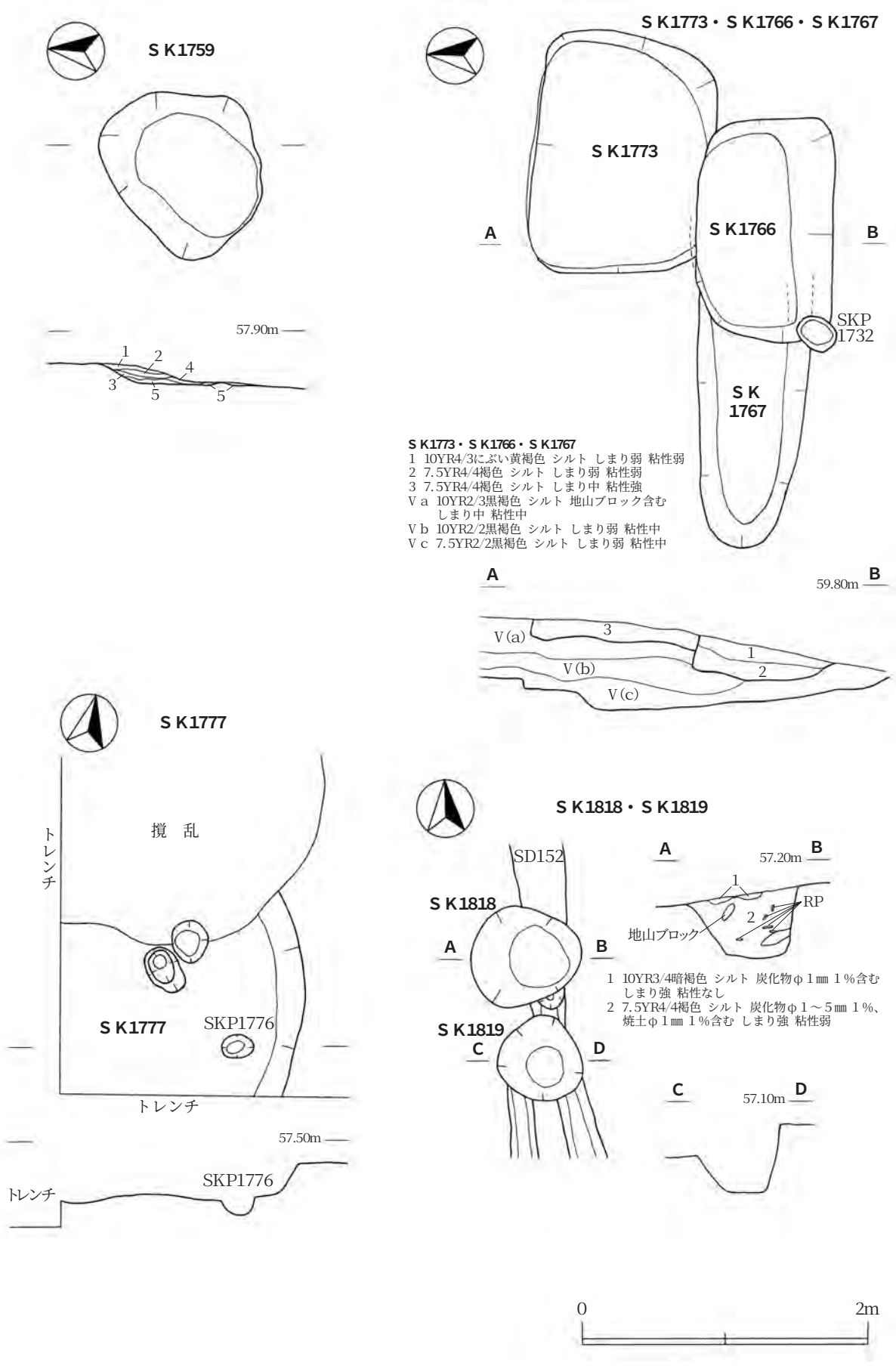


1　7.5YR3/3暗褐色　シルト　しまり中　粘性中

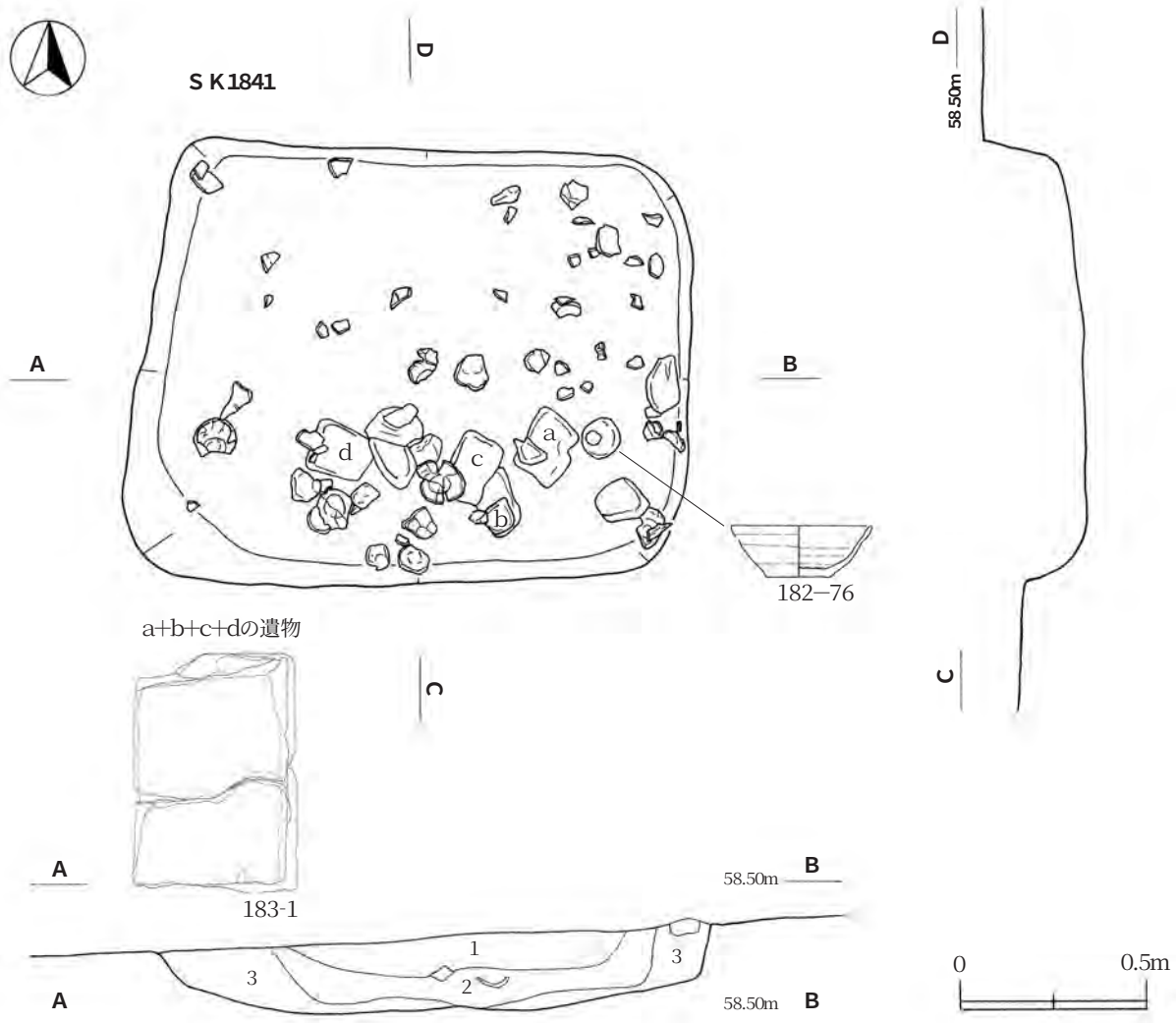


1　10YR3/3暗褐色　シルト　地山φ２～15㎜ ８%、
　炭化物φ１～５㎜ ３%、焼土φ５～10㎜ ３%含む
　しまり中　粘性中

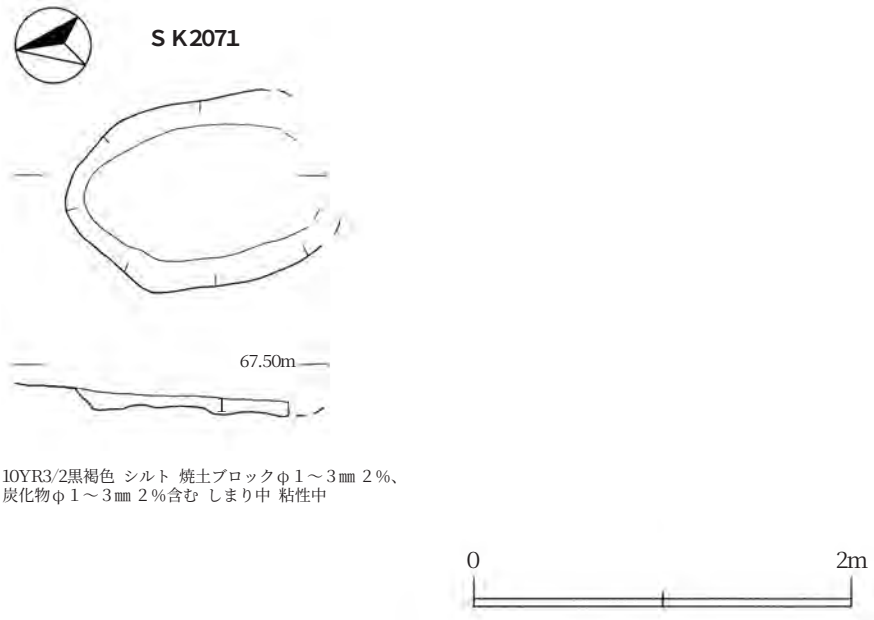
第122図　SD1410、SK1701・1702・1703



第123図　SK1759・1766・1767・1773・1777・1818・1819

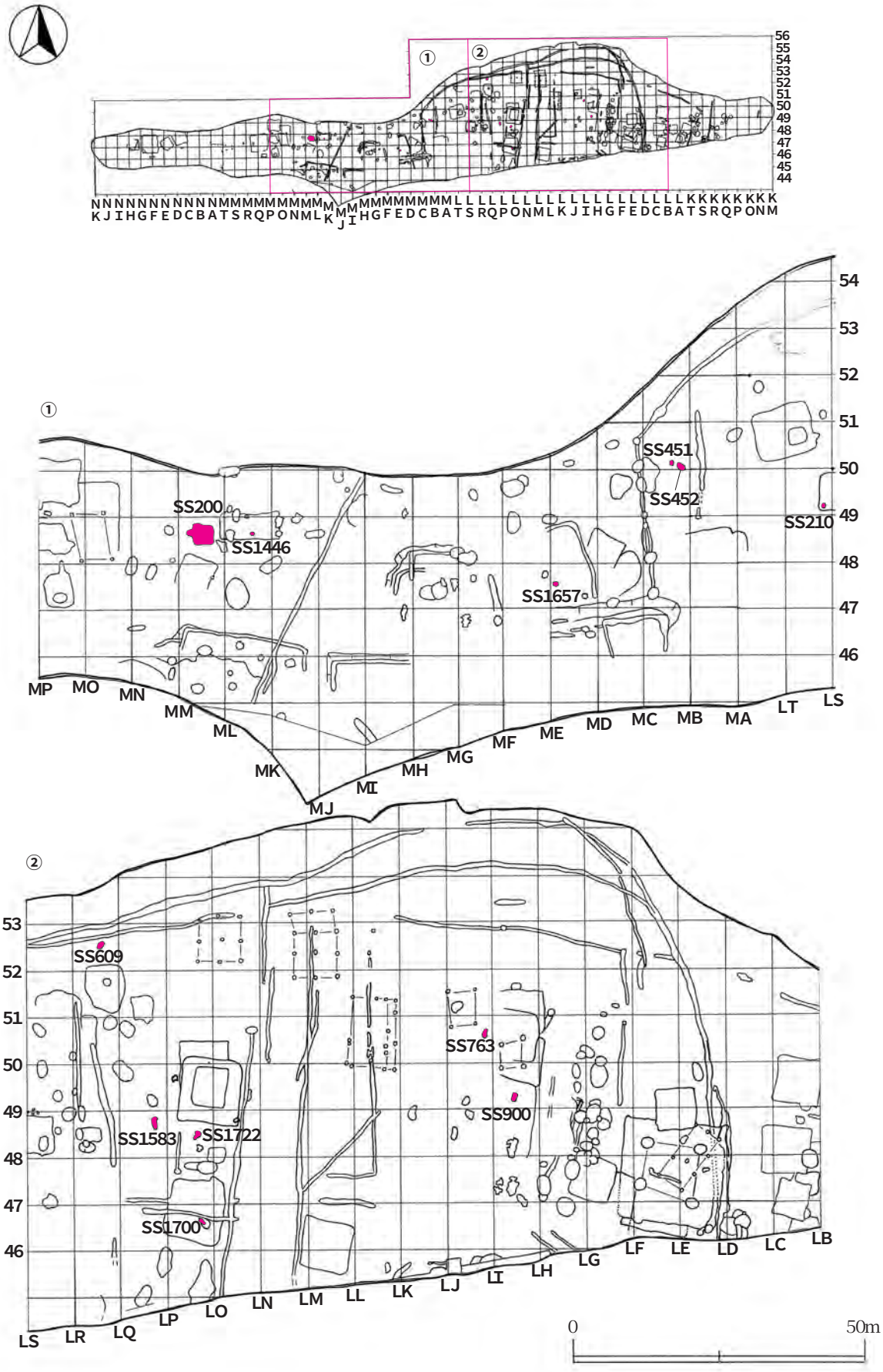


1　7.5YR4/4褐色　シルト　炭化物φ１～10㎜　３％含む
　しまり強　粘性なし
2　10YR3/3暗褐色　シルト　炭化物φ１～10㎜　５％含む
　しまり中　粘性弱
3　7.5YR4/4褐色　シルト　しまり強　粘性なし



1　10YR3/2黒褐色　シルト　焼土ブロックφ１～３㎜　２％、
　炭化物φ１～３㎜　２％含む　しまり中　粘性中

第124図　SK1841・2071



第125図　製鉄炉・鍛冶炉遺構配置図

５　製鉄炉・鍛冶炉

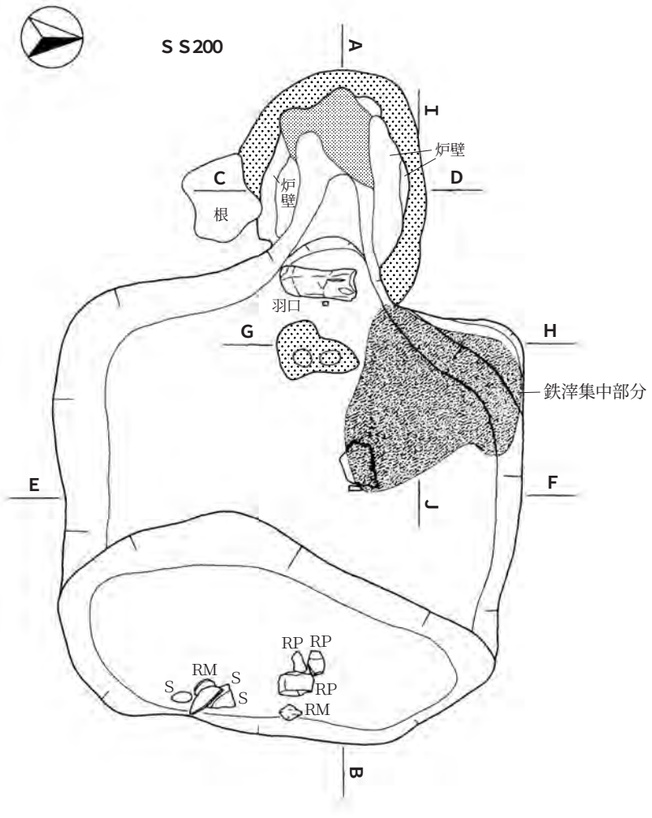
製鉄炉が１基、鍛冶炉が11基検出された。製鉄炉は調査区西側の平坦面にあり、鍛冶炉は調査区の中央部に広く分布する。製鉄炉は風通しの良い所にあるため、風除けや、上屋の存在が考えられるが、それらを検出することはできなかった。製鉄炉周辺には焼土が点在し、製鉄に関連した作業が行われた可能性が考えられる。鍛冶炉の周辺からは、鍛冶作業を裏付ける鍛造剥片が検出されたものが多い。鍛冶炉は、遺構覆土に構築されているものが半数近くある。

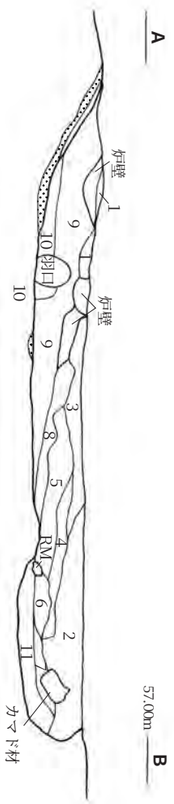
第22表　製鉄炉・鍛冶炉（１）

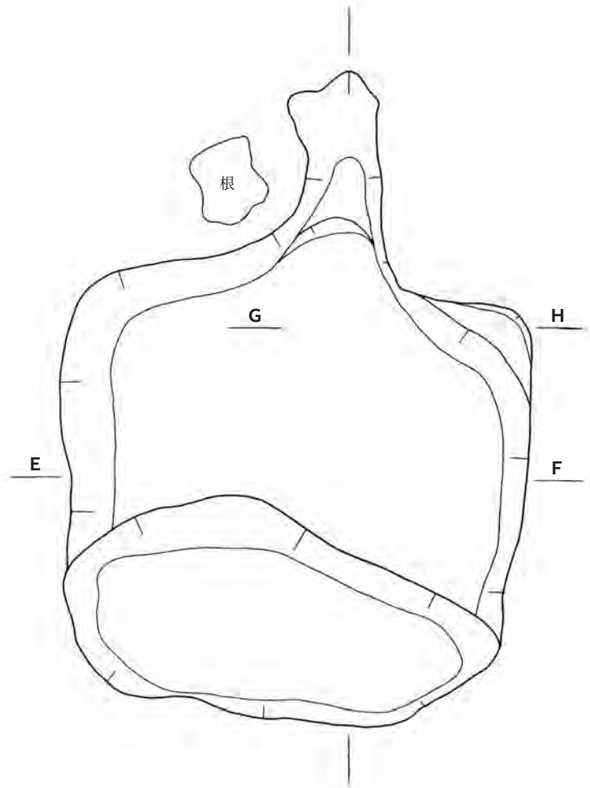
	種類	番号	挿図番号	図版番号	グリッド	確認面（層）	炉体部（m）			前庭部（m）			重複
							長軸	短軸	深さ	長軸	短軸	深さ	
1	ＳＳ	200	126	30・31	ＭＩ48	Ⅶ	(0.71)	0.28	0.2	1.53	1.52	0.22	なし
	調査区西側平坦面に位置する。Ⅵ層面で還元化色をした炉壁と赤褐色の被熱範囲を確認し、半地下式の製鉄炉であることが判明した。上部構造は消失した状態で、炉体部の地下部分と前庭部のみ残存していた。炉から前庭部に至る軸線はほぼ東西方向を示す。炉の短軸横断面は底部付近でややオーバーハングする。前庭部の北西隅付近には、鉄滓の集中部分があり、炉内から流れ出た鉄滓をかき集めたとみられる。前底部東側には一段深い掘り込みがある。炉に近い前庭部底面からは断面がカマボコ形（Ｄ字形）の羽口が出土した。羽口は炉の長軸方向に直交させるように置かれているため、操業後に意図的にそこに置いたものとみられる。炉に伴う送風施設は炉の西側にあったと推測されるが、確認できなかった。羽口出土地点の東側には、小規模な被熱範囲が認められる。炉壁には、補修した痕跡がみられることから、複数回の操業があったと推測される。本遺構周辺には、焼土遺構が多いため炉の操業と何らかの関連が考えられるが、周辺からの鉄滓の出土量は少なく、廃滓場を検出することはできなかった。遺物（第201・212～220図）：羽口、炉壁、鉄滓などの製鉄関連遺物の他に土師器が出土した。												
2	ＳＳ	210	127	－	ＬＳ48	ＳＫＩ1098覆土	0.29	0.26	0.03	－	－	－	ＳＫＩ1098→ＳＳ210
	Ｈ面のＳＫＩ1098の覆土中に構築される。炉体部のみ検出した。円形の窪みの底面が還元化している。東側に近接して大きな焼土ＳＮ157がある。遺物（第202・220図）：遺構内からは炉壁が出土した。												
3	ＳＳ	451	127	32	ＭＢ49	Ⅶ	0.29	－	0.04	－	－	－	なし
	Ｈ面に位置する。炉体部のみ検出した。底面と壁が還元化している。ＳＳ452の北西１ｍと近接する。遺物（第202・220図）：遺構内からは炉壁溶解物が出土した。												
4	ＳＳ	452	127	32	ＭＢ49	Ⅶ	0.26	0.2	0.05	0.59	0.29	0.08	なし
	Ｈ面に位置する。炉体部と前庭部で構成される。炉は円形の窪み状の形態で底面から緩やかに立ち上がり、底面付近が還元化している。前庭部は溝状の形態で、壁は底面から急角度で立ち上がる。ＳＳ451の南東１ｍと近接する。												
5	ＳＳ	609	127	33	ＬＱ52	Ⅶ	0.39	0.3	0.1	0.31	0.26	0.06	なし
	Ｈ面に位置する。炉体部と前底部で構成される。炉体部は円形の窪み状の形態で、底部付近が還元化している。前庭部は短く、壁は急角度で立ち上がる。北0.5ｍにはＳＤ791が位置する。遺物（第202・220図）：遺構内からは、流動滓、鍛冶滓などが出土した。												
6	ＳＳ	763	127	32	ＬＩ51	Ⅶ	0.3	0.3	0.05	0.45	0.19	0.05	なし
	Ｅ面に位置する。炉体部と前庭部で構成される。炉体部の形状は、形の整った丸い窪み状で、底面付近が還元化している。前庭部は溝状の形態で、壁は緩やかに立ち上がる部分が多く占める。遺構内からは炉壁、鍛冶滓、粒状滓が出土した。遺構周辺からは鍛造薄片が出土した。東側にはＳＩ764が近接する。遺物：（第202・220図）。												

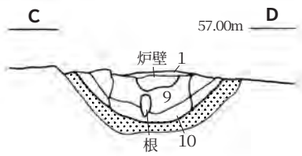
第23表　製鉄炉・鍛冶炉（2）

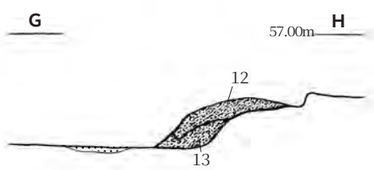
	種類	番号	挿図番号	図版番号	グリッド	確認面（層）	炉体部（m）			前庭部（m）			重複
							長軸	短軸	深さ	長軸	短軸	深さ	
7	ＳＳ	900	127	32	ＬＨ49	ＳＫＩ888覆土	0.28	0.24	0.07	0.35	0.35	0.06	ＳＫＩ888→ＳＳ900
	Ｅ面に位置する。ＳＫＩ888覆土中に構築されている。炉体部と前庭部で構成される。両方とも円形の窪み状の形態である。炉体部は底面からやや急角度で壁が立ち上がり、底面や壁が還元化している。遺構周辺のほぼ同じレベルに硬くしまった炭化物を多く含む層が分布することから、本遺構に伴う一つの作業面と推測される。遺物：（第202・220・221図）。												
8	ＳＳ	1446	128	33	ＭＫ47	ＳＫＩ1350覆土	0.2	0.17	0.02	－	－	－	なし
	調査区西側平坦面に位置する。ＳＫＩ1350覆土中に構築されている。炉体部のみ検出した。底面が還元化している。周囲の同じレベルには、焼土遺構が点在している。												
9	ＳＳ	1583	128	33	ＬＯ46	不明	(0.53)	(0.38)	－	0.55	0.51	0.05	ＳＩ1583→ＳＳ1583
	Ｇ面に位置する。炉体部と前庭部で構成される。炉体部は還元化した底面部分しか確認できなかった。前庭部は、溝状の形態で壁は急角度で立ち上がる。												
10	ＳＳ	1657	128	－	ＭＤ46	ＳＩ1456床面	0.25	0.24	0.05	－	－	－	ＳＩ1456
	ＳＩ1456床面で確認した。炉体部のみ検出した。緩やかな窪み状の形態で、還元化部分の外側には被熱範囲が広がっている。工房に伴う鍛冶炉か。												
11	ＳＳ	1700	128	33	ＬＯ46	ＳＩ1755覆土	0.35	0.33	0.1	0.35	0.22	0.06	ＳＩ1755→ＳＫ1755→ＳＳ1700
	Ｇ面のＳＩ1755覆土に構築されている。炉体部と前庭部で構成される。炉体部は、還元化部分の多くが剥がれた状態にある。覆土には炭化物を多く含む。遺物（第202・221図）：遺構内から鍛冶滓、鍛造薄片が出土した。												
12	ＳＳ	1722	128	33	ＬＯ48	造	0.37	0.32	0.09	0.33	0.27	0.06	なし
	Ｇ面（埋没沢部分）に位置する。炉体部と前庭部で構成される。炉体部に明瞭な還元化部分はみられなかったが、北側からは鍛造剥片を確認した。												

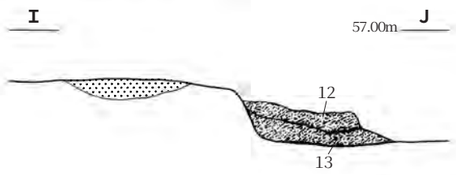




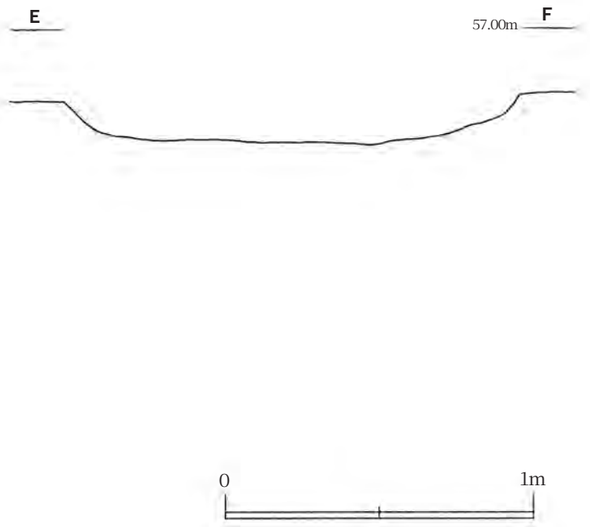




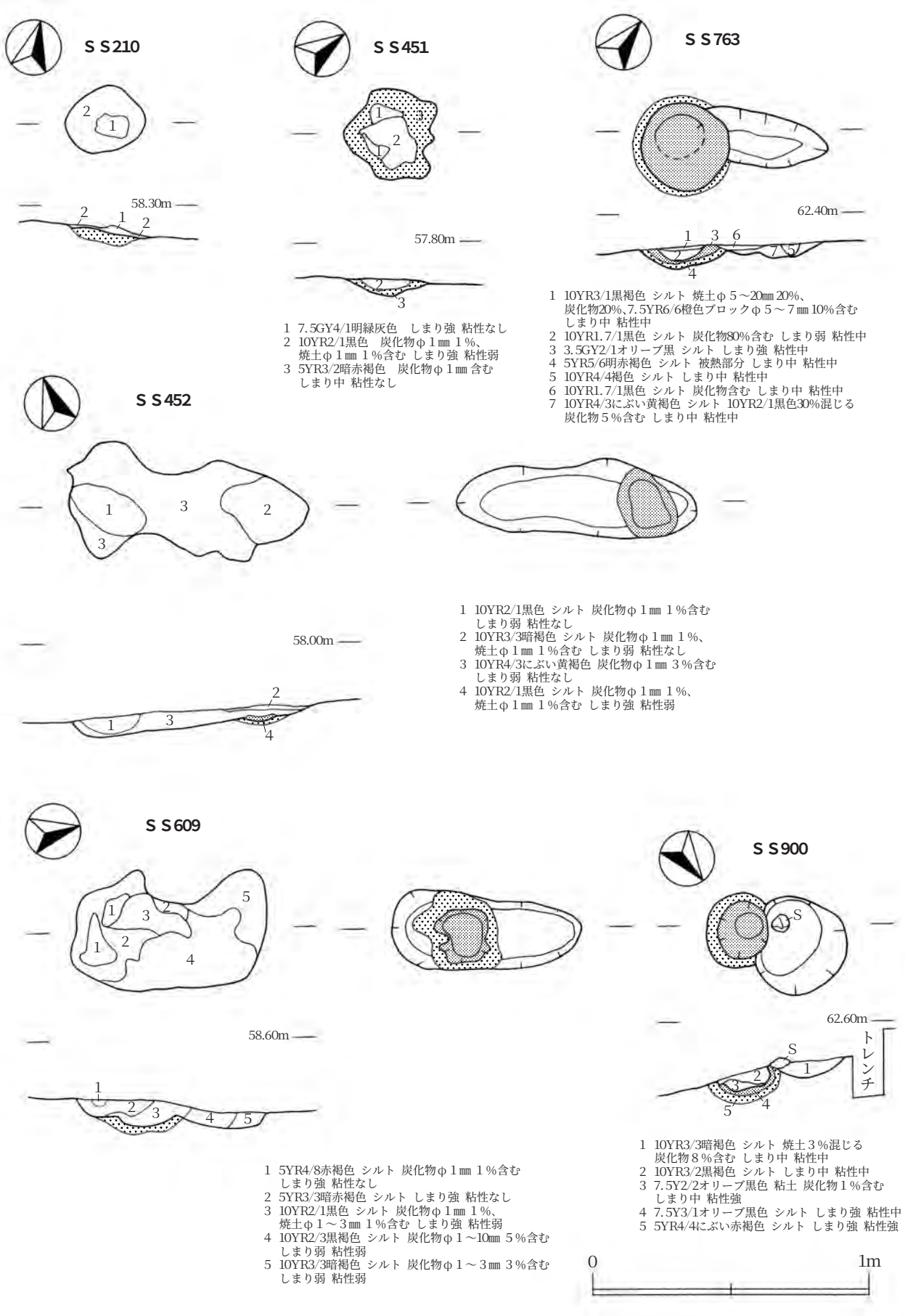




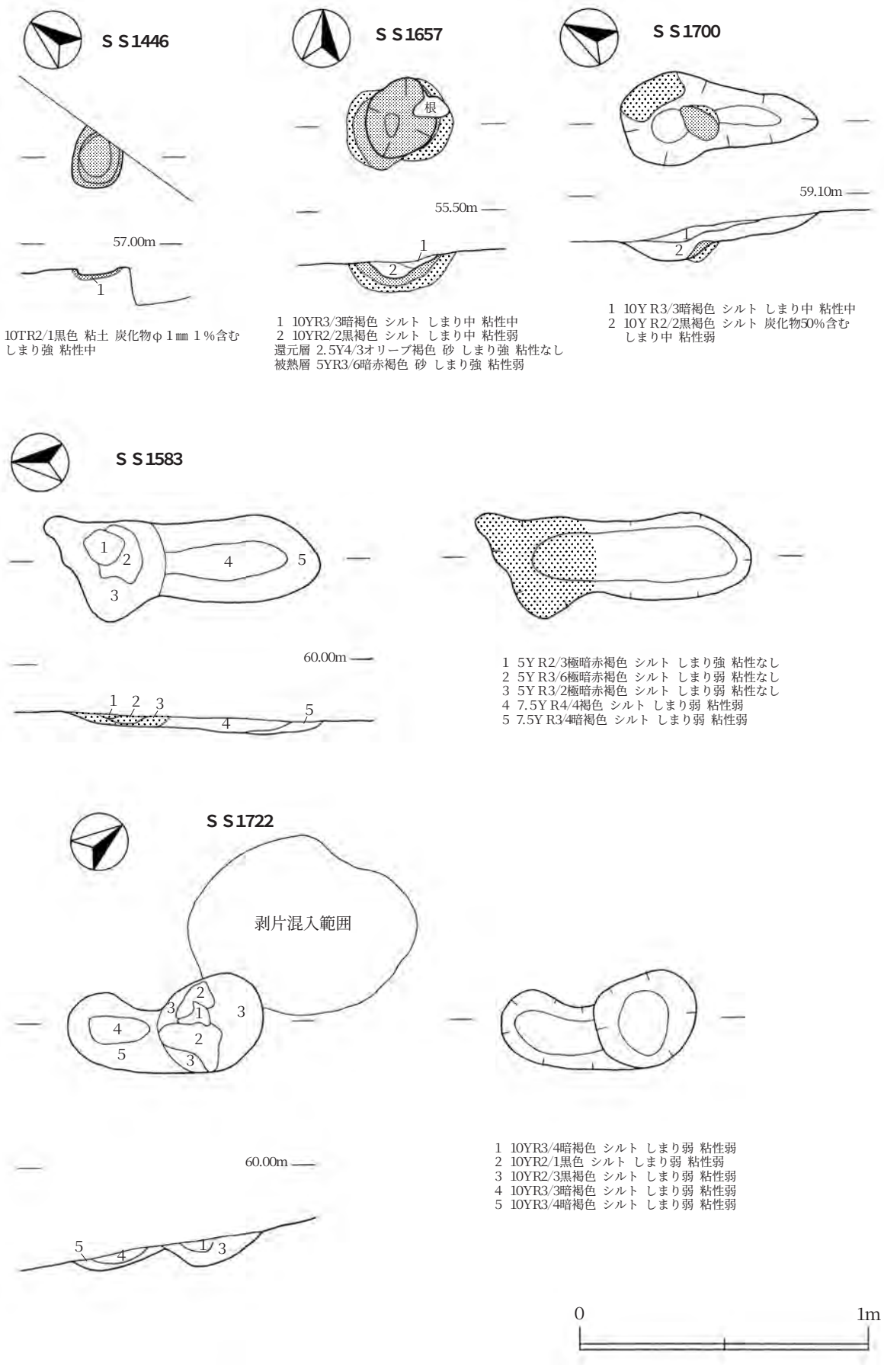
1　10YR3/3暗褐色　シルト　しまり強　粘性弱
　炭化物φ１㎜１%、焼土φ１㎜１%含む
2　7.5YR4/6褐色　粘土　しまり強　粘性なし
　炭化物φ１㎜１%、焼土φ１㎜１%含む
3　10YR3/3暗褐色　シルト　しまり強　粘性弱
　炭化物φ３㎜１%、焼土φ１㎜１%含む
4　10YR3/3暗褐色　シルト　しまり強　粘性なし
　炭化物φ１㎜１%、焼土φ１㎜１%含む
5　7.5YR4/4褐色　シルト　しまり強　粘性なし
　炭化物φ１㎜１%、焼土φ１～３㎜３%含む
6　7.5YR4/6褐色　粘土　しまり強　粘性なし
7　7.5YR4/4褐色　シルト　しまり強　粘性なし
8　10YR3/3暗褐色　シルト　しまり強　粘性弱
　地山φ５～10㎜５%、焼土５～10㎜２%含む
9　10YR3/2黒褐色　シルト　しまり強　粘性なし
　焼土φ１㎜１%、還元土３～５㎜１%、鉄滓５%含む
10　10YR3/3暗褐色　シルト　しまり強　粘性なし
　炭化物φ１㎜２%、焼土１㎜２%含む
11　7.5YR4/4褐色　シルト　しまり強　粘性なし
　炭化物１～２㎜３%、焼土１～10㎜５%、還元土２～３㎜２%含む
　（その他、炉壁残骸や鉄滓も混入）
12　10YR2/2黒褐色　シルト　しまり強　粘性なし
　鉄滓60%含む
13　10YR2/2黒褐色　シルト　しまり強　粘性なし
　鉄滓30%含む
還元層　5YR6/1褐灰色　シルト　しまり強　粘性なし
被熱層　7.5YR4/6褐色　シルト　しまり強　粘性弱



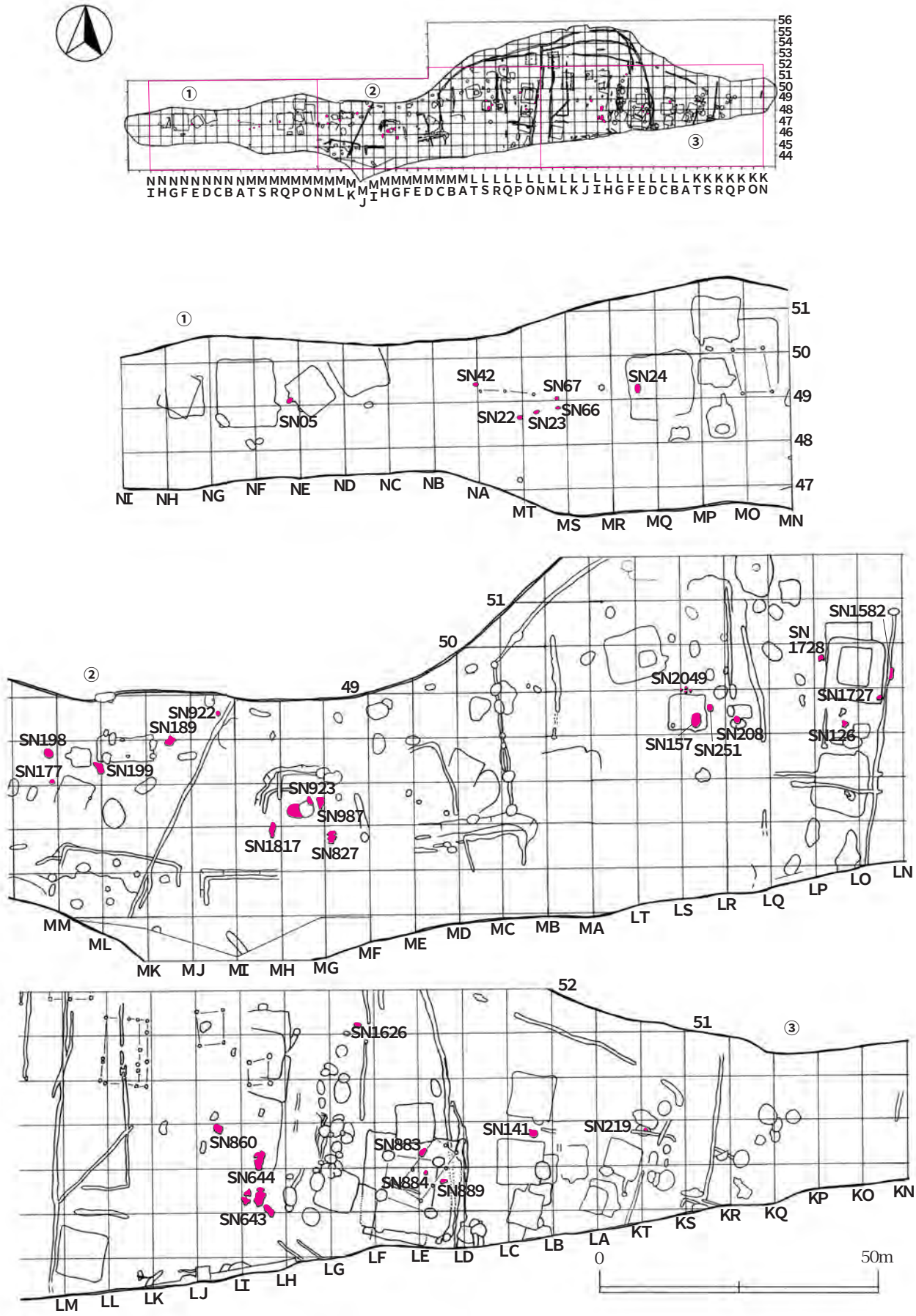
第126図　ＳＳ200



第127図　ＳＳ210・451・452・609・763・900



第128図　S S1446・1583・1657・1700・1722



第129図　焼土遺構配置図

6　焼土遺構

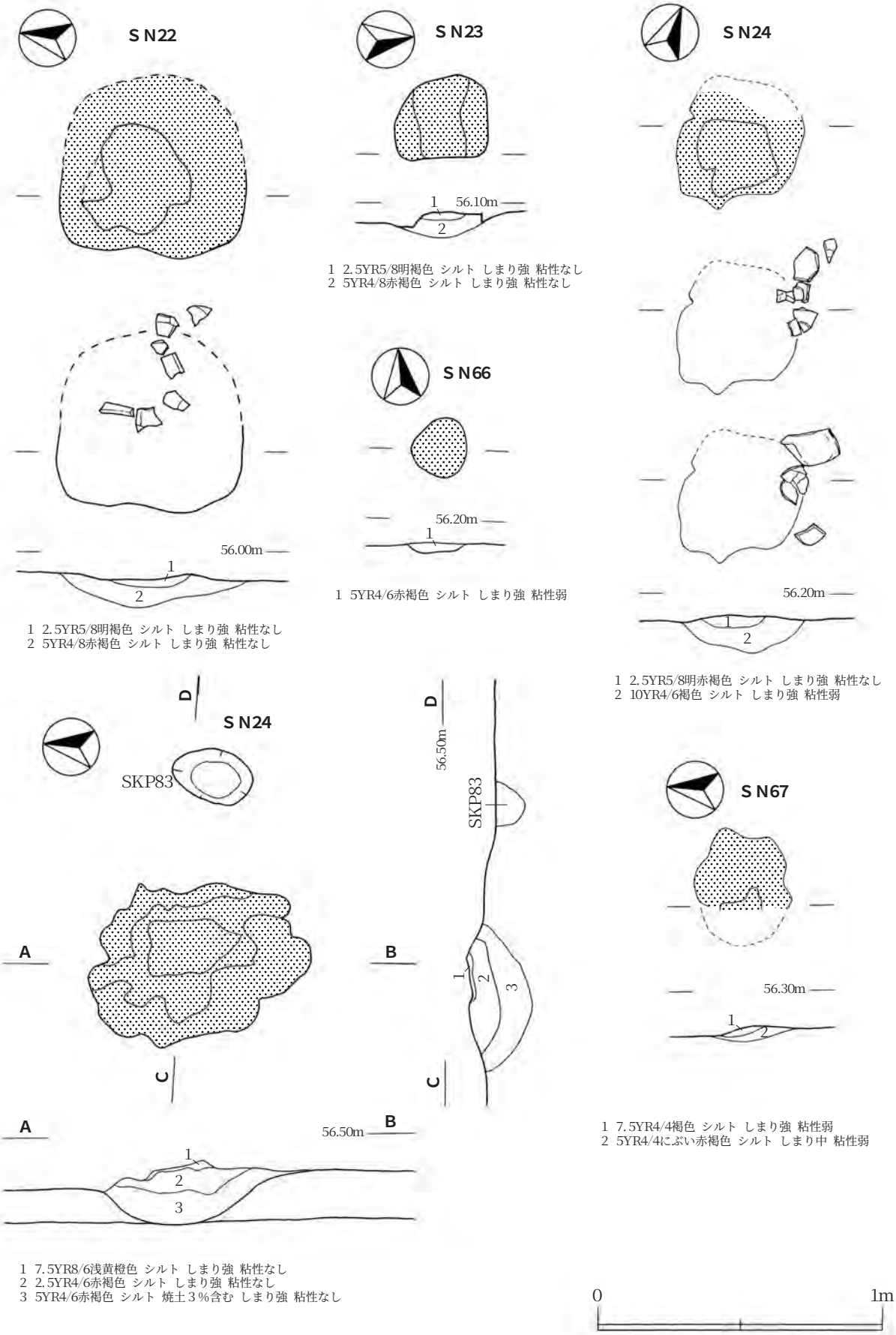
基検出された。調査区内に広く分布するが、調査区西側の製鉄炉や一部の竪穴状遺構（開口部をもつ建物）の周辺に密に分布する。焼土遺構の中には、土師焼成遺構と考えられる遺構も含めた。

第24表　焼土遺構一覧（1）

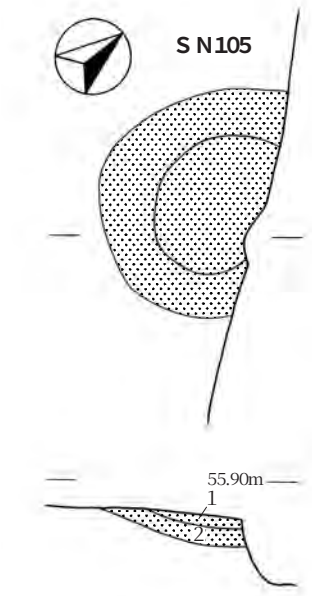
	遺構名	番号	挿図番号	図版番号	グリッド	確認面(層)	長軸(m)	短軸(m)	被熱深度(m)	重　　複
1	ＳＮ	22	130	－	ＭＴ46	Ⅶ	(0.66)	0.42	0.13	なし
	確認面付近で遺物が出土。遺物：土師器ポリ袋中１袋出土。									
2	ＳＮ	23	130	－	ＭＳ46	Ⅶ	0.34	0.30	0.11	なし
	ＳＮ22・66に近接。									
3	ＳＮ	24	130	－	ＭＱ47	ＳＩ39覆土	0.80	0.51	0.24	ＳＩ39→ＳＮ24
	被熱範囲が比較的広い。									
4	ＳＮ	42	130	－	ＮＡ47	Ⅶ	0.46	(0.36)	0.15	なし
	確認面付近で遺物が出土。遺物（第184図１）：土師器甕中心ポリ袋中３袋出土。									
5	ＳＮ	66	130	－	ＭＳ46	Ⅶ	0.21	0.19	0.50	なし
	小規模な焼土。ＳＮ67に近接。									
6	ＳＮ	67	130	－	ＭＳ46・47	Ⅶ	(0.28)	(0.31)	0.70	なし
	ＳＮ66に近接。									
7	ＳＮ	105	131	－	ＮＤ46・ＮＥ46	Ⅶ	(0.66)	0.56	0.10	ＳＫ105→ＳＩ50
	ＳＩ50によって東側が消失。									
8	ＳＮ	157	87	－	ＬＳ48	ＳＫＩ1098覆土	2.17	1.52	0.10	ＳＫＩ1098→ＳＮ157
	ＳＫＩ1098覆土上に形成。遺物（第212図52～54）：土師器中心コンテナ１／３須恵器１点出土。									
9	ＳＮ	177	131	－	ＭＭ47	Ⅵ	0.28	0.22	0.02	なし
	上面は削平を受けている。									
10	ＳＮ	189	131	－	ＭＪ47・48	Ⅶ	0.29	0.26	0.05	なし
	小規模な焼土。遺物：土師器ポリ袋小１袋出土。									
11	ＳＮ	198	131	－	ＭＭ47	Ⅶ	0.67	0.35	0.07	ＳＫ→ＳＮ198
	土坑覆土状に形成された焼土か。土坑内からは、土師器片が数点出土。ＳＳ200に近接。遺物：土師器ポリ袋小１袋出土。									
12	ＳＮ	199	131	－	ＭＫ・ＭＬ47	Ⅶ	0.93	0.52	0.17	なし
	ＳＳ200に近接。２か所に分かれる。									
13	ＳＮ	208	116	－	ＬＱ48	ＳＫ904覆土	(0.46)	(0.37)	0.30 （２～４層）	ＳＫ904→ＳＮ208
	ＳＫ904覆土中に形成。遺物（第212図55）：鉄滓が出土。									
14	ＳＮ	219	106	－	ＫＳ48	ＳＫ448覆土	0.85	0.44	0.06	ＳＫ904→ＳＮ219 →ＳＤ361
	ＳＫ448覆土中に形成。									
15	ＳＮ	251	131	－	ＬＳ・ＬＲ49	Ⅶ	0.43	0.37	0.07	なし
	ＳＫＩ1098に近接。									

第25表　焼土遺構一覧（２）

	遺構名	番号	挿図番号	図版番号	グリッド	確認面(層)	長軸(m)	短軸(m)	被熱深度(m)	重　　複
16	ＳＮ	643	76	13	ＬＨ47	Ⅶ	1.90	0.89	0.24	なし
	ＳＮ944に近接。大小５か所の焼土（ａ～ｅ）から成る（計測値はａ）。土師器、被熱礫などがコンテナ１／２箱出土。									
17	ＳＮ	644	76	13	ＬＤ48	Ⅶ	1.69	1.05	0.04	なし
	ＳＫＩ666内で検出。ＳＮ643と近接。同時期のものか。									
18	ＳＮ	827	131	－	ＭＦ45	造	0.94	0.66	0.10	なし
	確認面付近で土師器片出土。遺物：土師器ポリ袋中0.5袋出土。									
19	ＳＮ	860	132	－	ＬＩ48	Ⅶ	0.71	0.58	0.15	なし
	確認面付近で礫が出土。遺物：土師器ポリ袋中２袋出土。									
20	ＳＮ	883	132	－	ＬＥ48	ＳＩ777覆土	0.78	0.49	不明	ＳＩ777→ＳＮ883
	ＳＩ777覆土に形成。									
21	ＳＮ	884	59	－	ＬＤ47	ＳＩ777覆土	0.24	0.23	0.05	ＳＩ777→ＳＮ884
	ＳＩ777覆土に形成。									
22	ＳＮ	889	132	－	ＬＤ47	ＳＩ777覆土	0.61	0.25	0.07	ＳＩ777→ＳＮ889
	ＳＩ777覆土に形成。遺物（第184図２）：土師器ポリ袋中２袋出土。									
23	ＳＮ	922	132	－	ＭＩ48	Ⅳ	0.41	0.29	0.08	なし
	斜面に沿って形成。									
24	ＳＮ	923	132	－	ＭＧ46	造～Ⅶ	0.46	0.41	0.19	ＳＸ1248→ＳＮ923
	ＳＸ1248覆土に形成。須恵器１点出土。									
25	ＳＮ	987	132	－	ＭＦ・ＭＧ46	造	1.09	0.66	0.19	なし
	焼土周辺にカマド材状のものが混入。遺物：土師器ポリ袋中0.5袋出土。									
26	ＳＮ	1582	133	－	ＬＮ49	Ⅶ	0.67	0.56	0.17	ＳＤ1410→ＳＮ1582
	ＳＤ1410覆土上に焼土が及ぶ。									
27	ＳＮ	1626	133	－	ＬＦ51	Ⅶ	0.66	0.64	0.13	なし
	円形の焼土。									
28	ＳＮ	1726	33	－	ＬＯ48	Ⅳ	0.32	0.31	0.05	なし
	焼土下位に炭化物層あり。浅い窪みに形成された焼土か。									
29	ＳＮ	1727	133	－	ＬＯ	Ⅳ	0.52	0.37	0.03	なし
	斜面に形成された焼土。									
30	ＳＮ	1728	133	－	ＬＯ49	Ⅶ	0.36	0.31	0.07	なし
	ＳＩ153・1723に近接。									
31	ＳＮ	1817	134	－	ＭＨ45	Ⅶ	(1.67)	(0.57)	0.02	なし
	５か所の焼土群。確認面付近で礫出土。									
32	ＳＮ	2049	134	－	ＬＲ48・49	Ⅶ	0.53	0.31	－	なし
	５か所の焼土群。ＳＫＩ1098に隣接する。									
33	ＳＮ	141	135	29	ＬＢ48	Ⅶ	1.23	1.03	0.07(２～３層)	なし
	ＳＩ129とＳＩ127の間に位置する。底面や壁面が被熱により赤色硬化している。遺物は出土しなかった。土師焼成遺構か。									
34	ＳＮ	761	135	29	ＬＤ58	Ⅶ	0.98	0.86	0.05(３～４層)	ＳＩ764→ＳＮ761
	ＳＩ764の北側に重複する。底面や壁面が被熱により赤色硬化している。遺物は出土しなかった。土師焼成遺構か。									
35	ＳＮ	600	136	29	ＭＧ46	Ⅶ	(1.62)	1.40	底面までの深さ：0.23	ＳＮ600→ＳＫ1248
	ＳＫＩ2067内に位置する。底面や壁面が被熱により赤色硬化している。底面からは、土師器片が出土した。土師器焼成遺構か。									

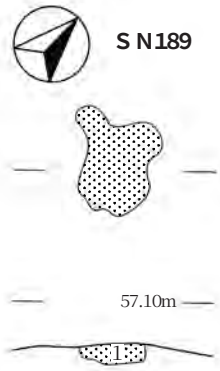


第130図　S N22・23・24・42・66・67

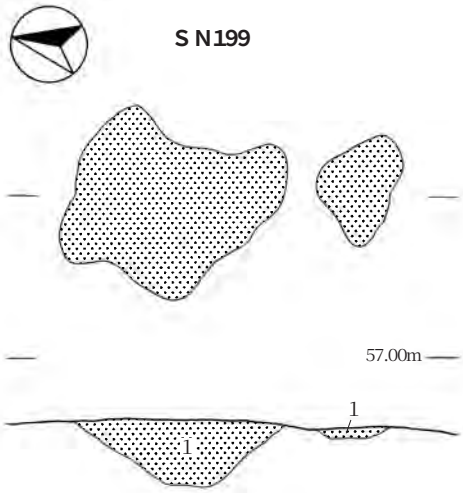


1　2.5YR5/6明赤褐色　シルト　しまり強　粘性なし
2　5YR4/6赤褐色　シルト　しまり強　粘性弱

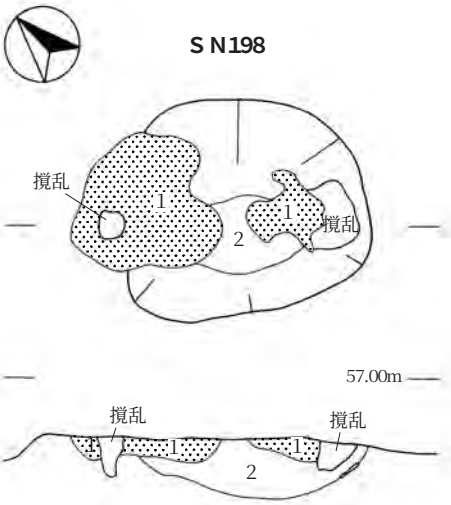
1　7.5YR4/6褐色　シルト　焼土φ１㎜　１%含む
　しまり強　粘性なし
2　5YR4/8赤褐色　シルト　しまり強　粘性弱



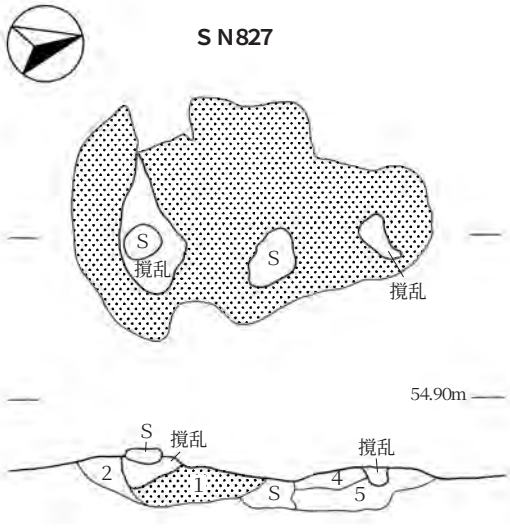
1　5YR4/6赤褐色　粘土　しまり強　粘性弱



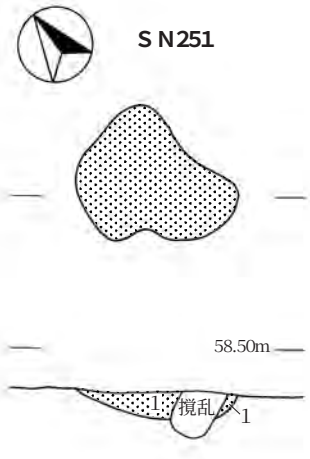
1　5YR4/6赤褐色　粘土　しまり強　粘性弱

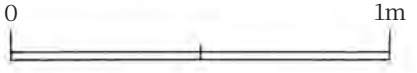


1　5YR4/8赤褐色　シルト　しまり強　粘性なし
2　10YR4/4褐色　シルト　炭化物φ１～２㎜　１%、焼土φ１㎜　１%含む
　しまり強　粘性なし

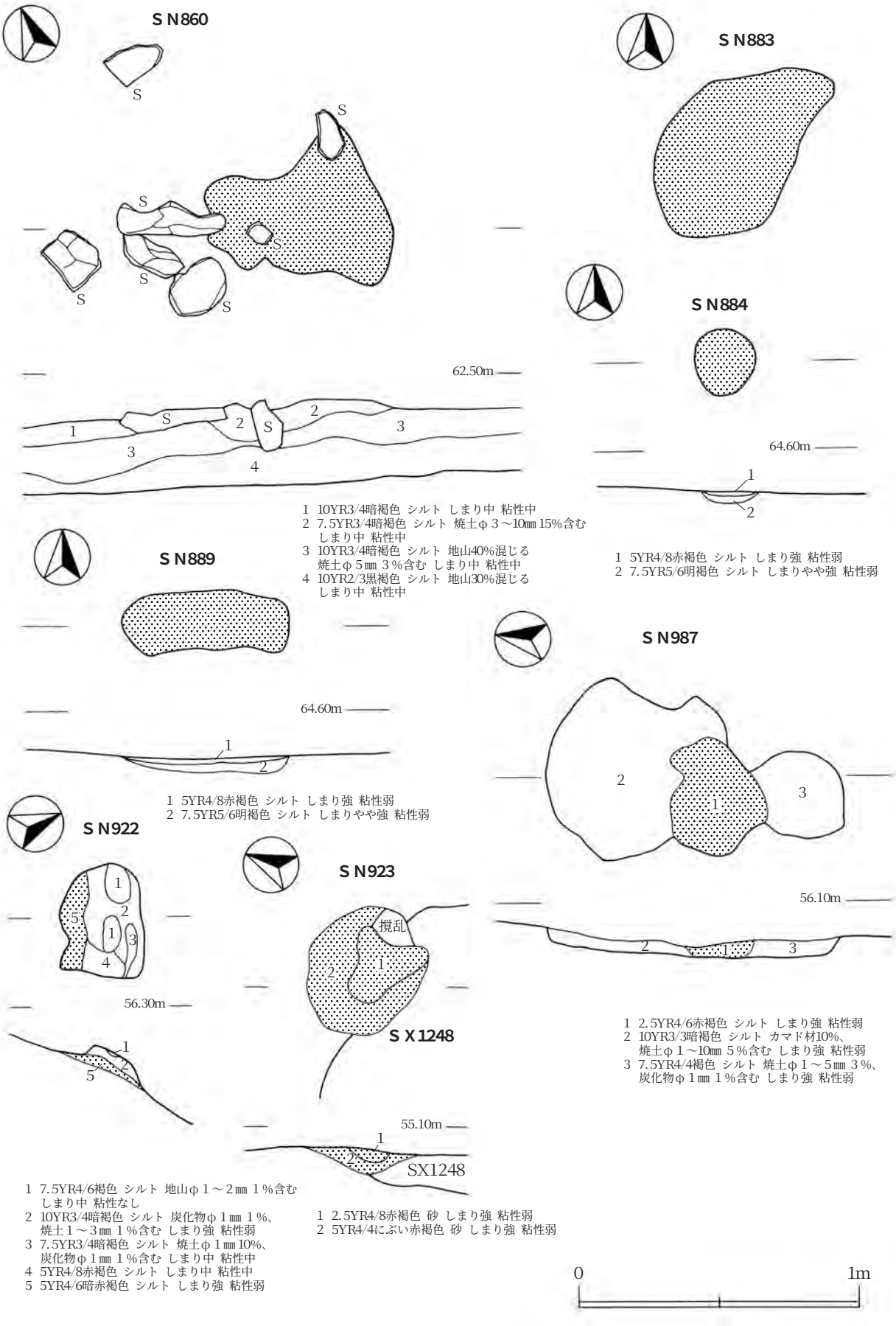


1　5YR4/6赤褐色　シルト　しまり中　粘性なし
2　5YR3/4暗赤褐色　シルト　礫φ５～10㎜　２%含む　しまり中　粘性なし
3　7.5YR4/3褐色　シルト　しまり強　粘性弱
4　2.5YR5/8明赤褐色　シルト　しまり強　粘性なし
5　5YR4/6赤褐色　シルト　しまり強　粘性弱

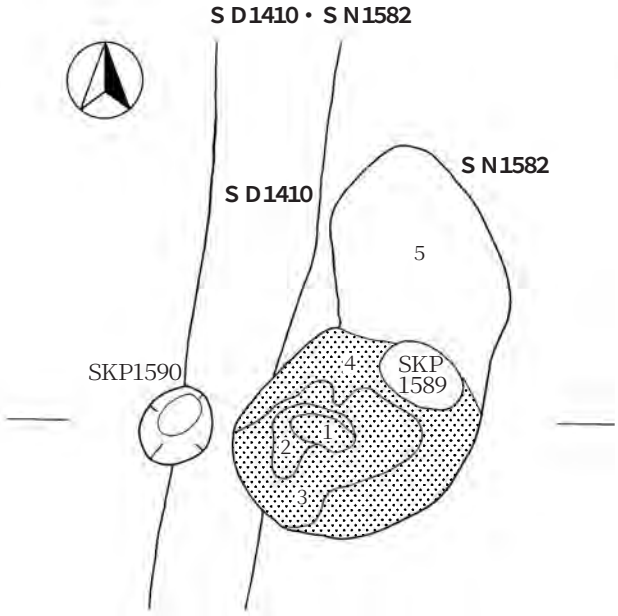


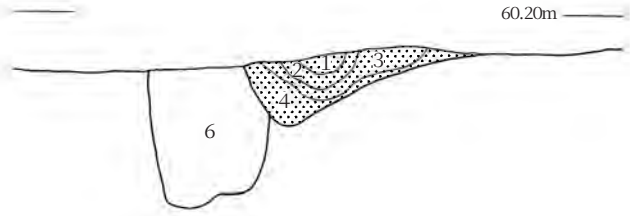


第131図　S N105・177・189・198・199・251・827

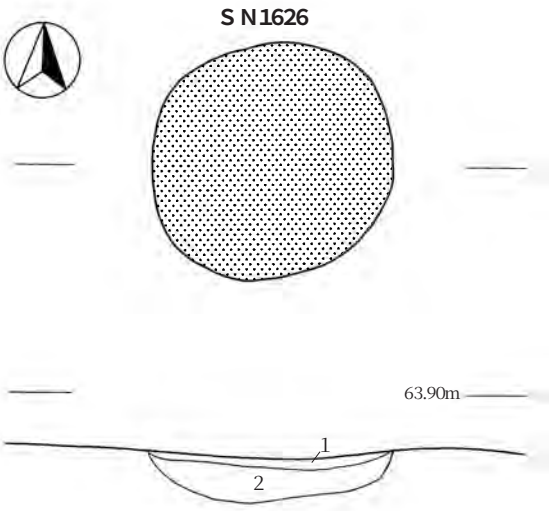


第132図　S N860・883・884・889・922・923・987

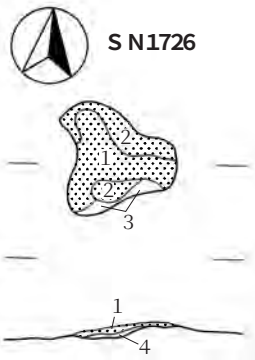




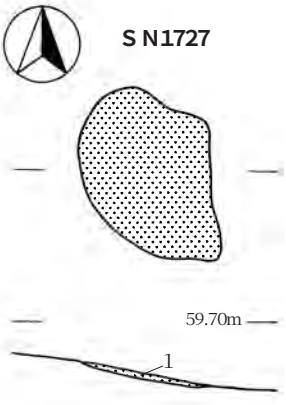
1　7.5YR3/3暗褐色　シルト　しまり中　粘性中
2　7.5YR3/4暗褐色　シルト　しまり弱　粘性弱
3　5YR4/4にぶい赤褐色　シルト　2.5YR4/8赤褐色焼土30%混じる　しまり弱　粘性なし
4　7.5YR3/4暗褐色　シルト　2層土30%混じる　しまり弱　粘性弱
5　7.5YR4/4褐色　シルト　しまり弱　粘性弱
6　10YR3/3暗褐色　シルト　しまり中　粘性中（ＳＤ1410覆土）



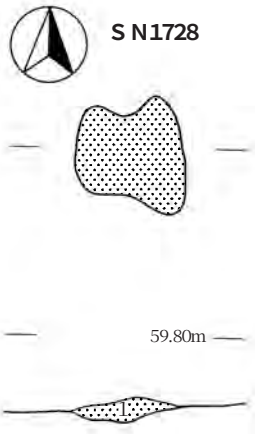
1　5YR4/8赤褐色　シルト　しまり強　粘性弱
2　7.5YR5/6明褐色　シルト　しまり強　粘性弱



1　5YR6/8橙色　シルト　しまり強　粘性なし
2　2.5YR2/2極暗赤褐色　シルト　しまり強　粘性なし
3　10YR3/3暗褐色　シルト　しまり弱　粘性中
4　10YR2/1黒色　シルト　炭化物含む　しまり弱　粘性なし

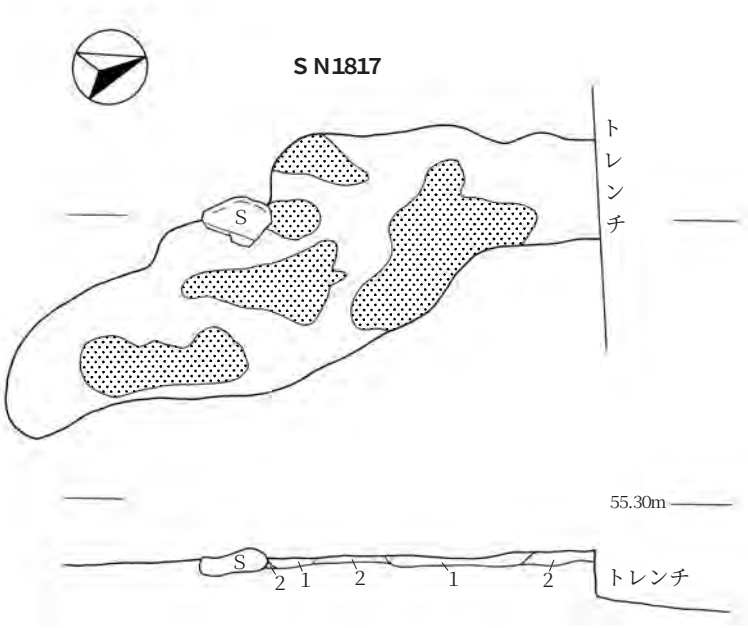


1　2.5YR2/2極暗赤褐色　シルト　しまり強　粘性なし

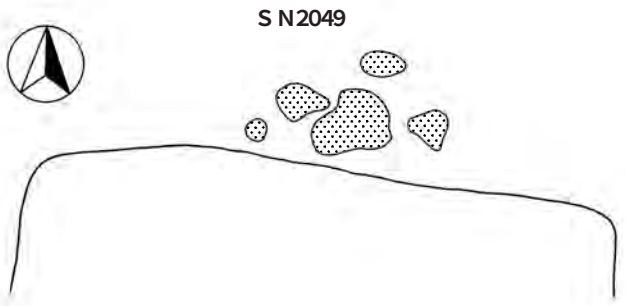


1　2.5YR4/6赤褐色　シルト　しまり強　粘性なし

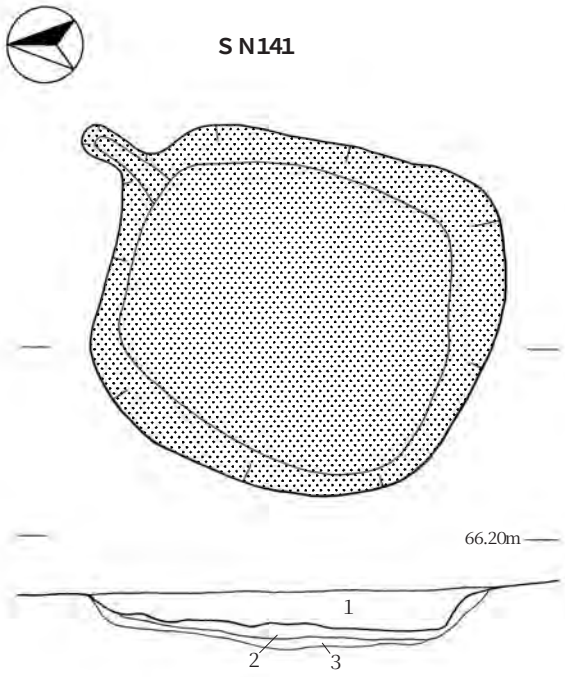
第133図　ＳＤ1410、ＳＮ1582・1626・1726・1727・1728



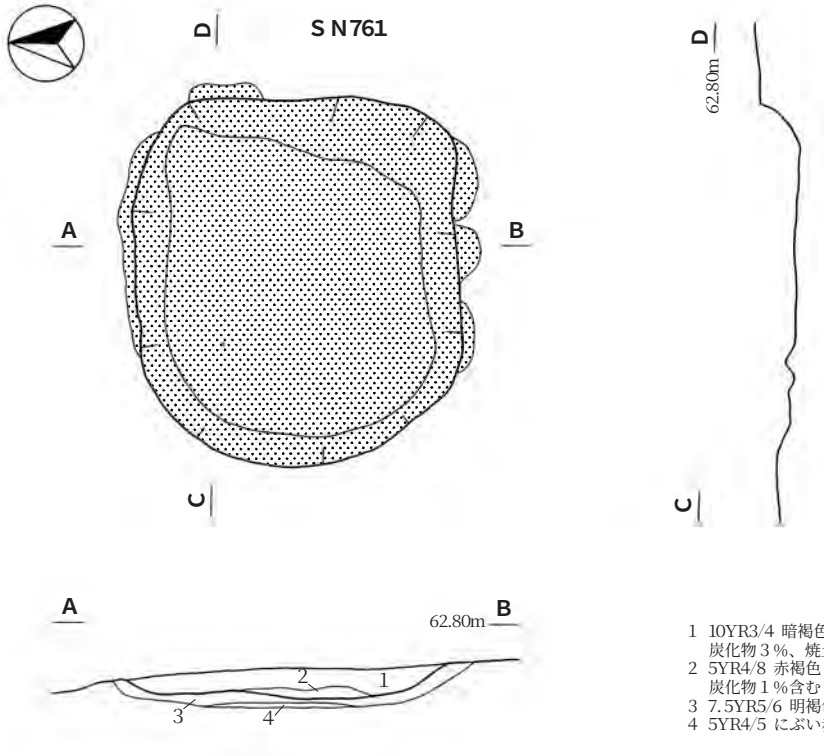
1 5YR4/8赤褐色 砂 しまり強 粘性なし
2 10YR4/4褐色 シルト～砂 炭化物φ1㎜ 1％含む しまり強 粘性弱



第134図　SN1817・2049

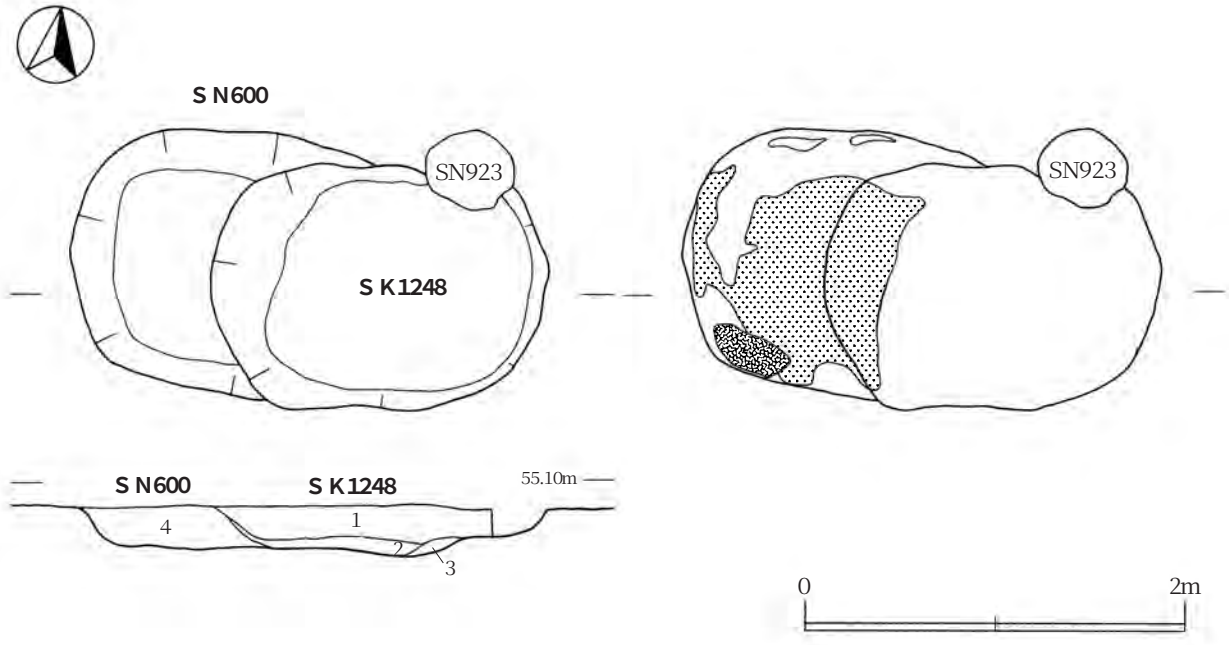


1 10YR3/4 暗褐色 シルト しまり中 粘性中
炭化物３%、焼土φ５～15㎜10%含む
2 5YR4/8 赤褐色 シルト しまり強 粘性中
レンガ状に固くしまる
3 7.5YR5/6 明褐色 シルト しまり強 粘性中

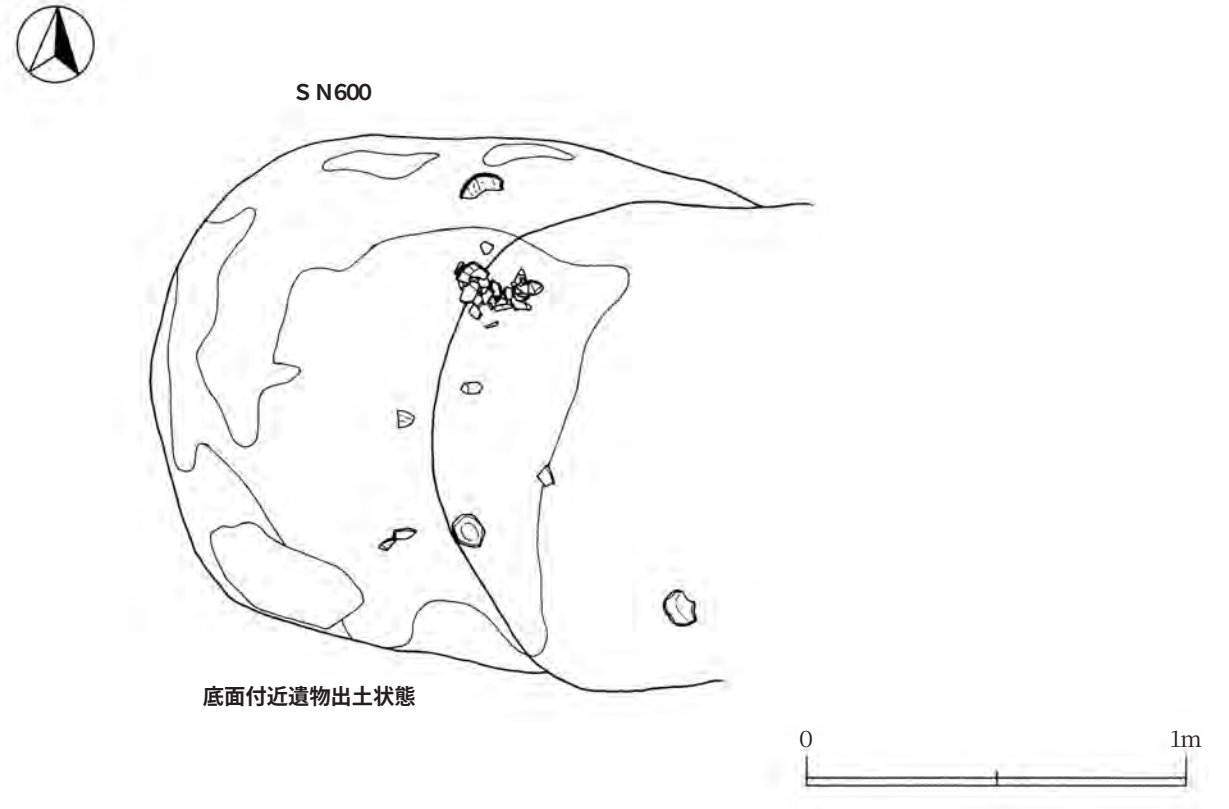


1 10YR3/4 暗褐色 シルト しまり中 粘性中
炭化物３%、焼土10%含む
2 5YR4/8 赤褐色 シルト しまり強　粘性弱
炭化物１%含む
3 7.5YR5/6 明褐色 シルト しまり強 粘性弱
4 5YR4/5 にぶい赤褐色 シルト しまり強 粘性弱

第135図　SN141・761



1 7.5YR4/4褐色 シルト 地山ブロックφ1～20㎜ 5%、炭化物φ1㎜ 1%、焼土φ1～3㎜ 2%含む しまり強 粘性なし
2 10YR2/2黒褐色 シルト しまり中 粘性弱
3 10YR3/3暗褐色 シルト しまり強 粘性弱
4 7.5YR4/4褐色 シルト 地山ブロックφ1～10㎜ 5%、焼土φ1～3㎜ 1%含む しまり強 粘性なし



第136図　SK1248、SN600

８　炭焼き遺構

３基検出された。円形の鍋底状の掘り込みをもち、壁が被熱し、底面付近に大量の炭化材が残るものを炭焼き遺構とした。

９　性格不明遺構

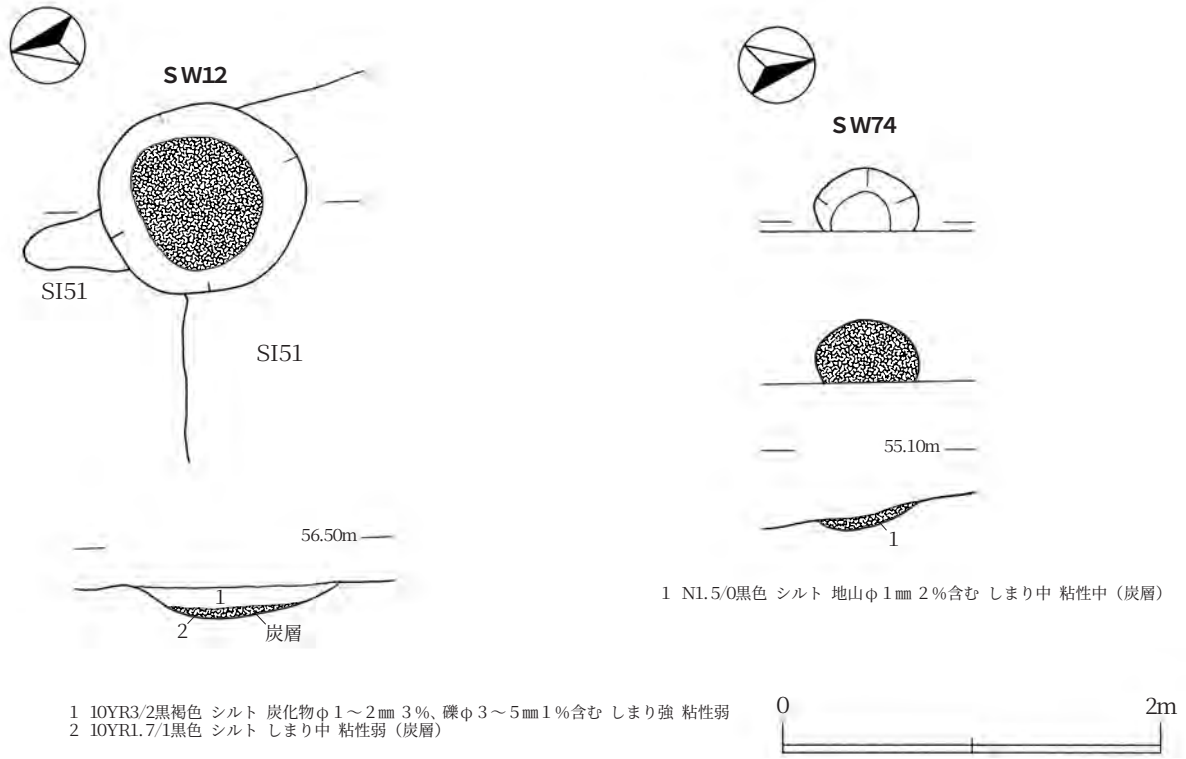
３基検出された。土器の集中地点、明確な掘り込みをもたない不定形の遺構を性格不明遺構とした。

10　柵列

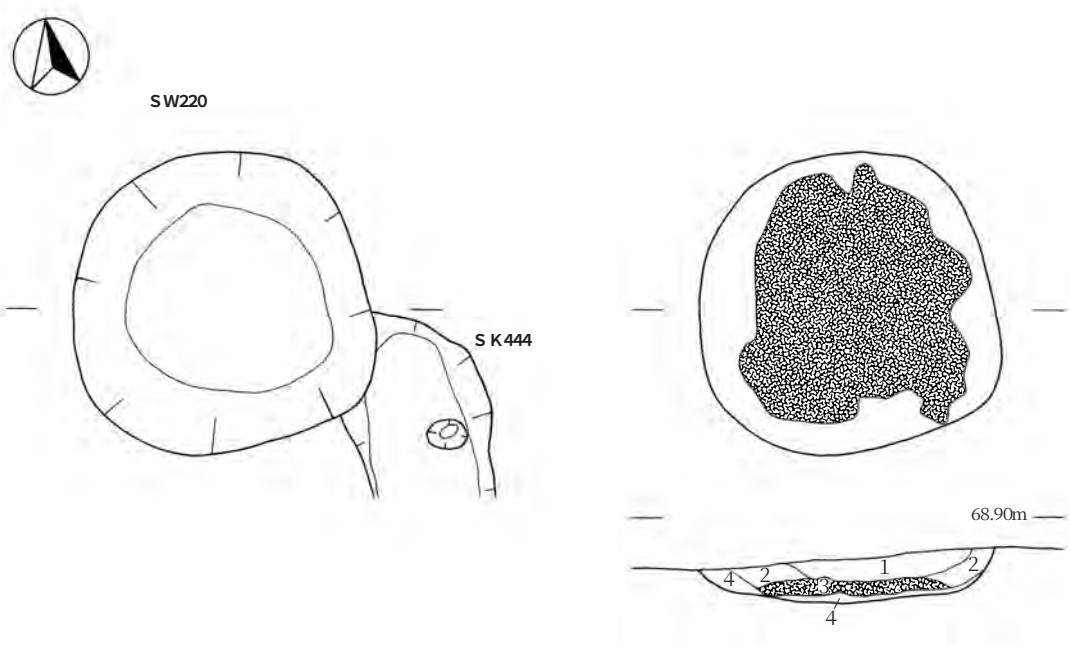
１条検出された。ほぼ等間隔で直線上に柱穴が並び、掘立柱建物跡にはならないものを柵列とした。

第26表　炭焼遺構・性格不明遺構・柵列一覧（１）

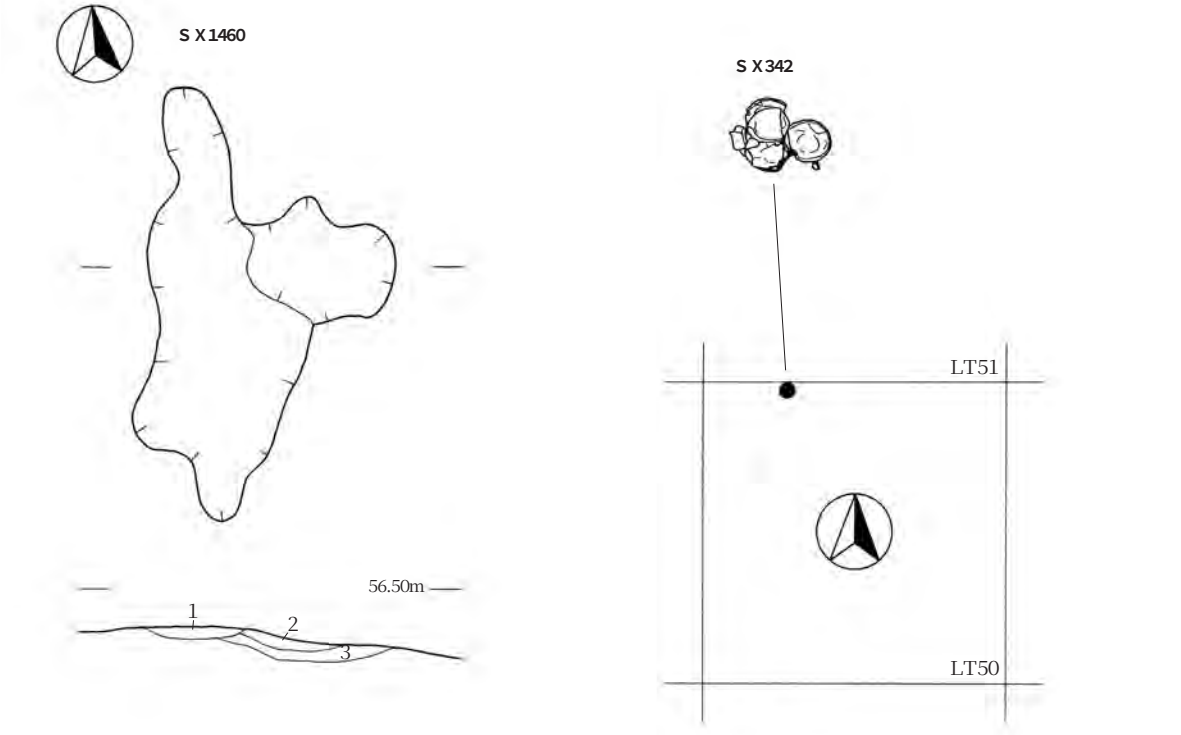
遺構名	番号	挿図番号	図版番号	グリッド	確認面(層)	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	重複
ＳＷ	12	137	－	ＭＯ・Ｐ46	ＳＩ51覆土	1.1	0.99	0.17	ＳＩ51→ＳＷ12
ＳＩ51覆土上に掘り込まれている。平面形は円形で、壁は底面から緩やかに立ち上がる。底面には炭が堆積する。遺物：土師器２点出土。									
ＳＷ	74	137	－	ＭＴ45	Ⅶ	0.57	0.33	0.08	なし
平面形は円形で壁は緩やかに立ち上がる。覆土は炭化物層である。遺物：土師器１点出土。									
ＳＷ	220	137	－	ＫＱ49	Ⅶ	1.7	1.68	0.25	ＳＫ441→ＳＷ220
平面形は円形に近い。底面はほぼ平坦で西側以外の壁はやや急角度で立ち上がる。底面付近に炭化物層が広がる。遺物：土師器コンテナ１／２箱出土。									
ＳＸ	342	139	36	ＬＴ50	Ⅲ	－	－	－	なし
５個体の土師器（坏）がまとまって出土。遺物：（第190図７～11、図版46・47）									
ＳＸ	590	138	－	ＭＩ47・48	Ⅶ	3.2	1.5	0.07	ＳＸ590→ＳＤ194・ＳＫＰ1260・1792
浅い窪地のような遺構で、底面から土師器、炭化材、被熱礫などが出土。覆土には焼土を含む。遺物：土師器、被熱礫などコンテナ２箱出土。									
ＳＸ	1460	139	－	ＭＧ・ＭＨ47・48	Ⅶ	2.3	1.31	0.1	なし
不定形の掘り込み。									
ＳＡ	93	99	－	ＭＳ・ＭＴ47	Ⅶ	5.0	－	－	なし
調査区東側平坦面中央部に位置する。３基のピットにより構成され、そのラインはほぼ東西方向である。									



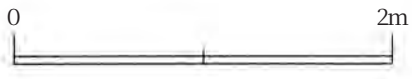
第137図　ＳＷ12・74



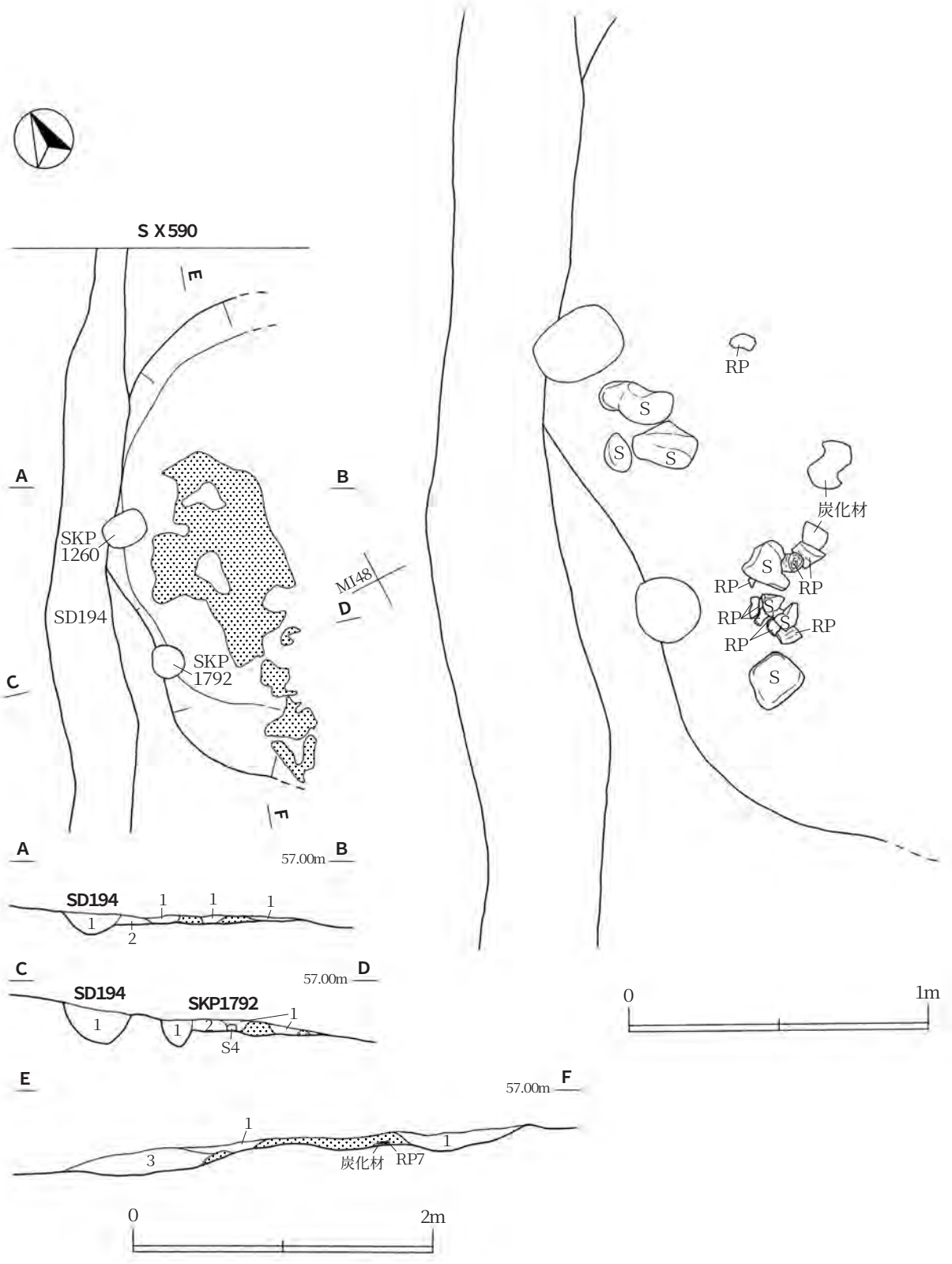
1 10YR4/6褐色 シルト 炭化物30%含む しまり中 粘性中
2 10YR2/3黒褐色シルト＋10YR4/6褐色シルト しまり中 粘性中
3 10YR2/2黒褐色 シルト 炭化物φ１～40㎜ 20%含む しまり弱 粘性中
4 10YR4/6褐色 シルト しまり強 粘性中



1 10YR2/3黒褐色 シルト 炭化物φ１㎜ １%含む しまり強 粘性弱
2 7.5YR3/3暗褐色 シルト 焼土φ１～２㎜ １%含む しまり強 粘性弱
3 7.5YR3/4暗褐色 シルト 地山φ１～３㎜ １%、礫φ１～10㎜ １%含む しまり強 粘性弱



第138図　SW220、SX342・1460



1　10YR4/4褐色　シルト　焼土φ１㎜　１％含む　しまり強　粘性なし
2　10YR3/4暗褐色　シルト　焼土φ１～３㎜　３％、炭化物φ１㎜　１％含む　しまり強　粘性なし
3　7.5YR4/6褐色　シルト　しまり強　粘性なし

第139図　ＳＸ590

11　溝状遺構

53条検出された。塀として機能していたと考えられるものと、溝として機能していたと考えられるものがある。溝として機能していたと考えられるものの中には、土師器などの遺物が大量に出土したものがあり、何らかの祭祀が行われていた可能性が考えられる。

第27表　溝状遺構（1）

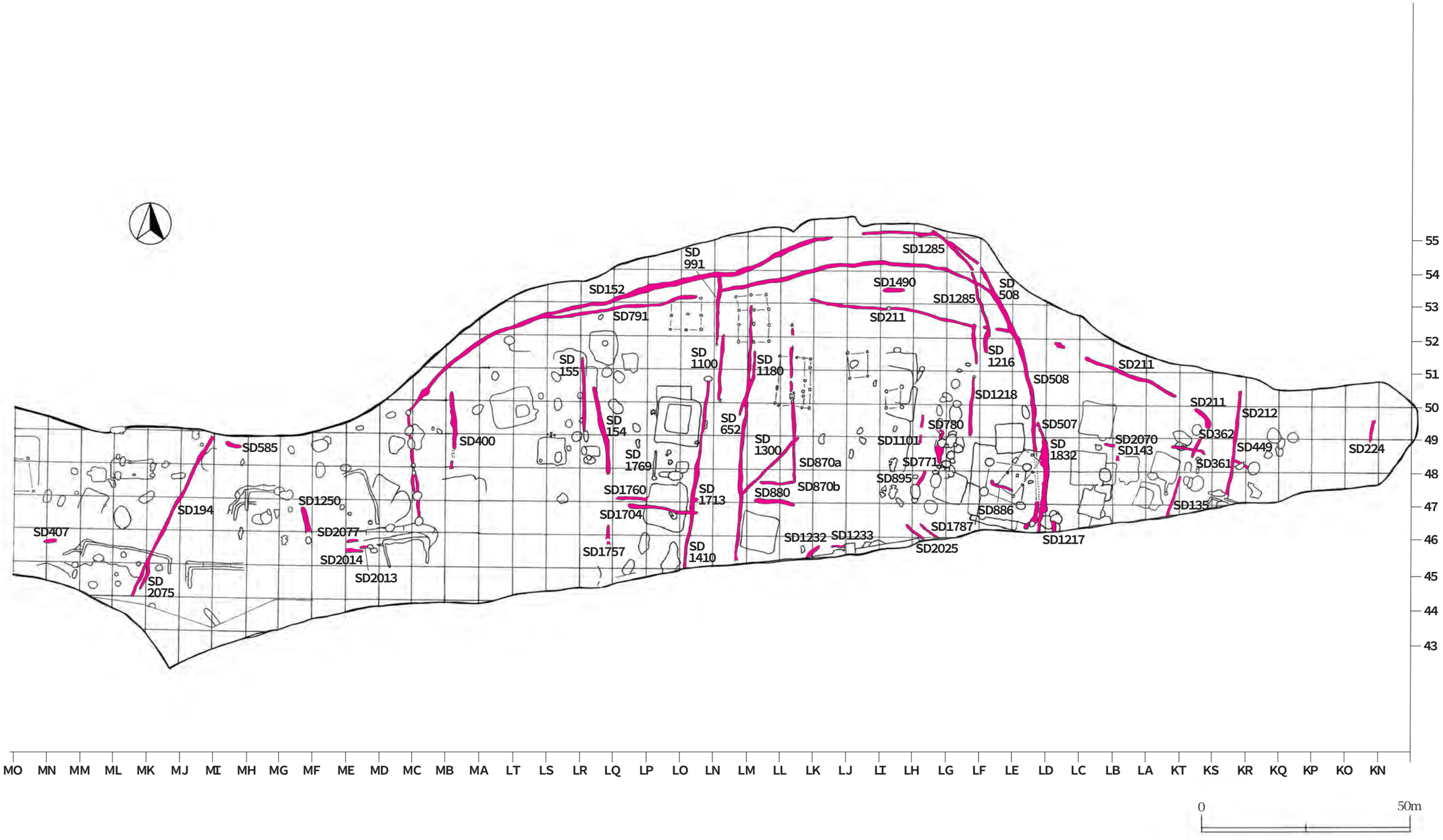
	種類	番号	挿図番号	図版番号	グリッド	確認面(層)	長さ(m)	短軸(m)	深さ(m)	重複
1	ＳＤ	135	150	－	ＫＴ46・47、ＫＳ47	Ⅶ	5.06	0.24	0.12	なし
	北東－南西方向に延びる柱穴を伴う溝である。遺物：土師器ポリ袋中１袋出土。									
2	ＳＤ	143	152	－	ＬＡ48	Ⅶ	1	0.17	0.09	なし
	南北方向の短い溝である。									
3	ＳＤ	152	142 143 146	23 24 25 26 27	ＭＡ52	Ⅳ	89.36	0.4m前後	0.45～0.6	ＳＤ211→ＳＤ1050→ＳＤ152→ＳＤ1285
	柱穴を伴う溝である。ＬＳ52グリッドからＬＮ53グリッドに及ぶ範囲では、方形状の大きな柱穴（長さ：0.73～1.05m、幅：0.42～0.77m、深さ：0.72～1.064m）が７か所（その他にも１か所あり）みられる。他の部分でみられる柱穴は円形でＳＤ508と一連の溝と考えられる。ＳＤ152とＳＤ508を合わせた総延長は、122.8mに及ぶ。当遺構より古いＳＤ508と重複する部分が15mほどある。集落を囲む溝としては最も長い。遺物(第184図３～14、第185・186図、第188図14）：土師器コンテナ４箱、須恵器コンテナ１／４出土。									
4	ＳＤ	154	148	28	ＬＱ47～50	Ⅶ	10.58	0.78	0.16	ＳＫＩ790と重複（新旧不明）
	ＳＫＩ790と重複する。南北方向に延びる溝である。遺物（第187図１・２）：土師器ポリ袋中１袋出土。									
5	ＳＤ	155	149	28	ＬＱ49～51	Ⅶ	9.7	0.42	0.16	ＳＫ204→ＳＤ155、ＳＫＩ790→ＳＤ155→ＳＫＩ273
	ＳＫＩ273と重複する。南北方向に延びる溝である。覆土からは大量の遺物が出土した。遺物（第187図３～14、第188図１～11）：土師器コンテナ２箱、須恵器１点出土。									
6	ＳＤ	194	151	28	ＭＫ44	Ⅵ	21.3	0.5	0.34	ＳＸ590→ＳＤ194、ＳＫＩ2064→ＳＤ194
	北東－南西方向に延びる溝である。北端と南端は斜面の影響で不明瞭になっている。覆土は周辺の遺構と異なり濃い色調である。当遺跡の層位の特徴から、比較的新しい時期のものと考えられる。遺物（第188図12）：土師器ポリ袋中1.5袋出土。									
7	ＳＤ	211	146	26	ＬＧ52	Ⅶ	52.48	0.15	0.1前後	ＳＤ211→ＳＤ508→ＳＤ1285
	布掘り状の溝である。ＳＤ507とＳＤ1050の重複部分に切られている（平面で確認）。507と1050の関係（1050から508への連続的変化）から、ＳＤ211よりこれらの溝が新しいと考えられる。また、ＳＢ1330を挟んで対称の位置にあるＳＤ791は、当遺構と一連の溝として構築されたと考えられる（底面形状が異なるのは、ＳＤ1050構築時に底面を掘り込んで改築したためと考えられる）。柱穴は径0.35m前後のものが多いが、西端部では径0.5m前後の大きなものもみられる。深さはいずれも0.35m前後である。遺物：土師器ポリ袋小１袋（２点）出土。									
8	ＳＤ	212	150	26	ＫＲ50	Ⅶ、ＳＩ139覆土（２層）	13.64	0.54	0.14	ＳＫ227→ＳＩ139→ＳＤ212
	南北方向に延びる溝である。覆土は周辺の遺構と異なり濃い色調である。当遺跡の層位の特徴から、比較的新しい時期のものと考えられる。遺物：土師器小片１点、須恵器３点出土。									
9	ＳＤ	224	152	－	ＫＮ49	Ⅶ	2.93	0.23	0.05	なし
	南北方向に延びる溝である。遺物：土師器２点出土。									
10	ＳＤ	361	106	－	ＫＴ48	Ⅶ	4.18	0.27	0.12	ＳＫ448→ＳＮ219→ＳＤ361、ＳＤ362→ＳＤ361
	東西方向に延びる溝である。遺物：土師器２点出土。									
11	ＳＤ	362	106	－	ＫＳ48	Ⅶ	3	0.23	0.13	ＳＤ362→ＳＤ361
	北東－南西方向に延びる溝である。遺物：土師器２点出土。									
12	ＳＤ	400	148	－	ＭＡ49	Ⅶ	8.92	0.44	0.16	なし
	南北方向に延びる溝である。遺物（第188図13）：土師器ポリ袋中１袋出土。									
13	ＳＤ	407	152	－	ＭＭ45	Ⅶ	1.48	0.2	0.2	なし
	東西方向の短い溝である。									
14	ＳＤ	449	110	－	ＫＲ48	Ⅶ	(1.78)	0.2	0.08	ＳＤ449→ＳＫ445、ＳＤ212と重複するが新旧は不明である。
	北西－南東方向に延びる溝である。									
15	ＳＤ	507	145	－	ＬＤ47	Ⅵ	(13.02)	0.44	57.7	ＳＤ1832と重複（新旧不明）
	底面に柱穴を伴う構造の共通点から、ＳＤ508（ＳＤ152）本来の軌道と推測される（ＬＤ49グリッド内でＳＤ508に連絡）。重複するＳＤ1832は改築に伴う部分と考えられる。遺物（第188図15～18）：土師器コンテナ１／３出土。									
16	ＳＤ	508	145	－	ＬＤ47	Ⅵ	33.36	0.56	0.46	ＳＤ1050→ＳＤ152
	ＳＤ152と一連の溝とみられる。ＳＤ1050と重複する部分が多いが、当遺構の方が新しい。当遺構は底面に柱穴を伴う布掘り状の溝であるが、ＳＤ1050は柱穴を伴わない。この構造のちがいから、ＳＤ508はＬＤ47グリッド内でＳＤ507と連絡するのが本来の軌道と推測される。したがって、この連絡部分以南のＳＤ508は、本来のＳＤ1050と推測される。遺物（第189図１～３）：土師器ポリ袋中１袋、須恵器１点（ＳＤ152と接合）出土。									

第28表　溝状遺構（２）

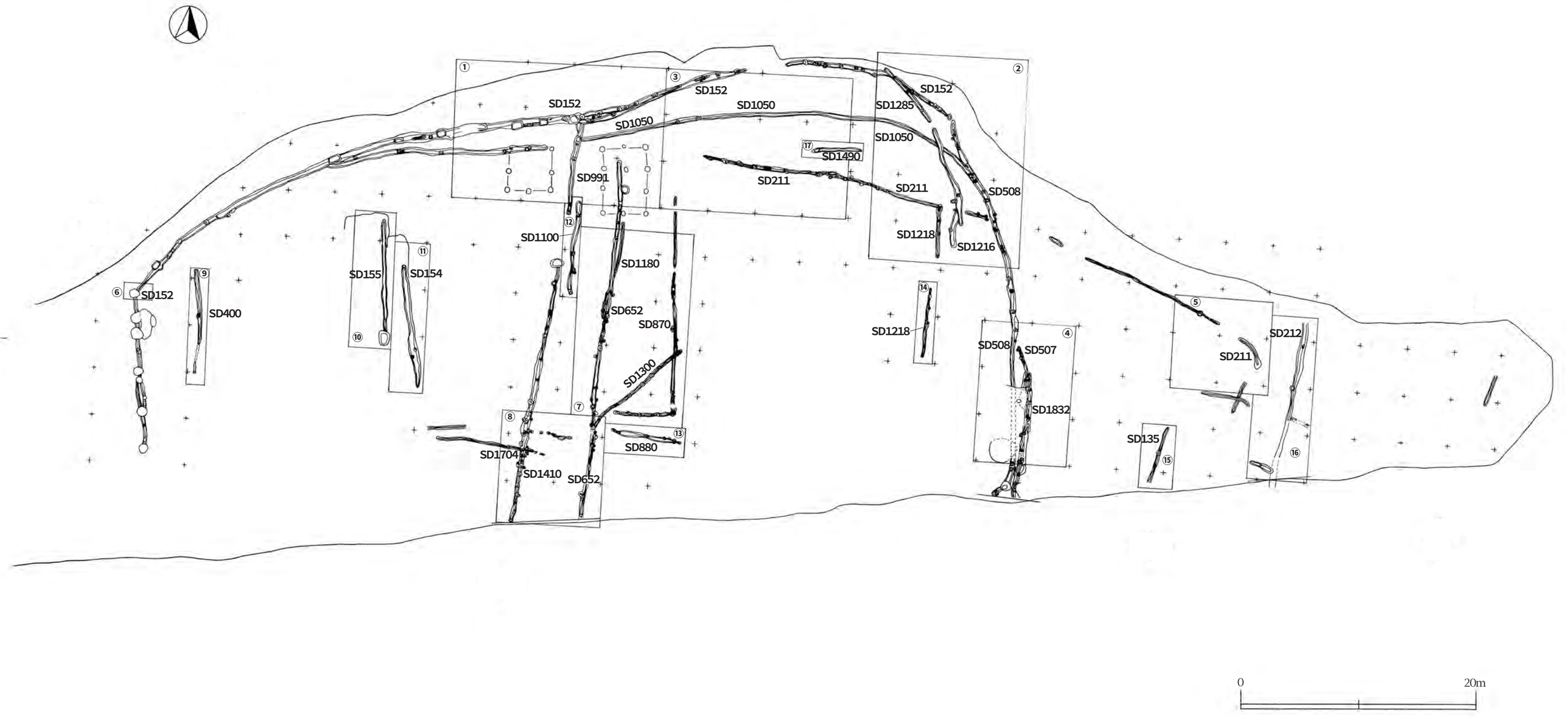
	種類	番号	挿図番号	図版番号	グリッド	確認面(層)	長さ(m)	短軸(m)	深さ(m)	重　　複
17	ＳＤ	585	91	－	ＭＨ48	Ⅶ	1.92	0.45	0.19	ＳＫＰ586→ＳＤ585
	調査区北端付近に東西方向に延びる短い溝である。									
18	ＳＤ	652	147	27	ＬＭ45～49、ＬＬ49～52	Ⅶ、その他	30.8	0.72	0.34	ＳＤ1180→ＳＤ652→ＳＤ1300
	ＳＤ1180と重複する南北方向に延びる布掘り溝である。遺物（第189図４）：土師器ポリ袋中0.5袋、須恵器１点・錫杖状鉄製品１点出土。									
19	ＳＤ	771	152	－	ＬＧ48	Ⅵ	3.09	0.47	0.12	ＳＫ893と重複（新旧不明）
	南北方向に延びる溝である。遺物（第189図５～10）：土師器コンテナ１／３、須恵器４点出土。									
20	ＳＤ	780	152	－	ＬＧ48・49	Ⅵ	2.32	0.22	0.13	ＳＫ893と重複（新旧不明）
	直角に折れ曲がる溝である。変曲点に柱穴があるため竪穴住居の可能性がある。西側は古代の整地によって、緩やかにカットされた状態であるため、全体の形態は不明である。									
21	ＳＤ	791	142	23	ＬＲ52	Ⅶ	18.8	0.35m前後	0.35m前後	（ＳＤ791古→ＳＤ791新）
	ＳＤ508に切られている。当遺構の東側にはＳＤ1050があり、当遺構の延長線上にあること、溝の形状が類似する点から一連のものとして機能していたと考えられる。また当遺構はＳＤ211の延長線上にもあり、かつＳＢ1330を挟み当遺構とＳＤ211が対称の位置にあることから、ＳＤ211とも一連のものとして機能していた時期があると考えられる。遺物：ポリ袋中２袋出土。									
22	ＳＤ	823	153	27	ＭＩ43	Ⅴ	3.13	0.79	0.42	なし
	Ⅴ層を掘り込んでつくられているが、上部層が削平を受けているため掘り込み面は不明である。土層断面観察で本来はもっと大きな溝であることが判明した。ただし、覆土はⅤ層に酷似することから、平面での確認は困難である。									
23	ＳＤ	870a	147	27 28	ＬＫ51	Ⅶ	18.64	0.27	0.43	ＳＤ870→ＳＤ1300
	南北方向にのびる布掘り溝である。ＳＤ870ｂと連続する。遺物：ａ・ｂ共通土師器ポリ袋中0.5袋出土。									
24	ＳＤ	870b	147	27	ＬＫ・ＬＬ47	Ⅶ	5.04	0.26	0.17	なし
	東西方向にのびる布掘り溝である。ＳＤ870ａと連続する。遺物：ａ・ｂ共通土師器H0.5袋出土。									
25	ＳＤ	880	148	－	ＬＬ47	Ⅶ	5.86	0.5	0.16	なし
	東西方向にのびる溝で、ＳＤ870の南側に位置する。遺物：土師器ポリ袋小１袋出土。									
26	ＳＤ	886	59	－	ＬＥ47	ＳＩ777覆土	2.8	0.21	0.27	ＳＩ777→ＳＤ886
	ＳＩ777覆土に掘り込まれている。東西方向にのびる溝である。									
27	ＳＤ	895	114	－	ＬＧ47	Ⅶ	(1.02)	0.48	0.09	ＳＤ895→ＳＫ768、ＳＫＰ769と重複(新旧不明)
	北東－南西方向に延びる溝である。									
28	ＳＤ	991	142	－	ＬＭ51・52・53	Ⅶ	7.88	0.56	0.68	なし
	ＳＤ1410の延長線上（４ｍ離れたところ）に位置する。構造も類似することから、同じ時期のものと考えられる。ＳＤ1050、ＳＤ152と接続するが、ＳＤ1050の接続地点から北側は、やや溝の幅が狭くなることから改築が行われた可能性がある。									
29	ＳＤ	1050	142 144	25 27	ＬＥ52	Ⅶ	8.86	0.11		ＳＤ1050→ＳＤ508→ＳＤ1285
	ＳＤ508とＳＤ1285に切られている。508とは、15ｍほど軌道を同じくする（重複する）部分がある。当遺構の西側にはＳＤ791があり、当遺構の延長線上にあること、溝の形状が類似する点から一連のものとして機能していたと考えられる。遺物：土師器ポリ袋小１袋出土。									
30	ＳＤ	1100	148	－	ＬＭ51	Ⅶ	8.12	0.42	0.24	なし
	ＳＤ991とＳＤ1410の東側にある溝である。これらの溝と方向が一致することから同時期の溝と考えられる。									
31	ＳＤ	1101	153	－	ＬＧ49	Ⅶ	3.52	0.22	0.05	なし
	南北方向に延びる溝である。									
32	ＳＤ	1180	147	－	ＬＬ50・51	Ⅶ	8.48	0.24	0.14	なし
	ＳＤ652と重複する南北方向に延びる布掘り溝である。									
33	ＳＤ	1216a	150	27	ＬＥ52	Ⅶ	4.58	0.28	0.18	なし
	ＳＤ211に接続する南北方向に延びる布掘り溝である。ＳＤ211と交差しないことや構造が類似することから、ＳＤ211を意識して造られた同時期の溝と考えられる。遺物：ａ・ｂ共通土師器ポリ袋小１袋出土。									
34	ＳＤ	1216b	150	27	ＬＥ52	Ⅶ	5.93	0.28	0.18	なし
	ＳＤ211に接続する南北方向に延びる布掘り溝である。ＳＤ211と交差しないことや構造が類似することから、ＳＤ211を意識して造られた同時期の溝と考えられる。遺物：ａ・ｂ共通土師器ポリ袋小１袋出土。									
35	ＳＤ	1217	153	－	ＬＣ46	Ⅶ	0.79	0.25	0.15	ＳＫ1021・1023・1025より古い。
	南北方向の溝である。土坑群完掘後底面から検出した。調査区外南側に延びるため全容は不明である。									
36	ＳＤ	1218	143	－	ＬＦ52	Ⅶ	3.12			ＳＤ1285と重複する。
	南北方向の溝である。									
37	ＳＤ	1232	153	－	ＬＫ45	Ⅶ	1.9	0.28	0.11	なし
	北東－南西方向の溝である。調査区外南側に延びるため全容は不明である。									
38	ＳＤ	1233	118	－	ＬＪ45	Ⅶ	1.78	0.24	0.15	なし
	北西－南東方向に延びる溝である。調査区外南側に延びるため全容は不明である。遺物：土師器１点出土。									

第29表　溝状遺構（３）

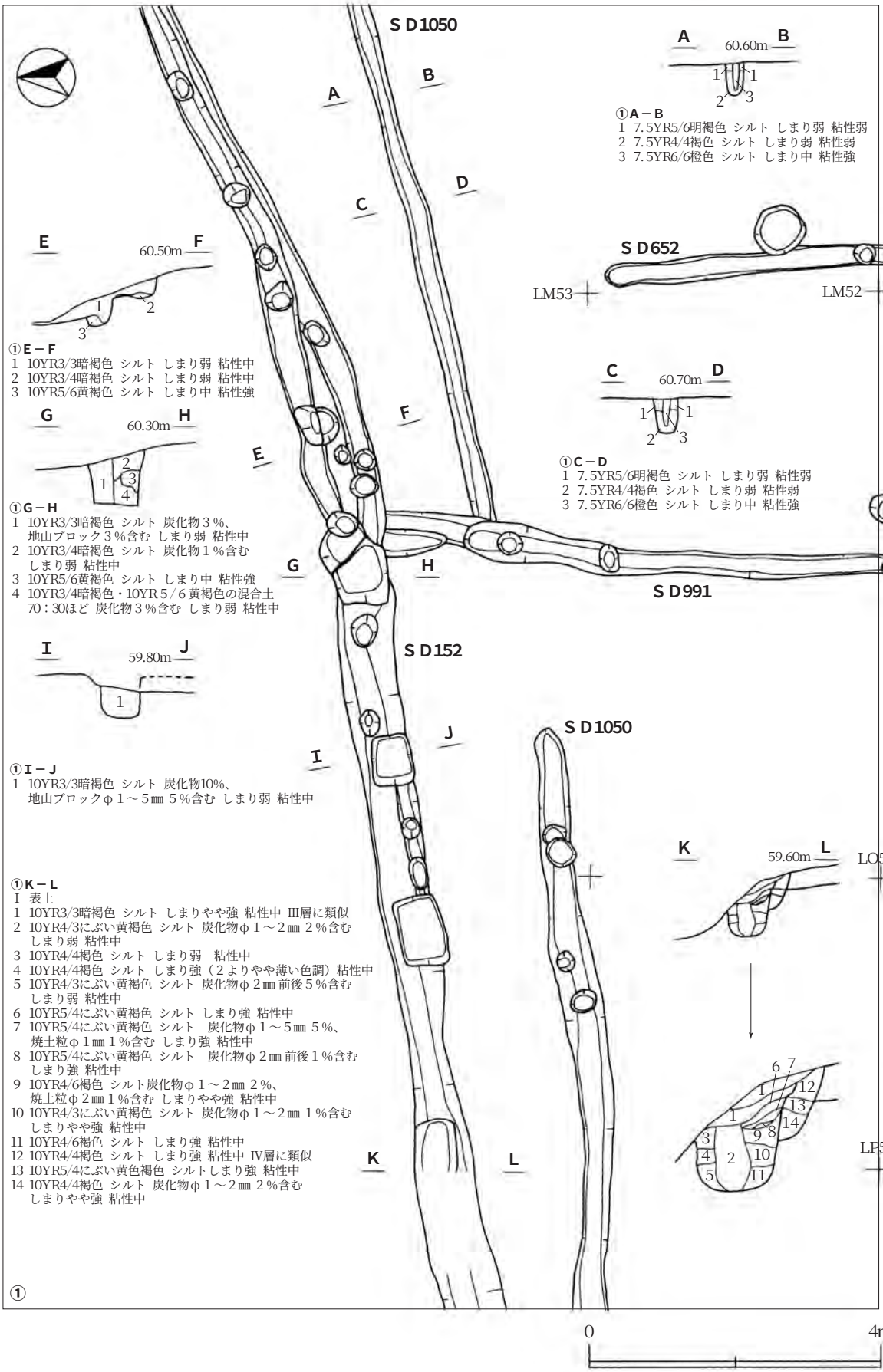
	種類	番号	挿図番号	図版番号	グリッド	確認面(層)	長さ(m)	短軸(m)	深さ(m)	重　　複
39	ＳＤ	1250	154	28	ＭＦ46	Ⅶ	3.58	0.6	0.18	なし
	覆土から、大量の土師器が出土。完形に近いものも多い。坏の他に長胴甕、皿などが出土。何らかの祭祀行為が行われた可能性がある。遺物（第190図１～５）：土師器コンテナ１箱出土。									
40	ＳＤ	1285	143	27	ＬＧ54・55、ＬＦ54	Ⅶ	14.7	0.58	0.2	ＳＤ1050→ＳＤ152→ＳＤ1285
	覆土は周辺の遺構と異なり濃い色調である。当遺跡の層位の特徴から、比較的新しい時期のものと考えられる。遺物：土師器ポリ袋小１袋出土。									
41	ＳＤ	1300	146	－	ＬＮ46	Ⅶ	5.04	0.26	0.28	なし
	ＳＤ652と重複する北東－南西方向に延びる布掘り溝である。遺物：土師器ポリ袋中0.5袋、須恵器１点出土。									
42	ＳＤ	1410	146	－	ＬＮ45	Ⅶ	22.8	0.62	0.67	なし
	ＳＤ991の延長線上（４ｍ離れたところ）に位置する。構造も類似することから、同じ時期のものと考えられる。遺物（第190図６）：土師器ポリ袋中２袋、須恵器１点出土。									
43	ＳＤ	1490	150	－	ＬＨ53	Ⅶ	4.32	0.39	0.12	なし
	ＳＤ211、ＳＤ1050の間に位置する東西方向の溝である。									
44	ＳＤ	1704	80	－	ＬＯ46	Ⅶ	8.36	0.26	0.13	ＳＩ1755→ＳＫ1754→ＳＤ1704
	ＳＩ1755覆土を掘り込んで造られた東西方向の溝である。遺物：土師器ポリ袋小１袋出土。									
45	ＳＤ	1713	80	－	ＬＮ47	Ⅶ	0.6	0.22	0.08	なし
	確認面からの掘り込みが浅いめ、底面付近のみ検出された状態である。									
46	ＳＤ	1757	153	－	ＬＱ46	Ⅶ	2.62	0.23	0.11	なし
	南北方向の溝である。									
47	ＳＤ	1760	155	－	ＬＰ47	Ⅳ	3.95	0.26	0.22	ＳＩ1755と重複（新旧不明）
	東西方向に延びる溝である。南に平行してＳＤ1704が延びている。									
48	ＳＤ	1769	155	－	ＬＯ48	Ⅳ	3.65	0.24	0.15	なし
	南北方向の溝である。ＳＩ153、ＳＩ1755の間にある。これらの住居西壁の直線ライン上に位置することか、同時期の溝と考えられる。									
49	ＳＤ	1787	155	－	ＬＧ46	Ⅵ	3.1	0.21	0.04	なし
	調査区東側の南境界付近に位置し、調査区外に延びる。確認面からの深さは極浅い。近接してＳＤ2025が位置する。									
50	ＳＤ	1832	145	－	ＬＣ47・48	Ⅶ	5.24	0.38	0.44	なし
	ＳＤ507の東に平行して位置する布掘り溝である。ＳＤ508の部分的な改築に伴う溝と考えられる。									
51	ＳＤ	2025	155	－	ＬＧ・ＬＨ46	Ⅶ	3.2	0.29	0.13	0.13
	調査区東側の南境界付近に位置し、調査区外に延びる。ピットを伴う。近接してＳＤ1787が位置する。									
52	ＳＤ	2013	92	－	ＭＤ45	Ⅶ	1.14	0.18	0.08	なし
	東西方向の短い溝である。									
53	ＳＤ	2014	92	－	ＭＤ45	Ⅶ	(2.4)	0.37	0.13	なし
	東西方向の短い溝である。									
54	ＳＤ	2075	89	－	ＭＪ45・46、ＭＫ45	Ⅶ	2.69	0.23		なし
	柱穴を伴う溝。ＳＫＩ2065の一部か。									
55	ＳＤ	2077	92	－	ＭＤ45	Ⅶ	1.3	0.28	0.25	なし
	東西方向の短い溝である。									



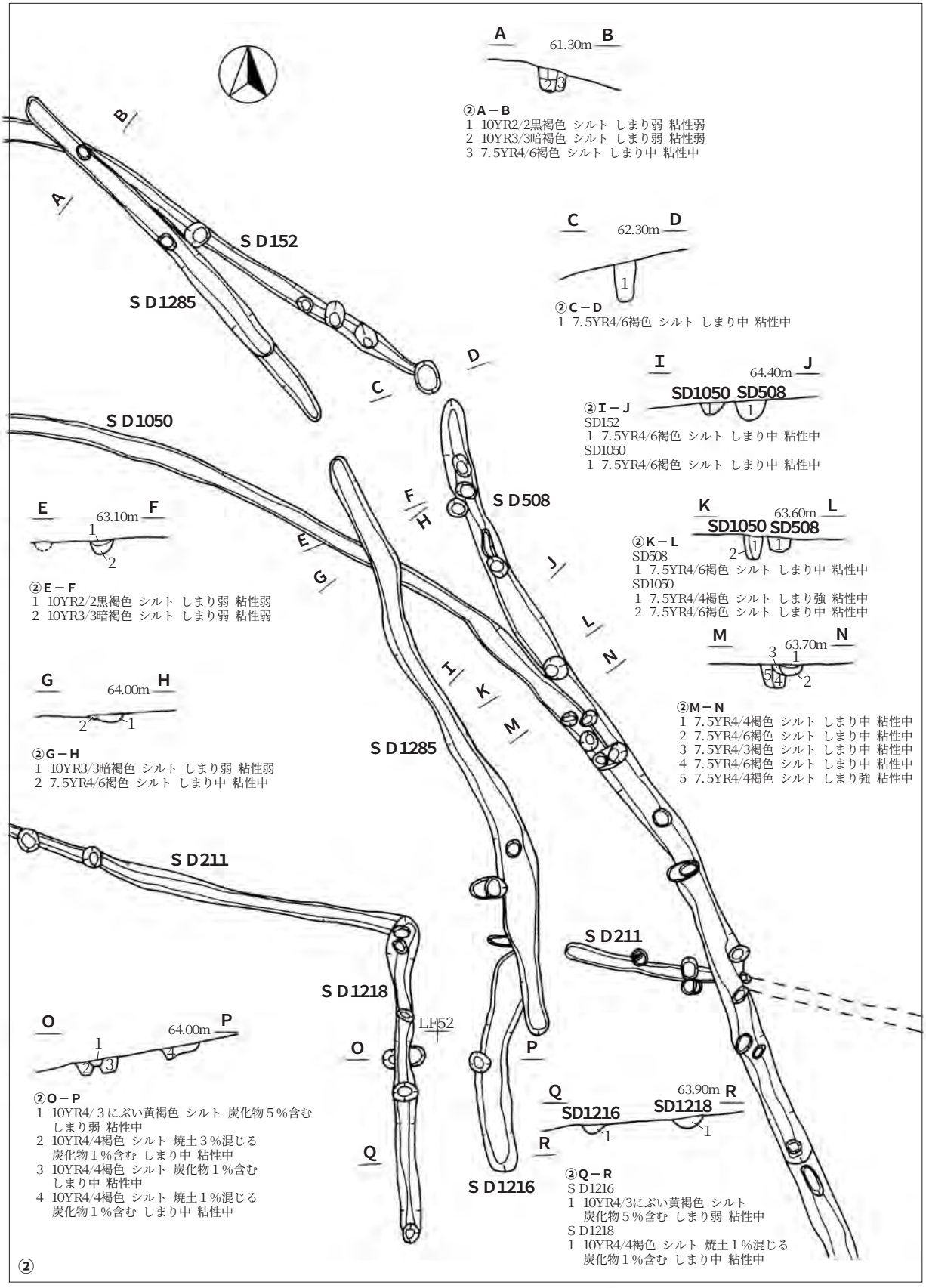
第140図　溝跡遺構配置図



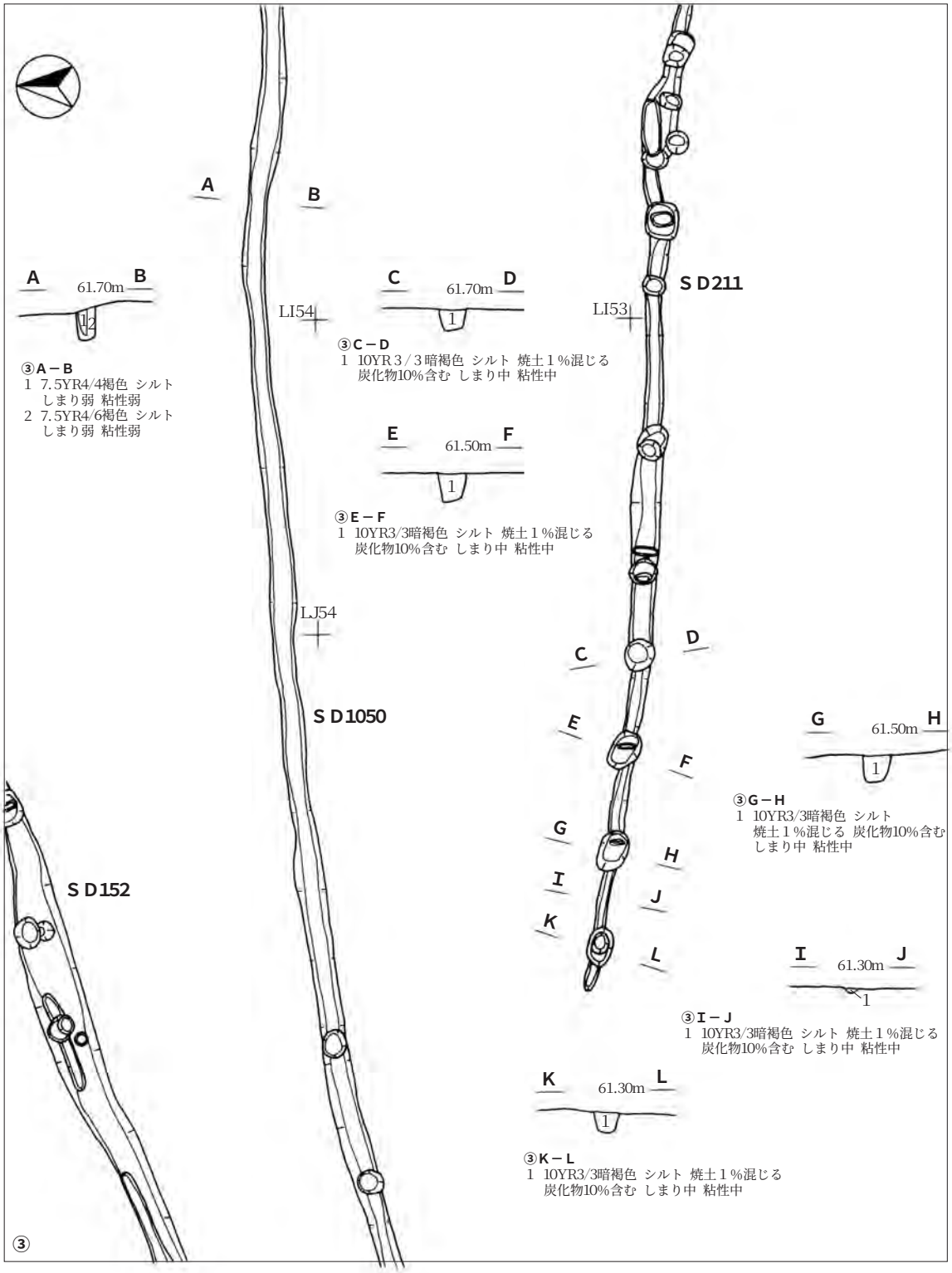
第141図　調査区東側溝跡詳細図区画



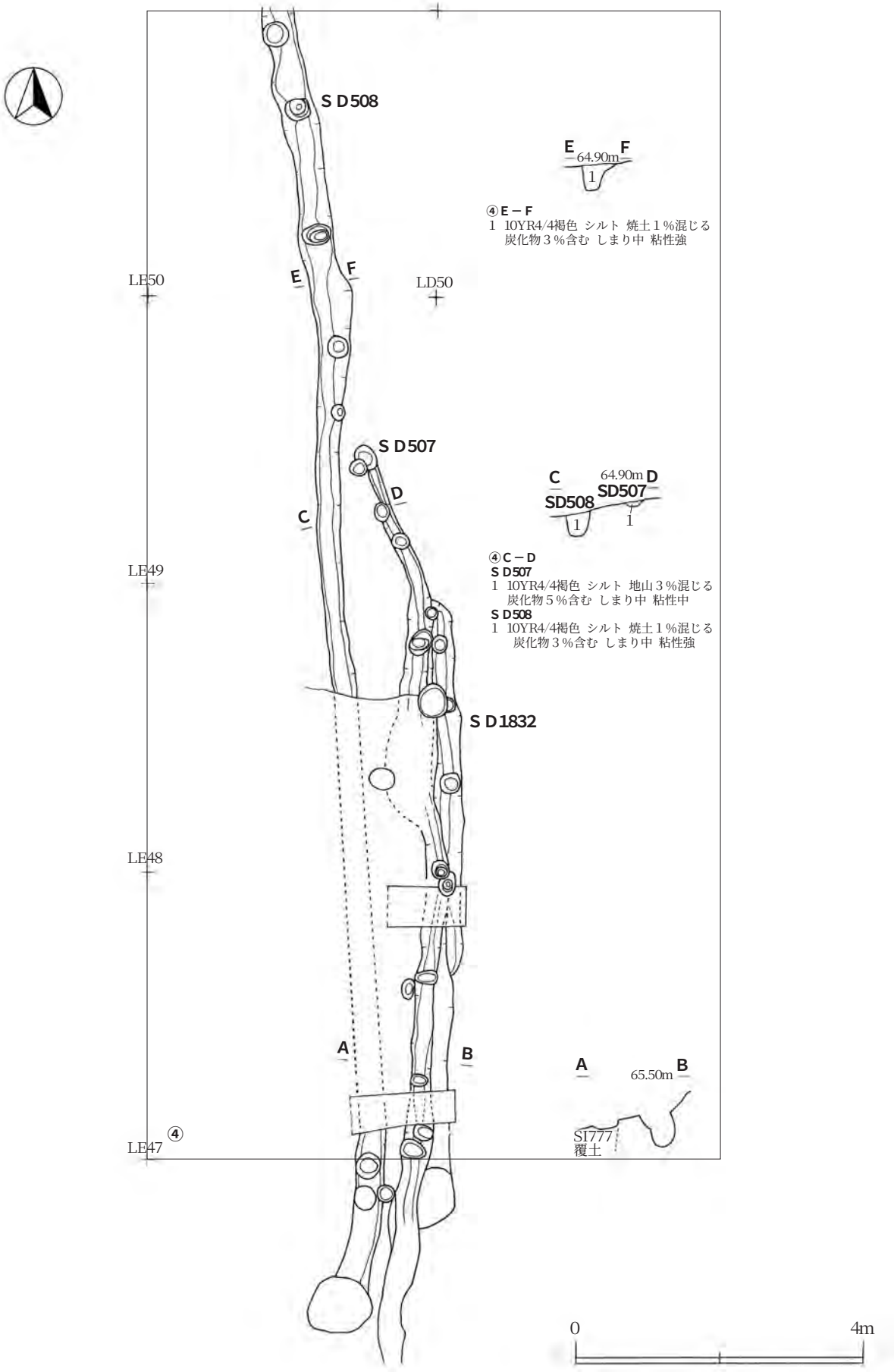
第142図　SD152・1050



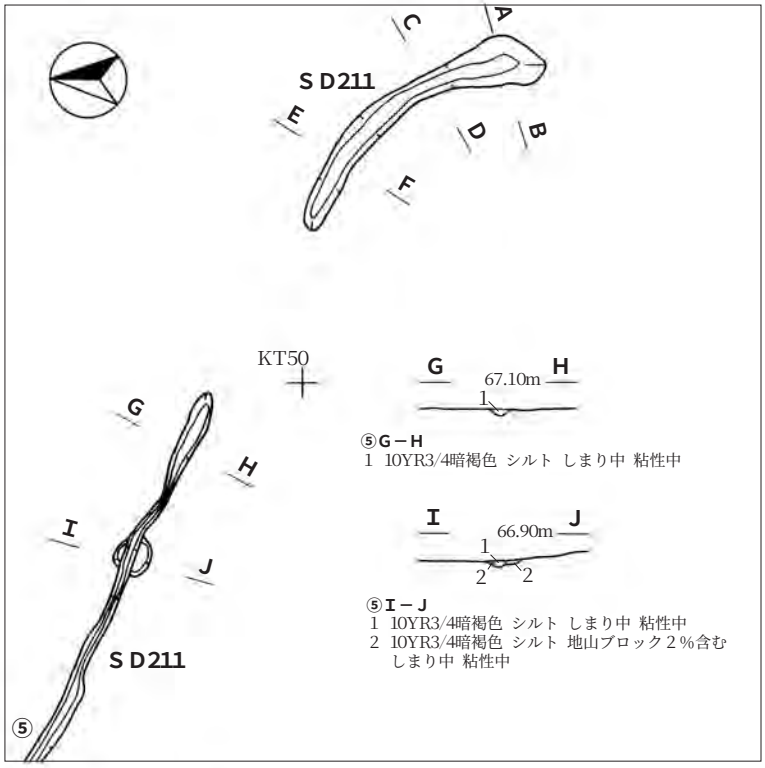
第143図　SD152・211・508・1050・1216・1218・1285



第144図　SD211・1050



第145図　SD507・508・1832



⑤A－B
1　10YR3/4暗褐色　シルト　しまり中　粘性中

A　67.60m　B

⑤C－D
1　10YR3/4暗褐色　シルト　しまり中　粘性中

C　67.70m　D

⑤E－F
1　10YR3/4暗褐色　シルト　しまり中　粘性中

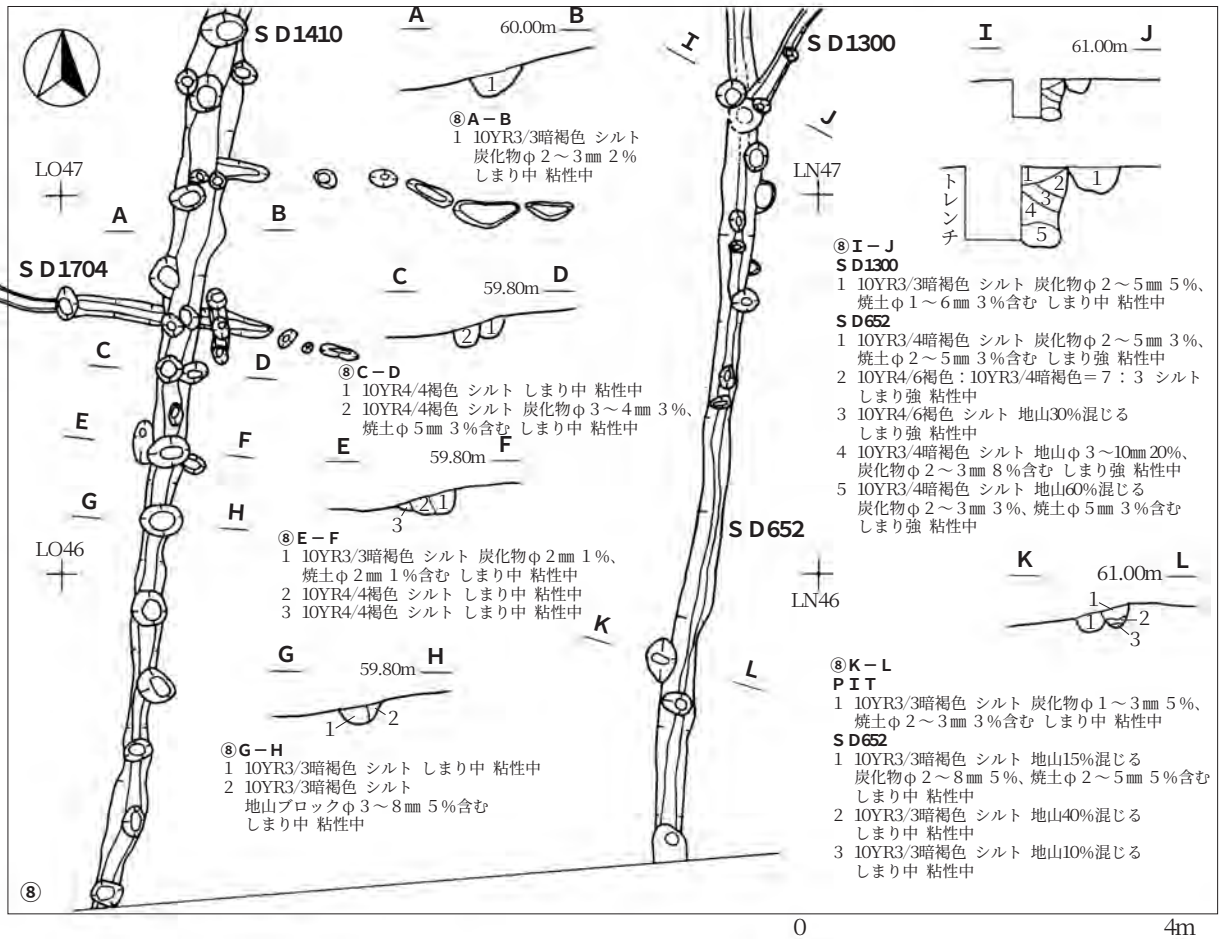
E　67.50m　F

⑤G－H
1　10YR3/4暗褐色　シルト　しまり中　粘性中

G　67.10m　H

⑤I－J
1　10YR3/4暗褐色　シルト　しまり中　粘性中
2　10YR3/4暗褐色　シルト　地山ブロック２%含む
　しまり中　粘性中

I　66.90m　J



⑧A－B
1　10YR3/3暗褐色　シルト
　炭化物φ２～３㎜ ２%
　しまり中　粘性中

A　60.00m　B

⑧C－D
1　10YR4/4褐色　シルト　しまり中　粘性中
2　10YR4/4褐色　シルト　炭化物φ３～４㎜ ３%、
　焼土φ５㎜ ３%含む　しまり中　粘性中

C　59.80m　D

⑧E－F
1　10YR3/3暗褐色　シルト　炭化物φ２㎜ １%、
　焼土φ２㎜ １%含む　しまり中　粘性中
2　10YR4/4褐色　シルト　しまり中　粘性中
3　10YR4/4褐色　シルト　しまり中　粘性中

E　59.80m　F

⑧G－H
1　10YR3/3暗褐色　シルト　しまり中　粘性中
2　10YR3/3暗褐色　シルト
　地山ブロックφ３～８㎜ ５%含む
　しまり中　粘性中

G　59.80m　H

⑧I－J
SD1300
1　10YR3/3暗褐色　シルト　炭化物φ２～５㎜ ５%、
　焼土φ１～６㎜ ３%含む　しまり中　粘性中
SD652
1　10YR3/4暗褐色　シルト　炭化物φ２～５㎜ ３%、
　焼土φ２～５㎜ ３%含む　しまり強　粘性中
2　10YR4/6褐色：10YR3/4暗褐色＝７：３　シルト
　しまり強　粘性中
3　10YR4/6褐色　シルト　地山30%混じる
　しまり強　粘性中
4　10YR3/4暗褐色　シルト　地山φ３～10㎜ 20%、
　炭化物φ２～３㎜ ８%含む　しまり強　粘性中
5　10YR3/4暗褐色　シルト　地山60%混じる
　炭化物φ２～３㎜ ３%、焼土φ５㎜ ３%含む
　しまり強　粘性中

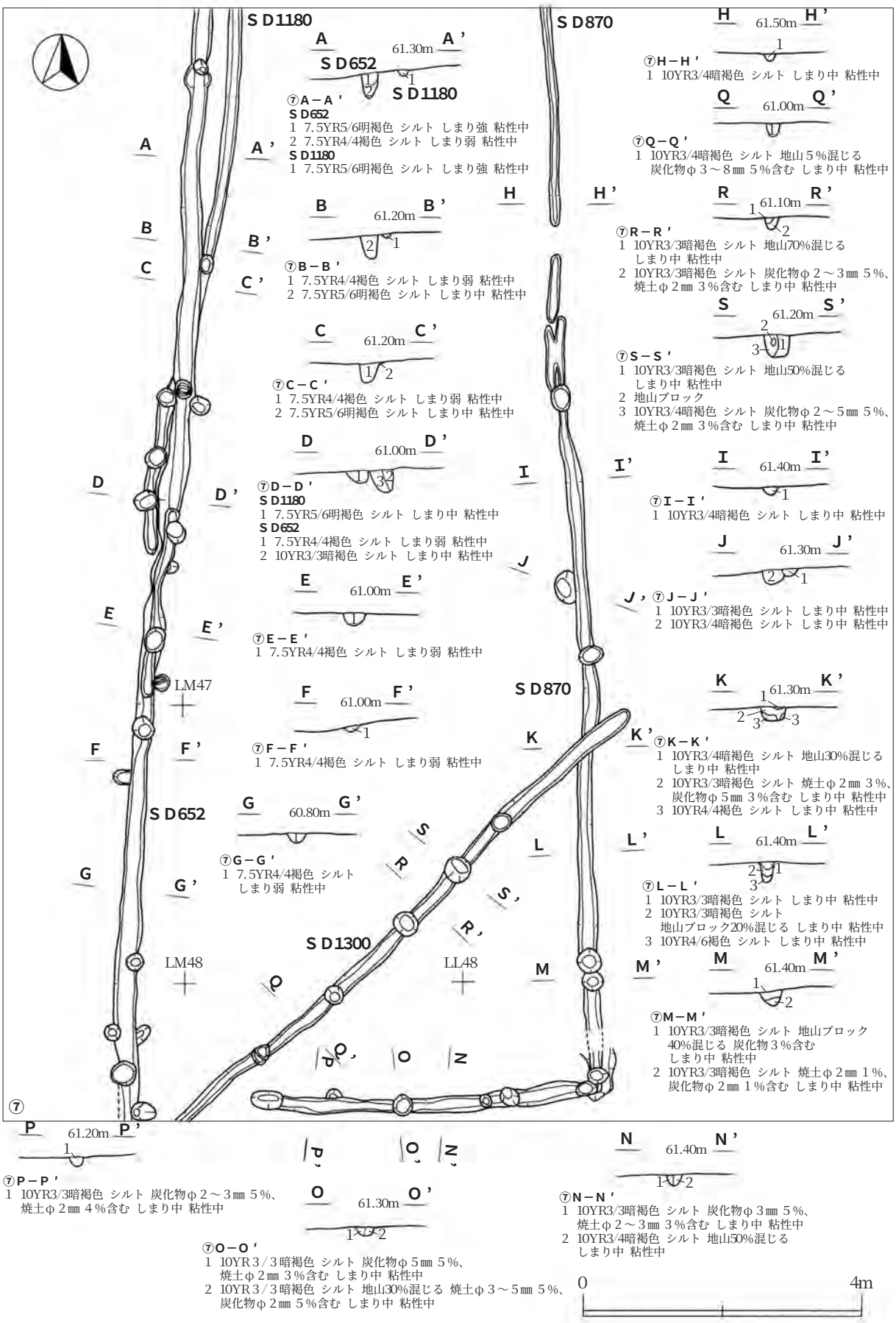
I　61.00m　J
トレンチ

⑧K－L
ＰＩＴ
1　10YR3/3暗褐色　シルト　炭化物φ１～３㎜ ５%、
　焼土φ２～３㎜ ３%含む　しまり中　粘性中
SD652
1　10YR3/3暗褐色　シルト　地山15%混じる
　炭化物φ２～８㎜ ５%、焼土φ２～５㎜ ５%含む
　しまり中　粘性中
2　10YR3/3暗褐色　シルト　地山40%混じる
　しまり中　粘性中
3　10YR3/3暗褐色　シルト　地山10%混じる
　しまり中　粘性中

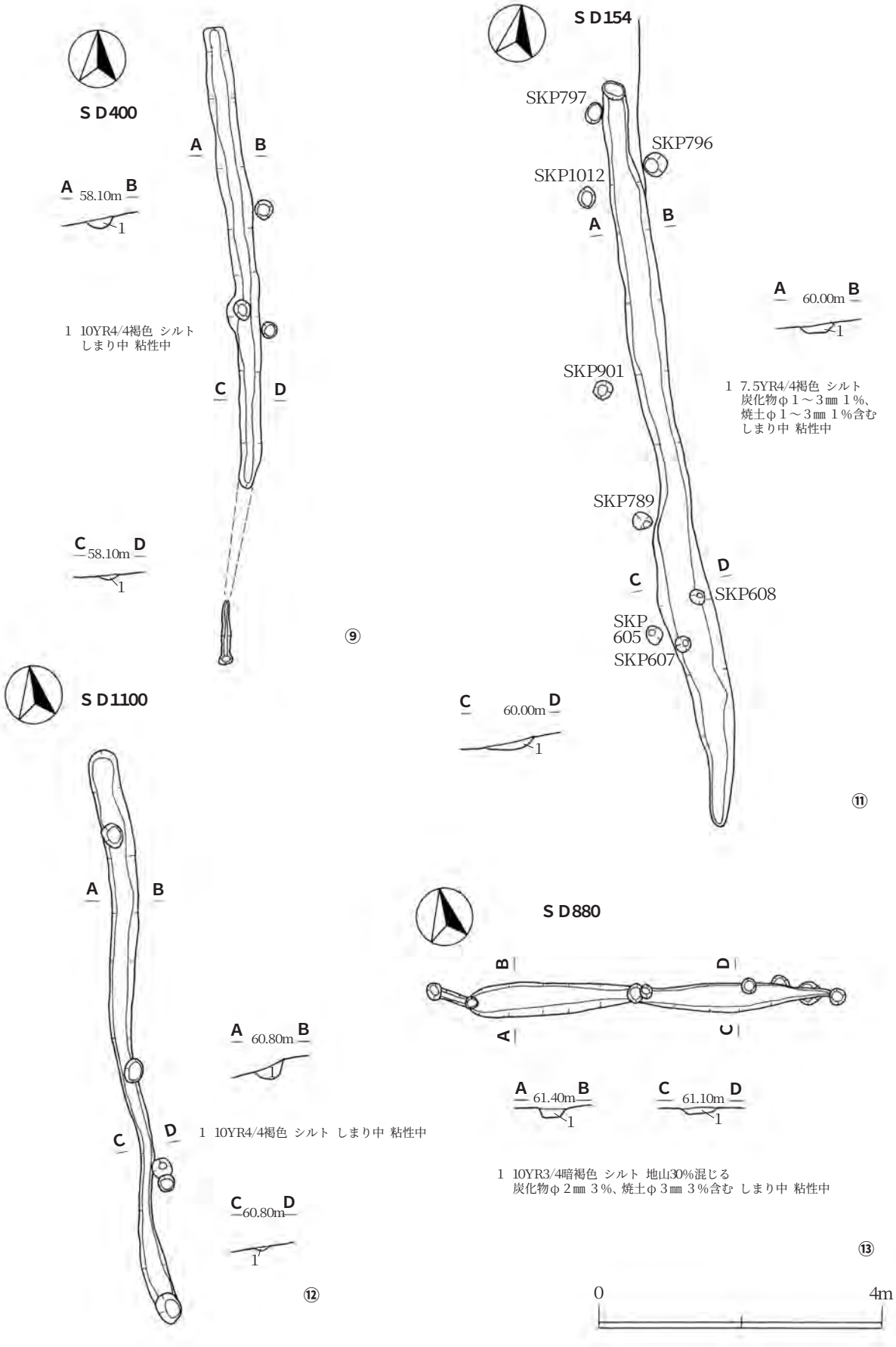
K　61.00m　L

0　4m

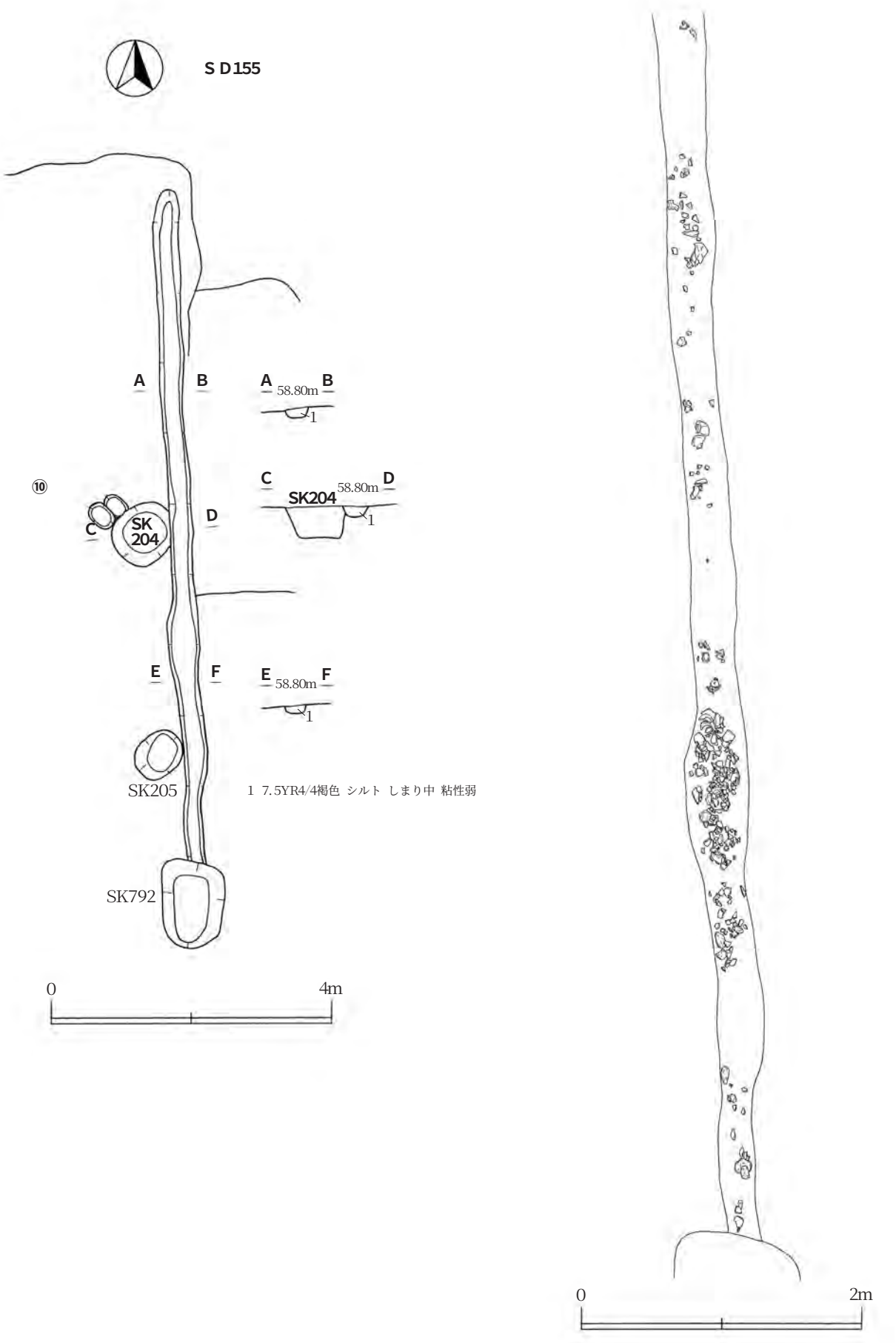
第146図　SD152・211・652・1410



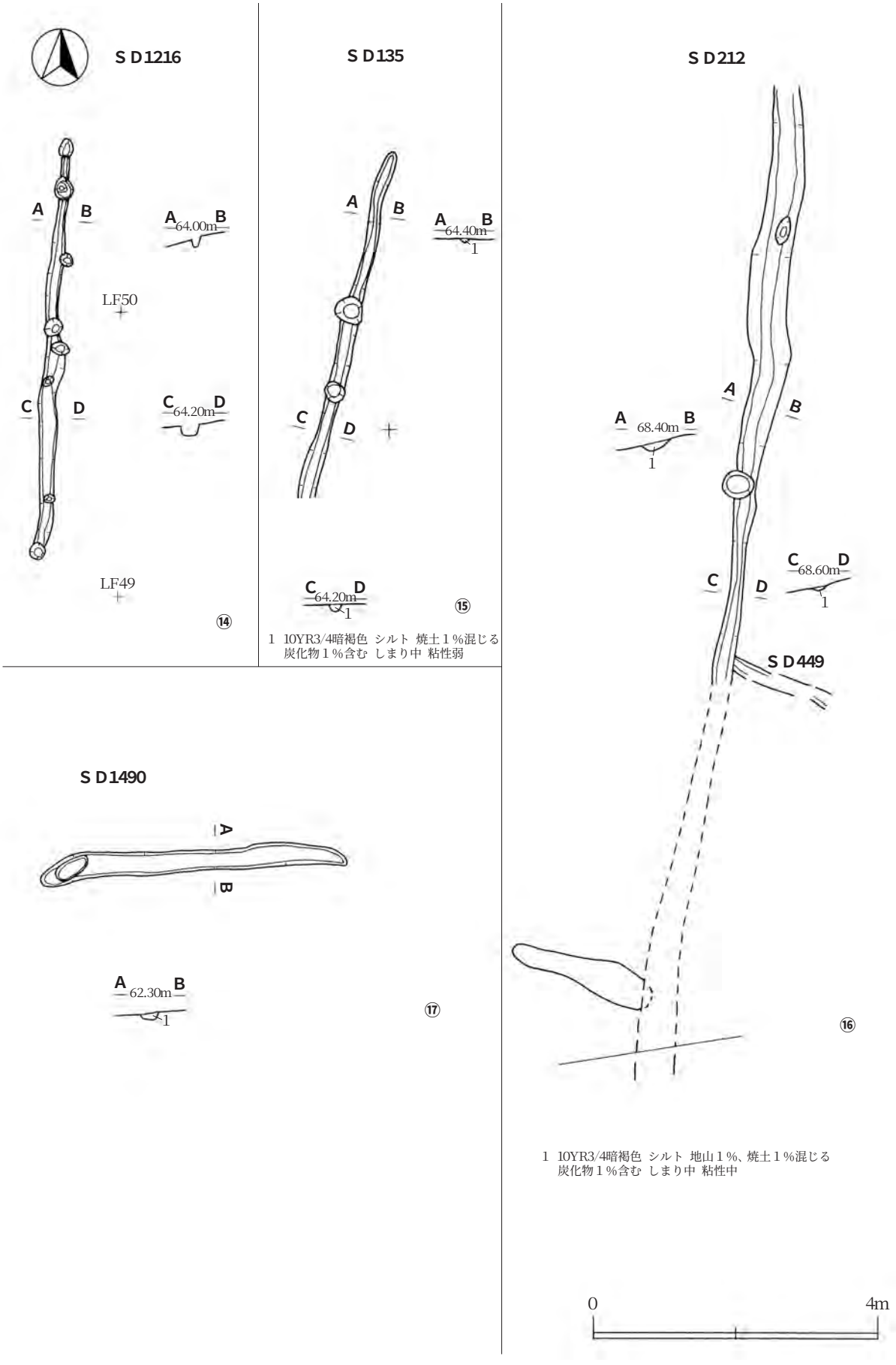
第147図　SD652・870・1180・1300



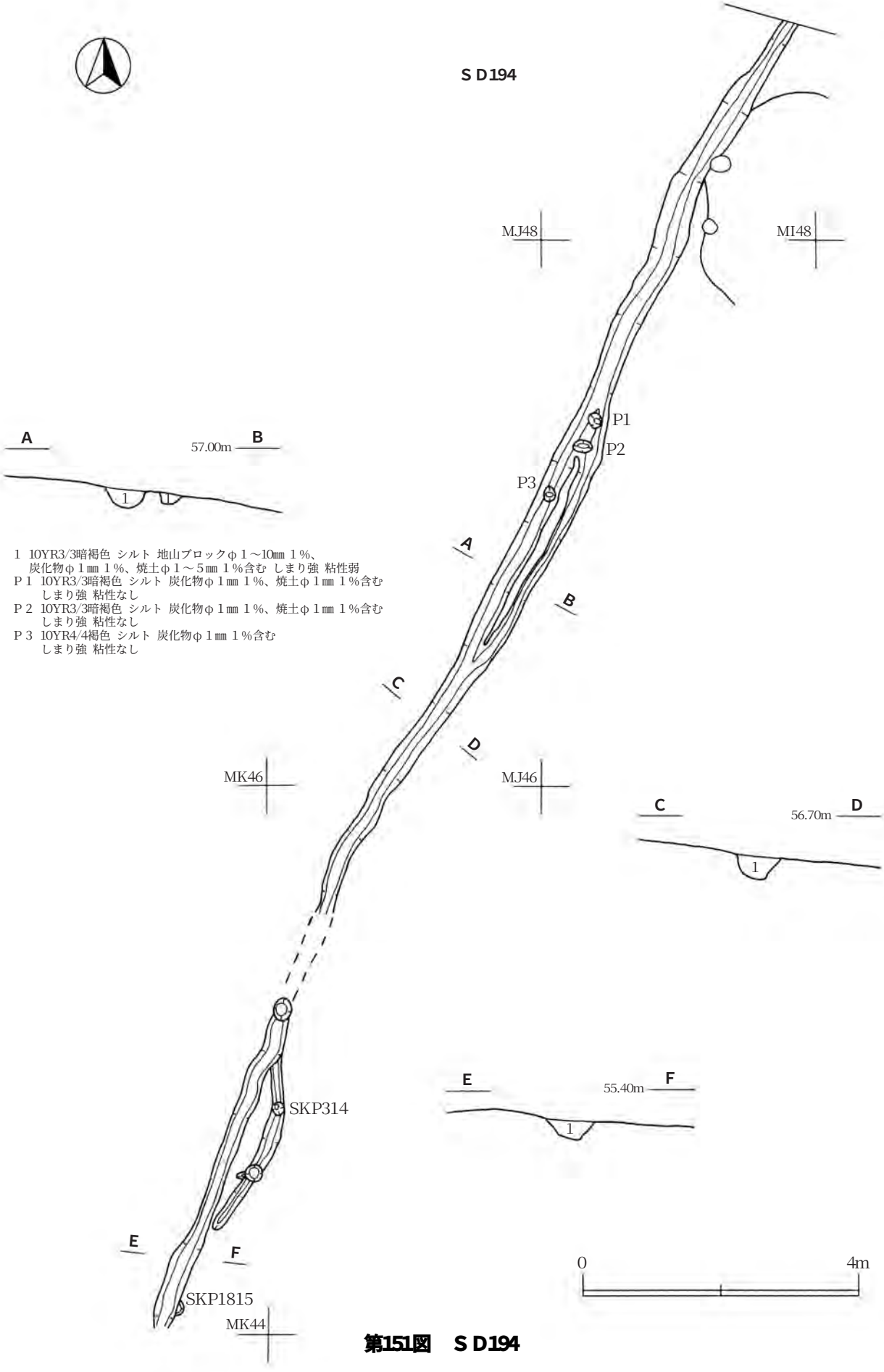
第148図　SD154・400・880・1100


SD155
⑩
A
B
A 58.80m B
1
C
D
SK204 58.80m
1
SK 204
C
D
E
F
E 58.80m F
1
SK205
SK792
1 7.5YR4/4褐色 シルト しまり中 粘性弱
0
4m
0
2m

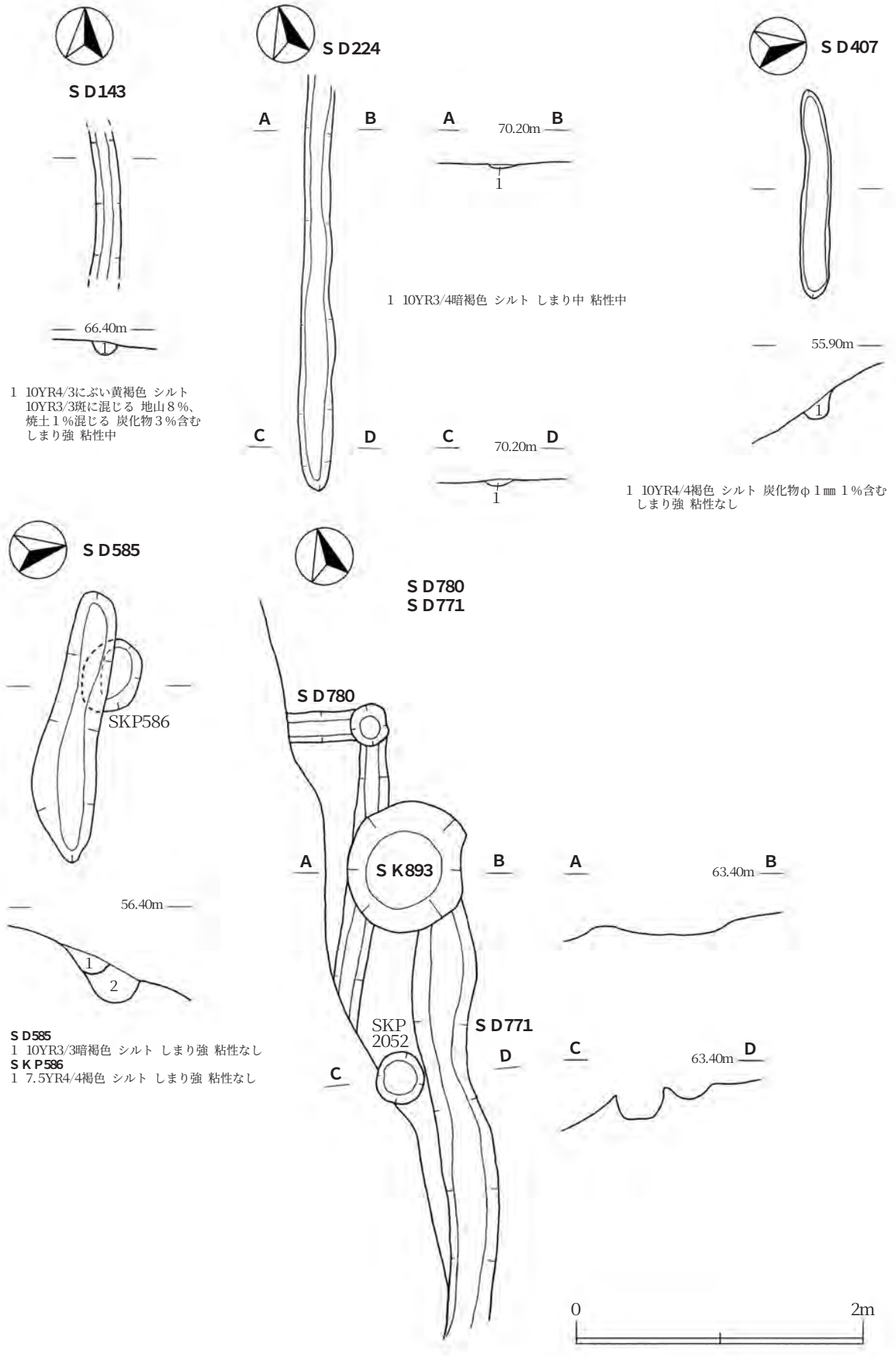
第149図　SD155



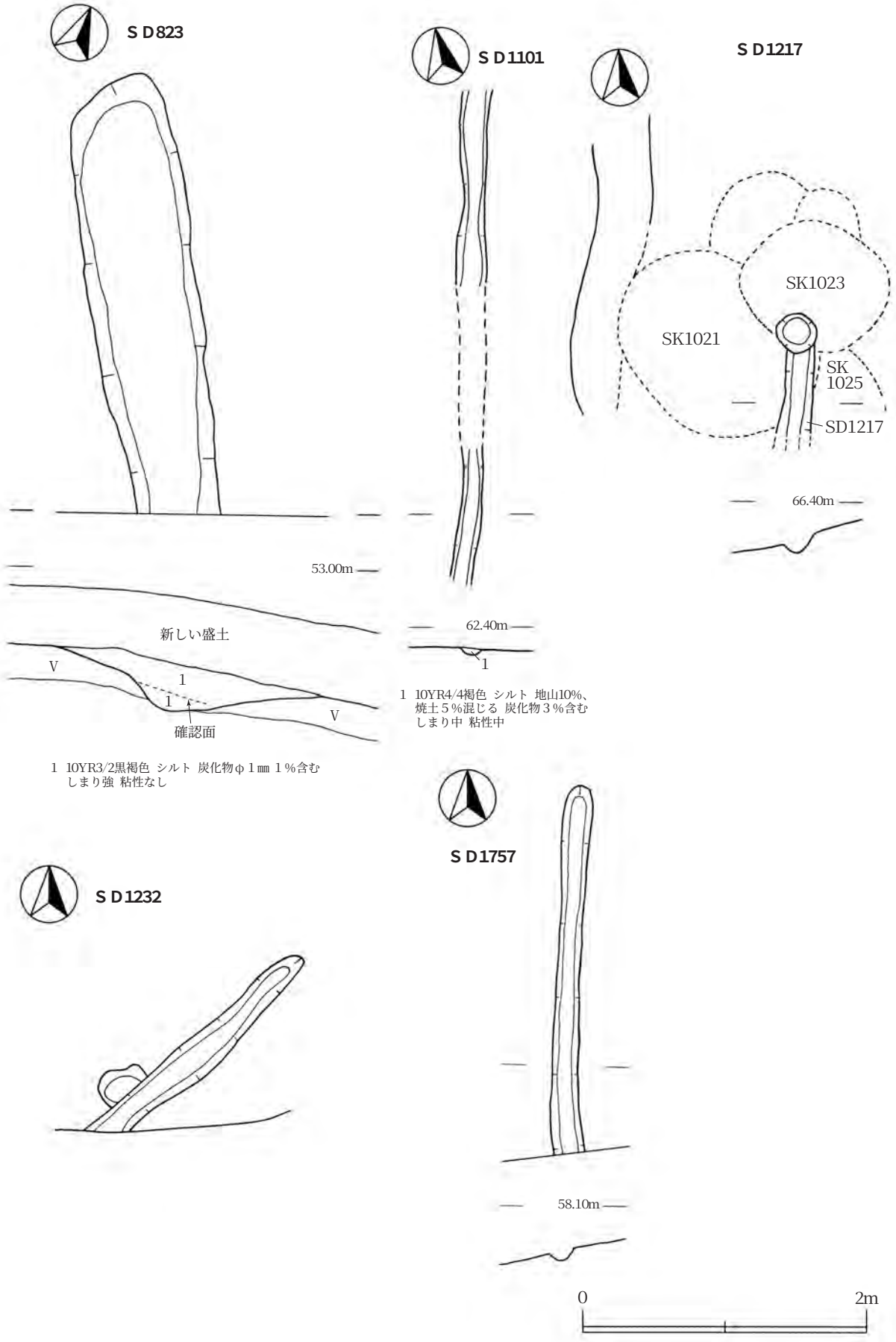
第150図　SD135・212・1216・1490


SD194
MJ48
MI48
P1
P2
P3
A
57.00m
B
1
1 10YR3/3暗褐色 シルト 地山ブロックφ1～10㎜ 1%、
炭化物φ1㎜ 1%、焼土φ1～5㎜ 1%含む しまり強 粘性弱
P1 10YR3/3暗褐色 シルト 炭化物φ1㎜ 1%、焼土φ1㎜ 1%含む
しまり強 粘性なし
P2 10YR3/3暗褐色 シルト 炭化物φ1㎜ 1%、焼土φ1㎜ 1%含む
しまり強 粘性なし
P3 10YR4/4褐色 シルト 炭化物φ1㎜ 1%含む
しまり強 粘性なし
A
B
C
D
MK46
MJ46
C
56.70m
D
1
SKP314
E
55.40m
F
1
E
F
SKP1815
MK44
0
4m

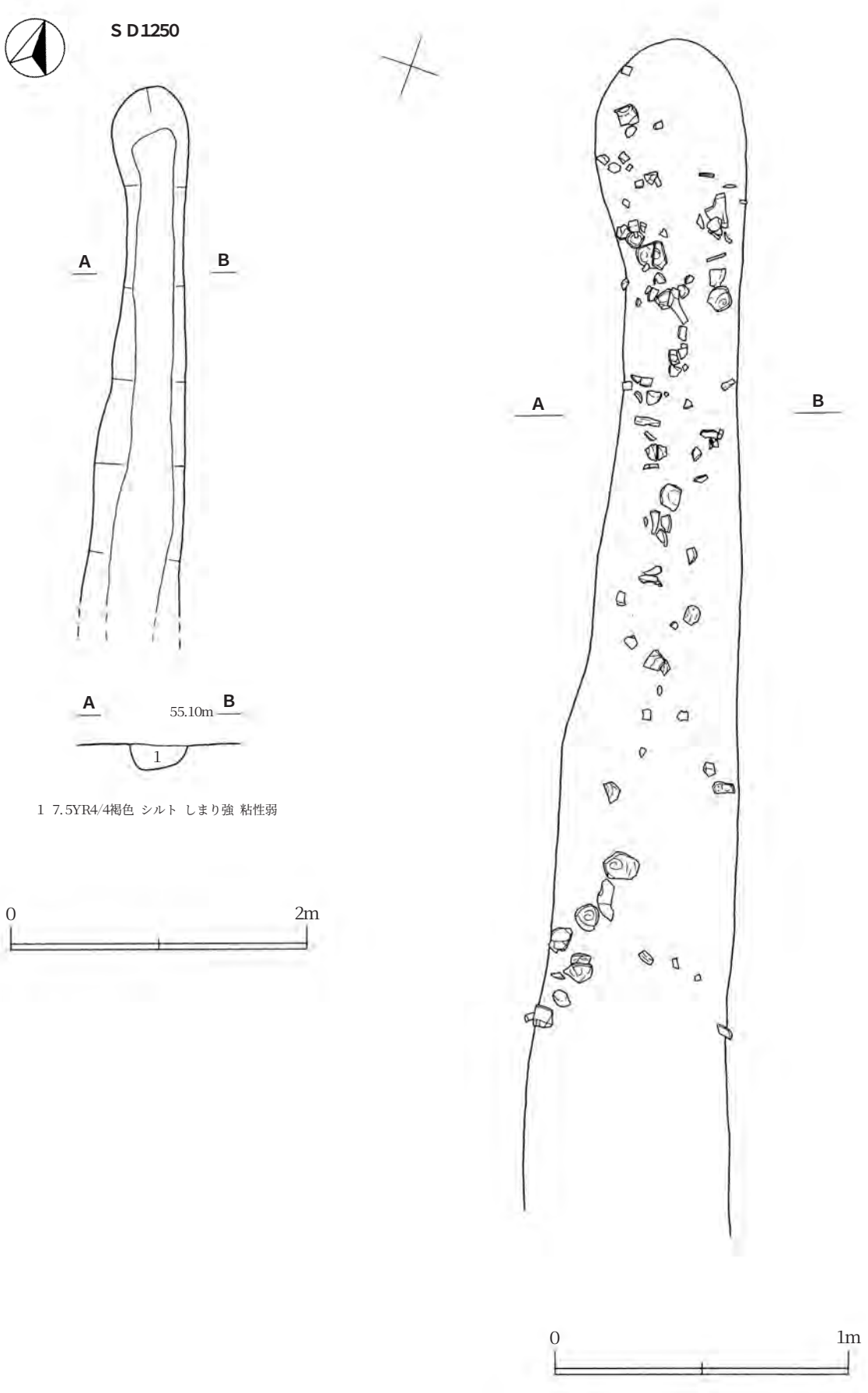
第151図　SD194



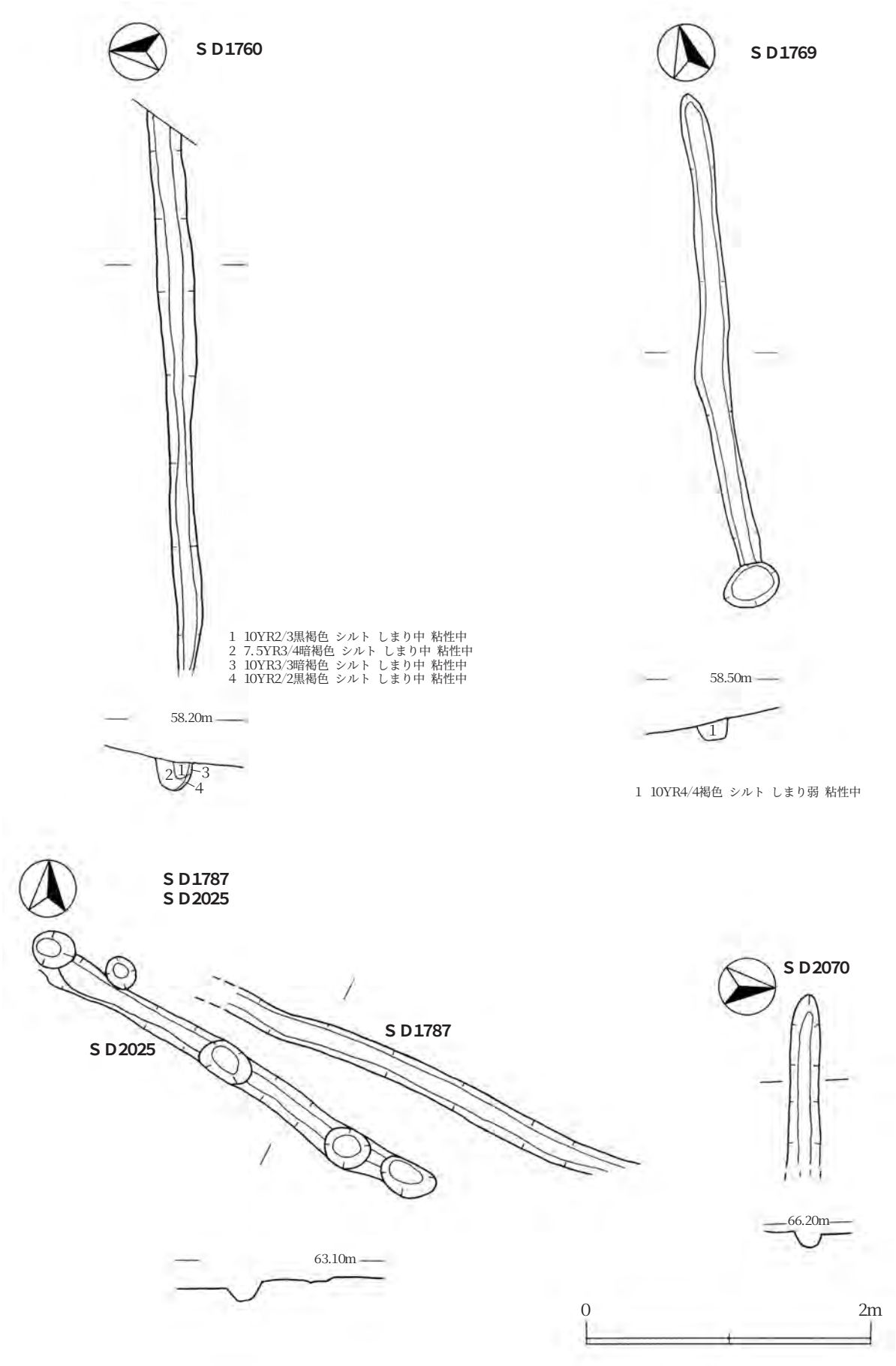
第152図　ＳＤ143・224・407・585・771・780、ＳＫ893



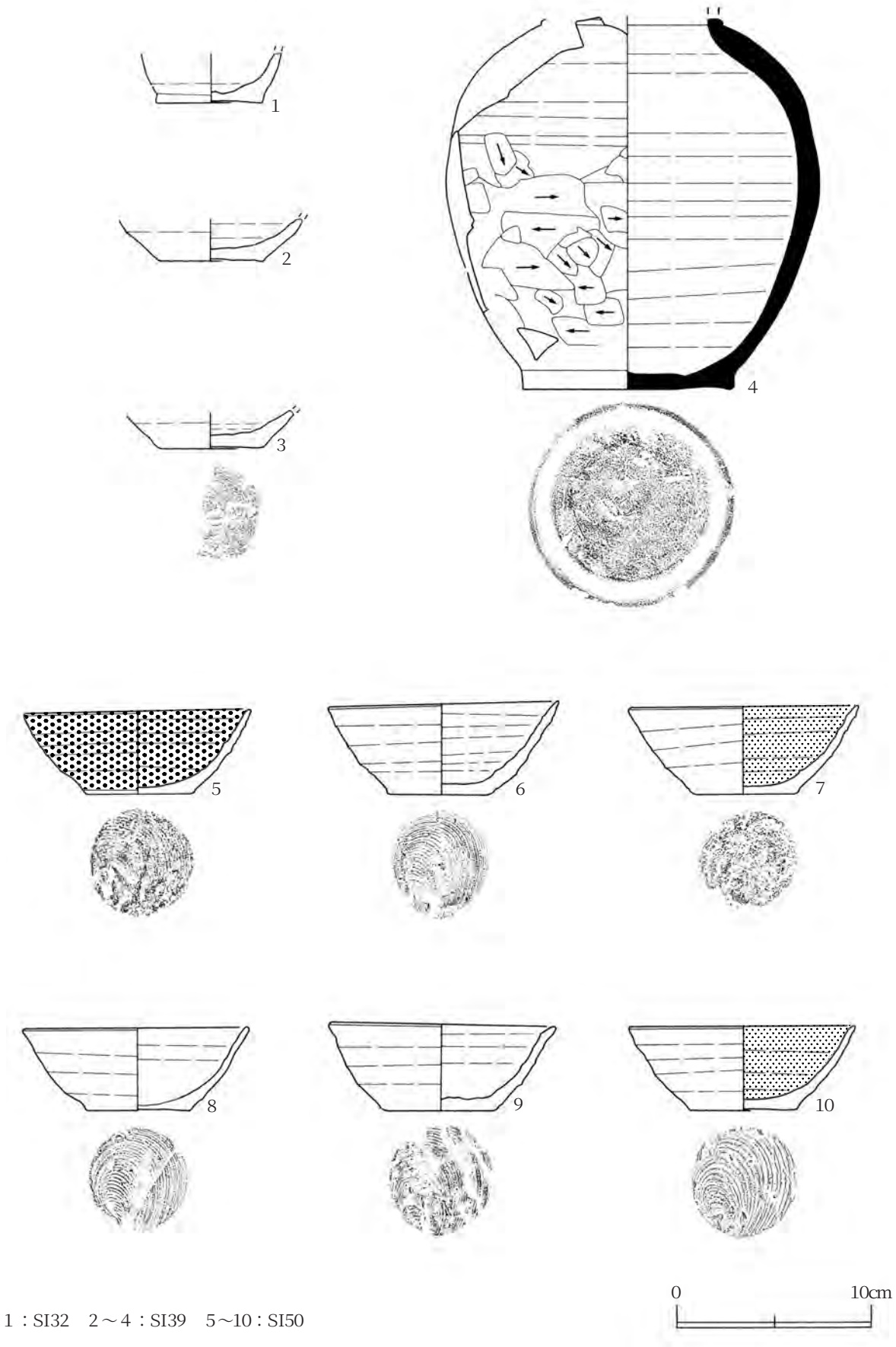
第153図　SD823・1101・1217・1232・1757



第154図　SD1250

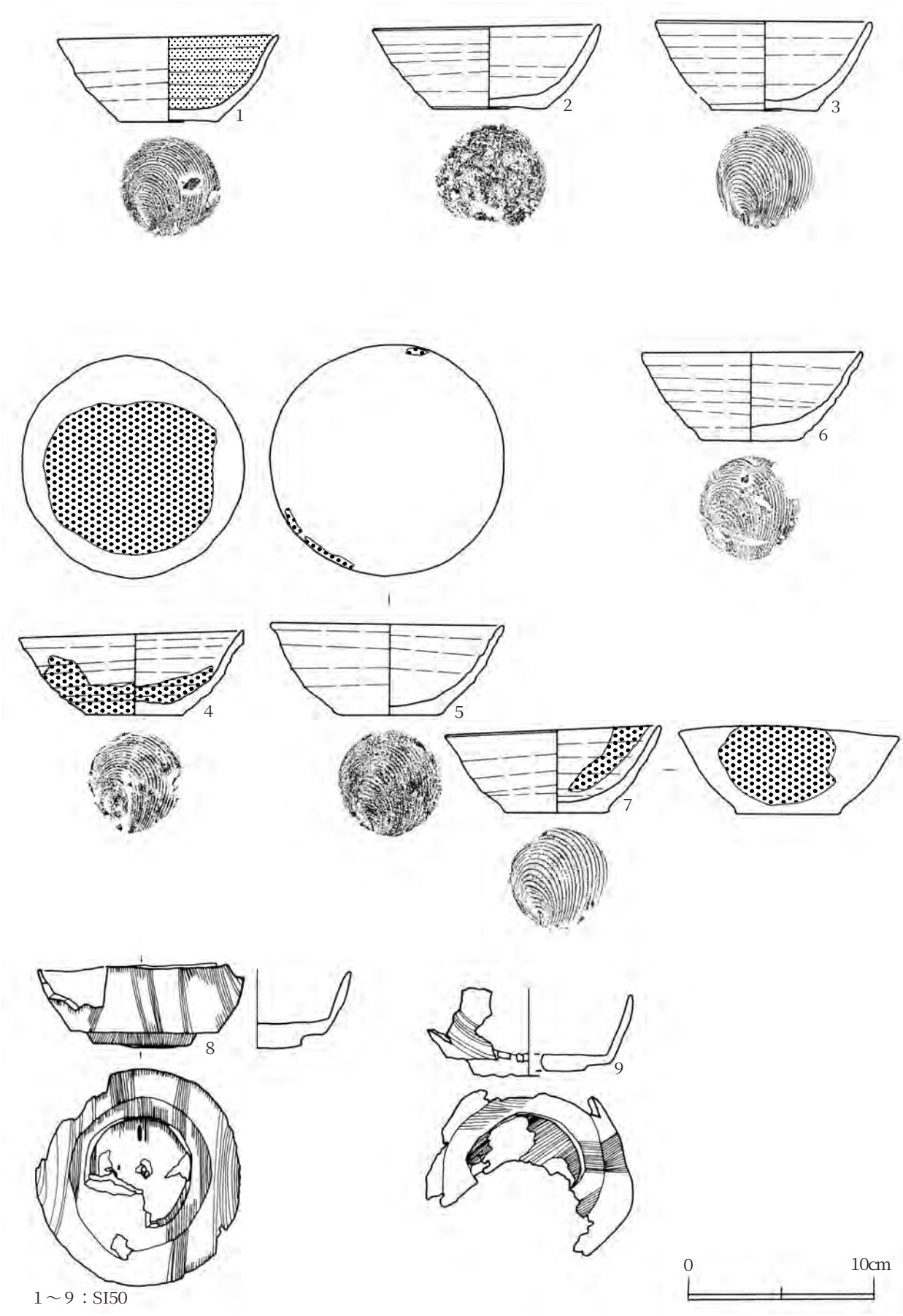


第155図　SD1760・1769・1787・2025・2070



1：SI32　2～4：SI39　5～10：SI50

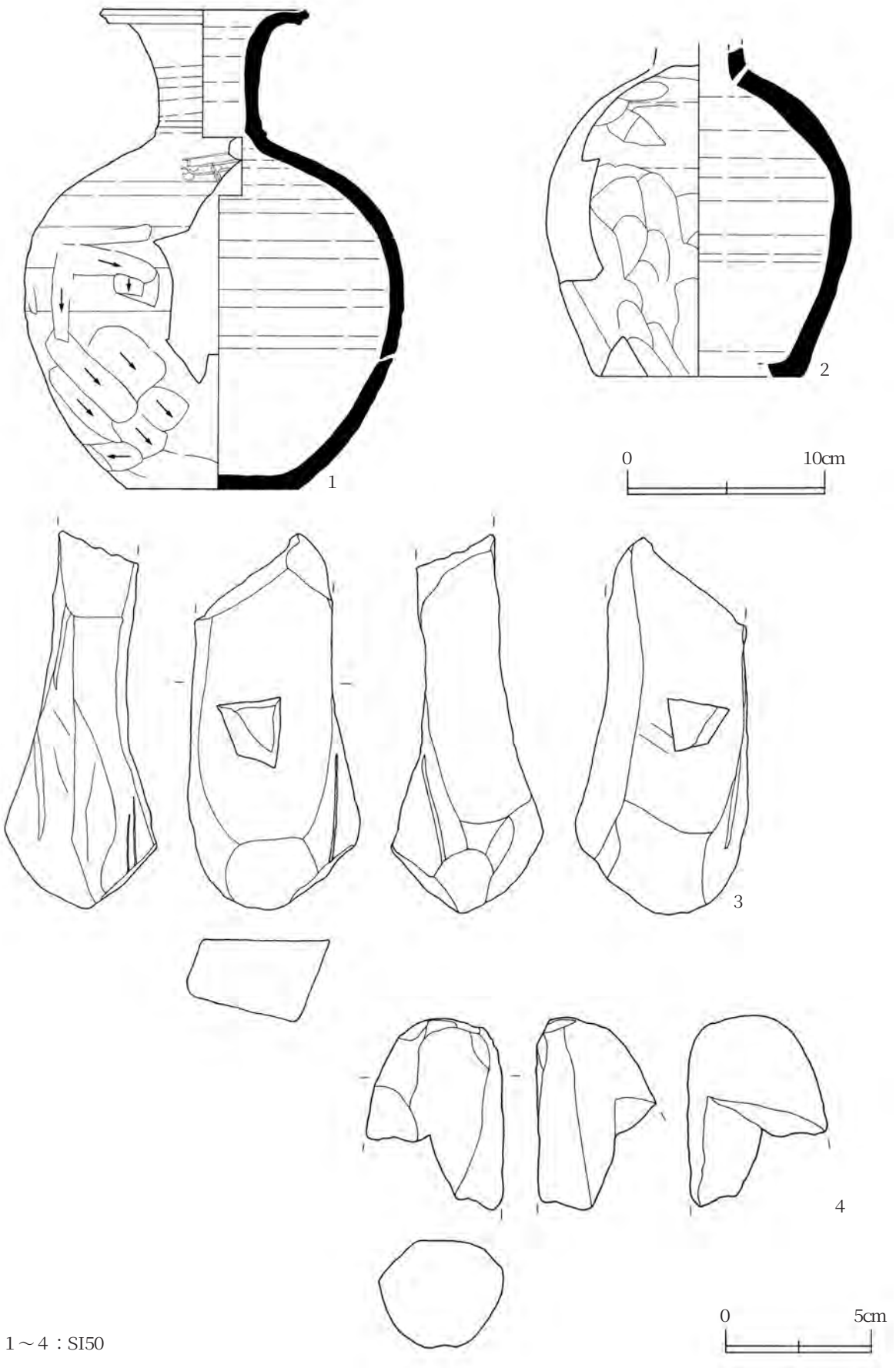
第156図　遺構内出土遺物（１）



第157図　遺構内出土遺物（2）

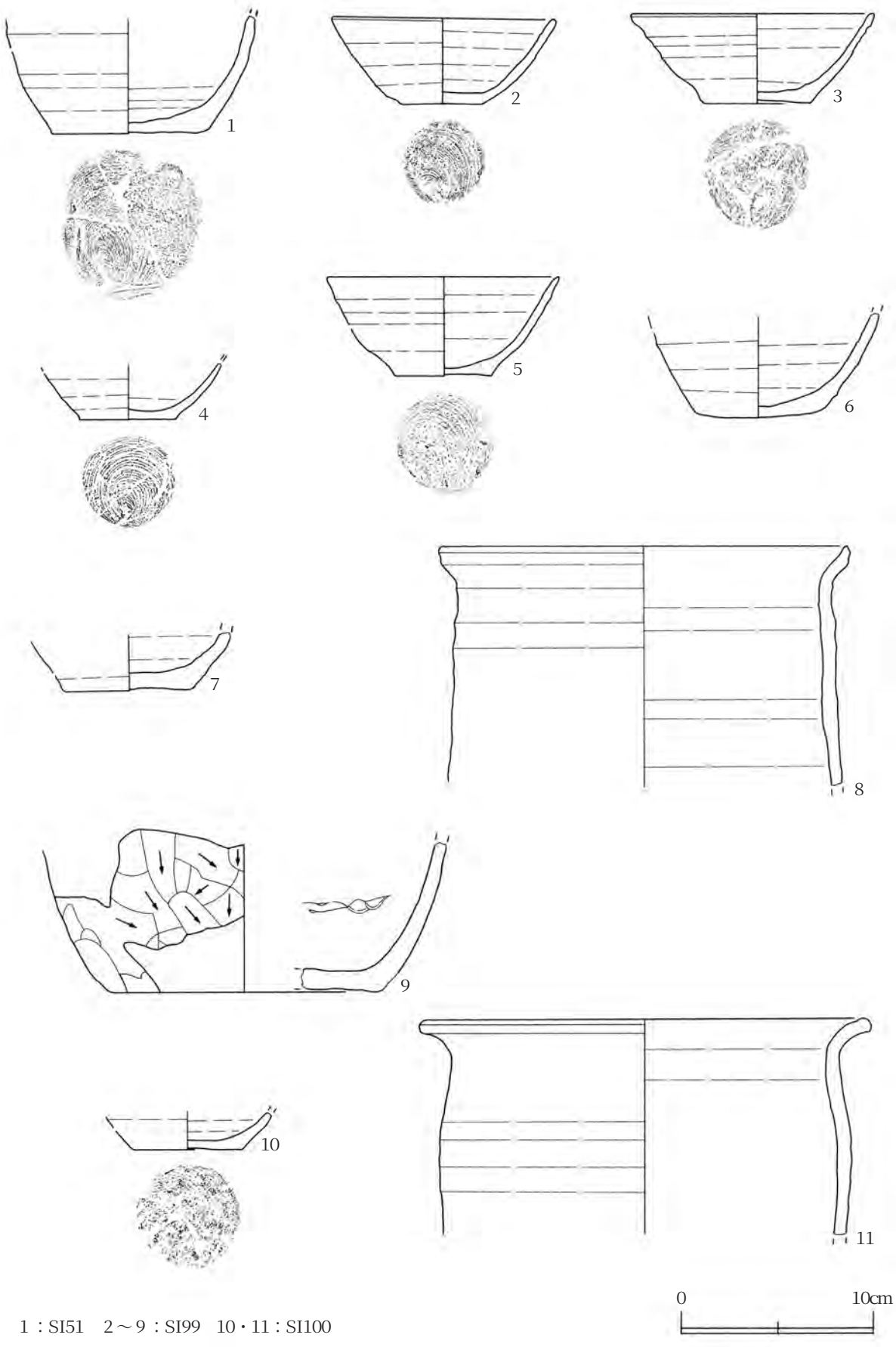
1～11：SI50

第158図　遺構内出土遺物（３）



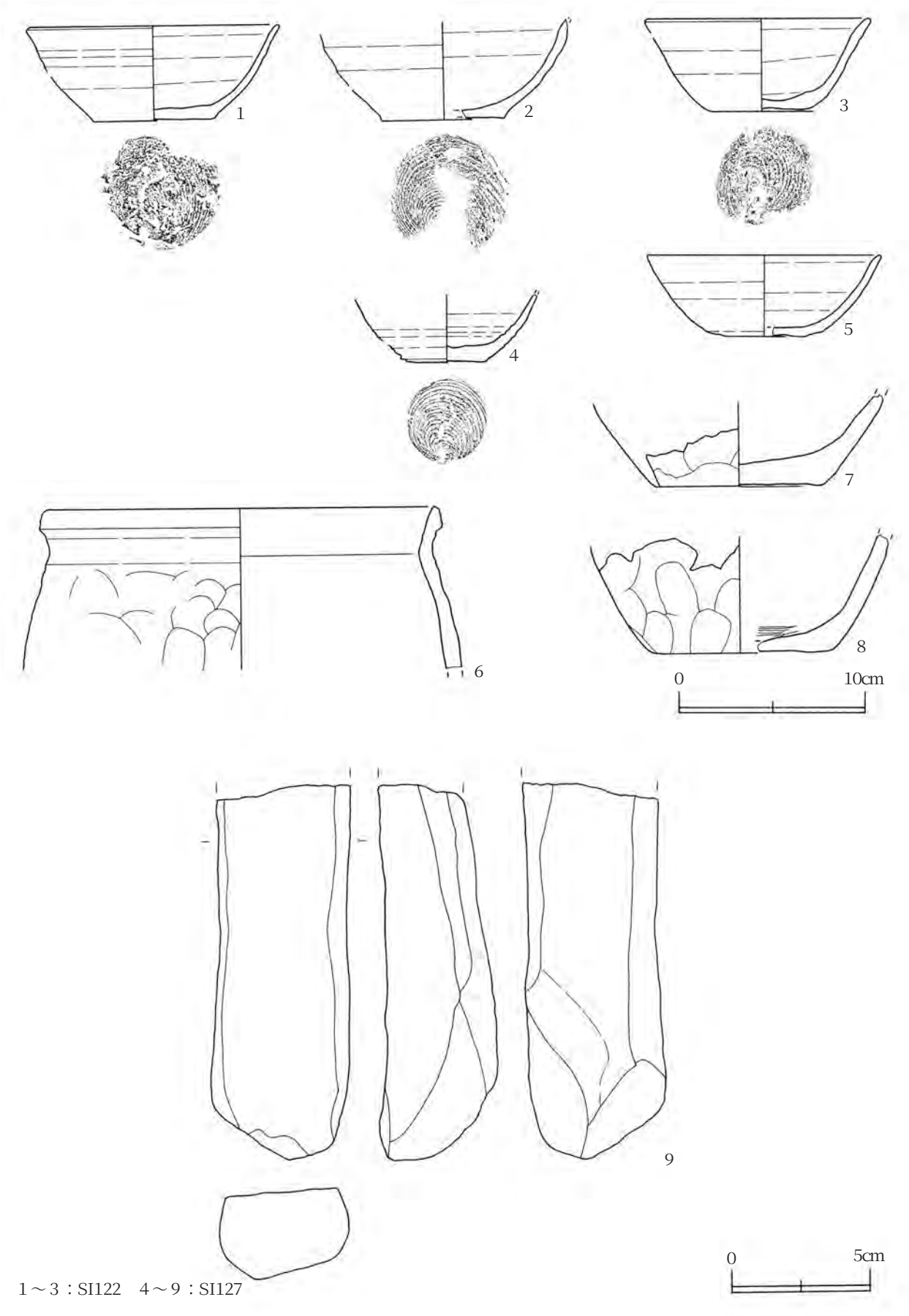
1～4：SI50

第159図　遺構内出土遺物（4）



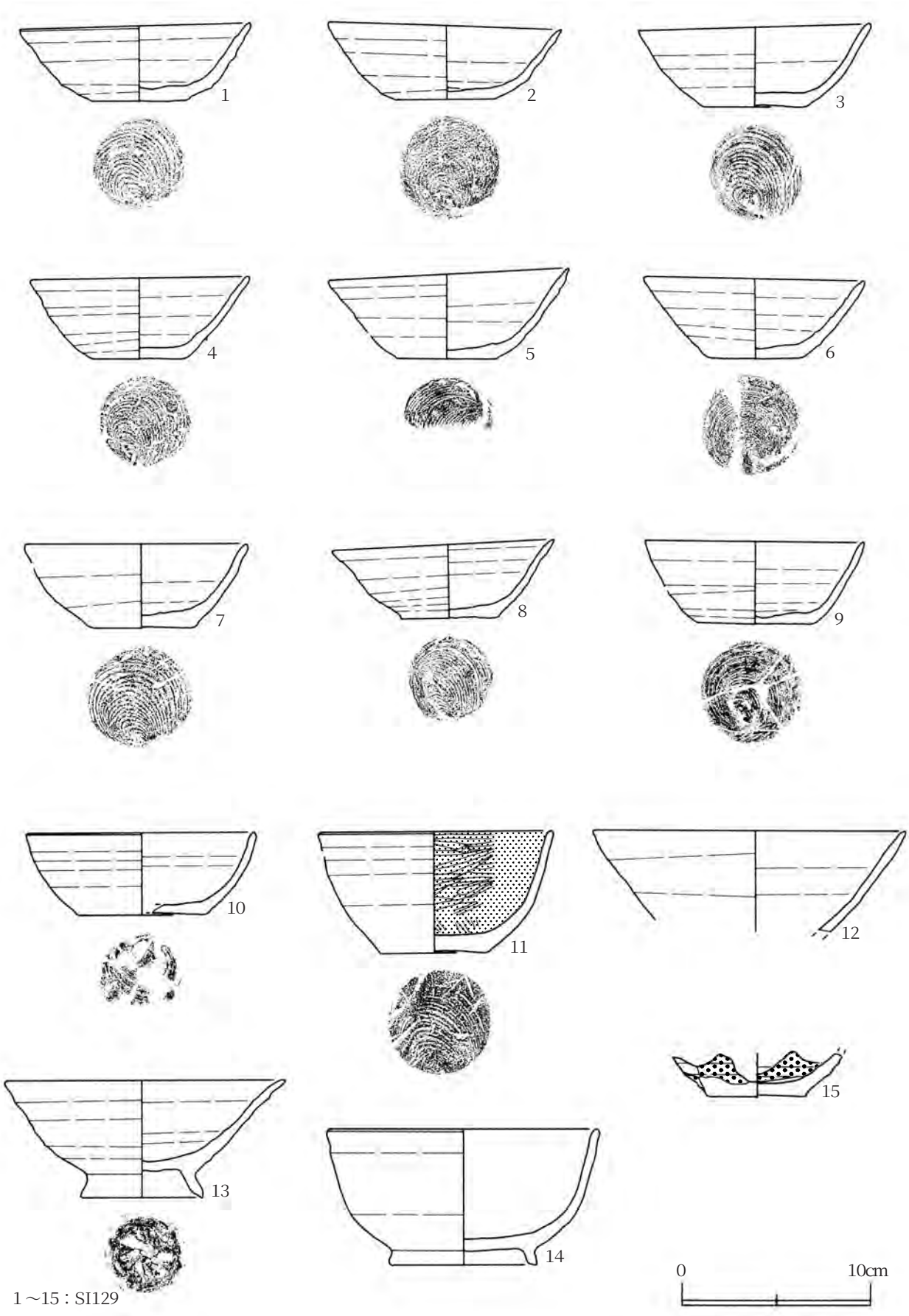
1：SI51　2～9：SI99　10・11：SI100

第160図　遺構内出土遺物（５）

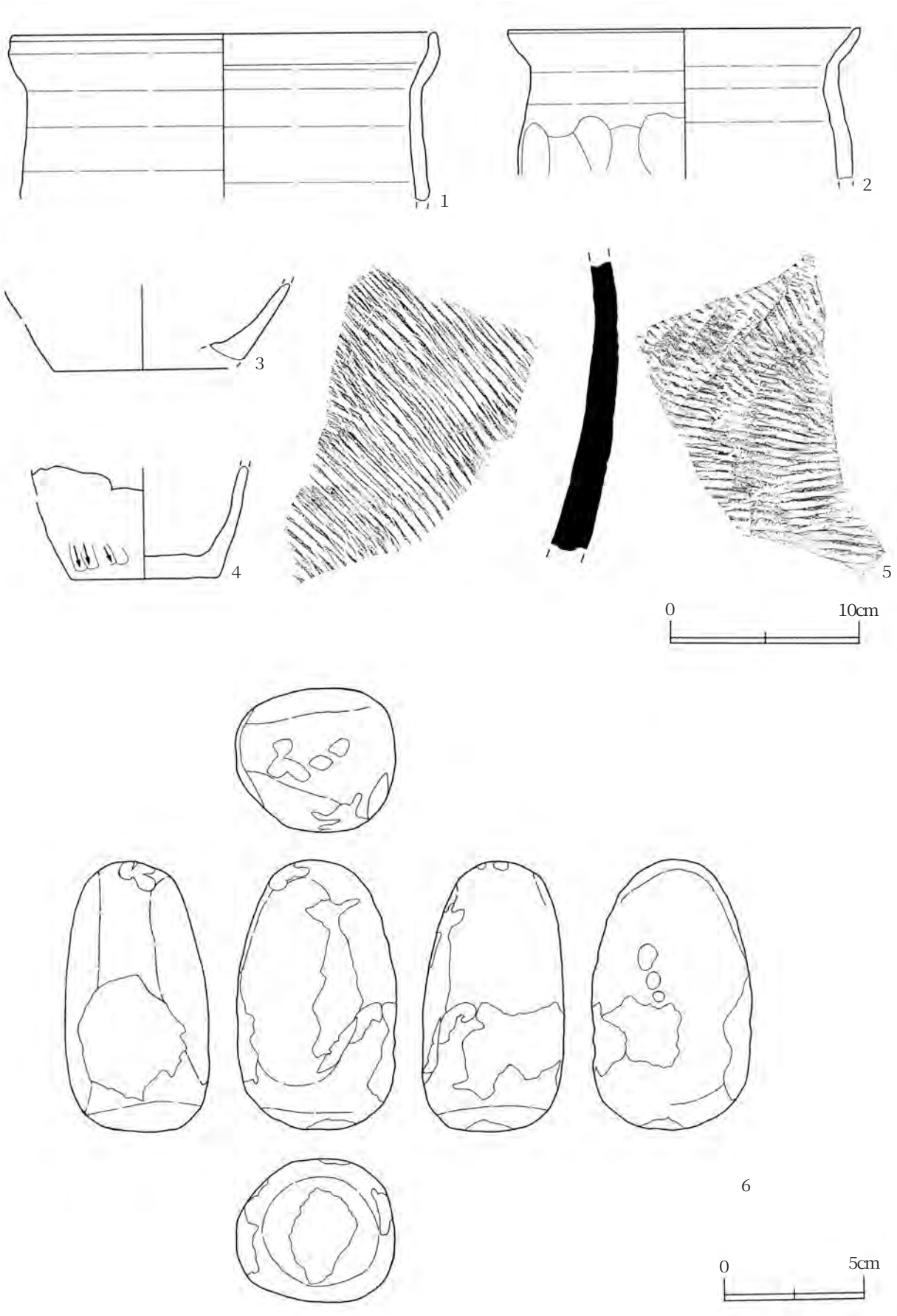


1～3：SI122　4～9：SI127

第161図　遺構内出土遺物（6）

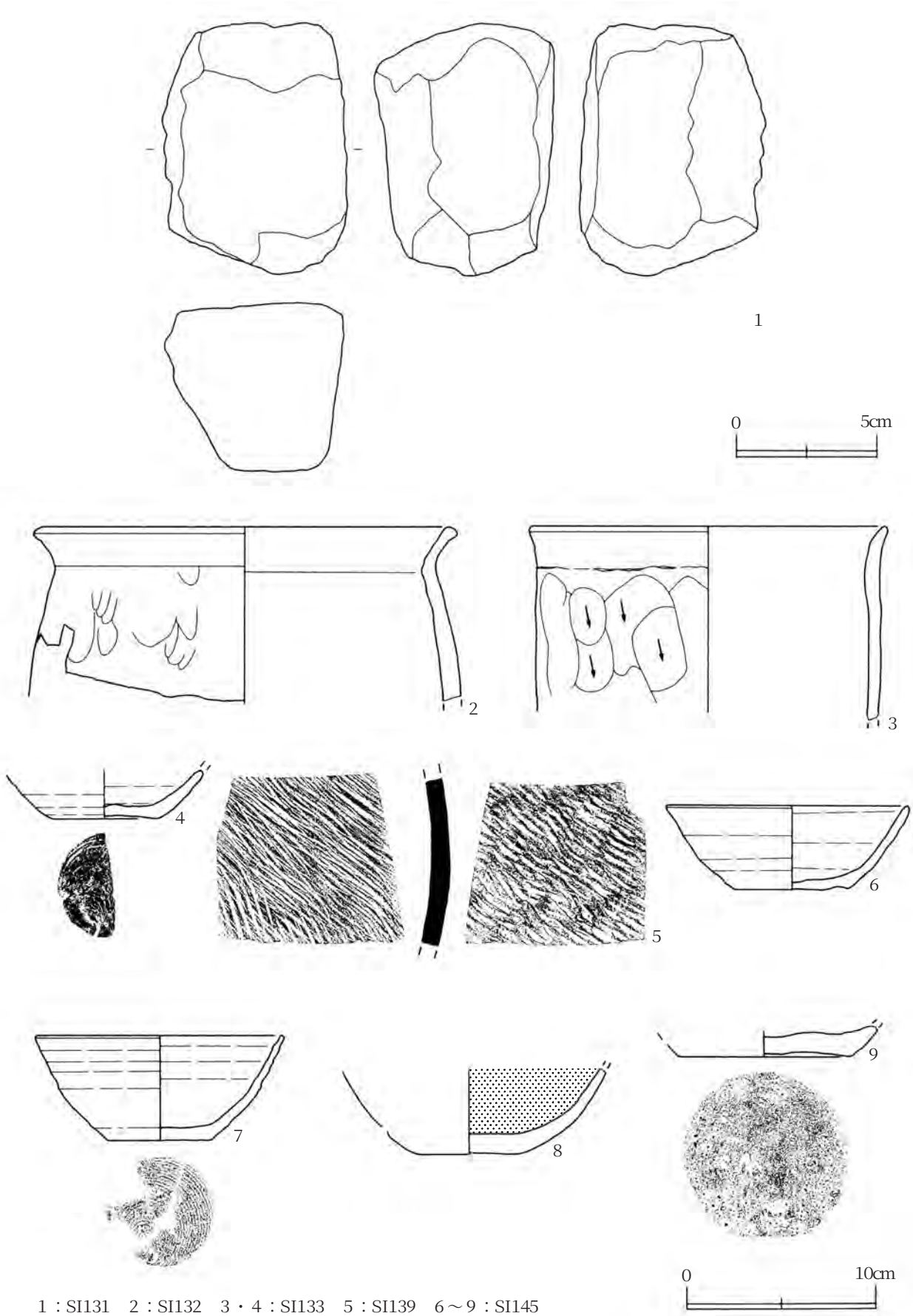


第162図　遺構内出土遺物（７）



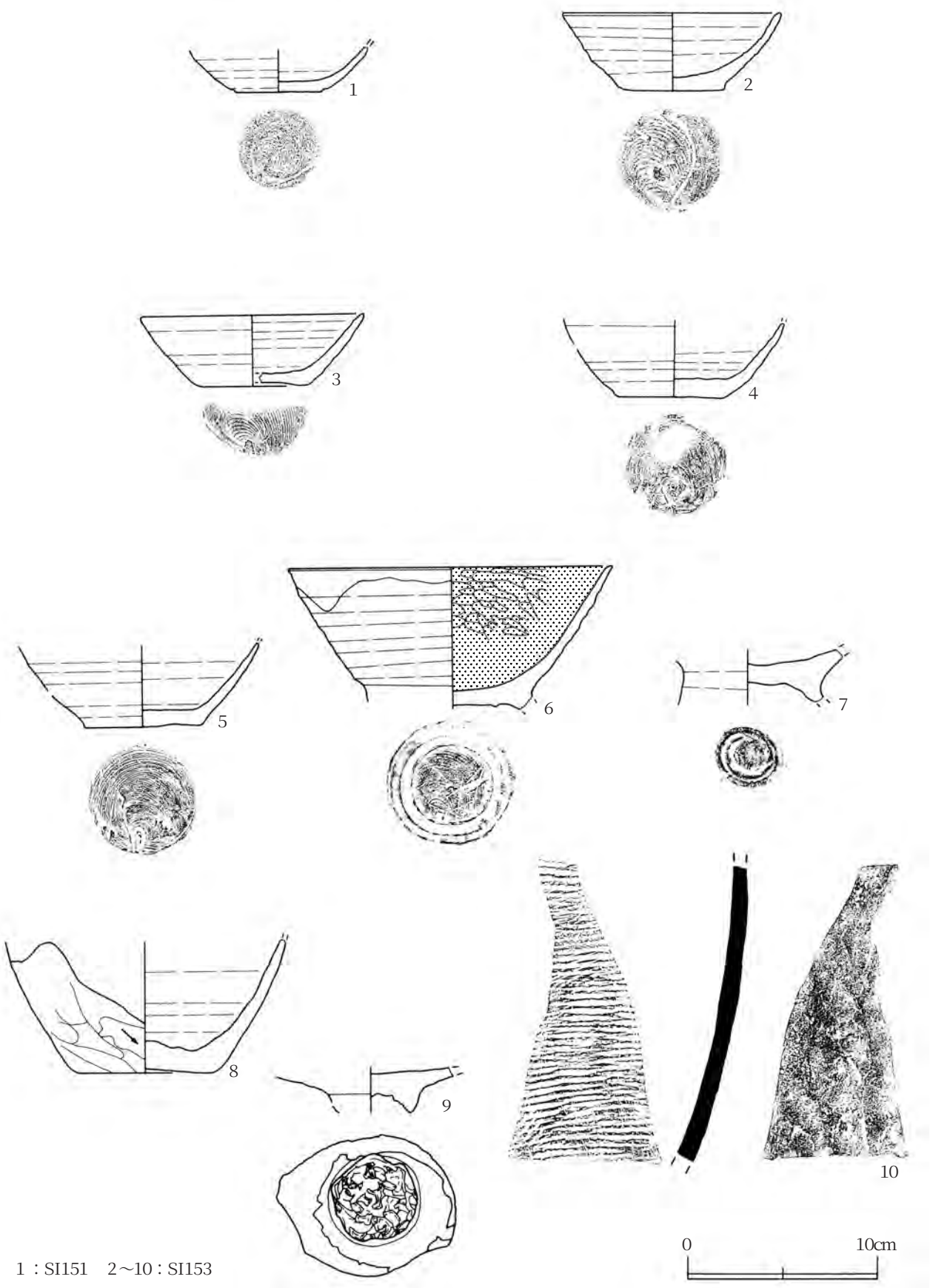
1～6：SI129

第163図　遺構内出土遺物（8）



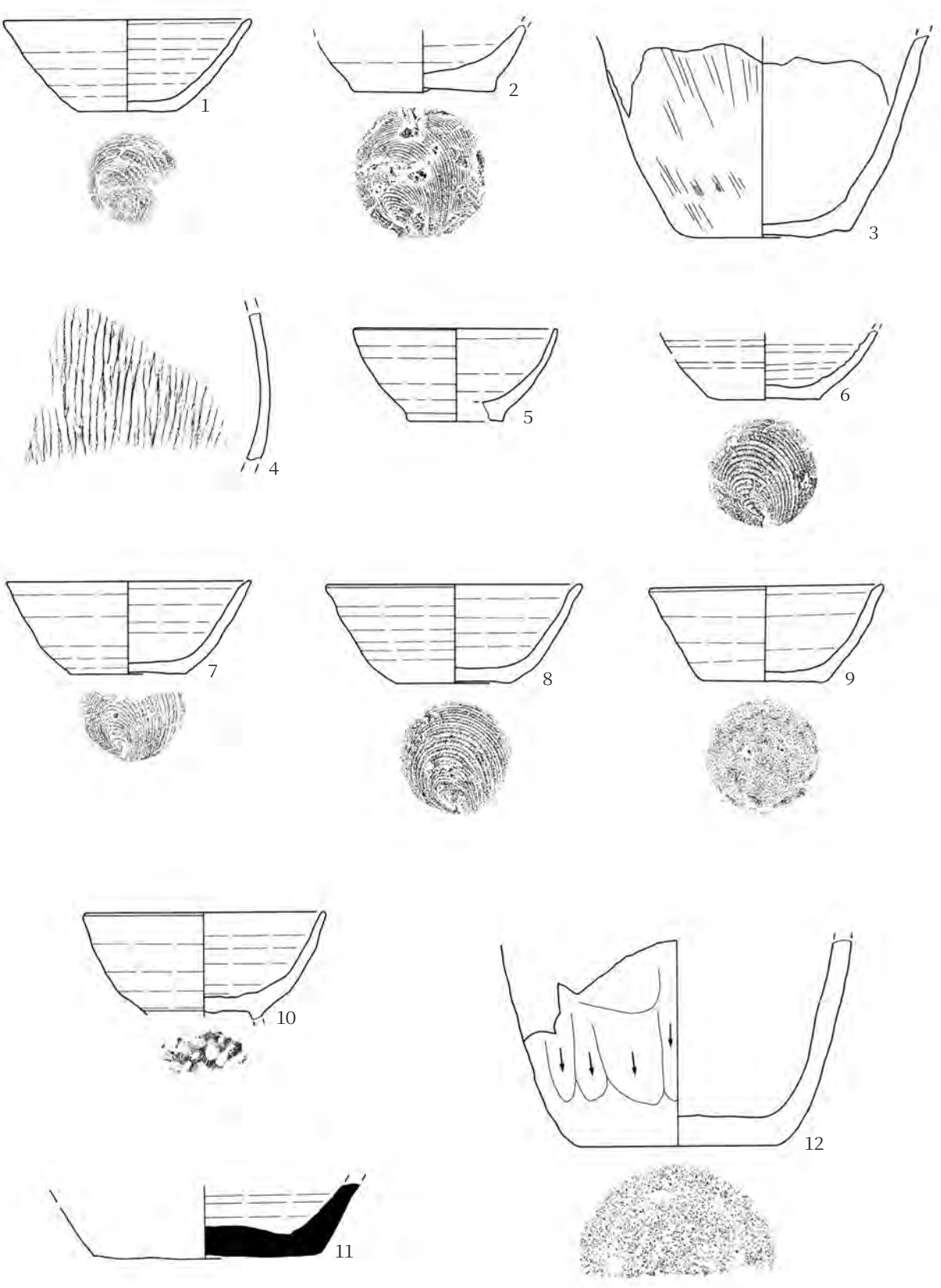
１：SI131　２：SI132　３・４：SI133　５：SI139　６～９：SI145

第164図　遺構内出土遺物（９）



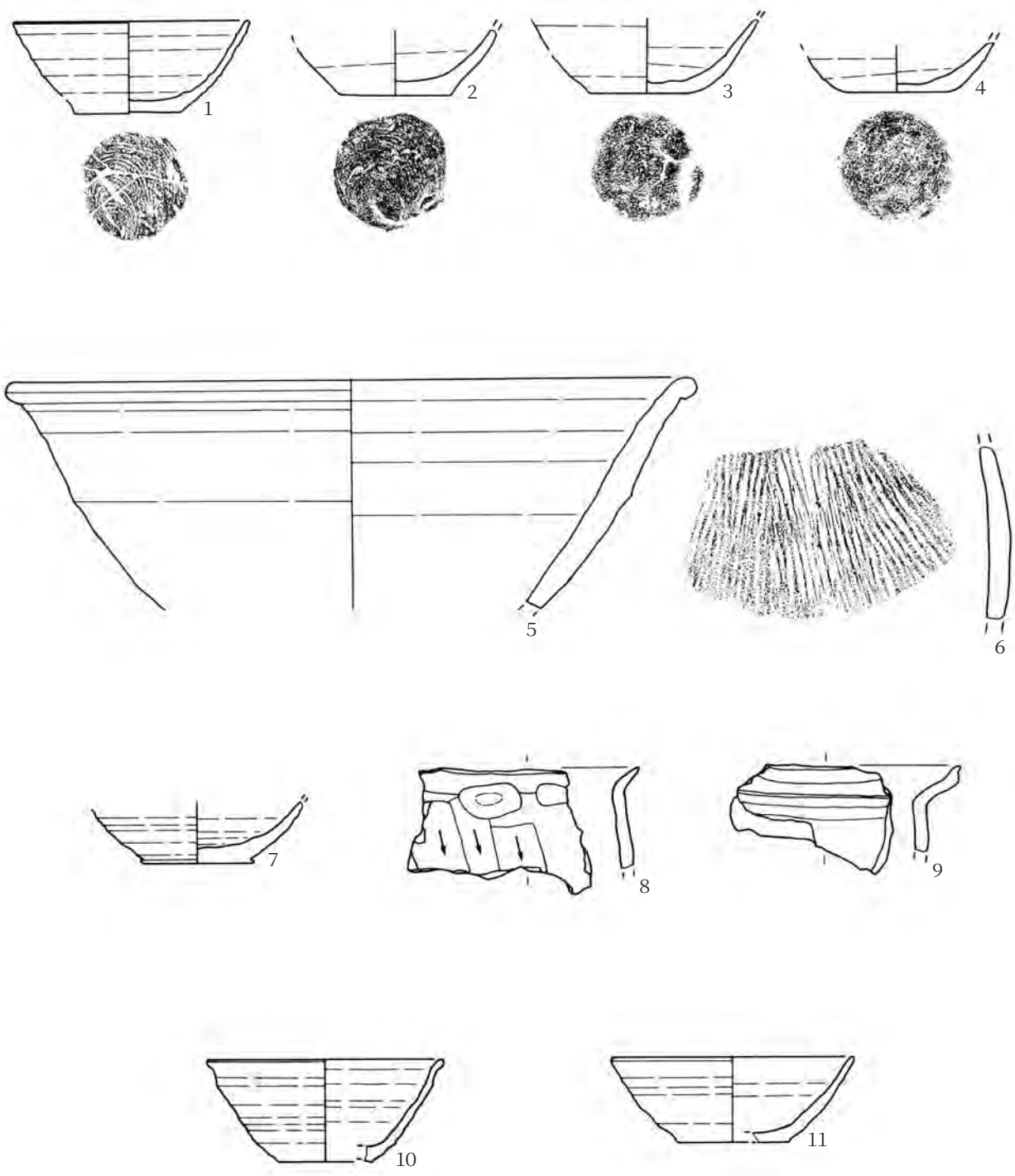
1：SI151　2～10：SI153

第165図　遺構内出土遺物（10）



1・2：SI410　3・4：SI420　5・6：SI500　7～12：SI653

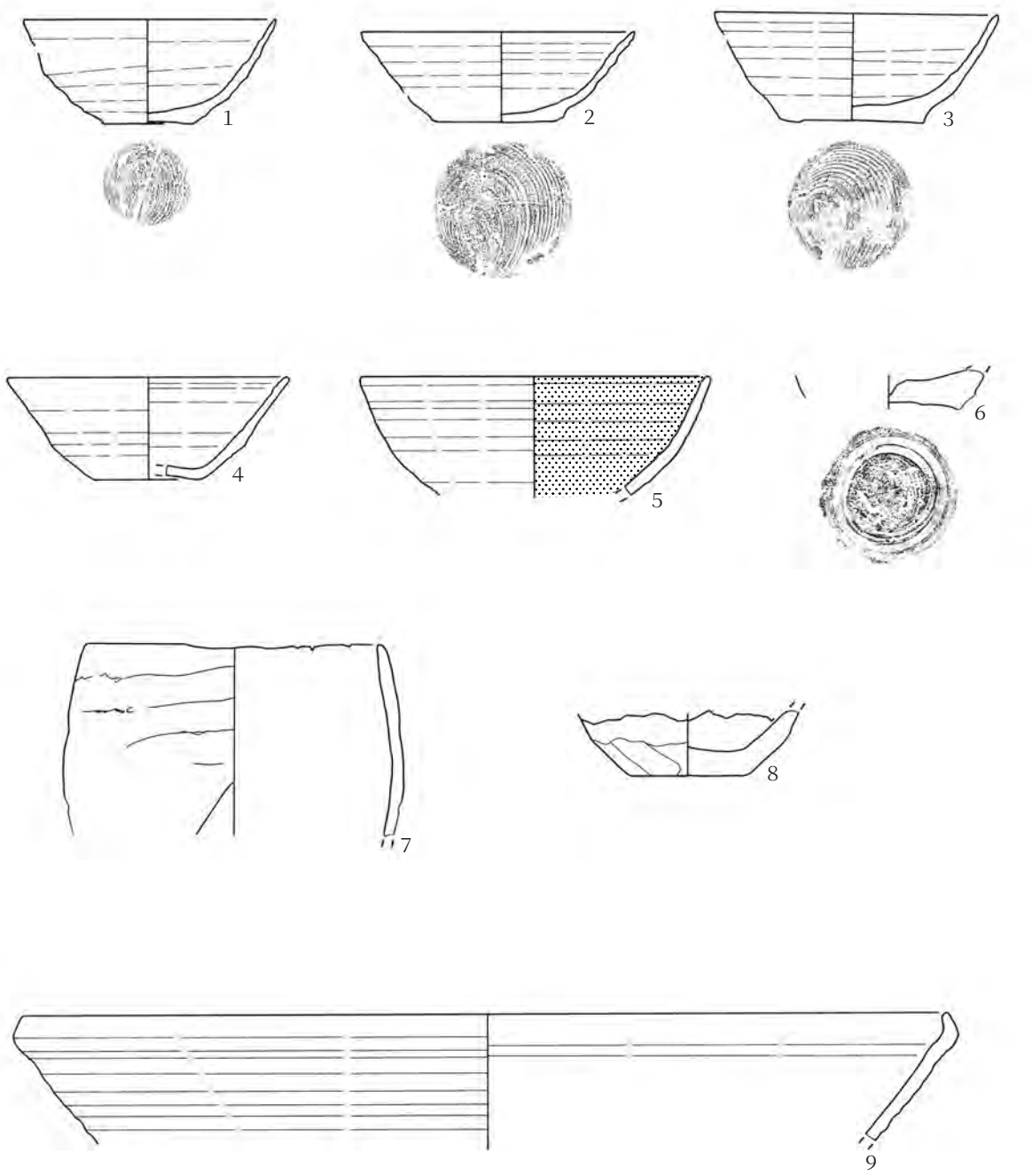
第166図　遺構内出土遺物（11）



1～6：SI699　7～9：SI764　10・11：SI765

0　10cm

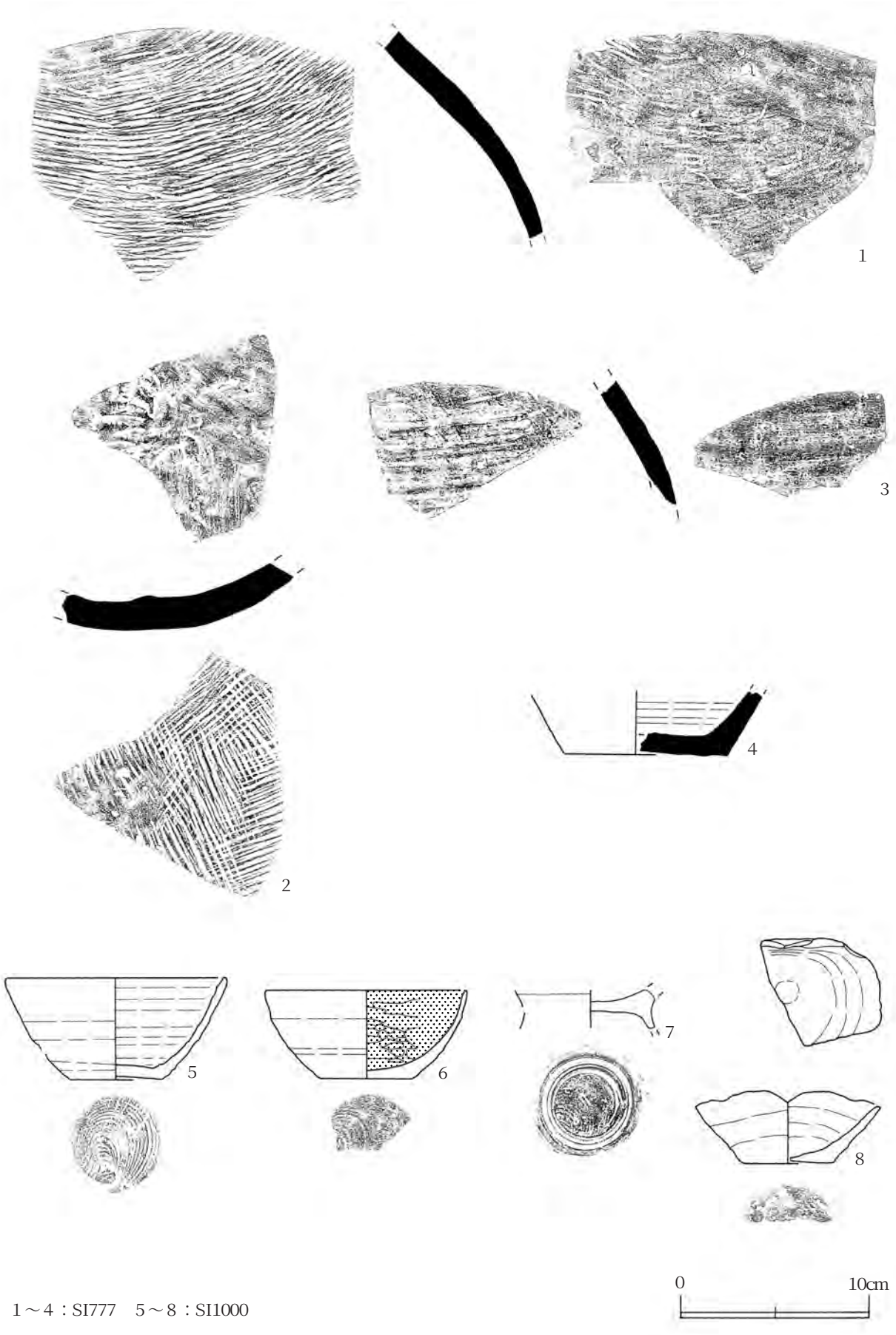
第167図　遺構内出土遺物（12）



1～9：SI777

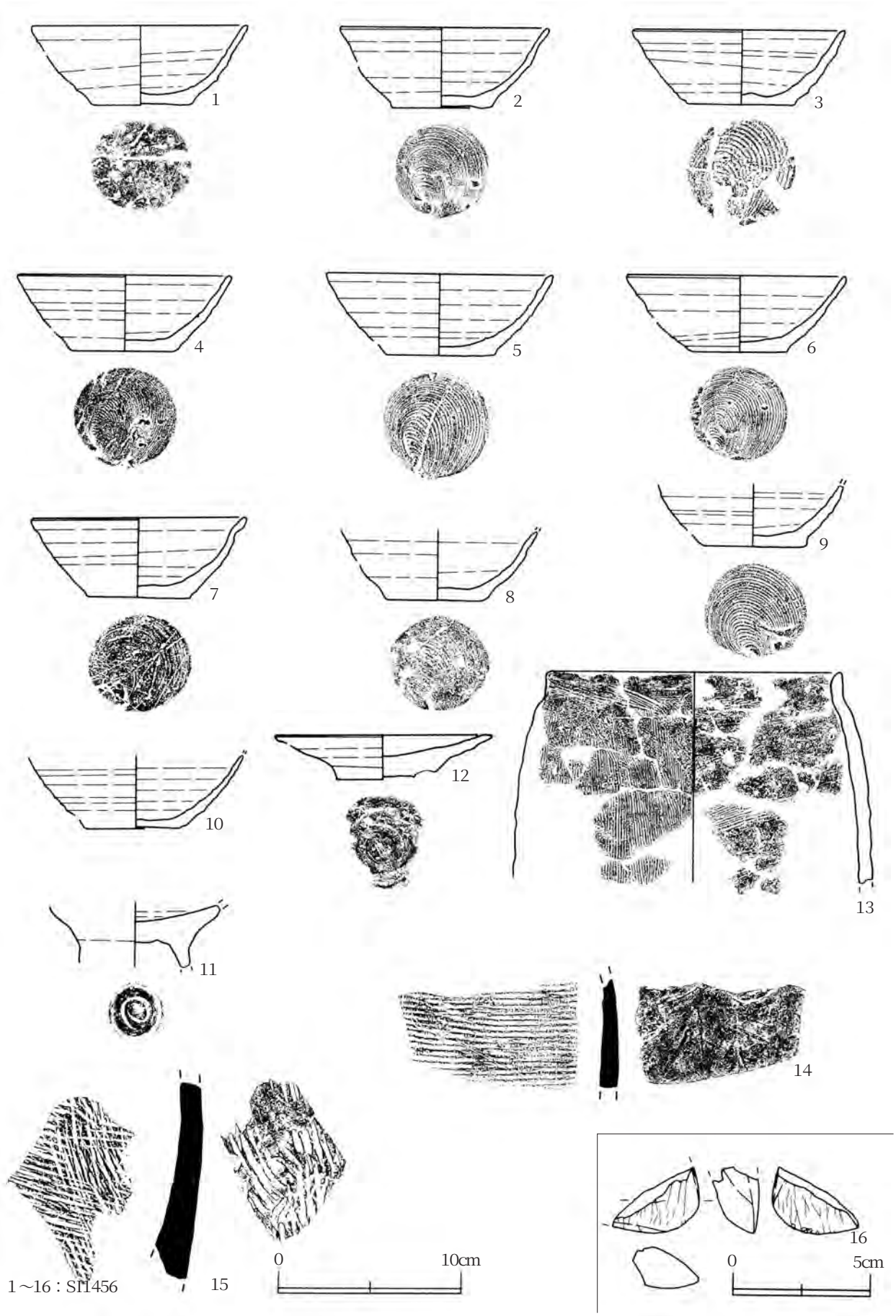
0　10cm

第168図　遺構内出土遺物（13）

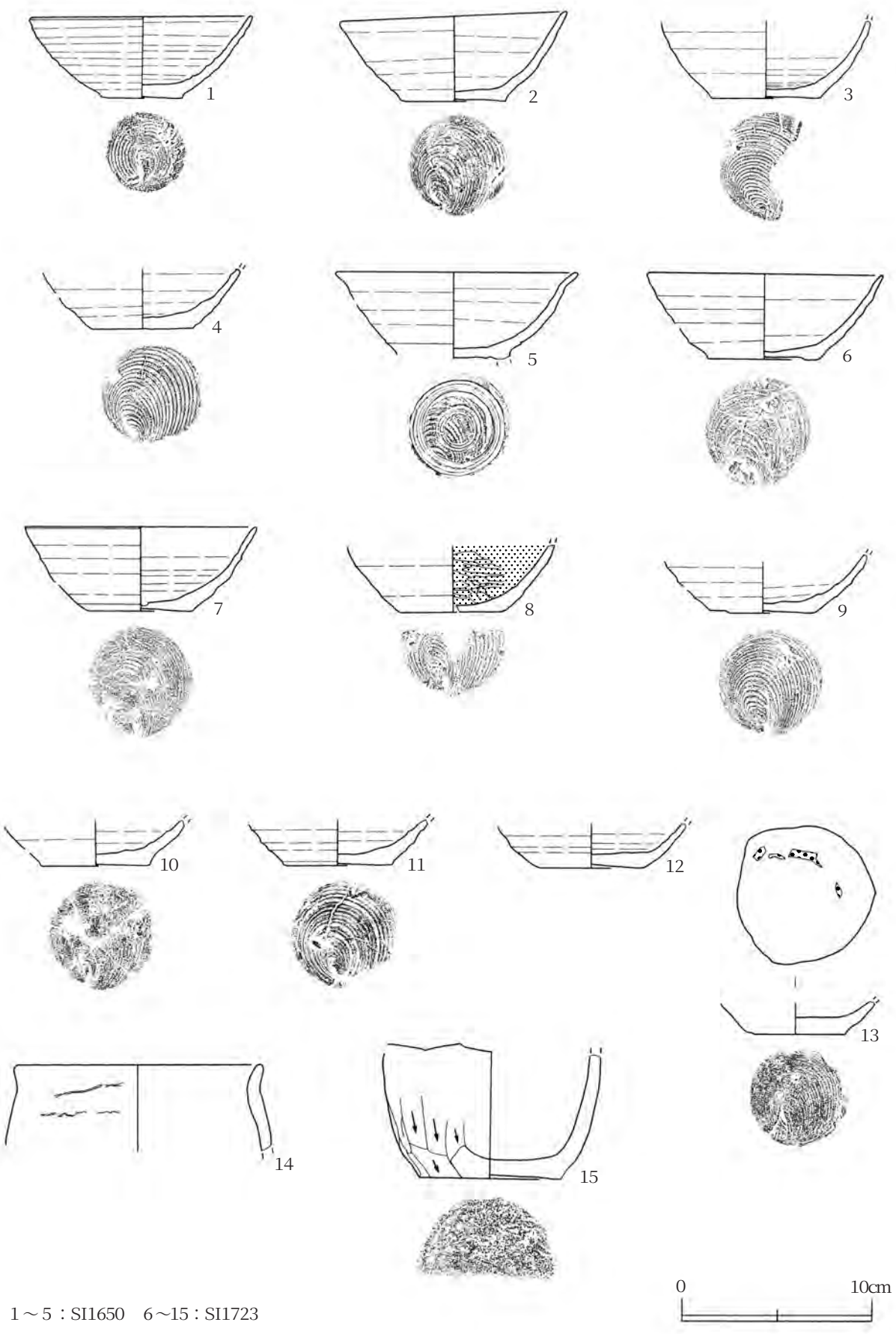


1～4：SI777　5～8：SI1000

第169図　遺構内出土遺物（14）

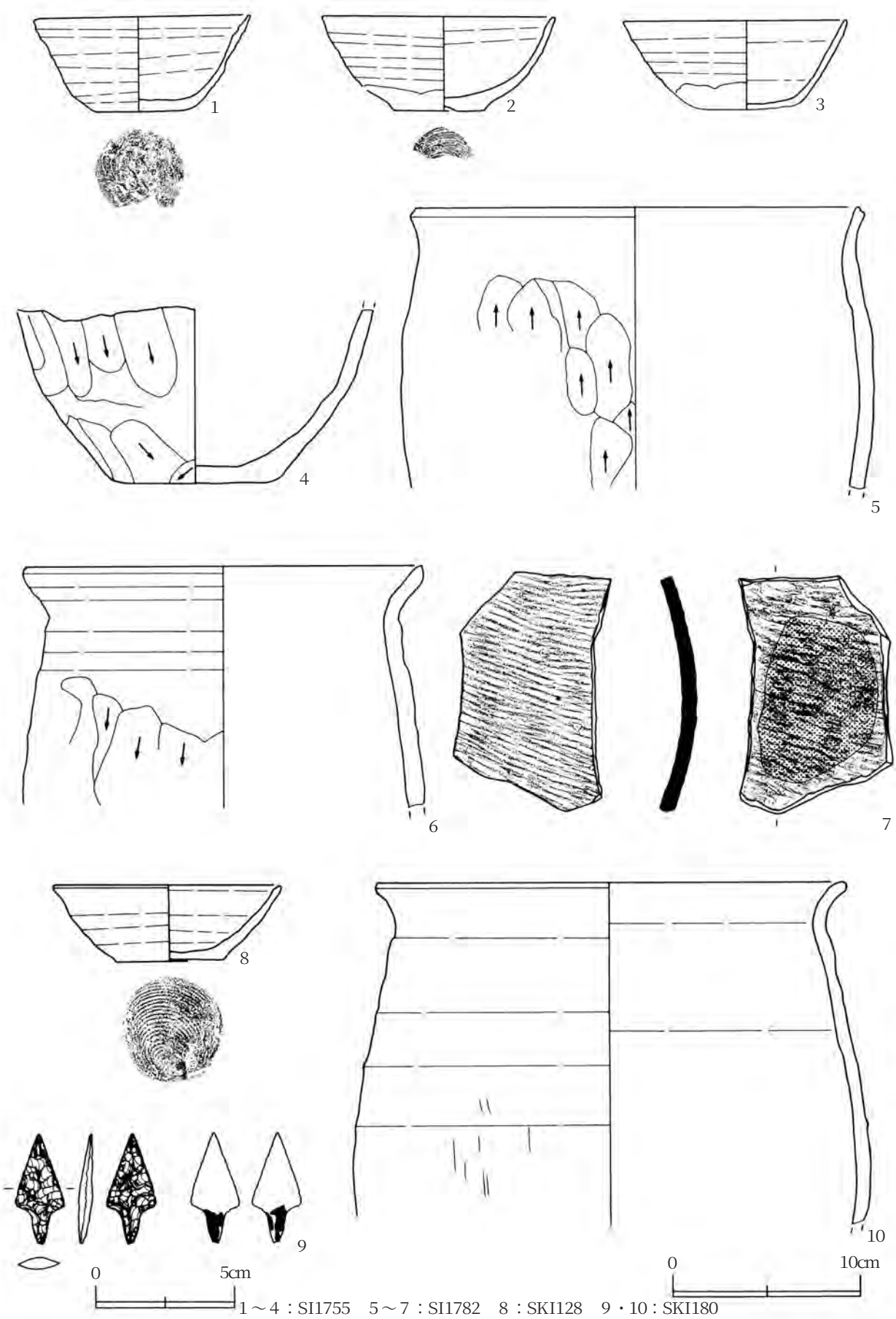


第170図　遺構内出土遺物（15）



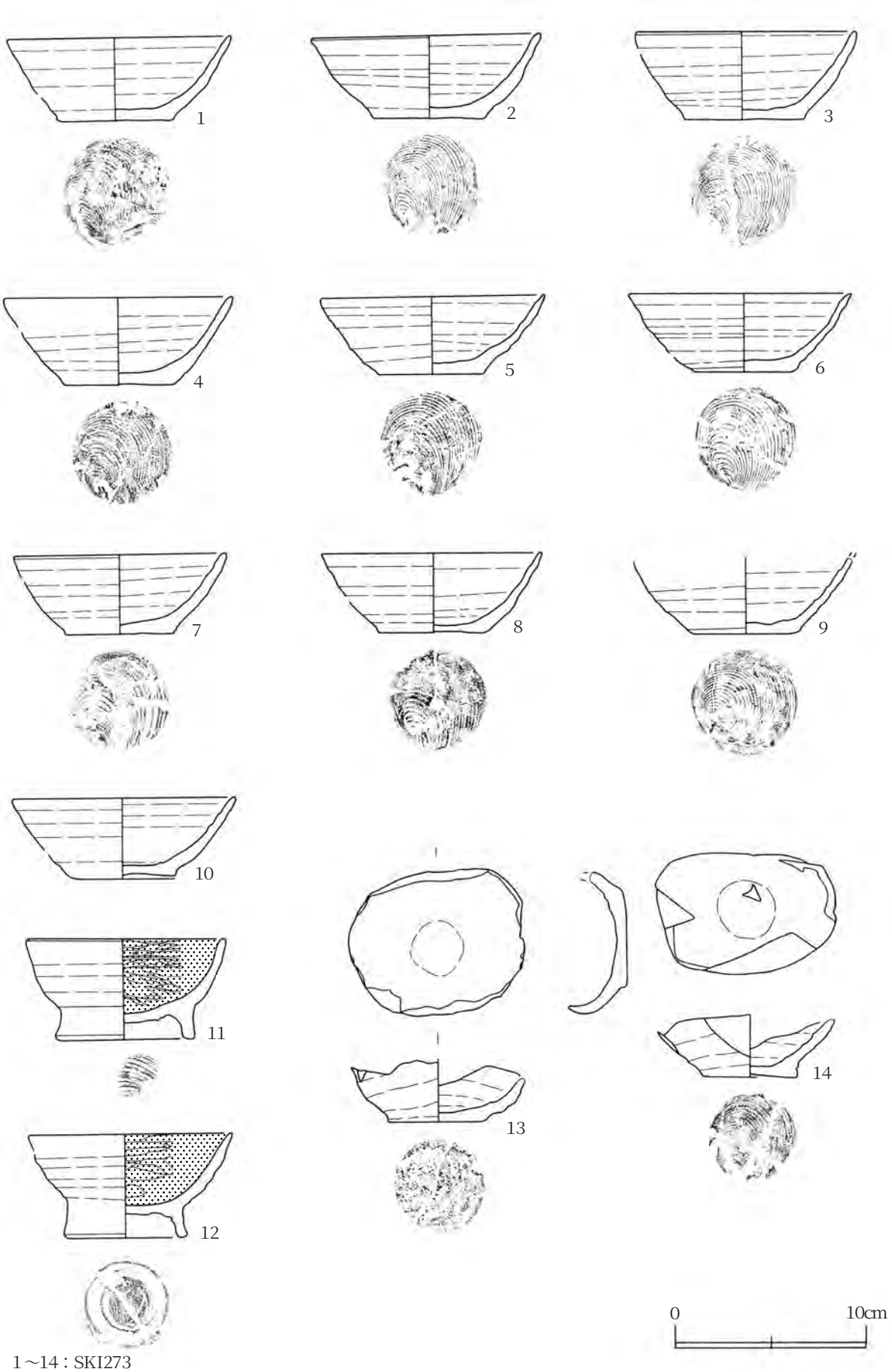
1～5：SI1650　6～15：SI1723

第171図　遺構内出土遺物（16）



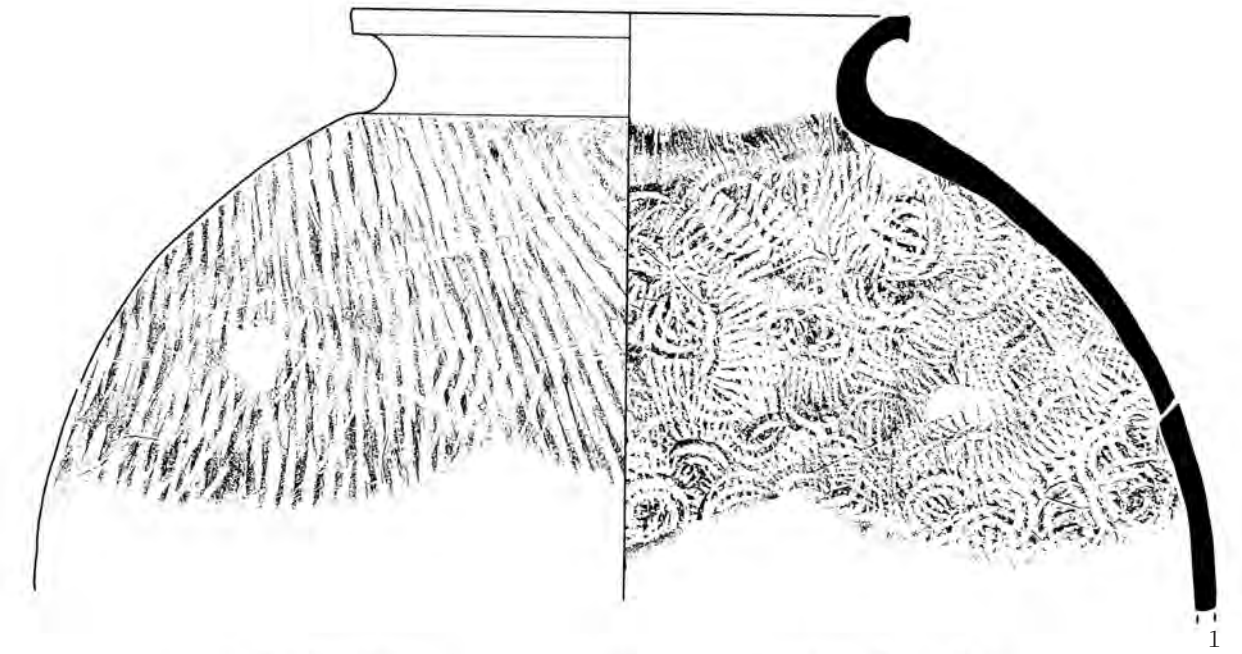
1～4：SI1755　5～7：SI1782　8：SKI128　9・10：SKI180

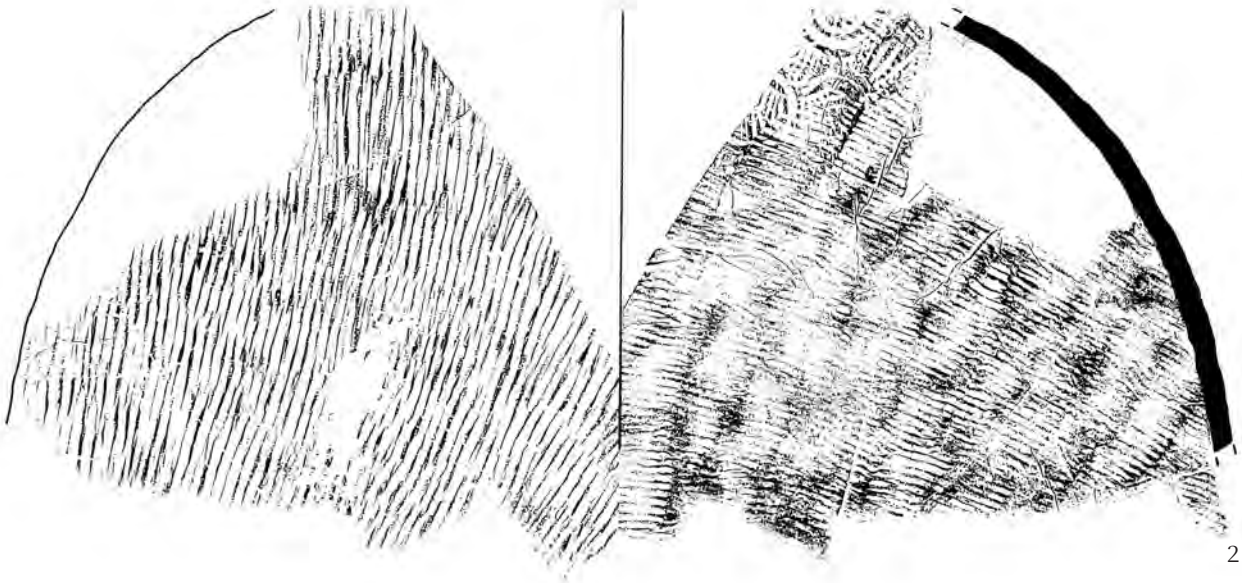
第172図　遺構内出土遺物（17）

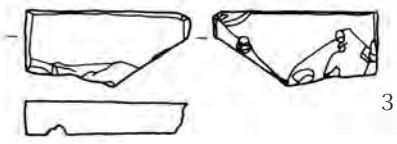


1～14：SKI273

第173図　遺構内出土遺物（18）

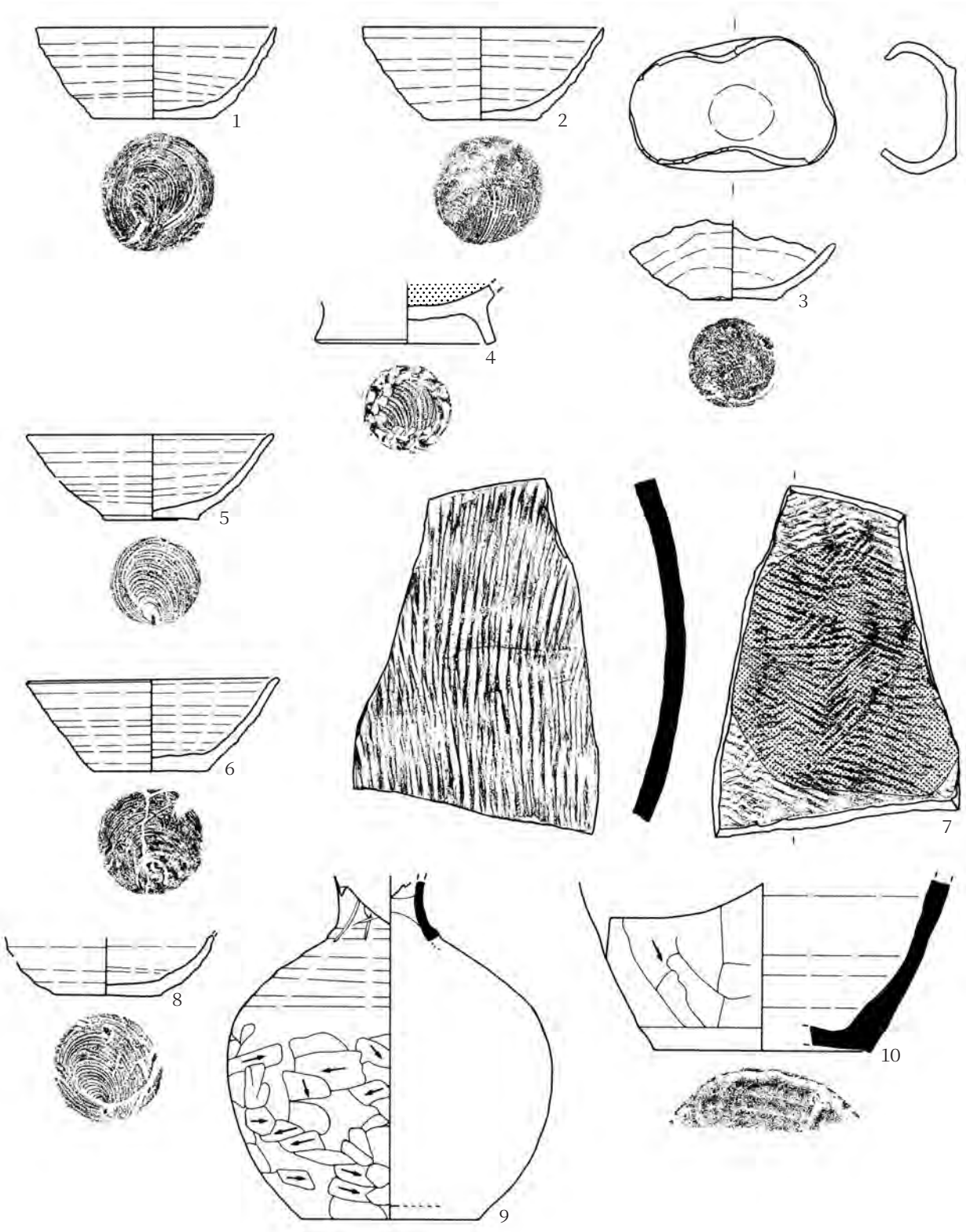






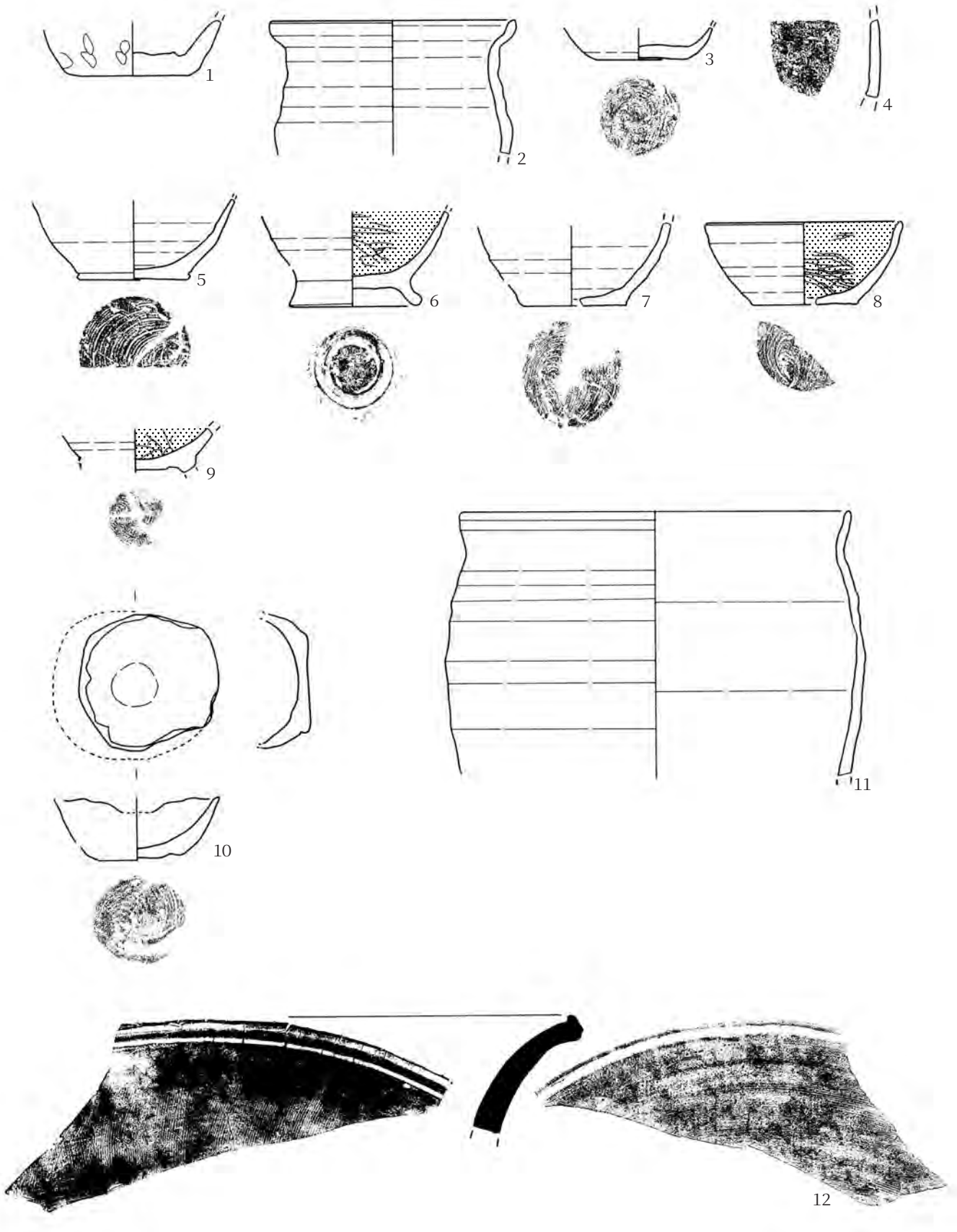
1～3：SKI273

第174図　遺構内出土遺物（19）



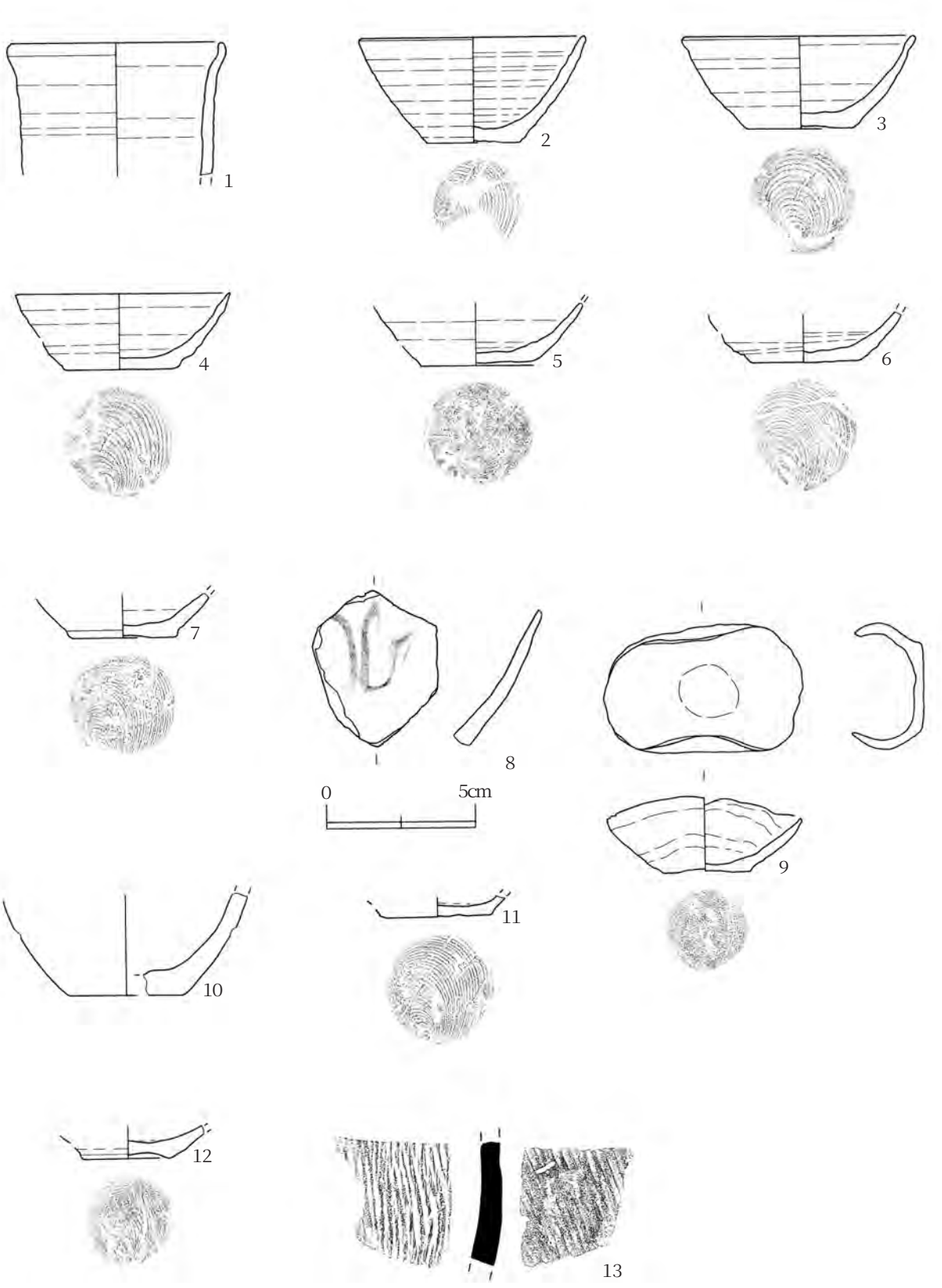
1・2：SKI350　3・4：SKI610　5～8:SKI888　9：SKI1098　10：SKI2066

第175図　遺構内出土遺物（20）



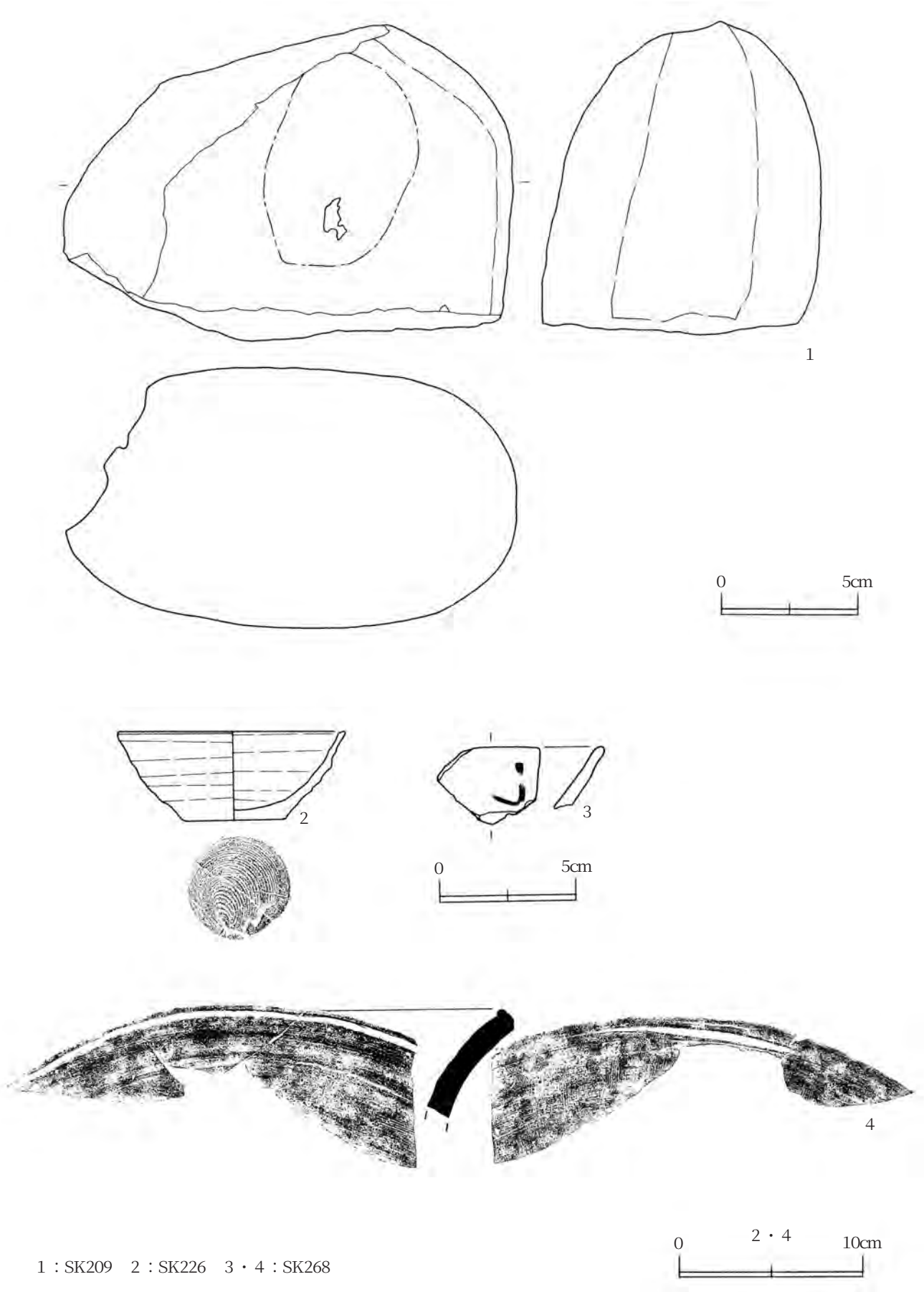
1：SK1　2：SK2　3・4：SK98　5・6：SK140　7～12：SK160

第176図　遺構内出土遺物（21）



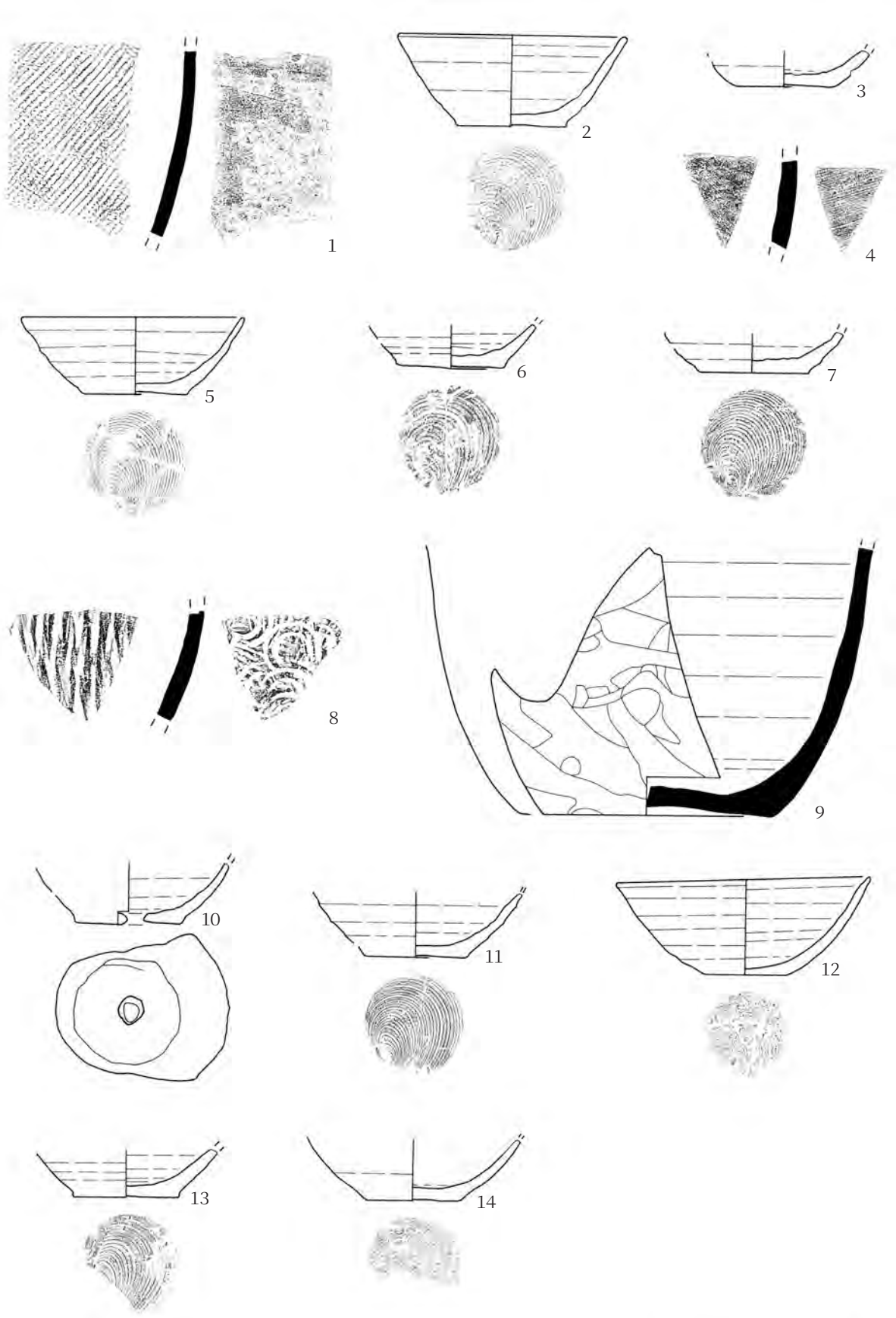
1：SK186　2～9：SK197　10：SK201　11：SK206　12・13：SK209

第177図　遺構内出土遺物（22）



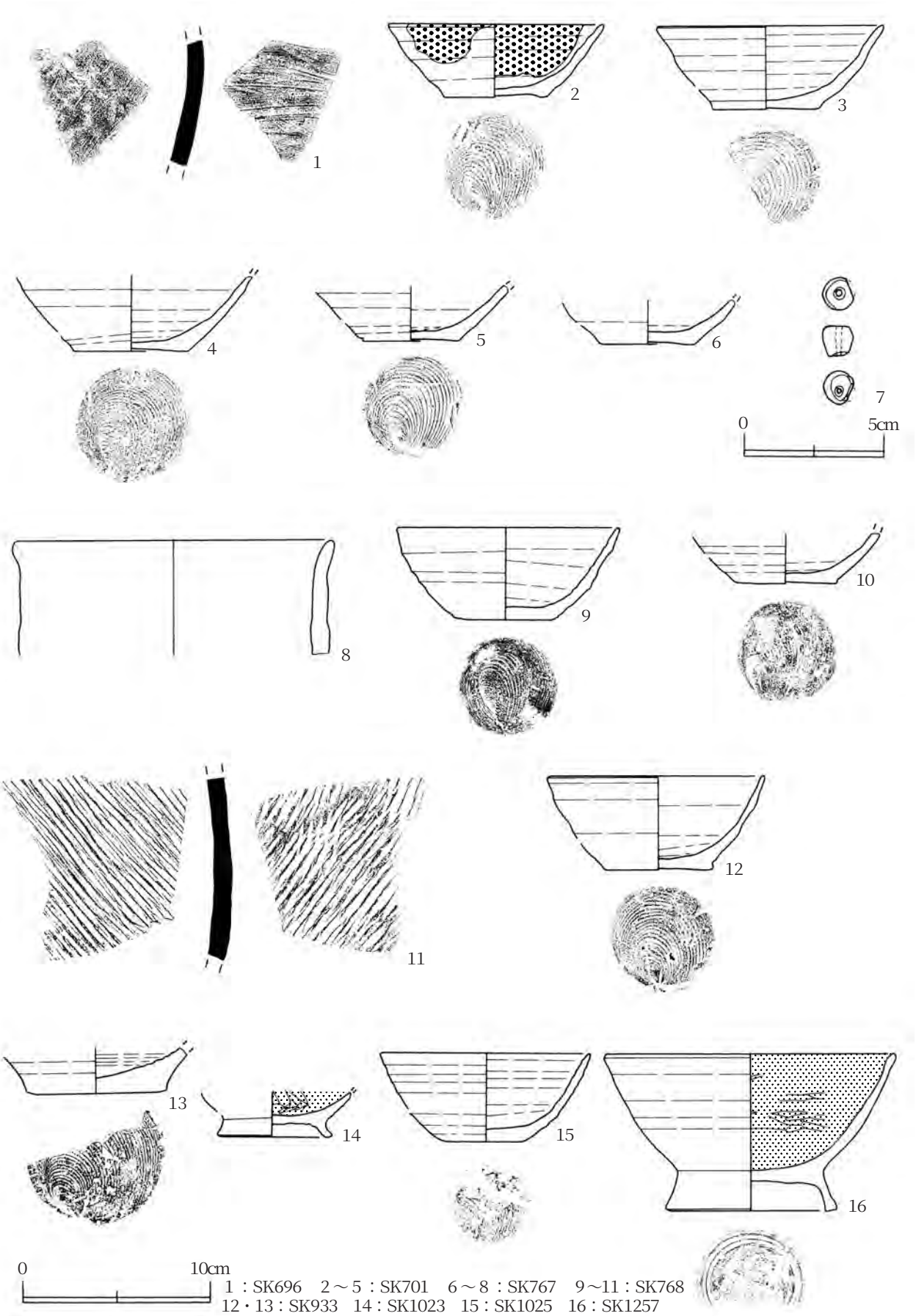
1：SK209　2：SK226　3・4：SK268

第178図　遺構内出土遺物（23）



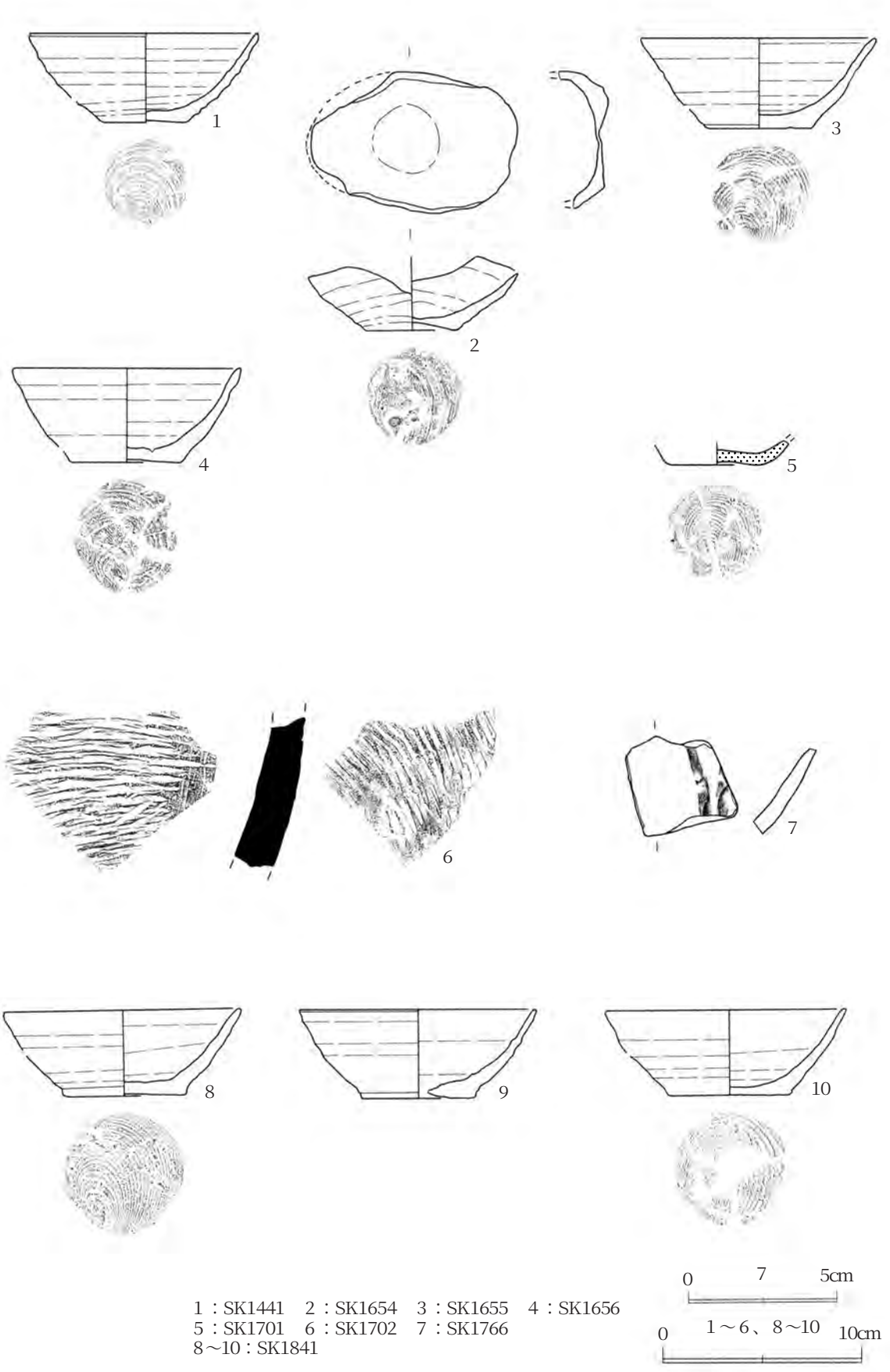
1：SK307　2・3：SK412　4：SK416　5～9：SK417　10・11：SK419
12：SK492　13：SK493　14：SK502

第179図　遺構内出土遺物（24）



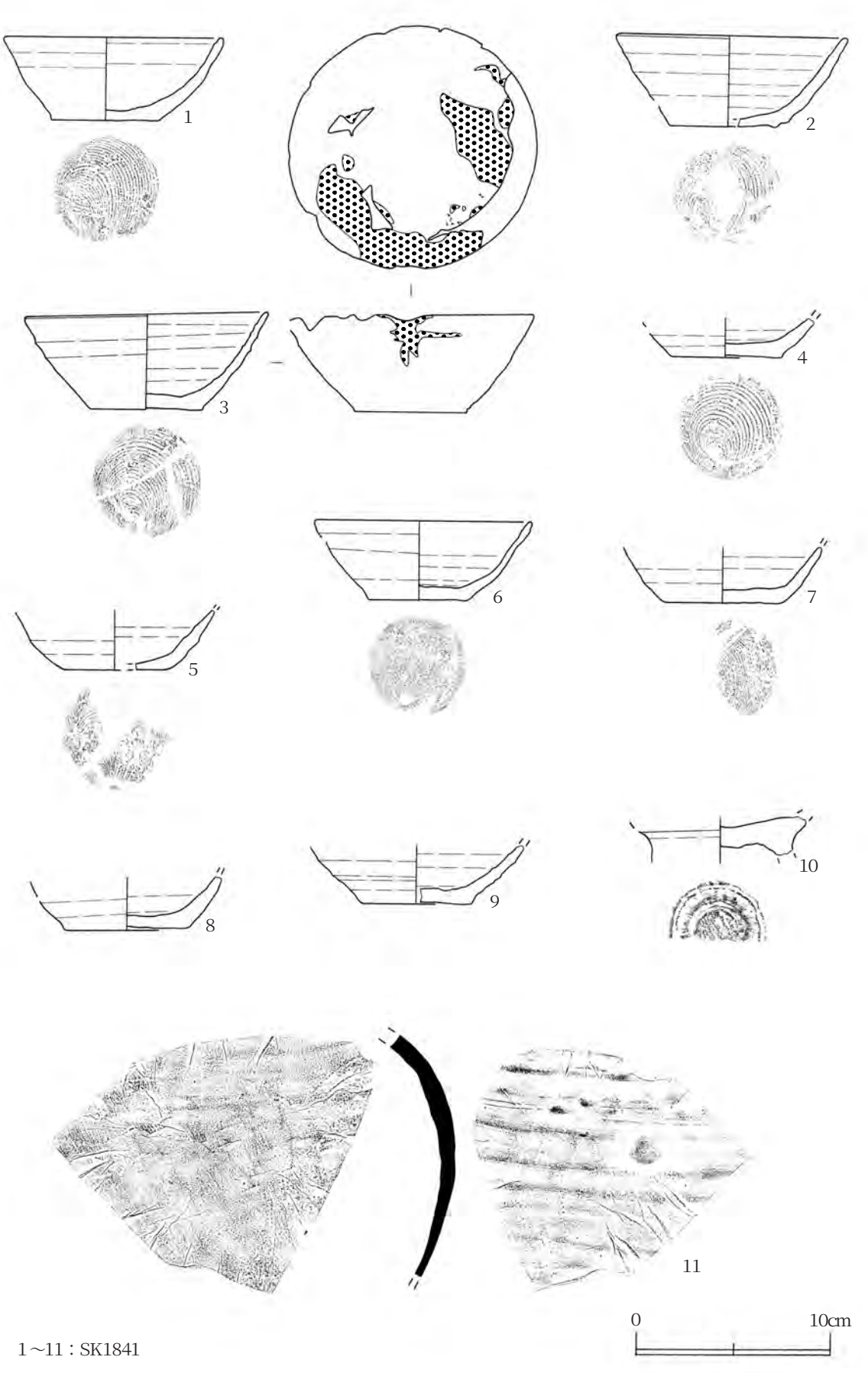
1：SK696　2～5：SK701　6～8：SK767　9～11：SK768
12・13：SK933　14：SK1023　15：SK1025　16：SK1257

第180図　遺構内出土遺物（25）



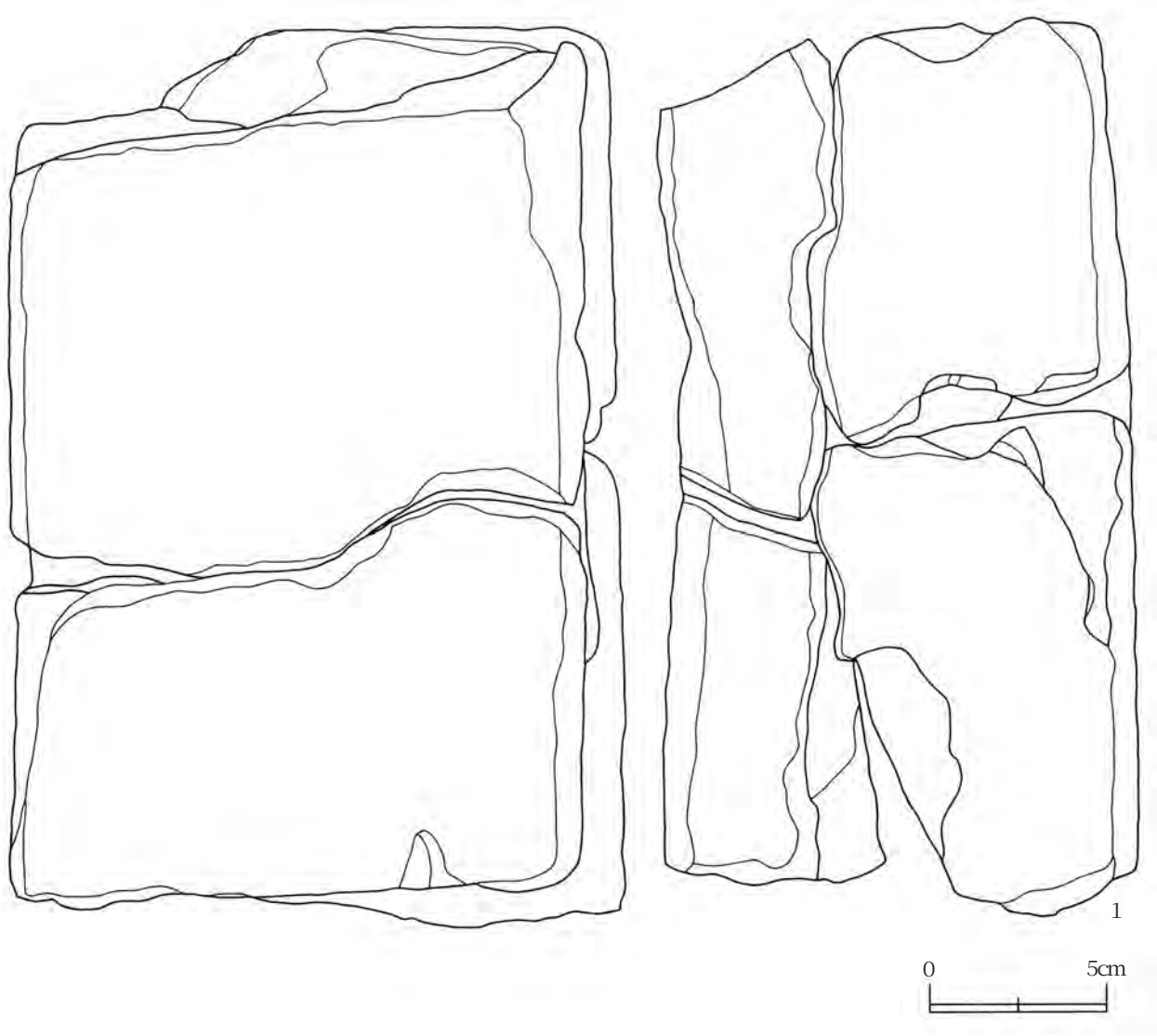
1：SK1441　2：SK1654　3：SK1655　4：SK1656
5：SK1701　6：SK1702　7：SK1766
8～10：SK1841

第181図　遺構内出土遺物（26）



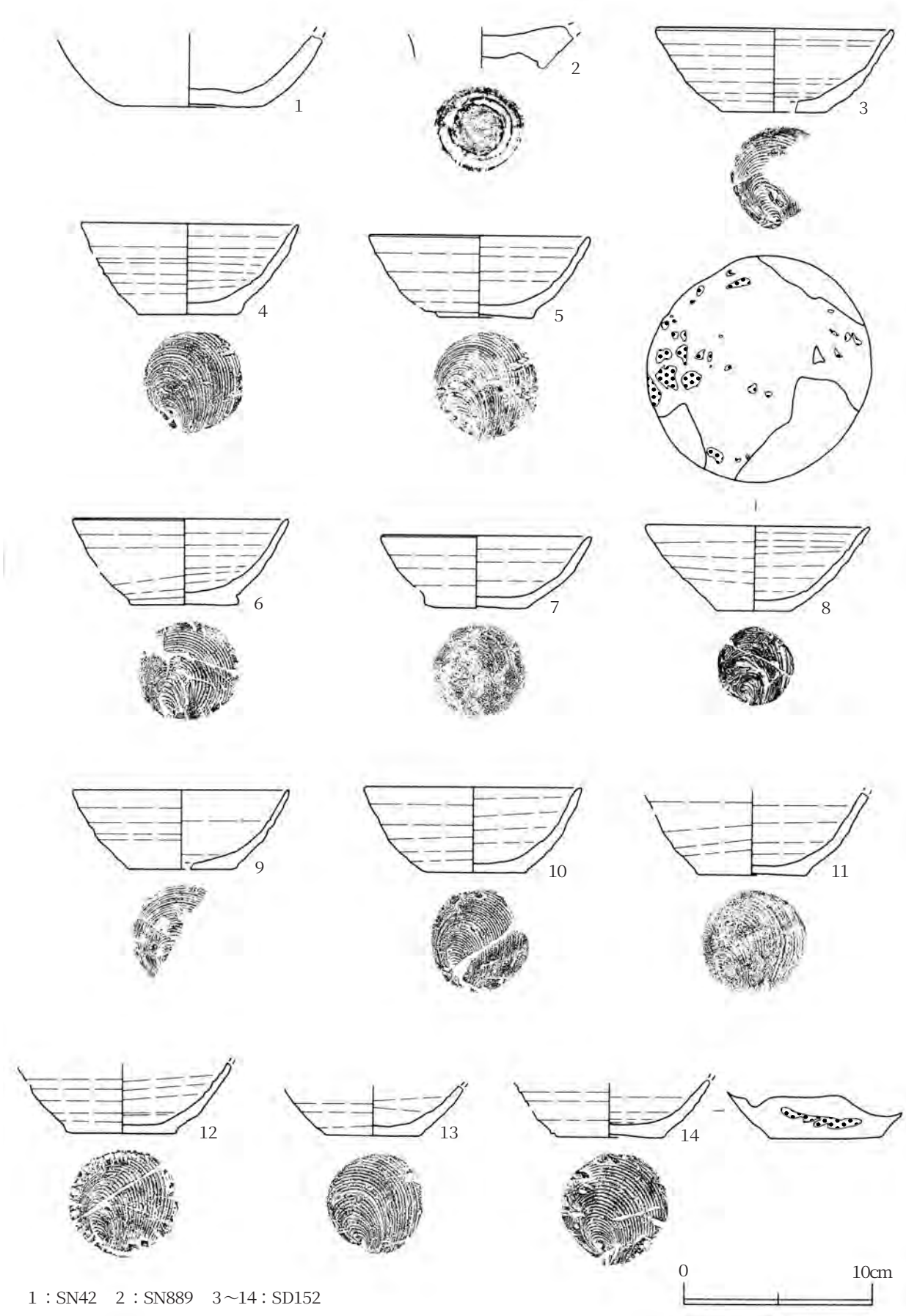
1～11：SK1841

第182図　遺構内出土遺物（27）



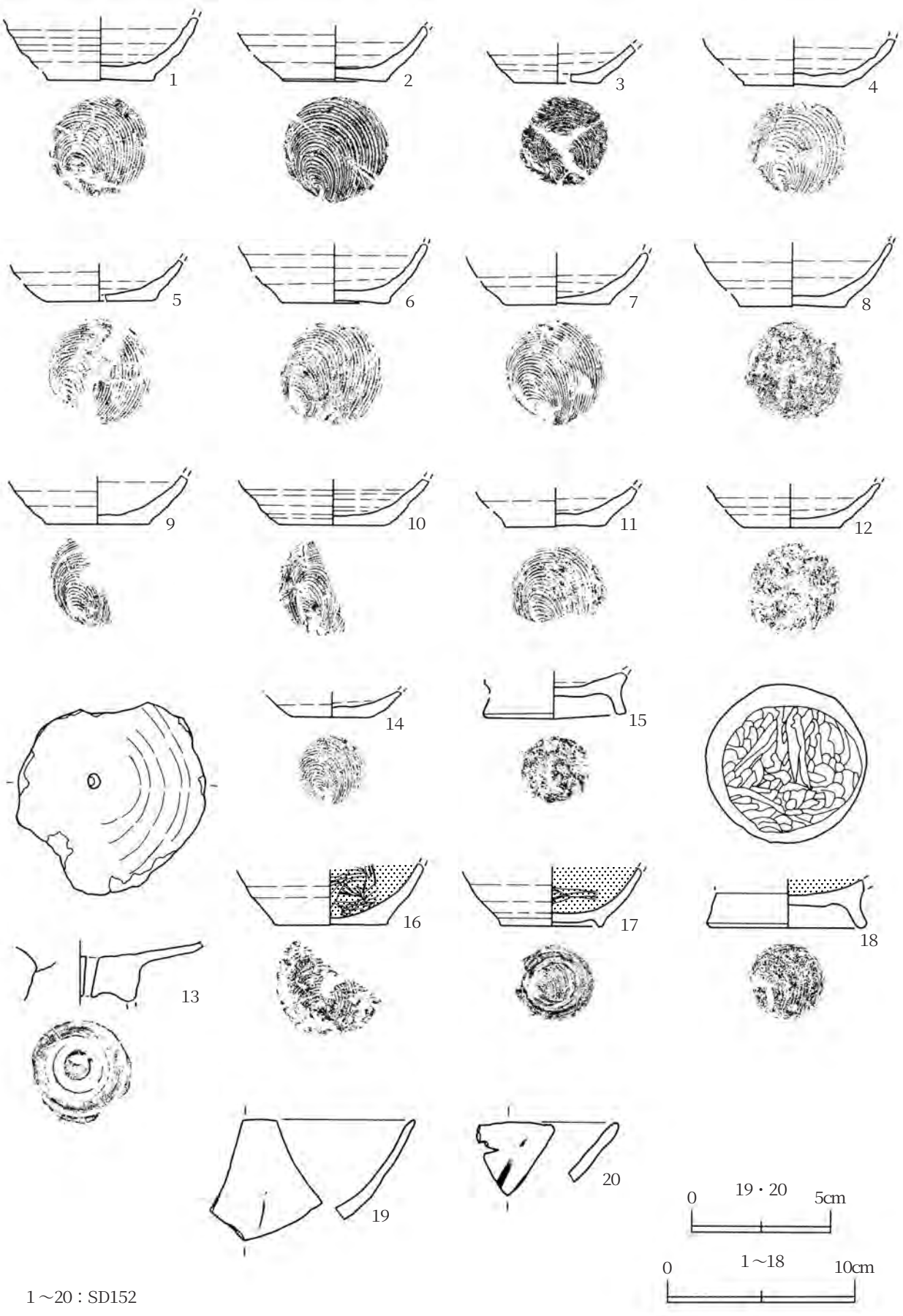
1：SK1841

第183図　遺構内出土遺物（28）



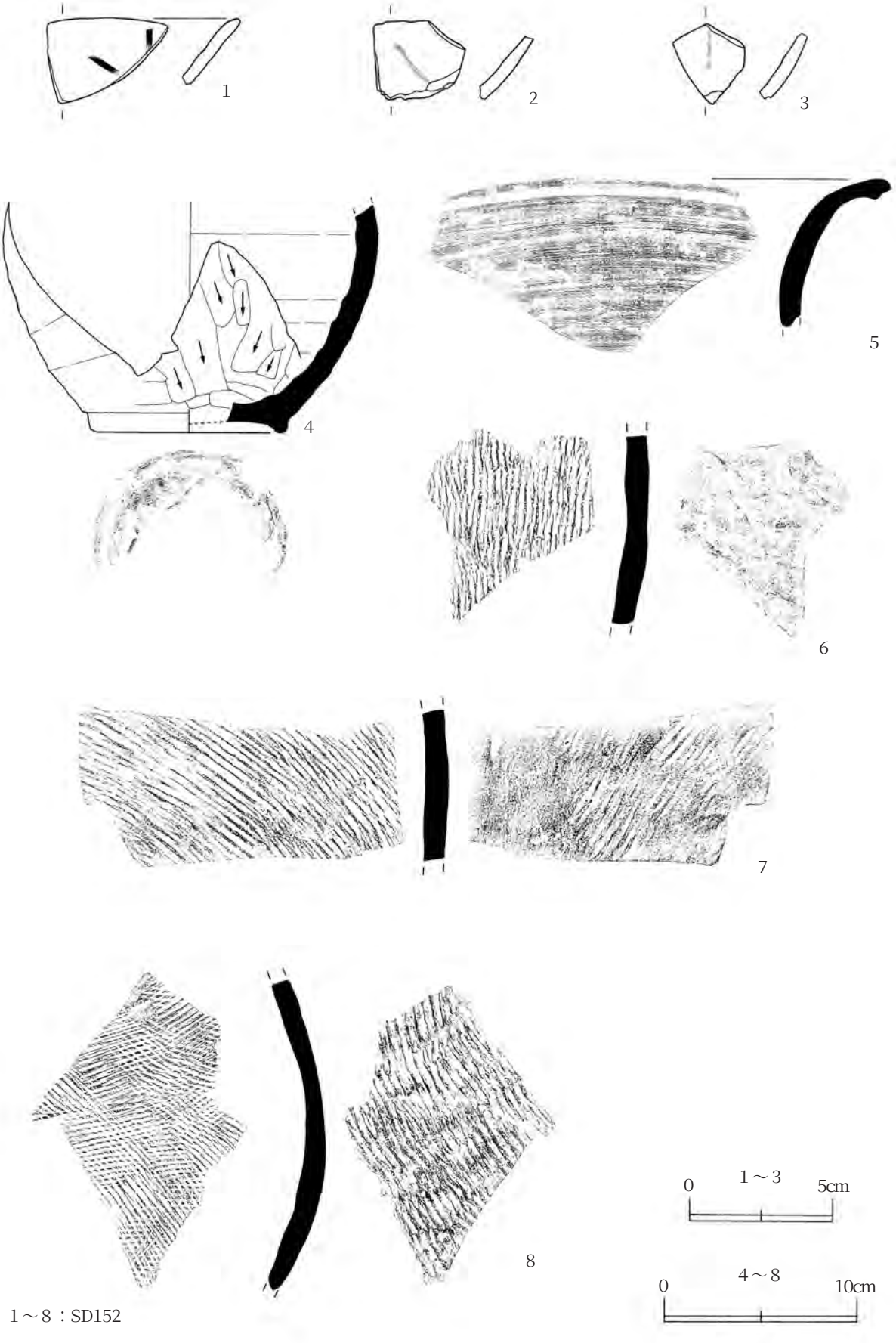
1：SN42　2：SN889　3～14：SD152

第184図　遺構内出土遺物（29）



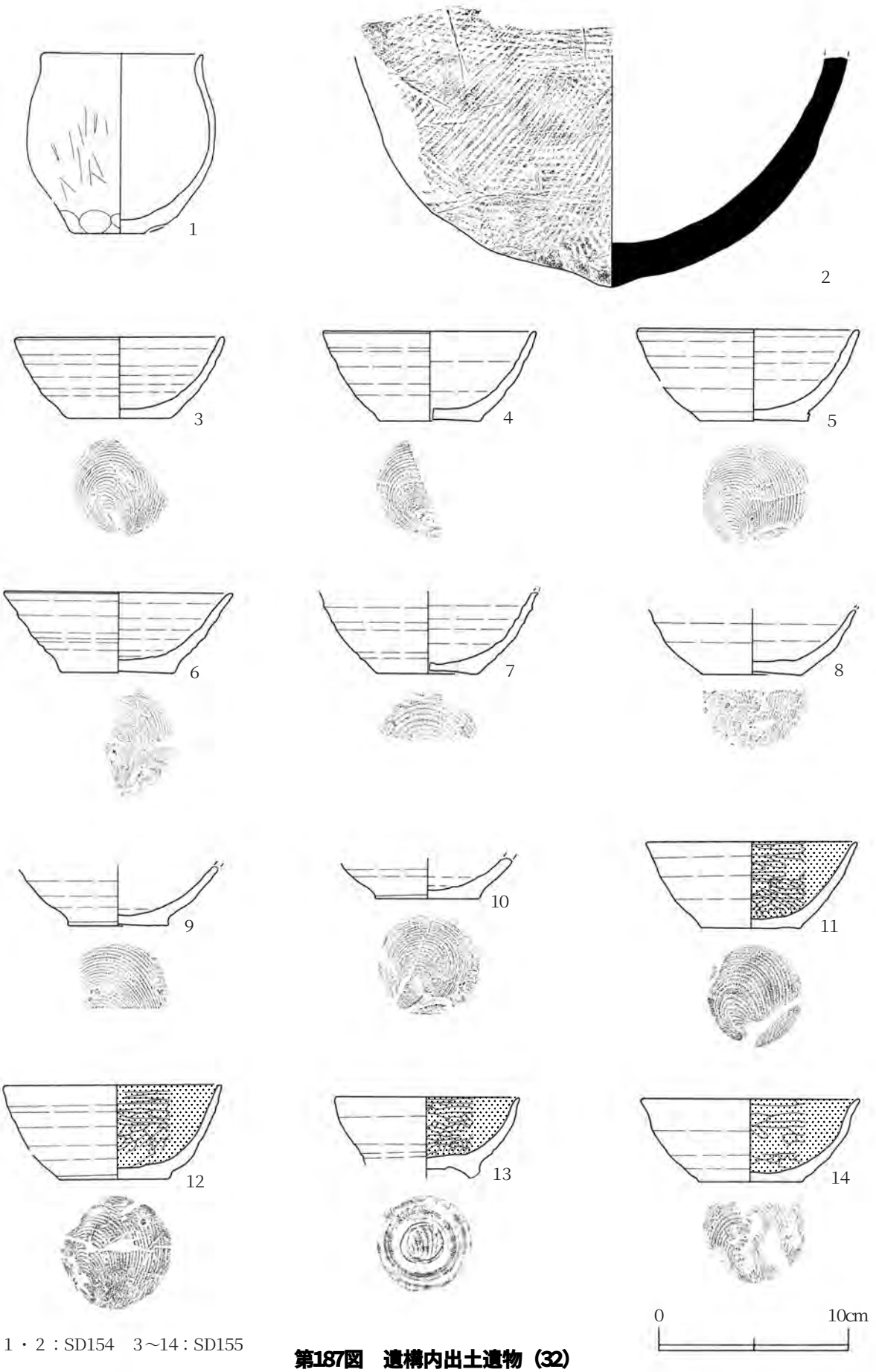
1～20：SD152

第185図　遺構内出土遺物（30）



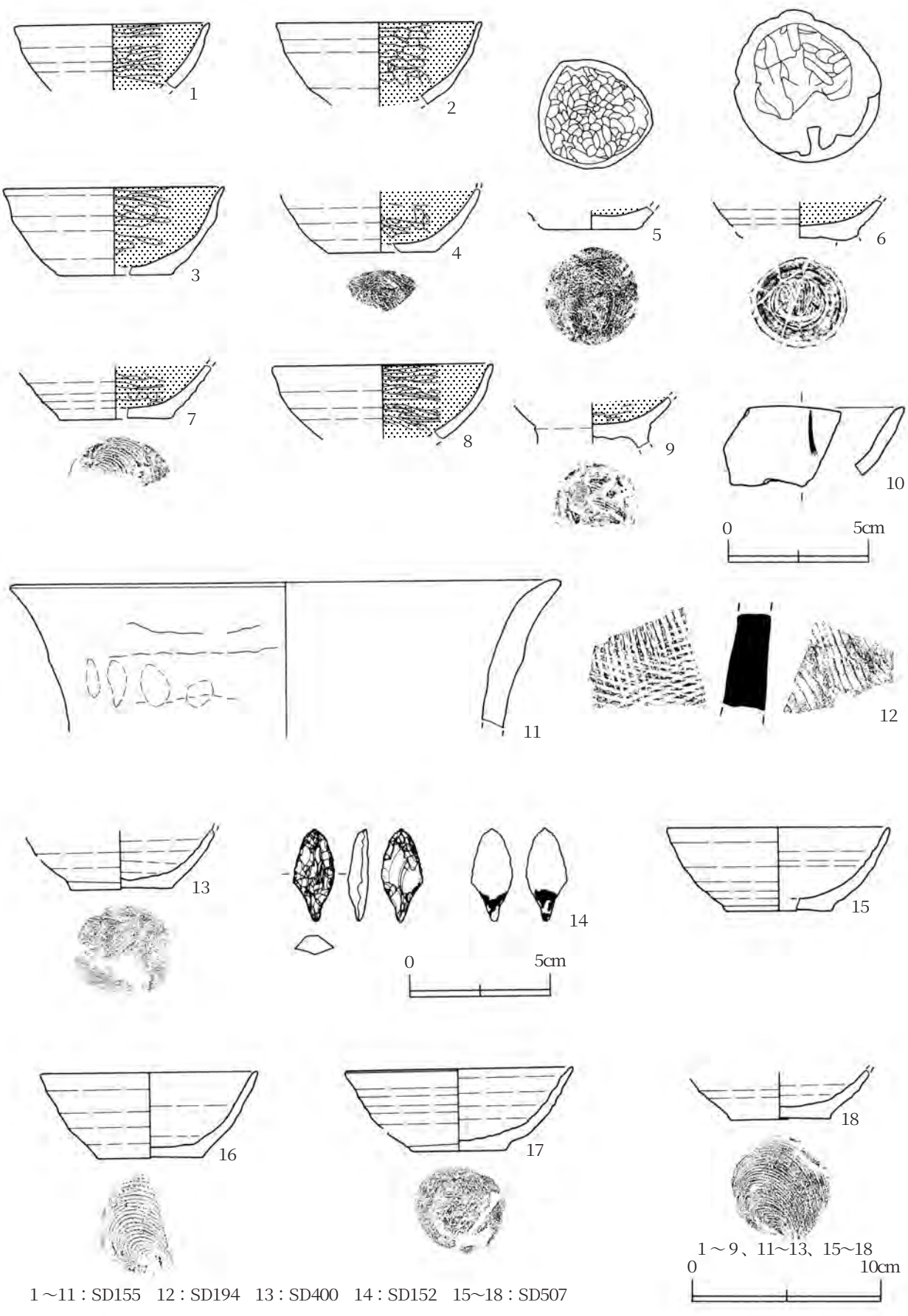
1～8：SD152

第186図　遺構内出土遺物（31）



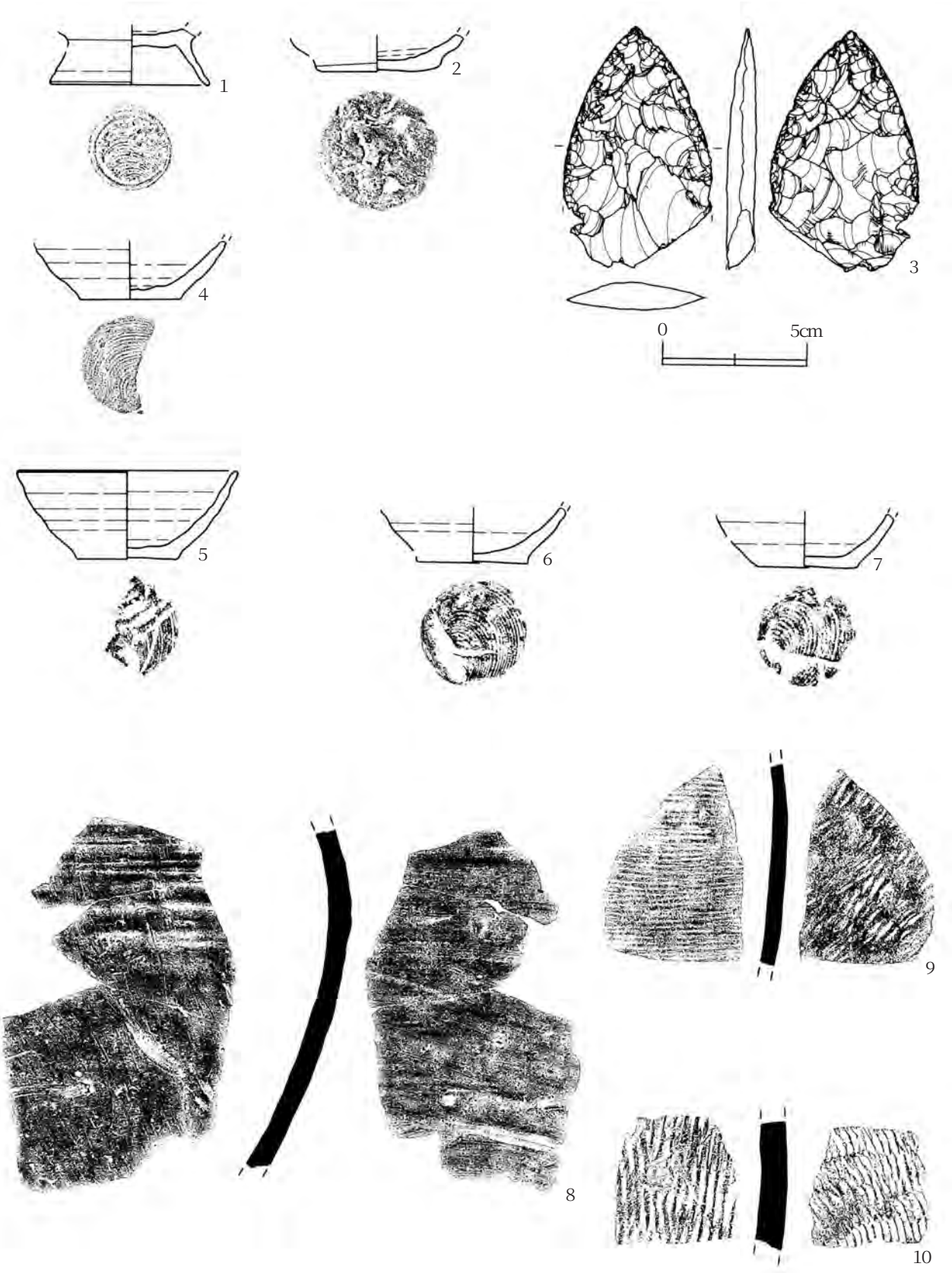
1・2：SD154　3～14：SD155

第187図　遺構内出土遺物（32）



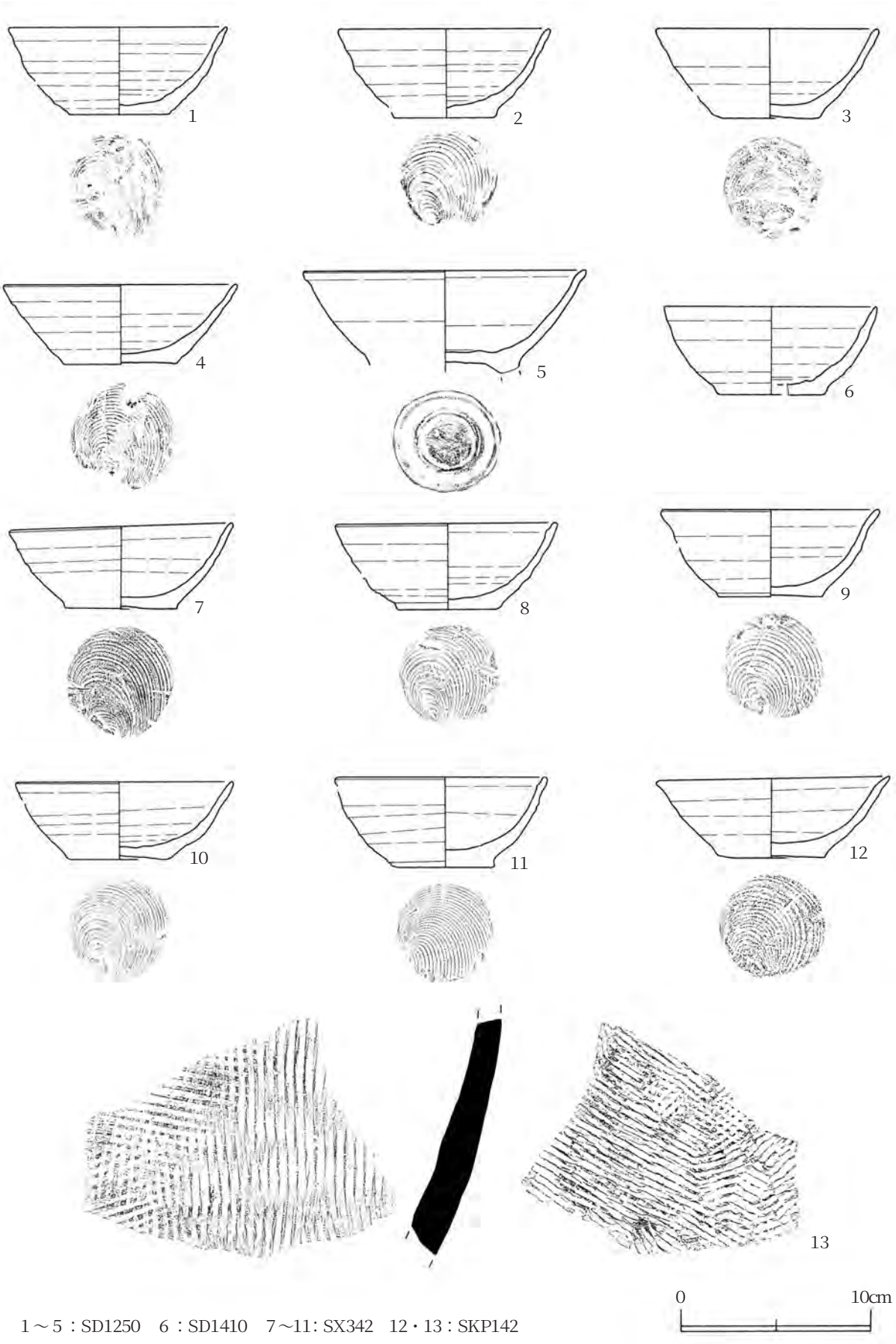
1～11：SD155　12：SD194　13：SD400　14：SD152　15～18：SD507

第188図　遺構内出土遺物（33）



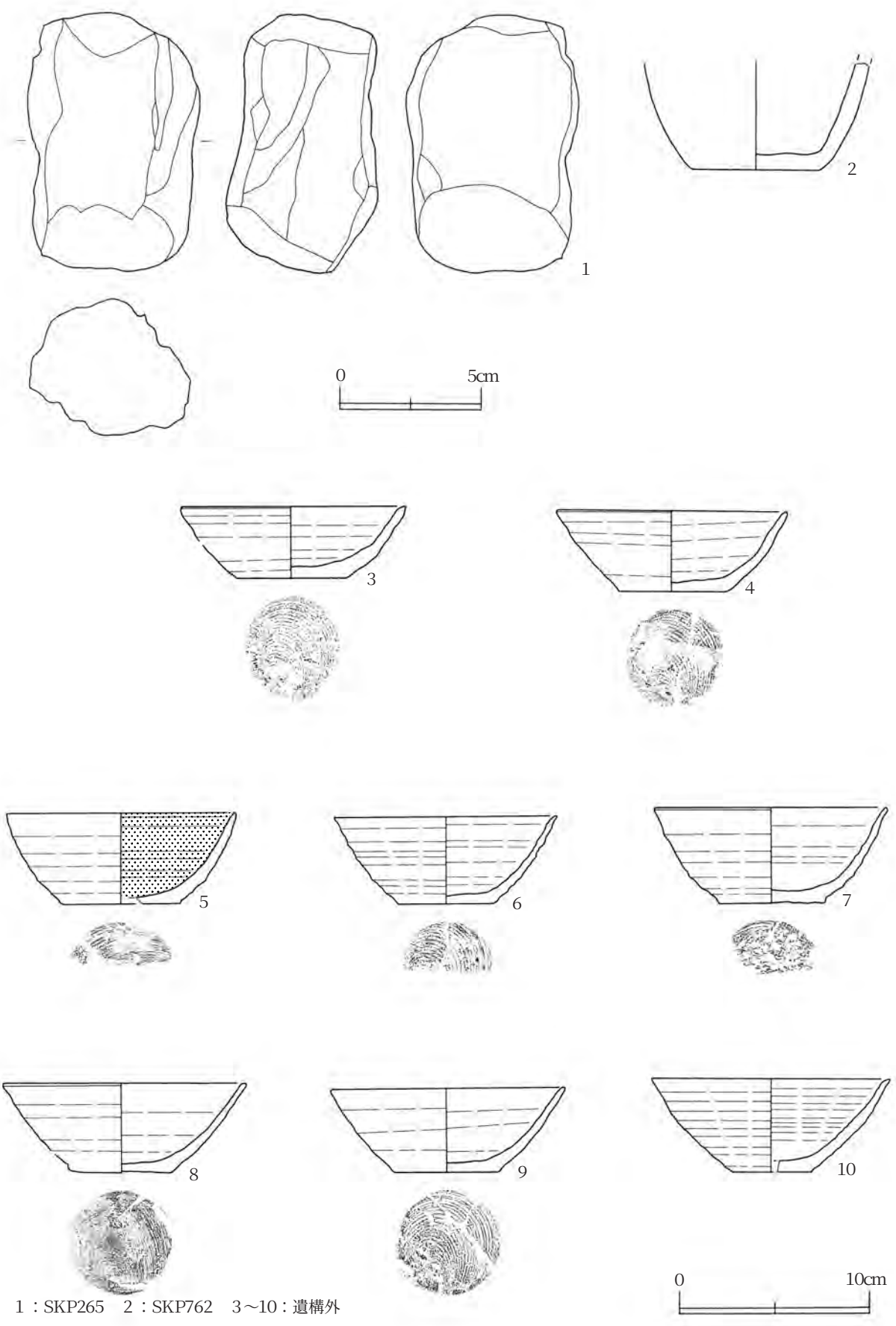
1～3：SD508　4：SD652　5～10：SD771

第189図　遺構内出土遺物（34）



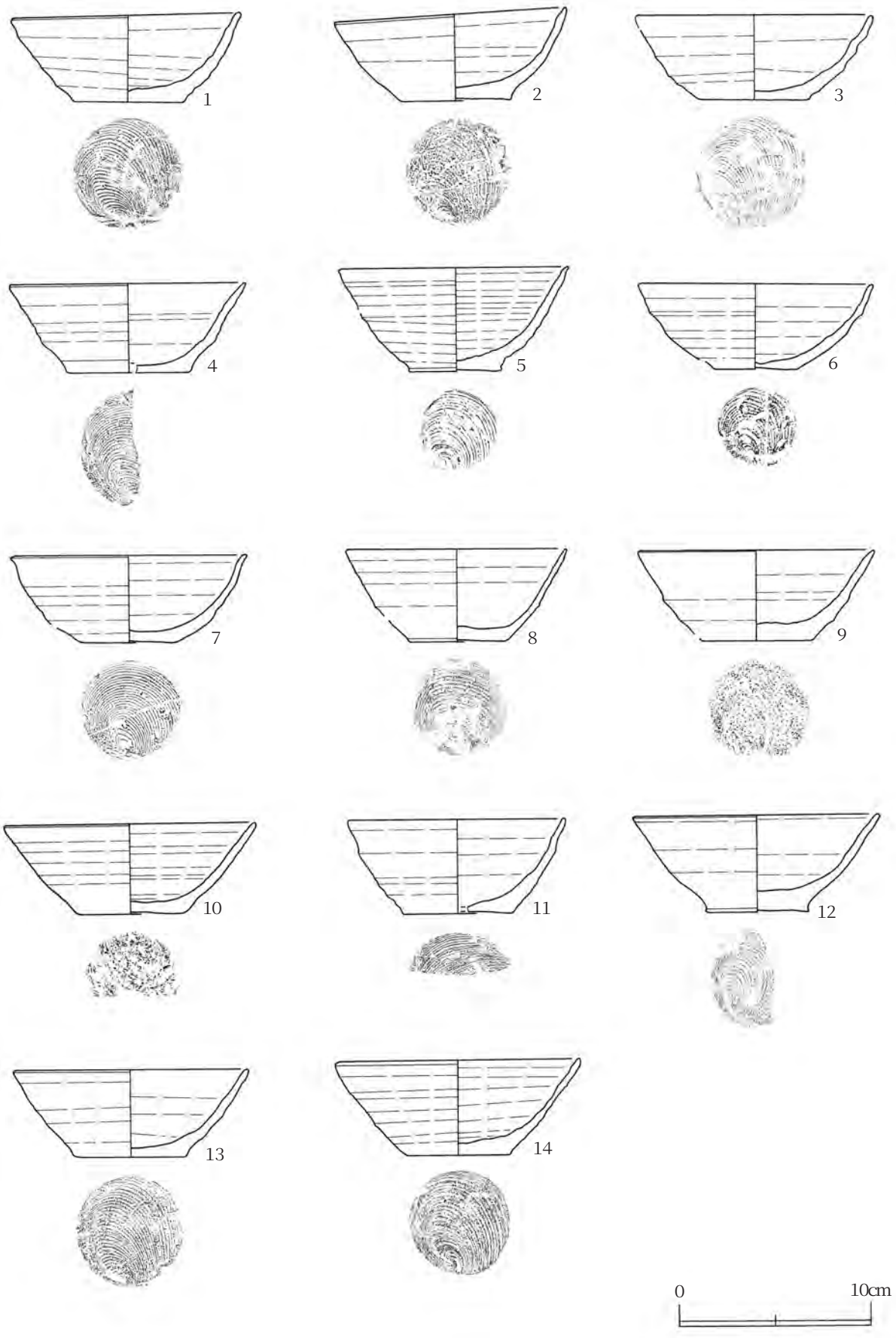
1～5：SD1250　6：SD1410　7～11：SX342　12・13：SKP142

第190図　遺構内出土遺物（35）

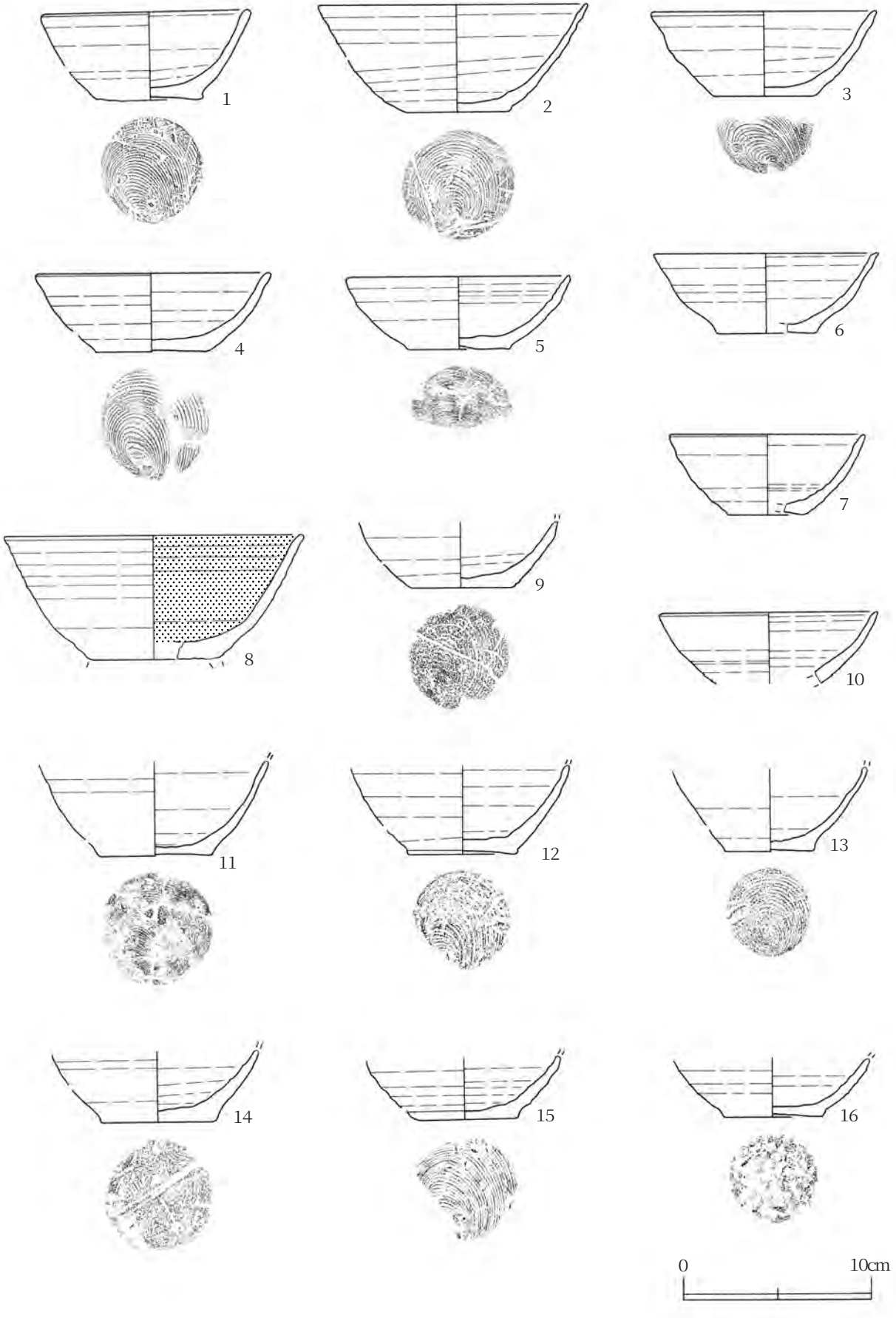


1：SKP265　2：SKP762　3～10：遺構外

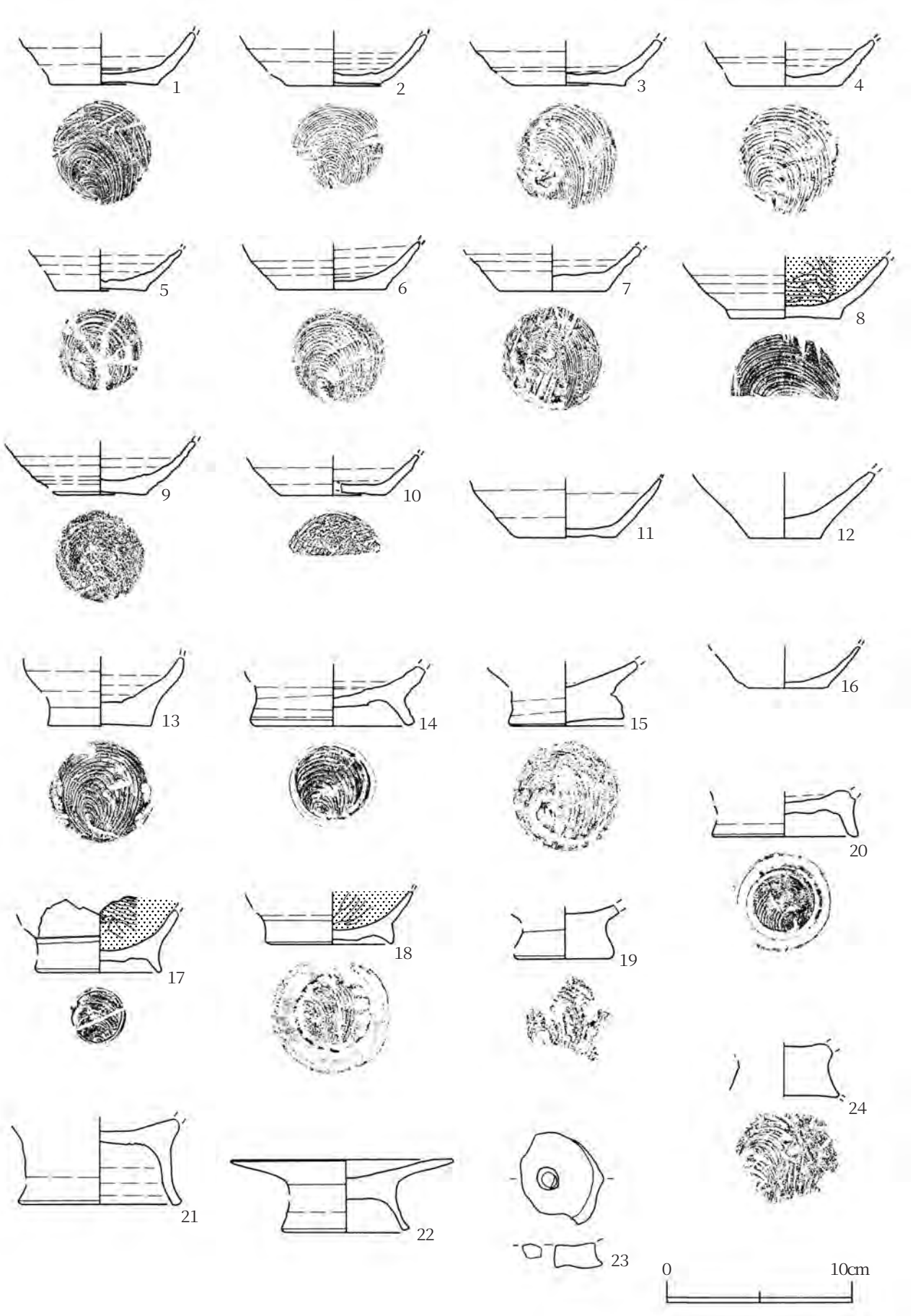
第191図　遺構内出土遺物（36）・遺構外出土遺物（1）



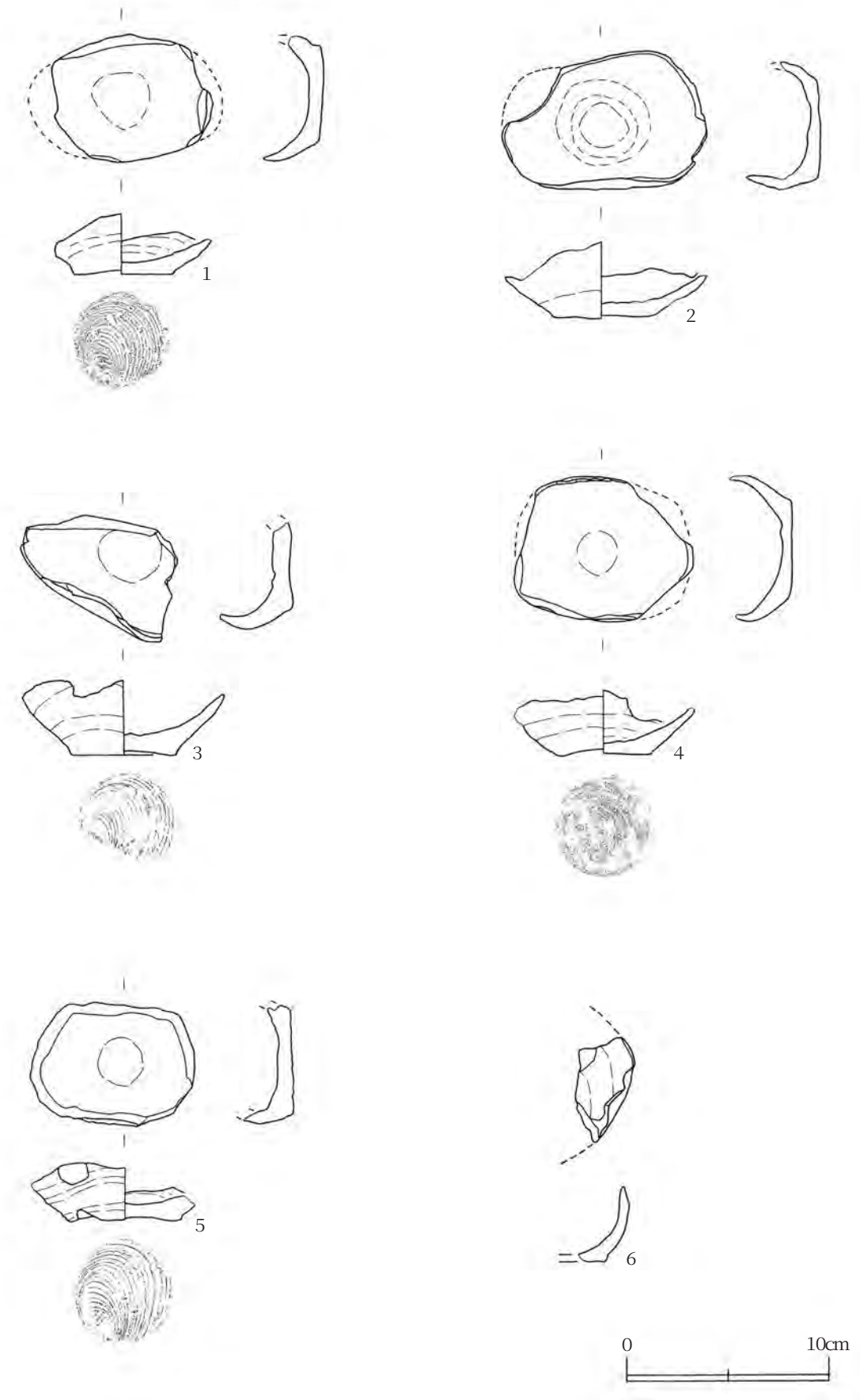
第192図　遺構外出土遺物（２）



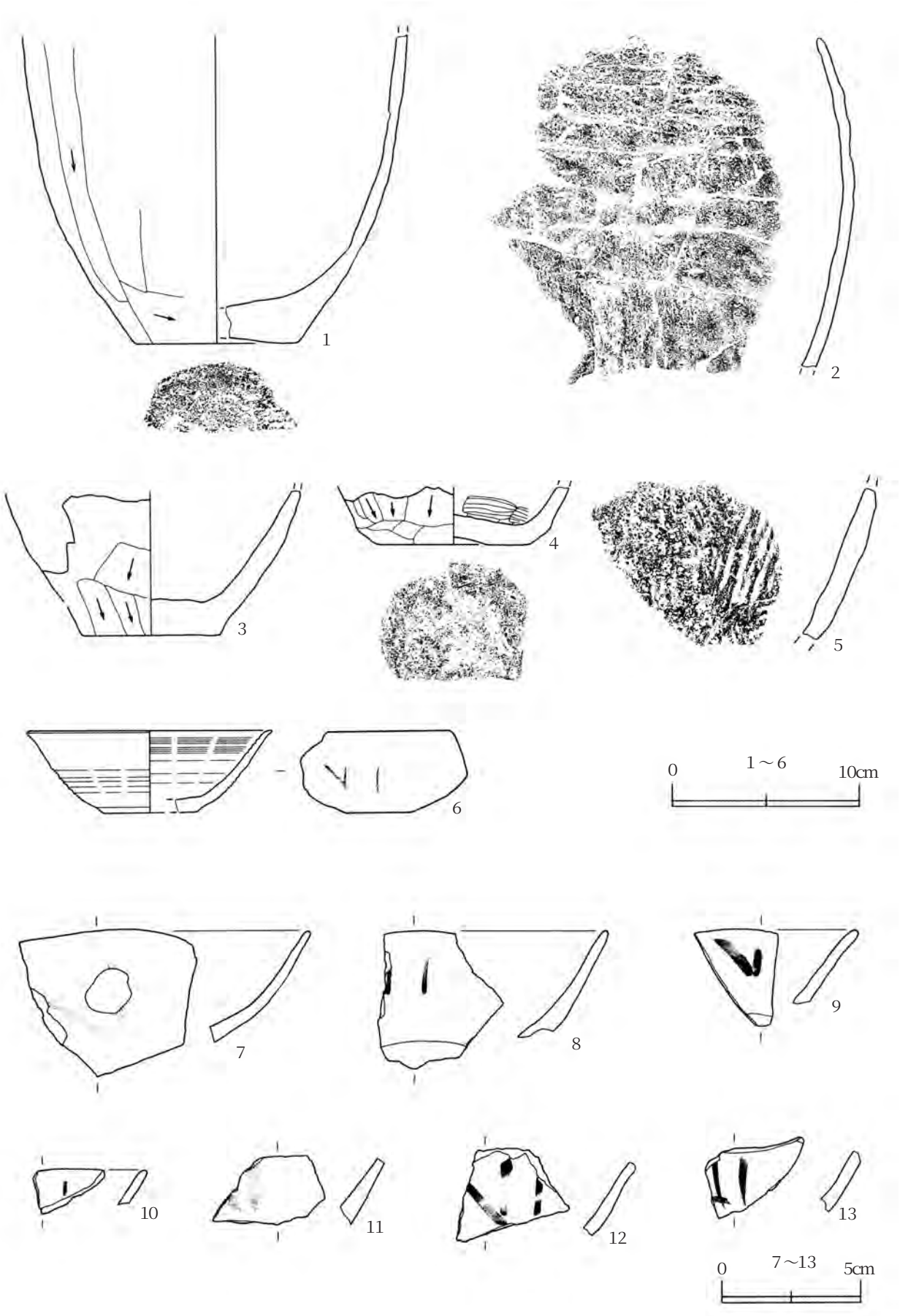
第193図　遺構外出土遺物（3）



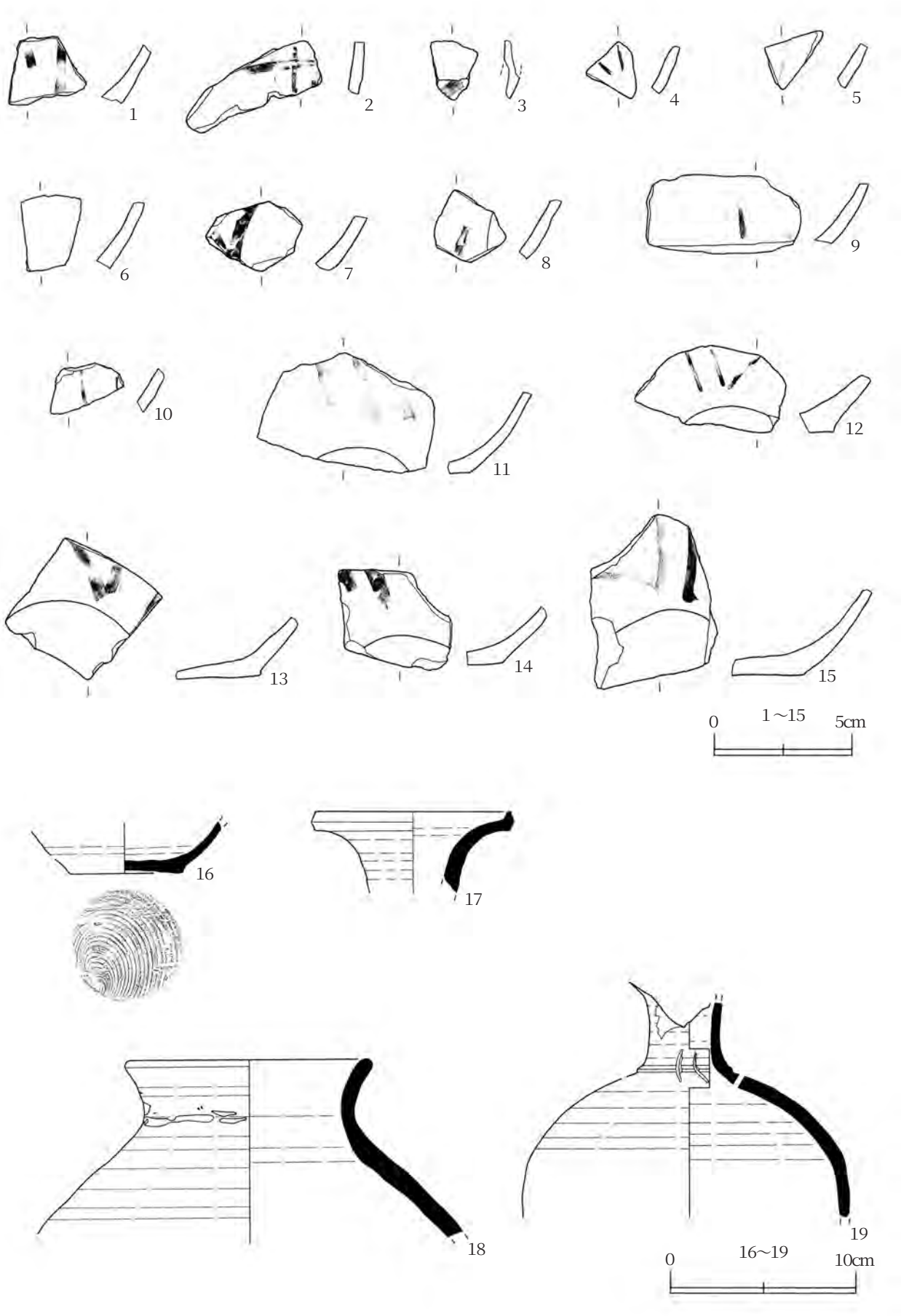
第194図　遺構外出土遺物（４）



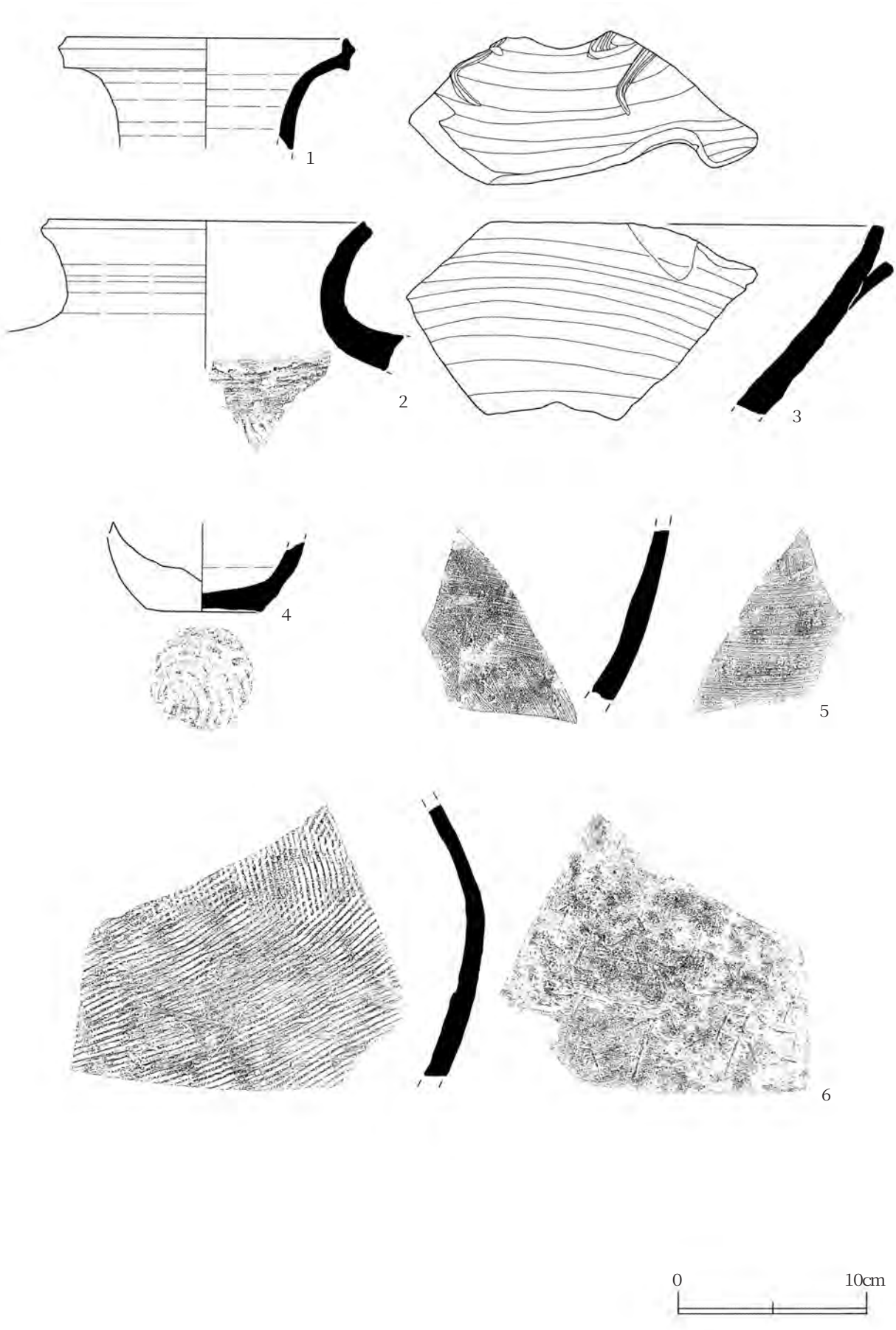
第195図　遺構外出土遺物（5）



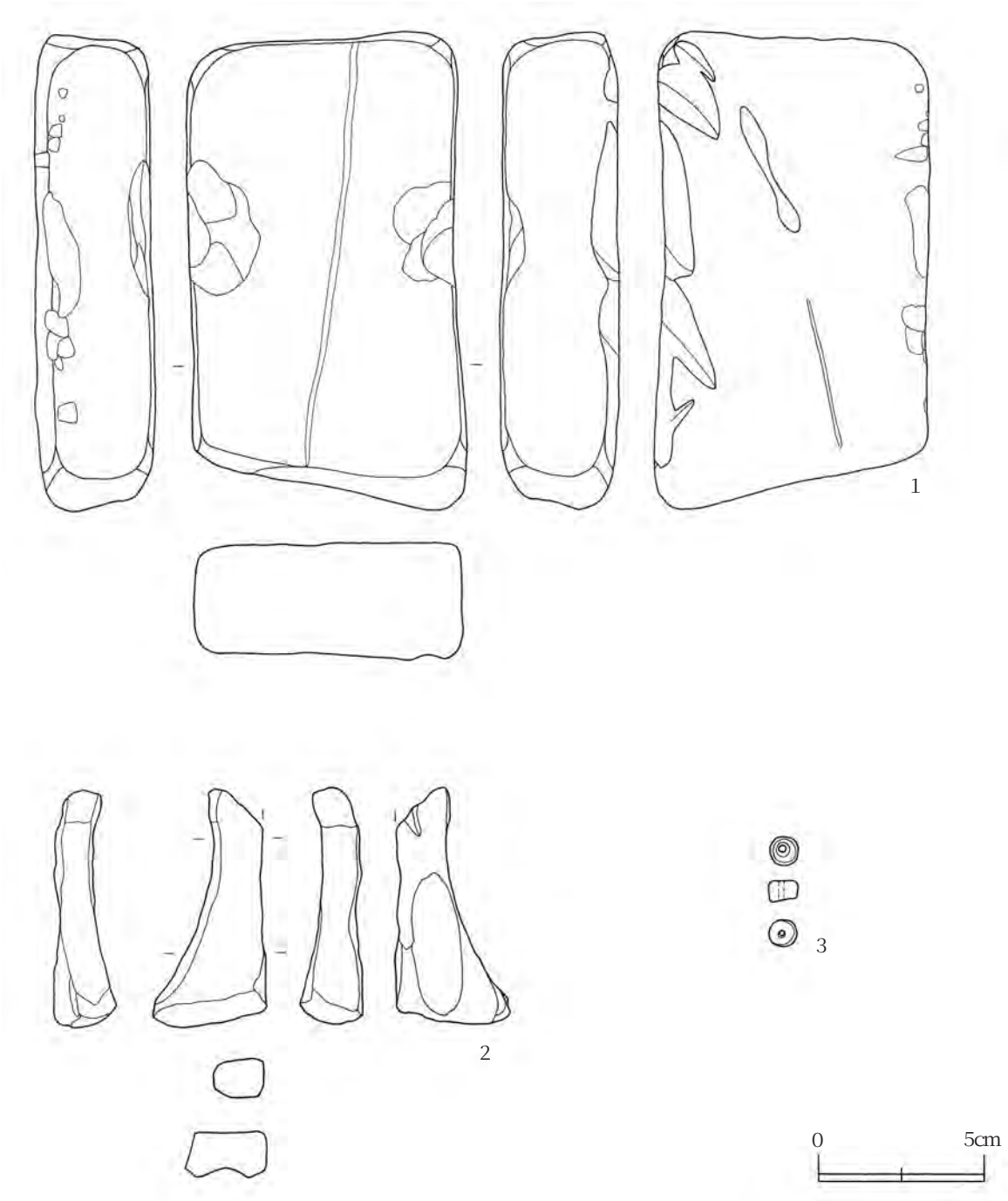
第196図　遺構外出土遺物（６）



第197図　遺構外出土遺物（7）



第198図　遺構外出土遺物（８）



第199図　遺構外出土遺物（9）

12　遺物（１）

ここでは鉄関連遺物以外の遺物を掲載した。中心となるのは、土師器と須恵器である。土師器には、明らかな胎土のちがいがみられるため、観察表には「胎土の種類」という項目を設けた。

「胎土の種類」の分類基準は以下のとおりである。

坏・椀・皿

砂礫の混入が極めて少なく、内外面が滑らかなもの：Ａ類

Ａ１：薄手で明るい色調。　Ａ２：厚手で明るい色調。　Ａ３：厚手で暗い色調。１、２に比べやや滑度が劣るものもある。

砂礫の混入が比較的多く、表面にざらつきがあるもの：Ｂ類

Ｂ１：砂礫粒子が粗く、ざらつきが大きいもの。Ｂ２：砂礫粒子は細かいが、ざらつきがあるもの。Ｂ３：砂礫粒子は細かく、ざらつきが小さいもの。

坏・椀・皿以外の土師器

砂礫の混入が比較的多いもの：Ｃ類　　砂礫の混入が少ないもの：Ｄ

残存量や摩滅などにより判断できなかったもの：×

※Ａ１は、胎土が非常に細かく、水簸によって得た素地を使用している可能性がある。焼成も非常に良い。Ａ２とＡ３は、形態や重量感に大きな差が認められないため、色調のちがいは焼成や使用環境のちがいによるものと考えられる。

第30表　遺物観察表（１）

挿図番号	番号	種別	器種	出土位置	出土層位	特　　徴	胎土の種類	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	底径指数	高径指数	外傾度	図版番号
156	1	土師器	甕？	ＳＩ32	覆土	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ	×	－	5.4	(2.6)	－	－	－	－
156	2	土師器	坏	ＳＩ39	覆土	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ	×	－	5.4	(2.2)	－	－	－	－
156	3	土師器	坏	ＳＩ39	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	×	－	5.0	(1.9)	－	－	－	－
156	4	須恵器	壺	ＳＩ39・SN42・MR47	覆土	外面：ロクロナデ→ケズリ、内面：ロクロナデ※内面底部に付着物。	－	－	10.8	(19.2)	－	－	－	37
156	5	土師器	坏	ＳＩ50	床面	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※上から156－５、156－６、156－９の順で重なった（伏せた）状態で出土。	Ａ２	11.8	5.6	4.3	0.47	36.4	32.5°	37
156	6	土師器	坏	ＳＩ50	床面	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ｂ３	11.9	5.6	4.7	0.47	39.5	29°	37
156	7	土師器	坏	ＳＩ50	床面	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ※内面は火災により黒色化及び剥落。	Ａ２	11.9	5.5	4.6	0.46	38.7	28.5°	37
156	8	土師器	坏	ＳＩ50	床面	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ※外面被熱により剥落。	Ａ２	11.7	5.4	4.3	0.46	36.8	28°	37
156	9	土師器	坏	ＳＩ50	床面	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ※内面は火災により黒色化及び剥落。	Ａ２	11.8	6.1	4.5	0.52	38.1	27°	37
156	10	土師器	坏	ＳＩ50	床面	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ※内面は火災により黒色化及び剥落。	Ａ２	11.7	5.7	4.4	0.49	37.6	30°	37
157	1	土師器	坏	ＳＩ50	床面	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ※内面は火災により黒色化。	Ａ２	11.9	5.4	4.6	0.45	38.7	29.5°	37
157	2	土師器	坏	ＳＩ50	床面	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ｂ２	12.3	6.0	4.5	0.49	36.6	31°	－
157	3	土師器	坏	ＳＩ50	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ３	11.7	5.6	(4.8)	－	－	－	38
157	4	土師器	坏	ＳＩ50	床面	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ※内面中央部は火災により黒色化。	Ａ２	12.1	5.2	4.6	0.43	38.0	31°	37
157	5	土師器	坏	ＳＩ50	床面	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ※内面は火災により黒色化及び剥落。口縁にタール状物質付着。	Ａ３	12.6	5.4	5.1	0.43	40.5	28.5°	37
157	6	土師器	坏	ＳＩ50	床面	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ※内面には火災による剥離あり。	Ａ２	11.9	5.6	4.7	0.47	39.5	28.5°	38
157	7	土師器	坏	ＳＩ50	床面	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ	Ａ２	11.9	5.6	4.7	0.48	38.8	30°	37
158	1	土師器	甕	ＳＩ50	カマド床面	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ２	14.0	7.7	(14.4)	－	－	－	37
158	2	土師器	甕	ＳＩ50	カマド床面	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ※内面は火災により黒色化。	Ａ２	9.2	5.8	8.6	－	－	－	37
158	3	土師器	甕	ＳＩ50	カマド床面	外面：ナデ？→ケズリ、内面：ナデ？	Ｃ	12.8	7.0	13.0	－	－	－	37
158	4	土師器	甕	ＳＩ50	カマド床面	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ　※砂礫多	Ｄ	15.4	－	(11.6)	－	－	－	38
158	5	土師器	甕	ＳＩ50	カマド床面	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ　※内面剥落	Ｄ	25.6	－	(16.2)	－	－	－	38
158	6	土師器	甕	ＳＩ50	カマド床面	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ　※内面剥落	Ｄ	20.4	－	(10.7)	－	－	－	38
158	7	土師器	甕	ＳＩ50	カマド床面	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ　※礫多	Ｄ	12.5	－	(7.7)	－	－	－	38
158	8	土師器	甕	ＳＩ50	カマド床面	外面：ケズリ、内面：不明	Ｃ	－	7.6	(4.3)	－	－	－	38
158	9	土師器	甕	ＳＩ50	カマド床面	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ｄ	－	7.7	(3.9)	－	－	－	38
158	10	土師器	甕	ＳＩ50	カマド床面	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※内面剥落	Ｄ	－	6.8	(5.3)	－	－	－	－
158	11	土師器	甕	ＳＩ50	カマド床面	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ｄ	－	7.8	(2.3)	－	－	－	－
159	1	須恵器	壺	ＳＩ50	覆土	外面：ロクロナデ→ケズリ、内面：ロクロナデ　※最大径15.6cm	－	10.8	9.6	24.5	－	－	－	38
159	2	須恵器	壺	ＳＩ50	覆土	外面：ロクロナデ→ケズリ、内面：ロクロナデ　※最大径19.5cm	－	－	10.4	(16.8)	－	－	－	
159	2	須恵器	壺	ＳＩ50	覆土									38
159	3	ＲＱ	砥石	ＳＩ50	覆土	多数の研ぎ面に、作業中に生じた傷多数あり。※被熱部分と非被熱部分の接合資料。	長さ：(12.9)cm、幅：(6.0)cm、厚さ：(5.3)cm							48
159	4	ＲＱ	砥石	ＳＩ50	覆土	多数の研ぎ面に、作業中に生じた傷多数あり。※被熱部分と非被熱部分の接合資料。	長さ：(6.6)cm、幅：(4.8)cm、厚さ：(4.1)cm							48
160	1	土師器	甕	ＳＩ51	床面	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ｄ	－	8.1	(6.1)	－	－	－	－
160	2	土師器	坏	ＳＩ99	床面	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ｂ２	11.8	4.3	4.5	0.36	38.1	30.5°	38
160	3	土師器	坏	ＳＩ99	床面	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ｂ２	12.8	5.6	4.7	0.44	36.7	35°	38
160	4	土師器	坏	ＳＩ99	床面	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ｂ２	－	5.0	(2.9)	－	－	－	－
160	5	土師器	坏	ＳＩ99	床面	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ｂ２	12.2	5.2	(5.2)	－	－	－	38
160	6	土師器	甕	ＳＩ99	床面	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ　※底面丸み帯びる。砂多。	Ｃ	－	6.6	5.5	－	－	－	－
160	7	土師器	甕	ＳＩ99	床面	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ、底面：不明　※砂礫多	Ｃ	－	6.6	(2.9)	－	－	－	－
160	8	土師器	甕	ＳＩ99	カマド付近	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ	Ｃ	21.6	－	(12.5)	－	－	－	－
160	9	土師器	甕	ＳＩ99	床面	外面：ケズリ、内面：不明（接合痕あり）、底面：不明	Ｃ	－	14.4	7.7	－	－	－	－
160	10	土師器	坏	ＳＩ100	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ｂ２	－	5.8	(2.0)	－	－	－	－
160	11	土師器	甕	ＳＩ100	床面	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ　※砂礫多	Ｃ	23.6	－	(11.6)	－	－	－	39
161	1	土師器	坏	ＳＩ122	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ｂ３	13.7	6.6	(5.3)	－	－	－	39
161	2	土師器	甕	ＳＩ122	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ｄ	－	6.6	5.3	－	－	－	－
161	3	土師器	坏	ＳＩ122	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※風化気味	×	12.2	5.5	(5.0)	－	－	－	39
161	4	土師器	坏	ＳＩ127	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ｂ３	－	4.4	(3.7)	－	－	－	－
161	5	土師器	坏	ＳＩ127	覆土	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ　※摩滅	×	12.6	4.4	(4.9)	－	－	－	－

第31表　遺物観察表（2）

挿図番号	番号	種別	器種	出土位置	出土層位	特　　徴	胎土の種類	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	底径指数	高径指数	外傾度	図版番号
161	6	土師器	甕	ＳＩ127	カマドピット	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	D	21.0	－	(8.7)	－	－	－	40
161	7	土師器	甕	ＳＩ127	覆土	外面：ケズリ	C	－	9.2	(4.6)	－	－	－	－
161	8	土師器	甕	ＳＩ127	覆土	外面：ケズリ、内面：ナデ	C	－	9.6	(6.2)	－	－	－	－
161	9	ＲＱ	砥石	ＳＩ127	覆土	多数の研ぎ面に、作業中に生じた傷多数あり。	長さ：(13.5)cm、幅：(5.1)cm、厚さ：(4.3)cm							48
162	1	土師器	坏	ＳＩ129	床面	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※内面に付着物あり。風化気味。	Ｂ２	12.3	5.0	4.0	0.41	32.5	35°	39
162	2	土師器	坏	ＳＩ129	床面	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※薄手で軽い。	Ｂ３	12.4	5.4	(4.1)	－	－	－	39
162	3	土師器	坏	ＳＩ129	床面	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※薄手で軽い。	Ｂ３	12.4	5.3	4.3	0.43	34.7	32.5°	39
162	4	土師器	坏	ＳＩ129	床面	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※薄手で軽い。	Ｂ２	11.7	4.3	4.8	0.41	36.8	28°	39
162	5	土師器	坏	ＳＩ129	床面	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※薄手で軽い。	Ｂ３	12.8	5.4	4.9				39
162	6	土師器	坏	ＳＩ129	床面	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※砂礫多、風化気味。	Ｂ３	11.8	5.2	4.3	0.44	36.4	33.5°	39
162	7	土師器	坏	ＳＩ129	床面	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ｂ１	11.9	5.6	4.5				39
162	8	土師器	坏	ＳＩ129	床面	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※薄手で軽い。	Ｂ１	11.9	4.9	3.9	0.41	32.8	39°	39
162	9	土師器	坏	ＳＩ129	床面	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ｂ３	11.7	6.0	(4.4)	－	－	－	－
162	10	土師器	坏	ＳＩ129	床面	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※内面に付着物あり。薄手で軽い。風化気味。	Ｂ３	12.2	6.6	(4.4)	－	－	－	－
162	11	土師器	坏	ＳＩ129	床面	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ→ミガキ→黒色処理	Ｂ３	12.5	5.7	6.5	0.46	52	17.5°	39
162	12	土師器	高台坏	ＳＩ129	床面	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ　※13と胎土類似	Ｂ２	16.6	－	(5.4)	－	－	－	39
162	13	土師器	高台坏	ＳＩ129	床面	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ　※12と胎土類似	Ｂ２	15.0	6.4	6.3	0.43	42	35°	39
162	14	土師器	高台坏	ＳＩ129	床面	外面：ロクロナデ、内面：不明	Ｂ３	14.6	7.6	(7.3)	－	－	－	39
162	15	土師器	坏？	ＳＩ129	覆土	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ　底面：摩滅　※内外面タール状物質付着。	×	－	5.2	(2.3)	－	－	－	－
163	1	土師器	甕	ＳＩ129	床面	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ　※礫多	C	23.0	－	(8.8)	－	－	－	39
163	2	土師器	甕	ＳＩ129	床面	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ　※砂多	C	18.8	－	(8.0)	－	－	－	39
163	3	土師器	甕	ＳＩ129	覆土	外面：ナデ、内面：ナデ？	D	－	－	4.5	－	－	－	－
163	4	土師器	甕	ＳＩ129	床面	外面：ケズリ　※礫多	C	－	7.7	(7.7)	－	－	－	－
163	5	須恵器	甕？	ＳＩ129	床面	外面：タタキ目、内面：アテ具痕　※外面に自然釉	－	－	－	－	－	－	－	－
163	6	石器	たたき石	ＳＩ129	床面	全面に被熱による剥離、末端部には敲打痕あり。	長さ：9.7cm、幅：5.7cm、厚さ：5.1cm							48
164	1	石器	砥石？	ＳＩ131	覆土	４つの平らな作業面あり。	長さ：9.0cm、幅：6.5cm、厚さ6.0cm							48
164	2	土師器	甕	ＳＩ132	カマド付近	外面：ヨコナデ	D	21.6	－	(9.3)	－	－	－	39
164	3	土師器	甕	ＳＩ133	カマド付近	外面：ケズリ　※接合痕あり。ＳＩ50出土甕(158－３)と類似。	D	19.0	－	(10.1)	－	－	－	－
164	4	土師器	坏	ＳＩ133	覆土	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ	Ａ２	－	5.6	(2.6)	－	－	－	－
164	5	須恵器	甕	ＳＩ139	覆土	外面：タタキ目、内面：アテ具痕	－	－	－	－	－	－	－	－
164	6	土師器	坏	ＳＩ145	覆土	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ底面：摩滅　※内面被熱	Ｂ１	12.9	6.2	(4.5)	－	－	－	40
164	7	土師器	坏	ＳＩ145	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ｂ２	13.2	5.6	(5.7)	－	－	－	40
164	8	土師器	椀？	ＳＩ145	覆土	内面：ミガキ→黒色処理	Ｂ１	－	5.4	(4.6)	－	－	－	－
164	9	土師器	甕	ＳＩ145	カマド付近	外面：ケズリ、底面：砂微量付着	×	－	9.0	(1.4)	－	－	－	－
165	1	土師器	坏	ＳＩ151	カマド付近	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※カマド付近出土	Ｂ２	－	4.4	(2.3)	－	－	－	－
165	2	土師器	坏	ＳＩ153	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ｂ３	11.6	5.4	4.2	0.47	36.2	31.5°	40
165	3	土師器	坏	ＳＩ153	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ３	11.8	6.0	(3.8)	－	－	－	－
165	4	土師器	坏	ＳＩ153	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ｂ３	－	5.6	(4.1)	－	－	－	－
165	5	土師器	坏	ＳＩ153	カマド付近	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ｂ３	－	6.0	(4.4)	－	－	－	－
165	6	土師器	椀	ＳＩ153	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ→ミガキ→黒色処理	Ａ２	17.3	－	(7.6)	－	－	－	40
165	7	土師器	椀	ＳＩ153	覆土	高台部分　外面：ロクロ→回転糸切り→高台、内面：摩滅	Ａ２	－	－	(3.3)	－	－	－	－
165	8	土師器	甕	ＳＩ153	覆土	外面：ケズリ、内面：ロクロナデ　※Ａ１胎土に類似。	D	－	7.0	(7.0)	－	－	－	－
165	9	土師器	高台皿	ＳＩ153	覆土	内面：ナデ、底部：	Ａ３	－	3.7	(2.4)	－	－	－	40
165	10	須恵器	甕	ＳＩ153	覆土	外面：タタキ目	－	－	－	－	－	－	－	－
166	1	土師器	坏	ＳＩ410	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ｂ２	12.6	4.8	(4.6)	－	－	－	40
166	2	土師器	甕	ＳＩ410	カマド付近	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※底面に焼成時？に伴う付着物あり。	C	－	7.1	(3.1)	－	－	－	－
166	3	土師器	甕	ＳＩ420	覆土	外面：ナデ、内面：ナデ　※礫やや多	C	－	8.8	(10.2)	－	－	－	－
166	4	土師器	長胴甕	ＳＩ420	覆土	外面：タタキ目　※外面にタール状物質付着。	C	－	－	－	－	－	－	－
166	5	土師器	坏	ＳＩ500	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ１	10.4	5.0	(4.7)	－	－	－	－
166	6	土師器	坏	ＳＩ500	カマド付近	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ２	－	5.6	(3.5)	－	－	－	－
166	7	土師器	坏	ＳＩ653	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ｂ２	12.4	5.8	(4.7)	－	－	－	－
166	8	土師器	坏	ＳＩ653	カマド付近	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ｂ２	13.0	6.0	(5.0)	－	－	－	40
166	9	土師器	坏	ＳＩ653	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ｂ２	11.8	6.4	4.8	0.54	40.7	26.5°	40
166	10	土師器	高台坏	ＳＩ653	覆土	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ　※外面被熱剥落	Ｂ１	12.2	5.2	(5.7)	－	－	－	40
166	11	須恵器	壺	ＳＩ653	覆土	外面：ナデ、内面：ロクロナデ	－	－	11.0	(3.7)	－	－	－	－
166	12	土師器	甕	ＳＩ653	覆土	外面：ケズリ、内面：ナデ　※底面砂少量付着	C	－	10.0	(10.4)	－	－	－	－
167	1	土師器	坏	ＳＩ699	カマド付近	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※カマド出土	Ａ２	11.3	5.1	(4.4)	－	－	－	40
167	2	土師器	坏	ＳＩ699	覆土	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ　※底面摩滅	Ａ３	－	5.4	(3.1)	－	－	－	－
167	3	土師器	坏	ＳＩ699	覆土	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ　※底面摩滅	Ａ２	－	5.4	(3.6)	－	－	－	－
167	4	土師器	坏	ＳＩ699	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	×	9.2	5.0	(2.3)	－	－	－	－
167	5	土師器	鍋	ＳＩ699	覆土	外面：ロクロナデ、内面：ナデ　※Ｂ１に胎土類似。	D	33.0	－	(10.8)	－	－	－	40
167	6	土師器	長胴甕	ＳＩ699	覆土	外面：タタキ目　※礫多	C	－	－	－	－	－	－	－
167	7	土師器	坏	ＳＩ764	カマド付近	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ｂ２	－	(5.2)	(2.9)	－	－	－	－
167	8	土師器	甕	ＳＩ764	カマド付近	外面：ケズリ、内面：ナデ　※頸部に指頭痕。	D	－	－	－	－	－	－	－
167	9	土師器	甕	ＳＩ764	覆土	外面：ロクロナデ、内面：ナデ	C	－	－	－	－	－	－	－
167	10	土師器	坏	ＳＩ765	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ３？	(11.2)	(4.4)	4.9	－	－	－	－
167	11	土師器	坏	ＳＩ765	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ２？	(11.6)	5.2	4.1	－	－	－	－
168	1	土師器	坏	ＳＩ777	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ｂ２	(11.2)	4.0	4.7	－	－	－	40
168	2	土師器	坏	ＳＩ777	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ１	(12.2)	5.6	4.0	－	－	－	40
168	3	土師器	坏	ＳＩ777	カマド付近	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ、底面：摩滅	Ｂ２	(12.7)	6.4	4.9	－	－	－	40
168	4	土師器	坏	ＳＩ777	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ３	12.6	4.8	(4.6)	－	－	－	－
168	5	土師器	坏	ＳＩ777	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ｂ２	15.6	(5.3)	－	－	－	－	－
168	6	土師器	甕？	ＳＩ777	覆土	※内面中央部に未貫通孔。	×	－	－	(1.8)	－	－	－	－
168	7	土師器	甕	ＳＩ777	カマド付近	外面：不明、内面：ナデ　※接合痕あり。	C	15.0	－	(9.0)	－	－	－	41
168	8	土師器	甕	ＳＩ777	覆土	外面：ケズリ、内面：不明	C	－	5.2	(2.9)	－	－	－	－

第32表　遺物観察表（３）

挿図番号	番号	種別	器種	出土位置	出土層位	特　　徴	胎土の種類	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	底径指数	高径指数	外傾度	図版番号
168	9	土師器	鉢？	ＳＩ777	覆土	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ　※砂礫やや多	C	42.0	－	(5.7)	－	－	－	41
169	1	須恵器	甕？	ＳＩ777	覆土	外面：タタキ目、内面：アテ具→ナデ	－	－	－	－	－	－	－	－
169	2	須恵器	壺？	ＳＩ777	覆土	外面：タタキ目、内面：ナデ	－	－	－	－	－	－	－	－
169	3	須恵器		ＳＩ777	覆土	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ	－	－	－	－	－	－	－	－
169	4	須恵器		ＳＩ777	ＳＫ04	外面：ナデ、内面：ロクロナデ	－	－	9.4	(3.4)	－	－	－	－
169	5	土師器	坏	ＳＩ1000・1456	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ｂ３	11.8	4.8	5.4	－	－	－	41
169	6	土師器	坏	ＳＩ1000	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ→ミガキ→黒色	Ｂ３？	10.8	5.0	(4.8)	－	－	－	－
169	7	土師器	高台坏？	ＳＩ1000・1456	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ２	－	－	(2.0)	－	－	－	－
169	8	土師器	耳皿	ＳＩ1000・1456	覆土	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ、底面：摩滅　※全体的に摩滅。	Ａ２	－	4.8	(3.8)	－	－	－	－
170	1	土師器	坏	ＳＩ1456	覆土	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ、底面：摩滅　※全体的に摩滅。	Ａ２？	11.9	5.3	(4.4)	－	－	－	－
170	2	土師器	坏	ＳＩ1456	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ２	11.5	5.4	(4.4)	－	－	－	－
170	3	土師器	坏	ＳＩ1456	カマド付近	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ２	11.6	5.8	4.1	0.5	35.3	31°	41
170	4	土師器	坏	ＳＩ1456	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ３	11.7	5.6	(4.2)	－	－	－	－
170	5	土師器	坏	ＳＩ1456	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ｂ２	12.4	5.8	(4.5)	－	－	－	－
170	6	土師器	坏	ＳＩ1456	ＳＫ01	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ１	12.0	5.4	(4.2)	－	－	－	41
170	7	土師器	坏	ＳＩ1456	ＲＰ１	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ３	11.8	5.6	4.3	0.47	36.4	32.5°	41
170	8	土師器	坏	ＳＩ1456	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※全体的に摩滅。	Ａ３	－	5.4	(3.8)	－	－	－	－
170	9	土師器	坏	ＳＩ1456	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※全体的に摩滅。	Ａ３	10.1	5.6	(3.4)	－	－	－	－
170	10	土師器	坏	ＳＩ1456	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※全体的に摩滅。	Ａ１	0.0	5.6	(4.0)	－	－	－	－
170	11	土師器	坏？	ＳＩ1456	覆土	外面：不明、内面：ロクロ、底面：回転糸切り	Ａ２	－	－	(3.4)	－	－	－	－
170	12	土師器	皿	ＳＩ1000・1456	覆土	外面：ロクロ、内面：不明、　※全体的に摩滅。	Ａ２？	11.9	－	(2.3)	－	－	－	41
170	13	土師器	甕	ＳＩ1456	カマド付近	外面：ハケ目、内面：ハケ目	C	16.0	－	(11.8)	－	－	－	41
170	14	須恵器	甕	ＳＩ1456	覆土	外面：タタキ目、内面：アテ具	－	－	－	－	－	－	－	－
170	15	須恵器	甕	ＳＩ1456	覆土	外面：タタキ目、内面：アテ具	－	－	－	－	－	－	－	－
170	16	ＲＱ	石斧	ＳＩ1456	覆土	刃部に擦痕。　石質：凝灰質砂岩？	長さ：(2.4)、幅：(3.2)、厚さ：(1.7)、単位㎝ 10.1ｇ							
171	1	土師器	坏	ＳＩ1630	Ｐ　覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ｂ３	11.8	4.2	4.3	0.36	36.4	33°	41
171	2	土師器	坏	ＳＩ1630	Ｐ　覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ｂ２	12.0	5.6	4.5	0.47	37.5	31°	41
171	3	土師器	坏	ＳＩ1630	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※全体的に摩滅。	Ａ１	－	5.8	(4.1)	－	－	－	－
171	4	土師器	坏	ＳＩ1630	Ｐ４	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ３	－	5.2	(3.1)	－	－	－	－
171	5	土師器	坏	ＳＩ1630	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ１	12.8	－	(4.6)	－	－	－	41
171	6	土師器	坏	ＳＩ1723	カマド床面	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※礫多	Ｂ２	12.4	5.8	(4.5)	－	－	－	41
171	7	土師器	坏	ＳＩ1723	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※胎土・作り９に似る。	Ａ３	12.2	5.6	(4.5)	－	－	－	41
171	8	土師器	坏	ＳＩ1723	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ→ミガキ→黒色処理	Ａ３	－	5.4	(3.5)	－	－	－	－
171	9	土師器	坏	ＳＩ1723	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ３	－	5.6	(3.1)	－	－	－	－
171	10	土師器	坏	ＳＩ1723	覆土	外面：不明、内面：ロクロナデ、底面：回転糸切り　※胎土・つくり11に似る。	Ａ２	－	5.8	(2.4)	－	－	－	－
171	11	土師器	坏	ＳＩ1723	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ２	－	5.6	(2.4)	－	－	－	－
171	12	土師器	坏	ＳＩ1723	覆土	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ、底面：摩滅　※全体的に摩滅。	Ｂ３	－	5.6	(2.4)	－	－	－	－
171	13	土師器	坏	ＳＩ1723	カマド床面	内外面：不明　※内面に付着物、胎土砂がち	Ｂ３	－	5.2	(1.7)	－	－	－	－
171	14	土師器	甕	ＳＩ1723	カマド床面	内外面：不明　※内面剥落気味　ＳＩ50甕（158－３）と胎土・つくりが類似。	D	13.2	－	(5.3)	－	－	－	41
171	15	土師器	甕	ＳＩ1723	カマド床面	外面：ケズリ、内面：不明、　※底部に起伏　171－14と同一個体。	D	－	7.6	(7.1)	－	－	－	－
172	1	土師器	坏	ＳＩ1755	カマド南側床面	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※下半部表面剥落、171－１・２・３隣接して出土。	×	11.7	4.8	5.1	0.41	43.6	23.5°	42
172	2	土師器	坏	ＳＩ1755	カマド南側床面	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※表面剥落・摩滅。171－３と重なった状態で出土（３が上）。	Ｂ３	12.5	(4.9～	5.1	－	－	－	42
172	3	土師器	坏	ＳＩ1755	カマド南側床面	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※下半部表面剥落	Ｂ３	12.0	5.7	4.9	－	－	－	42
172	4	土師器	甕	ＳＩ1755	覆土	外面：ケズリ、内面：ナデ	D	－	9.0	(9.8)	－	－	－	－
172	5	土師器	甕	ＳＩ1782	ＰＩＴ	外面：ケズリ、内面：ナデ	C	24.7	－	(15.2)	－	－	－	－
172	6	土師器	甕	ＳＩ1782	カマド付近	外面：ロクロ→ケズリ、内面：ナデ　※内面剥落気味	D	21.6	－	(13.0)	－	－	－	42
172	7	須恵器	転用硯	ＳＩ1782	覆土	外面：タタキ目、内面：アテ具痕　※外面自然釉薬、内面墨痕	－	－	－	－	－	－	－	42
172	8	土師器	坏	ＳＩ128	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ１	12.3	5.8	4.1	0.47	33.3	31°	－
172	9	ＲＱ	石鏃	ＳＩ180	覆土	凸基有茎鏃　基部にアスファルト付着。　石質：珪質頁岩	長さ：4.0、幅：1.7、厚さ：0.6㎝、25.5ｇ							48
172	10	土師器	甕	ＳＩ180	カマド付近	外面：ケズリ、内面：ナデ　※砂礫多	C	(25.5)	－	(18.6)	－	－	－	42
173	1	土師器	坏	ＳＫＩ273	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ１	11.7	5.7	(4.4)	－	－	－	42
173	2	土師器	坏	ＳＫＩ273	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※３と類似。	Ａ３	12.1	5.7	4.4	0.47	36.4	31.5°	42
173	3	土師器	坏	ＳＫＩ273	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ３	11.6	6.1	(4.6)	－	－	－	42
173	4	土師器	坏	ＳＫＩ273	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ３	12.0	5.7	(4.6)	－	－	－	－
173	5	土師器	坏	ＳＫＩ273	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ３	11.8	5.6	4.1	0.47	34.7	28.5	42
173	6	土師器	坏	ＳＫＩ273	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※外面に摩滅。	Ａ１	11.7	5.4	(4.5)	－	－	－	42
173	7	土師器	坏	ＳＫＩ273	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ３	11.1	5.5	4.6	－	－	－	42
173	8	土師器	坏	ＳＫＩ273	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※やや摩滅気味。	Ａ１	11.6	5.5	(4.2)	－	－	－	－
173	9	土師器	坏	ＳＫＩ273	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ１	－	5.6	(4.4)	－	－	－	42
173	10	土師器	坏	ＳＫＩ273	覆土	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ、底面：摩滅	Ａ３	11.7	5.4	(4.2)	－	－	－	－
173	11	土師器	高台坏	ＳＫＩ273	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り→高台、内面：ロクロナデ→ミガキ→黒色処理	Ａ３	10.5	7.1	5.3	0.68	50.5	23.5	42
173	12	土師器	高台坏	ＳＫＩ273	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り→高台、内面：ロクロナデ→ミガキ→黒色処理	Ａ３	10.7	6.4	(5.4)	－	－	－	43
173	13	土師器	耳皿	ＳＫＩ273	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	×	9.3	5.0	(3.2)	－	－	－	43
173	14	土師器	耳皿	ＳＫＩ273	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ２	9.2	4.8	(3.6)	－	－	－	43
174	1	須恵器	壺	ＳＫＩ273	覆土	外面：タタキ目、内面：（口縁部）ロクロナデ、（胴部）アテ具　※最大径（46.4）㎝	－	(22.0)	－	(23.2)	－	－	－	43
174	2	須恵器	壺	ＳＫＩ273・610	覆土	外面：タタキ目、内面：アテ具痕	－	－	－	(17.3)	－	－	－	－
174	3	ＲＱ	石帯	ＳＫＩ273	覆土	巡方	長さ：(4.4)、幅：(2.0)、厚さ：0.9㎝							－
175	1	土師器	坏	ＳＫＩ350	底面	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※175－２の上に被る。	Ａ１	12.1	6.0	4.6	0.50	38.0	23.5°	43
175	2	土師器	坏	ＳＫＩ350	底面	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※やや摩滅気味。	Ａ１	12.0	5.4	4.6	0.45	38.3	27°	43

第33表　遺物観察表（4）

挿図番号	番号	種別	器種	出土位置	出土層位	特　　徴	胎土の種類	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	底径指数	高径指数	外傾度	図版番号
175	3	土師器	耳皿	ＳＫⅠ610	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※やや摩滅気味。	×	10.2	4.6	3.2	－	－	－	43
175	4	土師器	高台	ＳＫⅠ610		内面：ミガキ→黒色処理、底面：回転糸切り	A1	－	9.2	(3.0)	－	－	－	－
175	5	土師器	坏	ＳＫⅠ888	底面	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※内面タール状物質付着、軽い。175－５・６・８一括遺物（６を中心に直径30cm以内）。	B2	12.4	4.8	(4.3)	－	－	－	43
175	6	土師器	坏	ＳＫⅠ888	底面	内面：ミガキ→黒色処理、底面：回転糸切り	B2	12.7	5.7	4.7	0.45	37.0	32°	43
175	7	須恵器	転用硯	ＳＫⅠ888	覆土	外面：タタキ目、内面：アテ具痕→墨痕	－	－	－	－	－	－	－	43
175	8	土師器	坏	ＳＫⅠ888	底面	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	A3	－	5.4	(3.1)	－	－	－	
175	9	須恵器	壺	ＳＫⅠ1098	Ｐ１覆土（埋納）	外面：ロクロナデ→ケズリ、内面：不明　※最大径16.3cm	－	－	8.8	17.2	－	－	－	43
175	10	須恵器	壺	ＳＫⅠ2066	P12覆土	外面：ケズリ、内面：ロクロナデ	－	－	10.8	(8.6)	－	－	－	－
175	11	須恵器	甕？	ＳⅠ1456	床面	外面：タタキ目	－	－	－	－	－	－	－	－
175	12	須恵器	甕？	ＳⅠ1456	床面	外面：タタキ目、内面：アテ具痕	－	－	－	－	－	－	－	－
176	1	土師器	甕	ＳＫ１	覆土	外面：ケズリ　※つくり－２雑　礫多	C	(9.7)	7.0	(3.0)	－	－	－	－
176	2	土師器	甕	ＳＫ２	覆土	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ　※口縁部比熱、炭化物付着	C	(13.4)	－	(7.5)	－	－	－	43
176	3	土師器	坏	ＳＫ98	覆土	外面：ロクロ、内面：不明、底面：回転糸切り	B2	－	4.8	(1.7)	－	－	－	－
176	4	土師器	不明	ＳＫ98	覆土	口縁平坦	×	－	－	－	－	－	－	－
176	5	土師器	坏	ＳＫ140	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	A2	－	(6.0)	(4.4)	－	－	－	－
176	6	土師器	台付坏	ＳＫ140	覆土	外面：ロクロ→回転糸切り→高台、内面：ロクロナデ→ミガキ→黒色処理	A2	(10.2)	7.0	(5.2)	－	－	－	44
176	7	土師器	甕	ＳＫ160	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	C	(10.5)	5.6	(5.0)	－	－	－	－
176	8	土師器	坏	ＳＫ160	覆土	外面：ロクロ→回転糸切り、内面：ロクロナデ→ミガキ→黒色処理	A2	(10.8)	(5.6)	(4.55)	－	－	－	－
176	9	土師器	台付坏	ＳＫ160	覆土	外面：ロクロ→回転糸切り→高台、内面：ロクロナデ→ミガキ→黒色処理	×	－	5.3	(2.9)	－	－	－	－
176	10	土師器	耳皿	ＳＫ160	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	×	(9.0)	5.0	(3.4)	－	－	－	44
176	11	土師器	甕	ＳＫ160	覆土	外面：ロクロ、内面：ロクロ→ハケ目	D	(21.4)	－	(14.7)	－	－	－	－
176	12	須恵器	壺	ＳＫ160	覆土	外面：ハケ目、内面：ロクロナデ→ハケ目	－	－	－	－	－	－	－	－
177	1	土師器	甕	ＳＫ186	覆土	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ　※表面摩滅気味	C	(11.0)	－	(6.7)	－	－	－	44
177	2	土師器	坏	ＳＫ197ａ	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※内面底部中央付近に盛り上がりあり。	A2	(11.4)	(4.6)	(5.5)	－	－	－	44
177	3	土師器	坏	ＳＫ197	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※口縁付近タール状物質付着	A3	(11.8)	(5.4)	(4.6)	－	－	－	－
177	4	土師器	坏	ＳＫ197ｂ	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※やや摩滅	A2	(10.9)	5.4	(3.8)	－	－	－	－
177	5	土師器	坏	ＳＫ197	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	A2	－	5.4	(3.2)	－	－	－	－
177	6	土師器	坏	ＳＫ197	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	A3	－	5.0	(2.5)	－	－	－	－
177	7	土師器	坏	ＳＫ197	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	B3	－	(5.4)	(2.2)	－	－	－	－
177	8	土師器	坏	ＳＫ197	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※墨書あり。	A1	－	－	－	－	－	－	－
177	9	土師器	耳皿	ＳＫ197	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※摩滅	×	9.8	4.4	(3.25)	－	－	－	44
177	10	土師器	甕	ＳＫ201	覆土	外面：ケズリ	C	－	(5.8)	(5.1)	－	－	－	－
177	11	土師器	坏	ＳＫ206	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	×	－	5.4	(1.0)	－	－	－	－
177	12	土師器	坏	ＳＫ209	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	×	－	4.4	(1.6)	－	－	－	－
177	13	須恵器	甕？	ＳＫ209	覆土	外面：タタキ目、内面：アテ具痕	－	－	－	－	－	－	－	－
178	1	石	鉄床石	ＳＫ209	底面	※鉄付着部分あり　被熱	長さ：(11.5)、幅16.6、(厚さ)10.3cm							44
178	2	土師器	坏	ＳＫ226	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	A2	12.5	5.6	5.0	0.45	4.17	27.5°	44
178	3	土師器	坏	ＳＫ268	覆土	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ　※墨書あり。	A1	－	－	－	－	－	－	44
178	4	須恵器	甕？	ＳＫ268	覆土	外面：ロクロナデ→ハケ目、内面：ロクロナデ	－	－	－	－	－	－	－	－
179	1	須恵器	甕？	ＳＫＳ307	覆土	外面：タタキ目、内面：不明	－	－	－	－	－	－	－	－
179	2	土師器	坏	ＳＫ412	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	A3	(12.0)	(5.6)	(4.8)	－	－	－	44
179	3	土師器	甕？	ＳＫ412	覆土	※礫多	C	－	5.2	(1.9)	－	－	－	－
179	4	須恵器		ＳＫ416			－	－	－	－	－	－	－	－
179	5	土師器	坏	ＳＫ417	底面	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	A3	11.6	5.4	4.05	0.47	34.9	33°	－
179	6	土師器	坏	ＳＫ417	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	A2	－	5.6	(2.3)	－	－	－	－
179	7	土師器	坏	ＳＫ417	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	A2	－	5.6	(2.2)	－	－	－	－
179	8	須恵器		ＳＫ417ｃ			－	－	－	－	－	－	－	－
179	9	須恵器	壺	ＳＫ417	覆土	外面：ケズリ、内面：ナデ　※最大径(24)cm	－	－	(13.0)	(14.0)	－	－	－	－
179	10	土師器	坏	ＳＫ419	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※底部中央付近に貫通孔あり。	A2	－	5.4	(3.2)	－	－	－	－
179	11	土師器	坏	ＳＫ419	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	A2	－	5.2	(3.4)	－	－	－	－
179	12	土師器	坏	ＳＫ492	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※礫多	B2	13.3	4.4	5.2	0.33	39.1	35.5°	－
179	13	土師器	坏	ＳＫ493	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	A3	－	5.2	(2.5)	－	－	－	－
179	14	土師器	坏	ＳＫ502	覆土	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ、底部：摩滅	B2	－	(5.2)	(4.3)	－	－	－	－
180	1	須恵器	甕？	ＳＫ696	覆土	外面：ケズリ、内面：ナデ	－	－	－	－	－	－	－	－
180	2	土師器	坏	ＳＫ701	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※内面と外面の一部にタール状物質付着。	A2	11.5	5.5	3.95	0.48	34.3	32°	44
180	3	土師器	坏	ＳＫ701	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	A2	(12.1)	5.6	(4.5)	－	－	－	44
180	4	土師器	坏	ＳＫ701	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	A2	－	5.2	(4.1)	－	－	－	－
180	5	土師器	坏	ＳＫ701	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	A2	－	5.4	(3.0)	－	－	－	－
180	6	土師器	坏	ＳＫ767	覆土	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ、底面：摩滅	×	－	5.0	(2.4)	－	－	－	－
180	7	土玉	－	ＳＫ767	覆土		φ1.1cm、厚さ1.1cm							44
180	8	土師器	甕	ＳＫ767	覆土	内面：ナデ	D	17.2	－	(6.1)	－	－	－	－
180	9	土師器	坏	ＳＫ768	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	A2	11.9	5.2	5.0	0.44	42.0	23°	45
180	10	土師器	坏	ＳＫ768	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	A3	－	5.4	(2.7)	－	－	－	－
180	11	須恵器	甕？	ＳＫ768	覆土	外面：タタキ目、内面：アテ具痕	－	－	－	－	－	－	－	－
180	12	土師器	坏	ＳＫ933	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	A2	(11.6)	5.7	(5.1)	－	－	－	－
180	13	土師器	甕	ＳＫ933	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	C	－	(7.4)	(2.4)	－	－	－	－
180	14	土師器	坏	ＳＫ1023	覆土	内面：ミガキ→黒色処理	B3	－	5.8	(2.4)	－	－	－	－
180	15	土師器	坏	ＳＫ1023・1025	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※ＳＫ1025含む。	B3	(11.3)	4.0	(4.8)	－	－	－	45
180	16	土師器	台付坏	ＳＫ1257	覆土	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ→ミガキ→黒色処理　底面：回転糸切り→台	A3	(15.7)	(9.2)	(8.45)	－	－	－	45

第34表　遺物観察表（５）

挿図番号	番号	種別	器種	出土位置	出土層位	特　　徴	胎土の種類	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	底径指数	高径指数	外傾度	図版番号
181	1	土師器	坏	ＳＫ1441	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ｂ２	(11.6)	4.3	(4.5)	－	－	－	45
181	2	土師器	耳皿	ＳＫ1654	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※摩滅気味	×	(10.6)	5.0	(2.7)	－	－	－	45
181	3	土師器	坏	ＳＫ1655・1656	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ３	(11.9)	5.2	(4.6)	－	－	－	45
181	4	土師器	坏	ＳＫ1656	ＲＰ２	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ３	(11.6)	5.6	(4.8)	－	－	－	45
181	5	土師器	坏	ＳＫ1701	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	×	6.7	4.7	(1.2)	－	－	－	45
181	6	須恵器	甕？	ＳＫ1702	覆土	外面：タタキ目、内面：アテ具痕	－	－	－	－	－	－	－	－
181	7	土師器	坏	ＳＫ1766	覆土	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ　※墨書あり。	Ａ２	－	－	－	－	－	－	－
181	8	土師器	坏	ＳＫ1841	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ｂ３	12.1	6.1	(4.3)	－	－	－	－
181	9	土師器	坏	ＳＫ1841	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ３	12.0	5.6	(4.5)	－	－	－	－
181	10	土師器	坏	ＳＫ1841	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ３	12.2	(6.1)	(4.3)	－	－	－	40
182	1	土師器	坏	ＳＫ1841	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※摩滅	×	11.4	5.5	4.3	0.48	37.7	24.5°	40
182	2	土師器	坏	ＳＫ1841	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ２	12.0	6.1	(4.7)	－	－	－	40
182	3	土師器	坏	ＳＫ1841	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※内面と表面の一部にタール状物質付着。口縁の一部に打ち欠き部（タール状物質付着、注ぎ口か）。	Ａ３	12.5	5.8	4.9	0.46	39.2	29.5°	－
182	4	土師器	坏	ＳＫ1841	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ２	－	5.7	(2.0)	－	－	－	－
182	5	土師器	坏	ＳＫ1841	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※表面の一部剥落。	Ａ１	－	5.0	(3.1)	－	－	－	－
182	6	土師器		ＳＫ1841	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※摩滅気味	Ａ３	(11.2)	5.2	(4.1)	－	－	－	－
182	7	土師器		ＳＫ1841	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※外面風化気味	×	－	6.0	(2.9)	－	－	－	－
182	8	土師器	甕	ＳＫ1841	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※内面に黒色の付着物。	Ａ２	－	6.4	(2.7)	－	－	－	－
182	9	土師器	坏	ＳＫ1841	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ２	－	5.6	(3.1)	－	－	－	－
182	10	土師器	椀？	ＳＫ1841	覆土	外面・内面：不明　　底面：回転糸切り	Ａ２	－	－	(2.5)	－	－	－	－
182	11	須恵器	甕？	ＳＫ1841	覆土	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ　※外面一部自然釉薬	－	－	－	－	－	－	－	－
183	1	石	台石？	ＳＫ1841	覆土	凝灰岩切石（４個体が接合）。表面・裏面・側面が平坦。被熱部分あり。	長さ：(25.6)、幅：17.5、厚さ：13.4㎝							48
184	1	土師器	甕	ＳＮ42	焼土直上	外面：不明、内面：ナデ、底面：ナデおよび何らかの圧痕　※砂礫多	Ｃ	－	(8.2)	(3.9)	－	－	－	－
184	2	土師器	不明	ＳＮ889	覆土	台部分底面：回転糸切り→台	Ａ２	－	6.7	(2.3)	－	－	－	－
184	3	土師器	坏	ＳＤ152	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ１	(12.8)	(5.8)	(4.5)	－	－	－	－
184	4	土師器	坏	ＳＤ152	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ２	(11.6)	5.4	(4.9)	－	－	－	45
184	5	土師器	坏	ＳＤ152	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ２	(11.9)	5.8	(4.4)	－	－	－	－
184	6	土師器	坏	ＳＤ152	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ２	(11.6)	5.7	(4.7)	－	－	－	－
184	7	土師器	坏	ＳＤ152	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※摩滅気味	×	(11.4)	5.4	(3.9)	－	－	－	－
184	8	土師器	坏	ＳＤ152	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※内面に付着物あり。タール状物質斑状に付着。外面に焼き膨れあり。	Ａ３	12.0	4.2	4.7	0.35	39.2	35°	45
184	9	土師器	坏	ＳＤ152	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ１	(11.6)	(5.8)	(4.3)	－	－	－	
184	10	土師器	坏	ＳＤ152	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ３	11.7	5.4	4.6	0.46	39.3	22.5°	45
184	11	土師器	坏	ＳＤ152	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ１	－	6.0	(4.5)	－	－	－	
184	12	土師器	坏	ＳＤ152	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※底部に連続した鼠の噛みあとあり。	Ａ２	－	5.6	(3.8)	－	－	－	45
184	13	土師器	坏	ＳＤ152	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ３	－	5.2	(2.7)	－	－	－	45
184	14	土師器	坏	ＳＤ152	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ３	－	6.1	(3.1)	－	－	－	－
185	1	土師器	坏	ＳＤ152	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ２	－	5.8	(3.4)	－	－	－	－
185	2	土師器	坏	ＳＤ152	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ３	－	5.7	(3.0)	－	－	－	－
185	3	土師器	坏	ＳＤ152	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ｂ３	－	4.7	(2.1)	－	－	－	－
185	4	土師器	坏	ＳＤ152	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ２	－	5.4	(2.6)	－	－	－	－
185	5	土師器	坏	ＳＤ152	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ３	(9.3)	6.0	(2.2)	－	－	－	－
185	6	土師器	坏	ＳＤ152	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ｂ３	－	5.8	(3.2)	－	－	－	－
185	7	土師器	坏	ＳＤ152	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ３	－	5.7	(2.8)	－	－	－	－
185	8	土師器	坏	ＳＤ152	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※底部摩滅	×	－	5.6	(3.5)	－	－	－	－
185	9	土師器	坏	ＳＤ152	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ２	－	(5.6)	(2.6)	－	－	－	－
185	10	土師器	坏	ＳＤ152	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ２	－	(5.6)	(2.4)	－	－	－	－
185	11	土師器	坏	ＳＤ152	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ３	－	5.4	(2.1)	－	－	－	－
185	12	土師器	坏	ＳＤ152	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※摩滅気味	×	－	5.3	(2.4)	－	－	－	－
185	13	土師器	皿	ＳＤ152	覆土	柱状高台皿。台部：回転糸切り→台　※器中心から貫通孔。	Ａ２	最大径：(10)㎝、高さ：(3.3)㎝、台部最大径6.0㎝						46
185	14	土師器	坏	ＳＤ152	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※砂礫多	Ｂ２	(7.4)	4.0	(1.4)	－	－	－	46
185	15	土師器	不明	ＳＤ152	覆土	台部：回転糸切り→台	Ｂ２	－	(7.7)	(2.5)	－	－	－	－
185	16	土師器	坏	ＳＤ152	覆土	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ→ミガキ→黒色処理　底面：回転糸切り→台	Ａ３	－	(6.2)	(3.3)	－	－	－	－
185	17	土師器	坏	ＳＤ152	覆土	高台付坏　外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ→ミガキ→黒色処理	Ｂ３	－	(5.6)	(3.2)	－	－	－	－
185	18	土師器	不明	ＳＤ152	覆土	底面：回転糸切り→台、内面：ミガキ→黒色処理	Ａ２	(8.0)	8.4	(2.6)	－	－	－	－
185	19	土師器	坏	ＳＤ152	覆土	口縁部　※墨書あり。	Ａ１	－	－	－	－	－	－	－
185	20	土師器	坏	ＳＤ152	覆土	口縁部　※墨書あり。	Ａ１	－	－	－	－	－	－	－
186	1	土師器	坏	ＳＤ152	覆土	口縁部　※墨書あり。	Ａ２	－	－	－	－	－	－	－
186	2	土師器	坏	ＳＤ152	覆土	口縁部　※墨書あり。	Ａ３	－	－	－	－	－	－	－
186	3	土師器	坏	ＳＤ152	覆土	口縁部　※墨書あり。	Ａ２	－	－	－	－	－	－	－
186	4	須恵器	壺	ＳＤ152	覆土	外面：ロクロナデ→ケズリ、内面：ロクロナデ　※自然釉	－	－	(10.0)	(12.0)	－	－	－	－
186	5	須恵器	甕	ＳＤ152	覆土	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ	－	－	－	－	－	－	－	－
186	6	須恵器	甕？	ＳＤ152	覆土	外面：タタキ目、内面：不明	－	－	－	－	－	－	－	－
186	7	須恵器	甕？	ＳＤ152	覆土	外面：タタキ目、内面：アテ具痕	－	－	－	－	－	－	－	－
186	8	須恵器	甕？	ＳＤ152・1100	覆土	外面：タタキ目、内面：アテ具痕	－	－	－	－	－	－	－	－
187	1	土師器	甕	ＳＤ154	覆土	外面：ナデ→ケズリ（底部付近）、内面：ナデ、底面：砂付着	Ｄ	－	5.4	(6.9)	－	－	－	46
187	2	須恵器	甕？	ＳＤ154	覆土	外面：タタキ目、内面：オサエ　※最大径(26.1)㎝	－	－	－	(12.3)	－	－	－	46
187	3	土師器	坏	ＳＤ155	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ２	(11.2)	(5.4)	(4.3)	－	－	－	－

第35表　遺物観察表（6）

挿図番号	番号	種別	器種	出土位置	出土層位	特　　徴	胎土の種類	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	底径指数	高径指数	外傾度	図版番号
187	4	土師器	坏	ＳＤ155	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ２	(11.4)	(5.4)	(4.8)	－	－	－	－
187	5	土師器	坏	ＳＤ155	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ２	(11.8)	5.8	(4.9)	－	－	－	46
187	6	土師器	坏	ＳＤ155	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ３	(12.2)	(6.0)	(4.3)	－	－	－	－
187	7	土師器	坏	ＳＤ155	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ２	－	(5.4)	(4.4)	－	－	－	－
187	8	土師器	坏	ＳＤ155	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ２	－	(5.4)	(3.5)	－	－	－	－
187	9	土師器	坏	ＳＤ155	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ２	－	(5.4)	(3.2)	－	－	－	－
187	10	土師器	坏	ＳＤ155	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ３	－	5.6	(2.2)	－	－	－	－
187	11	土師器	坏	ＳＤ155	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ→ミガキ→黒色	Ａ３	11.2	5.4	4.6	0.48	41.1	24°	46
187	12	土師器	坏	ＳＤ155	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ→ミガキ→黒色	Ａ３	(11.6)	5.8	(5.0)	－	－	－	－
187	13	土師器	坏	ＳＤ155	覆土	台付　外面：ロクロ→回転糸切り→高台、内面：ロクロ→ミガキ→黒色処理	Ａ３	(9.9)	－	(4.3)	－	－	－	46
187	14	土師器	坏	ＳＤ155	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ→ミガキ→黒色処理	Ａ３	(11.6)	(5.6)	(4.4)	－	－	－	46
188	1	土師器	坏	ＳＤ155	覆土	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ→ミガキ→黒色処理	Ａ３	(10.4)	－	(3.5)	－	－	－	－
188	2	土師器	坏	ＳＤ155	覆土	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ→ミガキ→黒色処理	Ａ３	(11.0)	－	(4.4)	－	－	－	－
188	3	土師器	坏	ＳＤ155	覆土	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ→ミガキ→黒色処理　※底部摩滅	Ａ３	(11.8)	(6.2)	(4.7)	－	－	－	
188		土師器	坏	ＳＤ155	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ→ミガキ→黒色処理　※底部摩滅気味	Ａ２	－	(5.8)	(3.3)	－	－	－	－
188	5	土師器	坏	ＳＤ155	覆土	内面：ミガキ→黒色処理　底部：回転糸切り痕　※底部摩滅	×	(6.6)	5.2	(1.2)	－	－	－	－
188	6	土師器	坏	ＳＤ155	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ→ミガキ→黒色処理　※台部欠損	Ａ３	－	5.8	(2.1)	－	－	－	－
188	7	土師器	坏	ＳＤ155	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ→ミガキ→黒色処理	Ａ２	－	(5.8)	(2.8)	－	－	－	－
188	8	土師器	坏	ＳＤ155	覆土	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ→ミガキ→黒色処理	Ａ３	(11.8)		(4.0)	－	－	－	－
188	9	土師器	坏	ＳＤ155	覆土	台付坏　内面：ミガキ→黒色処理、底面：回転糸切り→台	Ａ３	－	－	(2.7)	－	－	－	－
188	10	土師器	坏	ＳＤ155	覆土	口縁部　外面：ロクロナデ、内面ロクロナデ　※墨書か？	Ａ２	－	－	－	－	－	－	－
188	11	土師器	甕	ＳＤ155	覆土	外面：オサエ、内面：ナデ※接合痕あり　砂礫多	Ｃ	(29.4)	－	(7.9)	－	－	－	46
188	12	須恵器	甕？	ＳＤ194	覆土	外面：タタキ目、内面：アテ具痕	－	－	－	－	－	－	－	－
188	13	土師器	坏	ＳＤ400	1	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※摩滅気味	－	－	5.4	(3.1)	－	－	－	－
188	14	石器	石鏃	ＳＤ152	覆土	凸基有茎鏃。基部にアスファルト付着。　石質：変質砂質凝灰岩？	長さ：3.3㎝、幅：1.4㎝、厚さ：0.7㎝、重さ：2.7ｇ							48
188	15	土師器	坏	ＳＤ507	覆土		－	(12.0)	(5.6)	(4.5)	－	－	－	－
188	16	土師器	坏	ＳＤ507	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ３	(11.6)	(5.6)	(4.6)	－	－	－	－
188	17	土師器	坏	ＳＤ507	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※摩滅気味	×	(12.2)	5.0	(4.4)	－	－	－	－
188	18	土師器	坏	ＳＤ507	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ２	－	(5.4)	(2.6)	－	－	－	－
189	1	土師器	不明	ＳＤ508	覆土	台付坏　外面：ロクロナデ、底部：回転糸切り→台　※砂礫多	Ｂ１	－	(8.2)	(2.9)	－	－	－	－
189	2	土師器	坏？	ＳＤ508	覆土	内面：ロクロナデ、底部：不明　※摩滅	Ａ２	－	6.4	(1.9)	－	－	－	－
189	3	石器	石槍	ＳＤ508	覆土	両面調整。ガジリあり。　石質：珪質頁岩	全長：(8.4)㎝、幅：(5.2)㎝、厚さ(1.0)㎝、45.9ｇ							48
189	4	土師器	坏	ＳＤ652	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ｂ３	－	(5.2)	(3.0)	－	－	－	－
189	5	土師器	坏	ＳＤ771	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ３	(11.4)	(5.2)	(4.6)	－	－	－	－
189	6	土師器	坏	ＳＤ771	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※摩滅	Ａ２	－	5.7	(2.9)	－	－	－	－
189	7	土師器	坏	ＳＤ771	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※摩滅	Ｂ３	－	5.4	(2.85)	－	－	－	－
189	8	須恵器	壺	ＳＩ641・ＳＤ771	覆土	外面：ロクロ→ケズリ、内面：ナデ	－	－	－	－	－	－	－	－
189	9	須恵器	甕？	ＳＤ771	覆土	外面：タタキ目、内面：アテ具	－	－	－	－	－	－	－	－
189	10	須恵器	甕？	ＳＤ771	覆土	外面：タタキ目、内面：アテ具　※外面自然釉	－	－	－	－	－	－	－	－
190	1	土師器	坏	ＳＤ1250	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ３	(11.6)	5.4	(4.6)	－	－	－	46
190	2	土師器	坏	ＳＤ1250	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ３	(11.2)	5.4	(4.7)	－	－	－	－
190	3	土師器	坏	ＳＤ1250	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ３	(11.8)	5.2	(4.2)	－	－	－	46
190	4	土師器	坏	ＳＤ1250	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ２	(12.3)	(5.8)	(4.3)	－	－	－	46
190	5	土師器	坏	ＳＤ1250	覆土	台付坏　※外面一部剥落	Ａ１	(15.0)	－	(5.4)	－	－	－	46
190	6	土師器	坏	ＳＤ1410	覆土	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ２	(11.2)	(5.4)	(4.7)	－	－	－	－
190	7	土師器	坏	ＳＸ342	6	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ３	11.8	6.0	4.3	0.51	36.4	29°	46
190	8	土師器	坏	ＳＸ342	1	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ２	(11.7)	5.4	(4.6)	－	－	－	46
190	9	土師器	坏	ＳＸ342	3	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ２	(11.5)	5.4	(4.6)	－	－	－	46
190	10	土師器	坏	ＳＸ342	4	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※砂多	Ａ２	(11.5)	5.4	(4.1)	－	－	－	46
190	11	土師器	坏	ＳＸ342	5	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ２	(11.3)	5.2	(4.8)	－	－	－	47
190	12	土師器	坏	ＳＫＰ142	2	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ｂ１	12.4	5.6	4.2	0.45	33.9	37.5°	47
190	13	須恵器	坏	ＳＫＰ142	1	外面：タタキ目、内面：アテ具　※外面自然釉	－	－	－	－	－	－	－	－
191	1	石	石製品	ＳＫＰ265	覆土	平坦面あり　※軽石製	長さ：9.1㎝、幅：6.2㎝、厚さ：5.3㎝							48
191	2	土師器	甕	ＳＫＰ762	覆土	外面：ケズリ？	Ｄ	－	(6.8)	(5.6)	－	－	－	－
191	3	土師器	坏	東側(確)	－	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ２	(11.9)	5.7	3.8	－	－	－	－
191	4	土師器	坏	東側(確)	－	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ３	12.2	5.5	4.3	0.45	35.2	32°	
191	5	土師器	坏	東側(確)	－	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ→ミガキ→黒色処理	Ａ３	(12.2)	(6.4)	(4.8)	－	－	－	47
191	6	土師器	坏	東側(確)	－	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ｂ３	(11.8)	(5.2)	(4.6)	－	－	－	－
191	7	土師器	坏	東側(確)	－	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※底面剥落	Ａ２	(12.4)	(5.6)	(5.1)	－	－	－	－
191	8	土師器	坏	東側(確)	－	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※墨書？付着	Ａ１	(12.9)	5.5	(4.7)	－	－	－	－
191	9	土師器	坏	東側(確)	－	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※摩滅	Ａ１	12.4	5.6	4.4	0.45	35.5	32°	－
191	10	土師器	坏	東側(確)	－	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※摩滅	×	(6.3)	(4.0)	(4.9)	－	－	－	－
192	1	土師器	坏	東側(確)	－	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ１	12.1	5.8	4.5	0.48	37.2	31.5°	47
192	2	土師器	坏	東側(確)	－	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ１	12.2	5.8	4.6	0.48	37.7	30.5°	47
192	3	土師器	坏	東側(確)	－	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ１	(12.4)	5.8	4.4	－	－	－	47
192	4	土師器	坏	東側(確)	－	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ｂ３	(12.4)	(6.6)	4.7	－	－	－	－
192	5	土師器	坏	東側(確)	－	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※薄手で軽い。	Ｂ３	(12.0)	4.7	5.4	－	－	－	47
192	6	土師器	坏	ＬＳ52・ＬＴ52	－	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※焼き膨れ状あり。	Ｂ３	(12.3)	4.4	(4.5)	－	－	－	－
192	7	土師器	坏	西側(確)	－	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※内面底中央部に盛り上がりあり。	Ｂ３	(12.4)	5.1	(4.6)	－	－	－	－
192	8	土師器	坏	東側(確)	－	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※摩滅気味	×	(11.6)	5.2	(4.9)	－	－	－	－
192	9	土師器	坏	東側(確)	－			(12.4)	5.8	4.8	－	－	－	－
192	10	土師器	坏	東側(確)	－	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ３	(13.2)	5.4	(4.7)	－	－	－	－
192	11	土師器	坏	東側(確)	－	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※摩滅気味	Ｂ２	(11.4)	(5.8)	(4.9)	－	－	－	－
192	12	土師器	坏	ＭＦ44	－	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ２	(13.0)	(5.2)	5.1	－	－	－	－

第36表　遺物観察表（７）

挿図番号	番号	種別	器種	出土位置	出土層位	特　　徴	胎土の種類	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	底径指数	高径指数	外傾度	図版番号
192	13	土師器	坏	東側(確)	－	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※摩滅顕著	Ａ２	12.4	5.9	4.6	0.48	37.1	31.5	－
192	14	土師器	坏	MG43・44	－	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ２	12.8	5.4	5.0	0.42	39.1	31	47
193	1	土師器	坏	ＬT46周辺	－	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ２	(11.2)	5.4	4.7	－	－	－	－
193	2	土師器	坏	ＬD46Ⅱ	－	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※大ぶりの坏。	Ａ３	(14.4)	5.6	(5.7)	－	－	－	47
193	3	土師器	坏	ＫR48	－	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ２	(12.1)	5.4	(4.6)	－	－	－	－
193	4	土師器	坏	ＬQ53	－	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ３	(12.6)	5.9	(4.5)	－	－	－	－
193	5	土師器	坏	ＬQ51	－	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ２	(12.0)	(5.6)	(4.1)	－	－	－	－
193	6	土師器	坏	ＭT45	－	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ、底面：摩滅	Ａ３	(12.0)	(5.2)	(4.3)	－	－	－	－
193	7	土師器	坏	東側(確)	－	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※摩滅	×	(10.4)	(4.2)	(4.3)	－	－	－	－
193	8	土師器	坏	ＳＩ？覆土	－	高台付坏（台なし）　外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ→ミガキ→黒色処理	Ａ３	(16.0)	(6.5)	(6.6)	－	－	－	－
193	9	土師器	坏	ＭD47	－	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ　※底面摩滅	Ａ３	－	5.3	(3.5)	－	－	－	－
193	10	土師器	坏	９トレ西から39m	－			11.6	－	(3.8)	－	－	－	－
193	11	土師器	坏	ＬD48トレンチ	－	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ、底面：摩滅気味	Ａ１	－	6.0	(5.0)	－	－	－	－
193	12	土師器	坏	東側(確)	－	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ、底面：摩滅気味	Ａ２	－	5.7	(4.7)	－	－	－	－
193	13	土師器	坏	東側(確)	－	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ、底面：摩滅気味	Ｂ２	－	4.7	(4.5)	－	－	－	－
193	14	土師器	坏	ＬS52	－	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ、底面：摩滅気味	Ａ２	－	6.0	(3.8)	－	－	－	－
193	15	土師器	坏	東側(確)	－	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ３	－	5.6	(3.4)	－	－	－	－
193	16	土師器	坏	東側(確)	－	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ、底面：摩滅気味	Ａ３	－	5.2	(3.15)	－	－	－	－
194	1	土師器	坏	ＬQ45	－	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ３	－	5.2	(2.8)	－	－	－	－
194	2	土師器	坏	東側(確)	－	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ｂ３	－	5.2	(2.8)	－	－	－	－
194	3	土師器	坏	東側(確)	－	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ３	－	5.9	(2.5)	－	－	－	－
194	4	土師器	坏	東側(確)	－	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ２	－	6.0	(2.5)	－	－	－	－
194	5	土師器	坏	東側(確)	－	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※摩滅気味	×	－	4.9	(2.3)	－	－	－	－
194	6	土師器	坏	東側(確)	－	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ３	－	5.7	(2.6)	－	－	－	－
194	7	土師器	坏	東側(確)	－	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ｂ３	－	5.8	(2.4)	－	－	－	－
194	8	土師器	坏	東側(確)	－	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ→ミガキ→黒色処理	Ａ３	－	(6.0)	(3.4)	－	－	－	－
194	9	土師器	坏	東側(確)	－	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ、底面：摩滅	×	－	5.0	(2.9)	－	－	－	－
194	10	土師器	坏	表採	－	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ、底面：摩滅	×	－	(5.8)	(2.2)	－	－	－	－
194	11	土師器	坏	東側(確)	－	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ、底面：摩滅	×	－	(5.4)	(3.2)	－	－	－	－
194	12	土師器	甕	東側(確)	－	外面：ケズリ、内面：ナデ　※底面形は方形か。砂礫多	Ｃ	－	(4.0)	(3.6)	－	－	－	－
194	13	土師器	坏？	ＬT46周辺	－	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ※柱状高台	Ａ３	－	(5.4)	(3.9)	－	－	－	－
194	14	土師器	不明	東側(確)	－	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ※	Ａ２	－	8.4	(3.4)	－	－	－	－
194	15	土師器	不明	東側(確)	－	底面：回転糸切り　※柱状高台	Ｂ２	－	6.2	(3.7)	－	－	－	－
194	16	土師器	坏？	東側(確)	－	摩滅	×	－	4.5	(2.3)	－	－	－	－
194	17	土師器	不明	ＬQ46	－	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ→ミガキ→黒色処理	Ａ２	－	(6.5)	(4.2)	－	－	－	－
194	18	土師器	不明	ＬR53	－	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ→ミガキ→黒色処理	Ａ３	－	6.8	(2.9)	－	－	－	－
194	19	土師器	Ⅲ？	ＬR52	－	底面：回転糸切り　※柱状高台	Ａ２	－	(5.4)	(2.9)	－	－	－	－
194	20	土師器	不明	ＬL53Ⅱ	－	内面：ロクロナデ、底部：回転糸切り→台	Ａ２	－	(7.8)	(2.5)	－	－	－	－
194	21	土師器	不明	ＭO47	－	底面：回転糸切り→台　※摩滅	Ａ１	－	(9.0)	(4.7)	－	－	－	－
194	22	土師器	Ⅲ	ＭE44トレンチ	－	底面：回転糸切り→台　※摩滅	×	(12.2)	6.9	(4.0)	－	－	－	－
194	23	土師器	不明	ＭD49	－	底面：回転糸切り→台　※	Ａ２	－	(5.4)	(1.5)	－	－	－	－
194	24	土師器	不明	ＬT52	－	底面：回転糸切り→台　※柱状高台	Ａ２	－	(　)	(2.9)	－	－	－	－
195	1	土師器	耳皿	表採	－	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ２	7.7	4.8	(2.4)	－	－	－	－
195	2	土師器	耳皿	表採	－	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※摩滅	Ａ２	(10.1)	4.8	(2.95)	－	－	－	47
195	3	土師器	耳皿	東側(確)	－	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ２	－	(5.2)	3.3	－	－	－	－
195	4	土師器	耳皿	ＭC49	－	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ２	－	4.6	(2.75)	－	－	－	－
195	5	土師器	耳皿	ＬQ53	－	外面：ロクロナデ→回転糸切り､内面：ロクロナデ　※195－３と類似。	Ａ２	8.2	5.4	2.15	－	－	－	－
195	6	土師器	耳皿	ＬR46	－	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	Ａ２	－	－	3.8	－	－	－	－
196	1	土師器	甕	ＭM47	－	外面：ケズリ、内面：ナデ　※砂礫多	Ｃ	－	(8.0)	(16.6)	－	－	－	47
196	2	土師器	甕	ＭM47	－	外面：ケズリ、内面：ナデ　※砂礫多196－１と同一個体か。	Ｃ	－	－	－	－	－	－	－
196	3	土師器	甕	ＬR52	－	外面：ケズリ、内面：ナデ　※砂礫多	Ｃ	－	7.3	(7.7)	－	－	－	－
196	4	土師器	甕	ＭS47	－	外面：ケズリ、内面：ナデ　※底面中央部窪む。	Ｃ	－	(7.8)	(3.1)	－	－	－	－
196	5	土師器	長胴甕	ＭO46	－	外面：タタキ目、内面：オサエ？　※砂礫多	Ｄ	－	－	－	－	－	－	－
196	6	土師器	坏	ＬT45	－	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※墨書あり。	Ａ３	(13.2)	(5.2)	(4.4)	－	－	－	－
196	7	土師器	坏	ＬR53	－	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ　※墨書あり。	Ａ１	－	－	－	－	－	－	－
196	8	土師器	坏	ＬQ46	－	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ　※墨書あり。	Ａ２	－	－	－	－	－	－	－
196	9	土師器	坏	ＬQ46	－	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ　※墨書あり。	Ａ１	－	－	－	－	－	－	－
196	10	土師器	坏	ＬQ46	－	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ　※墨書あり。	Ａ１	－	－	－	－	－	－	－
196	11	土師器	坏	ＬQ46	－	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ　※墨書あり。	Ａ１	－	－	－	－	－	－	－
196	12	土師器	坏	ＬQ45	－	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ　※墨書あり。	Ａ２	－	－	－	－	－	－	－
196	13	土師器	坏	ＬQ46	－	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ　※墨書あり。	Ａ２	－	－	－	－	－	－	－
197	1	土師器	坏	ＬQ46	－	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ　※墨書あり。	Ａ２	－	－	－	－	－	－	－
197	2	土師器	坏	ＬS45	－	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ　※墨書あり。	Ａ２	－	－	－	－	－	－	－
197	3	土師器	坏	ＬQ46	－	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ　※墨書あり。	×	－	－	－	－	－	－	－
197	4	土師器	坏	ＬQ46	－	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ　※墨書あり。	Ａ２	－	－	－	－	－	－	－
197	5	土師器	坏	ＬQ46	－	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ　※墨書あり。	Ａ２	－	－	－	－	－	－	－
197	6	土師器	坏	ＬQ46	－	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ　※墨書あり。	Ａ１	－	－	－	－	－	－	－
197	7	土師器	坏	ＬR46	－	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ　※墨書あり。	Ａ２	－	－	－	－	－	－	－
197	8	土師器	坏	ＬQ46	－	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ　※墨書あり。	×	－	－	－	－	－	－	－
197	9	土師器	坏	ＬQ46	－	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ　※墨書あり。	Ａ２	－	－	－	－	－	－	－
197	10	土師器	坏	ＬQ46	－	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ　※墨書あり。	Ａ２	－	－	－	－	－	－	－
197	11	土師器	坏	ＬN54	－	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※墨書あり。	Ｂ３	－	－	－	－	－	－	－
197	12	土師器	坏	東側(確)	－	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※墨書あり。	Ａ３	－	－	－	－	－	－	－
197	13	土師器	坏	ＬQ46	－	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※墨書あり。	Ａ１	－	－	－	－	－	－	－
197	14	土師器	坏	ＬQ46	－	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※墨書あり。	Ａ２	－	－	－	－	－	－	－
197	15	土師器	坏	ＬQ46	－	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ　※墨書あり。	Ａ２	－	－	－	－	－	－	－
197	16	須恵器	坏？	ＬT45	－	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	－	－	6.2	(2.8)	－	－	－	－

第37表　遺物観察表（8）

挿図番号	番号	種別	器種	出土位置	出土層位	特　　徴	胎土の種類	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	底径指数	高径指数	外傾度	図版番号
197	17	須恵器	壺	MA・MB 46・47	－	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ	－	11.0	－	(4.4)	－	－	－	－
197	18	須恵器	壺	LH46	－	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ→ナデ	－	(13.4)	－	(9.7)	－	－	－	47
197	19	須恵器	壺	LQ46	－	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ→ナデ	－	最大径：		(12.7)	－	－	－	48
198	1	須恵器	壺	LP47・LT46	－	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ	－	15.8	－	(5.9)	－	－	－	－
198	2	須恵器	壺	東側(確)	－	口縁部：内外面ロクロナデ、胴部：内面アテ具痕	－	17.6	－	(7.9)	－	－	－	－
198	3	須恵質陶器	片口鉢	調査区中央部沢状地形(確)	－	外面：ロクロナデ、内面ロクロナデ→沈線　※中世陶器	－	(32.4)	－	(10.1)	－	－	－	48
198	4	須恵器	壺？	MD46	－	外面：ケズリ、内面：ロクロナデ　※外面に指紋。	－	－	5.8	(3.8)	－	－	－	－
198	5	須恵器	壺？	MC49	－	外面：ナデ、内面：ナデ	－	－	－	－	－	－	－	－
198	6	須恵器	甕？	東側(確)	－	外面：タタキ目？	－	－	－	－	－	－	－	－
199	1	石器	砥石	ML48・S5	－	側面が平坦な作業面。その他長い溝あり。	長さ：14.4㎝、幅：8.5㎝、厚さ：3.6㎝							48
199	2	石器	砥石	東側(確)	－	平坦な作業面が3面。	長さ：(7.2)㎝、幅：3.5㎝、厚さ1.9㎝							48
199	3	土製品	土玉	LK48	－	中央部に貫通孔。φ0.9㎝、厚さ0.7㎝								－
－	－	緑釉陶器	椀	LR53	－	東濃　大原2号窯式								巻頭
－	－	緑釉陶器	椀	LR53	－	東濃　大原2号窯式								巻頭
－	－	緑釉陶器	椀	LI50	－	近江								巻頭
－	－	緑釉陶器	椀	LM47	－	近江								巻頭
－	－	緑釉陶器	椀	SI765	－	近江								巻頭
－	－	緑釉陶器	椀	SK1841	－	東濃　大原2号窯式								巻頭

13　遺物（2）

ここでは、製鉄関連遺物をまとめて掲載した。

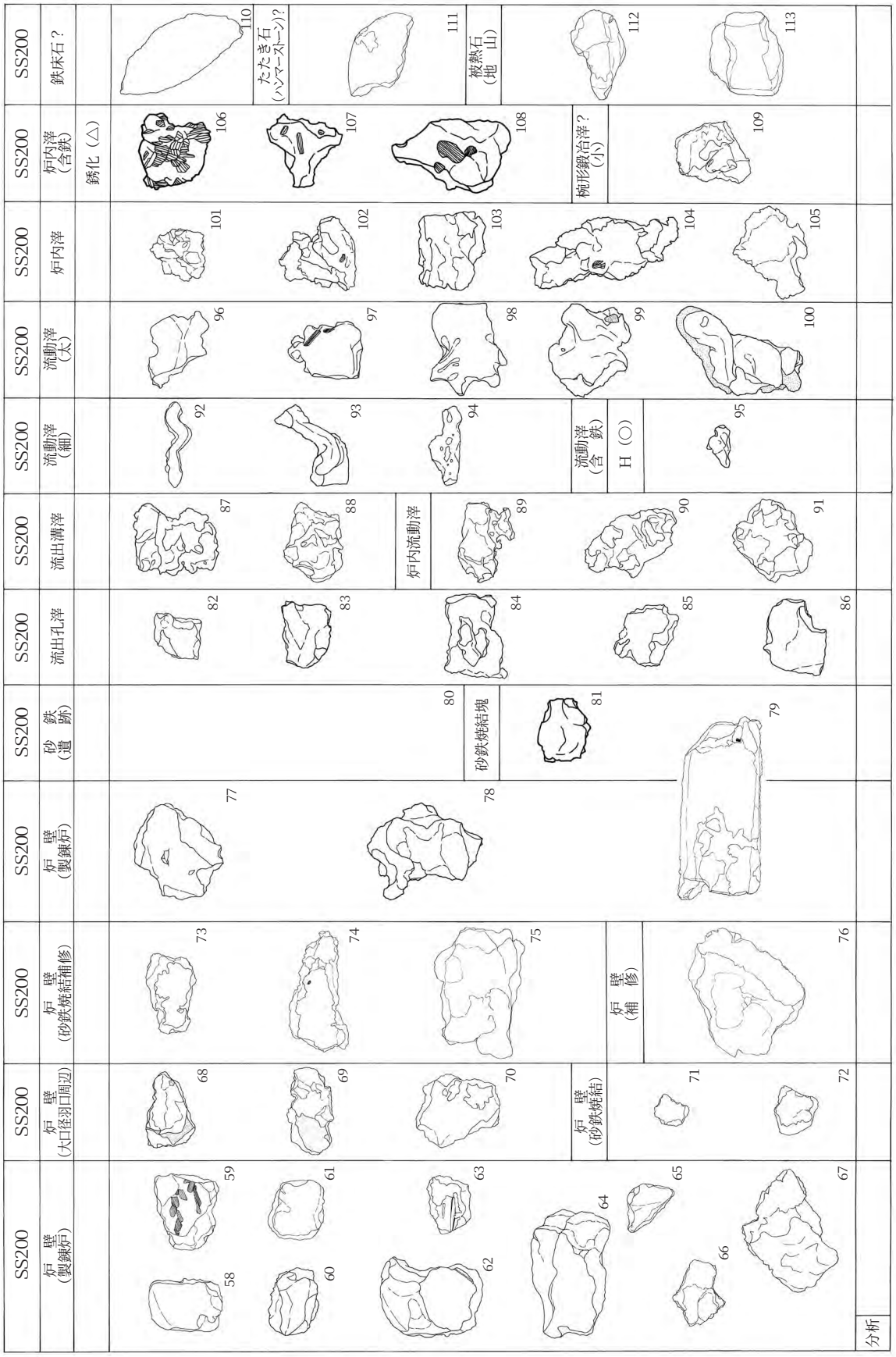
鉄製品の中では、錫杖状鉄製品(第221図141、第223図197、第225図265)が注目される遺物である。本遺跡では確実に3個体存在するが、そのうちの1個体（第223図197）は、錆状の固まりとして検出され、クリーニングの結果、重なり合っていたものが分離できたものである。2つの環の大きさが異なりアンバランスであることから、本来2個体だったものの、それぞれの片側の環部分である可能性も考えられる。

その他の鉄製品としては、鉄鏃（第225図272)、刀子（第210図40・47など)、鎌（第209図22、第221図136)、環状の鉄製品（第222図170、第224図243・250）などがある。量的には刀子の一部と思われる薄く扁平な鉄製品が多い。

製鉄や鍛冶作業に関連した遺物として炉壁、各種鉄滓があるが、この他に敲き石（第220図111)、鉄床石（第226図281)、砥石（第211図51)、被熱した礫などが出土している。

SI39	SI132	SI153	SI653a	SI765b	SI777	SI1724	SKI610	SKI888	SK147	SK226	SK1841	SN208
炉　壁	椀形鍛冶滓（中・含鉄）	鍛冶滓（含鉄）	椀形鍛冶滓（極　小）	羽　口（鍛　冶）	羽　口（鍛　冶）	椀形鍛冶滓（小）	鉄製品（鍛造品）	鉄製品（鍛造品）	鍛冶滓（含　鉄）	鉄製品（鍛造品）	砥　石	椀形鍛冶滓（極　小）
	H（○）	H（○）					M（◎）	H（○）	H（○）	錆化（△）		
1	7	11	18	23	26	39		17	42	46	51	55
椀形鍛冶滓（中）	鉄製品（鍛造品）	SI410a	羽　口（鍛　冶）	鉄製品（鍛造品）	含鉄製滓	SKI128		29	羽　口（鍛　冶）	SK417		
2	H（○）	炉内滓？		錆化（△）	錆化（△）	椀形鍛冶滓（小・含鉄）		30	43	鉄製品（鍛造品）		
8			19	24	25	錆化（△）	32		SK178	H（○）		
SI127a	被熱石				SI1000	4		31	鍛冶滓（含　鉄）		SN157	
椀形鍛冶滓（小）			SI699a	SI777	椀形鍛冶滓（小）	SKI180a	SKI888	32	錆化（△）	47	椀形鍛冶滓（小）	
3	9		羽　口（鍛　冶）	鉄製品（鍛造品）	35	鉄製品（鍛造品）	椀形鍛冶滓（中・含鉄）	33	44	SK493	52	
SI129			20	H（○）	36	錆化（△）	L（●）	SK2	SK186d	鍛冶滓（含　鉄）		
椀形鍛冶滓（小）			椀形鍛冶滓（小）	鉄製品（鍛造品）	H（○）	12		鉄製品（鍛造品）	椀形鍛冶滓（小）	H（○）	53	
5			21	22	37			錆化（△）	45	48		
SI131	SI151		椀形鍛冶滓（小）	鉄製品（鍛造品）	SI1456	SKI273	羽　口（鍛　冶）	40	錆化（△）	SK514		
鉄製品（鍛造品）	鉄製品（鍛造品）		錆化（△）	27	鉄塊系遺物	椀形鍛冶滓（中・含鉄）			SK225	椀形鍛冶滓（中・含鉄）	椀形鍛冶滓（極小・含鉄）	
錆化（△）	錆化（△）				L（●）	H（○）			鉄製品（鍛造品）	錆化（△）	H（○）	
6	10	14	21	28	38	13	34	41	56	49	54	
分析												

第200図　鉄関連構成図（１）



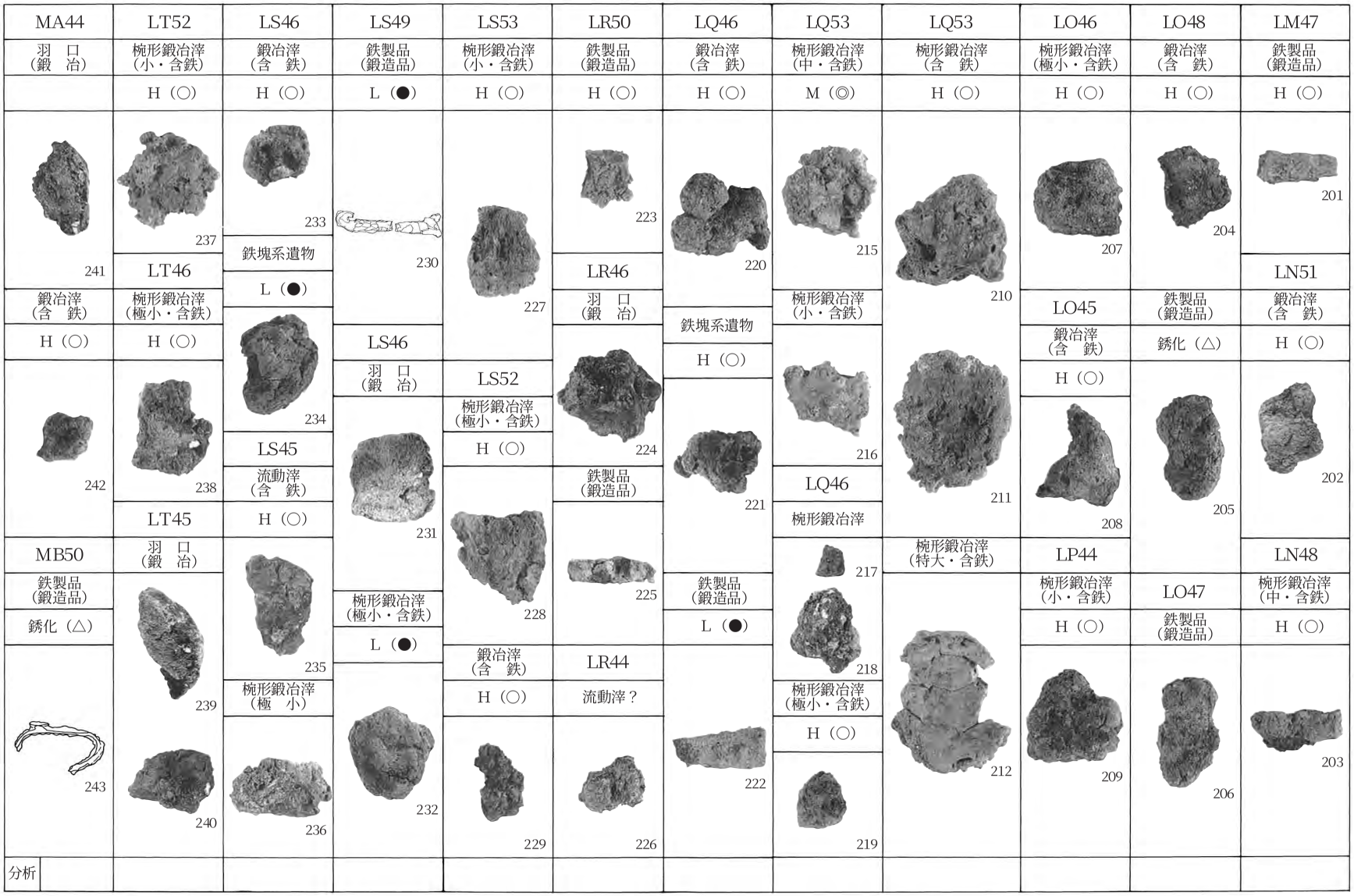
第201図　鉄関連構成図（2）

SS210	SS763	SS763	SS900	SD135	SD400	SD508	SD652	SD1704	SKP267	SKP1542
炉　壁（鍛冶炉）	炉　壁（鍛冶炉）	鍛造剥片	炉　壁（製錬炉）	椀形鍛冶滓（極　小）	鍛冶滓（含　鉄）	椀形鍛冶滓（中・含鉄）	鉄製品（鍛造品）	鍛冶滓（含　鉄）	鉄製品（鍛造品）	鉄製品（鍛造品）
					H（○）	H（○）	H（○）	錆化（△）	錆化（△）	錆化（△）
114	119	124	57	133	137		141		149	152
SS451		SS900周辺								SKP1559
炉壁溶解物		椀形鍛冶滓（極　小）	椀形鍛冶滓（極小・炉床土付き）	SD152	SD507				SKP692	椀形鍛冶滓（極小・含鉄）
115	120	125	H（○）	椀形鍛冶滓（小・含鉄）	椀形鍛冶滓（極小・含鉄）		SD880	146	椀形鍛冶滓（極　小）	H（○）
SS609　C−2	鍛冶滓			H（○）	H（○）		鉄製品（鍛造品）			153
流動滓（鍛冶滓）	121	錆化（△）	129	134	138	139	H（○）		50	SKP1718
116	椀形鍛冶滓（極小・炉壁土付き）	126					142		SKP1341	鍛冶滓（含　鉄）
117	122	鉄製品（鍛造品）	SS1700	135	鉄製品（鍛造品）	鉄製品（鍛造品・含鉄）	SD1410		鍛冶滓（含　鉄）	H（○）
流動滓（含鉄）		錆化（△）	鍛冶滓	鉄製品（鍛造品）	錆化（△）	錆化（△）	椀形鍛冶滓（大・含鉄）		L（●）	154
M（◎）	粒状滓	127	130	H（○）	150	140	H（○）		151	椀形鍛冶滓（小）
118	123	鍛造剥片	鍛造剥片	136			145			155
分析		128	131							

第202図　鉄関連構成図（３）

LM51	LM54	LL48	LK47	LK48	LH47	LG46	LG47	LF47	LD46	LD48	KS49
椀形鍛冶滓（小・含鉄）	椀形鍛冶滓（極小・含鉄）	鍛冶滓（含　鉄）	鍛冶滓（含　鉄）	鍛冶滓（含　鉄）	鍛冶滓（含　鉄）	椀形鍛冶滓（極小・含鉄）	椀形鍛冶滓（中・含鉄）	羽　口（鍛　冶）	椀形鍛冶滓（小・含鉄）	鍛冶滓（含　鉄）	炉内滓？（含　鉄）
H（○）	H（○）	H（○）	H（○）	H（○）	H（○）	H（○）	錆化（△）		H（○）	H（○）	H（○）
198	195	191	186	181	178	175	171	168	164	159	156
	LM53	192	187	182	LH46	LH54		LG55	LE48	160	LB46
LM49	鉄製品（鍛造品）				流動滓？（含　鉄）	椀形鍛冶滓（小）		椀形鍛冶滓（極小・含鉄）	鉄製品（鍛造品）		椀形鍛冶滓（小）
椀形鍛冶滓（極　小）	H（○）		188	183	錆化（△）		椀形鍛冶滓（極　小）	H（○）		LD47	
199	196	LL47			179	176	172	169	165	羽　口（鍛　冶）	157
		羽　口（鍛　冶）	LL54	鉄製品（鍛造品）			椀形鍛冶滓（極小・含鉄）		錆化（△）	161	
LM48	LM52	193	椀形鍛冶滓（極　小）	H（○）	LK54		H（○）		166	162	
椀形鍛冶滓（中・二段・含鉄）	鉄製品（鍛造品）		189	184	椀形鍛冶滓（極小・含鉄）	LH48	173	LG49	LF47		LD48
H（○）	H（○）	椀形鍛冶滓（小・含鉄）	LL49	LK47	H（○）	椀形鍛冶滓（極小・含鉄）		鉄製品（鍛造品）	椀形鍛冶滓（中）		椀形鍛冶滓（極小・含鉄）
	197-①	H（○）	椀形鍛冶滓（極小・含鉄）	羽　口（鍛　冶）		H（○）	鍛冶滓（含　鉄）	錆化（△）		LD46	H（○）
200	197-②	194	H（○）	185	180	177	H（○）	170	167	鍛冶滓（含　鉄）	
			190				174			錆化（△）	158
										163	
分析											

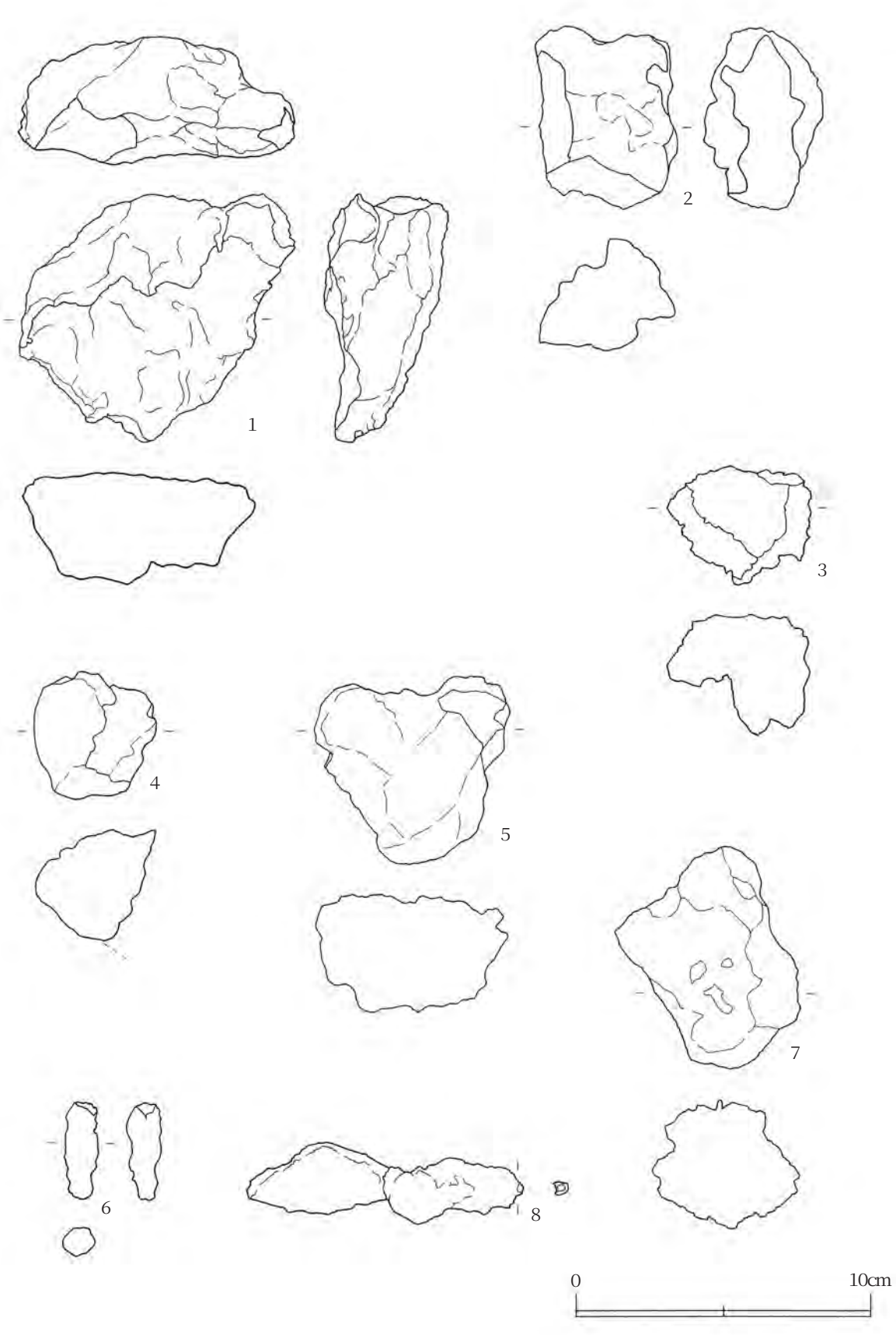
第203図　鉄関連構成図（4）



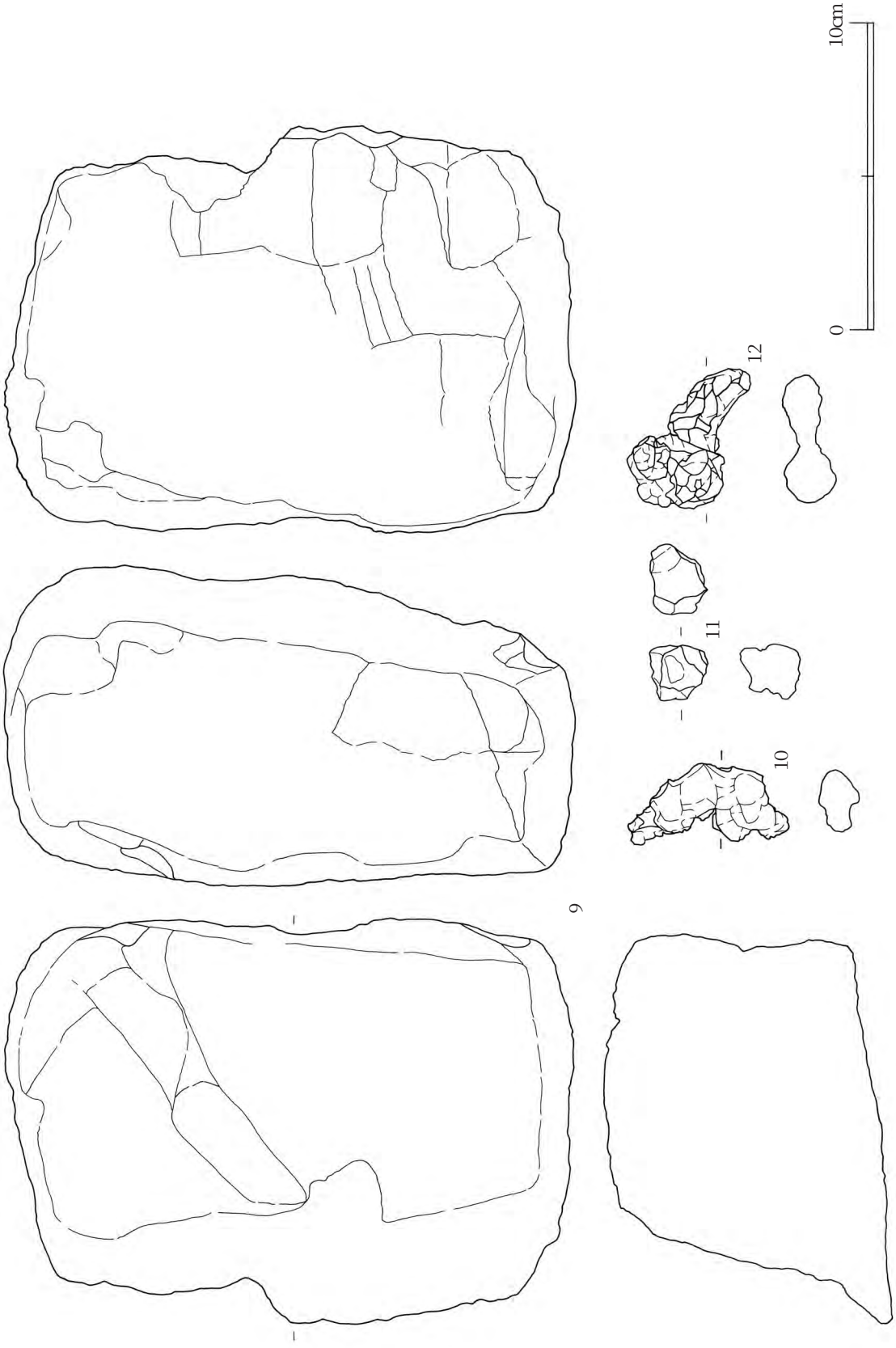
第204図　鉄関連構成図（５）

表　採	MO48	ML45	MK44	MH43	MG47	ME44	MD46	MD47	MC45	MC49	MB48
鍛冶滓（含　鉄）	椀形鍛冶滓（小・含鉄）	鉄製品（鍛造品）	椀形鍛冶滓（小）	椀形鍛冶滓（極小・含鉄）	含鉄鉄滓	椀形鍛冶滓（中）	鍛冶滓（含　鉄）	鉄製品（鍛造品）	鉄製品（鍛造品）	椀形鍛冶滓（小・含鉄）	鉄製品（鍛造品・含鉄）
H（○）		特L（☆）		H（○）	H（○）	H（○）	H（○）	錆化（△）	H（○）	H（○）	錆化（△）
278	276	272	269	266	263	260	257	254	251	248	244
椀形鍛冶滓（大）		鍛冶滓（含　鉄）	ML46	MT45	鍛冶滓（含　鉄）		ME48	MD46	椀形鍛冶滓（極小・含鉄）		MB47
錆化（△）		H（○）	鍛冶滓（含　鉄）	椀形鍛冶滓（極小・含鉄）	H（○）		鍛冶滓（含　鉄）	羽　口（鍛　冶）	H（○）		椀形鍛冶滓（小）
		273	H（○）	H（○）		MF47	H（○）		252	鍛冶滓（含　鉄）	245
279	MP47	ML44	270		264	鉄製品（鍛造品・含鉄）	258		MC44	H（○）	MB45
	鉄製品（鍛造品）	椀形鍛冶滓（中）			MG46	H（○）	ME47		椀形鍛冶滓（小・含鉄）	249	椀形鍛冶滓（小）
	錆化（△）		ML45	267	鉄製品（鍛造品）	261	含鉄鉄滓	255	H（○）		246
2トレ		274	鉄製品（鍛造品・含鉄）	MK44	H（○）	MF45	H（○）	鍛冶滓（含　鉄）		MC48	
鉄製品（鍛造品）	277	MM48	H（○）	羽　口（鍛　冶）		鉄製品（鍛造品）		H（○）	253	鉄製品（鍛造品）	羽　口（鍛　冶）
M（◎）		鉄製品（鍛造品）			265	L（●）	259	256		錆化（△）	
280		H（○）	271	268		262				250	247
分析											

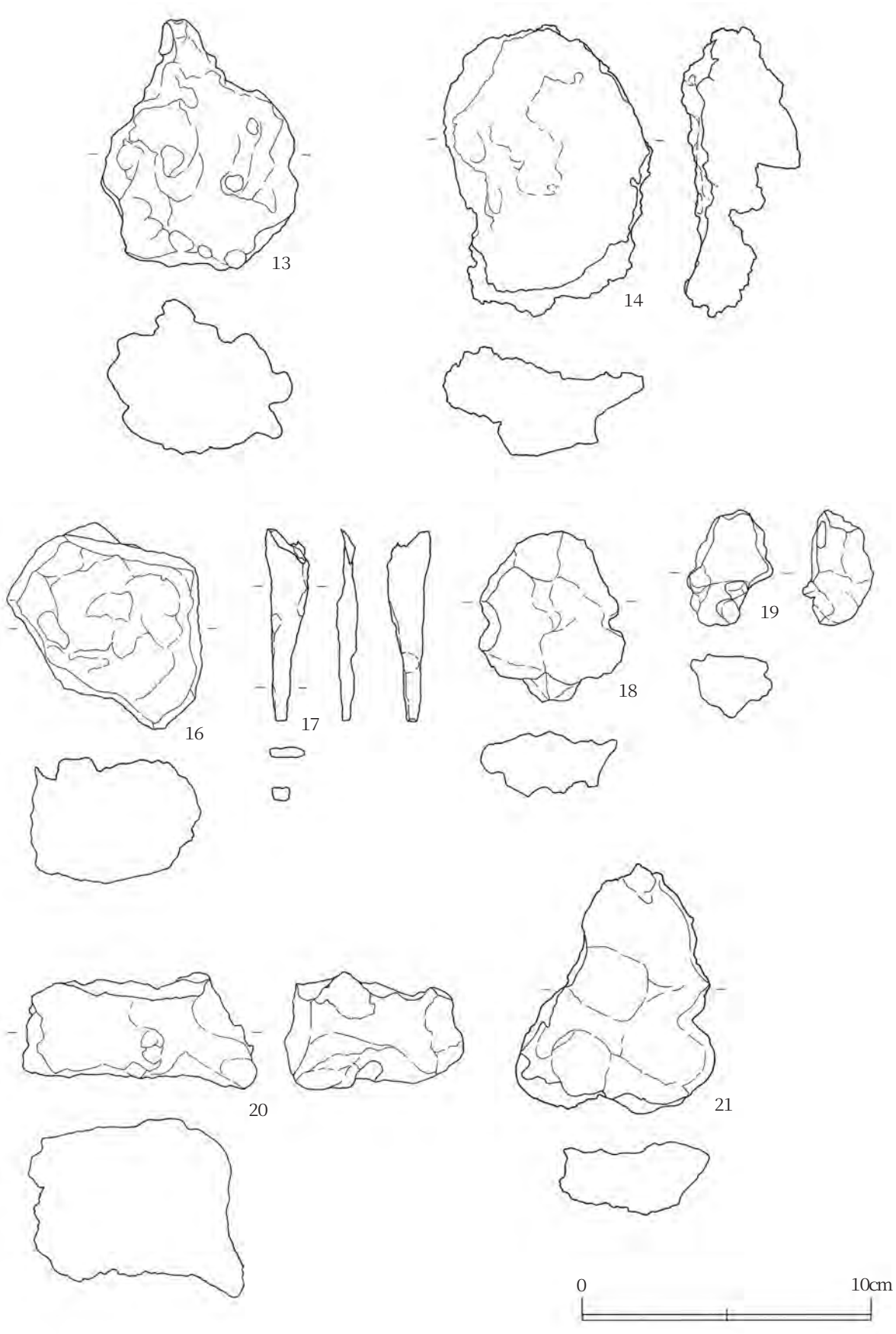
第205図　鉄関連構成図（6）



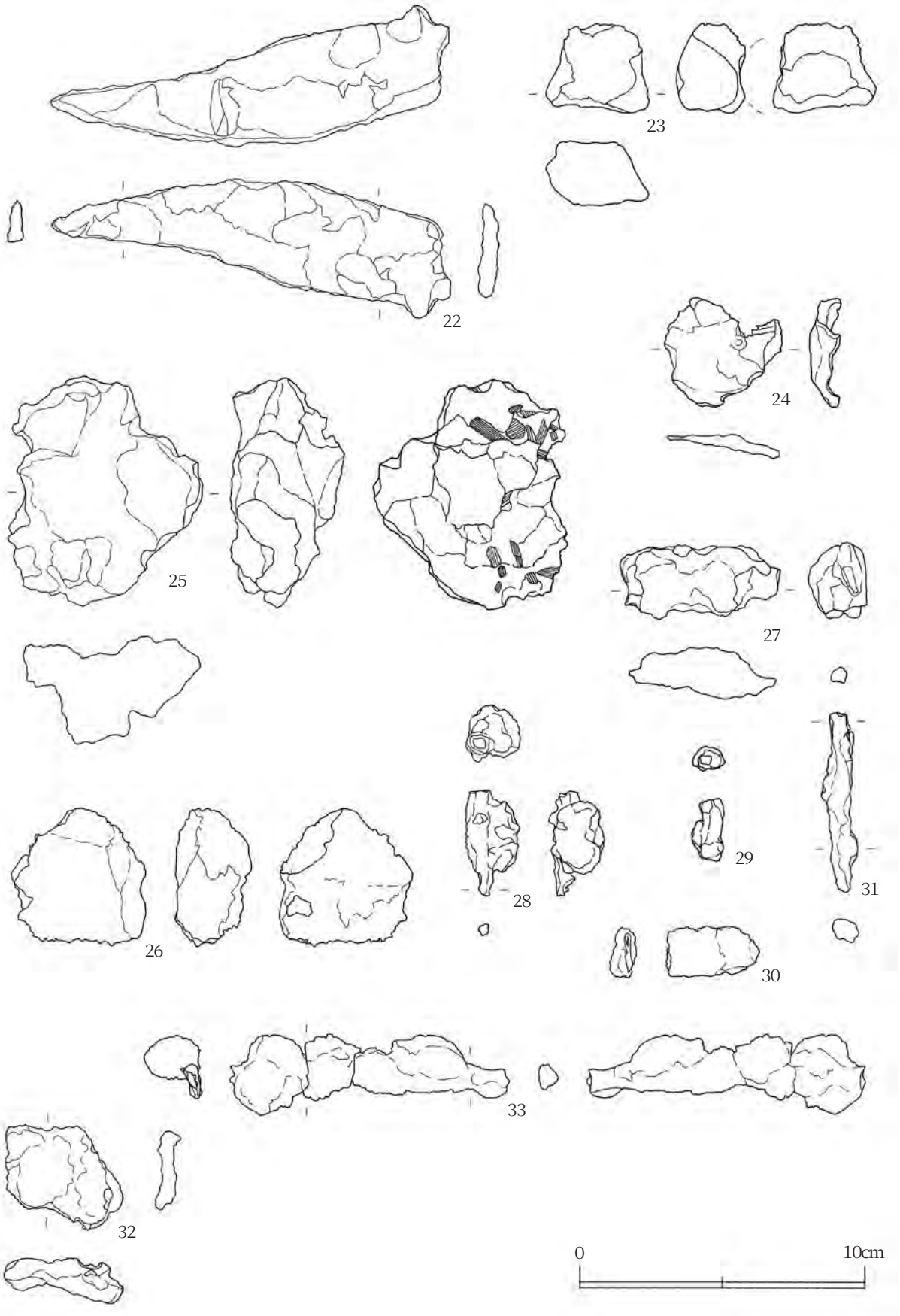
第206図　鉄関連遺物（１）



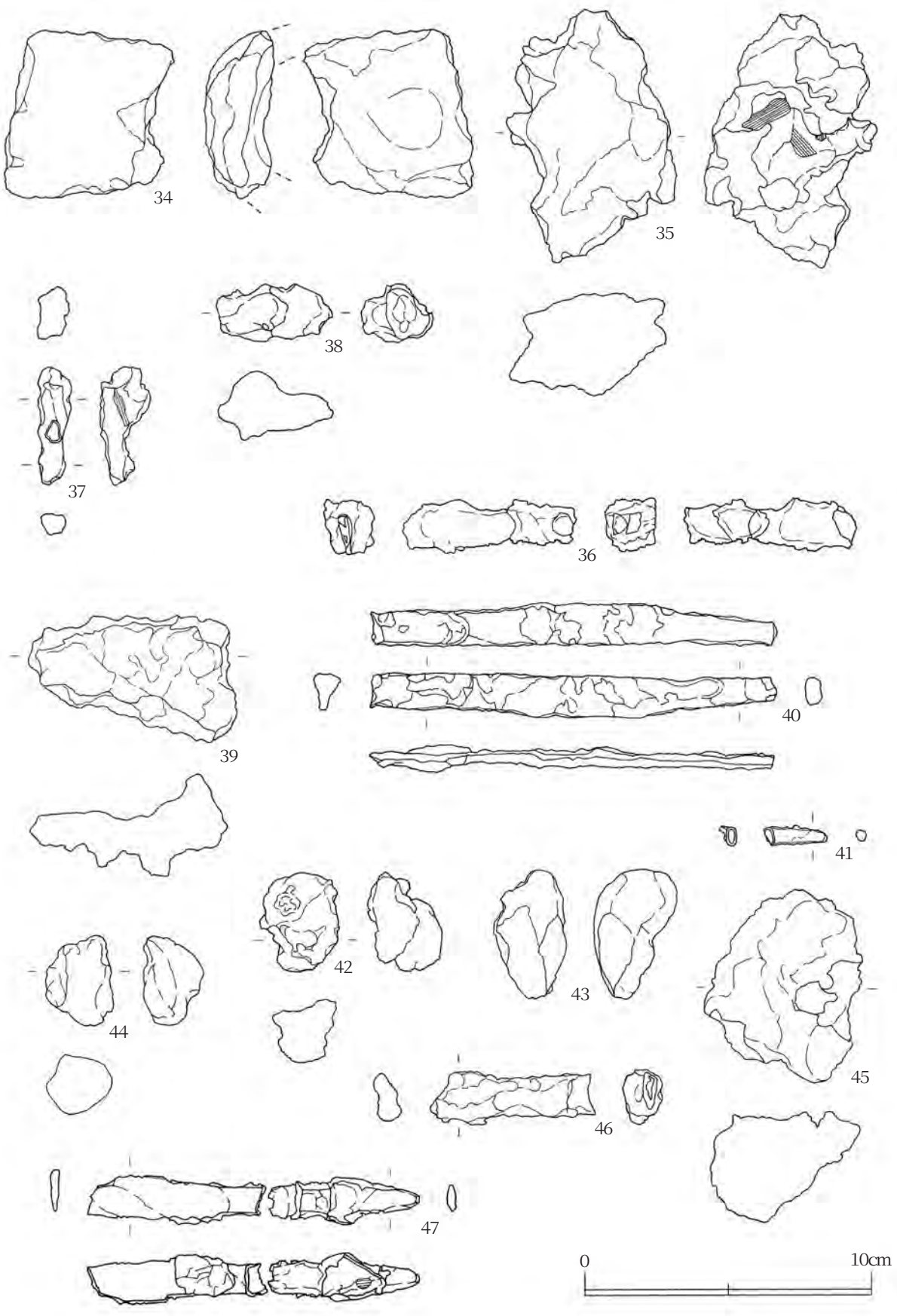
第207図　鉄関連遺物（2）



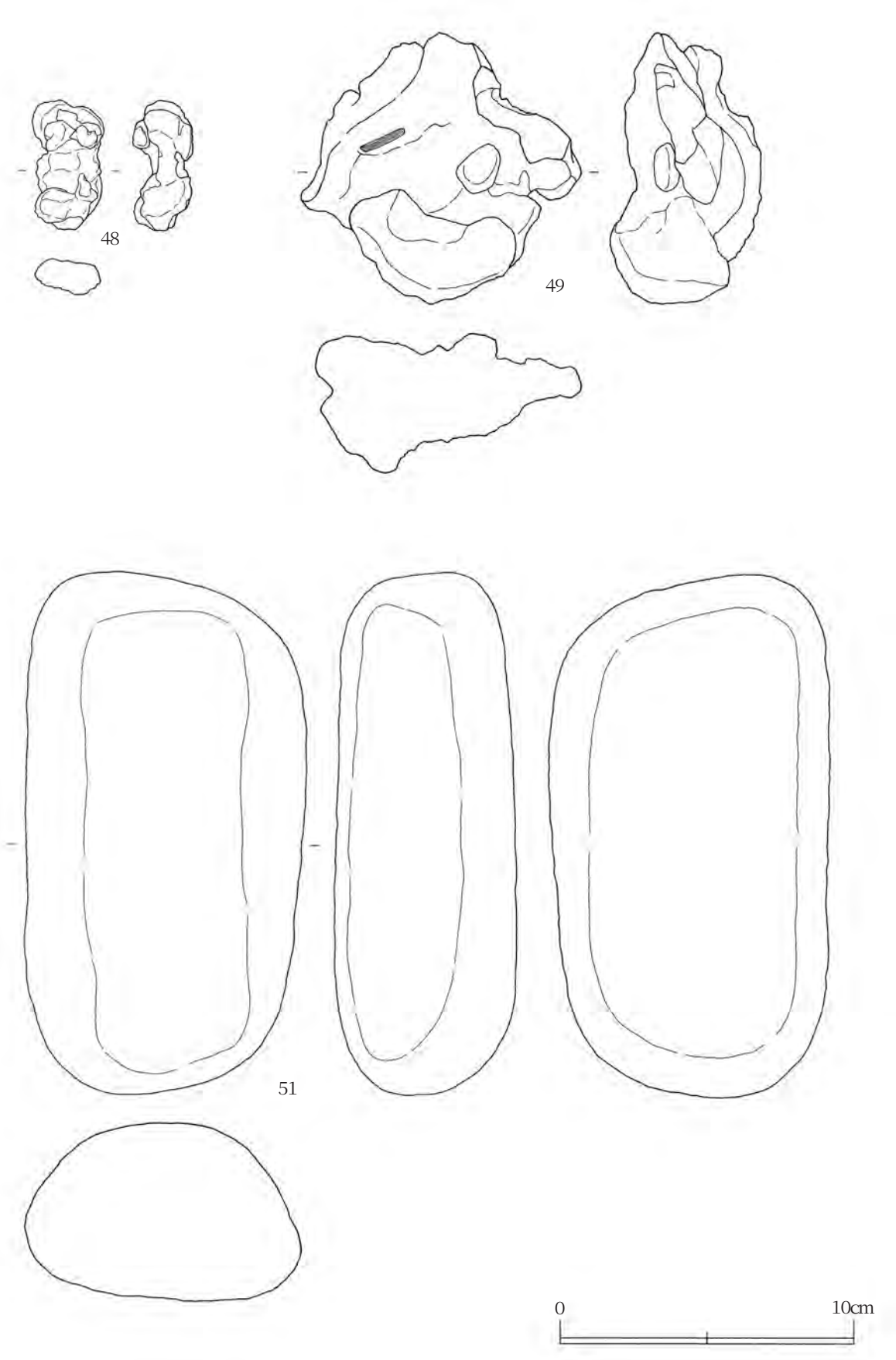
第208図　鉄関連遺物（３）



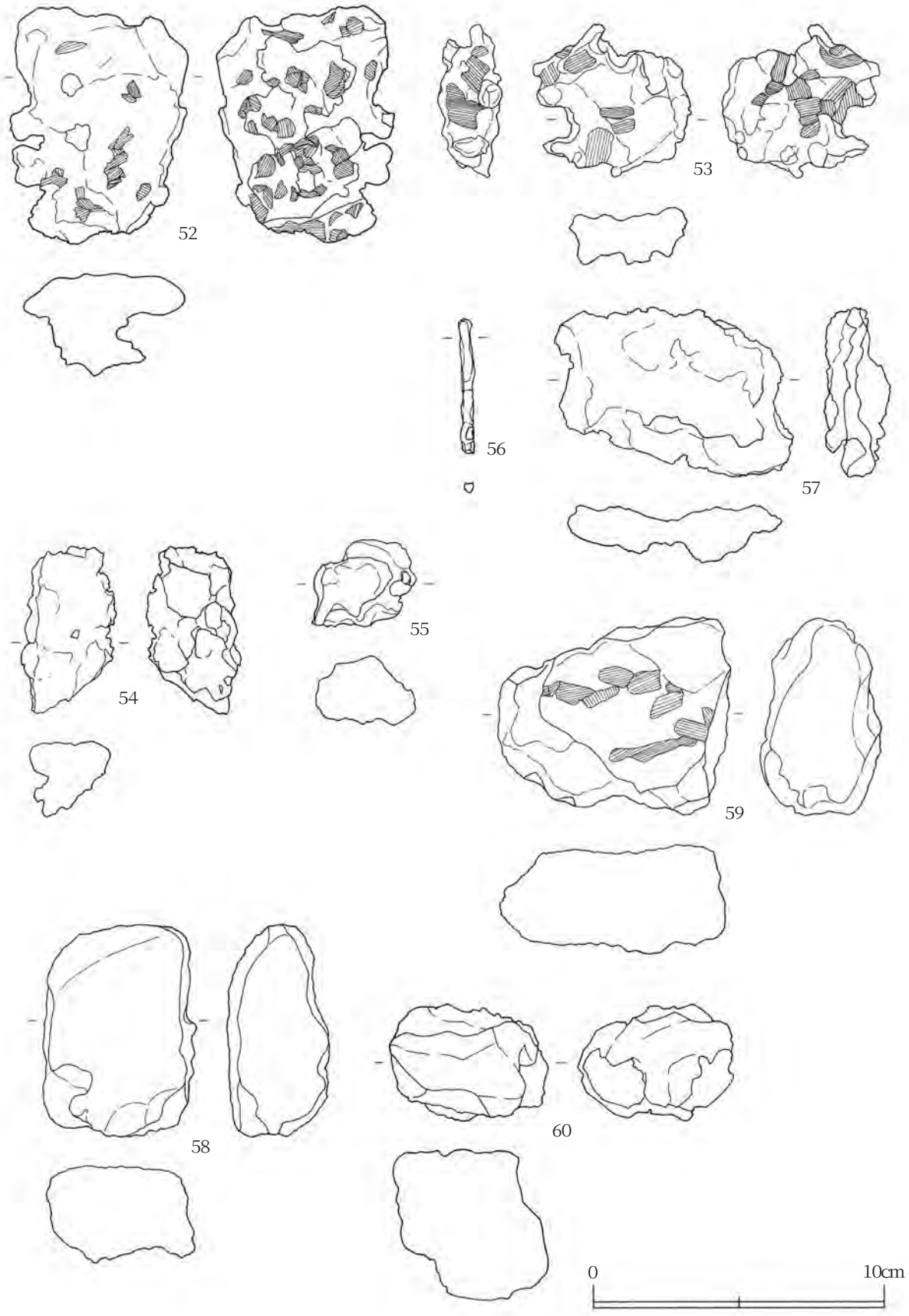
第209図　鉄関連遺物（4）



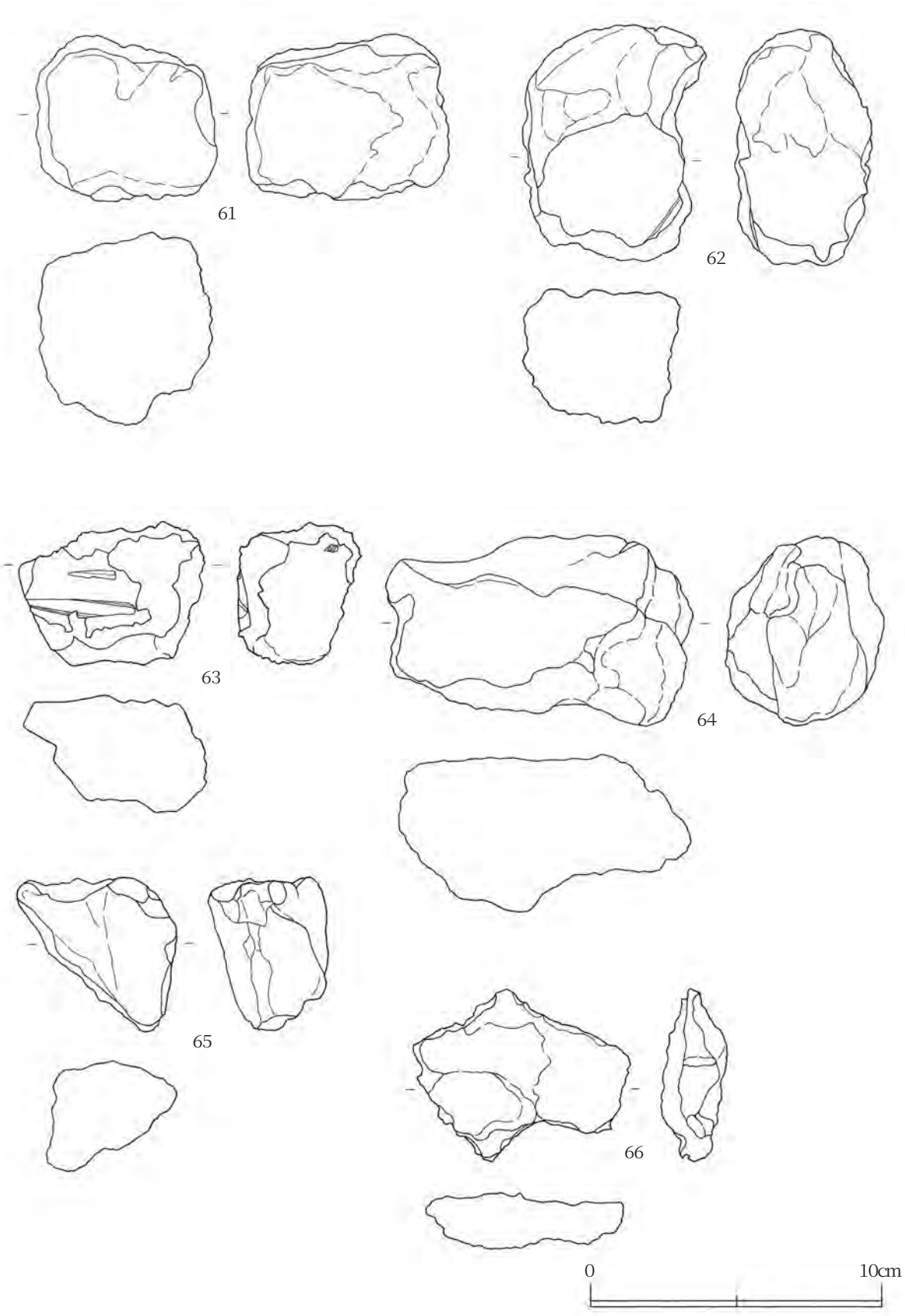
第210図　鉄関連遺物（５）



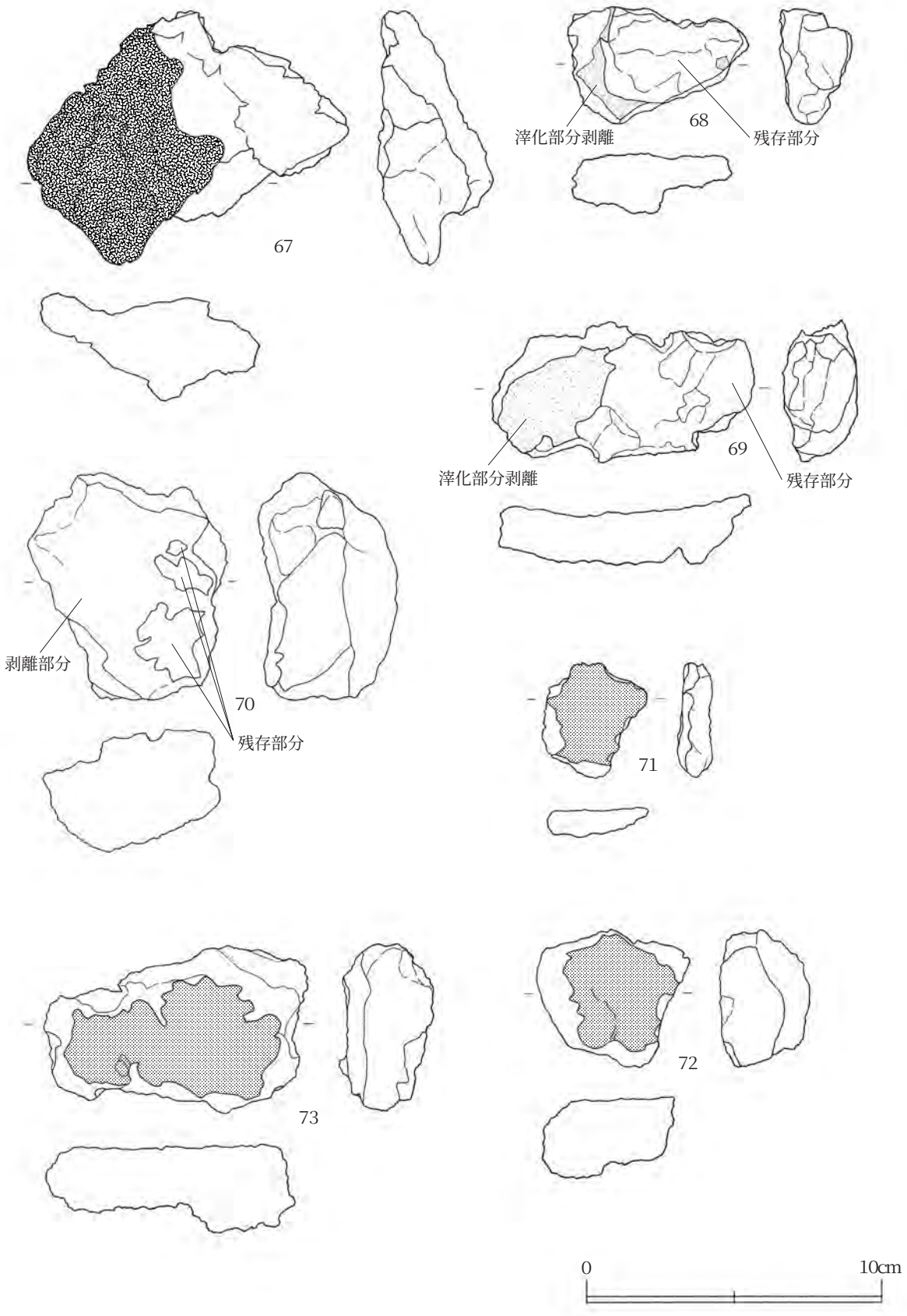
第211図　鉄関連遺物（6）



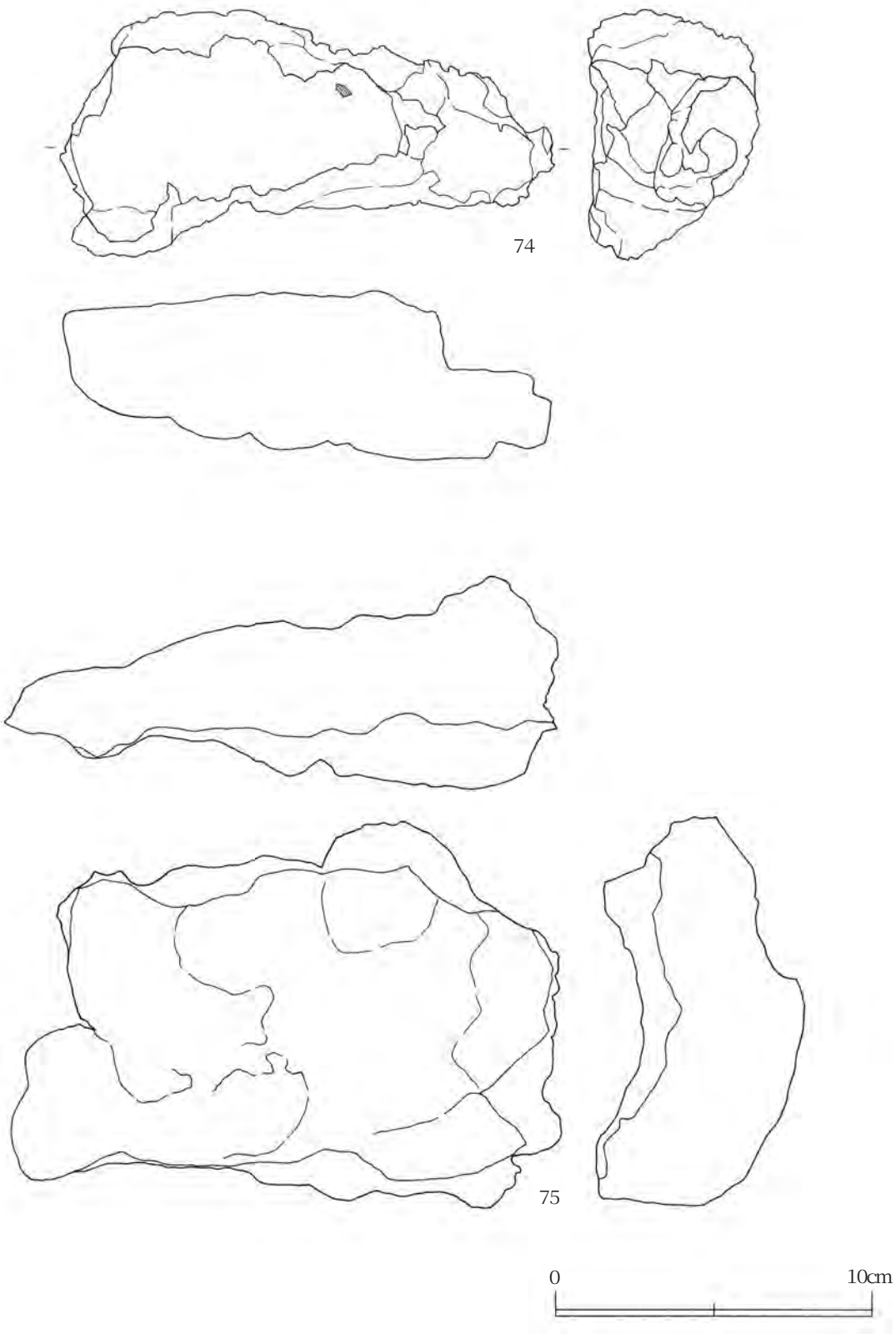
第212図　鉄関連遺物（７）



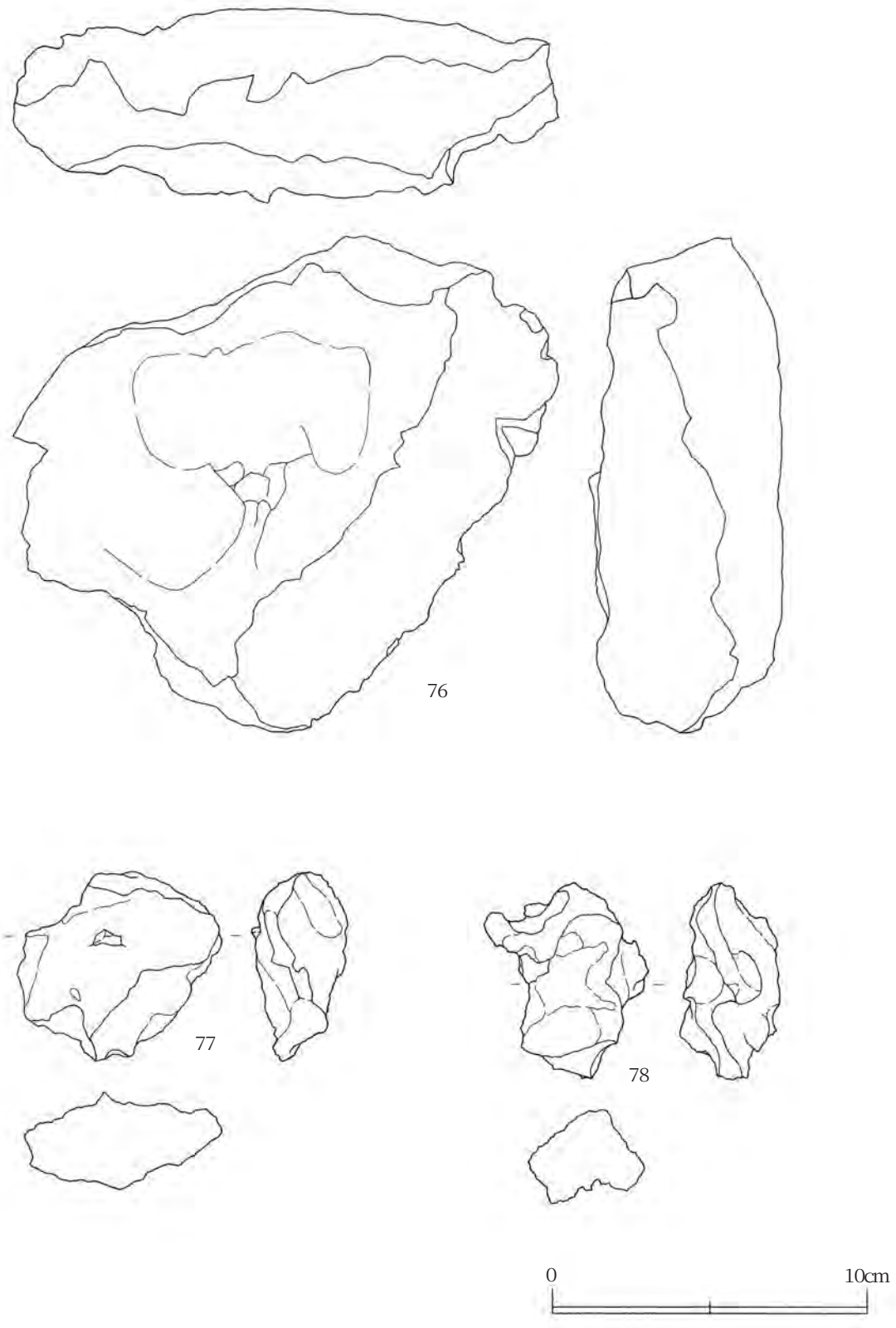
第213図　鉄関連遺物（8）



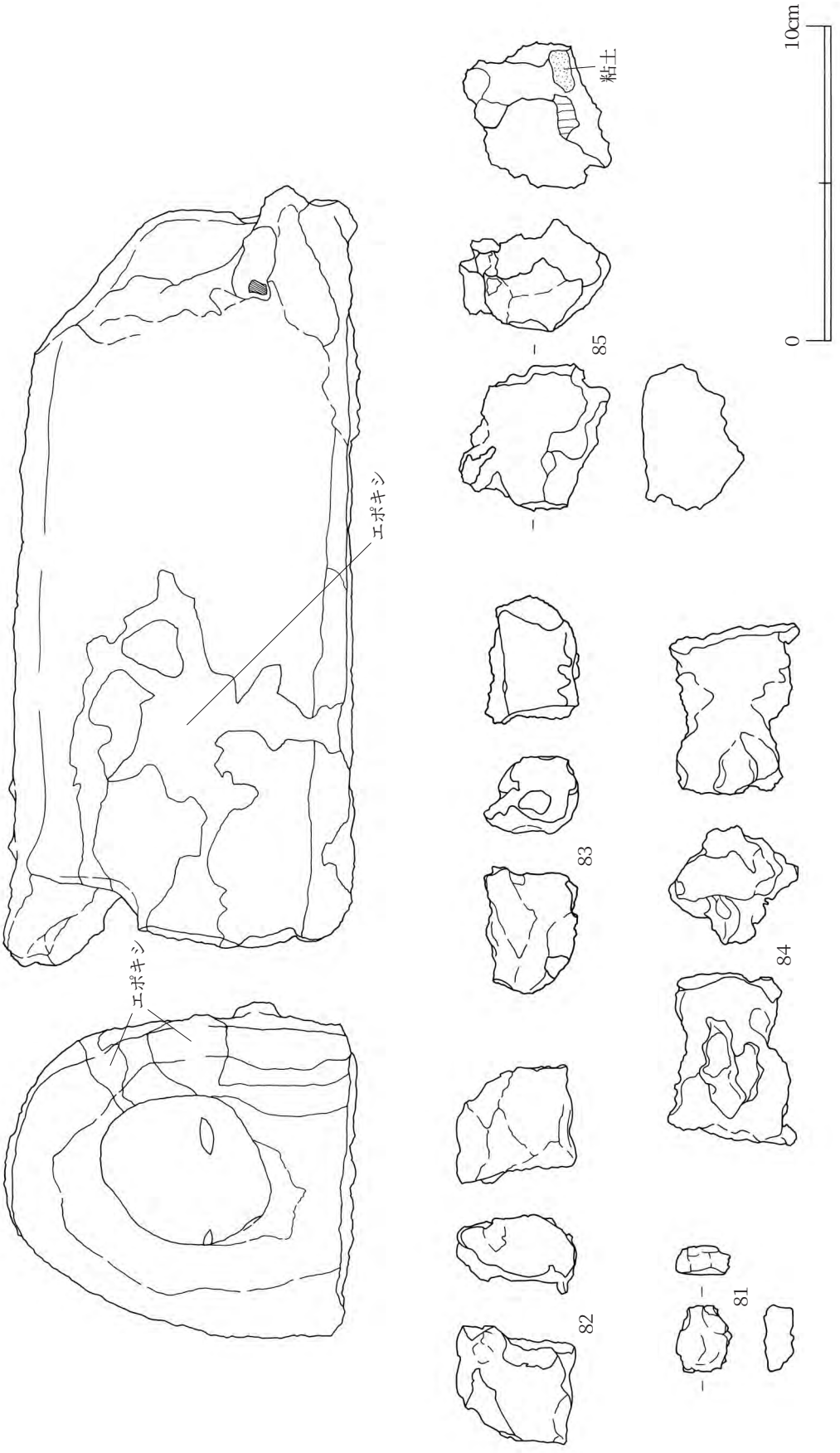
第214図　鉄関連遺物（９）



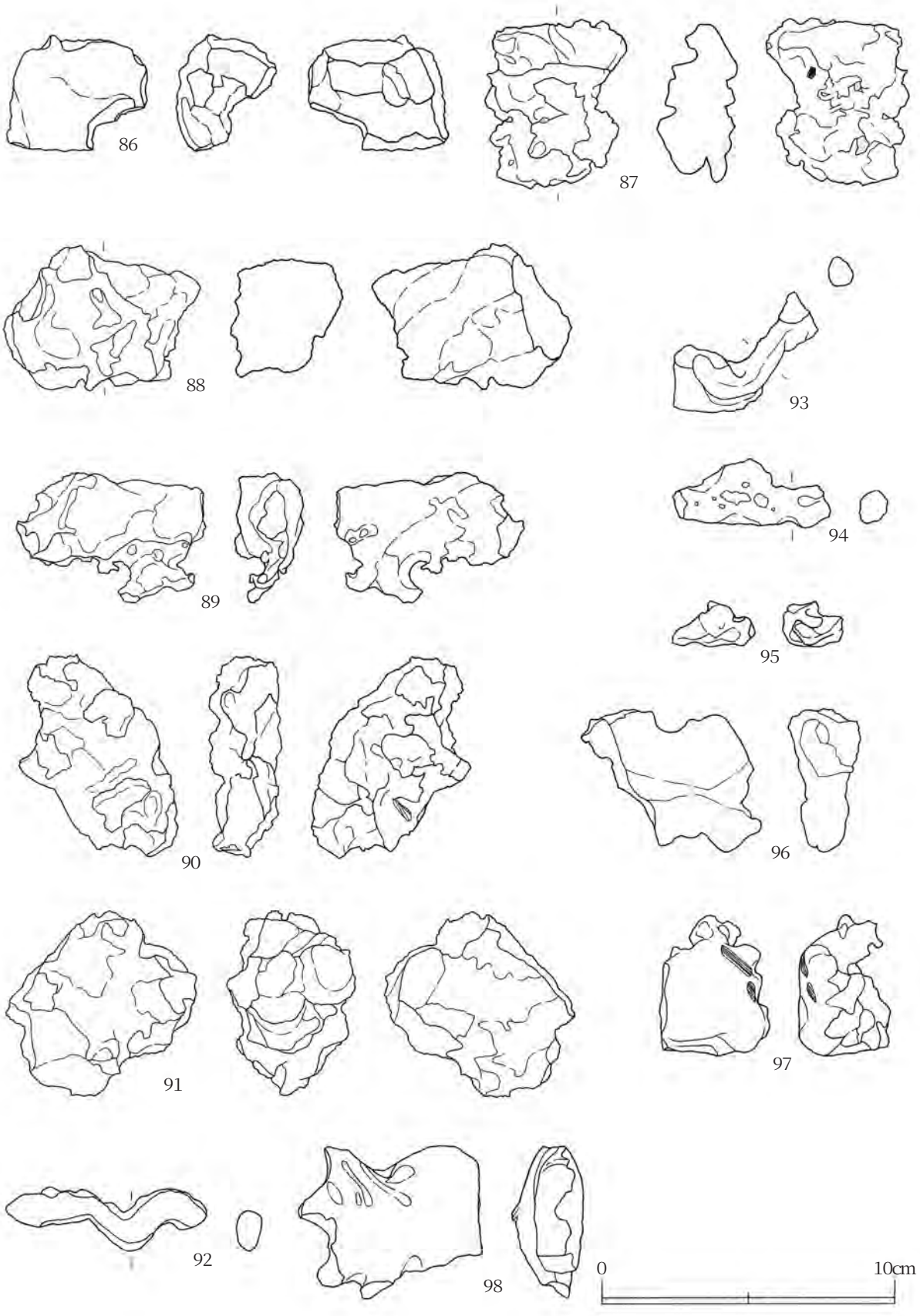
第215図　鉄関連遺物（10）



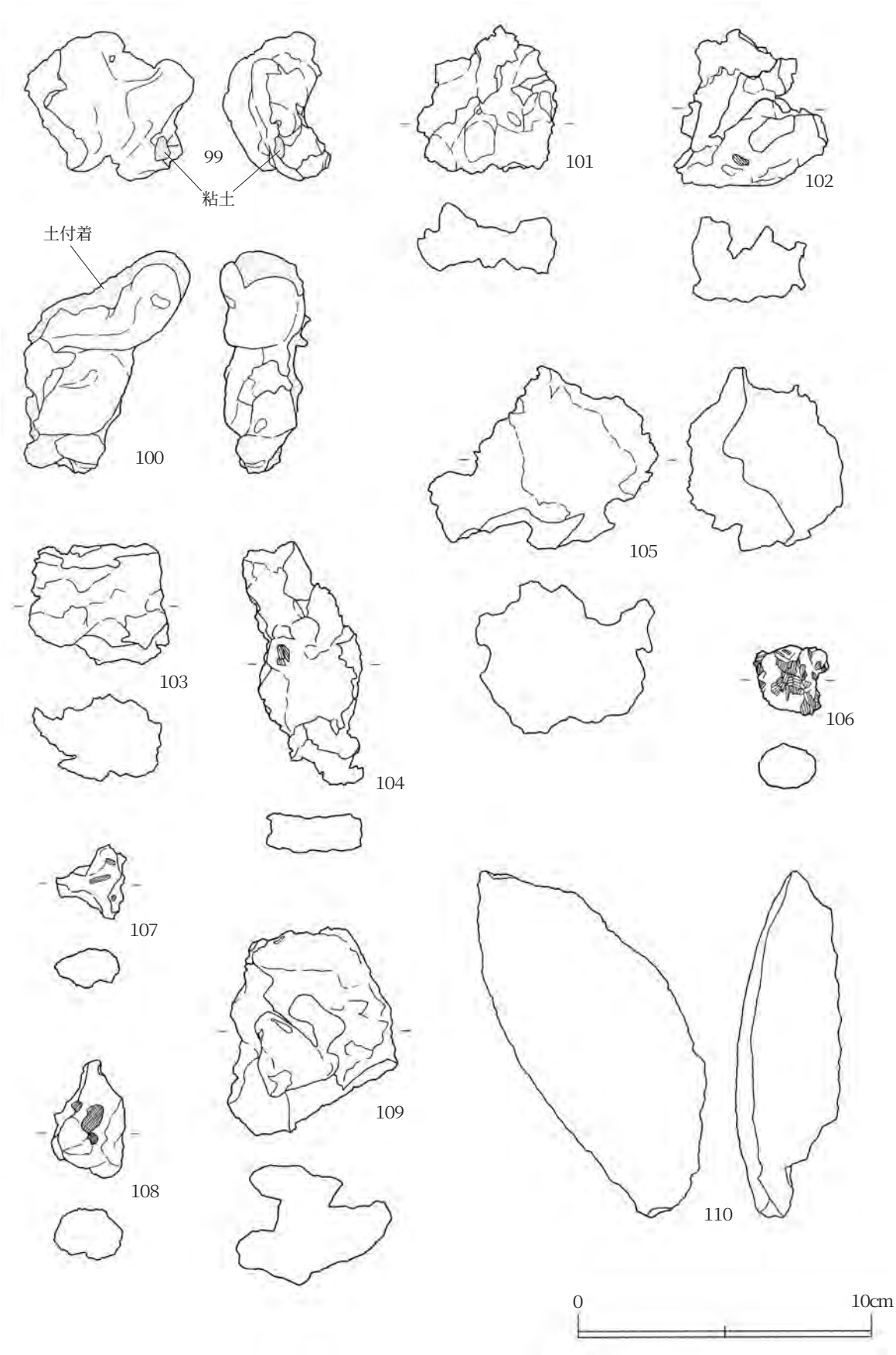
第216図　鉄関連遺物（11）



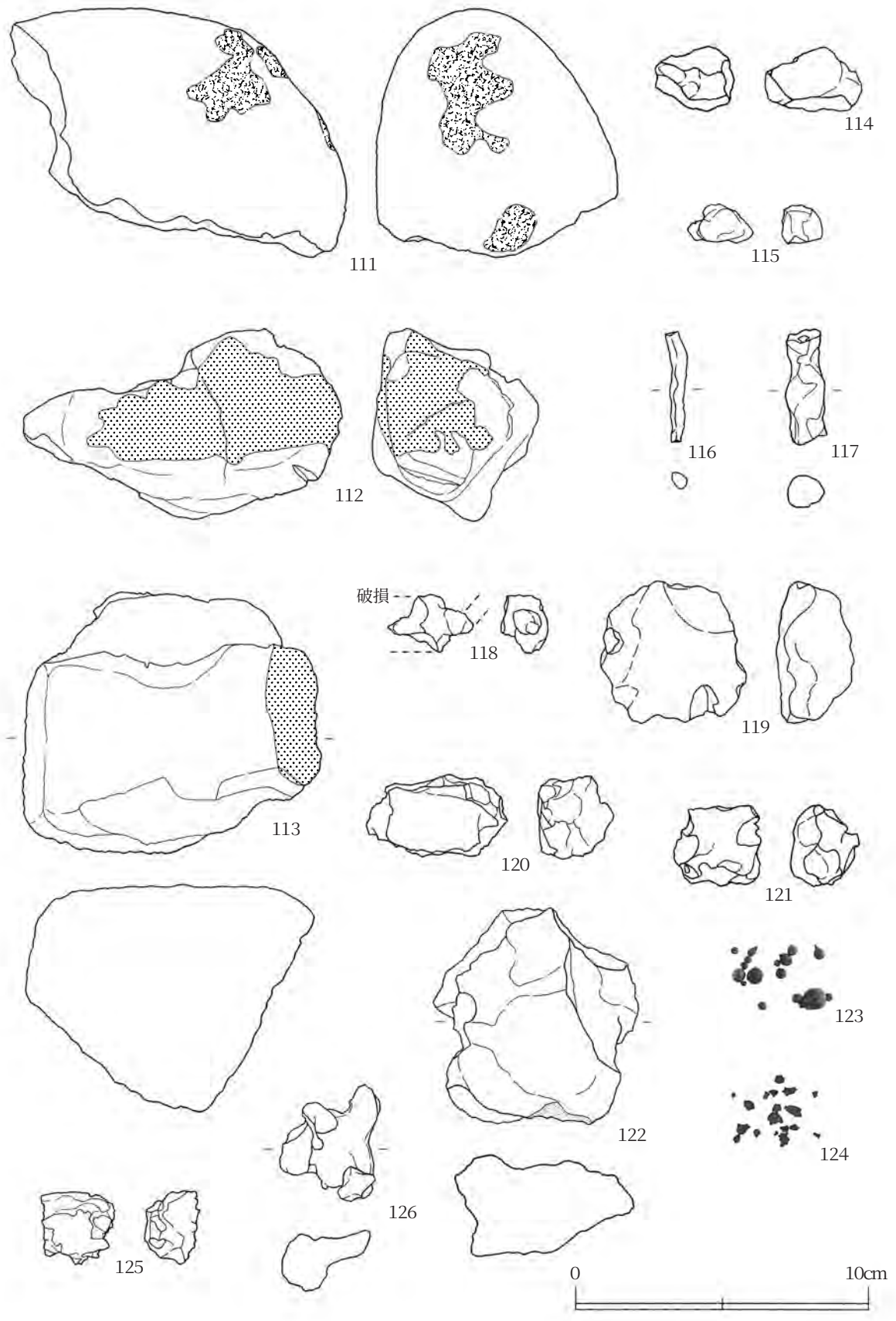
第217図　鉄関連遺物（12）



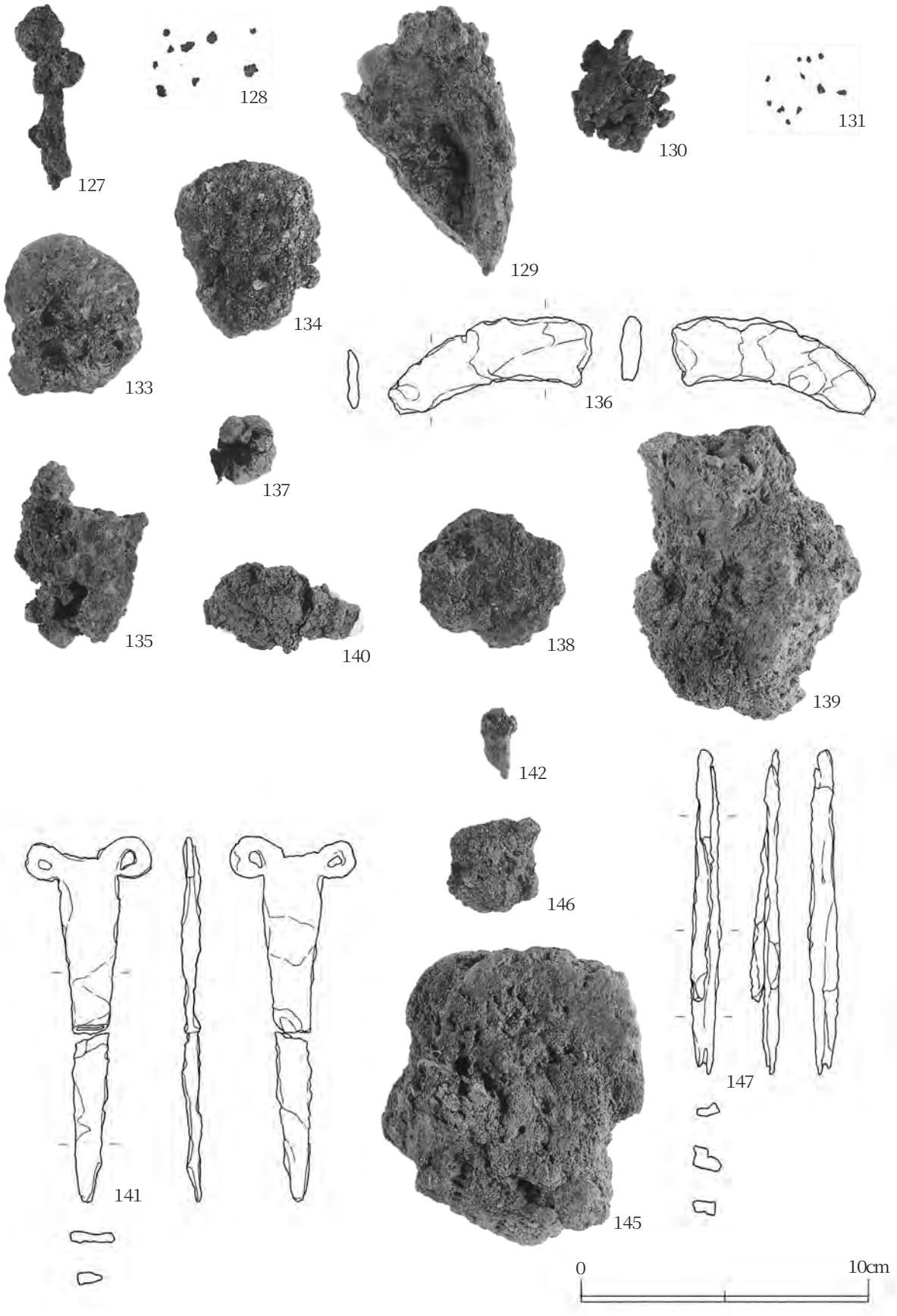
第218図　鉄関連遺物（13）



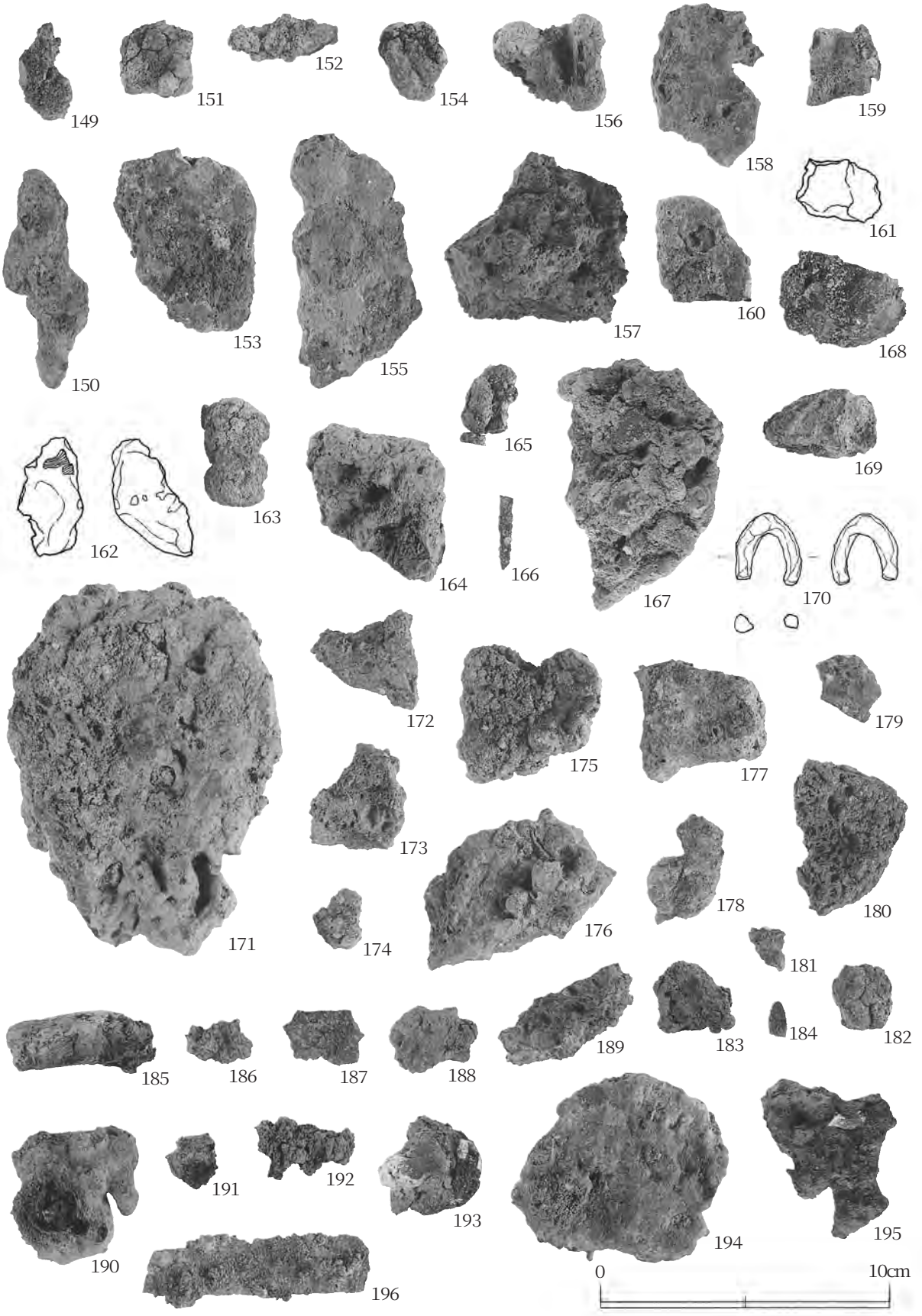
第219図　鉄関連遺物（14）



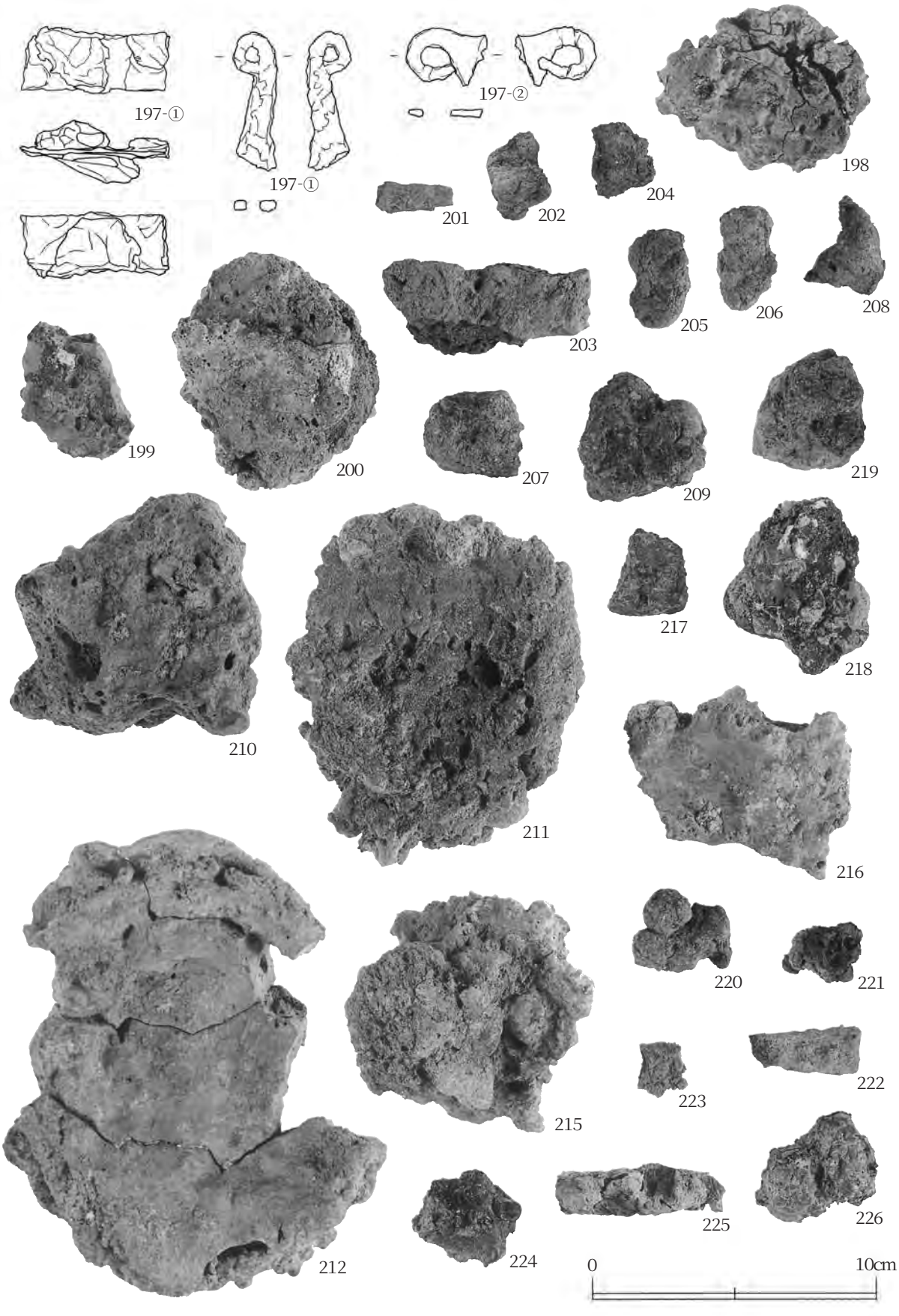
第220図　鉄関連遺物（15）



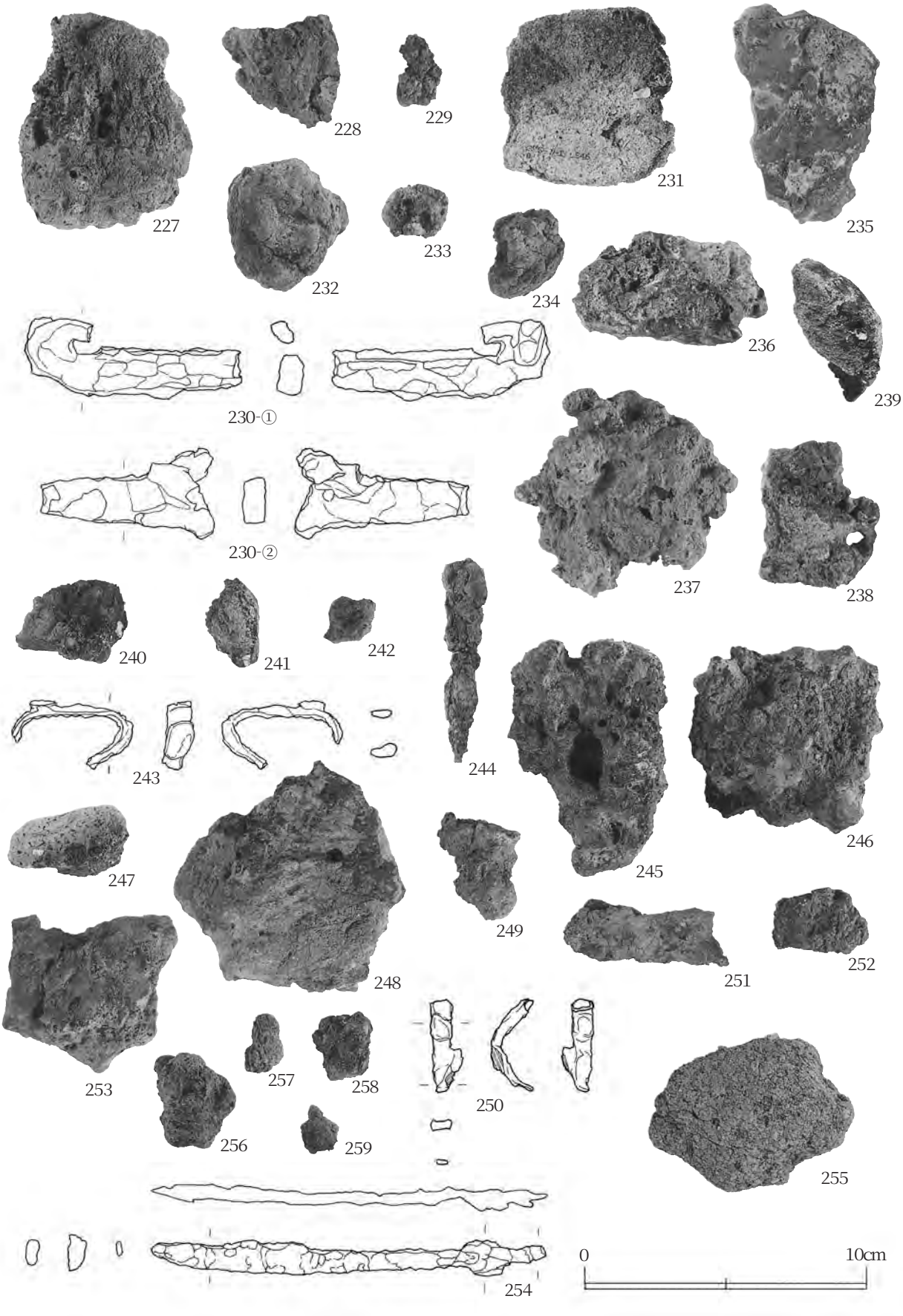
第221図　鉄関連遺物（16）



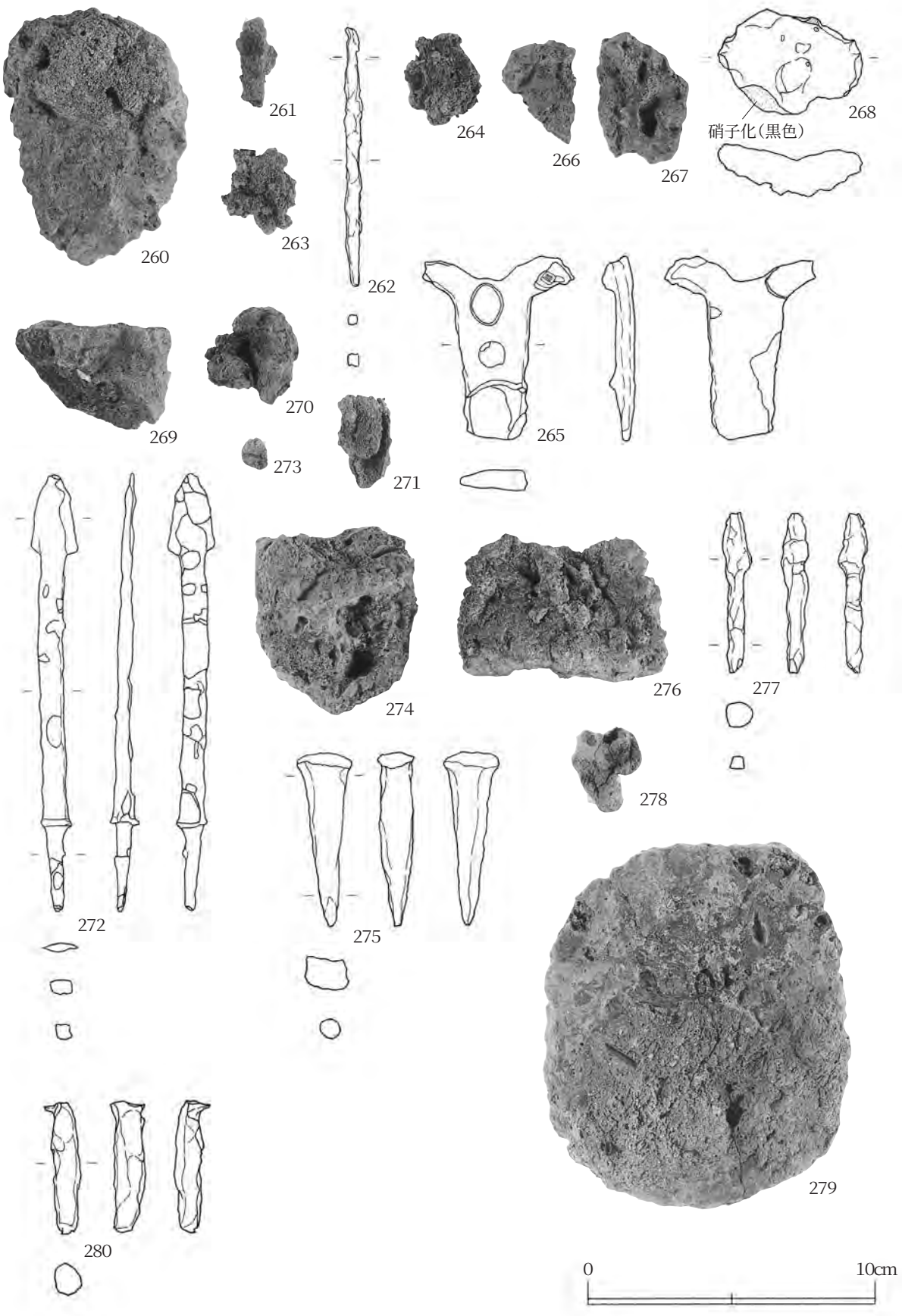
第222図　鉄関連遺物（17）



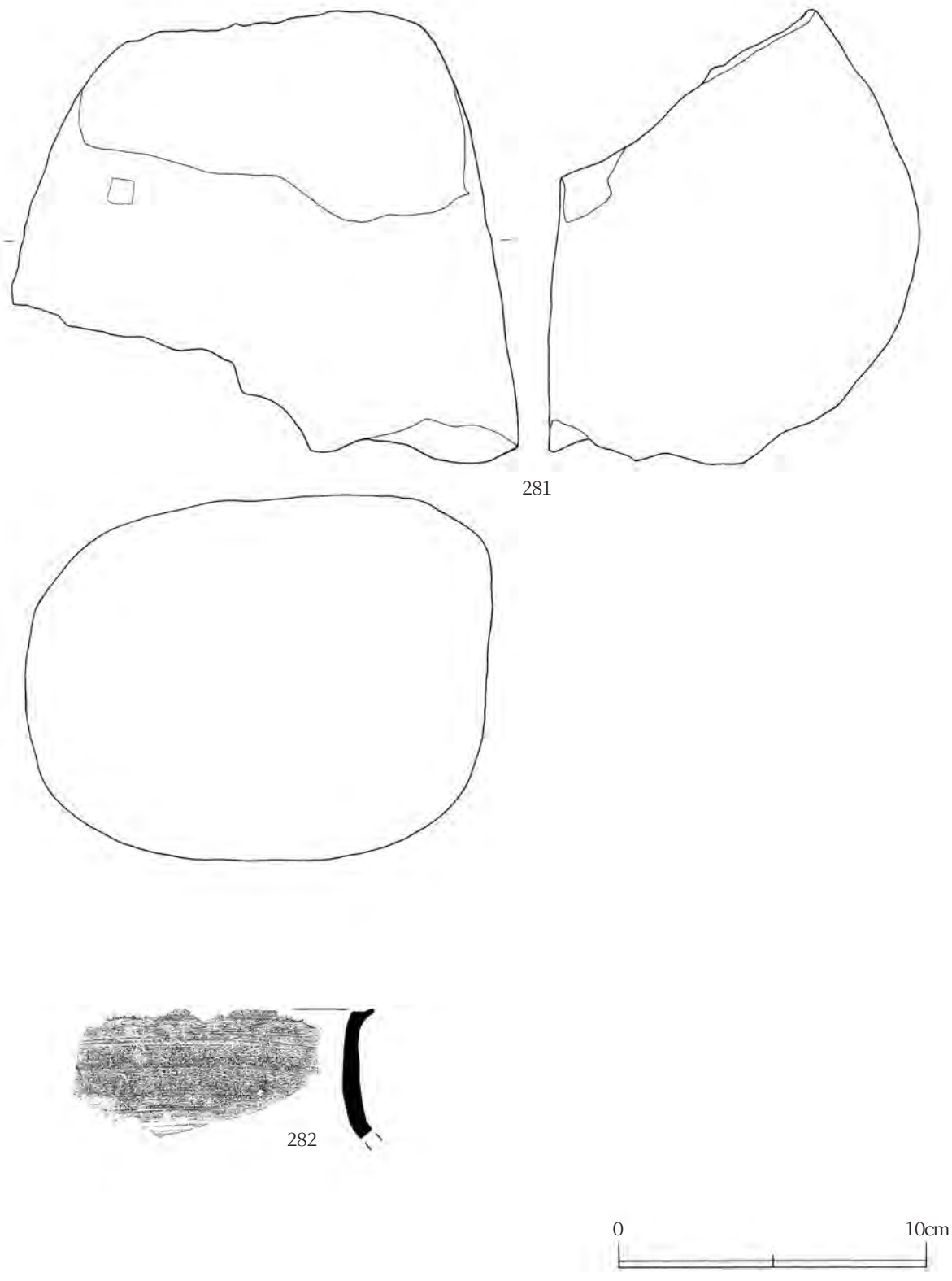
第223図　鉄関連遺物（18）



第224図　鉄関連遺物（19）



第225図　鉄関連遺物（20）



第226図　鉄関連遺物（21）

第38表　製鉄関連一覧（1）

挿図番号	図版番号	構成№	遺構名 出土位置	出土層位	遺　物　名	長さ（㎜）	幅（㎜）	厚さ（㎜）	重量（g）	磁着度	メタル度	特　記　事　項
第206図	－	1	ＳＩ39	覆土	炉壁	85	94	43	129.3	3	なし	内面滓化
第206図	－	2	ＳＩ39	内中央ＳＫ	椀形鍛冶滓(中)	62	48	41	140.0	6	なし	木炭痕
第206図	－	3	ＳＩ127	覆土	椀形鍛冶滓(小)	40	49	41	86.8	4	なし	
第206図	－	4	ＳＫＩ128	覆土	椀形鍛冶滓(小・含鉄)	43	42	38	71.9	6	錆化(△)	
第206図	－	5	ＳＩ129	床面	椀形鍛冶滓(小)	64	65	41	141.3	9	なし	木炭痕、地山付着
第206図	－	6	ＳＩ131	内Pit	鉄製品(鍛造品:器種不明)	33	11	10	3.7	3	錆化(△)	断面四角形
第206図	－	7	ＳＩ132	覆土	椀形鍛冶滓(中・含鉄)	76	63	49	184.7	7	H(○)	
第206図	－	8	ＳＩ132	覆土	鉄製品(鍛造品:刀子？)	25	95	17	26.2	3	H(○)	
第207図	50	9	ＳＩ151	覆土	被熱石	186	132	105	1624	1	なし	凝灰岩､切り出し時の工具痕
第207図	－	10	ＳＩ151	覆土	鉄製品(鍛造品:器種不明)	53	28	13	19.0	4	錆化(△)	保存処理
第207図	－	11	ＳＩ153	覆土	鍛冶滓(含鉄)	19	18	23	9.9	4	H(○)	
第207図	－	12	ＳＫＩ180	覆土	鉄製品(鍛造品:刀子？)	41	46	20	17.6	3	錆化(△)	
第208図	－	13	ＳＫＩ273	覆土	椀形鍛滓(中含鉄)	87	69	57	343	7	H(○)	粘土付着
第208図	50	14	ＳＩ410	覆土	炉内滓？	101	71	38	166	5	なし	裏面に木炭痕、地山礫付着
第208図	－	16	ＳＫＩ888	覆土	椀形鍛冶滓(中含鉄)	72	68	44	284	8	L(●)	粘土付着
第208図	55	17	ＳＫＩ888	覆土	鉄製品(鍛造品:器種不明)	66	15	7	4.4	5	H(○)	断面四角形　保存処理
第208図	－	18	ＳＩ653	覆土	椀形鍛冶滓(極小)	59	52	26	86.5	7	なし	裏面に木炭痕、粘土付着
第208図	－	19	ＳＩ653	覆土	羽口(鍛冶)	40	30	25	14.3	2	なし	小片
第208図	50	20	ＳＩ699	覆土	羽口(鍛冶)	41	81	62	139.9	2	なし	一部滓化
第208図	50	21	ＳＩ699	覆土	椀形鍛冶滓(小)	87	69	30	171.8	5	なし	地山付着
第209図	55	22	ＳＩ777	覆土	鉄製品(鍛造品:鎌)	140	39	7	34	6	H(○)	
第209図	－	23	ＳＩ765	覆土	羽口(鍛冶)	31	36	23	19	2	なし	小片
第209図	－	24	ＳＩ765	覆土	鉄製品(鍛造品:器種不明)	39	41	11	6	5	錆化(△)	保存処理
第209図	－	25	ＳＩ777	覆土	(含鉄)鉄滓	81	68	40	196.4	5	錆化(△)	裏面に木炭痕（多数）
第209図	－	26	ＳＩ777	覆土	羽口(鍛冶)	59	47	27	40.9	3	なし	一部硝子化
第209図	－	27	ＳＩ777	覆土	鉄製品(鍛造品:刀子？)	26	57	21	23.6	5	錆化(△)	
第209図	－	28	ＳＩ777	覆土	鉄製品(鍛造品:器種不明)	37	19	20	8.1	3	錆化(△)	断面四角形
第209図	－	29	ＳＫＩ888	覆土	鉄製品(鍛造品:器種不明)	22	11	8	1.6	4	H(○)	棒状？
第209図	－	30	ＳＫＩ888	覆土	鉄製品(鍛造品:刀子？)	18	33	8	4.8	4	H(○)	幅広？
第209図	－	31	ＳＫＩ888	覆土	鉄製品(鍛造品:器種不明)	63	13	10	6.3	6	H(○)	
第209図	－	32	ＳＫＩ888	覆土	鉄製品(鍛造品:器種不明)	36	42	16	13.9	7	H(○)	
第209図	－	33	ＳＫＩ888	覆土	鉄製品(鍛造品:刀子？)	98	28	19	29.3	7	H(○)	
第210図	－	34	ＳＫＩ888	覆土	羽口(鍛冶)	59	60	25	59	2	なし	
第210図	－	35	ＳＩ1000	覆土	椀形鍛冶滓(小)	89	60	38	152.5	3	なし	裏面に木炭痕､一部粘土付着
第210図	－	36	ＳＩ1000	覆土	鉄製品(鍛造品:刀子？)	19	61	8	9.1	4	錆化(△)	
第210図	－	37	ＳＩ1000・ＳＩ1456	覆土	鉄製品(鍛造品:器種不明)	42	12	18	8.1	5	H(○)	裏面に木炭痕
第210図	－	38	ＳＩ1456	ＳＫ内	鉄塊系遺物	20	41	25	20	7	L(●)	
第210図	－	39	ＳＩ1724	覆土	椀形鍛冶滓(小)	44	74	43	93.5	5	なし	木炭痕
第210図	55	40	ＳＫ２	覆土	鉄製品(鍛造品:刀子)	143	15	10	16	4	錆化(△)	保存処理
第210図	－	41	ＳＫ２	覆土	鉄製品(鍛造品)	22	7	6	0.8	3	錆化(△)	断面四角形
第210図	－	42	ＳＫ147	覆土	鍛冶滓(含鉄)	35	28	26	20.9	6	H(○)	
第210図	－	43	ＳＫ147	覆土	羽口(鍛冶)	45	25	28	14.4	1	なし	焼けた跡、小片
第210図	－	44	ＳＫ178	覆土	鍛冶滓(含鉄)	32	23	21	15.3	4	錆化(△)	
第210図	－	45	ＳＫ186	覆土	椀形鍛冶滓(小)	66	51	39	137	4	なし	一部地山付着
第210図	－	46	ＳＫ226	覆土	鉄製品(鍛造品:刀子？)	19	58	14	8.8	4	錆化(△)	
第210図	55	47	ＳＫ417	覆土	鉄製品(鍛造品:刀子)	17	116	22	18？	6	H(○)	有機物(？)付着､保存処理
第211図	－	48	ＳＫ493	覆土	鍛冶滓(含鉄)	44	24	21	18.5	5	H(○)	
第211図	50	49	ＳＫ514	覆土	椀形鍛冶滓(中)	93	96	52	321	6	錆化(△)	
第212図	50	51	ＳＫ1841	覆土	砥石	178	96	63	1547	1	なし	錆色
第212図	－	52	ＳＮ157	覆土	椀形鍛冶滓(小)	82	61	35	143.8	4	なし	木炭痕（多数）
第212図	－	53	ＳＮ157	覆土	椀形鍛冶滓(小)	53	54	22	49.3	2	なし	木炭痕（多数）
第212図	－	54	ＳＮ157	覆土	椀形鍛冶滓(極小含鉄)	57	32	38	53.3	7	H(○)	
第212図	－	55	ＳＮ208	覆土	椀形鍛冶滓(極小)	30	36	24	22.3	4	なし	裏面に木炭痕
第212図	55	56	ＳＫ225	覆土	鉄製品(鍛造品)	47	6	5	9-？	5	錆化(△)	分離した鉄製品あり､断面四角形･棒状､保存処理
第212図	－	57	ＳＳ900	覆土	炉壁(製錬炉)	58	83	18	49.9	1	なし	
第212図	－	58	ＳＳ200	覆土	炉壁(製錬炉)	73	53	36	85.2	1	なし	
第212図	－	59	ＳＳ200	覆土	炉壁(製錬炉)	68	81	42	123	2	なし	木炭痕

第39表　製鉄関連一覧（２）

挿図番号	図版番号	構成№	遺構名出土位置	出土層位	遺物名	長さ(㎜)	幅(㎜)	厚さ(㎜)	重量(ｇ)	磁着度	メタル度	特記事項
第213図	－	60	ＳＳ200	覆土	炉壁(製錬炉)	40	55	52	60	2	なし	
第213図	－	61	ＳＳ200	覆土	炉壁(製錬炉)	57	62	70	172.9	2	なし	
第213図	50	62	ＳＳ200	覆土	炉壁(製錬炉)	81	63	47	154.3	2	なし	工具痕
第213図	－	63	ＳＳ200	覆土	炉壁(製錬炉)	54	64	42	78.3	1	なし	木炭痕
第213図	50	64	ＳＳ200	覆土	炉壁(製錬炉)	65	106	55	230	3	なし	
第213図	－	65	ＳＳ200	覆土	炉壁(製錬炉)	53	56	41	56	3	なし	
第213図	－	66	ＳＳ200	覆土	炉壁(製錬炉)	59	75	23	41	3	なし	一部滓化
第214図	－	67	ＳＳ200	覆土	炉壁(製錬炉)	86	109	37	125.6	3	なし	滓化
第214図	－	68	ＳＳ200	覆土	炉壁(大口径羽口周辺)	40	62	25	28.7	2	なし	滓化部分剥離､残存部分あり
第214図	51	69	ＳＳ200	覆土	炉壁(大口径羽口周辺)	48	89	25	52.8	2	なし	滓化部分剥離､残存部分あり
第214図	51	70	ＳＳ200	覆土	炉壁(大口径羽口周辺)	77	68	48	121.9	2	なし	残存部分あり、剥離
第214図	－	71	ＳＳ200	覆土	炉壁(砂鉄焼結付き)	39	36	12	10.6	3	なし	砂鉄焼結
第214図	－	72	ＳＳ200	覆土	炉壁(砂鉄焼結付き)	47	53	31	43.6	1	なし	砂鉄焼結
第214図	－	73	ＳＳ200	覆土	炉壁(砂鉄焼結補修)	57	90	33	77.4	1	なし	砂鉄焼結（補修あり）
第215図	51	74	ＳＳ200	覆土	炉壁(砂鉄焼結補修)	78	158	54	311	3	なし	補修部分有り
第215図	51	75	ＳＳ200	覆土	炉壁(砂鉄焼結付補修)	123	176	67	564	1	なし	礫付着
第216図	51	76	ＳＳ200	覆土	炉壁(補修)	158	174	62	774	2	なし	木炭痕、一部硝子化
第216図	51	77	ＳＳ200	覆土	羽口(製錬炉)	60	65	31	51.2	3	なし	木炭痕
第216図	51	78	ＳＳ200	覆土	羽口(製錬炉)	63	53	32	45.3	2	なし	
第217図	51	79	ＳＳ200	覆土	羽口	113	250	108	1540	2	なし	断面Ｄ字型、炉壁側が滓化によって閉塞
第217図	－	81	ＳＳ200	覆土	砂鉄焼結塊	18	21	9	3.1	2	なし	
第217図	－	82	ＳＳ200	覆土	流出孔滓	38	38	23	22	1	なし	地山砂礫付着
第217図	－	83	ＳＳ200	覆土	流出孔滓	30	41	25	32.3	2	なし	
第217図	－	84	ＳＳ200	覆土	流出孔滓	41	55	38	54.3	2	なし	地山砂礫付着
第217図	－	85	ＳＳ200	覆土	流出孔滓	48	47	36	50.2	2	なし	一部粘土付着、木炭痕
第218図	－	86	ＳＳ200	覆土	流出孔滓	39	48	35	55.4	2	なし	
第218図	52	87	ＳＳ200	覆土	流出溝滓	56	46	34	52.2	3	なし	地山砂礫付着
第218図	52	88	ＳＳ200	覆土	流出溝滓	50	68	46	110.8	2	なし	地山砂礫付着
第218図	52	89	ＳＳ200	覆土	炉内流動滓	45	65	24	44.9	2	なし	木炭痕
第218図	52	90	ＳＳ200	覆土	炉内流動滓	67	55	25	61.3	2	なし	木炭痕
第218図	52	91	ＳＳ200	覆土	炉内流動滓	64	66	44	133.6	2	なし	木炭痕
第218図	52	92	ＳＳ200	覆土	流動滓(細)	21	69	14	15.4	1	なし	
第218図	52	93	ＳＳ200	覆土	流動滓(細)	42	50	19	23.5	1	なし	
第218図	52	94	ＳＳ200	覆土	流動滓(細)	24	54	20	14.5	2	なし	
第218図	－	95	ＳＳ200	覆土	流動滓(含鉄)	16	28	21	5.8	2	H(○)	土付着、残存部分有り
第218図	－	96	ＳＳ200	覆土	流動滓(太)	49	54	25	56.8	1	なし	木炭痕
第218図	－	97	ＳＳ200	覆土	流動滓(太)	48	38	32	65.1	1	なし	木炭痕
第218図	52	98	ＳＳ200	覆土	流動滓(太)	52	63	25	83	1	なし	地山砂礫付着
第219図	52	99	ＳＳ200	覆土	流動滓(太)	56	58	37	48.2	1	なし	木炭痕
第219図	52	100	ＳＳ200	覆土	流動滓(太)	75	57	31	69	1	なし	土付着、残存部分有り
第219図	－	101	ＳＳ200	覆土	炉内滓	51	48	24	29	1	なし	
第219図	－	102	ＳＳ200	覆土	炉内滓	54	53	31	62.7	1	なし	木炭痕
第219図	53	103	ＳＳ200	覆土	炉内滓	41	48	34	53.6	2	なし	木炭痕
第219図	53	104	ＳＳ200	覆土	炉内滓	83	42	13	49.4	1	なし	木炭痕、地山砂礫付着
第219図	53	105	ＳＳ200	覆土	炉内滓	63	78	53	147	3	なし	
第219図	－	106	ＳＳ200	覆土	炉内滓(含鉄)	24	25	15	7.6	3	錆化(△)	木炭痕
第219図	－	107	ＳＳ200	覆土	炉内滓(含鉄)	25	24	14	6.2	4	錆化(△)	木炭痕
第219図	－	108	ＳＳ200	覆土	炉内滓(含鉄)	40	25	21	14.1	5	錆化(△)	木炭痕
第219図	53	109	ＳＳ200	覆土	椀形鍛冶滓？(小)	71	58	41	148.9	6	なし	木炭痕
第219図	－	110	ＳＳ200	覆土	鉄床石？	118	78	37	242	3	なし	
第220図	－	111	ＳＳ200	覆土	たたき石(ハンマーストーン)？	85	115	83	816	1	なし	たたき痕有り
第220図	－	112	ＳＳ200	覆土	被熱石(凝灰岩)	65	109	57	132.9	1	なし	被熱有り
第220図	－	113	ＳＳ200	覆土	被熱石(凝灰岩)	90	103	81	272	1	なし	被熱有り
第220図	53	114	ＳＳ210	覆土	炉壁(鍛冶炉)	22	27	33	30	2	なし	
第220図	－	115	ＳＳ451	覆土	炉壁溶解物	13	23	14	1	1	なし	
第220図	－	116	ＳＳ609	覆土	流動滓(鍛冶滓)	38	8	7	2	2	なし	
第220図	－	117	ＳＳ609	覆土	流動滓(鍛冶滓)	40	14	11	13	2	なし	

第40表　製鉄関連一覧（3）

挿図番号	図版番号	構成№	遺構名出土位置	出土層位	遺物名	長さ(㎜)	幅(㎜)	厚さ(㎜)	重量(g)	磁着度	メタル度	特記事項
第220図	－	118	ＳＳ609	覆土	鍛冶滓(含鉄)	20	29	16	18	5	M(◎)	まわり　破損あり
第220図	53	119	ＳＳ763	覆土	炉壁(鍛冶炉)	49	50	27	34	1	なし	南半分
第220図	53	120	ＳＳ763	覆土	炉壁(鍛冶炉)	28	49	26	22	2	なし	南半分
第220図	－	121	ＳＳ763	覆土	鍛冶滓	28	30	24	12	2	なし	
第220図	53	122	ＳＳ763	覆土	椀形鍛冶滓(極小・炉床土付き)	74	71	41	132	1	なし	
第220図	54	123	ＳＳ763	覆土	粒状滓	Φ7						
第220図	－	124	ＳＳ763	覆土	鍛造剥片	－	－	－	－	－	－	
第220図	－	125	ＳＳ888	覆土	椀形鍛冶滓(極小)	25	25	19	11	4	なし	上面出土
第220図	－	126	ＳＳ888	覆土	椀形鍛冶滓(極小)	40	35	30	21	4	錆化(△)	上面出土
第221図	－	127	ＳＳ888	覆土	鉄製品(鍛造品:器種不明)	65	25	6	11	4	錆化(△)	上面出土
第221図	－	128	ＳＳ888	覆土	鍛造剥片	－	－	－	－	－	－	
第221図	－	129	ＳＳ900	覆土	椀形鍛冶滓(極小・炉床土付き)	94	62	19	170	5	H(○)	木炭痕
第221図	54	130	ＳＳ1700	覆土	鍛冶滓	42	36	22	19	4	なし	木炭痕
第221図	－	131	ＳＳ1700	覆土	鍛造剥片	－	－	－	－	－	－	
	－	132	ＳＤ125	覆土	椀形鍛冶滓(小・含鉄)				115.9	5	H(○)	ＲＰ47
第221図	－	133	ＳＤ135	覆土	椀形鍛冶滓(極小)	57	48	22	84.8	3	なし	木炭痕
第221図	－	134	ＳＤ152	覆土	椀形鍛冶滓(小・含鉄)	62	52	18	110.2	6	H(○)	ＬＲ52
第221図	－	135	ＳＤ152	覆土	椀形鍛冶滓(小・含鉄)	65	47	31	67.6	9	H(○)	ＬＲ53
第221図	55	136	ＳＤ152	覆土	鉄製品(鍛造品:鎌)	71	22	8	12	3	H(○)	
第221図	－	137	ＳＤ400	覆土	鍛冶滓(含鉄)	24	23	19	12.3	3	H(○)	
第221図	－	138	ＳＤ507	覆土	椀形鍛冶滓(極小・含鉄)	49	51	23	74.7	7	H(○)	ＬＤ46
第221図	－	139	ＳＤ508	覆土	椀形鍛冶滓(中・含鉄)	103	80	51	392	8	H(○)	ＬＤ48
第221図	－	140	ＳＤ508	覆土	鉄製品(鍛造品:器種不明)	32	55	21	13.1	4	錆化(△)	
第221図	55	141	ＳＤ652	覆土	鉄製品(鍛造品)	127	44	6	19？	3	H(○)	錫杖状鉄製品
第221図	－	142	ＳＤ880	覆土	鉄製品(鍛造品:器種不明)	25	13	8	2.1	4	H(○)	
	－	143	ＳＤ1080	覆土	鉄製品(鍛造品)				6.9	4	錆化(△)	
	－	144	ＳＤ1080	覆土	鉄製品(鍛造品:刀子？)				9	4	H(○)	
第221図	54	145	ＳＤ1410	覆土	椀形鍛冶滓(大・含鉄)	104	93	79	610	7	H(○)	ＬＮ45、木炭痕
第221図	－	146	ＳＤ1704	覆土	鍛冶滓(含鉄)	33	33	25	27.1	6	錆化(△)	ＬＯ46、礫付着
第221図	55	147	ＳＫＩ610	覆土	鉄製品(鍛造品:器種不明)	113	11	10	11？	4	M(◎)	
	－	148	ＳＸ1632	覆土	椀形鍛冶滓(小・含鉄)				217	6	錆化(△)	粘土付着
第222図	－	149	ＳＫＰ267	覆土	鉄製品(鍛造品:器種不明)	34	19	15	8.1	3	錆化(△)	棒状
第222図	－	150	ＳＫＰ507	覆土	鉄製品(鍛造品:器種不明)	76	30	21	28.5	3	錆化(△)	
第222図	－	151	ＳＫＰ1341	覆土	鍛冶滓(含鉄)	26	26	19	21.4	5	L(◎)	
第222図	－	152	ＳＫＰ1542	覆土	鉄製品(鍛造品:刀子？)	17	38	13	4.2	4	錆化(△)	
第222図	－	153	ＳＫＰ1559	覆土	椀形鍛冶滓(極小・含鉄)	63	50	30	96.8	6	H(○)	
第222図	－	154	ＳＫＰ1718	覆土	鍛冶滓(含鉄)	27	24	17	9.1	5	H(○)	
第222図	－	155	ＳＫＰ1718	覆土	椀形鍛冶滓(小)	88	46	33	124.1	7	なし	
第222図	－	156	ＫＳ49	－	炉内滓？(含鉄)	34	40	19	18.2	7	H(○)	
第222図	－	157	ＬＢ46	－	椀形鍛冶滓(小)	61	64	37	146.3	2	なし	一部粘土付着
第222図	－	158	ＬＤ48	ＳＩ777覆土?	椀形鍛冶滓(極小・含鉄)	57	39	18	41	5	H(○)	
第222図	－	159	ＬＤ48	ＳＩ778覆土?	鍛冶滓(含鉄)	28	26	12	11.3	4	H(○)	
第222図	－	160	ＬＤ48	ＳＩ779覆土?	鍛冶滓(含鉄)	37	33	17	27.3	6	H(○)	
第222図	－	161	ＬＤ47	Ⅱ	羽口(鍛冶)	22	30	21	9.1	2	なし	小片
第222図	－	162	ＬＤ47	Ⅱ	羽口(鍛冶)	41	23	28	13.4	2	なし	一部滓化
第222図	－	163	ＬＤ46	－	鍛冶滓(含鉄)	38	24	21	19.7	5	錆化(△)	
第222図	－	164	ＬＤ46	－	椀形鍛冶滓(小・含鉄)	56	48	42	97.7	6	H(○)	一部地山付着
第222図	－	165	ＬＥ48	トレンチ	鉄製品(鍛造品)	25	20	13	7.8	3	なし	
第222図	－	166	ＬＥ48	トレンチ	鉄製品(鍛造品)	26	5	5	0.6	2	錆化(△)	棒状
第222図	－	167	ＬＦ47	－	椀形鍛冶滓(中)	87	58	43	206	5	なし	木炭痕
第222図	－	168	ＬＦ47	－	羽口(鍛冶)	35	44	21	19.3	4	なし	小片
第222図	－	169	ＬＧ55	－	椀形鍛冶滓(極小・含鉄)	24	40	21	29.6	5	H(○)	
第222図	－	170	ＬＧ49	－	鉄製品(鍛造品:環状)	25	23	7	3	3	錆化(△)	
第222図	－	171	ＬＧ47	－	椀形鍛冶滓(中・含鉄)	129	95	49	548.5	7	錆化(△)	粘土付着、木炭痕
第222図	－	172	ＬＧ47	－	椀形鍛冶滓(極小)	35	38	19	25.1	4	なし	
第222図	－	173	ＬＧ47	－	椀形鍛冶滓(極小・含鉄)	37	34	28	37.7	5	H(○)	
第222図	－	174	ＬＧ47	－	鍛冶滓(含鉄)	21	17	9	3.1	4	H(○)	

第41表　製鉄関連一覧（４）

挿図番号	図版番号	構成№	遺構名出土位置	出土層位	遺物名	長さ（㎜）	幅（㎜）	厚さ（㎜）	重量（ｇ）	磁着度	メタル度	特記事項
第222図	－	175	ＬＧ46	－	椀形鍛冶滓(極小・含鉄)	48	50	27	59.6	7	H(○)	一部地山付着
第222図	－	176	ＬＨ54	－	椀形鍛冶滓(小)	56	67	37	111.7	4	なし	木炭痕
第222図	－	177	ＬＨ48	－	椀形鍛冶滓(極小・含鉄)	43	44	23	41.6	5	H(○)	
第222図	－	178	ＬＨ47	Ⅱ	鍛冶滓(含鉄)	38	31	15	11.5	4	H(○)	
第222図	－	179	ＬＨ46	－	流動滓？(含鉄)	24	24	12	7.7	4	錆化(△)	
第222図	－	180	ＬＫ54	－	椀形鍛冶滓(極小・含鉄)	54	37	19	31.4	5	H(○)	
第222図	－	181	ＬＫ48	－	鍛冶滓(含鉄)	15	13	13	2.1	4	H(○)	
第222図	－	182	ＬＫ48	－	鍛冶滓(含鉄)	23	22	17	8.5	5	H(○)	
第222図	－	183	ＬＫ48	Ⅱ	鍛冶滓(含鉄)	25	28	22	12.7	6	H(○)	
第222図	－	184	ＬＫ48	－	鉄製品(鍛造品)	13	6	4	0.4	3	H(○)	
第222図	－	185	ＬＫ47	－	羽口(鍛冶)	22	52	25	17.6	1	なし	小片、一部硝子化
第222図	－	186	ＬＫ47	－	鍛冶滓(含鉄)	16	24	16	6.3	4	H(○)	
第222図	－	187	ＬＫ47	－	鍛冶滓(含鉄)	20	28	16	12.1	4	H(○)	
第222図	－	188	ＬＫ47	Ⅱ	鍛冶滓(含鉄)	24	30	18	13.2	6	H(○)	
第222図	－	189	ＬＬ54	－	椀形鍛冶滓(極小)	35	48	18	1.1	1	なし	
第222図	－	190	ＬＬ49	Ⅱ	椀形鍛冶滓(極小・含鉄)	48	45	21	38.8	5	H(○)	
第222図	－	191	ＬＬ48	－	鍛冶滓(含鉄)	20	18	15	3.1	2	H(○)	
第222図	－	192	ＬＬ48	－	鍛冶滓(含鉄)	22	35	26	8.5	5	H(○)	
第222図	－	193	ＬＬ47	－	羽口(鍛冶)	35	36	16	13.7	1	なし	小片
第222図	－	194	ＬＬ47	－	椀形鍛冶滓(小・含鉄)	67	77	27	171.3	7	H(○)	
第222図	－	195	ＬＭ54	－	椀形鍛冶滓(極小・含鉄)	55	47	15	35.3	6	H(○)	木炭痕
第222図	－	196	ＬＭ53	－	鉄製品(鍛造品：刀子？)	25	79	14	14.1	6	H(○)	
第223図	55	197	ＬＭ52	－	鉄製品(鍛造品：錫杖状鉄製品)	①49	13	5	25	5	H(○)	197－②　53×24×23
第223図	－	198	ＬＭ51	－	椀形鍛冶滓(小・含鉄)	60	76	26	124.8	5	H(○)	
第223図	－	199	ＬＭ49	－	椀形鍛冶滓(極小)	49	54	22	57	5	なし	
第223図	－	200	ＬＭ48	－	椀形鍛冶滓(中・二段・含鉄)	84	78	63	365	6	H(○)	
第223図	－	201	ＬＭ47	－	鉄製品(鍛造品：刀子？)	11	28	6	3.4	6	H(○)	
第223図	－	202	ＬＮ51	－	鍛冶滓(含鉄)	32	14	17	9	5	H(○)	
第223図	－	203	ＬＮ48	－	椀形鍛冶滓(中・含鉄)	34	74	39	130.4	7	H(○)	
第223図	－	204	ＬＯ48	－	鍛冶滓(含鉄)	27	23	21	13.8	6	H(○)	木炭痕
第223図	－	205	ＬＯ48	Ⅱ	鉄製品(鍛造品：不明)	35	22	20	13.6	4	錆化(△)	
第223図	－	206	ＬＯ47	－	鉄製品(鍛造品：不明)	37	21	16	13.4	4	なし	
第223図	－	207	ＬＯ46	－	椀形鍛冶滓(極小・含鉄)	31	36	20	19.1	4	H(○)	
第223図	－	208	ＬＯ45	－	鍛冶滓(含鉄)	35	29	21	11.4	4	H(○)	
第223図	－	209	ＬＰ44	Ⅱ	椀形鍛冶滓(小・含鉄)	46	46	36	82.4	8	H(○)	木炭痕
第223図	－	210	ＬＱ53	－	椀形鍛冶滓(含鉄)	87	88	36	446	8	H(○)	
第223図	－	211	ＬＱ53	－	椀形鍛冶滓(含鉄)	129	106	48	529	4	H(○)	木炭痕
第223図	－	212	ＬＱ53	－	椀形鍛冶滓(特大・含鉄)	165	136	34	1183	3	なし	粘土付着　粒状滓付着
第223図	－	213	－	－	椀形鍛冶滓(特大・含鉄)	－	－	－	－	－	－	212に結合
第223図	－	214	－	－	椀形鍛冶滓(特大・含鉄)	－	－	－	－	－	－	212に結合
第223図	－	215	ＬＱ53	－	椀形鍛冶滓(中・含鉄)	85	88	45	337	10	M(◎)	木炭痕
第223図	－	216	ＬＱ53	－	椀形鍛冶滓(小・含鉄)	69	82	27	155.9	7	なし	木炭痕
第223図	－	217	ＬＱ46	－	椀形鍛冶滓	31	28	20	23.8	3	なし	
第223図	－	218	ＬＱ46	－	椀形鍛冶滓	63	53	42	119.7	4	なし	
第223図	－	219	ＬＱ46	－	椀形鍛冶滓(極小・含鉄)	44	40	29	68.5	6	H(○)	
第223図	－	220	ＬＱ46	－	鍛冶滓(含鉄)	30	35	14	22.8	4	H(○)	
第223図	－	221	ＬＱ46	－	鉄塊系遺物	23	26	18	12.6	5	H(○)	
第223図	－	222	ＬＱ46	－	鉄製品(鍛造品：刀子？)	18	40	9	7	5	L(●)	
第223図	－	223	ＬＲ50	－	鉄製品(鍛造品：刀子？)	20	18	7	1.9	4	H(○)	
第223図	－	224	ＬＲ46	Ⅱ	羽口(鍛冶)	35	39	33	25.4	3	なし	小径・小片
第223図	－	225	ＬＲ46	－	鉄製品(鍛造品：不明)	60	18	15	12.8	3	なし	木質部あり
第223図	－	226	ＬＲ44	Ⅱ	流動滓？	43	41	28	33.1	2	なし	
第224図	－	227	ＬＳ53	－	椀形鍛冶滓(小・含鉄)	77	62	27	142.3	7	H(○)	木炭痕
第224図	－	228	ＬＳ52	－	椀形鍛冶滓(極小・含鉄)	41	43	26	54.5	9	H(○)	
第224図	－	229	ＬＳ52	－	鍛冶滓(含鉄)	26	16	16	4.9	4	H(○)	
第224図	56	230	ＬＳ49	－	鉄製品(鍛造品：不明)	①29	78	17	63	5	L(●)	Ⅰ　②33×62×20裏面に木炭痕

第42表　製鉄関連一覧（5）

挿図番号	図版番号	構成№	遺構名 出土位置	出土層位	遺物名	長さ（㎜）	幅（㎜）	厚さ（㎜）	重量（g）	磁着度	メタル度	特記事項
第224図	－	231	ＬＳ46	－	羽口(鍛冶)	64	62	41	73.9	1	なし	一部硝子化
第224図	－	232	ＬＳ46	－	椀形鍛冶滓(極小・含鉄)	48	44	30	65.3	6	Ｌ(●)	
第224図	－	233	ＬＳ46	－	鍛冶滓(含鉄)	19	24	18	7.1	5	Ｈ(○)	木炭痕
第224図	－	234	ＬＳ46	－	鉄塊系遺物	33	27	28	29.3	5	Ｌ(●)	
第224図	－	235	ＬＳ45	－	流動滓(含鉄)	79	53	25	132.8	4	Ｈ(○)	
第224図	－	236	ＬＳ45	－	椀形鍛冶滓(極小)	40	70	28	70.8	4	なし	
第224図	－	237	ＬＴ52	－	椀形鍛冶滓(小・含鉄)	35	80	42	205	9	Ｈ(○)	
第224図	－	238	ＬＴ46	－	椀形鍛冶滓(極小・含鉄)	53	43	23	42.9	5	Ｈ(○)	
第224図	－	239	ＬＴ45	－	羽口(鍛冶)	50	32	30	43.4	2	なし	一部硝子化、小径
第224図	－	240	ＬＴ45	トレンチ	羽口(鍛冶)	30	40	50	43.2	3	なし	小径
第224図	－	241	ＭＡ44	トレンチ	羽口(鍛冶)	32	20	43	18.4	3	なし	小径
第224図	－	242	ＭＡ44	－	鍛冶滓(含鉄)	12	19	19	5.7	3	Ｈ(○)	
第224図	56	243	ＭＢ50	－	鉄製品(鍛造品:不明)	25	43	11	4	5	錆化(△)	環状
第224図	－	244	ＭＢ48	－	鉄製品(鍛造品:不明)	73	12	15	10.8	2	錆化(△)	棒状
第224図	－	245	ＭＢ47	－	椀形鍛冶滓(小)	85	58	36	155.8	7	なし	木炭痕
第224図	－	246	ＭＢ45	－	椀形鍛冶滓(小)	68	70	37	168.4	5	なし	木炭痕
第224図	－	247	ＭＢ45	－	羽口(鍛冶)	26	44	35	18.9	2	なし	
第224図	－	248	ＭＣ49	－	椀形鍛冶滓(小・含鉄)	83	83	27	163	7	Ｈ(○)	
第224図	－	249	ＭＣ49	－	鍛冶滓(含鉄)	40	30	17	11	4	Ｈ(○)	
第224図	－	250	ＭＣ48	－	鉄製品(鍛造品)	33	11	3	4	6	錆化(△)	環状
第224図	－	251	ＭＣ45	－	鉄製品(鍛造品:不明)	24	59	17	15.1	9	Ｈ(○)	
第224図	－	252	ＭＣ45	－	椀形鍛冶滓(極小・含鉄)	24	35	21	18.9	5	Ｈ(○)	
第224図	－	253	ＭＣ44	トレンチ	椀形鍛冶滓(小・含鉄)	57	63	31	100.1	8	Ｈ(○)	木炭痕
第224図	56	254	ＭＤ47	－	鉄製品(鍛造品:刀子)	141	14	9	12.2	5	錆化(△)	
第224図	－	255	ＭＤ46	Ⅱ	羽口(鍛冶)	58	73	34	74.3	2	なし	
第224図	－	256	ＭＤ46	－	鍛冶滓(含鉄)	34	32	26	14.6	7	Ｈ(○)	
第224図	－	257	ＭＤ46	－	鍛冶滓(含鉄)	22	14	11	2.6	4	Ｈ(○)	
第224図	－	258	ＭＥ48	－	鍛冶滓(含鉄)	25	22	14	5.6	3	Ｈ(○)	
第224図	－	259	ＭＥ47	－	含鉄鉄滓	18	14	9	1.4	4	Ｈ(○)	
第225図	－	260	ＭＥ44	トレンチ	椀形鍛冶滓(中)	90	65	37	251	10	Ｈ(○)	
第225図	－	261	ＭＦ47	－	鉄製品(鍛造品:不明)	32	15	12	3.8	6	Ｈ(○)	
第225図	56	262	ＭＦ45	－	鉄製品(鍛造品:不明)	92	6	7	8	6	Ｌ(●)	棒状
第225図	－	263	ＭＧ47	－	含鉄鉄滓	31	26	18	11.1	6	Ｈ(○)	
第225図	－	264	ＭＧ47	－	鍛冶滓(含鉄)	32	28	20	12.2	4	Ｈ(○)	
第225図	56	265	ＭＧ46	－	鉄製品(鍛造品:錫杖状)	65	53	12	23.6	9	Ｈ(○)	
第225図	－	266	ＭＨ43	－	椀形鍛冶滓(極小・含鉄)	37	26	22	22.1	5	Ｈ(○)	ＭＨ～ＭＩ43・44
第225図	－	267	ＭＪ45	－	椀形鍛冶滓(極小・含鉄)	46	32	21	36.8	8	Ｈ(○)	
第225図	－	268	ＭＫ44	ＳＫＩ2064・2065盛土	羽口(鍛冶)	37	51	20	19.2	2	なし	硝子化（黒色）
第225図	－	269	ＭＫ44	ＳＫＩ2064・2066盛土	椀形鍛冶滓(小)	38	55	34	68.7	5	なし	
第225図	－	270	ＭＬ46	－	鍛冶滓(含鉄)	35	33	21	22.8	5	Ｈ(○)	
第225図	－	271	ＭＬ45	－	鉄製品(鍛造品:不明)	33	19	20	6.9	7	Ｈ(○)	
第225図	56	272	ＭＬ45	－	鉄製品(鍛造品:鉄鏃)	152	10	16	20.1	7	特Ｌ(☆)	
第225図	－	273	ＭＬ45	－	鍛冶滓(含鉄)	10	9	7	0.9	2	Ｈ(○)	
第225図	－	274	ＭＬ44	ＳＫＩ2064・2066盛土	椀形鍛冶滓(中)	66	57	43	202	5	なし	木炭痕
第225図	56	275	ＭＭ48	－	鉄製品(鍛造品:釘？楔？)	61	19	12	14.2	5	Ｈ(○)	
第225図	－	276	ＭＯ48	－	椀形鍛冶滓(小・含鉄)	52	74	35	155.9	6	なし	
第225図	56	277	ＭＰ47	－	鉄製品(鍛造品:鉄鏃？)	56	10	11		4	錆化(△)	
第225図	－	278	表採	－	鍛冶滓(含鉄)	30	25	17	10.3	5	Ｈ(○)	
第225図	－	279	表採	－	椀形鍛冶滓(大)	128	106	41	630	5	錆化(△)	木炭痕
第225図	56	280	２トレ	－	鉄製品(鍛造品:不明)	46	13	12	50	6	Ｍ(◎)	環状
第226図	－	281	ＳＳ200	－	鉄床石(前庭部)	147	164	120	2650	－	－	被熱
第226図	－	282	ＳＳ609	－	須恵器	42	－	－	－	－	－	

第３章　自然科学的分析

第１節　鴨巣Ⅰ・Ⅱ遺跡における遺構の年代について

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

秋田県能代市鴨巣Ⅰ・Ⅱ遺跡は、米代川左岸に位置する幟山丘陵北西端部の標高50～80m前後の台地上に立地する。今回の発掘調査により、板塀に囲まれた平安時代(10世紀頃)の集落跡が確認され、竪穴住居跡をはじめとして、堀立柱建物跡、土坑、精錬炉、鍛冶炉、板塀跡等の遺構が検出されている。

今回の分析調査では、各遺構の構築・使用年代に関する資料を得るため、出土した炭化材の放射性炭素年代測定を行い、さらに遺構覆土中から検出されたテフラについて同定を実施する。

１．試料

放射性炭素年代測定の対象とする試料は、試料番号１～５の５点の炭化材である。これらのうち、試料番号１と２は、上述した平安時代の集落を構成したと考えられている竪穴住居跡から出土、試料番号４と５は、同時期の鍛冶炉から出土したものである。また、試料番号３は、時期不明とされている炭焼き遺構から出土した炭化材である。各試料の出土した遺構名等は、測定結果を呈示した表１に併記する。

テフラ分析の対象とされた試料は、平安時代の集落を構成する竪穴住居跡ＳＩ764の覆土から採取された。発掘調査所見によれば、このテフラ層は住居跡全体を覆うものではないが、住居跡中心付近に広がっており、その断面の記載では、床面との間に若干の間層が認められている。また、重複する竪穴住居跡のＳＩ1400によって切られている状況も認められる。なお、試料の外見は、黄褐色を呈する砂質シルトである。

２．分析方法

（１）放射性炭素年代測定

測定は加速器質量分析法（ＡＭＳ法）により行った。なお、放射性炭素の半減期はLibbyの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One-Sigma）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM-CALIB REV5.0（Copyright 1986－2005 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、いずれの試料も北半球の大気圏における暦年校正曲線を用いる条件を与えて計算させている。

（２）テフラ分析

試料約20ｇを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察

する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。

火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の３タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。さらに火山ガラスについては、その屈折率を測定することにより、テフラを特定するための指標とする。屈折率の測定は、古澤（1995）のMAIOTを使用した温度変化法を用いた。

３．結果

（１）放射性炭素年代

放射性炭素年代測定結果を表１、暦年較正結果を表２に示す。試料番号３を除く４点の試料では、補正年代で概ね1100BPから1200BPに集中する傾向がある。試料番号３では1550BPを示し、他の試料に比べてやや古い年代である。較正された暦年代では、試料番号３を除く４点の試料は、８世紀から10世紀までの年代幅に含まれ、試料番号３はこれらよりやや古い５～６世紀の年代となる。

（２）テフラ分析

処理後に得られた砂分は、多量の細砂～極細砂径の火山ガラスから構成される。火山ガラスは無色透明のバブル型が多く、それよりやや少量の無色透明の軽石型も混在する。軽石型には塊状および繊維束状のものが認められる。

火山ガラスの屈折率測定結果を図１に示す。ｎ1.517～1.522のレンジに入り、ｎ1.519付近にモードがある。

４．考察

今回の放射性炭素年代測定で得られた年代は、５点のうちの４点までが、較正暦年で８～10世紀という年代であった。これらの試料のうち、２点は竪穴住居跡床面やカマド焚き口から採取されたものであり、２点は鍛冶炉から採取されたものである。このような測定試料の出土状況および遺物の年代観などから集落の形成年代が10世紀であることを考慮すれば、今回得られた年代測定値は集落が営まれていた時期に関わる年代を示すと考えて良い。なお、他の試料よりも古い年代となった試料番号３の採取された炭焼き遺構は、発掘調査所見で時期不明とされており、平安時代の集落よりも以前の時期における遺構である可能性のあることを示している。

一方、テフラ分析試料は、細粒の火山ガラスを主体とするテフラである。上述した砕屑物の特徴および鴨巣Ⅰ・Ⅱ遺跡の地理的位置と、これまでに研究された東北地方におけるテフラの産状（町田ほか（1981；1984）、Arai et al.(1986)、町田・新井（2003）など）との比較から、そのテフラは、白頭山苫小牧テフラ（B－Tm）に同定される。B－Tmは、10世紀に中国と北朝鮮の国境に位置する白頭山から噴出したテフラであり、岩手・秋田県北部以北と北海道のほぼ全域で確認されている（町田ほか，1981；町田・新井，2003)。なお、その詳細な噴出年代については、早川・小山（1998）が歴史記録の解釈から、西暦946年としている。ただし、14C年代や年輪年代および湖成層の年縞などの研究成果とは必ずしも一致していず、町田・新井(2003)は未解決であるとしている。いずれにしても、

ＳＩ763におけるテフラの産状は、ＳＩ763が廃絶された後に降灰があったことを示しており、その後ＳＩ1400が構築されたことを示していると考えられる。

以上に述べた炭化材の放射性炭素年代およびテフラの産状は、集落の年代が10世紀頃とする発掘調査所見を支持していると言える。

引用文献

Arai, F.・Machida, H.・Okumura, K.・Miyauchi, T.・Soda, T.・Yamagata, K, 1986, Catalog for late quaternary marker-tephras in JapanⅡ－Tephras occurring in Northeast Honshu and Hokkaido－. Geographical reports of Tokyo Metro politan University No. 21, 223－250.

古澤　明，1995，火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別．地質学雑誌，101，123－133.

早川由紀夫・小山真人，1998，日本海をはさんで10世紀に相次いで起こった二つの大噴火の年月日－十和田湖と白頭山－．火山，43，403－407.

町田　洋・新井房夫，2003，新編　火山灰アトラス．東京大学出版会，336ｐ.

町田　洋・新井房夫・森脇　広，1981，日本海を渡ってきたテフラ．科学，51，562－569.

町田　洋・新井房夫・杉原重夫・小田静夫・遠藤邦彦，1984，テフラと日本考古学－考古学研究と関連するテフラのカタログ－．渡辺直経（編）古文化財に関する保存科学と人文・自然科学．同朋舎，865－928.

表１．放射性炭素年代測定結果

試料番号	種類	出　土　遺　構	補正年代 BP	δ13C（‰）	測定年代 BP	Code. No.
1	炭化材	ＳＩ145　床面	1105±20	−25.40±0.12	1115±20	21
2	炭化材	ＳＩ653　カマド焚き口付近	1225±20	−24.93±0.16	1225±20	22
3	炭化材	ＳＫ２　炭焼き遺構	1550±20	−25.17±0.15	1550±20	23
4	炭化材	ＳＳ900　鍛冶炉底面	1140±20	−24.53±0.11	1130±20	24
5	炭化材	ＳＳ1700　鍛冶炉２層	1195±20	−24.30±0.11	1185±20	25

１）年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
２）BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
３）付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

表２．暦年較正結果

試料番号	出　土　遺　構	補正年代（BP）	暦年較正年代（cal）			相対比	Code No.
1	ＳＩ145　床面	1107±22	σ	cal AD　897 − cal AD　922 cal AD　942 − cal AD　975	cal BP 1,053 − 1,028 cal BP 1,008 − 975	0.427 0.573	21
			2σ	cal AD　892− cal AD　986	cal BP 1,058 − 964	1.000	
2	ＳＩ653　カマド焚き口付近	1227±22	σ	cal AD　720− cal AD　741 cal AD　769− cal AD　784 cal AD　787− cal AD　825 cal AD　841− cal AD　861	cal BP 1,230 − 1,209 cal BP 1,181 − 1,166 cal BP 1,163 − 1,125 cal BP 1,109 − 1,089	0.217 0.178 0.413 0.192	22
			2σ	cal AD　694− cal AD　703 cal AD　706− cal AD　748 cal AD　765− cal AD　880	cal BP 1,256 − 1,247 cal BP 1,244 − 1,202 cal BP 1,185 − 1,070	0.025 0.230 0.746	
3	ＳＫ２　炭焼き遺構	1549±22	σ	cal AD　437− cal AD　489 cal AD　513− cal AD　516 cal AD　530− cal AD　551	cal BP 1,513 − 1,461 cal BP 1,437 − 1,434 cal BP 1,420 − 1,399	0.673 0.028 0.299	23
			2σ	cal AD　431− cal AD　564	cal BP 1,519 − 1,386	1.000	
4	ＳＳ900　鍛冶炉底面	1140±21	σ	cal AD　886− cal AD　900 cal AD　918− cal AD　963	cal BP 1,064 − 1,050 cal BP 1,032 − 987	0.250 0.750	24
			2σ	cal AD　784− cal AD　787 cal AD　818− cal AD　842 cal AD　861− cal AD　977	cal BP 1,166 − 1,163 cal BP 1,132 − 1,108 cal BP 1,089 − 973	0.004 0.042 0.954	
5	ＳＳ1700　鍛冶炉２層	1197±21	σ	cal AD　781− cal AD　792 cal AD　806− cal AD　870	cal BP 1,169 − 1,158 cal BP 1,144 − 1,080	0.148 0.852	25
			2σ	cal AD　775− cal AD　888	cal BP 1,175 − 1,062	1.000	

１）計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.0（Copyright 1986−2005 M Stuiver and PJ Reimer）を使用
２）計算には表に示した丸める前の値を使用している。
３）１桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、１桁目を丸めていない。

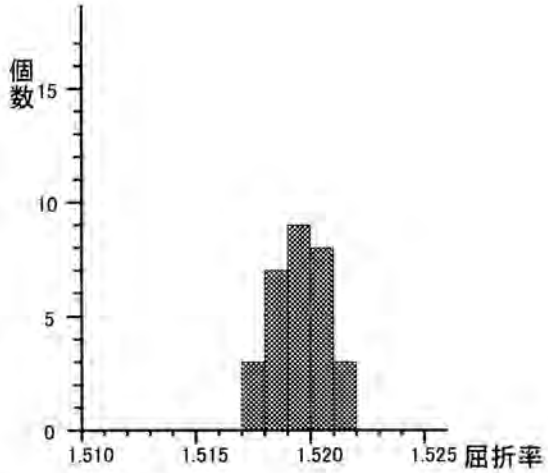


図 1. 火山ガラスの屈折率

図版1　火山ガラス

1. B-Tmの火山ガラス（SI764竪穴住居跡覆土）

0.2mm

第２節　鴨巣Ⅰ・Ⅱ遺跡の自然科学分析調査

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

鴨巣Ⅰ・Ⅱ遺跡は、米代川左岸の幟山丘陵北西端部の台地上に立地する。今回の発掘調査により、板塀に囲まれた平安時代（10世紀）の集落跡に伴う竪穴住居跡、堀立柱建物跡、土坑、精錬炉、鍛冶炉、板塀跡等の遺構が検出されている。

今回の分析調査では、各遺構の構築・使用年代や木材利用状況に関する資料を得るため、出土した炭化材の放射性炭素年代測定と樹種同定を実施する。さらに、検出された土坑の性格推定のための資料として、土坑内より出土した骨片の同定を実施する。

Ⅰ．炭化材の年代と樹種

１．試料

試料は、各遺構から出土した炭化材・炭化物14点（試料番号１－14）である。炭化物は、実体顕微鏡で観察したところ、全て炭化材であった。これらの炭化材のうち、放射性炭素年代測定は、試料番号１－12の12点について実施する。樹種同定は、ＳＩ50から出土した炭化材を中心に試料番号１，２，13，14の４点について実施する。なお、放射性炭素年代測定を実施する試料番号３－12の10点についても、測定前に実体顕微鏡で可能な範囲で同定を実施した。

２．分析方法

（１）放射性炭素年代測定

測定は株式会社加速器分析研究所の協力を得て、加速器質量分析法（ＡＭＳ法）により行った。なお、放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4（Copyright 1986－2002 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、いずれの試料も北半球の大気圏における暦年校正曲線を用いる条件を与えて計算させている。

（２）樹種同定

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

３．結果

放射性炭素年代測定および樹種同定結果を表１、暦年較正結果を表２に示す。炭化材の年代測定値は、補正年代で1020BPから1270BPに集中する傾向があるが、試料番号３では860BPであり、他とはやや値が離れている。一方、炭化材の樹種は、試料番号１，２，13，14の４点はいずれも針葉樹で２種類（スギ・ヒノキ科）に同定された。また、年代測定試料（試料番号３－12）は、試料番号５で組織の観察ができず、種類不明である。また、組織は観察できたが、実体顕微鏡での観察のため種類の

同定に至らなかった試料が３試料（試料番号７，９，10）ある。その他の炭化材は、針葉樹１種類（ヒノキ科）と広葉樹２種類（クリ・ケヤキ）に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

・スギ（*Cryptomeria japonica*（L. f.）D. Don）　　スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞の壁は滑らか。分野壁孔はスギ型で、１分野に２－４個。放射組織は単列、１－15細胞高。

・ヒノキ科（Cupressaceae）

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められるが顕著ではない。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、１－10細胞高。

・クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）　　ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は２－４列、孔圏外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。放射組織は同性、単列、１－15細胞高。

・ケヤキ（*Zelkova serrata*（Thunb.）Makino）　　ニレ科ケヤキ属

環孔材で、孔圏部は１－２列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、１－８細胞幅、１－60細胞高。放射組織の上下縁辺部を中心に結晶細胞が認められる。

４．考察

（１）年代測定

炭化材の年代測定値は、補正年代で1020BPから1270BPに集中する傾向があるが、試料番号３では860BPであり、他とはやや値が離れている。値を丸める前の補正年代値を用いて計算した暦年較正値は、試料番号１，２，４－12がcal AD692－1024であった。一方、試料番号３はcal AD1159－1223，1233－1238であり、暦年較正値でも他試料とは年代が離れている。試料番号12，４－12の暦年較正値をみると、竪穴住居跡から出土した試料番号６，11，12は、樹種も同一で年代もほぼ同時期を示している。試料番号１，２，４も針葉樹ではあるが、試料番号６，11，12とほぼ同じ時期を示している。試料番号５，７，９，10は暦年較正値が近い値を示すが、試料番号12，４，６，11，12よりはやや新しい時期を示している。

以上を整理すると、年代測定の結果からは、試料番号３、試料番号12，４，６，11，12、試料番号５，７，９，10の３時期が認められる。しかし、これが遺構の構築時期を示すのか、樹齢の誤差などによるものかは不明である。今後出土遺物との比較と共に、一遺構内で複数の試料について年代測定を実施し、測定値の比較も行う必要がある。

（２）木材利用

試料番号１は板塀跡、試料番号２，13，14は焼失家屋跡（ＳＩ50）から出土している。ＳＩ50の炭化材は、試料番号13が東隅付近の壁際、試料番号２が北隅に近い北東壁の壁近く、試料番号14が試料番号２より住居中央部寄りで出土している。実測図を見ると、試料番号２，14は板状を呈する。全て

針葉樹材であり、板塀の炭化材がヒノキ科、焼失家屋跡の炭化材がスギとヒノキ科であった。この結果から、板塀や焼失家屋跡で針葉樹材のスギやヒノキ科が利用されていたことが推定される。

スギは木理が通直で割裂性が高く、加工は容易である。ヒノキ科にはヒノキ属のヒノキ、サワラ、アスナロ属のアスナロと変種のヒノキアスナロなど有用材が多い。現在のヒノキ科の分布や用途等を考慮するとアスナロ（変種のヒノキアスナロを含む）の可能性がある。アスナロは、木理が通直で割裂性が高く、加工が容易で耐水性が高い。

ＳＩ50の炭化材に板状を呈する試料が認められることを考慮すると、割裂性が高く加工が容易なスギやヒノキ科等の針葉樹材を板状を呈する部材に利用していた可能性がある。ＳＩ50では、今回同定を行った他にも炭化材が出土していることから、今後それらの炭化材についても樹種同定を行い、部位や形状による樹種の違いがあるか等の検討を行うことがのぞまれる。

Ⅱ．骨片の同定

１．試料

方形土坑ＳＫ161では、骨片が散在した状態で出土しており、これら出土骨に試料番号１－24の番号が付されている。この内、試料番号16が同定試料として選択された。いずれも土壌が付着した状態にあり、１試料中に複数点の骨片が認められる。

２．分析方法

試料は、保存状態が極めて悪く、土壌を除去すると極めて微細な破片となることから、そのままの状態で肉眼観察することにし、形態的特徴から種と部位の同定を行った。なお、同定は、金子浩昌先生の協力を得た。

３．結果および考察

同定の結果、頭骨片、肋骨片、脛骨片、腓骨片、四肢骨片が確認される。いずれも人骨とみられる。出土骨は、いずれも白色を呈しており、表面に細かなひび割れが生じ、骨片自体も微細な破片となっている。馬場ほか（1986）を参考にすると、人骨を焼いた際、600℃以下ではほとんど変化がなく、800℃付近では灰白色になり、収縮・硬化が見られ、歯のエナメル質が崩壊し歯冠が失われる等、最も激しく変化するとされている。

以上のことから、ＳＫ161には、火葬された人骨が埋葬されていたと思われる。なお、被葬者の性別、年齢、体躯など個体情報について、今回試料の保存状態から推定することは困難である。

引用文献

馬場　悠男・茂原　信生・阿部　修二・江藤　盛治，1986，根古屋遺跡出土の人骨・動物骨．霊山根古屋遺跡の研究　－福島県霊山町根古屋における再葬墓群－，福島県霊山町教育委員会，93－113.

表１．放射性炭素年代測定および樹種同定結果

番号	遺　　構	試料の質	樹　　種	補正年代 BP	δ13C（‰）	測定年代 BP	Code. No.
1	ＳＡ152－Ｐ７（板塀跡）	炭化材	ヒノキ科	1190±30	－22.79±0.72	1150±30	IAAA－41173
2	ＳＩ50－17（焼失家屋）	炭化材	スギ	1270±30	－20.60±0.63	1200±30	IAAA－41174
3	ＳW12（炭窯）	炭化材	クリ	860±30	－24.17±0.59	840±30	IAAA－41175
4	ＳＩ31（焼失家屋）	炭化材	ヒノキ科	1200±30	－25.33±0.58	1210±30	IAAA－41176
5	ＳＩ99（竪穴住居跡カマド）	炭化材	不明	1130±30	－24.67±0.60	1120±30	IAAA－41177
6	ＳＩ126（竪穴住居跡カマド）	炭化材	ケヤキ	1160±30	－27.18±0.62	1200±30	IAAA－41178
7	ＳＩ129（竪穴住居跡カマド）	炭化材	広葉樹（環孔材）	1140±30	－24.76±0.83	1140±30	IAAA－41179
8	ＳK161（土坑）	炭化材	クリ	1020±30	－25.63±0.96	1040±30	IAAA－41180
9	ＳＳ200（製鉄炉前庭部）	炭化材	針葉樹	1090±30	－24.10±0.78	1080±30	IAAA－41181
10	ＳＳ452（鍛冶炉）	炭化材	広葉樹（環孔材）	1050±30	－26.27±0.76	1070±30	IAAA－41182
11	ＳＩ500（竪穴住居跡カマド）	炭化材	ケヤキ	1150±30	－26.69±0.65	1180±30	IAAA－41183
12	ＳW200（炭窯）	炭化材	ケヤキ	1160±30	－25.28±0.64	1170±30	IAAA－41184
13	ＳＩ50－16（焼失家屋）	炭化材	ヒノキ科	－	－	－	－
14	ＳＩ50－８・18（焼失家屋）	炭化材	ヒノキ科	－	－	－	－

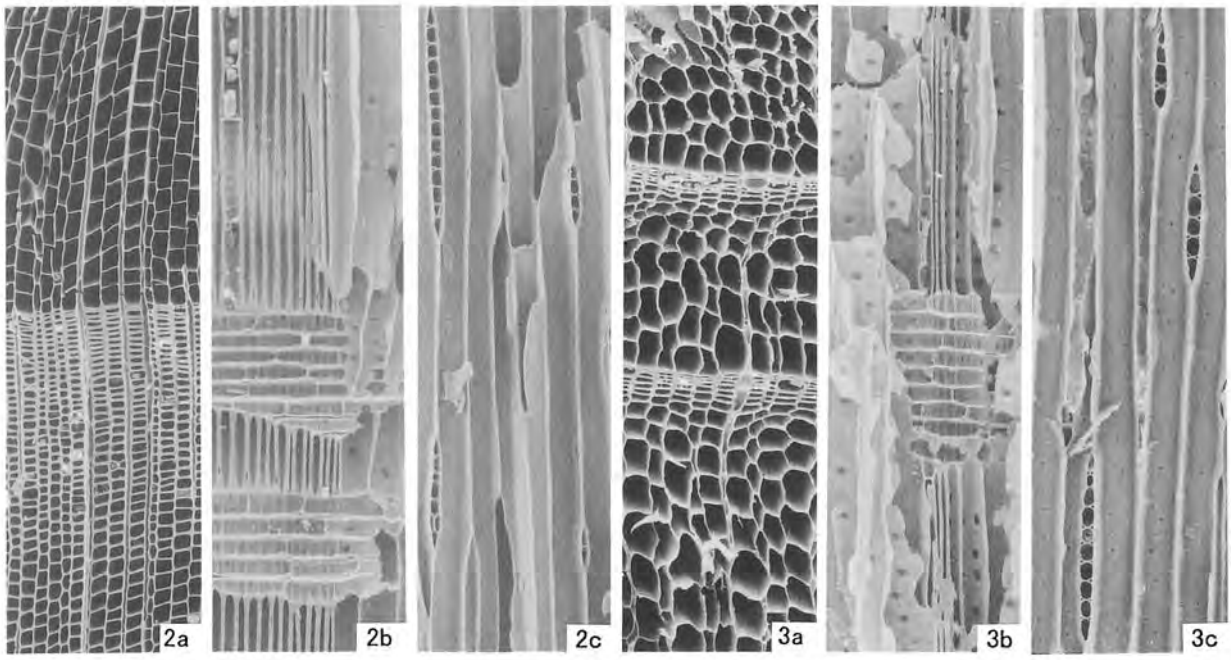
１）年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
２）BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
３）付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

表２．暦年較正結果

番号	遺　　構	試料の質	試料名	補正年代（BP）	暦年較正年代（cal）		相対比	Code No.
1	ＳA152－Ｐ７（板塀跡）	炭化材	ヒノキ科	1190±31	cal AD 781 － cal AD 792	cal BP 1,158 － cal BP 1,169	0.129	IAA－519
					cal AD 808 － cal AD 886	cal BP 1,064 － cal BP 1,142	0.871	
2	ＳＩ50－17（焼失家屋）	炭化材	スギ	1269±31	cal AD 692 － cal AD 703	cal BP 1,247 － cal BP 1,258	0.144	IAA－519
					cal AD 709 － cal AD 753	cal BP 1,197 － cal BP 1,241	0.612	
					cal AD 758 － cal AD 775	cal BP 1,175 － cal BP 1,192	0.244	
3	ＳW12（炭窯）	炭化材	クリ	858±30	cal AD 1,159 － cal AD 1,223	cal BP 727 － cal BP 791	0.965	IAAA－41173
					cal AD 1,233 － cal AD 1,238	cal BP 712 － cal BP 717	0.035	
4	ＳＩ31（焼失家屋）	炭化材	ヒノキ科	1204±31	cal AD 780 － cal AD 784	cal BP 1,166 － cal BP 1,170	0.045	IAAA－41174
					cal AD 787 － cal AD 832	cal BP 1,118 － cal BP 1,163	0.512	
					cal AD 837 － cal AD 876	cal BP 1,074 － cal BP 1,113	0.443	
5	ＳＩ99（竪穴住居跡カマド）	炭化材	不明	1129±31	cal AD 891 － cal AD 904	cal BP 1,046 － cal BP 1,059	0.181	IAAA－41175
					cal AD 915 － cal AD 976	cal BP 974 － cal BP 1,035	0.819	
6	ＳＩ126（竪穴住居跡カマド）	炭化材	ケヤキ	1164±31	cal AD 782 － cal AD 791	cal BP 1,159 － cal BP 1,168	0.085	IAAA－41176
					cal AD 812 － cal AD 843	cal BP 1,107 － cal BP 1,138	0.264	
					cal AD 857 － cal AD 898	cal BP 1,052 － cal BP 1,093	0.415	
					cal AD 921 － cal AD 944	cal BP 1,006 － cal BP 1,029	0.221	
					cal AD 954 － cal AD 955	cal BP 995 － cal BP 996	0.014	
7	ＳＩ129（竪穴住居跡カマド）	炭化材	広葉樹（環孔材）	1139±36	cal AD 884 － cal AD 977	cal BP 973 － cal BP 1,066	1.000	IAAA－41177
8	ＳK161（土坑）	炭化材	クリ	1024±34	cal AD 986 － cal AD 1,024	cal BP 926 － cal BP 964	1.000	IAAA－41178
9	ＳＳ200（製鉄炉前庭部）	炭化材	針葉樹	1090±31	cal AD 898 － cal AD 921	cal BP 1,029 － cal BP 1,052	0.374	IAAA－41179
					cal AD 956 － cal AD 995	cal BP 955 － cal BP 994	0.626	
10	ＳＳ452（鍛冶炉）	炭化材	広葉樹（環孔材）	1051±31	cal AD 978 － cal AD 1,020	cal BP 930 － cal BP 972	1.000	IAAA－41180
11	ＳＩ500（竪穴住居跡カマド）	炭化材	ケヤキ	1147±31	cal AD 784 － cal AD 788	cal BP 1,162 － cal BP 1,166	0.029	IAAA－41181
					cal AD 832 － cal AD 837	cal BP 1,113 － cal BP 1,118	0.040	
					cal AD 876 － cal AD 904	cal BP 1,046 － cal BP 1,074	0.290	
					cal AD 915 － cal AD 976	cal BP 974 － cal BP 1,035	0.641	
12	ＳW200（炭窯）	炭化材	ケヤキ	1161±32	cal AD 782 － cal AD 790	cal BP 1,160 － cal BP 1,168	0.066	IAAA－41182
					cal AD 818 － cal AD 842	cal BP 1,108 － cal BP 1,132	0.204	
					cal AD 859 － cal AD 899	cal BP 1,051 － cal BP 1,091	0.392	
					cal AD 920 － cal AD 957	cal BP 993 － cal BP 1,030	0.338	

１）計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4（Copyright 1986－2002 M Stuiver and PJ Reimer）を使用
２）計算には表に示した丸める前の値を使用している。
３）付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

図版1　火山ガラス・炭化材



2. スギ(試料番号2)　a:木口, b:柾目, c:板目
3. ヒノキ科(試料番号1)　a:木口, b:柾目, c:板目

200μm: 2·3a
200μm: 2·3b,c
0.2mm: 1

第４章　まとめ

鴨巣Ⅰ・Ⅱ遺跡の２か年に及ぶ調査によって、本遺跡が平安時代の大集落の一部であること、それと共に幾つかの注目される点を持つことが明らかになった。以下で、それらの点について述べまとめとしたい。

１　鴨巣Ⅰ・Ⅱ遺跡の年代について

本遺跡の時期や存続期間については、出土遺物や竪穴住居覆土から検出した火山灰が手がかりとなる。

最初に遺物から推測される年代であるが、出土遺物のほとんどが土師器、須恵器であり、中でも土師器の占める割合が高い。

土師器の特徴は、坏が内外面にロクロナデによる調整痕、底部に回転糸切りによる切り離し痕がみられ、内面に黒色処理を施したものも少なくない。坏以外には皿（耳皿）、甕、鉢、ナベなどの器種がみられ、把手付土器はみられない。皿には柱状高台付の皿が、甕の中には、タタキ目を持つ長胴甕が少数ではあるがみられる。以上土師器の特徴から推測される年代は、10世紀前葉から10世紀後葉にかけての10世紀代に収まるものとみられる。

須恵器は、甕や壺が中心で坏は１点のみである。器形や胎土のちがいから、複数の窯で生産されたものが混在している可能性がある。中には五所川原産のものに近い可能性があるものが含まれるが、十分な調査を行うことができなかったため現段階では不明である。これらの土器の他に、細片ではあるが緑釉陶器（６点）が出土し、10世紀前葉の東濃産と近江産のものであるとの鑑定を受けている。

次に竪穴住居覆土から検出された火山灰から推測される年代であるが、第２章の報告のとおり、ＳＩ764中央部の覆土中で検出されている。住居の中央付近にレンズ状に堆積している状態から、住居廃絶後に形成された窪地に二次堆積したものと推測される。この火山灰は分析の結果、白頭山苫小牧火山灰（Ｂ－ＴＭ）であることが判明した。この火山灰は十和田ａ火山灰よりもやや新しく、噴出年代が940年前後とされている。これにより少なくとも940年前後以前にＳＩ764が廃絶されていたことがわかる。この竪穴住居の覆土をみると、火山灰直下の18層は、人為的要素が含むものの、竪穴の掘り込み内に厚く・均一に堆積した状態（掘り込みを充填するような状態）にはなく、壁際から中心部に向かってなだらかに下るような堆積状態を示している。この状態から、18層は流れ込みによって堆積した層と考えられる。このため、住居の廃絶から18層の堆積、火山灰の堆積までには、ある程度の期間が必要だったと考えられる。また、ＳＩ764は壁柱穴の数か所で重複がみられるほか、カマドの造り替えも行われていることから、他の住居と同じくらいかそれ以上の使用期間があったものと推測される。以上のとおり、住居の廃絶から火山灰の堆積までの時間と住居の使用期間を併せて考えると、この住居が使用された時期は10世紀第一四半期末頃まで遡る可能性が高いといえる。周辺遺構との重複関係では、この住居に堆積したＢ－ＴＭを切ってＳＩ1400が構築されているため、少なくともＢ－ＴＭ降下後も集落が継続して営まれていたことがわかる。ちなみにＢ－ＴＭの遺跡内での検出頻度は少

なく、凹地状の地形や沢状の地形で僅かに確認できた程度である。遺跡内の地勢は平坦地（調査区西側）と緩斜面（調査区東側）に二分されるため、共に地形の影響で、風に飛ばされたり、斜面を流れ下ったりと降下した火山灰が堆積しにくかったことが考えられる。なお、遺跡内から十和田ａとみられる火山灰は検出されなかった。

以上、遺物の特徴や火山灰などの出土状況から、鴨巣Ⅰ・Ⅱ遺跡における平安時代の集落は、10世紀前葉に始まり11世紀を待たずして終焉を迎えたと推測される。

2　棚田状の平坦面と遺跡の広がりについて（第227図）

調査区内では、東端付近が最も標高が高く、約70ｍの高さがある。そこに高さ約５ｍのタワーを建て周囲を望むと、北西方向には能代市街や米代川の河口部、北方には白神山地を見渡すことができる。この東端部から南側の調査区外に進むと、大館遺跡、縄手下遺跡へと延びる台地の中で最も標高の高い85ｍの頂きがある。現在は植林による杉林になっているため見通しが悪いが、当時はかなり広範囲を見渡すことができたと思われる。この頂きの近くには小さな窪地がある。他遺跡の調査例から、埋没しきらない何らかの遺構の可能性が考えられる。これより西側に広がる斜面には複数の段状の平坦面が確認できる。本調査区に見られる棚田状の平坦面はそのうちの幾つかである。このため、平坦面の分布範囲が遺跡の広がりを示すものと考えられる。踏査の結果、その広がりは調査区の北端付近から調査区外南側200ｍほどの沢まで及ぶことが判明した。その面積は、おおよそ50,000㎡になると見られる。この他にもこの台地には、不自然な人工的な平坦面を確認することができるため、遺跡の広がりはさらに大きくなる可能性も考えられる。

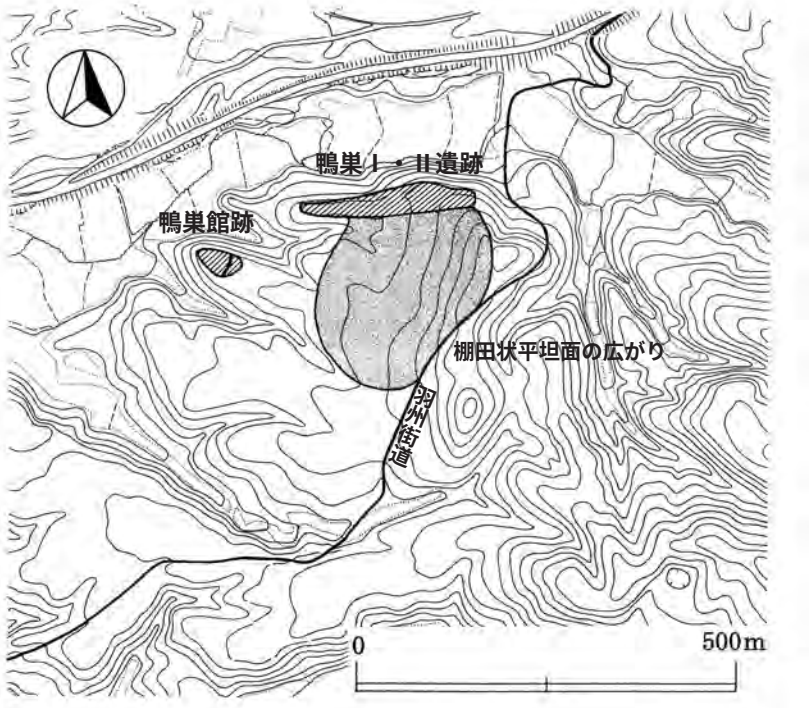
この棚田状平坦面は、竪穴住居の建て替えが行われていった結果として残されたものと考えることもできるが、斜面を有効利用するために集落の造営当初からある程度計画的に造られた（地ならしされた）可能性が高い。それは住居の建て替えが平坦面間の斜面にはほとんどみられず、限られた広さの平坦面の（幅の）中でそれぞれ行われている状態が確認できるからである。また、傾斜地にある集落内でスムーズで安全な移動を行うためには、一定の整地や秩序ある住居配置は不可欠であったと考えられる。平坦面は、調査区内ではＡ～Ｈのおおよそ８面確認できるが、この面は消長はあるものの調査区外南側にも広く及ぶことが踏査によって判明した。調査区内には北東から南西方向に広がる埋没沢があるが、そこには、平安時代以前の無遺物層であるⅤ層黒色シルトの上に褐色シルトが堆積している。この褐色シルトは、主に沢上方の平坦面の造成（整地）や大型遺構の掘削の際に排出された土（Ⅵ、Ⅶ層由来土）と考えられるが、不安定な沢地を埋めるための積極的な行為として行われた可能性もある。この褐色シルトの中には遺物がほとんど含まれないことから、集落が開かれ始めた頃の排土と考えられる。

3　調査区西側住居群と東側住居群の変遷について（第228・229図）

立地は西側住居群が平坦面、東側住居群が緩斜面という違いがある。両地区における住居構造を比較するとカマド煙道の形状に違いがみられる。西側では、煙道が短かく急角度で立ち上がるものがほとんどであるのに対し、東側では、床面と同じくらいの深さで長い煙道を持つ住居が一定数みられる。これらの住居の多くからは、砂礫を多く含み表面がざらつく土師器の坏が出土するといった特徴があ

調査区外に広がる棚田状平坦面

棚田状平坦面の広がり
（推測される遺跡の範囲）



第227図　棚田状平坦面の広がり

る。このため、長い煙道を持つ住居の住人は、近い関係にある人々である可能性が考えられる。煙道が長いタイプと短いタイプ両タイプの住居は同一時期に、集落内に混在していたとみられるため、出自の異なる集団が一つの集落を形成していた可能性も考えられる。以下に遺跡内における住居の変遷について、各住居の新旧関係、カマドが付設される壁の方向、住居の軸方向、出土遺物などをもとに述べることにする。調査区東側と西側の二つの住居群には、重複等の直接的な関係がないため、それぞれの地区毎（東側、西側）に変遷過程を示した。なお、便宜上、南壁にカマドが付設されるものを南カマド、北壁に付設されるものを北カマドなどというような呼称を用いることにし、カマドが付設される壁の方位が同じものは、同時期かあるいはほとんど時間差のない一群とみなすことにした。また、ここでいう住居の軸方向は、カマドを基準としたものではなく、住居の平面形を四角形とみなし、各辺に対する垂線が最も北に近い方位を示すものの方向を軸方向とする。

（１）調査区西側

調査区西側では、重複する住居の新旧関係や出土遺物からⅠ～Ⅳ期の変遷が推測できる。当区住居のカマドが付設される壁とその軒数は、北壁１軒、南壁２軒、東壁５軒、南東壁１軒、南西壁２軒である。このうち北カマドのＳＩ51は、南カマドのＳＩ32の真南の向かい合うような位置関係にあるため、同時期かそれほど時間差のないものと考え、南カマドと同じ一群とする。ここで南カマドと東カマドの新旧関係にふれると、南カマドのＳＩ420と東カマドのＳＩ410の重複では、南カマドのＳＩ420の方が古いことがわかっている。次に、南東カマドのＳＩ107と東カマドのＳＩ99の重複では、南東カマドのＳＩ107が古いことがわかっている。この２か所の重複例から、南（北）カマド→南東カマド→東カマドという変遷を復元できる。残るのは南西カマドの２つの住居ＳＩ50とＳＩ122であるが、東カマド、南カマドの住居が使用された時期に形成されたとみられる焼土を切ってＳＩ50が構築されていることから、先述の住居群よりも新しいものと考えたい。また、ＳＩ50の火災に伴って被熱の影響を受けた須恵器が、10世紀中葉の特徴を示すことから、ＳＩ50、ＳＩ122は10世紀第２四半期末から第３四半期以降に使用された住居と推測する。以上を整理すると東側調査区では、南カマド（Ⅰ期）→南東カマド（Ⅱ期）→東カマド（Ⅲ期）→南西カマド（Ⅳ期）という変遷を復元することができる。なお、これらの住居群から東に離れたところにあるＳＩ1000も、ＳＩ107と軸方向が同じである点、カマドの位置関係が先の南カマドと北カマドの例のように180°異なることなどから同じ時期のものと考えたい。Ⅲ期については、東と西に分布が分かれるため、当期内で住居の移動（建て替え）が行われた可能性も残る。

（２）調査区東側

次に調査区東側の住居の変遷についてである。後に板塀の変遷で述べるが、当区の各時期における住居の分布は、板塀の広がりの変化と関わりあうものが多い。その他の特徴としては、住居の軸方向は、東西南北の四方から大きくずれるものはない点があげられる。

調査区東側の住居の変遷をとらえる手段として、重複する住居群を選んで最も古い時期の住居のカマドの位置を特定し、そこからの変化を辿り、さらに他住居群との比較を行った。その結果、Ⅶ期の変遷過程が明らかになった。

〔Ⅰ期〕

東カマドの住居で構成される。ＳＩ765・1400との重複関係の中で最も古いＳＩ764では、２つの煙

道が検出されており、東カマドから南カマドへの造り替えが行われている。大型の住居SI777に関連する重複遺構の新旧関係では、ＳＩ1782（カマド方位不明）→ＳＩ1781（西カマド）→ＳＩ777（南カマド）→ＳＩ500（南カマド）という流れが判明している。西カマドについては遺跡内の住居全体で２軒しかないため、対称の位置にある東カマドと同じ時期のものと考えたい。以上２か所の事例から、東（西）カマドから南カマドへの変化を推測することができるため、東カマドのＳＩ134、ＳＩ151、ＳＩ764、ＳＩ1649、西カマドのＳＩ1781を当期の住居とした。この５軒の住居は軸がややずれるが、これは集落を囲う板塀の方向（弧）に住居の軸方向を合わせて構築したためと考える。なお、ＳＩ1781より古いＳＩ1782については、詳細が不明であるため第一段階に含めることにした。また、西カマドであるＳＩ699については、平坦面間の斜面に立地することから、カマドの位置（煙道の方向）は、地形による規制を受けている可能性が高いため、西カマドであるＳＩ1781と同時期と考えることはできない。

〔Ⅱ期〕

Ⅲ期への移行期（東カマドから南カマドへの移行期）として捉えた。前段階の板塀から増築された板塀（イ）と壁のラインが一致するＳＩ777（南カマド）やＳＩ153・1723・1724の重複で最も古いＳＩ1724（南カマド）が構築される。ＳＩ777関連部分では南カマドの住居（ＳＩ777）から南カマド住居（ＳＩ500）への立替えが行われていることや、ＳＩ764関連では、南カマド期のＳＩ764を切って南カマドのＳＩ1400が構築されていることから、カマドの位置は次第に南カマドに固定化されていったと考えられる。なお、この期に増築された板塀（ア）は、主に製鉄関連の作業空間と集落内を区画するものとして機能していた可能性が考えられる。

〔Ⅲ期〕

南（北）カマドの住居で構成される。新たにＳＩ129・145・132が構築される。これらの住居は煙道が長いタイプの住居である。住居の軸方向はやや東にずれ、板塀を意識したものと考えられる。

〔Ⅳ期〕

南（北）カマドの住居で構成される。板塀の変化に合わせて新たな住居、ＳＩ153・652・765・1755が構築される。ＳＩ153・1755は新たに構築された板塀と東壁のラインが平行し、かつ近接した位置関係にあるため、同時存在していたと推測する。当期の住居も前段階同様の軸方向を示す。

〔Ⅴ期〕

板塀Ⅱ期からⅢ期への造り替えに相当する時期で、期間的には比較的短期間と考えられるため、集落を構成する住居にあまり大きな変化はみられない。西側では板塀から西に展開する大型柱穴群との関連がうかがえるＳＩ1456（南カマド）が構築されたと推測される。工房の機能も持ち合わせた可能性の高いＳＩ1456の構築により、作業場（域）が西側から東側に移動したと考えられる。

〔Ⅵ期〕

集落を囲う板塀の消失に伴う住居の拡散期にあたる。板塀の消失によって住居の軸方向は、再び東西南北の四方を意識したものになり、それから大きくずれるものはない。竪穴住居ではないが、竪穴状遺構としたＳＫＩ1098ピット内から出土した須恵器は10世紀中葉の特徴を示すことから、10世紀第２四半期末から第３四半期以降に使用された遺構と推測する。

〔Ⅶ期〕

遺構は少なく、そのため、集落の中心が調査区外の南側に移動したことも考えられる。Ⅵ期のＳＩ127より新しいＳＫＩ131とその南に位置するＳＫＩ130がこの期のものと推測する。両者は住居の軸方向の傾きや底面レベルが類似するため同一期の遺構と判断した。ただし、これらの遺構はカマドが検出されなかったため、住居として活用されていたかどうかは不明である。住居の軸方向はやや東に傾く。

以上、調査区西側と東側のそれぞれの変遷について説明したが、双方の対応関係を明らかにすることはできなかった。ただし、10世紀中頃の特徴をもつ須恵器が出土した遺構を元にすると、西側のⅣ期と東側のⅥ～Ⅶ期は時期的に近い可能性がある。

４　調査区東側から検出した溝跡について（第228・229図）

これらの溝は、板塀跡と考えられる。これらの内側では竪穴住居跡などの平安時代の遺構が多数検出されているため、集落を囲うために構築されたものと推測される。このような遺構は、本遺跡の西１㎞にある大館遺跡、同じく西0.9㎞で大館遺跡に隣接する縄手下遺跡からも検出されている。特に縄手下遺跡のものは構造や覆土の状態といった点において本遺跡のものと酷似する可能性が高い。

本遺跡の集落を囲む板塀跡ＳＤ152（ＳＤ508）・211・1050には時期差が見られる。新旧関係は211→1051→152の順になるが、これらに関連する溝としてＳＤ791がある。この791はＳＤ211、ＳＤ1050の直線上に位置する溝である。当初は211と対をなす塀として機能していたものが、後にＳＤ211の外側にＳＤ1050を新設した際に、軌道は変えず構造を変え新たな板塀として使用された（つまりＳＤ791はＳＤ211期とＳＤ1050期の２期にわたり使用された）と考えられる。ＳＤ791がＳＤ211と対をなす板塀とする根拠であるが、２つの溝の中間地点に掘立柱建物跡ＳＢ1330が位置する点があげられる。この位置関係から建物とセットで塀が機能していたと推測する。次にＳＤ791とＳＤ1050が同時存在した根拠である。この２つの溝は柱穴を伴わない深さのある溝という点で造りが共通しているため、同時性を考えるには好都合である。しかしながら、布掘り溝で柱穴・溝ともに浅いＳＤ211とは構造が異なってくるためＳＤ791とＳＤ211との同時性を考える上ではマイナス要素になる。これをどう考えるかであるが、ＳＤ791と1050の形状をよく観察するとＳＤ211・791からＳＤ791・1050への変化の妥当性がみえてくる。ＳＤ791はＳＤ1050に比べやや幅が広く、軌道にも細かなブレがあるとともに、溝の断面形もやや乱れている。このような状態を、当初ＳＤ211と同じ構造だった溝を掘り返したため、若干幅が広くなり形状も乱れたと考えたい。以上のことから当初ＳＤ211と並存していた（同じ造りであった）ＳＤ791が、改築されＳＤ1050とも並存することになったと解釈できる。

この他にもＳＤ1050とＳＤ152が重複する区間があるため、それぞれの塀は、各期ごとに一斉に造り替えられたのではなく、所々改築を行いながら塀を巡らす範囲を変化させていったと推測できる。なお、ＳＤ152の北部、北東部でそれぞれ１か所、ＳＤ1050の北東部で１か所溝が切れる部分があるが、これは調査前から重機の進入路として地山がカットされていた部分である。カット前はおそらく溝が連続していたと思われる。

ＳＤ211（・791）、ＳＤ1050（・791）、ＳＤ152（・508）をそれぞれをⅠ～Ⅲ期に当てて、各期の板塀の規模や関連する遺構を示すと第228・229図のようになる。

〔Ⅰ期〕

ＳＤ211とＳＤ791で構成されるラインである。一つの弧としてみた場合の長さは、Ⅰ～Ⅲ期の中で最も長いが、先述したとおり構造自体は強いものではない。ア、イ部分が後に構築された可能性があるため、ア・イがない状態をⅠ期①、ある状態をⅠ期②とする。イ（ＳＤ1216）部分はＳＤ211と接続する溝である。造りは布掘り溝でＳＤ211と共通し、ＳＤ211と接する部分で溝が止まっていることから同時期のものと考えられる。このイと対をなすように西側にも直線的な部分アがある。ＳＤ152として調査した部分であるが、ＳＤ791がここまで連続していたと考えられる。同時性をもつ竪穴住居としては、ＳＤ1216の南側延長線上に竪穴住居跡の西壁がのるＳＩ1781、ＳＩ777の２期に渡る竪穴住居が考えられる。また、これより古い住居であるＳＩ1782は、Ⅰ期①かそれ以前に遡るとみられる。

〔Ⅱ期〕

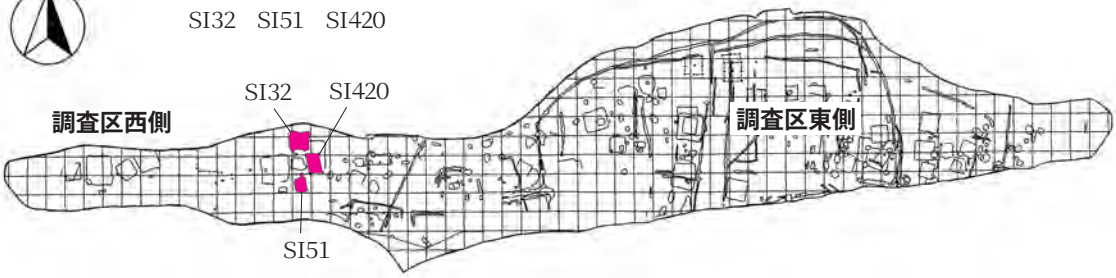
ＳＤ791（ＳＤ152と重複）とＳＤ1050で構成されるラインである。塀で囲われる範囲は狭くなったものの、北東方向にやや塀を膨らませたかたちになる。また、ＳＤ1050の西端からは、ＳＤ991～1100～1410といった一連の板塀が構築される。この期で注目されるのはＳＢ1330である。この建物のプランをよく見ると３間×２間のうち北側の１間×２間部分の軸がＳＤ1050に平行するようにずれているのがわかる。つまり、当初２間×２間であった建物がＳＤ1050の設置に伴い北側に１間×２間分を増設した可能性が高いといえる。また、この建物西側にＳＤ791の堀り方を利用する形でＳＢ800が構築される。この期にＳＤ211・1216が残っていたかどうかは不明である。また、この期に大型の住居であるＳＩ777が廃絶され、覆土上にＳＤ1050が構築される。同時性をもつ竪穴住居としてはＳＩ500が考えられる。

〔Ⅲ期〕

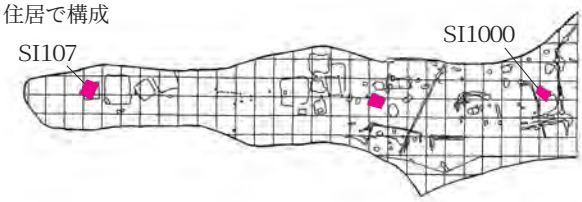
ＳＤ152とＳＤ508で構成されるラインである。Ⅱ期と東西方向は変わらないが北寄りに範囲を拡大させている。ＳＢ1300が廃絶され、その跡から、南側へ新たな板塀（ＳＤ652）が構築される。この期の溝（ＳＤ152～508）はⅡ期より幅・深さともに大きく３つの時期の中では最も強度のある構造だったと考えられる。柱穴の中には深さ１ｍ前後（大型柱穴）のものもある。ＳＩ777覆土上に構築されたＳＢ1840掘立柱建物跡はⅢ期の塀とセットで活用されたものと考えられる。Ⅱ、Ⅲ期の板塀跡は、調査区外南側にも続くと思われるが、西側は沢地に面した斜面に造られたＳＫＩ2069によって切られた状態にあるため、現段階ではどこまで塀が続いていたのかは不明である。

以上の変遷から遺跡のある程度の存続期間の長さをうかがい知ることができる。ここで全体の変化について補足することにする。Ⅰ期は板塀の途切れる北側に出入り口があったと推測されるが、Ⅱ、Ⅲ期では溝の途切れる部分がなくなる（図で途切れている部分２か所は調査前に重機進入路として既に削平されていた部分）ため、北側の出入り口を閉鎖した可能性が考えられる。なお、Ⅰ期の出入り口は、主に調査区北端の急斜面から遺跡内に進入するためのものと考えられるが、これ以外にも調査区外南側にも出入り口が予測される。このように、板塀はⅠ期の開放的なものから、Ⅱ・Ⅲ期の集落をしっかりと囲うような構造へと変化した過程が読みとれる。Ⅱ、Ⅲ期に至っては北側の出入り口の閉鎖や新たな建物（櫓）の構築が行われているため、守りが強化されたことがわかる。ただし、Ⅲ期を過ぎると集落を囲う板塀は消失してまうため、遺跡を取り巻く状勢が一時的に安定化した可能性も考えられる。

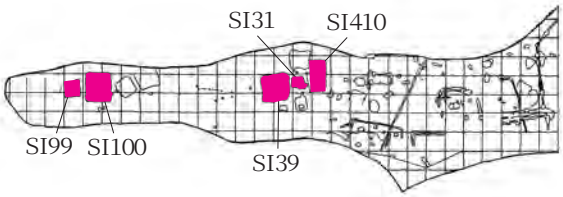
調査区西側Ⅰ期　南壁、北壁にカマドが構築される住居で構成
SI32　SI51　SI420



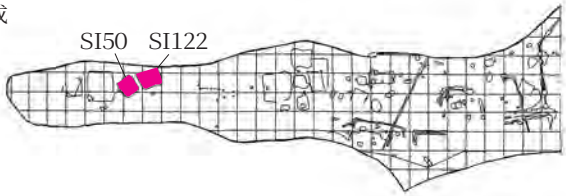
調査区西側Ⅱ期　南東壁・北西壁にカマドが構築される住居で構成
SI107　SI1000



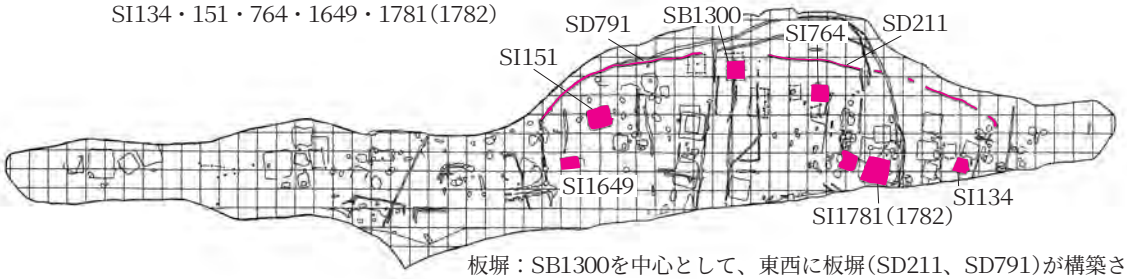
調査区西側Ⅲ期　東壁にカマドが構築される住居で構成
SI99　SI100　SI31　SI39　SI410



調査区西側Ⅳ期　南西壁にカマドが構築される住居で構成
SI50　SI122

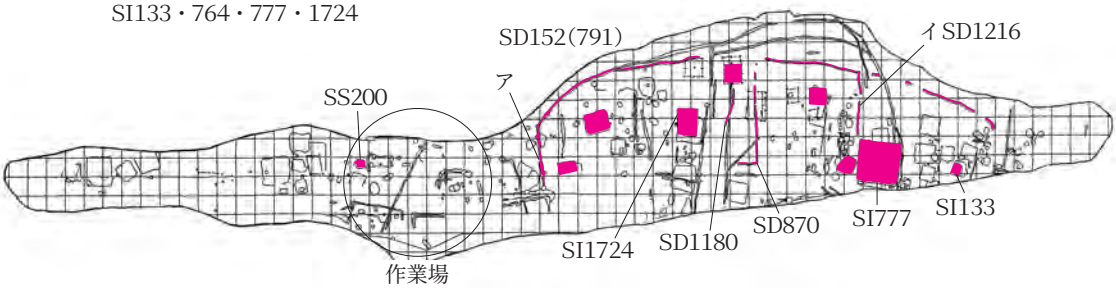


調査区東側Ⅰ期（板塀Ⅰ期①）
住居：東壁、西壁にカマドが構築される住居で構成（住居の向きは板塀の方向を意識）
SI134・151・764・1649・1781(1782)



板塀：SB1300を中心として、東西に板塀(SD211、SD791)が構築される

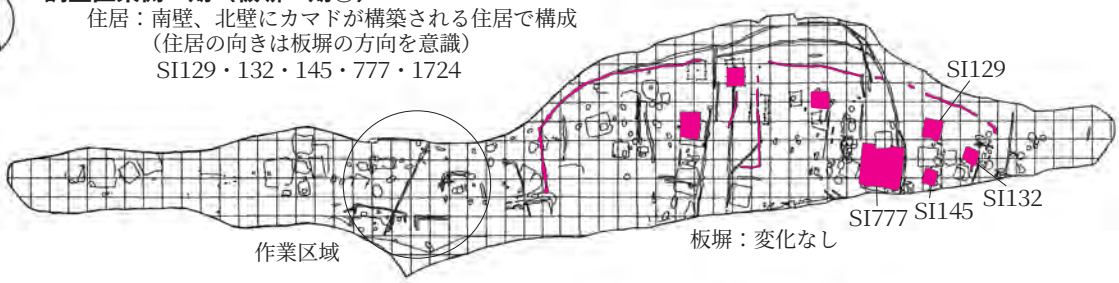
調査区東側Ⅱ期（板塀Ⅰ期②）
住居：東壁、西壁にカマドが構築される住居と南壁にカマドが構築される住居で構成（移行期）
SI133・764・777・1724



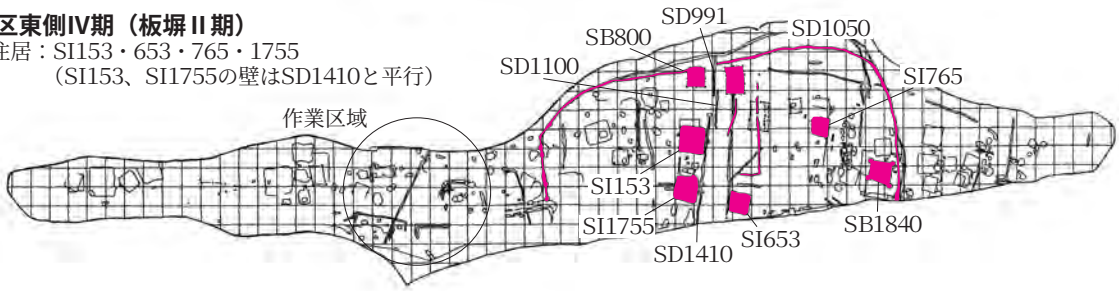
板塀：Ⅰ期①の板塀から南に２本の直線的な板塀が増築される（ア：SD152、イ：SD1216）

第228図　竪穴住居・板塀変遷図（１）

調査区東側III期（板塀Ⅰ期②）
住居：南壁、北壁にカマドが構築される住居で構成
（住居の向きは板塀の方向を意識）
SI129・132・145・777・1724

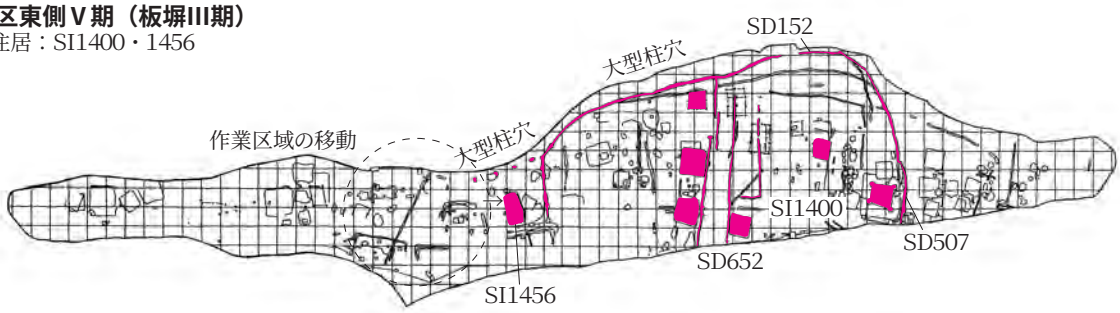


調査区東側IV期（板塀Ⅱ期）
住居：SI153・653・765・1755
（SI153、SI1755の壁はSD1410と平行）



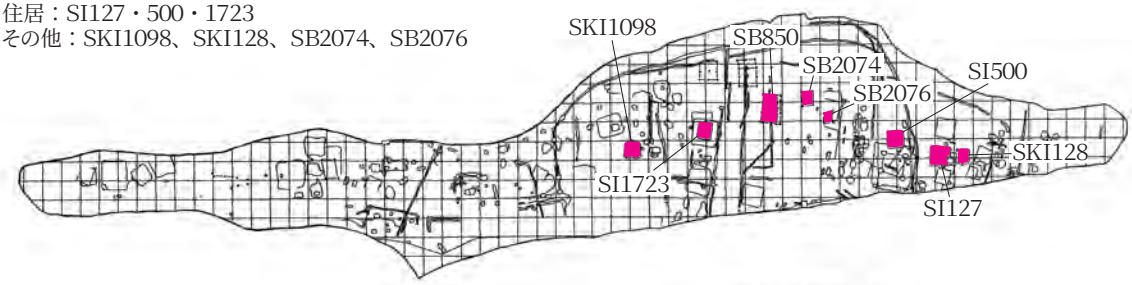
板塀：SD211の北側に集落を囲む新たな板塀（SD1050）が構築される。
また、南北方向の板塀SD991・1100・1410が構築される。
板塀関連施設：SB800、SB1840が構築される。SB1300は、北に一間増築される。

調査区東側Ⅴ期（板塀III期）
住居：SI1400・1456

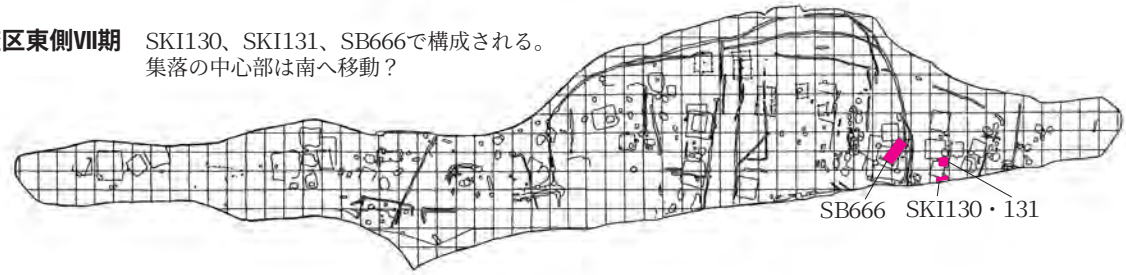


板塀：SD791・1050の外側に新たな板塀SD152・507が構築される。SD152（西側）の覆土に大型柱穴が堀り込まれる。
SD991がSD152に連結する。
板塀関連施設：SB1300が廃絶（SD652の構築）。SD152大型柱穴の西側延長線上に大型柱穴SK1441・419・1257・921が構築される。

調査区東側VI期　南壁にカマドが構築される住居で構成される（住居の向きは東西南北を意識）。
住居：SI127・500・1723
その他：SKI1098、SKI128、SB2074、SB2076



調査区東側VII期　SKI130、SKI131、SB666で構成される。
集落の中心部は南へ移動？



第229図　竪穴住居・板塀変遷図（２）

板塀の機能としては、部外者の直接的な進入や集落内で飼育されていた家畜等の逃走を防ぐための実用的なものや、集落の内・外を分ける結界のようなものだったことが考えられるが、後者のようなものから前者へ機能が変化していったことも考えられる。

5　ＳＩ50竪穴住居跡について

この住居跡は、当遺跡で２軒検出された焼失家屋の一つである。この住居からは、カマドが構築されている壁とは反対側の東壁面近くで、食膳具が板に伏せた状態で検出された。その内訳は、土師器坏12点、甕１点、木製椀３点であるが、この出土状態を見る限り、住人が意図的に住居に火を放ったとは考えにくく、失火や放火などによって住居が焼失してしまったと推測される。また、覆土には広範囲に渡り焼土がみられるが、上屋を覆っていた土が屋根の崩落により落下し、炎による熱で焼土化した可能性が考えられる。本住居は、土葺きの屋根の可能性がある例として、また、一世帯あたりの器の保有量や、食膳具の収納場所を示す例として貴重な遺構といえる。

6　開口部をもつ建物について

この建物跡は壁溝や柱穴をもつという点では竪穴住居跡と同じであるが、以下の相違点がある。

ａ台地平坦面よりも低い斜面に（斜面を切り土して）造られている。

ｂ壁溝・柱穴は３方にしかない（開口部側に柱穴があるかどうかは不明瞭である）。

ｃ１辺のみ長く、その他の向かい合う２辺は短くほぼ同じ長さである。

ｄカマドがみられない。

この建物はｂの特徴から１面に壁をもたない、つまり開口部をもち、気密性が要求されない建物だったと推測される。気密性が要求されないとはいっても、壁溝をもつことから、開口部以外は板材によるしっかりとした壁に囲われていたと考えられる。また、ａの特徴から風の影響を受けにくい場所を選んで構築されていることがわかる。このような構造、立地条件に加えｄの特徴から、住居としての性格は考えにくく、強い風の進入を防ぐ必要のある作業を行っていた工房のような建物であった可能性が高いといえる。このような建物の検出例は、県内では鹿角市の白長根館Ⅰ遺跡にみられる。報告書では、ＳＩ16・17・18として報告されている遺構がそれである。これらの遺構は斜面に構築されている点、柱穴を伴う壁溝をもつ点、開口部をもつ点で当遺跡と共通している。遺構内からは、製鉄炉とみられる遺構や、鉄滓などの製鉄関連遺物が検出されていることから、製鉄関連の工房跡と考えられている。本遺跡の例では遺構内から製鉄炉は検出されなかったものの、建物内と考えられる範囲からは、鍛冶炉や焼土、鉄滓、被熱礫などを検出しているため、同じく製鉄関連の工房として利用されていた建物であった可能性が高いといえる。また、製鉄炉（ＳＳ200）からそれほど離れていないところに、集中している点も注目される。ＳＩ1456については、カマドとみられる部分が検出されたため住居に含めたが、遺構の平面形は、ここでいう工房跡そのものである。このため、このカマド部分は、工房の一角に給湯を目的に設けられた可能性がある。なお、ＳＫＩ2069については、溝はあるものの中に柱穴はみられず、溝の平面形や断面形も工房跡のものとは少し異なる。そのため壁溝とは異なり、雨水等の進入を防ぐ溝として機能していたとみられる。また、覆土からは近世とみられる陶器が出土していることから、平安時代の工房跡より新しいと考えられる。性格としては、遺構内に３か

所の焼土があることから、やはり何らかの工房的な場所だったと考えられる。

７　製鉄関連遺構の分布と時期について

当遺跡では、平安時代に属する製鉄関連遺構として製鉄炉１基、鍛冶炉が10基、工房跡が６基検出されている。開口部をもつ建物である工房跡は全て板塀の外側にあり、製鉄炉とともに竪穴住居群から離れた位置にある。火災が起こった際、住居への延焼を防ぐために住居群から離れたところに作業場を設けた可能性も考えられる。

製鉄炉は、修復されている炉壁があることから、複数回の操業があったことがわかる。

製鉄炉周辺には焼土が多く分布するため、鉄滓の粗割り等の作業が行われていた可能性がある。これに対して鍛冶炉の分布は広範囲にわたっている。調査区の中央部にある鍛冶炉は遺構覆土上につくられているものが少なくないことから、集落が開かれてから、やや時間をおいて鉄器の使用頻度が高まった可能性が考えられる。米代川流域の古代の遺跡では10世紀に鉄製産が技術が広まったとされるが、当遺跡もこのような流れにある遺跡の一つと解釈される。

８　板塀に伴う掘立柱建物跡について

板塀と関連する可能性があるものとして注目されるのは、板塀と隣接あるいは重複するような位置関係で掘立柱建物跡が２棟検出されている点である。これらの建物が検出された場所は、台地が北側に最も張り出した場所にあるため、眼下の沖積地や向かい側の台地をよく見渡すことができる。このような立地を考えると、この建物は、櫓として機能していた可能性が高いといえる。塀や柵による見通しの悪さを櫓で補ったことが考えられる。この他にⅡ、Ⅲ期の板塀東側部分の内側に隣接してＳＩ777の覆土を掘りこんで構築したＳＢ1840がある。板塀のすぐ内側にあり、かつ板塀の内側では最も標高の高い所にあることから、この建物も櫓として機能していた可能性が高いといえる。この建物の柱穴は径１ｍ前後と他の掘立柱建物跡よりもかなり大きいため、高さのあるしっかりとした櫓だったと考えられる。このしっかりとした構造は、板塀のⅢ期の造りとも符合するため、併存した可能性は高いといえる。

９　鴨巣Ⅰ・Ⅱ遺跡の性格

（１）集落の特徴

鴨巣Ⅰ・Ⅱ遺跡の大きな特徴は既述したとおりだが、具体的な人々の活動内容を示すものとしては、小規模ながら鉄や土師器の生産活動が行われていたことが製鉄炉や土師器焼成遺構の存在からわかる。遺跡内からは、緑釉陶器や石帯といった一般集落ではあまり出土しない威信財ともいえる遺物が出土していることから、比較的裕福な首長的な人物がいたことが考えられる。竪穴住居の中で一際大きいプランをもつＳＩ777は、その存在をうかがわせる。また、長胴甕や耳皿といった遺物からは、律令国家の影響を強く受けた地域であることがわかる。

（２）集落の発生要因について

当遺跡は、北側の急斜面が集落の防備に有利という以外、集落の立地条件としては、好ましくない環境にある。例えば、当遺跡の大部分を占める調査区東側は西向きの緩斜面であるため、雨天時には

非常に滑りやすく、また西方向が開けているため冬季は季節風の影響を受けやすい環境にある。さらに、西側から遺跡内の様子がよく見えてしまうという点は防衛上致命的ともいえる。それにも係わらずここに集落を開かなければいけなかった要因は何か。その要因として以下の３点が考えられる。

ａシラス洪水の影響

当遺跡に平安時代の人々が暮らし始めたのは、10世紀前葉頃と考えられる。元慶の乱から、40年近くたった頃であるが、この頃915年に十和田火山の噴火に伴う泥流による大災害があったことが多くの発掘調査事例によって明らかになっている。シラス洪水とよばれるものであるが、高橋学氏は鷹巣盆地にある胡桃館遺跡の状況から、シラス流による洪水によって沖積地に立地する集落が高所移転や生業の転換を余儀なくされたと推測している。シラス流によって運ばれた軽石は能代平野の米代川の左岸を中心とする沖積地にも広く堆積しており、現在でも水田には、耕作の障害となる軽石を集めた小山がみられる。この洪水は米代川のほぼ全域にわたって被害をもたらしたと推測される。このような状況から、米代川下流域においても、高橋氏と似たような推測が可能と判断される。この状況を鴨巣と結び付けて考えると、シラス洪水による災害によって沖積地から台地への集落の移転が進んだ結果、居住に適した台地が飽和状態となり、そのため鴨巣のような集落の立地には不向きな傾斜地にも集落が開かれるようになったという推測が可能である。今後、能代平野の沖積地から10世紀前葉以前の古代の集落が多数発見されることになれば、この蓋然性は高くなる。

ｂ元慶の乱以降の不安定な社会

本遺跡の性格を探る上で、とりわけ注目されるのが、集落を囲う板塀跡とそれに対応する３棟の掘立柱建物跡の関係である。遺跡の立地とこれらの遺構を組み合わせて考えてみると、どうしても集落の外部に対しての防御的な姿勢を感じざるをえない。出羽国では、元慶の乱の約60年後の天慶２年(939年）にも大規模な俘囚の反乱が起きている。天慶の乱であるが、元慶の乱以降は他にも俘囚による小規模な反乱がたびたび起きていたようである。この頃は本遺跡の存続期間内にあたり、集落の住人も何らかの影響を受けたものと考えられる。このような不安定な状況に対する防備として板塀や櫓（掘立柱建物跡）が造られた可能性が考えられる。北奥地域に多い古代防御性集落は、10世紀の後半から11世紀の前葉にかけてのものが多く、集落の周りに空堀を配するのが一般的である。本遺跡の場合、空堀はないものの板塀を防衛手段の一つとして機能させていたと考えられる。時期的には一般的な防御性集落にやや先行するかたちになる。なお、板塀が消失した後も集落は継続したと考えられるため、当地はその後しばらく比較的安定した状態にあった可能性がある。

ｃ大館遺跡の存在

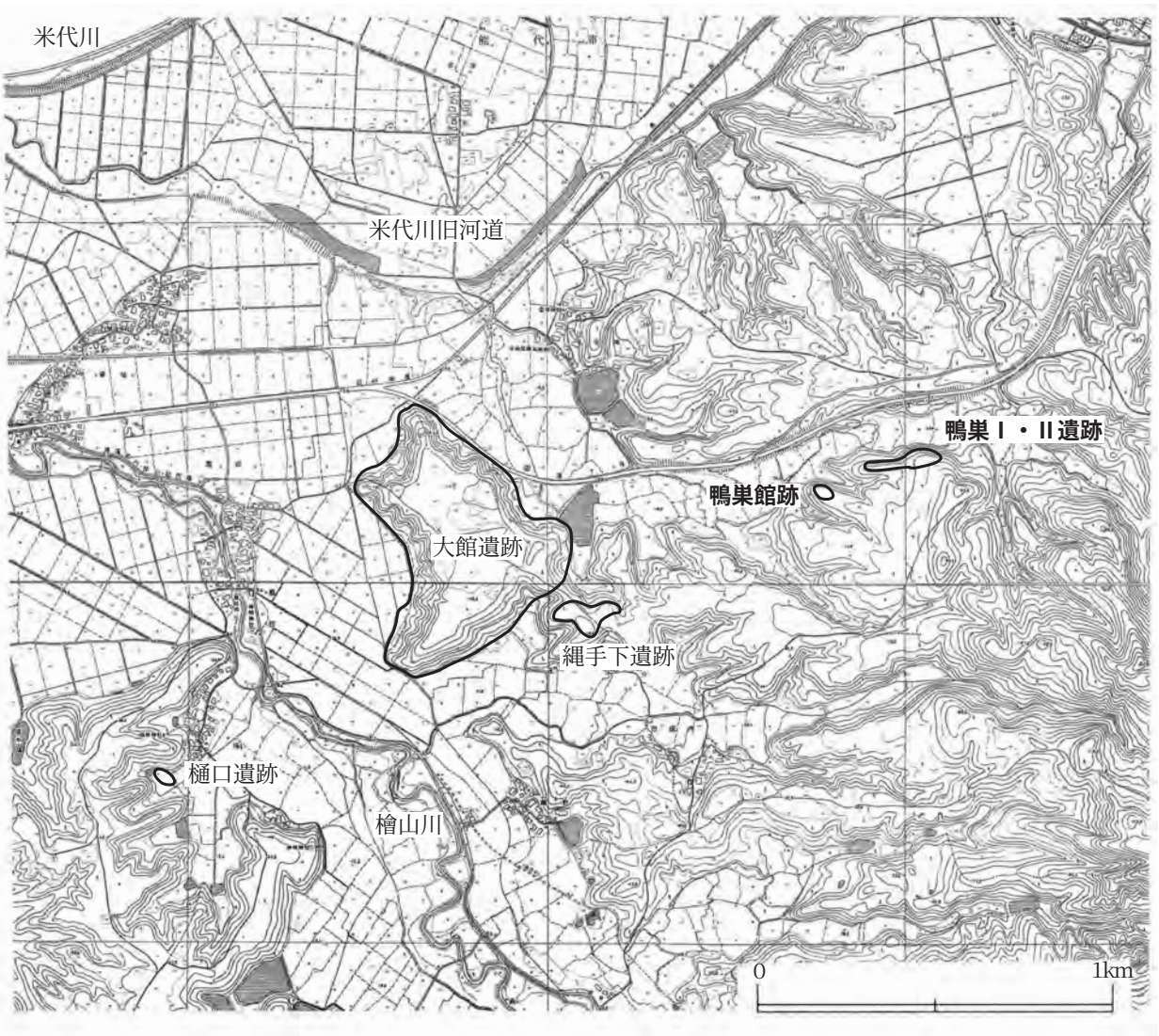
先に西側から本遺跡の様子が良く確認できる点を述べたが、実際に西側にある大館遺跡からは、本遺跡内が見える。この事実は、本遺跡の住人が大館遺跡に対して警戒する必要のない集団だった、換言すれば歩調を共にする関係にあったことを意味すると考えられる。つまり、時期的に先行する大館遺跡の影響下にある人々が、大館遺跡周辺に新たな集落の造営先を求めた結果、本遺跡を選ばざるをえなかった状況が考えられる。

（３）周辺の遺跡との関係について

まず最寄りの鴨巣館跡との関係だが、鴨巣館は本遺跡と同じ台地にあり、台地の端部が開析を受けた結果、それぞれ沖積地に突き出すような地形になっている。鴨巣館からは、一条の空堀以外目立っ

た遺構や遺物は検出されなかったが、この空堀は台地先端部にあるため、さらに台地の奥側にも空堀が存在する可能性がある。台地の奥側は、本遺跡の広がりと連続するため、その関連が注目される。鴨巣館にみられる空堀が、本遺跡より後出する一般的な古代防御性集落に伴うものとすれば、本遺跡の集落が後に台地の奥側、つまり鴨巣館跡に連続する部分に移っていったことも想定される。

次に大館遺跡との関係であるが、大館遺跡は能代営の擬定地として注目される平安時代（９世紀後半から10世紀代）の遺跡で、沖積地に張り出した台地全体の14万㎡が遺跡範囲と考えられる広大な遺跡である。1970年代に行われた部分的な調査では、平安時代の軍事施設及び大集落であり、能代営の可能性が極めて高いとの結論がだされている。広大な台地の所々に設定された調査区からは台地の縁に沿うように柵跡が検出され、それらは広い台地の縁辺部を巡るものと推測される。また、一部では柵跡が台地の縁に平行するように数列検出される部分もある。それらの規模に軍事施設の可能性を垣間見ることができるが、それ以外には集落とは異なる軍事的施設としての確固たる根拠が打ち出されているとは言い難い。そのためか、近年では古代防御性集落として認識されることもある。この大館遺跡と本遺跡との関係で注目される遺物として、錫杖状鉄製品があげられる。この遺物は８世紀後半



第230図　鴨巣Ⅰ・Ⅱ遺跡周辺の関連遺跡

から11世紀前半にかけて北東北を中心に分布し、蝦夷社会で使用された遺物と考えられている。この遺物が大館遺跡からは１点、本遺跡からは最低でも３点出土している。他に秋田県内では、鹿角市の高市向館跡から２点出土しているにすぎないため貴重な遺物といえる。井上雅孝氏の編年によれば、大館遺跡のものがⅠｂ類とされ10世紀前半という位置付けとなっている。本遺跡のものはⅠｂ類に相当すると思われ、大館遺跡とは大差ない形状である。ただし、井上氏の指摘では２世紀間に渡って大きな形態変化を起こさないとされるため、この遺物を手がかりとした細かい年代の特定は困難である。しかしながら近距離にある遺跡で同様の遺物が出土している点は、遺跡間の交流や繋がりを示すものとして評価できる。

大館遺跡に隣接する縄手下遺跡は、検出された遺物は少ないものの、溝や掘立柱建物跡が多数検出された遺跡である。遺跡の性格としては、大館跡を支える周縁空間としたうえで、具体的には「牧・畜養場」、「炭生産」の場であったと報告されている。鴨巣Ⅰ・Ⅱ遺跡との比較のうえでは、長さ50mほどの弧状の溝と、物見櫓と推測されている掘立柱建物跡の位置関係が酷似している点が注目される。

以上のように鴨巣Ⅰ・Ⅱ遺跡と大館遺跡や縄手下遺跡は、関連する要素を含んでいることがわかる。大館遺跡の広さや柵列などの規模を考えると、鴨巣Ⅰ・Ⅱ遺跡は大館遺跡に対してどちらかといえば影響を受ける側にあった可能性が高かったと思われる。

能代の古代史を紐解くうえで、「能代湊」や「能代営」は欠かせないキーワードである。能代営について熊田亮介氏は、水陸あわせた交通上の要衝におかれた恒常的施設とみるべきとの見解を示している。これを踏まえ、能代営の擬定地とされる大館遺跡をみると、米代川の左（南）岸側では最寄りの段丘の一つである点（米代川の旧河道からはさらに近距離）や米代川支流の檜山川から近い点などから水運には恵まれた環境にあると言える。また大館遺跡は、同じ台地の東側を縦断する羽州街道から西に１㎞ほど進んだところにある。つまり羽州街道側から西の沖積地に向けて台地が半島状に張り出したところに大館遺跡があるため、古道が整備された結果として羽州街道が成立したと考えられるのであれば、陸運にも恵まれた交通の要衝の地に大館遺跡はあったといえる。このように能代営の擬定地としては好都合な条件が揃っているといえる。ただし、近年檜山川の左岸にある樋口遺跡の調査が行われ、古代の祭祀場であることが明らかになった。この遺跡は、檜山川を挟んで大館遺跡の向かい側になる。大館遺跡との関係はつかめていないが、檜扇やすり鉢などの精巧な木製品が多数出土している点が注目される。遺跡の背後には台地をひかえているため、こちら台地も今後注目する必要があるだろう。

鴨巣Ⅰ・Ⅱ遺跡の性格をより具体化するためには、遺跡の性格が不明瞭な大館遺跡に関する研究の進展に追うべきところが大きい。

参考文献

井上　雅孝「錫杖状鉄製品の研究－北東北における古代祭祀具の一形態－」『岩手考古学』第14号2002（平成14）年

井上　雅孝「錫杖状鉄製品の研究（２）－分布に関する諸問題－」『岩手考古学』第16号2004（平成16）年

高橋　学「古代末の出羽－米代川流域の鉄関連遺跡」『季刊考古学』第57号1996（平成８）年

高橋　学「秋田県における古代防御性集落」『北日本古代防御性集落をめぐって』2005（平成17）年

宇田川浩一「元慶の乱前後の集落と生業－米代川流域と旧八郎湖東北岸の違い」『第31回古代城柵官衙遺跡検討会　資料集』

熊田亮介「元慶の乱－文献資料を中心として－」『第31回古代城柵官衙遺跡検討会　資料集』2005（平成17）年

秋田県教育委員会『縄手下遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第410集　2006（平成18）年

秋田県教育委員会『樋口遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第411集　2006（平成18）年

秋田県教育委員会『縄手下遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第410集　2006（平成18）年

能代市教育委員会『大館遺跡発掘調査報告書』　1978（昭和53）年

鴨巣Ⅰ遺跡・Ⅱ遺跡近景（北西から）

鴨巣Ⅱ遺跡（東側調査区）（北西から）

東側調査区棚田状平坦面（北西から）

図版2

調査終了状況（東から）

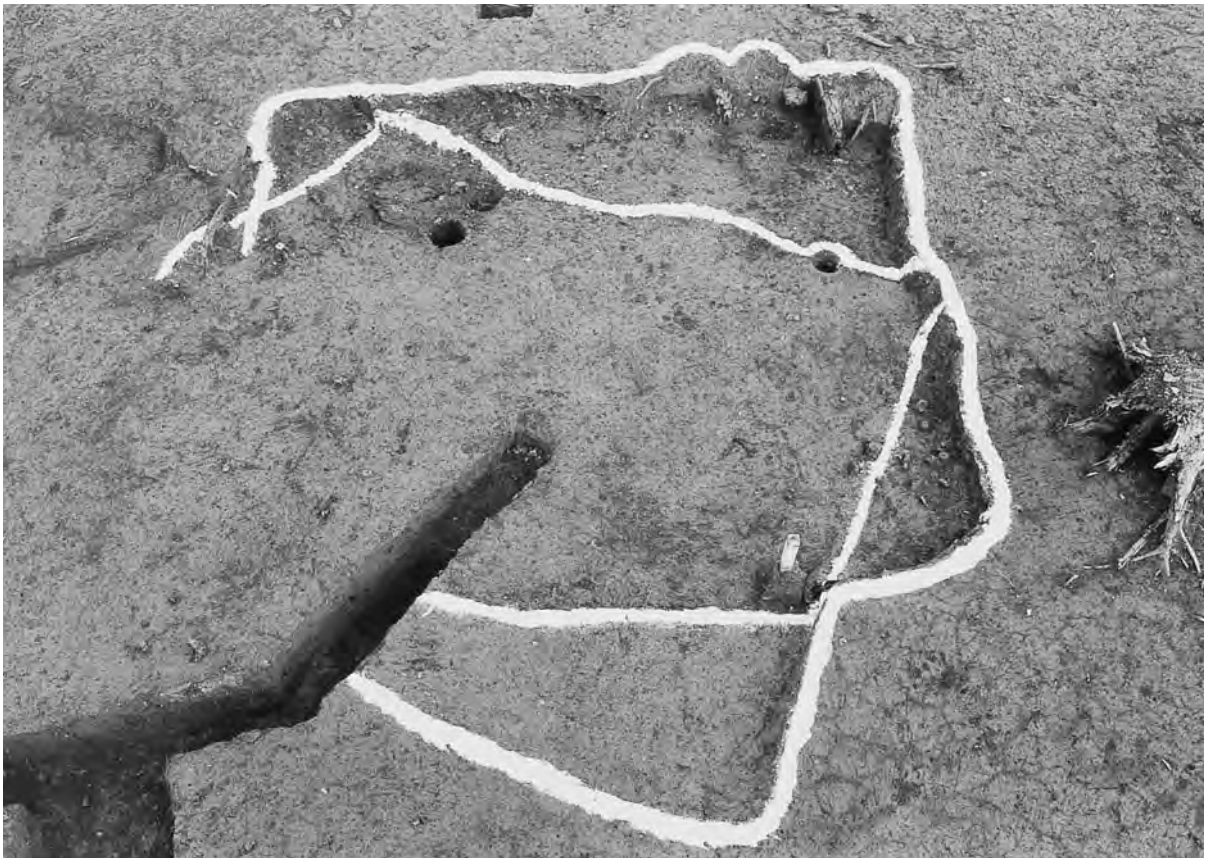
調査終了状況（西から）

ＳＩ50遺物出土状態（南西から）

ＳＩ50遺物出土状態（南西から）

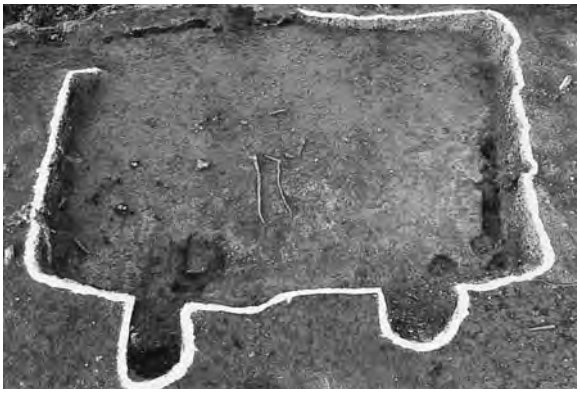
ＳＩ100・50完掘状態（西から）

ＳＩ39・32・31・51完掘状態（東から）



ＳＩ99・100完掘状態（西から）

ＳＩ31完掘状態（西から）



ＳＩ32完掘状態（南から）

ＳＩ51完掘状態（北から）

ＳＩ122完掘状態（北から）

ＳＩ129完掘状態（北から）

ＳＩ129土層断面（南から）

ＳＩ129土層断面（西から）

ＳＩ129遺物出土状態（北から）

ＳＩ129遺物出土状態（東から）

ＳＩ129階段状の掘り込み（西から）

ＳＩ129カマドと煙孔（西から）

ＳＩ129カマド（北から）

ＳＩ129カマド～煙孔断面（西から）

ＳＩ151完掘状態、ＳＫ1841遺物出土状態（西から）

C面竪穴住居跡完掘状態（北から）

ＳＩ127、ＳＫ147完掘状態（北から）

ＳＩ145完掘状態（西から）

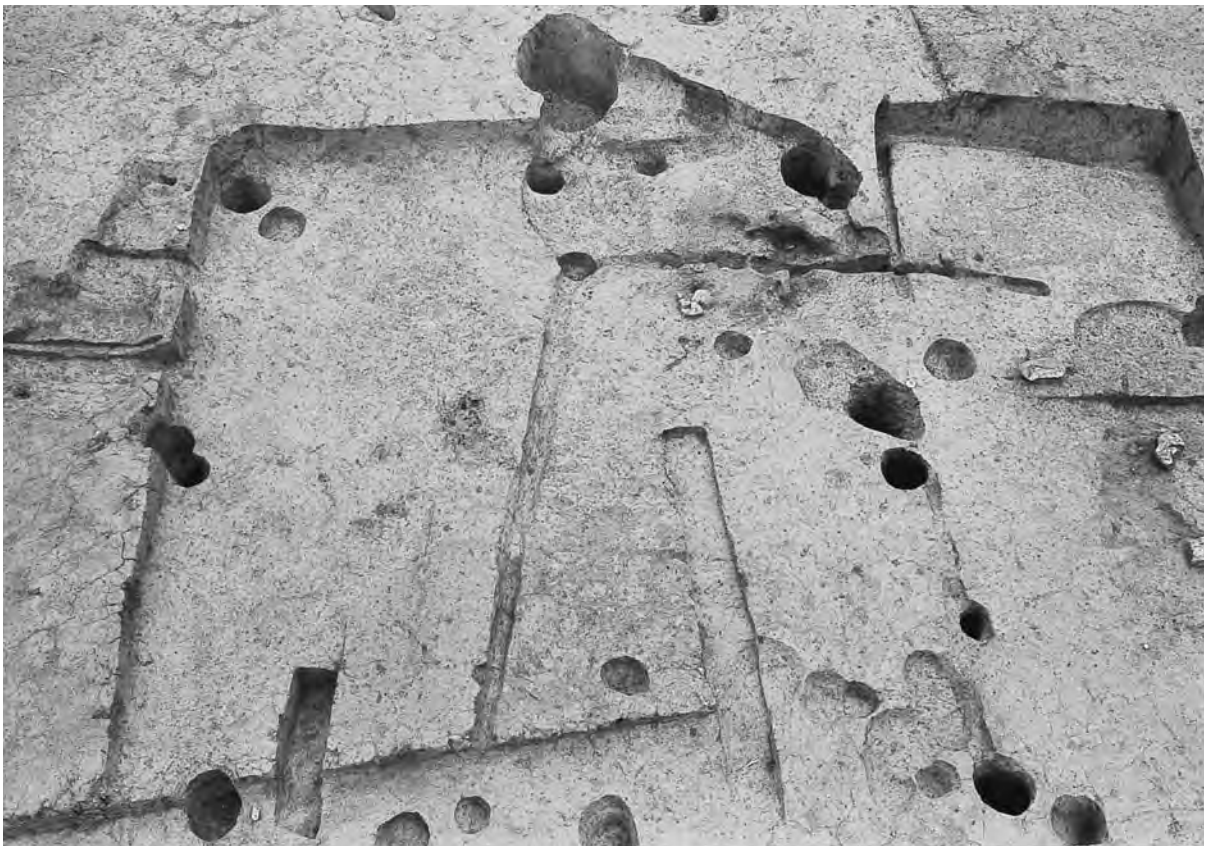
ＳＩ130・131完掘状態（西から）

図版10

ＳＩ653完掘状態（北から）

ＳＩ699完掘状態（西から）

調査区東側完掘状態（西から）



ＳＩ764・1400完掘状態（西から）

ＳＫＩ888遺物出土状態（西から）

ＳＩ653カマド（北から）

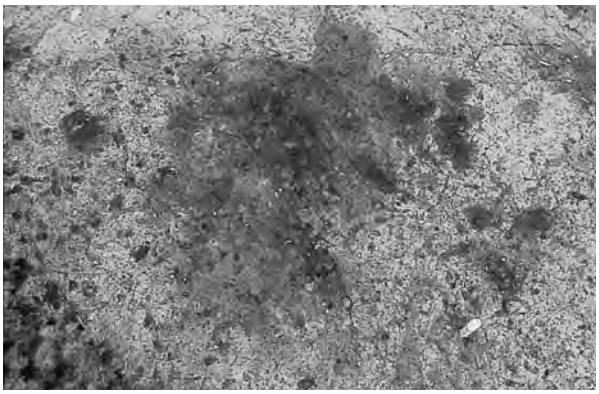
ＳＩ653土層断面（西から）

ＳＩ764カマド（北西から）

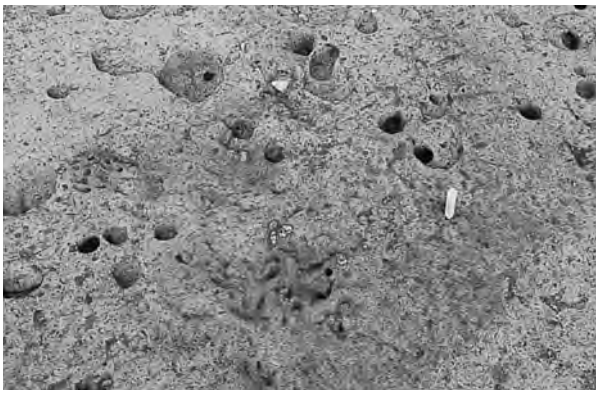
ＳＩ764カマド煙道断面（南から）

ＳＩ764覆土火山灰（南から）

ＳＳ900完掘状態（西から）



ＳＮ643確認状態（西から）



ＳＮ644確認状態（西から）

ＳＩ500完掘状態（北から）

図版14

ＳＩ777・1781・1782完掘状態（西から）

ＳＢ1840完掘状態（北東から）

ＳＩ500カマド（北から）

ＳＩ777カマド（北から）

ＳＩ1781カマド（北から）

ＳＩ777Ｐ31完掘状態（東から）

ＳＩ1649・1650完掘状態（西から）

図版16

ＳＩ153・1723・1724完掘状態（北から）

ＳＩ1755完掘状態（南から）

ＳＩ1650カマド（南から）

ＳＩ1723遺物出土状態状態（南から）

ＳＩ153・1723土層断面（南から）

ＳＩ153・1723確認状態（北から）

ＳＩ153カマド（北から）

ＳＩ1755カマド（南から）

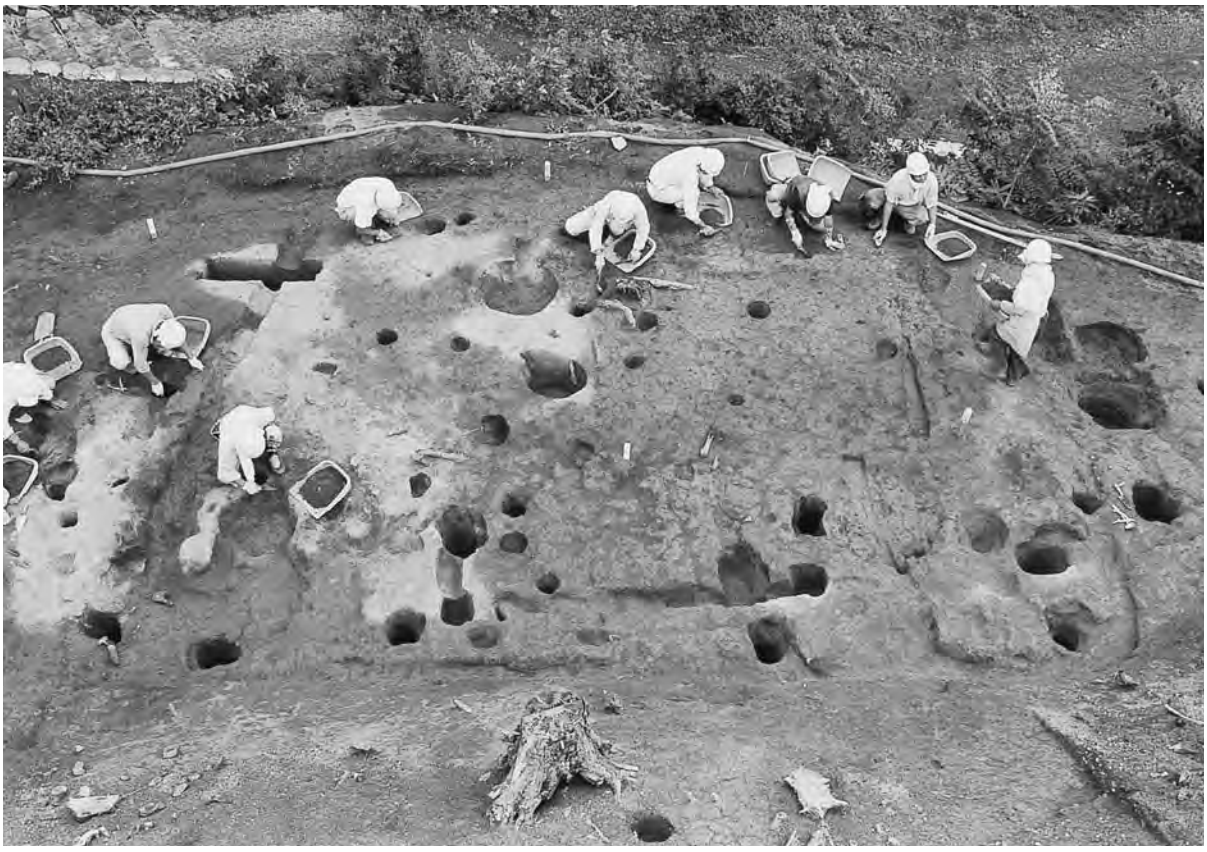
ＳＩ1755土層断面（東から）

ＳＩ1755土層断面（北から）

ＳＫＩ2066・2067完掘状態（東から）

ＳＩ1000・1456、ＳＫＩ2069完掘状態（南から）

ＳＫＩ2064・2065完掘状態（西から）



ＳＫＩ2064・2065完掘状態（北から）

ＳＫＩ1098完掘状態（北から）

ＳＫＩ273遺物出土状態（北から）

ＳＫＩ128完掘状態（南から）

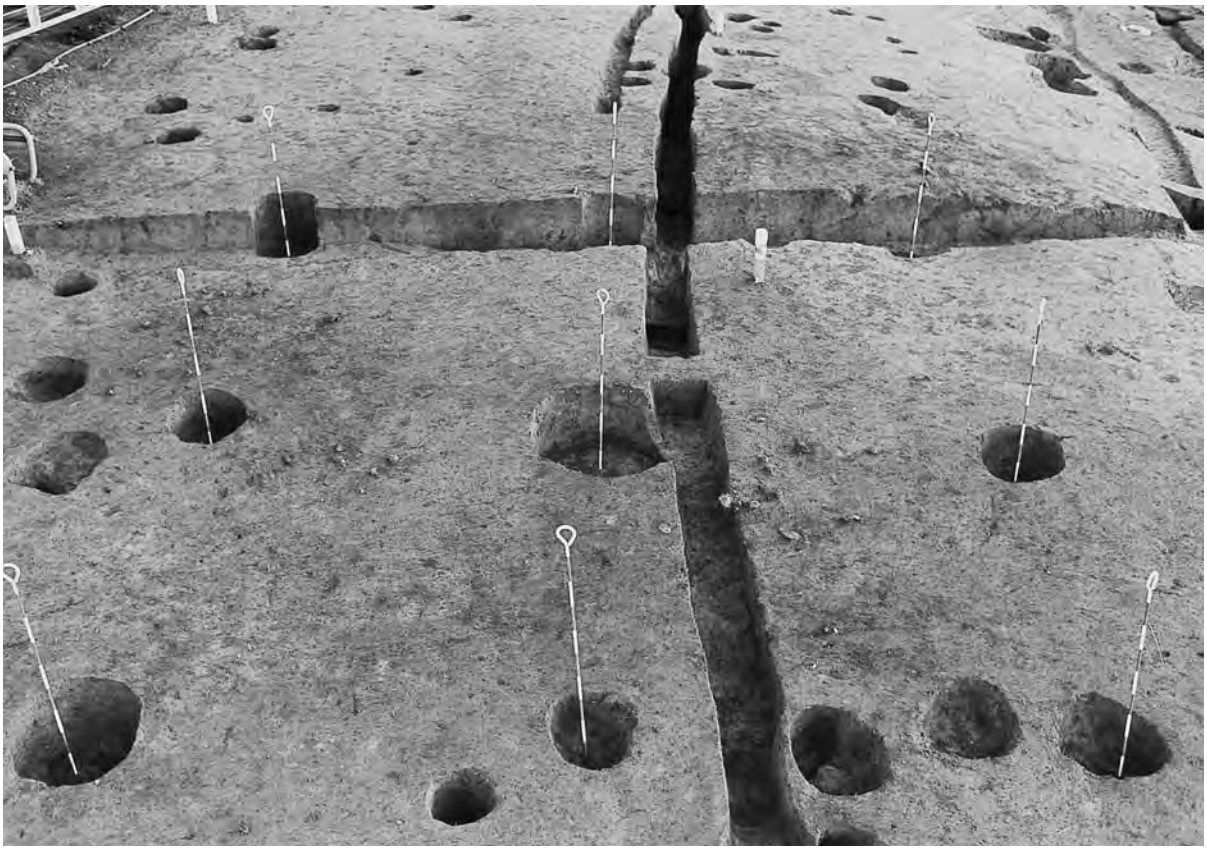
ＳＫＩ350遺物出土状態（東から）

ＳＫＩ555完掘状態（東から）

ＳＫＩ610土層断面（南から）

ＳＫＩ1098出土須恵器（南から）

ＳＢ800完掘状態（南から）



ＳＢ1330完掘状態（北から）

S D152・791完掘状態（東から）

S D791完掘状態（東から）

ＳＤ152内大型ピット（西から）

ＳＤ152内大型ピット（西から）

ＳＤ152・1285（北西から）

ＳＤ1050確認状態（西から）

S D152（東から）

S D152（西から）

S D211完掘状態（南東から）

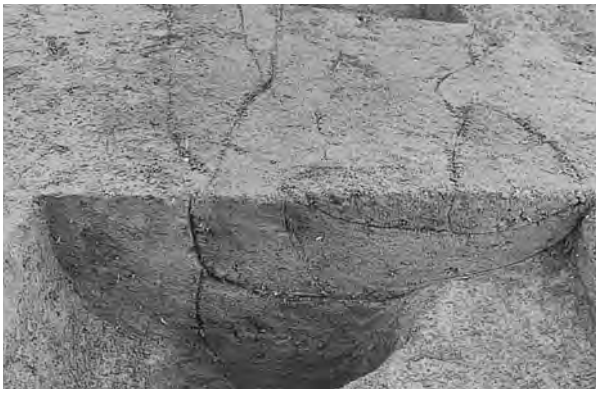
S D211土層断面（西から）

S D152土層断面（西から）

S D152土層断面（西から）

S D152土層断面（北から）

S D152土層断面（西から）



S D152・791土層断面（南東から）

S D1285・1050土層断面（南から）

S D152・1285土層断面（北西から）

S D1216・1285土層断面（南から）

S D652周辺完掘状態（南から）

S D870周辺完掘状態（南東から）

S D652土層断面（南から）

S D791土層断面（西から）

ＳＤ870土層断面（南から））

ＳＤ1300土層断面（南から）

ＳＤ154土層断面（南から）

ＳＫＩ273・ＳＤ155遺物出土状態（南から）

ＳＤ194確認状態（北から）

ＳＤ194完掘状態（南から）

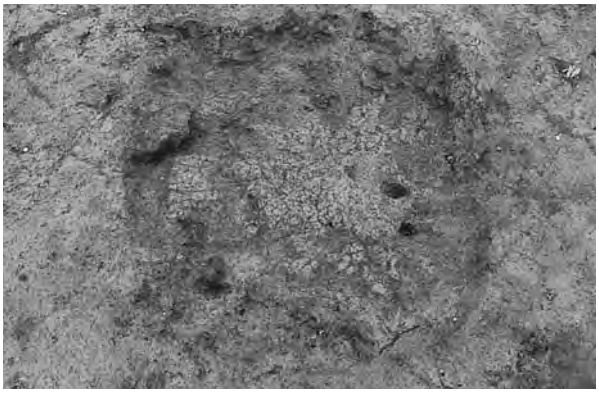
ＳＤ823完掘状態（北から）

ＳＤ1250遺物出土状態（南から）

ＳＮ141完掘状態（西から）

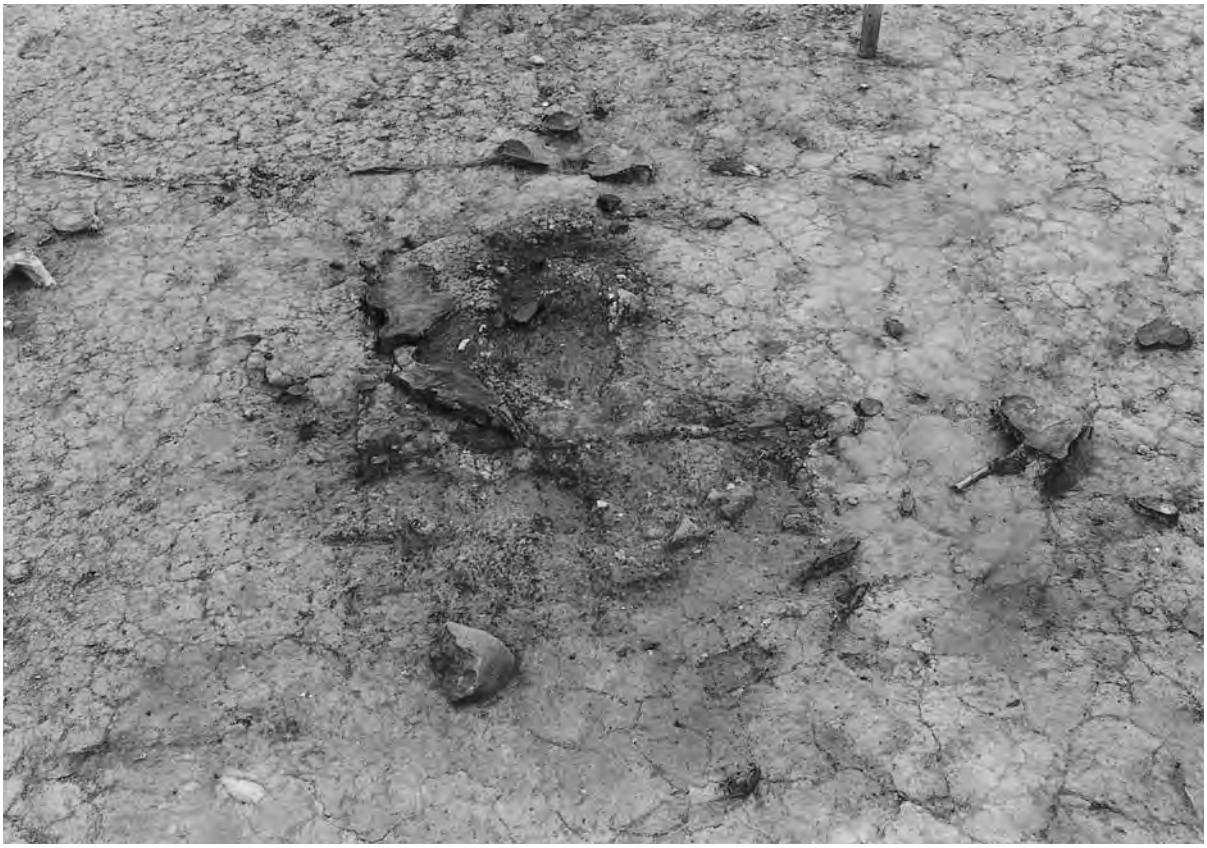
ＳＮ600・ＳＫ1248完掘状態（南から）

ＳＮ600遺物出土状態（南から）



ＳＮ761完掘状態（西から）

図版30



ＳＳ200確認状態（東から）

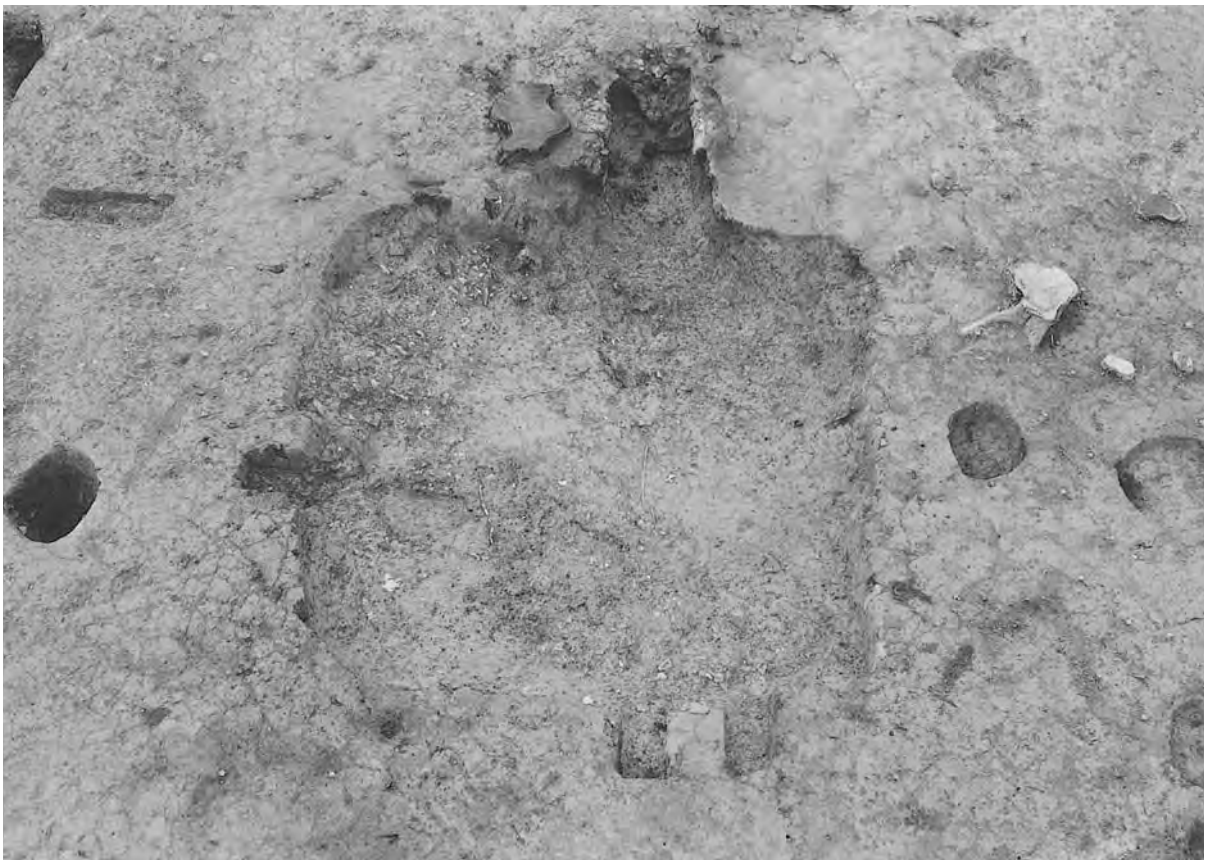
ＳＳ200完掘状態（東から）

ＳＳ200炉内完掘状態（東から）

ＳＳ200土層断面（東から）

ＳＳ200土層断面（南から）

ＳＳ200出土フイゴ羽口（南から）

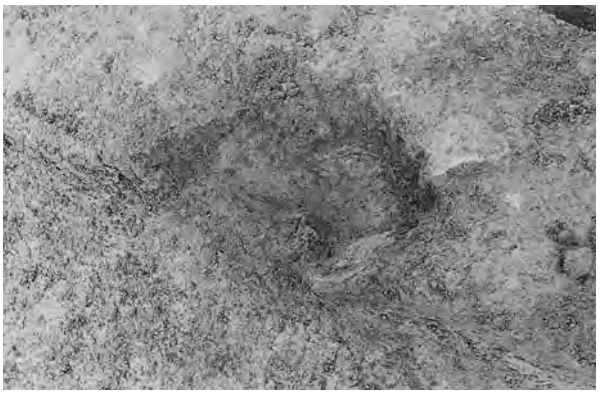


ＳＳ200完掘状態（東から）

図版32

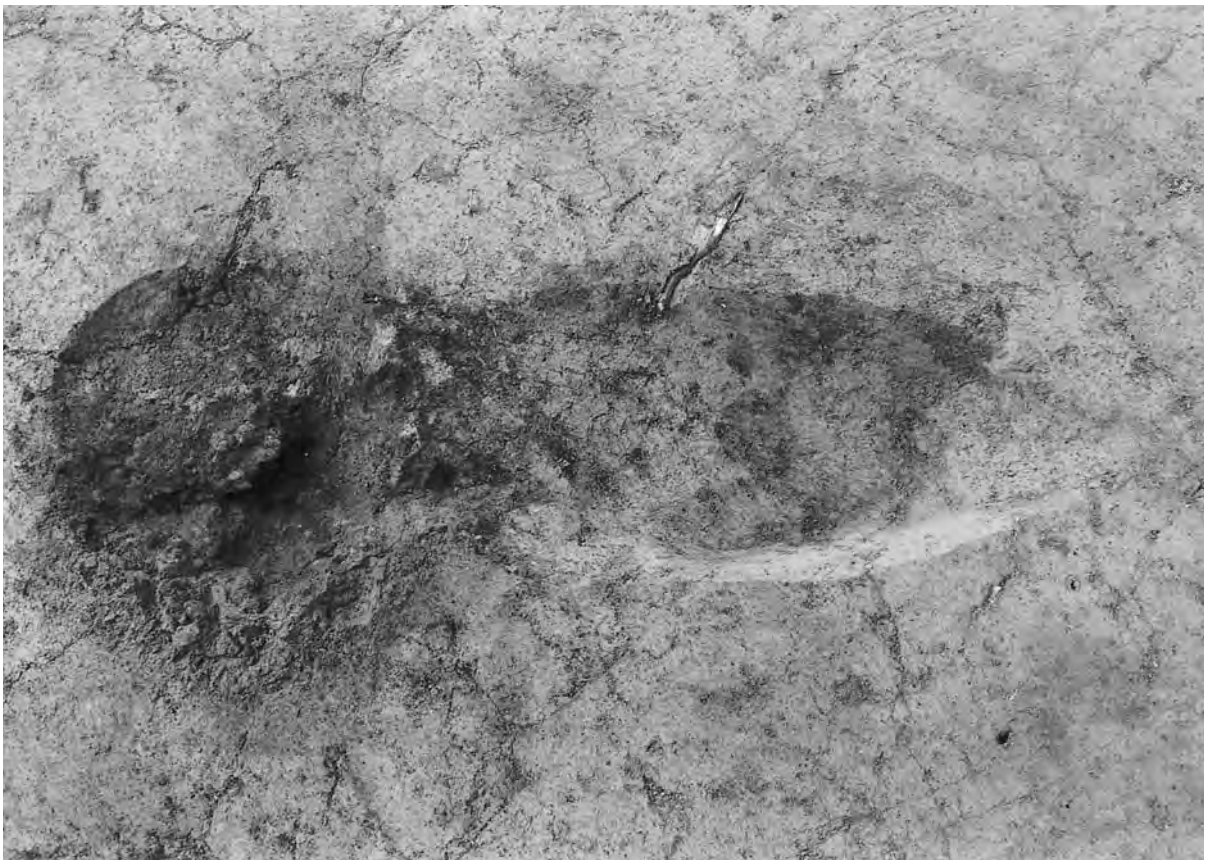
ＳＳ451完掘状態（南から）

ＳＳ452完掘状態（南から）

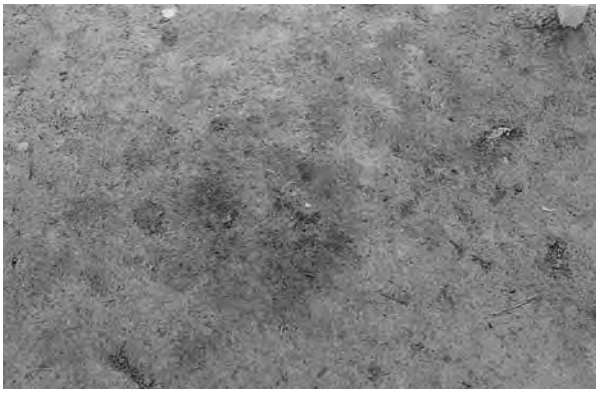


ＳＳ900完掘状態（南西から）

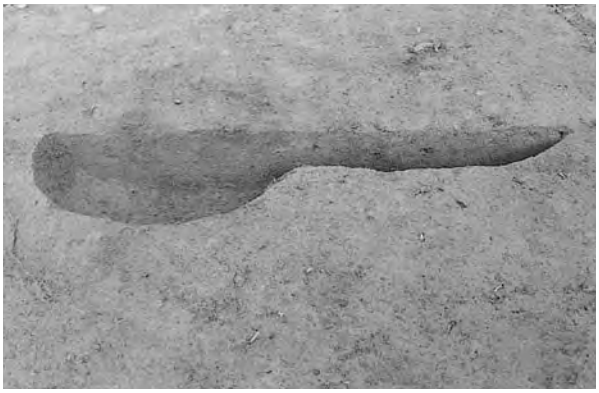
ＳＳ900断面（南から）



ＳＳ763確認状態（南東から）



ＳＳ1583確認状態（西から）



ＳＳ1583断面（西から）

ＳＳ1700確認状態（南から）

ＳＳ1700土層断面（南西から）

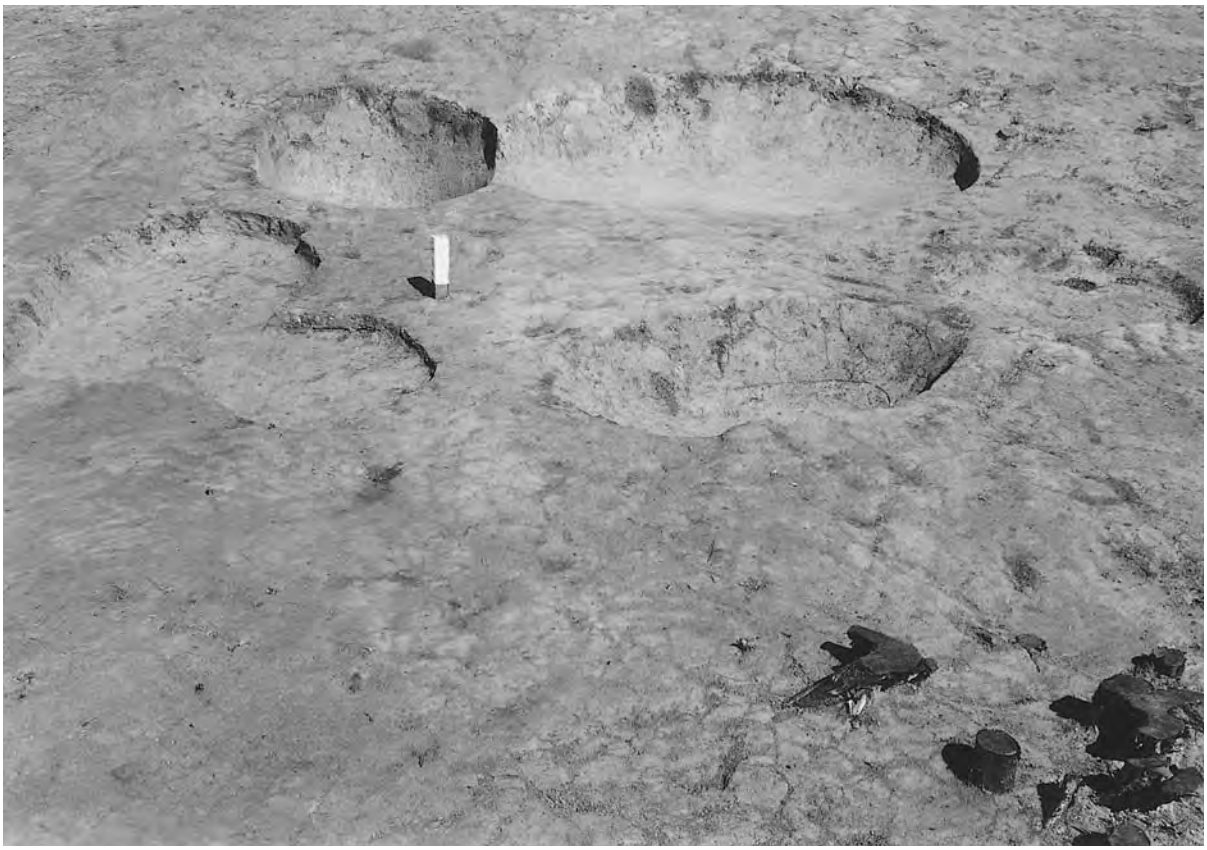
ＳＳ1700完掘状態（西から）

ＳＳ609完掘状態（東から）

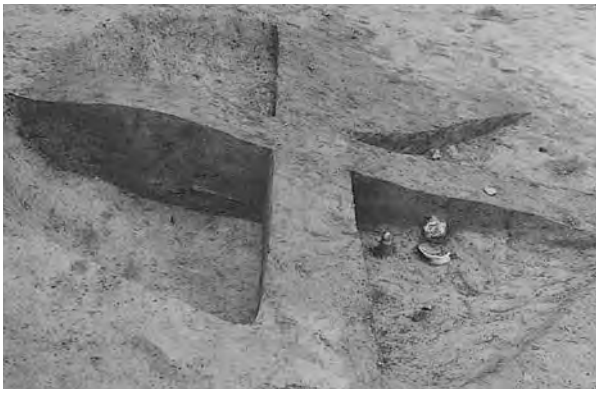
ＳＳ1446完掘状態（南西から）

ＳＳ1722完掘状態（西から）

ＳＫ群西から（西から）



ＳＫ群完掘状態（西から）



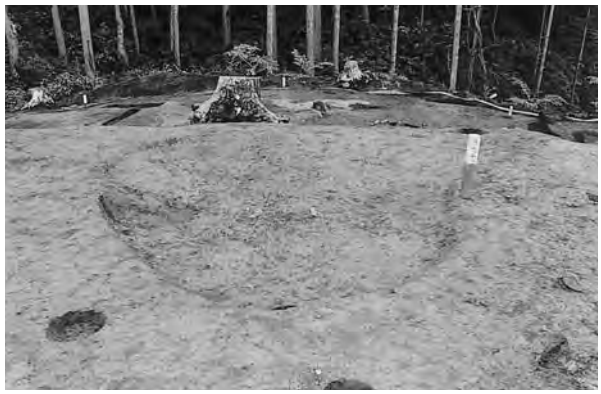
ＳＫ136土層断面（北から）

ＳＫ209遺物出土状態（西から）

ＳＫ558遺物出土状態（西から）

ＳＫ493完掘状態（西から）

ＳＫ群完掘状態（東から）



ＳＫ186完掘状態（北東から）

ＳＫ147土層断面（西から）

ＳＫ1702完掘状態（北から）

ＳＫ161・162確認状態（北から）

ＳＫ161・162完掘状態（西から）

ＳＫ840・1257完掘状態（南から）

ＳＫ1441完掘状態（北から）

基本土層Ｃ－Ｄ断面（Ａ面）（北から）

基本土層Ｅ－Ｆ（Ｅ付近）断面（東から）

ＳＸ342遺物出土状態（北から）

ＳＫＴ363完掘状態（北から）

156－4

156－5

156－5

156－7

156－8

156－9

156－10

157－1

157－4

157－5

157－7

158－1

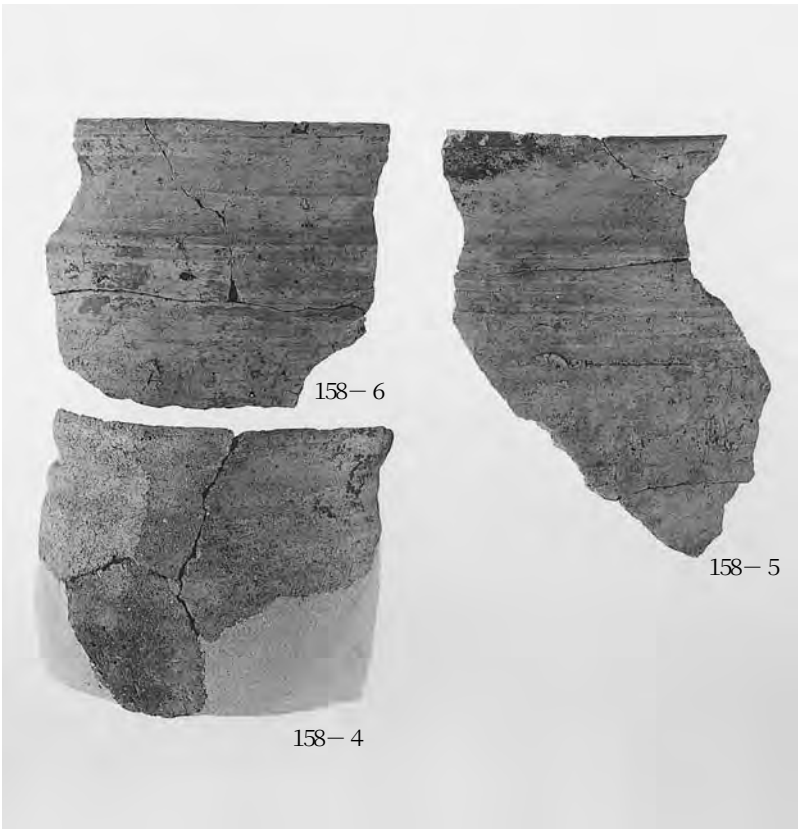
158－2

158－3

157－2

157－6

158－7


158－6
158－5
158－4

159－1

159－2

157－8

157－9

160－2

160－3

160－5

160−11

161− 1

161− 3

162− 1

162− 2

162− 3

162− 4

162− 5

162− 6

162− 7

162− 8

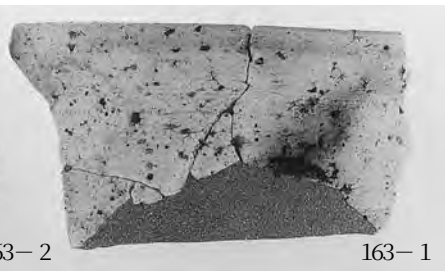
162−11

162−12

162−13

162−14

163− 2


163− 1

164− 2

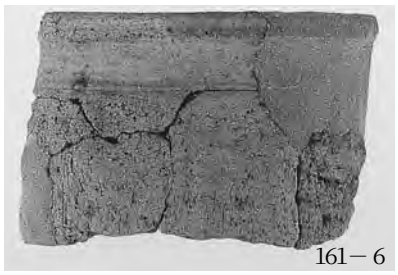
164－6

164－7

181－13

182－1

182－2


161－6

165－2

165－6

165－9

166－1

166－8

166－9

166－10

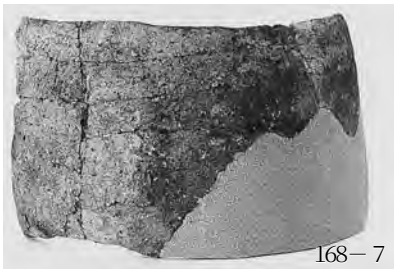
167－1

167－5

168－1

168－2

168－3


168－7

168－9

169－5

170－3

170－6

170－7

170－12

170－13

171－1

171－2

171－6

171－14

171－5

171－7

図版42

172－1

172－2

172－3

172－6

172－7

172－10

173－1

173－2

173－3

173－5

173－6

173－7

173－9

173－11

173—12

173—13

173—14

174— 1

175— 1

175— 2

175— 3

175— 5

175— 6

175— 7

175— 7

175— 9

176— 2

図版44

176－6

176－10

177－1

177－2

177－9

178－1

178－2

179－2

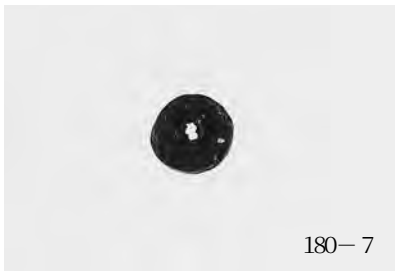
179－5

179－9

179－12

180－2

180－3


180－7

180－9

180－15

180－16

181－1

181－2

181－3

181－4

182－6

184－4

184－8

184－10

184－12

185－13

185－13

185－13

187－ 1

187－ 2

187－11

187－ 5

187－13

187－14

188－11

190－ 1

190－ 3

190－ 4

190－ 5

190－ 7

190－ 8

190－ 9

190－10

190－11

190－12

191－5

192－1

192－2

192－3

192－5

192－14

193－2

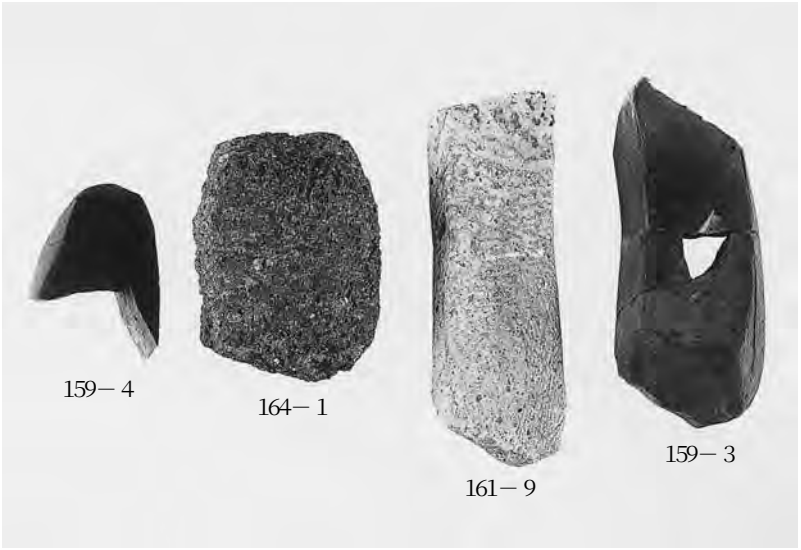
195－2

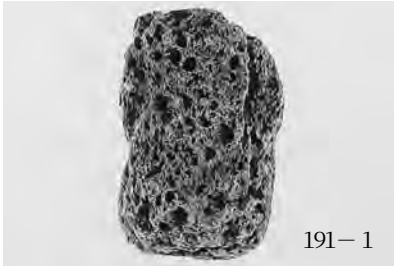
196－1

197－18

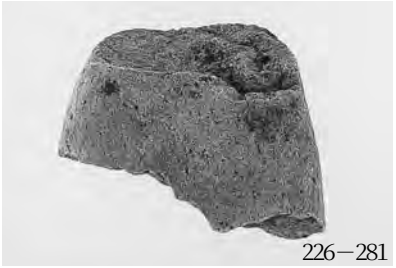
197－19

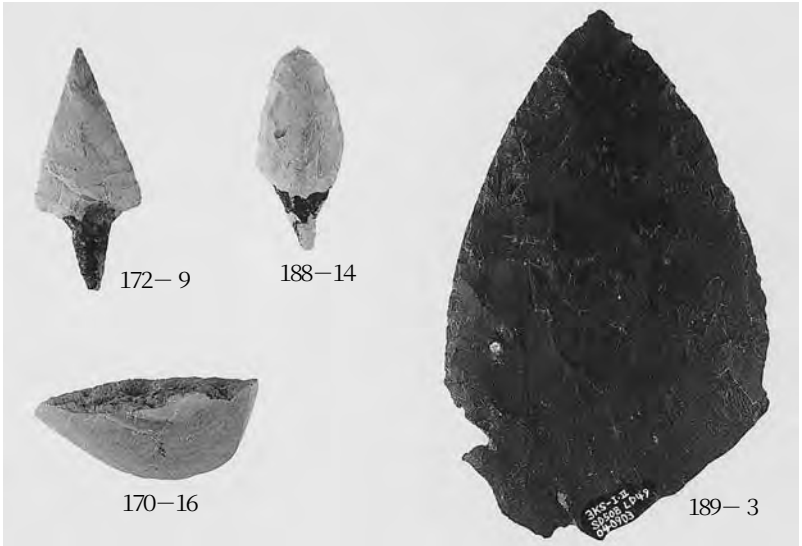
198－3


159－4
164－1
161－9
159－3


191－1

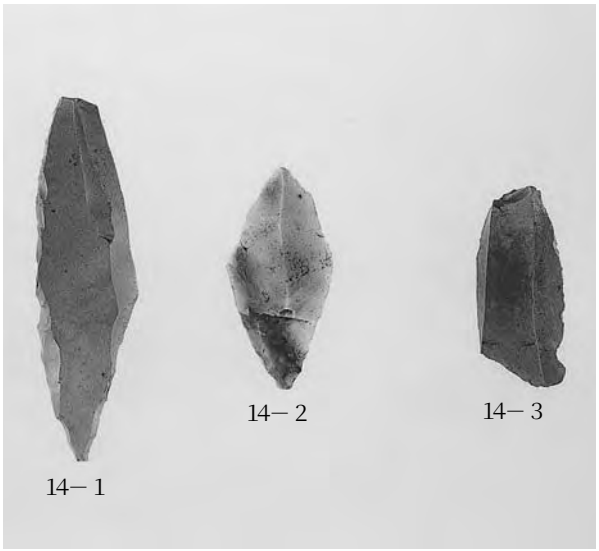
163－6


226－281

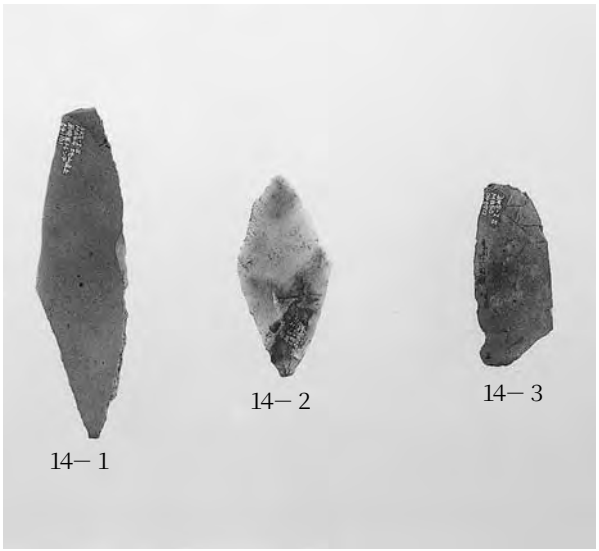

172－9
188－14
170－16
189－3

183－1

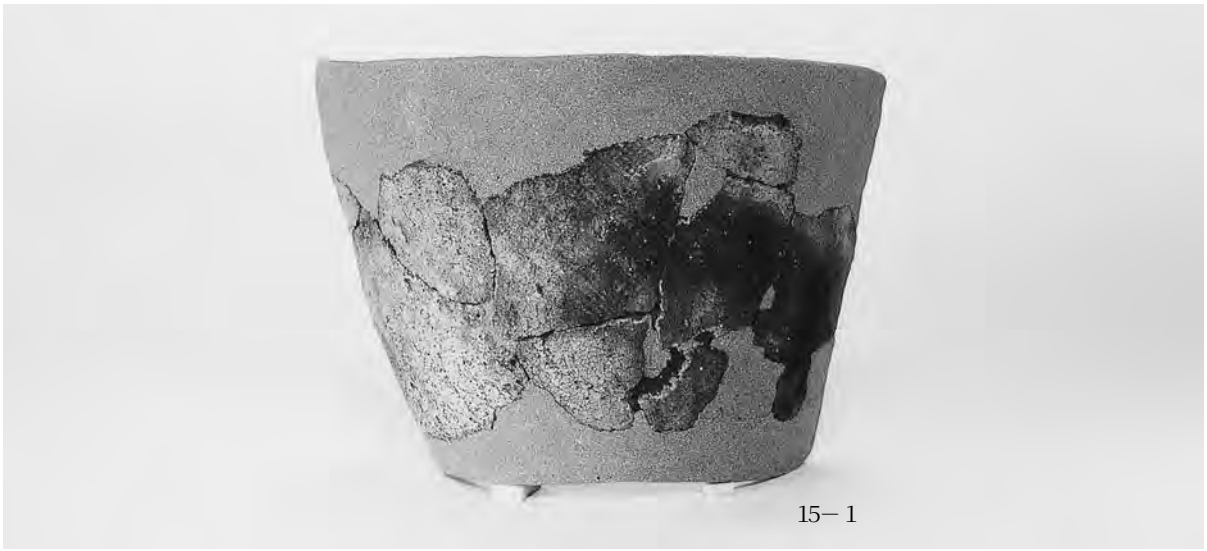
199－2
199－1



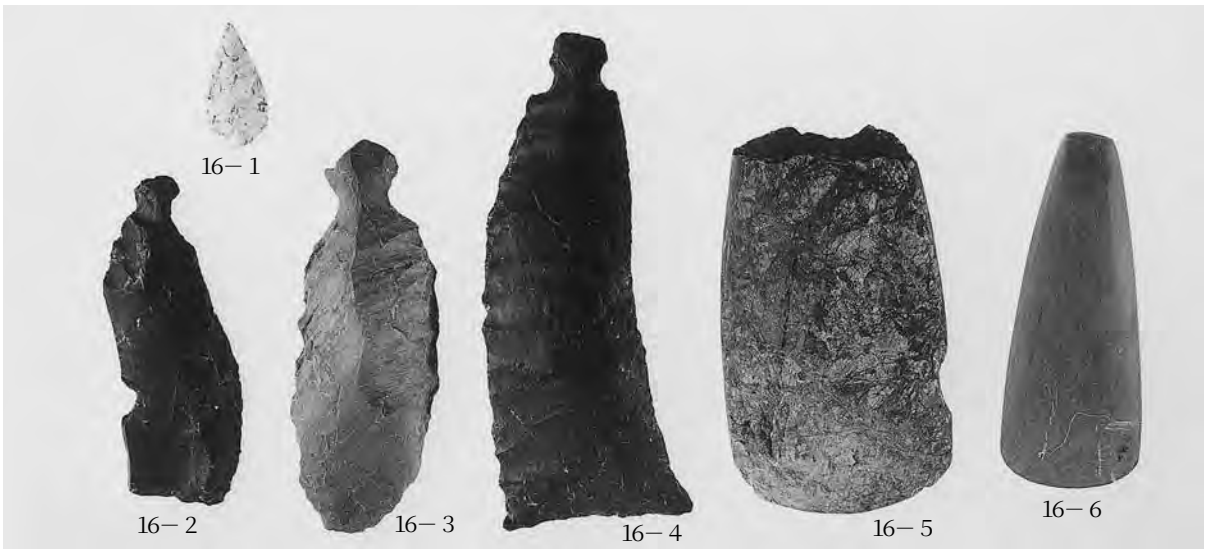
14－1　14－2　14－3



14－1　14－2　14－3



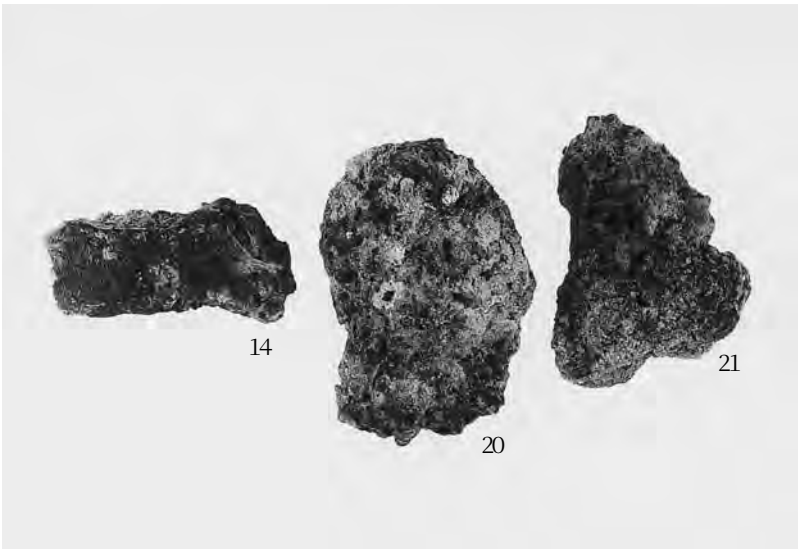
15－1



16－1　16－2　16－3　16－4　16－5　16－6

図版50

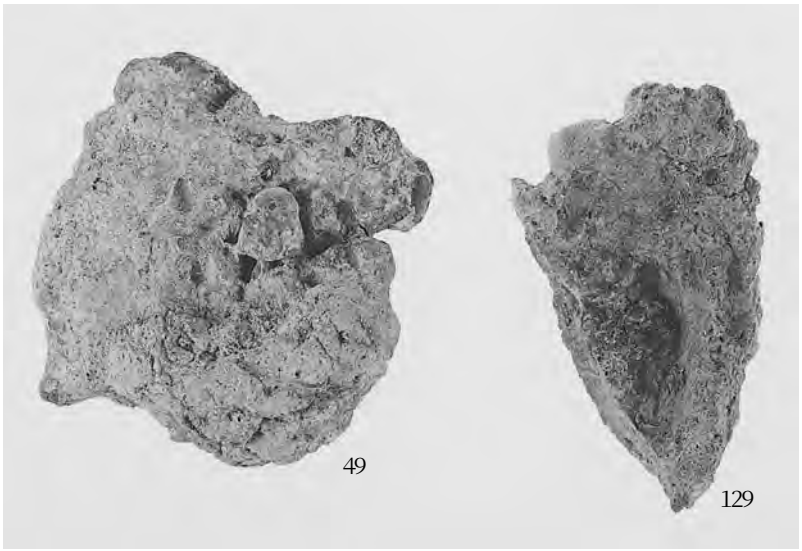
9



14

20

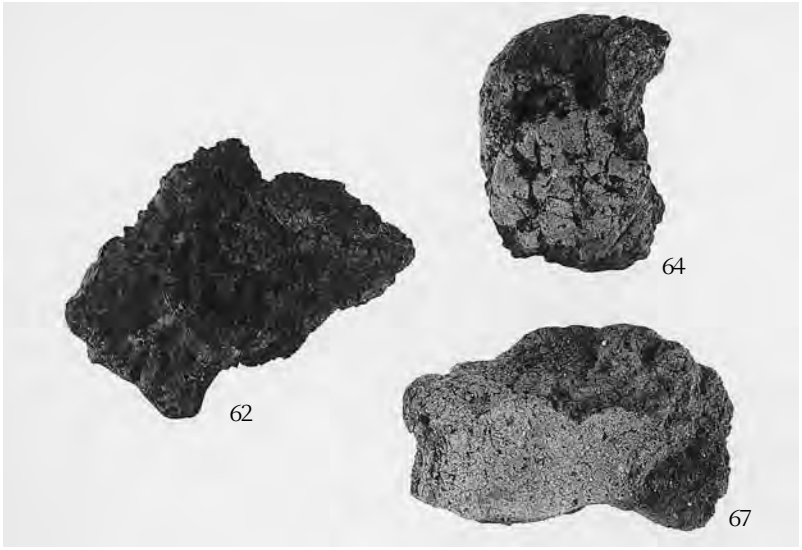
21



49

129

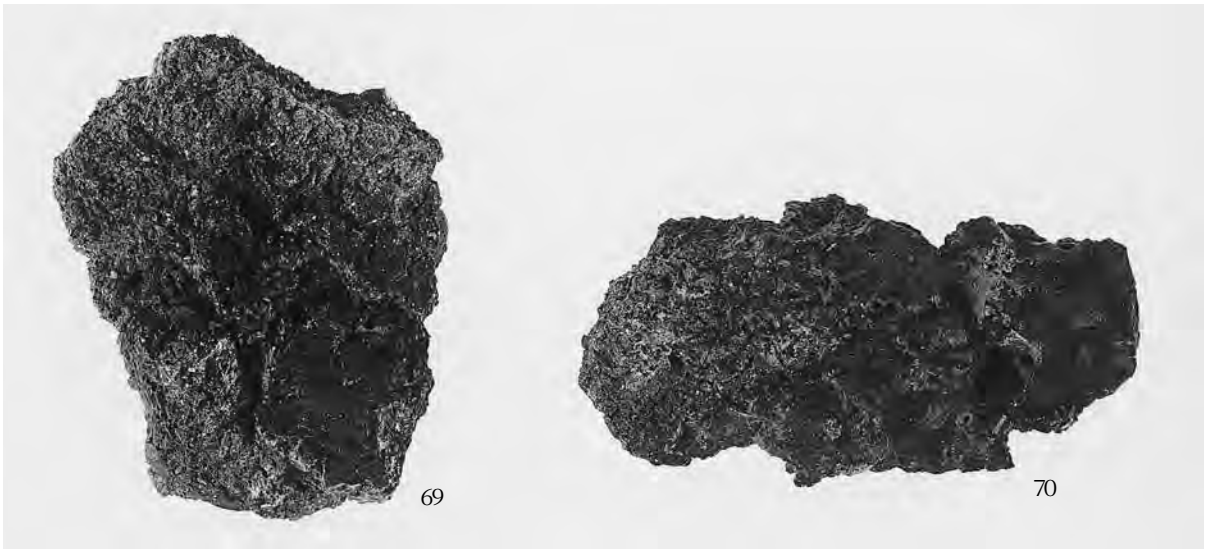
51

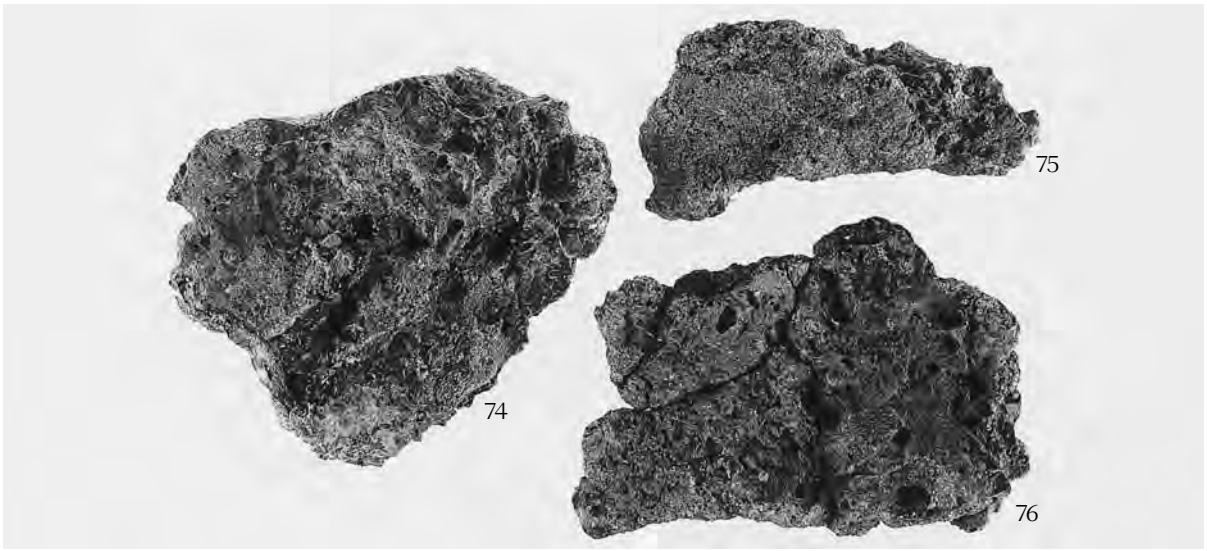


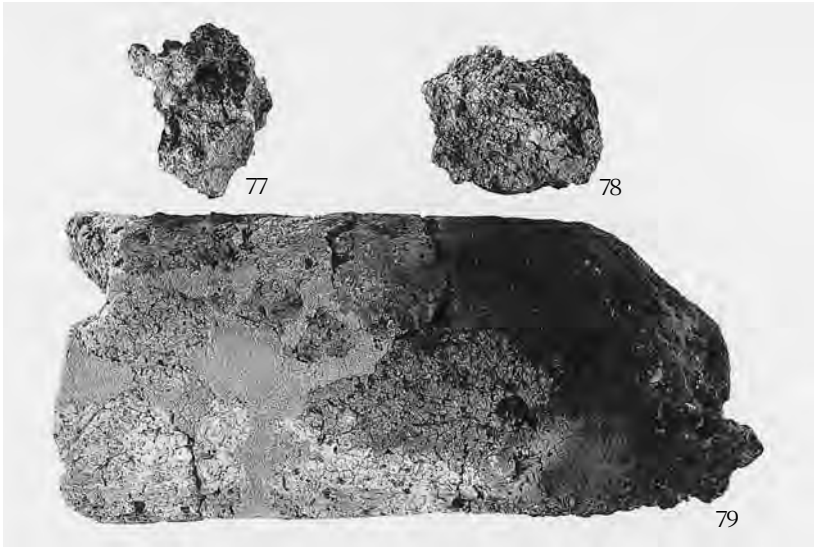
62

64

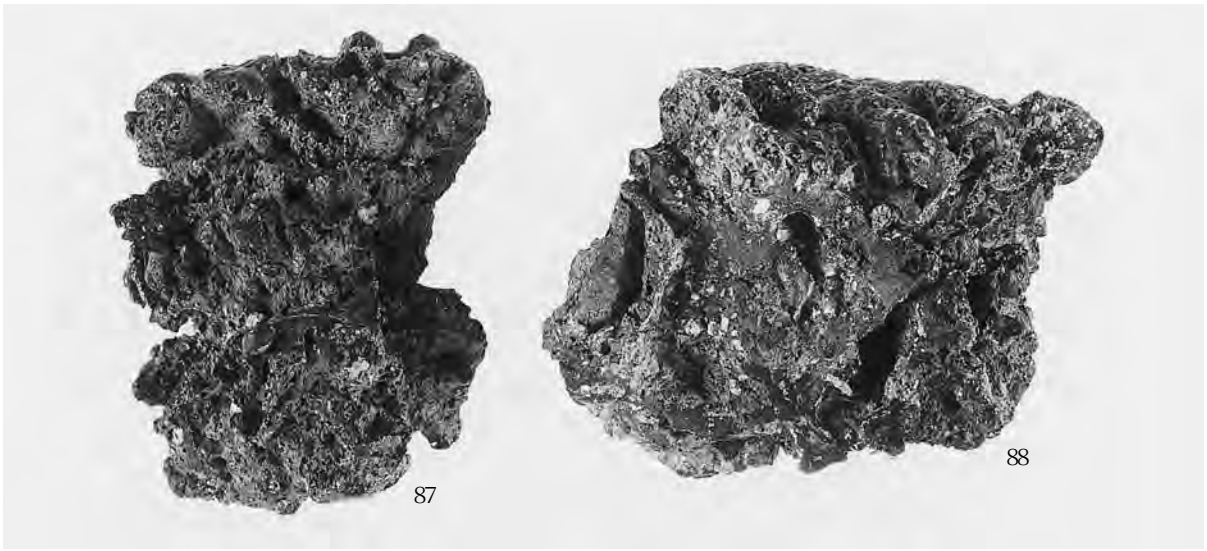
67

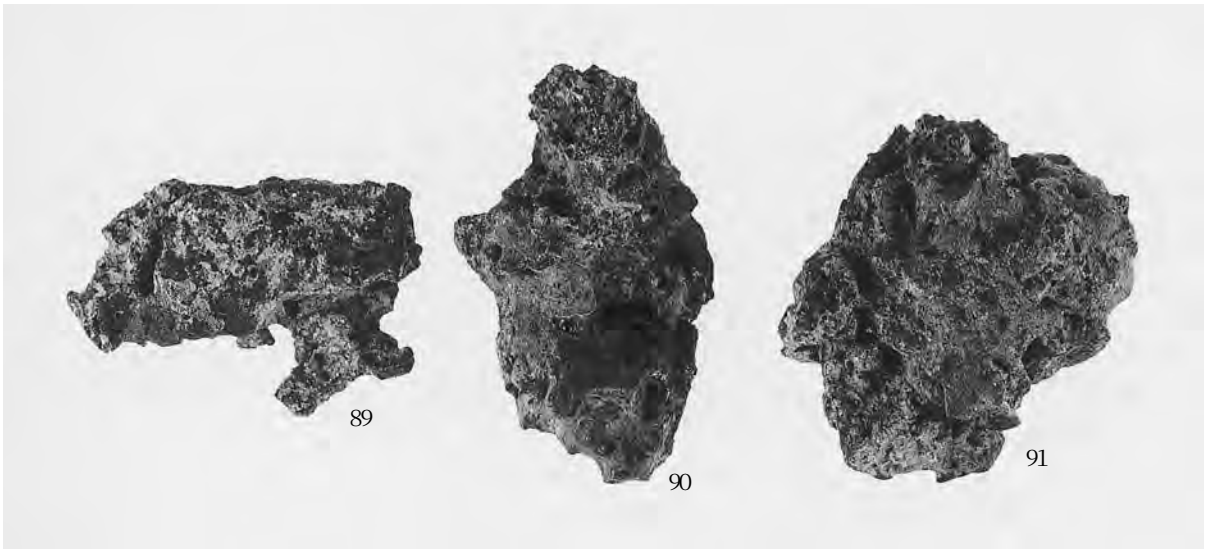

69
70

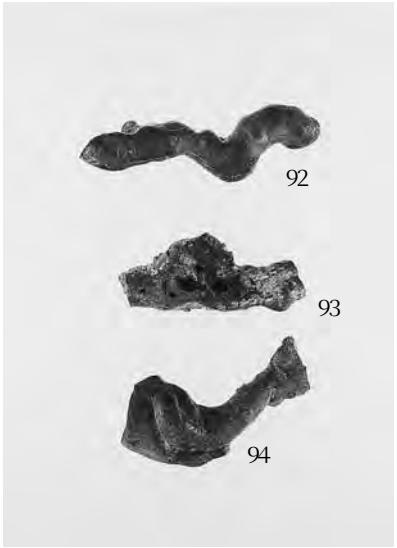

75
74
76

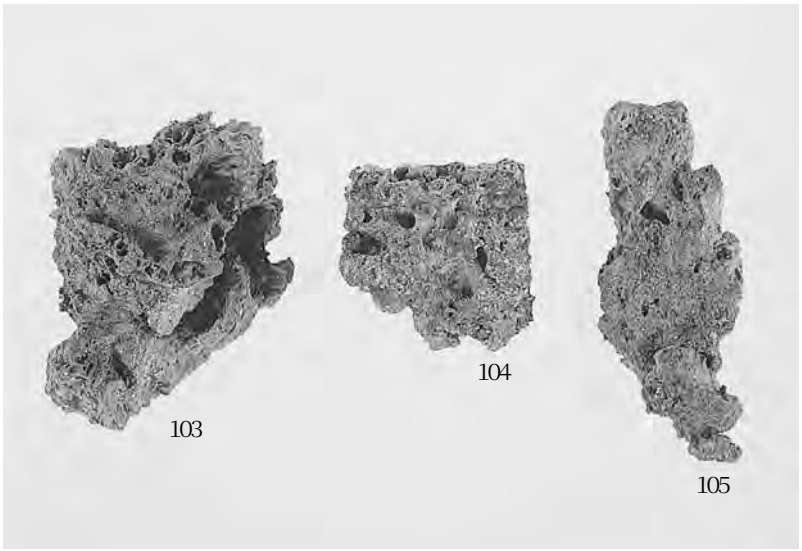

77
78
79

図版52

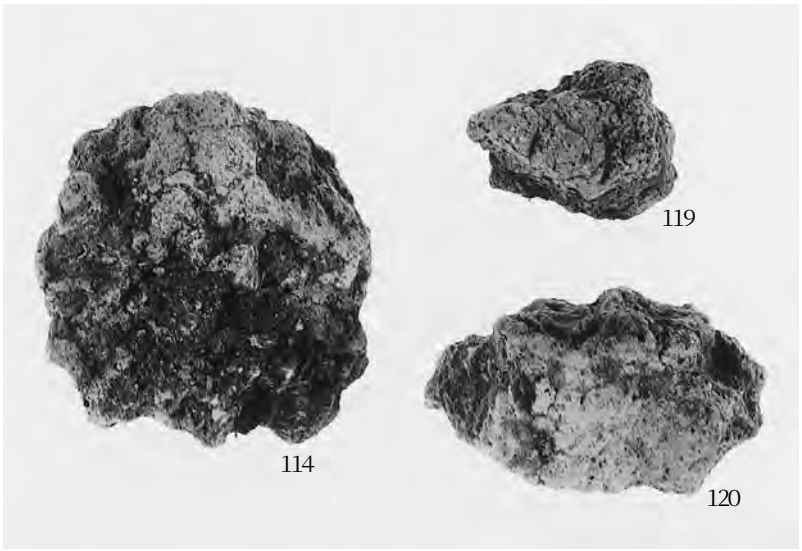




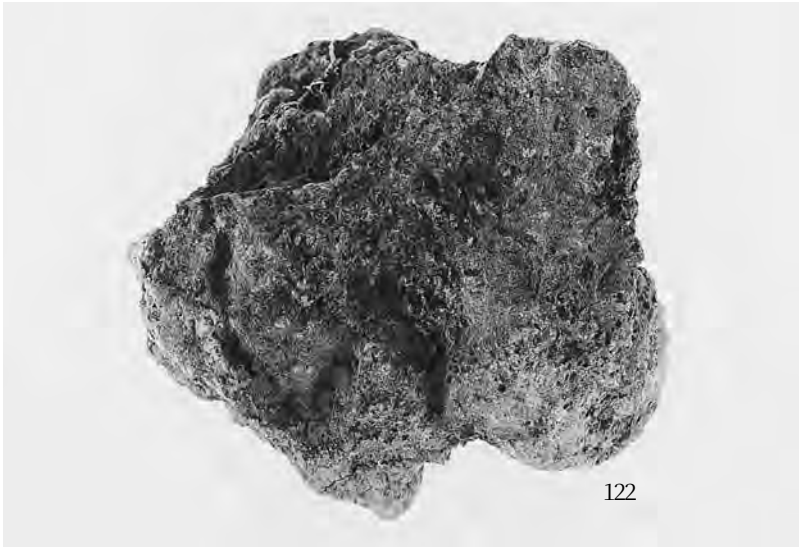



103
104
105

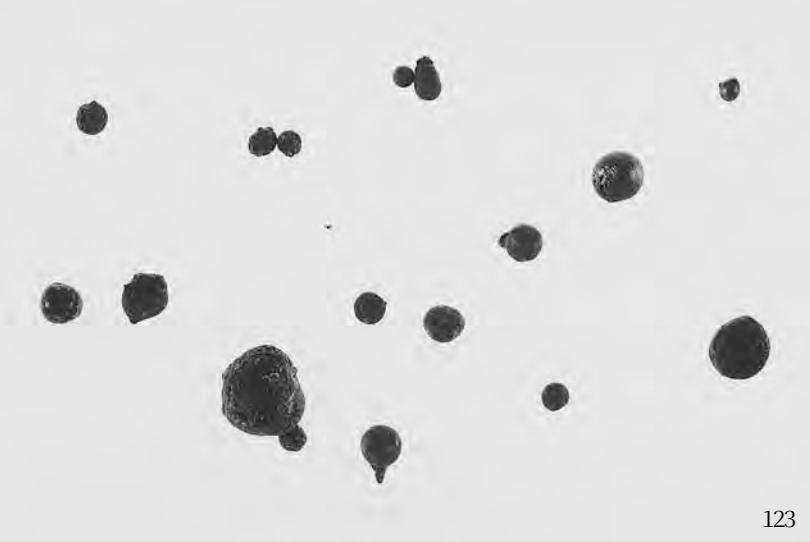
109


114
119
120

117


122

図版54

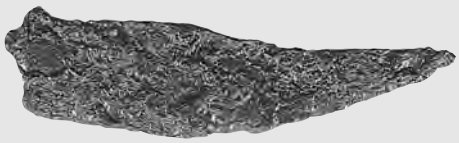


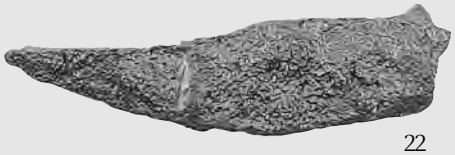
123

130

145

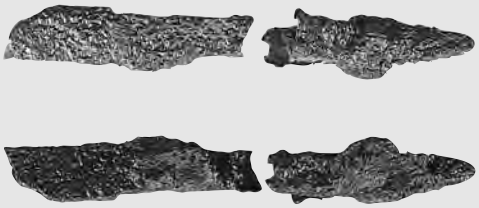
17





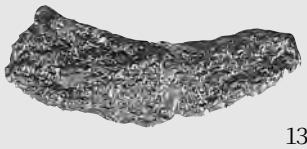
22

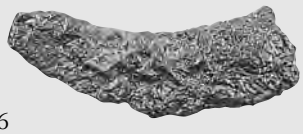
40



47

56





136

170

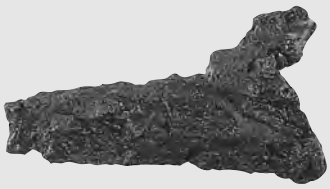
141

147

197－①

197－②

230－①



230－②

243

254

262

265

272

277

275

280

報 告 書 抄 録

ふ り が な	かもすだてあと・かもすいちいせき・かもすにいせき
書 名	鴨巣館跡・鴨巣Ⅰ遺跡・鴨巣Ⅱ遺跡
副 書 名	一般国道７号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻 次	
シ リ ー ズ 名	秋田県文化財調査報告書
シリーズ番号	第422集
編 著 者 名	佐藤信　村上義直
編 集 機 関	秋田県埋蔵文化財センター
所 在 地	〒014－0802　秋田県大仙市払田字牛嶋20番地
発 行 年 月 日	西暦2007年８月

ふりがな 所収遺跡名	ふ り が な 所 在 地	コード 市町村	 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調 査 原 因
かもすだてあと 鴨巣館跡	あきたけんのしろしたどこ 秋田県能代市田床 ないあざかもす ほか 内字鴨巣70－40外	05202		40° 11′ 30″	140° 6′ 40″	20030609 ～ 20030630	600㎡	一般国道７号琴丘能代道路建設事業に係る事前発掘調査
かもすいちいせき 鴨巣Ⅰ遺跡	あきたけんのしろしたどこ 秋田県能代市田床 ないあざかもす ほか 内字鴨巣27－11外	05202		40° 11′ 32″	140° 6′ 50″	20030901 ～ 20031024	900㎡	
かもすにいせき 鴨巣Ⅱ遺跡	あきたけんのしろしあざかも 秋田県能代市字鴨 す ほか 巣42－２外	05202		40° 11′ 39″	140° 6′ 86″	2004 ～ 2004	1,250㎡ 4,000㎡	

所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主な遺物	特 記 事 項
鴨 巣 館 跡	城館跡	古代	空堀 土坑	土師器	
鴨 巣 Ⅰ 遺 跡 鴨 巣 Ⅱ 遺 跡	集落跡	古代	竪穴住居跡 炭焼遺構 土坑 焼土遺構 溝跡	土師器・須恵器	

秋田県文化財調査報告書第422集
鴨巣館跡・鴨巣Ⅰ遺跡・鴨巣Ⅱ遺跡
－一般国道７号琴丘能代道路建設事業に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書ＸＩＸ－

印刷・発行　平成19年８月
編　　集　秋田県埋蔵文化財センター
〒014－0802 大仙市払田字牛嶋20番地
電話(0187)69-3331　ＦＡＸ (0187)69-3330
発　　行　秋田県教育委員会
〒010－8580 秋田市山王三丁目１番１号
電話(018)860－5193
印　　刷　秋田協同印刷株式会社

R100
古紙配合率100%再生紙を使用しています